

ファイアーエムブレムifでやってみた

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ファイアーエムブレムifのゲームを元にオリジナル設定でやっています。

基本はゲーム中心ですが、ほとんど内容的には違います。

なので、気長に見て貰えると助かります。

物語の主人公はカムイ。

これはゲーム設定の最初の奴で銀髪です。

ー世界は沢山の未来がある。

それは木の枝のように、別れている。

選べる未来は一つとは限らない。

だが、知り得る未来もまた一つとは限らない。

それでも刻は巡る。

自分の選ぶ未来が正しいと想い、選び取る。

選びたい未来は幸福と共に、破滅を呼ぶ。

護りたいモノを、大切なモノを手に入れる。

それと同じだけ護りたいモノを、大切なモノを失う。

何度も、何度も繰り返し、心は疲れ果てて逝く。

それでも残るのは、大切なモノ達との約束。

だからこそ、諦めない。

諦められないのだ。

再び刻は巡り、繰り返す。

選び取る未来は何を成すか……

*この作品は原作と違うところが多々あります。
オリジナル設定や展開、キャラ内容を含みます。
それでも大丈夫な方、お願いします。

目次

第一章 運命の選択

第一話 夢 | 1

第二話 心 | 13

第三話 任務 | 29

第四話 母と兄 | 48

第五話 姉と妹 | 66

第六話 弟と歌姫 | 82

第七話 悲劇 | 92

第八話 選択のとき | 112

第九話 透魔王国 | 121

第十話 仲間を求めて〜その1〜 | 137

第十一話 仲間を求めて〜その2〜 | 157

第十二話 仲間を求めて〜その3〜 | 178

第十三話 仲間を求めて〜その4〜 | 207

第十四話 虹の賢者 | 236

第二章 運命の闘い

第十五話 いざ、透魔王国へ | 258

第十六話 正体 | 278

第十七話 記憶 | 305

第十八話 白夜王国 | 346

第十九話 暗夜王国 | 412

第二十話 vs 黒の傀儡 | 637

第二十一話 動き出す運命 | 681

第二十二話 いざ、透魔城へ | 695

第二十三話	V S 女魔導士	716
第二十四話	城内	735
第二十五話	大広間への道	743
第二十六話	v s 白騎士	752

第一章 運命の選択

第一話 夢

そこは自分の知らないはずの風景。

だが、自分はなぜかこの場所を知っている。

日の登らない暗夜^{自国}は、いつも夜に包まれていた。

しかし、ここは太陽が昇る緑豊かな土地。

だが、そこは金属音や怒声、馬のかける音、飛竜の羽根の音、天馬の羽ばたき音が聞こえてくる。

そう、この風景は戦場だ。

闇夜兵と知らない白き兵が闘い、倒れ逝く。

斬られ、焼かれ、吹き飛ばされ、打たれて逝く。

自分はなぜか、自国^{暗夜}と向き合っていた。

自分の後ろから、

「カムイー!」 「カムイ…:姉さん!」 「カムイ姉様!」

自分の名が呼ばれる。

彼らを見ると、自分は彼らを知らない。

でも、彼らはどこか懐かしく、愛おしく思う。

そしてまた、自分の後ろから、

「カムイー!」 「カムイ姉さん!」 「カムイお姉ちゃん!」

自分の名が呼ばれる。

彼らはよく知ってる。

自分の大切な姉弟^{きょうだい}妹。

そして、自分の横に剣を交えた兄と知らない男性。

でも、彼もどこか懐かしい。

「カムイ!こっちだ!!?」

二人が自分に手を伸ばす。

赤い瞳が揺れる。

とても悲しい。

とても辛い。

自分がなぜそう思うかは解らない。
自分は手を伸ばす。
でも、どちらに？

ー私はヒヤツという感覚を感じ、目を覚ます。

「おはようございます、カムイ様♪」

「今日も、沢山寝ていましたね。」

私は目を擦りながら、起き上がる。

彼女の名は暗夜王国の第二王女カムイ。

彼女は幼い頃より、この城『北の城塞』に限られた人達と住んでい
る。

それは、彼女が病弱であるからとも言える。

そしてカムイは伸びをして、

『なにか、夢を見ていた気がするんですが……なんだったでしょう？』
姿勢を正すと、

「おはようございます。フェリシアさん、フローラさん。」
横を見る。

そこには、メイド服を着た長いピンクの髪をポニーテールにした
フェリシア。

彼女はとても明るいが、少しドジっ子である。

その双子の姉のメイド服を着た長い水色の髪を下にツインテール
したフローラ。

彼女はフェリシアとは違い、完璧に仕事をこなす。

彼らは、カムイのお世話をする専属メイド。

それに加え、彼女を守る為に、戦闘も行う。

さらに二人は氷の部族出身であり、触れるだけで物を凍らせる力を
持つ。

私はベッドから降り、二人に身支度を手伝ってもらう。

私の寝癖で跳ねている長い髪を、フローラさんがとかしていく。

と、横で転けて水を盛大に零すフェリシアさん。

「フェリシアー！あなた、なにやってるの！」

「はわわーぐ、ぐめんなさい！」

フローラが、腰に手を当てて怒る。

私はフェリシアさんの前で膝をつき、

「大丈夫ですよ、フェリシアさん。拭いてしまえば、元通りです。だから、あまりフェリシアさんを怒らないであげて下さい、フローラさん。」

「カ、カムイ様!!？」「カムイ様が、そう仰るなら……」

「さ、私も手伝いますから。」

と、三人で濡れた床を拭いていく。

それが終わると、フローラが頭を下げる。

「カムイ様、申し訳ありません。このような事をさせてしまい。」

「気にしないでください。私も好きでやってる事ですから。それに、私は嬉しいんです。フローラさんとフェリシアさんが来て下さって。ずっと一人だった私に、友達ができたんですよ。幼い頃の記憶が曖昧な自分にとって、お二人はとても大切な家族です。だから、私は本当に嬉しいんです！」

「カ、カムイ様ー!!？」

と、フェリシアはカムイに抱きついた。

カムイは笑顔で彼女を抱き返す。

だが、フローラの表情が暗い事に気付き、

「もしかして、フローラさんは嫌でしたか？」

「いえ、そんな事はありません。私も嬉しいです。ありがとうございます、カムイ様……」

と、「コンコン」とドアが鳴り、開く。

一人の灰色の長い髪を結び下げた執事がお辞儀をし、

「おはようございます、カムイ様。」

「ジョーカーさん、おはようございます。」

彼の名はジョーカー。

彼もまた、カムイのお世話をする専属執事にして、バトラーだ。

そして、フローラとフェリシアの先輩だ。

ジョーカーは顔を上げ、

「早速ですが、マークス様とレオン様がお見えになっております。」

「マークス兄さんとレオンさんが！フローラさん、剣をお願いします。」

「マークス兄さんに稽古をつけて貰ってきます！」

カムイは手を合わせて、喜ぶ。

だが、ジョーカーは眉を寄せ、

「カムイ様、あまり無理をなされては……昨日、体調を崩されたばかりですし……」

「大丈夫ですよ、ジョーカーさん！私は、この通り元気です！」

と、カムイはガッツポーズを取る。

ジョーカーは頭を下げ、

「……わかりました。マークス様方にお伝えしてきます。」

「お願いしますね。」

ジョーカーは部屋を後にする。

フローラが剣を渡しながら、

「カムイ様、ジョーカーの言う通り、あまり無理はなさらぬようお願いいたします。お身体が弱いこと、お忘れないように。」

「そうですよ、カムイ様！無茶は禁物です。カムイ様は、すぐ無茶しちゃいますからね！」

二人にそう言われ、上目使いで、

「わかってます。無茶はしません、約束です。」

カムイは剣を受け取って、屋上に向かう。

扉を開け、そよ風が頬や髪を撫でる。

「おはよう、カムイ姉さん。今日は元気そうだね。」

「レオンさん、おはようございます。」

カムイの前には、カチューシャをつけた金髪の少年がいる。

彼は暗夜王国の第二王子レオン。

カムイの弟であり、暗夜の天才魔導師であり、ダークナイトだ。

そして、神器・ブリュンヒルデの持ち主だ。

よく見ると、レオンのマントは裏表逆だった。

カムイは苦笑して、

「レオンさん、マントが逆ですよ。」

「え」

レオンは急いでマントを直す。

カムイは辺りを見回し、

「あれ？レオンさん、マークス兄さんはどこですか？」

「ああ、今に来るよ。ほら……」

レオンが扉を指差す。

そこから、眉を寄せた金髪の男性が出てくる。

彼の名は、暗夜王国の第一王子マークス。

カムイとレオンの兄であり、剣術はとても強いパラディンだ。

そして、彼もまた神器『ジークフリート』の使い手である。

カムイはパツと笑顔になり、

「マークス兄さん、おはようございます！」

「ああ、おはよう、カムイ。」

「マークス兄さん、今日は剣を教えてください！」

カムイは剣を振るう。

マークスは苦笑して、

「教えるのは構わないが、先日体調を崩したばかりだろう？無茶はいかんぞ。」

「無茶じゃありません！少しだけ、少しだけでいいので！」

「仕方ないんじゃない、マークス兄さん。カムイ姉さんは、言い出したら諦めが悪いよ。」

レオンは肩を少し上げる。

マークスはため息をつき、

「少しだけだぞ、カムイ。」

「はい！お願いします、マークス兄さん！」

カムイは構える。

マークスも、腰の剣を抜く。

レオンは少し離れたところで、二人を見守る。

「行きますー！」

カムイはマークスに近づき、剣を横に振る。

それをマークスは剣を斜めにして受け止める。

カムイは右に回転して、再び横に剣を振るう。

だが、これもマークスは剣を斜めにして受け止めた。

カムイは一端後ろに下がって、左手に握る剣を構え直す。

そこに、マークスが剣を振り上げてくる。

カムイは剣を横にして受け止める。

「甘いぞ、カムイ！」

マークスはカムイの持っている剣を弾く。

「きゃー！」

剣はカムイの後ろの方で回転しながら、突き刺さる。

カムイは尻餅をつく。

両手を上げ、

「参りました、マークス兄さん……」

マークスは剣を鞘にしまう。

レオンが近づき、

「今日も、マークス兄さんから一本取れなかったね。」

「はい……」

マークスの手を借りながら、カムイは立ち上がる。

そして、ガッツポーズを取り、

「でも、いつかちゃん取ってみせます！」

「だが、カムイ。なにも、剣士に拘らなくてもいいのだぞ。お前には才

能がある。だが、体が弱いのだ。魔法師や弓兵といった後方の方が、

お前には良いのではないか？」

「魔法の方も、僕が見る限りは悪くないしね。」

二人は互いにカムイを見た。

カムイは剣を鞘に戻し、

「それでも、私は剣士でいきます。なぜかは解らないんですが、その

方がいいって……そう思うんです。」

「そうか。では、私は一端城に帰る。」

「もう、ですか?」

カムイは残念そうな表情をする。

マークスは苦笑し、

「すまないな。今回は、お前の様子が気になって来た。この後すぐに、戦場に向かわねばならん。」

「そう、ですか……。気をつけてくださいね、マークス兄さん。」

「ああ。レオンはもう少しここにいます。後は頼むぞ。」

「任せて。」

マークスは、扉に向かいながら、レオンと互いに頷き合う。

レオンはカムイを見て、

「さ、姉さん。僕たちも中に入ろう。」

「はい、レオンさん。一緒に、お茶でもしながら本を読みましょう。」

「わかったよ、姉さん。」

二人も中に入っていく。

マークスは、老人騎士と話していた。

彼は、カムイの護衛騎士ギユンター。

幼い頃から、カムイの世話もしていた。

それなりの年齢でありながら、その実力は劣っていないグレートナイトである。

マークスはギユンターを見て、

「では、ギユンター……。」

「わかっております。この城の護りはお任せ下さい。マークス様もお気をつけて。」

「ああ。では、頼む。」

マークスはマントを羽織り、馬に乗る。

そして、馬を駆ける。

『カムイの剣の才能は悪くない。だが、体が弱いのだ……。いや、それには語弊がある。あの子はどこも悪くない。体も、心臓も、どこも弱くはない。それこそ、体力も動きもいい方だ。なのに、何かの呪いかのように病弱なのだ。それはやはり、カムイの精神的な問題なのか。何故ならカムイは……』

マークスは考え込む。

そして数日前、ここに来る途中に会った人物を思い出す。

フードを深くかぶり、マントで身を包む者。

あの声からして、女性なのは間違いない。

マントからチラリと映った顔の大半は、仮面で隠されていた。

その者は、マークスを見て言った。

「――暗夜の第一王子。時期に歯車は動き出す。貴殿は知っている。あれを想うのであれば、貴殿はあれを、あの城より出さぬことだ。」

マークスは眉をさらに寄せる。

と、目の前に、木の陰から人が出てきた。

マークスは馬の手綱を引き、飛び越える。

そして馬を落ち着かせ、剣を握る。

「貴様は！」

「久方ぶりだな、暗夜の第一王子。」

マークスは目の前のフードを被った人物に、剣先を向ける。

そして思う。

この人物に剣を向けると、心のどこかで剣が鈍る。

この声には聞き覚えがある。

だが、目の前の人物は敵か味方が解らない。

警戒を解くわけにはいかない。

「貴様は……何者だ！」

フードの彼女は彼を見上げ、

「……少なくとも、今は敵ではない者だ。暗夜の第一王子、運命の選択はすでに始まっている。貴殿が疑うは身内。」

「なん、だと……？」

「貴殿の知る王は、もう居ない。あれは王の姿をした傀儡。」

「父上を侮辱するか！」

マークスは、フードの彼女の首元に剣先を突きつける。

だが、フードの彼女は微動だにせず、

「貴殿は誰よりも知っているはずだ。あれは、既に貴殿の尊敬した父王にあらず。暗夜の第一王子、貴殿が護るはどちらだ？死人か、偽りの妹か。」

「貴様……!!？」

マークスはフードの彼女の首を斬り裂こうとした。

だが、彼女は後ろに少し下がり、

「暗夜の第一王子、あれの命を救いたければ、貴殿は父を疑え。貴殿の王は、あれを殺す。忘れるな、あれは既に死人だ。」

そう言つて、彼女は森の闇に消えた。

マークスは剣をしまい、再び馬を走らせる。

カムイはレオンとお茶を楽しみながら話をしていた。

「そうだ、レオンさん。お庭に行きましよう！リリスさんが育てているお馬さんが、仔馬を産んだんです。一緒に見にいきましょう。」

「いいけど……この時間帯だと、外は冷えてるだろうね。ジョーカー、姉さんに上着を頼むよ。」

「かしこまりました。レオン様の上着も用意しますね。」

ジョーカーは二人の上着を用意する。

そして、二人は庭へと向かう。

無論、ジョーカー・フローラ・フェリシアも付き添う。

カムイは庭の広い一角で、親子の馬と共にいる青い髪の少女と老人騎士がいた。

青い髪の彼女の名はリリス。

この『北の城塞』でカムイの従者の一人であり、厩舎係だ。

フローラとフェリシアの後輩にあたる。

カムイは小走りで、リリスとギユンターの元に行く。

「ギユンターさん、リリスさん。」

「カムイ様、こんな時間に外に出ては風邪を引かれてしまいます！」

「大丈夫ですよ、リリスさん。レオンさん、この仔馬がそうなんですよ。可愛いでしょ♪」

と、心配するリリスをよそに、カムイは仔馬を撫でる。

レオンは苦笑して、

「そうだね、姉さん。ギユンター、リリス。すまないけど、少しだけ姉さんに付き合ってくれ。」

「レオン様も、大変ですな。」

「酷いです！レオンさんも、ギユンターさんも！だって、可愛いこの仔

が仕方ないんです！」

「はは、そうだね。」「そうですね。」

カムイが、頬を膨らませる。

それを、全員が笑い出す。

しばらくそうしていると、リリスはあるところを見て瞳を揺らし、

「カムイ様!!?」

カムイに覆い被さる。

それと、同時だった。

親馬が暴れ出し、カムイに襲い掛かる。

フェリシアが二人の前に出る。

その前に、フローラが出る。

そして、レオンが魔術で馬を木の根でかこう。

ギウンターとジョーカーが抑える。

さらに、すぐ近くで火の魔術が爆発する。

カムイは驚き、

「え×一体何が……?」

「カ、カムイ様、お怪我は?」

フェリシアが、バツと振り返る。

カムイは起き上がり、

「わ、私は大丈夫です。それより、リリスさんに擦り傷が！すぐに手当を！」

カムイはハンカチを取り出し、リリスの手の甲に縛る。

リリスはそれを包み込み、

「ありがとうございます、カムイ様。」

「お礼をいうのはこちらです。皆さんも、ありがとうございます。」

頭を下げるカムイ。

カムイはリリスの側に近づいてきた親子馬を見て、

「でも、良かった。爆発が起きたから不安でしたが、この子達が無事で。」

と、頭を撫でる。

カムイは嬉しそうに、

「この城にいるみんな、私の家族なんです。勿論、この子達も。」

「……そうですね、この子達は幸せものです。」

「リリスさんも、私の家族ですよ。」

「……え？ほ、本当ですか、カムイ様!!？」

「本当ですとも。リリスさんは、私のもう一人の妹です。フローラさんとフェリシアさんは、もう一人のお姉さん。ジョーカーさんは、もう一人のお兄さん。ギウンターさんは、もう一人のお父様です。」

「カムイ様に、父君と思われているなんて光栄ですな。」

ギウンターは腕を後ろに組んで、微笑む。

ジョーカーに関しては、祈るように手を組んで泣いていた。

フェリシアは笑顔で、フローラは苦笑していた。

リリスは瞳を揺らして涙を流しながら、

「ありがとうございます、カムイ様!!？カムイ様に、妹と言って頂いて、私はとても嬉しいです！」

カムイはリリスの帽子を拾い、彼女の頭を撫でて、

「リリスさんは頑張り屋さんの妹です。」

「姉さん、いい雰囲気壊して悪いんだけど……そろそろ中に入ろう。体が冷えてる。」

レオンがカムイの上着を掛けながら言う。

「私は部屋を温めてきます。」

「私も、温かい飲み物を用意してきます。」

ジョーカーとフローラが歩いていく。

フェリシアが慌てて、

「私も手伝います〜！」

二人を追いかける。

リリスは涙を拭い、

「そうですよ、カムイ様。カムイ様が風邪を引かれては、みんなが困ってしまいます。私は、この子達を送ってきますね。」

「私も、共に行こう。」

リリスとギウンターは二匹を連れて行く。

レオンはカムイの肩に手を回し、

「ぎ、姉さん。」

「は、はい。」

カムイを連れて行きながら、レオンは爆発が起きたところを横目で見る。

『さっきの魔術……いったいどこから？それに、威力も強くもなく、低くもない。魔術に長けた者の技だ。』

二人も中に入っていく。

庭の森の影、一人のフードで顔を隠した者が見据えていた。

そつと、その場を離れ、

『動き出した……これは一度、あちら側に行かなくては……』

城外へ出て行く。

そして森の中にある湖の中へと入っていった。

第二話 心

数日が経ち、暗夜の第一王子マークスは暗夜城にいた。隣には、紫の長い髪をフワツとさせた美しい女性がいる。

彼女は、マークスの妹のカミラ。

暗夜の第二王女であり、カムイとレオンの姉だ。

周りからは、冷酷で無慈悲な王女と言われているが、きょうだい兄弟や臣下には真逆である。

二人は、王の謁見の間にいた。

目の前にいるのは、王座に座る暗夜王国の国王ガロン。

彼は頬杖をつき、

「マークス、カミラ。まずは此度の戦果、ご苦労だった。」

「ありがとうございます、父上。」「ありがとうございます、お父様。」

二人は頭を下げる。

顔を上げると、暗夜王ガロンは冷たく二人を見て、

「さて、お前達を直々に呼んだのは他でもない。カムイのことだ。」

「……カムイが、どうかしたのですか?」

「あやつを北の城塞から出す。話によれば剣の実力も、マークス、お前に引けは取らぬと聞く。そろそろあれも、此度の白夜との戦に出す。」

「ですが、父上!カムイは……いえ、あの子はあの城から出せば、病弱なあの子は持ちません。」

「そうですね、お父様。あの子は城の護りで、身を守っているのですよ。それを戦に出すなんて……」

マークスとカミラは眉を寄せる。

だが、暗夜王ガロンは変わらず冷たい目で、

「構わん。どうせ死ぬ運命なら、戦場で散らしてやるのがせめてもの花よ。」

「ですが、お父様——」

さらに、抗議しようとするカミラを止め、

「解りました、父上。早急に、カムイを呼んで参ります。」

マークスは頭を下げる。

そして、カミラを連れて部屋を出て行く。

彼らが出で行くと、横で控えていた暗夜王国の軍師マクベスが、「どうやらマークス様も、カミラ様も、此度のカムイ様進軍には反対のようですね。なんとも、兄妹きょうだい想いの事で……。いかがなさいますか？」

「……………我が神は仰った。これは必然だと。」

暗夜王ガロンは小さく呟く。

そして、彼を横目で見て、

「ガンスを呼べ。」

「かしこまりました。」

そう言って、軍師マクベスは下がる。

一人残っている暗夜王ガロンは、笑みを浮かべる。

「そう、全ては必然なのだ……」

——マークス達が部屋から出て、廊下を歩いていると、

「マークスお兄ちゃん！カミラお姉ちゃん！」

金色の髪を左右に結い上げた少女が駆けてくる。

二人は笑みを浮かべる。

マークスは彼女の頭を撫で、

「エリーゼ。今日も元気だな。」

「うん！」

少女はとびつきりの笑顔を向ける。

彼女はエリーゼ。

暗夜王国の第三王女である。

暗夜兄弟きょうだい姉妹の末っ子で、甘えん坊だ。

だが、治癒の能力には長けており、幼いながらも戦場に赴いている。

エリーゼは二人を見上げ、

「今からカムイお姉ちゃんのところに行くの？私も行っていい？」

「ええ、一緒に行きましょう。お兄様、私はエリーゼと後から行きません。」

「そうか。では、先に行っている。」

マークスは彼らと別れる。

一度、実室に向かう。

扉を開ける前に、剣に手をかけて抜く。

そして扉を開けた。

「久しぶりだ、暗夜の第一王子。」

「貴様！どうやってここに！」

彼の実室の机の上には、フードを深く被った者がいた。

マントから少しだが、体つきが解る。

小柄で、やはり女性のようなだ。

そして、腰には一本の長い剣が見える。

さらに足には、短剣や暗器が付いていた。

フード彼女は、彼の机の上にあつた紙を戻し、

「それは言えないな。だが、貴殿のその表情を見る限り、私の言った通りになつたのではないか？」

「……………父上には、何か理由があるのだ。あの子は城の外に出たがつていた。理由はどうかあれ、外に出れるのだ。」

彼は握る剣に力が込む。

フードの彼女は机から降り、

「だから、戦場で死んでもよいと？」

「そんなことは思っていない！」

「貴殿が思つてなくとも、貴殿の王はそのつもりだ。あの王は、『カムイ』を殺したいのだ。それこそが、あの王が今まで『カムイ』を生かしておいた理由なのだから。」

マークスは眉を寄せて、フードの彼女を睨む。

「貴様は何を知っている！」

「全てだ。」

「全てだと？」

と、フードの彼女は振り下ろされる剣を避ける。

そして、次の突き出される槍をも避ける。

「マークス様、ご無事ですか!!？」「マークス様の敵！」

マークスの前には、剣を構えた少年と槍を構えた少女が立つ。
マークスは少し驚き、

「ラズワイド、ピエリ……何故、ここに。」

「マークス様への報告に来たところ、何やら怒鳴り声が聞こえたもの
ですから。」

「そしたら、マークス様剣を構えてるの。」

二人は、目の前のフードの彼女を睨む。

剣を構えた少年は、マーシナリーのラズワイド。

マークスの臣下である。

そして、槍を構えた少女はソシアルナイトのピエリ。

彼女もまた、マークスの臣下である。

フードの彼女は身構える。

「やはり、よい臣下に恵まれているな。暗夜の第一王子、全ては必然
だ。だからこそ、『カムイ』を使って打ち壊さなければならない。」

フードの彼女は、彼らに向かって駆ける。

ピエリの槍とマークスの剣を避け、足に付いていた短剣を抜く。

ラズワイドの剣を受け流しながら、彼の耳元で囁く。

「そうだろ、召喚されし偽りの住人。」

「……君は☒」

そのまま、フードの彼女は廊下の窓を破って行った。

ラズワイドがすぐに下を確認したが、人影はおろか死体もなかつ
た。

剣をしまい、

「申し訳ありません、マークス様。取り逃がしました。」

「いや、仕方がない。」

「悔しいの〜!!?」

マークスも剣をしまう。

彼の横では頬を膨らませるピエリの姿。

マークスは眉を寄せ、

「お前たち、今回のことは他言無用だ。よいな。」

「わかりました。」「はいですの。」

マークスは二人の報告を聞き、書類を整理する。
と、机の上にあつた紙を見つける。

『……水？……竜？』

マークスはその紙を懐にしまい、暗夜城を出た。

——カムイは、今日もレオンとお茶をしていた。

「もうじき、マークス兄さんたちも来るんじゃない？」

「そう、ですね。……レオンさん、私はこのままでよいのでしょうか。」

カムイは紅茶を置き、視線を落とす。

レオンも紅茶を置き、

「何が？」

「私だけ、兄弟姉妹きょうだいの中で戦場に赴いていません。私も、みんなの役に立ちたい。」

「でも、カムイ姉さんはこの城からは出られない。この城の加護がないきや、カムイ姉さんの体が危ないんだ。」

「それは……わかつています。一度、その禁忌を犯したから、私には幼い頃の記憶がない。本当に、危なかったとギユンターさんが言っていました。」

「そうだよ。僕も詳しくは知らないけど、カムイ姉さんは生と死を彷徨ったって聞いた。だからこそ、姉さんはこの城にいるべきなんだ。」

レオンは眉を寄せる。

だが、後ろから、

「……そうは言っていられなくなった。父上が、カムイをこの城から出すと言っている。」

「マークス兄さん！」

そこには、兄マークスがいた。

レオンはマークスに近づき、

「それは本当なの？」

「ああ。今回の白夜進軍に、カムイも参加させると。」

「そんな……」

レオンは拳を握り締める。

カムイも彼らに近づき、

「私は、外に出てもいいのですか？」

「……ああ。だが、条件がある。」

「条件？」

「カムイ、この私から一本取ることだ。」

「マークス兄さんから☒」

「そうだ。でなければ、お前を出すわけにはいかない。」

カムイはジッとマークスを見上げ、

「わかりました。今、準備します。先に屋上に行っていて下さい。」

カムイはフローラ達の元へ行く。

レオンはマークスを見上げ、

「……兄さん、あれ嘘でしょ。」

「ああ……。だが、こうでもしない限り、あの子を救う手がないのだ。」

「……そうだね。」

二人は先に、屋上へと向かう。

カムイが剣を持って屋上に行くと、マークスはすでに剣を抜いていた。

カムイは覚悟を決めて、剣を抜く。

「マークス兄さん、行きます！」

「来い、カムイ！」

カムイは剣を振るう。

マークスはそれを受け流していく。

どれくらいそうしていただろう。

マークスはカムイの赤い瞳が光るのを見た。

そして、マークスが受け止めたカムイの剣が重くなる。

マークスも、剣に力を込める。

「はあああああ!!？」

カムイは渾身の力を込めて、マークスの剣を弾いた。

彼の剣は地面へと落ちる。

「スッゴーイ！カムイお姉ちゃんが、マークスお兄ちゃんに勝った！」
明るい声が響く。

レオンの後ろからエリーゼとカミラが歩いてくる。

「エリーゼに、カミラ姉さん。」

「久しぶりね、レオン。会いたかったわ。」

と、彼にハグをする。

カムイは肩で息をしながら、

「……や、やりました！マークス兄さんから一本取りました！」

「ああ。負けたよ、カムイ。」

マークスが立ち上がり、剣を拾う。

カミラがカムイに抱きつき、

「ああ、カムイ。しばらく見ない間に、強くなって。お姉ちゃんは嬉し
いわ。」

「カミラ姉さん、来てくれたんですね。」

カムイも抱き返す。

と、側に来たエリーゼが、

「あー、カミラお姉ちゃんばかりスルーい！私も！」

「はい。エリーゼさんも来てくれて、ありがとうございます。」

と、少ししゃがんで抱き合う。

マークスは拳を握り閉めた後、平静さを取り戻し、

「カムイ、さつき言った通りだ。明日、ここを立つ。」

「はい、マークス兄さん！私、準備してきますね。」

「お姉ちゃん、私も手伝う。」

「お願いしますね、エリーゼさん。」

カムイとエリーゼは部屋に向かって行く。

カミラはマークスを見て、

「お兄様、カムイに手加減はしてなかったですわよね？」

「ああ。カムイの実力だ。あの子は竜の血が濃い。」

「あの子の髪や瞳、耳の形のことね。」

「……竜の血が濃いと、瞳が赤く耳の形がとんがったりする。でも、こ
こは暗夜だ。姉さんの竜の力はおそらく……」

レオンは視線を落とす。

カミラも、視線を落として、

「だから、ここに連れて来られたのかもしれないわね。」

「……そうだな。」

マークスは拳を握り閉めた。

——翌朝、日の登らない暗夜。

暗闇の中、月夜の光を目印に出立する。

カムイのお供として、ギユンター・ジョーカー・リリスがお供をすることとなった。

城の留守を、フローラとフェリシアに任せて出てきたのだ。

ジョーカーはカムイに近づき、

「カムイ様、大丈夫ですか？お身体に、何か変化は見られますか？」

「いえ、大丈夫です。お気遣い、ありがとうございます。ジョーカーさん。」

「当然のことですので、お気になさらずに。それよりも、何か変化があった際にはすぐに仰って下さい。」

「はい。わかりました。」

カムイは小さく微笑む。

と、しばらく進んで行くと、城が見えてきた。

「カムイお姉ちゃん、あのおつきな城が暗夜城だよ！」

「はい、初めて見ました。凄いですね！」

カムイは瞳を輝かせる。

城下も見て回りたいが、ここは急いで黒きクラークンシュタイン城王城へと向かう。

初めて見る暗夜城の中を、色々目で追いながら謁見の間に行く。

扉を開けて中に入ると、暗夜王ガロンが座っていた。

「よく来たな、カムイ。」

「はい、お父様。御目通りが叶い、嬉しく思います。」

カムイは緊張しながら言う。

彼は目を細めて、

「いや……これもお前の日々の精進ゆえだ。聞けば、マークスに引けをとらぬ強さと聞く。ようやく、暗夜の王族にふさわしくなったのだ。故に、お前を此度の白夜進軍に加える。」

「お父様、でも大丈夫なんですか？カムイお姉ちゃんは……」

「そうです、お父様。やっぱりカムイをあのかから出すなど……」

エリーゼとカミラが、ジツと暗夜王ガロンを見つめる。

暗夜王ガロンはカムイを見据え、

「カムイよ、身体の調子はどうかだ。」

「それが不思議と大丈夫です。皆さんから聞いた話では、前の時は危なかったとお聞きしてましたが……」

「それはお前が先も言ったように、暗夜の王族にふさわしくなったのだ。お前は暗夜の竜の加護を受けておる。さて、カムイよ。我が暗夜王国は、東方の白夜王国と今も戦争の最中にある。我ら王族は、古えの神『神祖竜』の血を継ぎし神の末裔。神の力を持つ我らにとって、雑兵との戦いなど草刈りの如きもの。王族が戦場に出れば、単騎にて一隊を滅ぼすことさえ容易い。マークスタちもそれだけの力を持つ。故にカムイよ、もう一度言う。此度の白夜進軍に参加せよ。」

「はい、お父様！」

カムイは頷く。

暗夜王ガロンは冷たく微笑み、

「頼もしいものだ。では、お前にこの魔剣を授けよう。」

暗夜王ガロンが手をかざすと、カムイの目の前に剣が現れる。

中に浮く禍々しいオーラを持つ黒き剣を手取る。

「それは魔剣ガングレリ。異界の魔力を秘めた剣よ。それを持って白夜を落とせ。だが、すぐに戦場では体に酷だろう。闘技場にて、その剣を試してみよ。相手は用意してあるからな。」

「ありがとうございます、お父様。」

カムイ達は闘技場へと向かう。

そしてカムイは、ギンターとジョーカーと共に武器を構える。

上の方から、暗夜王ガロンの声が響く。

「カムイよ、お前の力を見せてみよ。捕虜どもをこれへ！」

「はー！」

と、暗夜兵達が動く。

カムイは眉を寄せ、

「え？捕虜……う？」

と、向かいの入り口から白夜兵達が出て来る。

暗夜王ガロンはカムイを見下ろし、

「さあ、カムイ。そやつらを殺せ。」

カムイは視線を落とす。

ギョントアが隣に立ち、

「大丈夫です、カムイ様。我らが共にいます。いけるな、ジョーカー。」

「はあ？当たり前だろジジイ。カムイ様に怪我をさせてたまるか。」

ジョーカーはギョントアに舌打ちした後、カムイに笑顔を向ける。

「……カムイ様。この程度の相手、カムイ様が出るまでもありません。

戦いは我々に任せ、休んでいて下さい。後で良い紅茶をお淹れします

ので。」

「いえ、私も戦います。お父様が見ているのですから。でも……」

カムイは視線を落とす。

が、剣を強く握りしめ、敵に向かって行く。

顔に刺青をいれ、部族らしい飾りをつけた女性が斧で、カムイの剣

を受け止めた。

「あたしはリンカ！炎の部族の族長の娘だ！お前が暗夜王国の王女

か。名は？」

「私はカムイです！」

カムイは距離を置いて名を言う。

彼女の隣に居た忍びの男性が、深刻そうな顔になる。

「!!？カムイ……？」

「え？なんですか？」

「……いえ、何でもありません。私はスズカゼ。偉大なる白夜王国に

仕える忍びの者です。私も参ります！」

彼は暗器を構える。

カムイは彼の投げる手裏剣を避けていく。

彼ら二人の攻撃を避け、攻撃していく。

が、石の柱まで追い込まれたのはカムイだった。

炎の部族リンカが斧を横に振るう。

それを屈んで避けて、転がる。

「カムイ様！」

「大丈夫ですか、カムイ様！」

他の白夜兵を倒したギウンターとジョーカーがカムイの前に出る。

カムイは態勢を整え、

「だ、大丈夫です。」

立ち上がろうと、地面を触る。

「……何だろう、この感覚……」

カムイは大地の波動を感じる。

瞳を閉じ、それを探る。

カムイの髪がフワツと少し上がり、瞳を開ける。

大地が揺れ動き、新たに増援された敵ごと吹き飛ばす。

そして、敵は壁に叩きつけられた。

「こ、これは凄いお力ですね、カムイ様。」

「王家だけが使えるという竜の力か……」

ジョーカーとギウンターがカムイを見る。

カムイは首を傾げ、

「竜の力？これがお父様が言っていた力ですか？」

「はい。カムイ様を含めた始祖竜の血を引く王家方だけが使えるお力です。カムイ様は大地に流れる竜脈を使って、敵を吹き飛ばしたのです。」

ギウンターがカムイに説明する。

カムイは立ち上がり、そして咳き込んだ。

ジョーカーが彼女の背を摩り、

「ですが、カムイ様には少し強すぎるようですね。あまりお使いにならない方が良いかと。」

「はい。この力が必要な時だけにしますね。」

落ち着いたカムイは頷く。

そして炎の部族リンカと白夜の忍びスズカゼの元に歩いて行く。

スズカゼが片膝をつき、

「……もはや、これまですすね。」

「とても手強い相手でした。これが白夜王国の力ですか……凄いですね。」

カムイも、膝をついて彼らに言った。

だが、暗夜王ガロンの声が響く。

「何をしている、カムイ。とどめを刺さぬか。」

カムイは立ち上がり、上を見上げる。

「お父様……ですが、彼らはもう戦えません！」

「なんだと……？ わしはそやつら殺せと言ったはずだ。」

「そんな……でもお父様！ なにも殺さなくても……」

カムイは眉を寄せる。

だが、暗夜王ガロンは冷たくカムイを見下ろし、

「愚かな……」

そう言うと、手をかざす。

彼は魔術を放ち、何人かの白夜兵を焼き殺す。

カムイは口に手を当てて、蒼白する。

そして、暗夜王ガロンご再び魔術を放つ。

それは炎の部族リンカと白夜の忍びスズカゼを襲う。

カムイは暗夜王ガロンの放つ炎の球から二人を守る。

「……え？」

白夜の忍びスズカゼはカムイを見て、驚く。

それは暗夜の兄弟姉妹きょうだいもだった。

エリーゼが口に手を当てて、

「カムイお姉ちゃん……！！？」

「なんてことを……」

マークスは眉を寄せる。

暗夜王ガロンは怒り出す。

「カムイ……貴様……」

「父上、お許し下さい！ カムイは何もわからぬ身ゆえの……」

マークスが怒る暗夜王ガロンの一段下の前に立つ。

暗夜王ガロンはマークスを冷たく見て、

「よいか、マークス。白夜兵どもを殺せ。逆らう者がおればもろとも

に殺せ。」

「し、しかし……!」

「やれ。」

「……っ!」

マークスは闘技場に降りる。

剣を抜き、

「退がれ、カムイ。さもなければ……」

「マークス兄さん……!」

本気のマークスを見て、カムイの瞳は揺れる。

だが、カムイは彼らの前から離れない。

マークスは眉を寄せ、

「カムイ……なぜ殺さない? 白夜は我らの敵なのだぞ。」

「敵ですか……でも、私には彼らが敵とは思えない……んです。」

カムイは眉を寄せて、視線を落とす。

マークスの脳裏には、フードの彼女の言葉がちらつく。

「ああの王は、『カムイ』を殺したいのだ。」

マークスは眉をさらに寄せる。

カミラが蒼白な表情で、

「ああ、カムイ……もうやめて……」

「そんな!?? カムイお姉ちゃん……どうしよう、どうしよう……」

エリーゼは泣きそうになっていた。

カミラとエリーゼの隣に居たレオンは、

「まったく……仕方ないな。」

レオンは魔術を放つ。

そしてカムイの後ろにいた白夜の者達を殺す。

レオンは暗夜王ガロンを見上げ、

「父上。出来ない姉の代わりに、僕が止めを。」

「……レオンか。」

「ですからどうか、カムイ姉さんのことは……」

「……もうよい。追って、沙汰をくだす!」

暗夜王ガロンは兵を連れてこの場を去る。

カムイは座り込み、

「レオンさん……なんてことを！いくら敵でも、動けなかったんですよ……それに、戦意だつてなかったのに……殺すなんて……」
「しっ。」

カムイの側に来たレオンは、彼女の口にそつと指を当てる。

カムイはレオンを見上げ、

「……まさか、レオンさん……」

レオンは小さく微笑み、彼女を立たせる。

マークスはカムイを見て、

「……カムイ。お前のその優しさは、いつか仇になるかもしれないぞ。」

「構いません。それで討たれるなら、それまでです。むしろ私は、その方が良いです。悔いのないように、私はしたい。」

「……そうか。」

マークスは彼女を見つめた。

そして、近くにいた兵に、

「捕虜どもの持ち物を調べたい。よって、お前達はもう下がってよい。」

他の兵達を下がらせる。

兵達は、敬礼して去っていく。

この場に、暗夜の兄弟姉妹きょうだいだけが残ると、

「レオンさん、ありがとうございます。」

「別に構わないさ。父上の言う通り、殺しても構わなかったけど、カムイ姉さんが落ち込むと、エリーゼやカミラ姉さんまで悲しむからね。」
「でも、このままでは済まないわ……きつと。お父様が、このままで終わるはずないもの……」

カミラが頬に手を当てて言う。

しばらくして、マークスとカムイは捕虜になっていた者達を連れて、街の外れに来た。

マークスは捕虜達を見て、

「よいか、カムイの優しさに免じて、今回だけは解放しよう。消えるが

よい。我が王の目に触れぬうちにな。」

白夜の忍びスズカゼは、カムイをジッと見つめた後去った。

炎の部族リンカは、

「くっ……どこまでもコケにしゃがって！カムイと言ったな、次会った時は後悔させてやる！」

「いえ、次会った時は仲良くしたいです。じゃなくて、仲良くして下さい。」

「なに？お前、わかっているのか？私は白夜の戦士……お前は敵だぞ。」

「はい……確かに、暗夜と白夜は戦争をしている敵同士です。それでも、私はあなたたちと殺し合いなんてしたくないんです。戦争が早く終わり、平和な世の中になって共に過ごしたい。きつと……暗夜も、白夜も、分かり合えるはずですよ。いいえ、分かり合えるはずなんです。」

それを聞いた炎の部族リンカは笑みを浮かべ、

「暗夜に、世間知らずの王女様か。次会った時にも、それが続くかどうか見ものだな。」

そう言って、彼女も去っていった。

マークスはそんな彼女を、どこか悲しくも嬉しそうに見ていた。

白夜の忍びスズカゼは、走っていた。

白夜に情報を届けるために。

その前に、人影が現れる。

彼は急ブレーキをかけ、武器を構える。

彼の前には、フードを深く被った者がいた。

「……私は敵でない。白夜の忍びよ、白夜の王家に伝えよ。『選択の時は、すぐ側まで来ている。全ては必然である。気をつけよ、見えざる者が忍び寄っている。』とな。」

「……あなたを信じろと？」

「伝える伝えないは、自由にしろ。だが、後悔はするな。己の失態で、失ったあの姫のようにな。」

「……あなたは何者です。」

「全てを知り、打ち壊す者だ。」

そう言って、フードの彼女は闇夜に消えた。

白夜の忍びスズカゼは覚悟を決めて、走り出す。

第三話 任務

小さな子竜は夢を見る。

それは心優しき病弱な少女との出会い。

自分は怪我をしていた。

逃げてきた。

父に約束した大切な人を守るために、自分は全てを捨てた。

加護を受け、やっとあの人の元に行ける。

そう思った……

けど、現実はその簡単ではなかった。

逃げるために、自分にある全ての力を使って逃げてきた。

もうあの姿にはなれないだろう。

父との約束も守れない。

「……怪我をしているのですか？」

それは突如現れた。

自分の目の前には、自分を覗き込む赤い瞳の少女がいた。

自分は混乱し、威嚇する。

「大丈夫ですよ。私はあなたの敵ではありません。」

そう言つて、少女はスカートの裾を破る。

それを自分の怪我をしたところに縛る。

「私はカムイというのです。あなたはとても可愛いですね。」

少女は自分を抱き上げ、微笑みかける。

涙が溢れた。

少女は立ち上がり、自分を連れて歩き出す。

「カムイ様!? 何をしているのですか! 寝てなくては熱も下がりませんよー!」

「ごめんなさい、ジョーカーさん。でも、この子が怪我をしているの。

だから……」

「分かりました。私も治療を手伝います!」

少女の部屋に連れられ、少女の手当を受けた。

少女は病弱な体だった。

自分を助けたあの時、彼女は熱で倒れたのだ。
なのに、自分に気づき、やって来た。

少女は隣で眠る。

自分は少女に身を寄せ眠る。

暖かいぬくもり……

少女の優しい手が自分を包む。

子竜は決めた。

少女と共にいることを。

たとえ、自分が何者かを言えなくとも。

ずっと少女の元にいることを……

——カムイは暗夜王ガロンから貰った魔剣を振っていた。

この魔剣の力を使いこなすため。

いつも守られた自分が、今度は大切な人達を守るため。

自分は一心不乱に剣を振るう。

「カムイ様……」

「リリスさん？」

カムイは振り返る。

そこには心配そうに近寄って来るリリスの姿。

「カムイ様、あまり無理をやされては……」

「大丈夫ですよ、リリスさん。私には暗夜の竜の加護がありますから。

それに、今度は私がみんなを守りたいんです。お父様から頂いたこの

剣で。」

「カムイ様……ですが、それでもカムイ様はお身体が弱いんです。で

すから……」

リリスは肩を落として、手を握り締める。

カムイは肩で息していた。

そして一呼吸して、

「わかりました。今日の鍛錬はここでやめます。」

「カムイ様……!!？」

リリスは何かの気配を感じて、カムイを庇うように前に出る。

木の陰からフードを深く被った者が現れた。

カムイは剣を構えて、リリスの前に立つ。

「……あなたは何者ですか？」

その者はジツと、カムイとリリスを見ていた。

しかし、仮面で顔が見えないため、カムイの感覚でしかない。

「……忠告だ。その魔剣は、この世にあつてはならぬ力。それは禁忌の国のモノ。お前が、本当に大切な者達を守りたいのであれば、その魔剣は捨てる。それは破滅しか呼ばない。」

リリスは目を見開き、身を固める。

カムイはそれには気付かず、剣を向けたまま、

「……それを信じると？これはお父様から頂いたモノです。そんな事があるはずがありません。」

「その暗夜王こそが嘘なのだ。あれは死人であり傀儡。」

「……なにを言ってるですか？」

「お前の大切なモノを守りたいのであれば、暗夜王を疑え。全てを疑え。」

「それは、あなたを含めてですか？」

その瞬間、右手で短剣を持ってカムイの首につける。

さらに、左手で魔剣を持つ手を抑えた。

少しでも動けば、カムイの首は斬られる。

だからこそ、カムイもリリスも動けない。

「……そうだ、私も疑え。お前が弱いうちはな。」

そう言つて、サツと離れる。

カムイは全てにおいて反応できなかつた。

それでも、カムイはジツとその者を見つめ、

「……それでも私は全てを信じます。」

「……そうか。なら、それでもなお進むのであれば、お前は貫き通せ。なにがあつても立ち止まるな。お前の言う『信じる』は、お前の予想以上に辛く険しい。お前がお前を失わない限りな。だが、忘れるな。これは必然だ。」

そう言つて、闇夜に消えた。

カムイは剣をしまい、

「……リリスさん、今回の事は内緒にしておいて下さい。」

「はい、カムイ様……ですが、大丈夫ですか？その……カムイ様自身は……」

「大丈夫ですよ。こう見えも、打たれ強いんです。あの人の言うことは、全ては解らないです。でも私は、あの人を心のどこかで信じたい。何故だか、あの人は懐かしい感じがするんです。」

「そう、ですか……」

二人は城の中に入っていった。

闇夜の森を歩くフードを深く被った者。

彼女は立ち止まり、闇夜にゆういつある月を見上げる^光。

『……刃を向けて、私は迷った。確かに、カムイを使わなくては壊せない。だが、あのカムイでなくてもいいのだ。……なのに、やはり失いたくないのだ。いや、もう躊躇うな。私はもう戻れない。おそらく、今回が最後だ。だからこそ、私は必ずやり通す……』

彼女は歩き出す。

近くの湖の中へと入り、沈んでいく。

歌が聞こえる。

懐かしいあの歌が……

夕暮れの光灯る中、一人少女は湖で歌っていた。

それは誰かに届けるかのように。

それは誰かを想うかのように。

だが、すぐ側で水の動きが変わる。

そこには、湖の中からフードを深く被った者が現れた。

「……誰？」

身構えながらも、歌姫の少女は恐れることなく声をかける。

フードを深く被った者は湖の水の上に立ち、

「……禁忌の国の者。」

「……そう。私を殺しに来たの？」

「否。私はあなたと同じだ。呪いを恐れない。」

「……強いよね。」

「あなたには負ける。」

二人は見つめ合う。

だが、フードを深く被った者は仮面で顔が見えない。

本意は解らない。

それでも歌姫の少女は、恐れることなく近づこうとした。

だが、刀を構えて前に立つ者がいた。

「アクア！無事か!!？」

「リヨウマ……ええ。私はなにもされてないわ。」

少女は目の前の赤い鎧を着た男性を見る。

そして、歌姫の少女を包み込むように、

「アクア、無事でよかった……」

「ミコト様……」

歌姫の少女も、白き巫女を抱きつく。

赤き鎧の男性は、

「母上、アクアと共にお下がりください！」

「……白夜の第一王子。貴殿は、なにを持って信じる。」

「何をだ。いや、それよりも貴様は何者だ！何故、ここに入れた！」

彼の握る刀は雷を帯びる。

フードを深く被った者は両手を広げ、

「我が加護は水。水あるところには、全て私の加護の領域。今日は白夜の王妃に会いに来ただけだったが……貴殿にも会えたのならちようどいい。……今に白夜へ災厄が訪れる。貴殿らの敵は、目に見える者とは限らない。国を、民を、家族を、仲間を思うのであれば、貴殿らは信じる。そして疑え。」

「随分と矛盾した言葉だな。」

「仕方ないのさ。全ては必然だからな。」

「……お前が、スズカゼの言っていた者か？」

「……選択はすでに始まっている。」

フードを深く被った者は再び湖の中へと入っていった。

赤き鎧の男性は剣をしまい、

「……母上。今のを、俺は信じれません。誰とも解らぬ者の言葉を。」
「……………」

白き巫女の女性は黙り込んでいた。

歌姫の少女は赤き鎧の男性を見て、

「……信用は出来ないかもしれない。でも、彼女は私に言ったわ。禁忌の国の者と。」

「禁忌の国の者?」

「……口にはしてはいけない国。言えば、呪いによつて死ぬわ。それでも彼女はここに来た。」

「アクアは、その国を知っているのか。」

「ええ……だから私もその国のことは言えないわ。ごめんなさい。」

「……いや。少しだが、話がさてくれたこと嬉しく思う。兄としては、もつと頼つてくれた方が嬉しい。」

「……そう、考えておくわ。」

歌姫の少女は視線を落とす。

白き巫女の女性は、

「……ひとまず、城に戻りましょう。私も少し調べてみますから。」

「なら自分もー」

「いいえ、私だけで大丈夫です。リヨウマは他をお願いします。」

「わかりました。」

彼らは王城へと帰って行く。

ーカムイはエリーゼと共に暗夜王ガロンの王室へとやって来ていた。

あのフードを深く被った者との後、彼女に言われた事を気にしていたからだ。

それを見たエリーゼが、

「カムイお姉ちゃん、私が一緒に行つて謝つてあげるよ。そしたら、お父様もきつと許してくれるもん。ね、だからそんなに落ち込まないで。」

「え……は、はい。そうですね。ありがとうございます、エリーゼさ

ん。」

カムイは顔を上げる。

『確かめておいた方がいいのかもしれない。それに、エリーゼさんの悲しそうな顔をは嫌です。』

カムイは立ち上がり、エリーゼと共に王室へとやって来たのだ。

王室の扉を開けようとした時、

「ふははははははっ！くははははははははははははははははあつ！」

と、暗夜王ガロンの笑い声が響きわたる。

カムイは困惑し、声に出していた。

「お父様……!?!?」

「お、お姉ちゃんー」

「ぬ……!??!そこにいるのは誰だ！」

エリーゼが下がらせようとしたが、ダメだった。

暗夜王ガロンの怒り声が響く。

扉越しに、エリーゼとカムイは謝る。

「こ、ごめんなさい……お父様。」

「申し訳ありません……」

「お前達、何の用だ。」

暗夜王ガロンの声が少し落ち着いたのを感じ、

「えつと……カムイお姉ちゃんが、お父様に謝りたくて……その……」

「それでここに来たんです。お父様、エリーゼさんには怒らないであげてください。」

「……まあ、よい。入れ。」

二人は暗夜王ガロンの王室へと入る。

その奥、王の玉座に移動した。

暗夜王ガロンは玉座に腰を下ろす。

カムイは周りを見た。

木の根が辺りを覆っていた。

カムイは視線を暗夜王ガロンへと向ける。

「カムイよ。此度、お前は王命に背いた。本来ならば、死で償わねばならぬ大罪だ。」

「……はい。」

「そんな……！で、でもお父様……」

「大丈夫ですよ、エリーゼさん。私は大丈夫です。」

カムイはエリーゼを下がらせようとしたが、

「……だが、今回は不問とする。お前は私の子だ。そのような事で死なせたくなはない。」

「お父様！」

エリーゼが暗夜王ガロンの言葉にパツと明るくなる。

暗夜王ガロンは頬杖をつき、

「だが、王命に背いたのは事実。故に、お前にはその罰として、ある任務を与える。」

「はい、お父様。それで、その任務とは？」

「国境沿いの白夜領に、今は廃墟となった無人の城砦がある。そこへ、お前と従者のみで向かえ。戦いはせずとも良い。ただの偵察だからな。」

「はい、お父様。それでは。」

カムイとエリーゼは頭を下げてから、この場を去った。

『……あの人の言った意味は、やっぱり解らないままでしたけど……あのお父様が死人だなんて思えません。きつと、思い違いなのでしょう。』

カムイ達は城の入り口にいた。

カミラが頬に手を当て、

「ああ、心配だわ。いくら偵察とはいえ、従者だけで行くな……」
「ふふ。大丈夫ですよ、カミラ姉さん。無人の砦です。それに、ギユンターさんやジョーカーさんはお強いですし。リリースさんも、馬には長けてます。」

「のんきなもんだね、カムイ姉さん。父上直々の任務だというのに……。そんな様子じゃ、無事に帰れるとは到底思えないよ。」

「レオンさん……」

カムイは視線を落とす。

エリーゼがレオンの背をバシツと叩き、

「やだもーっ、レオンお兄ちゃんってば、心配しすぎっ！せっかくの旅立ちの時に、不吉なこと言わないで。」

「うっ！エ、エリーゼ、お前は能天気すぎた。」

それを聞いたカミラは青い顔をして、

「ああ……やっぱり、私も一緒にー」

「なりません、それは。」

と、暗夜の軍師マクベスが歩いて来る。

彼はマクベス。

暗夜王国の軍師である。

カミラは彼を睨み、

「軍師マクベス、それはどうしてかしら？」

「いいですか？ガロン王は、この偵察行をカムイ様への試練だと仰っています。カムイ様に、いずれはこの国を治める王族としての資格があるのか否か、のね。それを試しているのに、それを手助けしては意味がないのですよ。」

「……わかりました。その試練を私は乗り越えます。」

カムイは外に出ようとする。

そこに、声が響く。

「待つがよい、カムイ。」

「……お父様？」

「この者を連れてゆけ。」

暗夜王ガロンの横から一人の大男が現れる。

その者は、カムイをジッと睨みつける。

「この男は、ガンズという。見ての通り、王国きつての怪力の持ち主よ。お前の任務の助けになるだろう。」

「ありがとうございます、お父様。よろしく願いますね、ガンズさん。」

「ええ、よろしく願いますよ……カムイ様。」

大男ガンズは冷たく笑う。

それをマークスは眉を寄せて見た。

ーあの王は、『カムイ』を殺したいのだ。

マークスはフードを深く被った彼女の言葉がずっと離れない。だからこそ、今は疑心暗鬼になりすぎている自分に気づく。だが、カムイの側によるあの男は危険だ。

マークスはカムイに近づき、耳元で言う。

「カムイ。あの男、ガンズには気をつけろ。」

「え？それはどういう……」

「あの男は過去、数々の略奪や殺人を重ねてきた重罪人だ。」父上によつて兵に取り立てられたが……決して油断するな。」

カムイは小さく頷き、離れる。

カムイはギウンター・ジョーカー・リリス、そして大男ガンズと共に馬を走らせる。

谷を少し越え、辺りを見る。

「ここが、そうですか？」

「ええ。ここは無限溪谷。暗夜と白夜を分かつ果てしない谷です。」

ギウンターは辺りを警戒しながら言う。

カムイは馬を降り、谷底を見る。

「凄い高さですね。谷底が見えません。」

「はい。谷底は無限の闇に続き、落ちた者は決して戻らず……空は暗雲立ち込め、飛行する者を雷が襲う。本来ならば避けるべき危険な道です。しかしながら、吊り橋を渡らずに白夜王国に行くとするれば、大きく迂回せねばならず、ガロン王が命じた期限までに任務を果たすにはこの無限溪谷を渡る他ないのです。」

「大丈夫です。こんな谷、恐ろしくはありません。あの高い塀に囲まれた城塞の中だけで生きてきた日々堪比べれば、どんなものも私にとつては胸躍る冒険なんです。」

カムイがグツとガッツポーズを取る。

ギウンターは頷き、

「おお！さすが、カムイ様。幼き頃より、危険とわかっていながら、進むところは変わらないですな。あれは……近づいては駄目と言っていた開かずの間に、カムイ様がいた時の事を思い出しますな。」

「あれはどうしても気になって……でも、実際は物置小屋だったんで

すよね。扉の建付が悪く、子どもの方では中から開けられない。ギウンターさんが見つけてくれなければ、ずっとあのままでした。でも、そんな昔のことを引つ張りだすなんてズルいです。」

「ははは。カムイ様は、昔から変わらぬという事ですよ。」
と、近くに雷鳴が轟いた。

ジョーカーは、未だ崖の側にいるカムイに、

「カムイ様、危険ですので……」

「はい、わかってますよ。」

ジョーカーとリリスも馬を降りる。

リリスが馬をギウンター以外の馬を連れて、近くの木に縛りに行く。

その間に、ギウンターが少し辺りを見に行く。

と、辺りを見に行っていたギウンターが急いで戻ってくる。

「ギウンターさん？どうかしたんですか？」

「カムイ様、すぐに引き返しましょう。」

「どうしてです？」

「近くに、白夜王国の軍隊がいます。」

「なんですって!?？」

だが、少し先の橋の方に、武器を構えた白夜王国の兵達が数人やって来た。

「暗夜軍か！やはり来たか！」

「この橋は、両国の間で交わされた不可侵の掟に守られている！速やかに引き返せ！さもなければ、武力を持って対抗せざるをえない！」

と、怒鳴る。

カムイの前に立ったジョーカーは、

「厄介ですね……。敵に待ち伏せされていたようです。いかが致しましょう、カムイ様。」

「ギウンターさんの言った通り、ここは引き返しましょう。無理な戦いは避けるべきです。」

「すぐに馬を用意します！」

カムイの言葉を聞いたリリスが、駆けようとした。

だが、それを馬に乗った大男ガンズが蹴り上げる。

「きやつ!!?」

「リリースさん!」

カムイが、リリースを支える。

そして、大男ガンズを見上げ、

「ガンズさん!何をするんですか!」

「いえ、カムイ様……それをされては困るんだよ。」

「なに?」

ギウンターが、大男ガンズを睨む。

大男ガンズは斧を持って、白夜王国の兵達へ馬で駆ける。

そして、その斧を振った。

「うおおおおおっ!」

「ぐわあぁっ……!」

カムイは目を見開いた。

なおも、大男ガンズは斧を振り回す。

「がはははははっ!死ね死ね死ねえっ!」

「くっ!よくも……!!?」

白夜王国の兵達が攻撃してくる。

それを、ジョーカーとギウンターが防ぐ。

カムイは大声で、

「やめてください、ガンズさん!!?どうしてです!どうして勝手に、白夜兵を殺したんですか!?話し合えばわかるはずでした。いったん引いたってよかったです!なのに!」

すると、大男ガンズは笑い出す。

「ふふふ……噂通りの甘っちょろい王女様だ!だが、その甘さのせいで、ここにくたばる訳だな!」

「なん……ですって!??」

カムイは拳を握りしめる。

奥の方から、

「全軍に告ぐ!!?暗夜軍を生かして帰すな!」

「行くぞ!」

「白夜兵達が武器を持って次々とやってくる。」

「さて、俺は暴れたんで退かせてもらうぜ！せいぜい、頑張りな！」

大男ガンズは、馬を駆けさせて行つた。

その際に、繋げていた馬の手綱を切り、馬を逃す。

ギウンターは武器を構え、

「くっ！いかん！カムイ様、戦いの備えを！こうなつては致し方ありません！」

「カムイ様！我々の側を離れないように！」

「……分かりました。リリスさんは、私の後ろに！」

「は、はい！」

カムイも、武器を構える。

襲いかかる白夜兵達をギウンターを先頭に倒して行きながら、彼らの砦としていた城砦へと向かう。

橋を渡り、城砦を守るリーダーを殺した。

カムイは視線を後した後、顔を上げて城砦の中を調べる。

「……これでお父様の任務は果たせました。」

城砦の中を調べ終え、帰ろうとした時だ。

「……貴様、暗夜軍の将だな。」

「!?？」

カムイの真後ろに、白夜王国の忍びが現れる。

「俺はサイゾウ、白夜の忍びだ。貴様の命、貰い受ける！」

「カムイ様！」

と、暗器を構えて襲つて来る。

側にいたリリスとジョーカーが庇う。

そしてギウンターがら槍で敵をカムイから離す。

カムイは剣を構えて、

「くっ！油断しました！」

だが、ギウンターの槍を巧みに避け、再びカムイに忍びよる。

「爆ぜ散れ！」

カムイは反応できないくらい速い。

それは、フードを深く被ったあの者を思い出すようだった。

自分の命がここで終わる、そう思った。
が、馬の鳴き声とともに、

「……そうはさせん！」

白夜の忍びサイゾウの暗器を、剣で弾いた。

白夜の忍びサイゾウは距離を取り、

「!? 貴様は……」

「マークス兄さん!?」

カムイは兄マークスを見上げた。

彼はカムイを見て、

「間に合ったか。無事でよかった、カムイ。」

「マークス兄さん、どうして……」

「ふ。カムイ、来たのは私だけではない。」

「え？」

と、馬の足音と飛龍の羽ばたきの音が聞こえてきた。

カムイ達の前で止まる。

そこには、馬に乗ってきたレオンとエリーゼ。

そして、飛龍に乗ってきたカミラだった。

「カムイ姉さん、悪運強いね。ま、無事でよかったよ。」

「大丈夫、カムイ? 怪我はない? とても心配したのよ。」

「は、はい。大丈夫です。」

「ホントに? カムイお姉ちゃんが死んじゃったら、あたしも死んじゃうんだから!」

と、頬を膨らませるエリーゼ。

レオンはカムイの腕や足の怪我を見つけ、

「……って、カムイ姉さんの嘘つき。怪我してるじゃないか。」

「まあ、可哀想にカムイ……誰にやられたの?」

「これくらい大丈夫ですよ、レオンさん。カミラ姉さん。」

「ふふ、安心なさい、カムイ。あなたをいじめる悪者は……お姉ちゃんがみんな殺してあげる。ふふ、見ててねカムイ。」

カミラは笑顔で言った。

その手には、斧が強く握られていた。

そして飛龍を操って、敵を切り裂いていく。
カムイは驚き、

「あ、あれがしとやかなカミラ姉さん☒」

「あ、そっか。カムイお姉ちゃんは、戦場でのカミラお姉ちゃんを知らないんだっけ。かつこいいいでしょー!!? えへー!」

と、エリーゼが腰に手を当てて、喜ぶ。

白夜の忍びサイゾウは身構え、

「ちっ……」

「カゲロウ推参致した。サイゾウ、首尾は如何に?」

そこに、白夜のくノ一が姿を現す。

白夜の忍びサイゾウは武器を構えたまま、

「……しくじった。奴ら相当手強い。カゲロウ、増援はお前一人か?」

「否。まもなくリヨウマ様の本隊が到着なさる。」

「ほう、リヨウマ様が……ならばこの戦、俺たちの勝利だ。」

それを見聞きしたマークスは眉を寄せる。

「敵の増援か……さらに、後続も来るようだな。」

「なるほどね……どうする、兄さん?」

「そうだな……目的は果たした。無駄に命を奪う気はない。カムイ、お前はギウンター達と共に先に戻れ。私たちも後から追いかける。」

「はい、分かりました。」

カムイ達は来た道に戻る。

途中、白夜兵達と鉢合わせになりそうになる。

ジョーカーが囨となり、カムイ達は橋に向かう。

「さあ、カムイ様! この橋さえ渡りきれば安全です!」

「はい!」

だが、長い橋の途中で今度は大男ガンズが立ち塞がる。

「……帰す訳にはいかねえなあ。」

「ガンズさん☒」

「貴様! 先ほどといい、どういうつもりだ! 何を企んでいる!」

「企んでいるのは俺じゃねえぜ! ギウンター!」

と、大男ガンズはギウンターに襲いかかる。

そして、脆い板場に追い込み、斧を振り上げて下ろす。
足場は崩れ、ギョんターは深い谷底に落ちていく。

「ぐああああ!!?」

「ギョんター様!!?」 「ギョんターさん!」

カムイが咄嗟に駆けて手を伸ばすが間に合わなかった。

カムイは拳を握りしめ、

「な、なぜです、ガンズさん!なぜ仲間を!!?」

「お守りが消えて寂しいか?なら、谷底で二人仲良くやりな。」

と、今度はカムイに襲いかかる。

「カムイ様!!?」

「よくも……よくも!」

カムイは大男ガンズを睨みつける。

髪が少しフワツと上がり、彼を見る瞳が光る。

そして、何かの力が彼女の周りを覆う。

頭には長い竜の角が現れる。

カムイが左手を上げると、それは槍のような巨大な手の形へと変化
する。

「よくもギョんターさんを!仲間を!ガンズさん、許しません!!?」

「な……!なんだ、こいつは!!?ま、まさか……お、おまえ……!」

カムイは左手を振り下ろす。

彼は吹き飛んで行く。

そして、彼は膝をつく。

「なぜ仲間を殺したんですっ!なぜ私を狙うんですか!教えてください
い、今すぐに!!?!!?」

「お、俺は……め、命じられたただけだ!暗夜王……ガロン様に……!」

「なんですって☒お父様に……!!?」

一瞬だった。

カムイの隙を見つけて、大男ガンズは逃げ出す。

「あ!待ちなさい!」

カムイは追いかけてしようとする。

が、心臓を抑え、

「ゲフ！ゴホ！」

「カムイ様！」

リリスが背をさする。

カムイの状態が元に戻ると、魔剣ガングレリが黒く光り出す。

そして、カムイを引つ張り暴れ出す。

「……きやあああつ!?」

剣は意志があるかのように、カムイを谷底へと落とす。

リリスが身を乗り出し、自分も身を投げる。

「カムイ様!!?」

リリスは祈るように手を合わせて、

「我が祖、我が神、我が血……星竜モローよ、いま一度……我に力を！」

そう言うと、リリスの姿は子竜へと変わる。

カムイを啜え、上昇する。

「リ、リリスさん……あなたは……」

《……カムイ様……いつかこういう時が来るのではないかと思っておりました。私は人間ではありません……》

「そんな……人間じゃ、ない?」

《はい。私はカムイ様に、命を救われた竜です。きつともう、覚えてな
どいらつしやらないでしょうけれど……怪我を負って、あの厩舎に隠
れていた醜い獣の私を……あなたは、優しく介抱してくださいまし
た。父も、母も、仲間と呼べるモノ達も失った私にとって、あなたは
救いでした。だからこそ、あのとき私はあなたに一生お仕えすると決
めたのです。》

「リリスさん……」

《……でも、それももう終わり。この身に余る力を使った私は、二度と
人間には戻れません。でもいいのです……こうしてお話すること
も、もうじき出来なくなるけれど……それでも、カムイ様が生きてい
てくださるなら……それで……》

そう言った時、雷が二人を襲う。

否、カムイを庇ってリリスが大きなダメージを負う。

二人は再び落下し始める。

《……くっ！》

「リリスさん！このままでは危険です！あなただけでも、逃げてくださいー！」

二人は地面に叩きつけられそうになる。

だが、その瞬間風が二人を包み込む。

「……だから忠告してやったというのに。」

「あなたは……」

カムイが起き上がると、フードを深く被った者がいた。

「今からでも遅くない。それを捨てる。今回の件で身を持って分かつたはずだ。暗夜王^父が、どんな奴か。」

「……で、でも、もしかしたら何かの手違いだったのかもしれない！」

「その手違いで、その子は全てを捨てるのにか？」

「……でも……」

カムイはリリスを抱きしめる。

リリスはカムイを見上げて、微笑みかける。

フードの者は膝をつき、

「……見せろ。」

「え？」

「その子の怪我を見せろ。」

カムイは抱きしめていたリリスをフードの者に渡す。

フードの者は右手でリリスを抱き、左手をかざす。

青白い光がリリスを包み込む。

《……あなたは……もしかして……》

リリスの傷を癒すと、リリスは宙に浮く。

フードの者は立ち上がり、

「……これを持っていろ。」

子竜となったリリスに、手の平サイズの珠を渡す。

リリスはそれを抱えるように、その上に乗る。

そして再び宙に浮く。

《これは……竜石ですね。でも……》

「構わない。それがあれば話せるだろ。それに、あの国に帰れば、人型にもなれる。オススメはしないがな。それに、もともとそれはお前の父から預かったものだ。お前に渡せと。」

《……お父様が……》

フードの者は背を向け、

「……後は、自分たちでなんとかして生き延びるんだな。」

走り去る彼女の背に、

「あ……行ってしまいました。お礼もまだでしたのに……それに聞きたいことも沢山……」

《カムイ様、ひとまず安全なところに移動しましょう。》

「はい。あそこに森があります。あそこに向かいましょう！」

カムイはリリスを抱き、森へと向かう。

森の中で、カムイはリリス強く抱きしめていた。

「……リリスさん、どうしましょう。道に迷いました。」

《カムイ様、落ち着いてください。きっと大丈夫ー》

と、言った瞬間だった。

「暗夜兵か？」

「!?？」

カムイは後ろから何者かに殴られ、気絶した。

第四話 母と兄

これは彼若き白き王子がまだ少年の頃の話だ。

ある日でできた病弱な妹ともう一人の母。

病弱な妹の秘密を弟妹きょうだいの中で自分だけが知る。

自分は病弱な妹に、日々病弱になっていく実母母を重ねる。

生まれながらに病弱な妹を、自分は大切にした。

いや、していた。

自分は彼女を大切にすると共に、恐れていた。

彼女の中にある力を、王としての資質を……

自分は父と共に、病弱な妹を連れて城下に出た。

嬉しそうに駆け回る病弱な妹を、父も自分も心配する。

彼女の無垢な笑顔に、自分の器の大きさを知った気がする。

そして事件が起きた。

中立国で、敵暗夜王国の手によって父を失った。

それだけではない。

病弱な妹までも奪われた。

自分は悔しかった。

情けなかった。

ただ見ているだけの自分が……

父の勇姿を。

泣きすぎり、自分を求める妹の姿を。

自分は動けなかった。

自分は知っていた。

この日こうなる必然を。

あの人に忠告されたこの日の悲劇を……

あの日、動けなかった自分に誓った。

自分の中にあつた彼女の中にある自分にないもの。

それを手に入れる事はできないだろう。

だが、それを補える事はできる。

なら自分は、それを手に入れる。

病弱な妹を敵^{暗夜王国}から奪い返す。

今度こそ守り通す。

病弱な妹も、母も、弟妹^{きょうだい}も、国も、民も、家臣^{仲間}も……

——カムイはコトコトと、美味しそうな鍋の匂いを感じた。

薄つすらと、瞳を開ける。

それは自分の知らない風景。

藁に近い匂いの畳^床、レンガではなく木でできた天井。

窓も、ガラスではなく木だった。

そして美味しそうな鍋の匂いは、天井から吊り下がって火に当たっていた。

カムイは起き上がる。

すぐ側では、子竜姿のリリスが自分を守るように寄り添って寝ていた。

カムイはリリスを優しく撫でる。

「目覚めたか。さつきは不意打ちをしてすまなかつたな。まさかお前だとは思わなかつたんだ。」

奥から、部族の衣装を着た顔に刺青のある女性が現れる。

そして鍋の前で腰を下ろし、火を消して鍋をかき混ぜる。

「あ、あなたは……炎の部族のリンカさんですよね？」

「誰に見えるんだ？」

「い、いえ……雰囲気は少し違ったので……」

「まあな。あの後、色々あつたからな。」

彼女は、白夜王国に属する炎の部族長の娘リンカ。

以前、暗夜王国に捕虜として捕まり、カムイと剣を交えた。

炎の部族リンカはお椀に具を入れる。

それを近付いて来たカムイに渡す。

「食べな。」

「あ、ありがとうございます。」

「ほら、お前も。」

そして、起き出したリリスにも与えた。

「どうやら、彼女はリリスの事をペットか何かと間違えているようだ。」

「だが、リリスはその方がいいと思ったのか、「キュン。」とひと鳴きする。」

カムイは渡された鍋の具を食べながら、彼女の話を聞く。

「さて、カムイ。ここは炎の部族の村だ。安心していい。だが、私はお前を白夜王国に引き渡す。」

カムイはお碗を置き、

「そうですね……当然ですね。私は処刑されてもおかしくない事をしましたから。でも、ありがとうございます。私とリリスさんを助けてくれて。」

「……大丈夫だ。お前は処刑されないよ。なぜならお前は……」

と、外の方から馬の鳴き声が聞こえてくる。

炎の部族リンカはドアの方を見る。

「ん？もう来たのか。早いな。」

彼女は扉を開ける。

そこには白夜の忍びが立っていた。

「……スズカゼさん？」

カムイも立ち上がり、リリスを抱いて歩いていく。

彼の名は、白夜王国の忍びスズカゼ。

彼も、以前リンカと共に捕虜となっていた者だ。

と、白夜の忍びスズカゼの前に立つと、

「ご無事でよかった……カムイ王女。」

膝をついて、頭を垂れる。

カムイは困惑し、

「え？」

「さ、行きましょう。すぐに白夜王城まで、ご案内いたします。」

彼は立ち上がり、困惑するカムイを馬に乗せて駆けて行く。

後ろでは、炎の部族リンカも馬に乗り駆ける。

カムイは白夜の忍びスズカゼに連れられ、白夜王国に入った。

少ししか見ていないが、暗夜王国の城下と違って賑やかだった。

何よりも、太陽の光が暖かい。
ピンクの花びらが空を舞っていた。
そのまま馬を走らせ、白き王城^{シラサキ}へとやって来た。
そのままカムイは、王城の中へと連れられて行く。
王の謁見の間に着くと、玉座の前には赤き鎧を来た男性が立っていた。

白夜の忍びスズカゼは、彼の前で膝をつく。

「待っていたぞ、スズカゼ。ご苦労だったな。」

「はい、リヨウマ様。」

「えっと、あの人は……?」

カムイは困惑しながら、隣にいる炎の部族リンカを見る。

彼女は腕を組み、

「ああ……白夜王国の第一王子、リヨウマだよ。」

「……リヨウマさん。」

カムイは赤き鎧の男性リヨウマを見る。

彼も、腕を組んでカムイを見つける。

目の前の男性は、白夜王国の第一王子リヨウマ。

白夜王国の宝刀にして、神器『雷神刀』の持ち主。

カムイは視線を落とし、リリスを抱きしめる。

「……もういいでしょう。私を処刑するのなら、早く……」

と、カムイの斜め後ろから足音が聞こえてくる。

そこを振り返ると、白き巫女がやってくる。

そして、カムイを見て、手を口に当てて涙を流し出す。

「戻ってきてくれたんですね……本当に……本当に……」

そして、カムイを抱きしめた。

「良かった……よく無事で……私の子、カムイ!!?」

「え……ええ!? あ、あのどういうことですか私[☒]があなたの子? だっ

て……私の母は死んだはずですか[☒]」

王妃ミコトはカムイを離し、

「いいですか、カムイ。あなたは、この白夜王国の王女。幼い頃、暗夜王国に攫われたのです。私は、あなたの母ミコト。私たちは家族なの

ですよ。」

カムイは困惑が続く。

その白き巫女は、ミコトと言う名の白夜王国の王妃。

現在の白夜を治めている人だった。

そして、カムイ自分は彼女の娘だと……

「そんな……あなたが、私の本当の母親？嘘です、そんなこと……信じられません！私の母は、幼い頃病気で死んだんです。そう聞いて育ってきたんです……」

「信じられないのはそうだろうな。だが、これが真実だ。……俺の名はリヨウマ。お前の兄だ。」

「……私の……兄さん？」

兄リヨウマはカムイの頭を撫で、

「そうだ。俺ははつきりと憶えている。お前が攫われた時のことを……」

そう言つて、もう片方の手を強く握りしめる。

「あの時……当時はまだ友好関係にあつたはずのシュヴァリエ公国を訪問していた父……白夜王スメラギは突如敵に襲われた。暗夜王ガロンの騙し討ちにあつたんだ。そこで白夜王は……お前の父親は、命を落とした。」

「白夜王スメラギ……それが私の本当のお父様……？」

カムイは眉を寄せて、俯く。

彼女に抱かれているリリスもまた、何かを想い俯いていた。

「本当に、覚えていないのか？少しでも思い出せないか？」

カムイは記憶を探る。

と、臙げなどが何かチラつく。

白き衣を見に纏う誰が自分に背を向けて手を広げていた。

だが、ハッキリとはわからない。

靄のかかったように、ボヤける。

そしてその者が倒れこむ。

悲しい……

辛い……

今度は、黒い何かがチラつく。

恐い……

助けて……

違う何かを感じる。

懐かしい……？

——今は思い出すな。お前を、お前で守るにはこうするしかない。必要となった時、思い出す。

カムイは右手で頭を押さえる。

「ダメ……です。何も思い出せません……」

「……そうか。無理もないな。カムイ、今は信じろとは言わない。すぐには受け入れられない話だろう……」

兄リヨウマは再びカムイを撫で、

「今は休むといい。この城の中は自由にするといい。」

と、離れる兄リヨウマの服の裾を、カムイは無意識に握っていた。

リヨウマはカムイを見る。

カムイは顔を赤くして、彼の服の裾を離す。

「あ！す、すみません……」

「ふふ。昔から、カムイはリヨウマの後ろについていたものね。リヨウマ、カムイと共に少し庭を歩いてみてはどうですか？」

「ですが、母上。それは母上の方が……」

「いいのです、リヨウマ。カムイは、あなたの妹なのだから。」

「……わかりました。カムイ、庭の桜が満開だ。見に行こう。」

「桜？」

カムイはリヨウマの手を引かれて、その場を後にする。

庭に出ると、先程目にしたピンクの花がたくさん咲いていた。

花びらが風に乗って、踊っている。

「……これは、桜というのですね。とても綺麗です。」

「ああ。幼い頃のお前は、この桜の下で遊んでは熱を出していた。体の弱かったお前にとって、遊べる場所といえばこの庭くらいだったかな。時々、幼いお前を連れて、父上と共に城下に出たこともあった。その時はヒノカ達……お前の姉であるヒノカと弟のタクミに内緒で

行ったものだ。今はサクラという妹もいるぞ。そして、お前の体調のいい日には、この桜の下で花見をしたものだ。」

兄リヨウマは懐かしむように、腕を組んで語る。

カムイはそれをジツと見つめていた。

「……………」

「ん？どうした。」

「い、いえ…………私が病弱なのも知っていたので…………やはり兄きょうだい妹なんだなど。あの、リヨウマさん…………あ、いえ、リヨウマ兄さん…………」

「今は、無理して兄と言わなくとも良いのだぞ。」

と、カムイの頭を撫でた。

カムイは少し頬を赤くする。

それを見て、リヨウマは苦笑した。

その姿は、幼き頃と何一つ変わらない。

「それでなんだ？」

「あ、はい…………えっと、ミコト様じゃくてお母様…………は、お若いですよね？それでその、リヨウマ…兄さんを含めてその…………」

「ああ、成る程な。俺を含めたヒノカ、タクミ、サクラの母はミコト母上ではないのだ。」

「え？」

「お前の母、ミコト母上は赤子だったお前を連れてこの城に来た。世で言う妾の子だな。だが、我が母であるイコナ母上は、ミコト母上を受け入れた。無論、父上は我が母も、ミコト母上も愛しておられた。その子供であるお前も、我が母は愛しておられた。お前も、我が母をもう一人の母として慕っていた。タクミを身籠ってからは、我が母は体調を崩すようになられたが、タクミとサクラを産んで愛した。今は亡き、我が母の形見としても、もう一人の我が子としても、ミコト母上は沢山の愛情を俺たちにくれた。勿論、お前にもな。お前が攫われた後も、母上はずっとお前の身を案じていた。それは俺たちもだが、母上はそれ以上の想いもあったろうな。」

カムイは涙を流していた。

宙に浮いていたリリスは、カムイの頬をする。

その涙を両手で拭う。

「すみません……なんか嬉しくて……でも、信じられなくて……信じたい。私はこんなにも想われてたんだって……なのに自分は何も覚えてなくて……ごめんなさい……」

「いいさ。少しずつ、昔のように母と子の親子を、兄と妹の兄弟姉妹を、家族の絆と時間を取り戻していけばいい。」

「……………はい。」

カムイは宙に浮いているリリスを抱きしめる。

それは、ここにはいないもう一つの兄弟姉妹を想うからだった。

と、リヨウマはカムイの抱くリリスを見て、

「俺も聞いていいか？そのどこか竜のような子はなんだ？」

「この子はリリスさんです。私の友達で家族なんですよ。暗夜の城で住んでいた私の城は、限られた人しかいませんでした。マークス兄さん達が会いに来れない時は、リリスさんやフェリシアさん、フローラさん、ジョーカーさん、ギンターさんたちがお話やお茶会など、色々なことをしてくれました。辛い時、悲しい時、怖かった時はいつだって側にいてくれた大切な友達で家族です。」

「そうか……カムイをずっと守ってくれてありがとうな。」

リヨウマはカムイに抱かれてるリリスの頭を撫でた。

リリスは「キュウ。」と、ひと鳴きする。

リヨウマはカムイを見て、

「さて、城に戻ろう。あまり外にいては、お前の体にさわる。いくら日が出るとはいえ、冷えてしまうからな。」

「は、はい……あの、リヨウマさ……リヨウマ兄さん。」

「ん？」

「その……花見というのを今度してくれませんか？あ、いえ……やつぱりしなくていいです！」

「……そうだな。するか。家族みんなで花見をしながら、昔の話をしよう。そして、今のお前を教えてください。」

リヨウマは小さく笑った。

カムイは瞳を揺らし、そして笑顔で頷く。

「はいー！」

それを見て、リヨウマはカムイを見つめて、
「やっとなんて笑ってくれたな。やっぱりお前の笑顔も、昔と変わらないな。」

「え？」

「さ、行こう。」

カムイに、手を差し出すリヨウマ。

カムイはその手を握りしめ、二人は城に戻った。

ーマークス達は暗夜城へと戻って来ていた。

先に離脱したはずのカムイ達が戻って来ていないことに、不安で、心配を隠せなかった。

そして、マークスは暗夜王^父に呼び出された。

「……マークス。カムイを助けに行ったそうだな。」

「はい。カムイの任務先で、白夜王国の兵がいるとの話を聞いたので、援軍として。父上が、カムイの試練として我々を行かさなかつたのは知っています。ですが、多勢に無勢ではカムイでも無理があります。ですからー」

「別に構わん。儂が知りたいのは、カムイの生死だ。」

「……カムイの遺体は見つかっておりません。おそらく、どこかに身を隠しているのではないかと。あの場は、暗夜も白夜も入り乱れていましたから。」

「……そうか。」

マークスは拳を握りしめる。

暗夜王^父は、カムイの生死だけをこだわっている。

身の安全ではないのだ。

そして、生きていくかもしれないという結果は、暗夜王^父にとっては喜ばしくないかのように……

「くははははーそうかーそうかー」

突如、暗夜王ガロンは笑い出す。

そして両手を広げ、

「やはり、我が神の言う通りであった！これこそが、必然！これで白夜は落ちる！くはははは！」

「……父上？」

「お父様、どうしちゃったの？」

「まるで、僕達が見えてない……いや、忘れていたかのようだ。」

「ああ、一体何が……」

なおも、暗夜王ガロンは笑い続ける。

マークス達を忘れて。

と、扉が勢いよく開かれた。

「ん？」「なんだ☒」

暗夜王ガロンは笑いを止め、そこを見る。

マークスは剣に手をかける。

そして、扉のところに立つ者を見て、剣を抜く。

そこには、フードを深く被った者がいた。

「……兵たちは何をしている？」

マークスは眉を寄せる。

フードの者は中央まで来ると、

「初めまして、暗夜王ガロン……いや、お久しぶりと言うべきか。」

「……貴様は……そうか。このようなところに、一人で来るとは愚かだな。白夜王スメラギの敵討ちにでも来たか？」

それを聞いたマークスは、ハツとして瞳を揺らす。

だが、フードの者は暗夜王ガロンの問いには答えなかった。

「……私は最後に確かめに来た。暗夜王ガロンが残っているか、のな。」

「……なんだと？」

暗夜王ガロンは眉を寄せる。

そしてフードの者は、近くにいたエリーゼの腕を掴み、引き寄せる。

「キャツ!!？」

「動くな。」

その手には短剣が握られていた。

すぐに反応したマークス達を止める。

だが、暗夜王ガロンは微動だにしない。

「……お前に、まだ子を想う気持ちがあるのなら答えろ。なぜ、白夜を欲しがる。」

「くははははー！お前に、殺せるのか？」

「殺れるさ。そのために、私はここにいます。」

そう言つて、エリーゼの腕を切り裂く。

「っ痛!!？」

「エリーゼ!!？」「くそっ!」「ああ……エリーゼ!!？」

マークス達は反応する。

だが、それでも暗夜王ガロンは表情一つ変えない。

「なるほど……お前たち、目の前の賊を殺せ。」

「しかし父上！エリーゼが!」

「構わん。殺れ。」

「……つく!」

マークス達は眉を寄せて、武器を構える。

「……え？お、お父様!!？た、助けて!!？」

「……暗夜の王族なら、その身をもつてその賊の足止めでもして死ぬがよい。それが、お前の失態を失くす唯一の手段だ。」

「……お……父様……」

エリーゼは涙を流す。

フードの者は冷たい笑みを浮かべ、

「ああ、その姿こそが今のお前だ！あいつの思い通りの操り人形。破壊を呼ぶための器の一つ。死してなお、彷徨う哀れな傀儡の姿。」

「ならばお前は、哀れで、愚かな存在だ。己の全てを捨てた者。お前の手は、幾多の犠牲で血塗られておる。」

「……ああ、そうだ。この手は全てを破壊し、奪ったもの……ここに私がある事こそが、我が犠牲になった者達の嘆き、怒り、憎しみだ。私は全てを捨てた。親も、子も、兄弟姉妹も、仲間も、故郷も、存在も、全て!」

「……なぜ受け入れない。」

「なぜ受け入れた。あの、心優しき暗夜王ガロンは地に堕ちた。最早

……いや、やはりお前は最初から哀れな傀儡でしかない。お前は、ここでは暗夜の子らを殺せない。ここで暗夜の子らを殺しては、お前の神の必然は訪れない。暗夜の子らも、所詮はお前の神の道具でしかないのだから……」

二人は少しの間、黙り込む。

いや、睨み合う。

が、フードの者はエリーゼの耳元で、

「……すまなかったな、怪我をさせて。」

「え……う。」

フードの者はエリーゼを突き飛ばし、

「……もういい。答えは知れた。」

魔法を放つ。

煙幕が辺りを覆う。

「……先の質問。白夜王の仇は取らない。彼と約束したからな。それに、お前を討つのは私ではない。かつての汝の子らとカムイ……そして白夜だ。そして私は受け入れない。私が例え堕ちても、奴を討つ。そして忘れるな、貴殿らの敵は目に見える者ではない。目に見えない者であり、暗夜王ガロンだ。」

煙幕の中、駆ける足音が聞こえる。

マークスは剣を握りしめ、

「待て！」

「僕も行くよー！」

マークスとレオンが駆けていく。

煙幕が晴れ、カミラはエリーゼを抱きしめる。

暗夜王ガロンはカミラを見て、

「出て行け。お前らの失態は、後で下す。」

「……はい、お父様。」

カミラはエリーゼを支えて部屋を出る。

誰も居なくなると、暗夜王ガロンは手を広げ、

「我が神よ、どうされますか？………わかりました。この宵の悲劇は美しく……そして残酷に。」

そして、暗夜王ガロンの笑い声が響き渡った。

マークスはフードの者を追いかけた。

辺りを警戒し、フードの者を捜す。

と、後ろから、

「……………ここだ、暗夜の第一王子。」

「貴様、どういうつもりだ！」

マークスは剣を構える。

だが、フードの者は構えない。

「……………目が覚めたか？」

「……………なに？」

「あれが、貴殿が王^父として見ていた奴の本性。貴殿がずっと目を背け続け、受け入れなかった真実。あの頃の優しき暗夜王ガロンは、もういない。」

「貴様は何者だ……………」

「私は禁忌の国の者。」

「禁忌の国？そのような国は……………」

「かつて、若き暗夜王ガロンと白夜王スメラギの時代に交流があつた国。しかし、あの国は呪われた。この世で知る者は、すでに少ない。」

「……………なぜ、我らに関わる。」

「……………救つて欲しいと言われた。いや、救うと約束したからな。貴殿らの大切な者達に。そこに隠れている暗夜の第二王子。貴殿は鋭く、常に周りを気にする。貴殿は違和感に気づけるはずだ。兄妹^{きょうだい}を救いたければ動け。」

フードの者は背を向ける。

そして、彼らに伝える。

「……………カムイは生きている。」

「本当か？」

「……………ああ。白夜にいる。この意味、貴殿なら解るな。」

「そうか……………」

そして、フードの者は走り去る。

木の陰からレオンが出てくる。

「マークス兄さん、あいつの言うことは本当なの？これからどうするのさ。」

「……もう少しだけ、考えさせてくれ……」

マークスは剣を強く握りしめる。

——カムイは母ミコトと兄リヨウマと食事をしていた。

無論、リリースも側にいる。

カムイの目の前には、白い米のオニギリ、味噌汁、お漬物、肉団子、厚焼き卵が置かれていた。

カムイはオニギリを食べながら、隣を見た。

隣の兄リヨウマとは食べ物が変わった。

「ん？どうした、カムイ？」

カムイはオニギリを置き、

「い、いえ……私とリヨウマさ……兄さんやミコト様……お母様とは違うなと思って……」

「気を悪くしたのならすまぬな。」

「い、いえ……私は元々暗夜兵でしたし、こうして食事まで用意していただいた身ですから……」

「いや、お前に出した料理は、単に食べやすいからだ。暗夜での生活が長かったのだ。箸は使い辛いと思ってな。この料理なら、ほとんど刺したりして食べられるからな。」

「あ……そ、そうでしか。でも、確かにそうですね。暗夜ではお米ではなくパンですし。それに、ナイフとフォークで食べるのが基準……実はリンカさんから頂いた鍋も、お箸が使えなくて残してしまいました。リンカさんに、悪いことをしてしまいました……」

「大丈夫だ。そのリンカが、お前のその様子を見て、この料理を進めてくれた。」

「リンカさんが？」

「ああ。箸は苦手みたいだったな。」

「そう、ですか……良かった。」

カムイはホツとして、微笑む。

そして、兄リヨウマの食べていたモノを見て、

「ところでリヨウマ…兄さん。それはなんですか？」

「ん？これは刺身だ。」

「刺身？」

「ああ。魚を生でさばいて食べるのだ。」

「お魚を生で食べるんですか？私たちのところでは、魚は焼いたり、蒸したりします。確かに、生もありますが稀ですね。」

「無論、白夜でも焼き魚とかはある。だが、他にも揚げたりもする。

…：カムイ、刺身を食べてみるか？」

「いいんですか？」

「ああ、ほら。」

兄リヨウマは刺身を一切れとってカムイの前に持っていく。

カムイは口を開けて、それを食べる。

「ん、美味しいです。あ、刺身の側に付いてるその緑のは何ですか？」

「これはワサビだ。辛いが…：試してみるか？」

「は、はい！」

兄リヨウマは刺身にワサビを少しつけて、カムイの口に運ぶ。

カムイは眉を寄せ、口をギュッと閉じる。

「んん！」

「カムイには、やっぱりまだ早かったか…：」

その様子を見た兄リヨウマは笑う。

そして、お茶をカムイに渡す。

カムイはそれを一気に飲み、

「でも、美味しいです！」

と、ガッツポーズを取る。

すると、母ミコトが口元に手をやって笑う。

「ふふ。昔を思い出しますね。子供だったカムイは、リヨウマと同じモノが食べたいと言って、間違えてワサビを食べてしまったのを。」

「そうですね、母上。あの時のカムイは泣き叫び、父上にしがみ付いていました。おかげで俺は、しばらくカムイの前で刺身が食べられませんでしたよ。」

「ふふ。そうでしたね。」

と、二人は笑みを浮かべる。

が、それを聞いたカムイは驚き、

「そ、そんなことが……」

「ええ。そうですね。他にも、あなたの姉のヒノカがつけている髪飾りが欲しいと、ヒノカとお揃いの簪をつけたり、弟のタクミのオヤツを間違えて自分が食べてしまって、泣き叫ぶタクミの横で自分も泣いてしまって……スメラギ様が二人を肩に乗せてあやしたものです。妹のサクラが、イコナ様のお腹にいた時は毎日お花を持って、会いに行っていましたよ。」

「……そう、なんですか。まるで夢のような話です。」

「だが、現実にあったことだ。焦らなくていい。少しずつで良いんだ。」

「……………はい。」

カムイはオニギリを食べだす。

それはまだ、暗夜の兄弟姉妹きょうだいの事が気になるからだ。

彼らも、自分の大切な家族なのだから……

兄リヨウマは苦笑して、

「お前の部屋は、昔のまま残してある。母上に、連れて行ってもらおうと
いい。」

「……………分かりました。」

カムイは母ミコトをみる。

彼女はカムイに優しく微笑みかける。

食事を終え、カムイの部屋に行く。

戸を開けると、墨の絵や字、オモチャが広がっていた。

カムイは目をパチクリして、中に入る。

そして、膝をついてそれらを見る。

「散らかってるでしょ。でも、これを片付けてしまうと、あなたが二度と帰ってこない気がして……当時のまま残して置いたの。その絵はね、カムイが私とスメラギ様に描いてくれたのよ。」

カムイが持っている墨の絵を見る。

母ミコトは目を細めて、

「スメラギ様に私、そしてカムイを描いた絵だそうよ。幼いあなたは、それを持って私たちのところに来て言ったの。」

「そう、ですか……」

カムイはそれを大切そうにしまいながら、周りの物を片付けていく。

それは、この部屋にいた頃の自分を知るために。

リリースはカムイが片付けをしている間に、ミコトに近づいた。

《……あ、あの……ミコト様。》

「なんですか、リリースさん？」

《……ミコト様は気づいていらっしやるのでしょ。その……私の正体を……》

ミコトは手を握りしめて、

「ええ……あなたの加護は、すでにあの方のモノではないわね。でも、竜の血はあの方のモノ。」

《はい……私の加護は星竜モロー。でも、私の血の父は怖かった。私は、父にとって道具でしかなかった。でも、あの心のお父様が私を受け入れ、愛してくださいました。命を奪った私のことを……》

「……そう。辛かったわね、ごめんなさい……」

ミコトはリリースを優しく抱きしめる。

そしてリリースに微笑み、

「そして、ありがとう。カムイを守ってくれて。あなたは私のもう一人の子です。カムイが嬉しそうに言っていましたよ。『リリースさんは、私の大切なもう一人の妹』だと。」

《ミコト様……ありがとうございます！》

二人は涙を流す。

片付けを終えたカムイが二人を見て、

「……どうしたんですか？」

「いえ、嬉しくて。さ、今日はもう休みなさい。また明日、お話ししましょう。」

そう言って、母ミコトは布団をひく。

カムイはそこに入る。
暖かいお日様の匂い。

懐かしい匂い。

それに包まれ、カムイはリリスを優しく包んで眠る。

それを見届け、母ミコトは部屋を出る。

「……おやすみなさい、カムイ。リリスさん。」

そつと戸を閉め、廊下を歩いていく。

「……どなた？」

庭の木の陰からフードを深く被った者が現れる。

その者は、どこか少し疲れていた。

「……なぜ、取り上げない。あの魔剣の存在に気づいているバズだ。」

「……ええ。でも、カムイはまだ信じている。暗夜王カロン父を……。それに、

私があの場合『死ぬ』のは必然。変わらぬ運命なのよ。あなたもそれを知っている。だからお願い。あの約束を……あの約束を守って。」

「……それが、何を意味しているかを理解した上か。」

「ええ。」

「……わかった。約束は守る。」

フードの者は消えた。

ミコトは祈るように手を握りしめ、

「……ごめんなさい……許してね……」

小さく呟き、涙を流した。

第五話 姉と妹

幼き白き王女は想い馳せる。

あの日、新しくできた病弱な幼き妹。

そして、もう一人の母。

自分は兄と違い、受け入れられなかった。

けれど、幼き妹は可愛かった。

自分と同じものが欲しいと、お揃いの簪をつけて喜ぶ。

自分はこの子にとって、良き姉であろう。

弟も生まれ、自分は姉として一層頑張ろう。

もうじき、もう一人の妹も生まれる。

自分はその子達に色々してやろう。

そう思った。

けれど、突然父と妹を失った。

そのしばらくした後、実母^母を失った。

大切なモノが突然失われた。

何もできない自分が悔しい。

兄のように剣を取り、共に戦えぬ歯がゆさ。

自分が変わる。

もう大切なモノが失われぬように。

あの日自分を忘れぬように。

ーカムイは目を覚ます。

側に寝ていたリリスも起きる。

カムイはリリスを見て、

「おはようございます、リリスさん。」

《おはようございます、カムイ様。》

「……リリスさん、私決めました。真実が解るまで、私は闇夜も白夜も信じます。さすがに全部を全部、心から信じるのはできないかもしれませんが。それでも、私は信じます。谷底に落ちたギョウターさんも、私たちが逃がす為に囚になつてくれたジョーカーさんも、きっと生き

て会えると……私は信じます。お父様も、闇夜の兄弟姉妹も、ミコト様……お母様も、白夜の兄弟姉妹も……」

《……カムイ様……私はずっと側にいます。カムイ様をお守りします。だから、カムイ様はカムイ様のしたいようにして下さい。》
「ふふ、ありがとうございます。さ、起きましようか。」

《はい。》

カムイは身支度をし、廊下に出た。

「起きたか、カムイ。」

と、リヨウマが歩いてきた。

カムイは彼を見て、

「あ、リヨウマ……兄さん。おはようございます。」

「ああ、おはよう。……よかった、夢でなくて。」

「え?」

「……いや、お前が帰ってきたのが夢でなくてよかったという話だ。

さ、ご飯にしよう。」

リヨウマは手を差し出す。

カムイはその手を取り、歩いていく。

「カムイ、おはよう。」

「お、おはようございます、ミコト様……お母様。」

「……今日は私も朝食を作りました。沢山食べてくださいね。」

ミコトは涙を拭い、席を指す。

カムイは席に着き、食事を取る。

しばらくして、駆け足が聞こえて来る。

そして、一人の兵が膝をつく。

「お食事中、失礼致します!報告します!北方の山の村々が敵襲を受けています!」

「なに?!?あのあたりには今、ヒノカとサクラが……」

「はっ。ヒノカ王女とサクラ王女は村にとどまり、村人たちを避難させています!」

「……わかった!俺もすぐに向かう!母上、後は頼みます!」

「わかりました。リヨウマ、気をつけて。」

リヨウマは立ち上がる。

カムイはリリスを見て、小声で言う。

「ヒノカ女王とサクラ女王……私の白夜の姉妹きょうだいでしたね。」

《……はい。どうやら危機が迫っているみたいです。どうなさいますか?》

「……決まっています。」

カムイは立ち上がり、

「リヨウマ兄さん！私も行きます！」

「カムイ……いいのか、相手はおそらく暗夜の放ったノスフェラトウ。だが、場合によっては暗夜兵もいるやもしれん。お前にとっては、辛い選択になるやもしれんぞ。」

「覚悟の上です。それに私は見極めたい。なにが嘘で、真実か。なにが悪で、正義なのか。」

「……わかった。」

カムイの決意の目を見て、リヨウマは頷いた。

そこに、もう一人駆けてきた。

「リヨウマ！ヒノカとサクラが危険と聞いて駆けつけた！あたしもいくよー！」

「リンカ、か。助かる。スズカゼはいるか！」

「……はっ。ここに。」

天井から、スズカゼが降りてきた。

そして、膝をつく。

「スズカゼ、リンカ。カムイの側にいてやってくれ。」

「あいよ！」「御意のままに。」

二人はカムイを見る。

カムイも頷き、

「お願いします、リンカさん、スズカゼさん。」

彼らは馬を走らせた。

とある雪に覆われた山奥。

一人の巫女の少女が泣いていた。

「ごめんなさい、ヒノカ姉様……。私が足を挫いてしまったせいで

……」

「大丈夫だ。民を守る為に頑張ったサクラはとても立派だった。」

一人の天馬使いの女性が、彼女の頭を撫でる。

奥の方から唸り声が聞こえて来る。

天馬使いの女性は立ち上がり、天馬に乗る。

「村人たちはまだ避難の途中。誰かが残って戦わねばならない。たとえ劣勢でも、白夜の王女として戦い抜いてみせよう。」

「は、はいっ、姉様……」

巫女の少女は杖を握り締める。

カムイ達は馬を走らせる。

「あ、あのリヨウマ兄さん。」

「なんだ？」

「さつきは聞くのを忘れてましたが、ノスフェラトウとはなんですか？」

「暗夜の邪術師が作り出した意志なき怪物だ。この地は母上が、結界を張って護っておられる。故に、母上が生きている間は暗夜兵は侵攻できない。この結界に入ると、戦意を失うからだ。だからこそ、意志のある人ではなく、暗夜は意志のない怪物を送り込んでくる。」

「そんな……暗夜王国が、怪物を送り込むような真似を……」

「ああ。それにノスフェラトウは、すでに野生化して自国の民も無差別に襲うと聞いた。暗夜は戦に勝つために、自国の民すらも犠牲にする。」

「そうですか……」

カムイは手綱を握り締める。

そして、カムイ達は山の中腹に来た。

馬を止め、辺りを見渡す。

近くにいた兵に偵察させ、暗夜兵達はまばらに動いている事を知る。

「カムイ、敵の数は多く、広範囲に散らばっているようだ。このような時はまず、危険な場所を見極めるといい。俺はあちら側から行く。カムイ、お前はスズカゼ達と共に、反対側からヒノカ達と合流してく

れ。」

「はい、リヨウマ兄さん！」

カムイ達は馬を走らせた。

その背を見て、リヨウマは呟く。

「……無茶はするなよ、カムイ。」

そして、声をあげる。

「我らも行くぞ！待っている、ヒノカ！サクラ！今助けに行く！！？」

自分も馬を走らせた。

カムイはスズカゼ達と共に馬を走らせる。

途中、団体のノスフェラトウと遭遇し、撃退する。

その中に、暗夜兵がいないことに安堵している自分に気付く。

『……いけない。私は覚悟を決めて、ここに来た。私が迷っているのは、スズカゼさんとリンカさんが危ない。』

カムイ達は、さらに奥へと進む。

そして、少女の悲鳴を聞こえてきた。

「キヤーー！！？」

「いけません！急ぎましょう！」

カムイ達は急いで、声のする方へ向かう。

「サクラ！！？」

「はああああ！！？」

巫女の少女を襲うノスフェラトウを、カムイが斬り裂く。

「大丈夫ですか！！？」

「は、はい……」

そして、スズカゼとリンカが残りのノスフェラトウ達を倒す。

だが、背後からノスフェラトウの団体が迫り来る。

「……私の後ろに！リリスさん、お願いします！」

「は、はい！」

リリスは巫女の少女に近づき、「キュウ！」と鳴く。

巫女の少女は後ろに下がった。

「私も、共に戦おう！」

「はい、お願いします！」

巫女の少女を背に庇い、天馬使いの女性がカムイの隣に立つ。
そして、二人はノスフェラトウに突っ込んで行く。
スズカゼとリンカが二人をサポートしながら、戦う。
「っ痛ー!」

「だ、大丈夫ですか!? 今、治療します!」

カムイの怪我を巫女の少女が癒す。

カムイは彼女を見て、

「ありがとうございます。えつと……サクラさん。」

「は、はい……」

そこに、馬の鳴き声が響き渡る。

「無事か! お前たち!」

「リヨウマ兄様!!?」

「どうやら無事みたいだな。後は俺に任せろ!」

リヨウマは次々とノスフェラトウを切り裂いて行く。

リリースがそつとカムイに語りかける。

《カムイ様、先ほどのお怪我は大丈夫ですか?》

「はい。サクラさんが傷を癒してくれました。エリーゼさんと同じく

らしいの使い手ですね。」

《申し訳ございません、カムイ様……私が戦えれば……》

「いいえ。リリースさんが、サクラさんの側にいてくれるのが分かってからこそ、私は思いつきり動けたんです。ありがとうございます
います、リリースさん。」

《……カムイ様……》

と、天馬使いの女性の背後にノスフェラトウが一体勢いよく襲いかかる。

カムイが瞬時に、それ反応した。

「ヒノカさん!」

カムイの瞳が光り、いつぞやのように頭に竜の角が生える。

そして、手が槍のように大きな手に変わり、敵を吹き飛ばした。

「な!? お、お前は……やはり……」

だが、カムイが咳き込んで倒れた。

リリスが側により、鳴く。

「カムイ！」「カムイ様！」

リヨウマとスズカゼが駆け寄る。

リヨウマが、カムイを抱き上げる。

熱があるようだ。

スズカゼは側いた馬を連れてくる。

リヨウマは馬に乗り、スズカゼからカムイを受け取り、

「すぐに城に戻るぞ！ヒノカ、サクラ、休息なしで悪いが行くぞ！」

「カムイ……ああ！では本当に、あのカムイなんですね！」

ヒノカは涙を流す。

スズカゼが馬に乗り、サクラに手を伸ばす。

「ぎ、サクラ様。お手を！」

「は、はい！」

「後ろは、あたしが守るよ！」

「頼む！」

リヨウマ達は馬を走らせた。

ローマックス達は沈んでいた。

あのフードの者との一件で、暗夜王ガロンによる罰がどのような出るかを考えていた。

「……お兄様、これから私たちはどうなるのかしら。」

「……ただでは済まないだろうね。」

「ごめんなさい……」

「エリーゼのせいではないわ。結局は、何もできなかった私たちにも、非はあるわ……」

「でもね……あの人、私に謝ったの。怪我をさせたって……マークスお兄ちゃん、あの人は本当に悪い人？」

エリーゼは泣きそうな顔でマークスを見る。

カミラやレオンも、マークスを見た。

彼は眉を寄せ、腕を組んで黙り込んでいた。

「……私は父上を信じたかった。あの頃の優しき王^父を……だが、いつ

からだだろうな。父上が父上じゃなくなったのは……お前たち、あれはもう我らの父上ではない。父上の姿をした何かだ。私はこの後、あの偽物を討つ。その機会を伺う。」

「……それは、あいつの言うことを信じるってことだよ。でも、あいつの言う見えざる敵って何さ。」

レオンはジツとマークスを見つめる。

マークスは眉をさらに寄せ、

「……禁忌の国。調べてみたが、その資料だけが失われていた。何者かの手によって……。レオン、あのフードの者が先の白夜との戦争にいたのを気づいていたか？」

「……ああ。一人、異様な奴がいた。白夜も、暗夜も、目もくれず、魔法を打ちまかす奴が。それも、決まって犠牲者なしに。けれど、確実に何かを殺していた。もしあれが、見えざる敵っていうならば……。確かに、僕らの目には見えない何かがいるのは間違いない。」

レオンは腕を組んで、顎に指を当てる。

カミラは胸に手を当て、

「……お兄様、私はお兄様について行きます。お父様は、我が子までも見捨てる。それは、王だからこそだと私は思っております。でも違った。お父様にとつて、私たちは駒でしかない。私は大切な兄弟姉妹を、仲間家臣を守りたいわ……」

「私も！私も、お兄ちゃんたちと行く！私だって戦う！」

「勿論、僕もね。けど、兄さん。僕らはともかく……。カムイ姉さんはどうするのさ。今は白夜にいるだろう。ならやっぱり、このままの方が姉さんにとつてはいいのかもしれない。」

レオンの言葉に、カミラ視線を落とす。

マークスも、視線を落とす。

だが、意味を知らないエリーゼは首を傾げ、

「え？カムイお姉ちゃん、白夜にいるの？なら、助けに行かないと！処刑されちゃうかも！」

「いや、それはない。」

マークスは即答だった。

エリーゼは眉を寄せて、

「どうして?」

「カムイは元々、白夜の人間だからだ。」

「……………?」

「カムイは白夜王国の王女だ。あれは父上……………いや、あの偽物が、シユヴァリエ公国に兵を連れて赴いた日だ。あの日、私も共に行っていた。あの偽物は、白夜王を騙し討ち……………白夜王が守ったカムイを無理やり連れ去った。あの時、白夜王の側に駆け寄る人影を見た。おそらくあれは、フードの者だったのだろうな。」

「その白夜王国にしてみれば、カムイ姉さんはやっと帰ってきた家族。おそらく、暖かく迎え入れられてるんじゃない。」

レオンは肩を上げる。

そして、真剣な顔つきになり、

「けど、カムイ姉さんが白夜王国の人間というのは、内緒にしといた方がいい。それに、おそらくあの城ではギョンターしか知らないんだろ、兄さん。」

「……………ああ。だが、まさかお前とカミラも知っていた時は驚いた。」

「私は……………半信半疑だったわ。けれど、あの子の置かれている状況を知ってからは……………」

そう言つて、カミラもレオンも視線を落とす。

エリーゼは頬を膨らませ、

「どうして、私には教えてくれなかったの!私だつて知ってたらー」
「エリーゼが知つたら、お前は耐えられないだろ。顔に出やすいんだから。それに、抱えきれなくなつて、カムイ姉さんに話していたかも。それを知つたら、姉さんはおそらく殺された。」

「レオンの言う通りだ。カムイは誘拐されたショックで、記憶を失っていた。だが、カムイが誘拐され、しばらく経った頃だ。白夜の忍びが、カムイを取り戻しに来たのだ。その時、カムイは記憶を思い出した。私を見て怯え、白夜に返してくれと懇願した。けれど、それはできなかった。私は躊躇してしまった。その私の甘さのせいで……………カムイは暗夜兵と白夜の忍びの亡骸の前で、返り血を浴びて倒れてい

た。記憶と心が完全に壊れ、放心状態のあの子をあれ以上苦しませるわけにはいかなかったのだ。もし、自分が暗夜の人間ではなく、白夜の人間だと知れば、あの子はまた同じになってしまう。そう思ったのだ。」

「……マークスお兄ちゃん、ごめんなさい。きっと私、レオンお兄ちゃんと言う通りになってたと思う。でも、私はカムイお姉ちゃんを、本当のお姉ちゃんだと今も思ってる。たとえ、カムイお姉ちゃんが私のことを嫌いになっても……私は……」

エリーゼは泣き出した。

カミラはエリーゼを抱きしめ、

「ああ、エリーゼ……泣かないで。私も同じよ。」

「ああ……みんな、その覚悟さ。いつかは、こうなるかもしれないって思ってたからね。」

「……エリーゼ、きっとカムイとも分かり合える。そんな日が来るはずだ。それまで、兄弟姉妹皆で頑張っていこう。」

「うん！」

エリーゼは涙を拭う。

マークスは真剣な顔つきに戻り、

「……私たちの目的は、あの偽物を討つ。が、機会を得られなければ無理だ。あの偽物は、私達が敵になる事を知っている。故に、当面は……奴を父上として、見て従う。」

「敵の油断を作るんだね。でも、このあと死刑とかきたらどうする？」

「その時は、相打ち覚悟で私が出よう。」

「……それは僕の方が……」

「いや、私にもしもの事があれば、レオン、お前が兄弟姉妹を守るんだ。」

「……わかったよ、兄さん。でも、それがない事を祈るよ。」

そして、マークス達は暗夜王ガロンに呼ばれた。

ーカムイ達は白夜城に戻り、カムイを部屋に寝かせた。

そして、ミコトとリリスが彼女の側についていた。

「……母上、いま大丈夫ですか？」

「ええ。大丈夫ですよ。」

リヨウマが中に入り、ミコトの横に座る。

眠っているカムイを見て、

「申し訳ございません、母上。自分が付いていながら、このようなことに……」

「謝る必要はありませんよ、リヨウマ。カムイは、竜の力を使ったのです。体の弱いこの子が……いえ、この竜の力を使えば、こうなる事は知っていました。そして安心してください。カムイは、今はぐっすり眠っているだけですから。」

「……母上、カムイは竜の血が濃いですよね。それは誰に似たのですか？」

「……父親ですよ。私は竜の血を継いでません。あくまで、巫女ですから。」

「それは……カムイの本当の父君ですか。」

「……リヨウマ……あなた☒」

ミコトは口に手を当てる。

リヨウマはミコトの方を向き、

「俺は、父上から聞いています。カムイとは血の繋がらない兄妹きょうだいだと。けれど、俺はカムイを本当の妹だと思っております。兄として、カムイを護りたい。母上、俺はあなたの事も護りたい。父上のようにはしたくないのです。」

「……そう。リヨウマは知っているのでですね……。スメラギ様の事も、この後起こる、私の身の事も。」

「はい……。ミコト母上とカムイがこの城で落ち着いた頃、父上に呼ばれ、カムイとの関係をお聞きしました。そして俺は、シュヴァリエ公国に行く少し前に、あのフードの者に会っています。当時と変わらぬあの者に。その者から聞かされていました。あの日、何が起こるのかを。でも俺は、それを信じられず、父上にも話さなかった。話していれば……」

リヨウマは拳を握り締める。

その手を、ミコトは優しく包む。

「……スメラギ様は知っていました。あの日、自分が死ぬ事を。だからこそ、私に子供達を託したのです。そして、リヨウマとカムイを守って下さったのです。でなければ、カムイはあの場で……本場の敵に奪われていた。リヨウマにも、身の危険があつた。それから守って下さったのです。イコナ様も、ご自分の死期を悟り、私に子供達を託した。私はお二人から託され、お二人の忘れ形見である子供達あなた達を、お二人の分まで愛し、成長を見守ってきた。勿論、あなた達は私の大切なもう一人の子ら。それに変わりはありません。」

ミコトはリヨウマを見つめ、

「リヨウマ……私は時期に、スメラギ様の元へ行きます。きっと、あなた達に迷惑をかける。あなた達に、辛い選択をさせてしまう。けれど、どうかお願い……皆を護って。貴方だけに、責任を押し付けてしまつてごめんなさい。けれど、どうか私を助けないで。私は、私の目的のために、この道を選びます。これから先、起こる出来事から、あなた達を守るために。」

「母上……」

「私は嬉しかったのですよ、リヨウマ。あなた達に、母と呼ばれて。家族として過ごせて……。リヨウマ、あのフードの者の全てを信じてとは言いません。けれど、耳は傾けてあげて。それができるのは……『カムイ』を知る者だけなのです。」

「……わかりました。母上、どうかご武運を。」

リヨウマは頭を下げる。

そして顔を上げ、

「最後に、お聞かせ下さい。なぜ、タクミとアクアを共に行かせたのですか？タクミは、アクアをよく思っていない。未だに、アクアを退けもにしてしまう。」

「ええ。けれど、タクミはアクアの優しさを知っています。あの子は、抱え込むタイプだから余計意地を張ってしまう。けれど、いつか二人が姉弟きょうだいとして、共に居てくれると信じています。リヨウマ、私はアクアに……カムイを見たのです。一部の者が、カムイを攫われ、責任を

感じて取り戻そうとしてくれた。けれど、それは叶わず、代わりに
あの子^{アクア}を連れて来た。私は、あの子の心を閉ざした姿を見て、もしか
したらアクアのようになっているカムイがいるのではないか、そう
思ったのです。けれど、あの子はそれ以上に辛く悲しい想いをしてい
た。母を失い、年端もいかぬあの子が、どんな想いで生きていたか
……あの体の傷を見ればわかります。私はあの子^{アクア}の心を癒してあげ
たい。だからこそ、この白夜へ受け入れた。あなた達の兄弟^{きょうだい}姉妹とし
て、家族へとした。アクアは、私にとって大切な子なのです。」
「安心して下さい、母上。アクアも、大切な俺の妹。必ずや、護ってみ
せます。」

「本当にごめんなさい、リヨウマ……。あなたに、重荷ばかり背をわせ
て。」

「いえ、母上。俺は嬉しいのです。俺を頼ってくれる事を。」

「ありがとう……。リヨウマ。」

そして、リヨウマは部屋を出て行く。

リリスはミコトを見上げ、

《……ミコト様……。先ほどのお話、もしかしてあなたは……》

「リリスさん、カムイをお願いします。」

《……はい、ミコト様。私はいっだって、カムイ様の味方です。》

リリスは眠るカムイの側による。

翌朝、カムイは目を覚める。

「起きたか、カムイ！」

側には、天馬使いの女性と巫女の少女がいた。

カムイが身を起こすと、天馬使いの女性が抱きしめる。

「よかった……。本当によかった……」

カムイは彼女を抱きしめる。

そして、カムイを見て、

「覚えているか？ 私はヒノカだ。お前の姉だよ。」

「……ごめんなさい……。私、白夜での記憶は……」

「そうか……。いや、すまない。お前が戻ってきてくれただけでも、本当
によかった。」

「……あ、あの、助けて下さってありがとうございます。カ、カムイ姉様……私は、姉様の妹のサクラと言います。」

天馬使いだった彼女は、白夜王国の第一王女ヒノカ。彼女は元気満々で、男勝りなところが有りそうだった。

そして、巫女の少女は白夜王国の第三王女サクラ。

彼女はヒノカとは違って大人しい子だった。

カムイは頷き、

「はい……聞いています。お二人を助けに行つたのに、私が助けられてしまったみたいですね。ありがとうございます……ヒノカ……姉さん、サクラさん。」

カムイは二人を見る。

ヒノカは手を握り締め、

「カムイ……これだけは言っておく。私は、暗夜のやり方は気に入くない。自国の民すらも、犠牲にすると聞く暗夜王国の戦術……そのようなところに、お前を奪われて！どんなに、お前が辛く悲しい想いをしたか！」

「ヒノカ……姉さん……確かに、そうだったかもしれない。ですが、それだけではありません。それだけは、分かってください……」

「カムイ……」

視線を落とすカムイに、ヒノカはさらに拳を握り締める。

サクラは胸に手を当て、

「カムイ姉様……時期に、タクミ兄様とアクア姉様が帰って来られます。お二人にも、お会いになってみてはどうてますか？」

「アクア……姉様？」

「そうか、カムイは白夜の兄弟姉妹きょうだいは聞いても、アクアの事は聞いてないのだったな。アクアは、お前と同じ者だ。」

「同じ？」

「ああ。アクアは、お前が誘拐された後、白夜に誘拐された暗夜の王族だ。」

「え!?？暗夜の☒」

「……安心しろ。酷い事はしてない。あの子は、私たちの大切な姉妹きょうだい」

だからな。歳は多分、お前より上だ。だから、姉になる。」

「……そうですか。」

カムイは、暗夜の兄弟姉妹を思い出す。

彼らの、本当の兄弟姉妹だと思われる彼女。

カムイは顔を上げ、

「……会いに行つてきますー！」

と、床を出て、歩いて行つた。

それを、リリース、ヒノカ、サクラは追いかける。

弓を携えた少年と歌姫の少女は歩いていった。

少女は立ち止まり、木の陰を見る。

「何か……ご用かしら？」

そう言うと、木の陰からフードを深く被つた者が現れる。

弓を携えた少年は弓を構え、

「何者だ！」

「……私は敵ではない、白夜の第二王子。だが、時期に敵になるやもしれん。」

「は？言ってることが、矛盾してるんだけど。」

「……白夜の第二王子、貴殿はもう少し素直になつてはどうか。貴殿は知らないだけで、皆に想われ、愛されている。それは、今は亡きイコナ王妃も、スメラギ王も。」

「お前、本当に何者だよー！」

そう言つて、矢を放つ。

それをフードの者は避けない。

矢はその者の横を通り、木をなぎ倒す。

「……あなたは、どうする。」

「……私は、運命を受け入れるわ。そして共に……」

「そうか……」

フードの者は背を向ける。

そして、走り去つていった。

弓を構えた少年は、歌姫の少女を見て、

「お前、あいつと知り合いか？まさか、白夜を――」

「安心して、タクミ。私は白夜を護るわ。」

「あつそ。」

二人は、白夜城に向かって歩く。

第六話 弟と歌姫

白き王子はいつからだろう。

自分が、周りから愛されていないと思い出したのは……

幼い頃、病弱な姉がいた。

病弱な姉は、よく自分と遊んでくれた。

けれど、翌日には熱を出して寝込んでいた。

その姿は実母母に少し似てた気がする。

今はもう顔も思い出せないけれど、どちらも優しかった気がする。

けれど、二人がいなくなり寂しかった。

さらに、父までいなくなってしまった。

あの日、自分は病弱な姉と何かを約束した気がする。

けれど、それは現実ではなく、夢の中だった……

みんな、いなくなってしまった病弱な姉の事ばかり口にしていた。

自分一人だけが意味がわからず、独りでいた。

ゆういつ側に居てくれたのは、赤子の妹。

けれど、その妹も次第に会った事もない病弱な姉のことを口にする。

自分は次第に忘れてきていた。

いや、違う。

忘れるようにしていたのだ。

あの病弱な姉のことを……

そんな時だ。

暗夜の王女が、自分の姉としてやって来た。

無口で、素っ気ない暗夜の王女。

自分から、病弱な姉を奪った国の王女。

自分から、父を奪った国の王女。

けれど、彼女の歌う歌は綺麗で、どこか自分の心を癒してくれた。

自分は散歩に出た。

けれど、道に迷った。

涙が込み上げてきた。

すると、あの暗夜の王女が目の前に現れた。

彼女は、自分に手を差し伸べる。

自分は嫌々ながらも、その手を握った。

暖かった。

忘れていた温もり。

自分は泣きながら、彼女と共に城に帰った。

もう一人の母が、泣きながら自分を抱きしめた。

自分は、さらに涙が込み上げる。

涙が止まらなかった。

それから、自分は暗夜の王女を受け入れられなかった。

けれど、彼女の歌は好きだ。

彼女の優しさを知っている。

けれど、自分は素直になれなかった。

彼女は自分の事を、弟と呼んでくれる。

あともう少ししたら、自分は素直になれるのかもしれない。

そう思った。

もしかしたら自分は、居なくなった病弱な姉を、彼女に見ていたの

かもしれない。

今なら、そう思える。

けれど、病弱な姉が暗夜から帰って来た。

兄弟姉妹きょうだいが、母が、また病弱な姉の話始める。

居心地が悪い。

そして、また自分から奪ったのだ。

自分が大切だと思うモノ全てを……

——カムイは城の入り口へとやって来た。

そこには弓を携えた少年とリヨウマ、ミコトが話をしていた。

リヨウマがカムイに気付き、

「カムイ、ちようど良いところに来た。カムイ、お前の弟のタクミだ。」

「……えっと、初めて……ではなく、お久しぶり……ですの方が良いでしょうか？」

カムイは苦笑する。

彼は、白夜王国の第二王子タクミ。

彼は見るからにツンツンしていた。

そして、彼もまた神器『風神弓』の持ち主である。

タクミは、ジツとカムイを見て、

「僕は、アンタを信用してない。ずっと暗夜に居たんだ。スパイかもしれないからね。」

「タクミ！」

「事実だろ。僕は、兄さん達とは違う。カムイ姉さんの記憶なんて、ほとんど覚えてないんだ。」

「……タクミさんの言う通りですね。本来は、それが正しいのかもしれないですね。お話の邪魔をして、すいませんでした。」

カムイは城の外へと歩いて行った。

カムイは視線を落とす。

『そう、ですよね……タクミさんの反応が、本来私が受けるべき対応……タクミさんとは、仲良く出来ないのでしょうか……それにマークス兄さん達の本当の兄弟姉妹きょうだいのアクアさんは、私をどう思うのでしょうか……』

そう考え、拳を握り締める。

と、どこからか歌が聞こえてきた。

その歌のする方へ、カムイは向かう。

そこは湖だった。

その水辺で綺麗な女性が歌を歌っていた。

悲しく、夢げで。

けれど、どこか懐かしむように愛おしそうに。

誰かを想い、誰かに祈るように、そして誰かのための歌。

そんな感じだった。

カムイは聞き惚れていた。

だが、歌を歌っていた彼女はカムイに気付いた。

カムイに近付く。

「すみません、つい聞き入ってしまった……。けれど、不思議です。懐

かしく、それでいて心が落ち着く……そんな歌でした。」

「……あなたは、カムイ王女ね。会いたかったわ。」

「では……もしかして、あなたがアクアさん？」

「ええ。暗夜王国の王女だった者よ。今もう、暗夜の王女ではないわ。私は、この白夜に来て救われた。少なくとも、暗夜よりも居心地が良いわ。この国の人は優しい。敵国の私を、優しく向かい入れてくれた。ミコト王女は、私を娘のように愛してくれた。リヨウマ達も、私を兄弟姉妹きょうだいとしてみてくれた。タクミは少しだけけどね……けれど、それがあの子なの。根は、とても優しい子よ。」

「……アクアさんは凄いですね。」

「え？」

「……私は迷っています。暗夜も、白夜も、私にとって大切です。けれど、私はまだどうしたらいいのか、どうしたいのかが分かりません。」
「それは当然よ。私も、あなたと同じになるわ。今、私が暗夜に戻っても……私は結局どうしたいのか、はっきりしないでしょう。あなたは、私と似てるわ。私は暗夜の者であり、あなたは白夜の者。けれど……私も、あなたも、偽りの世界に生きている。けれど、私はできることなら白夜の民として生きたい。この国のみんなと生きたいわ。私は、ミコト王女の平和を愛する心を知っている。そして暗夜王ガロンが、どれほど残虐な男か知ってる。だからこそ、私はいつか決めなくてはいけない。……自分の本当の居場所を。それは、あなたも。」

「……そうですね。白夜か、暗夜か……」

「そうですね……それもね。」

「……？」

アクアは遠くを見るように、空を見上げた。

カムイは首を傾げて、彼女を見ていた。

そして、視線をカムイに戻し、

「……戻りましょう。あなたは、病み上がりでしょ？」

「あ、は、はい……」

二人は白夜城へと戻る。

中に戻り、皆で食事を取っていた。

タクミは相変わらず、カムイに冷たかった。

「……箸もろくに使えないなんて、本当に元白夜の人間なの。」

「ご、ごめんなさい……」

「タクミ、よさないか！カムイは戻ってきたばかりだ。」

「……僕は、事実を言ってるだけだよ。」

と、そっぽ向く。

カムイは、さらに落ち込む。

リヨウマは腕を組んで、

「……母上。明日、皆で買い物に行きませんか。その後、庭で花見でもしましょう。」

「まあ…それはいいわね。そうしましょ。」

ミコトは手を合わせる。

そして、話は二人を中心に進んでいくのであった。

カムイは城下町を家族で歩く。

無論、その中にはアクアもいる。

カムイとアクアは後、仲良くなるのに時間はかからなかった。

「見てください、アクアさん。可愛いですね。」

「……それはお菓子なのよ。」

「これを食べるんですか？なにか、もったいない感じがします。」

「ふふ。変わらないな、カムイ。」

「え？」

カムイはヒノカを見る。

ヒノカはリヨウマとミコトを見て、

「思い出しますね、兄様。私と父上がお菓子を買って、カムイに見せたら可愛いと言っていた。それをリヨウマ兄様とタクミに見せていたら、タクミがその菓子を食べてしまった。」

「ああ。したらカムイが大泣きして、タクミも大泣きしだしたんだ。二人して、父上の方に駆け寄り、父上の髪を引っ張っていた。俺が、残りの菓子を泣いているカムイの口の中に入れたら、今度は俺に怒り出して……」

「しばらく、カムイに口をきいてもらえなかったのですよね。」

「ああ。菓子を食べたタクミとは、手を繋いで笑いあっていたのにな。だから俺も、菓子を買ってきて許して貰ったものだ。」

と、二人は苦笑する。

タクミは顔を赤くして、

「ぼ、僕が泣き虫みたいに言わないでよ。しかも兄さん、若干怒ってるでしょー!」

「勿論だ。お前とカムイは喧嘩をしても、すぐにその場で仲直りしていたからな。俺とは大違いだった。ヒノカですら、喧嘩したら簡単には許してくれなかったのだぞ。」

「へえー……そうなんだ。」

タクミは視線を逸らしながら、嬉しそうにしていた。

サクラは視線を落としていた。

カムイはそれに気付き、

「どうしたんですか、サクラさん？」

「い、いえ……私は、カムイ姉様が誘拐された頃は赤子でしたので……」

「それは仕方ないわ、サクラ。でも、私の知るあなたの幼い頃といえば、夜一人で眠れなくて、ヒノカや私と一緒に寝てって言ってきたわね。それは、タクミ以上の泣き虫かも。」

「アクアの言う通りだな。サクラは昔から、私やアクアについて回っていたからな。そうかと思うと、タクミの側でお化けを怖がったり。」

「はう……姉様たち酷いです。」

「ふふ、そうね。サクラは、怖くなるといっただってタクミの服の裾を引っ張って……その姿はまるで、リヨウマと幼い頃のカムイみたいだったわ。」

ミコトは口に手を当てて微笑んだ。

カムイは少し頬を赤くして、

「私の知らない話。でも、どこか懐かしく暖かい。私、みなさんと家族でよかったです。」

カムイたちは買い物続けた。

建物の陰で、フードを深く被った者がいた。

白夜王家の者達を見ていた。
だが、視線を外す。

その者は、懐から一つの布を取り出す。
それを握りしめ、彼らとは別の方へと歩いて行く。

カムイ達は買い物を終え、庭で花見を始めた。

みんな、ワイワイと盛り上がっていた。

カムイは側にいるアクアに話しかけた。

「アクアさん。」

「なに、カムイ?」

「……いつか、マークス兄さん達……暗夜の兄弟姉妹きょうだいとも、話をして下さい。きつと、この白夜の兄弟姉妹きょうだいと同じくらい大切な絆になると思
うんです。アクアさんが、暗夜をよく思っていないかもしれないけれど、もしかしたらー」

「そうね……マークス達とは、話してもいいかもしれないわ。」

「……アクアさんは、マークス兄さん達を知っているんですか?」

「ええ。マークス、カミラ、レオン、エリーゼ。彼らは、私を知らない
かもしれないけど……私は、彼らを知っているわ。彼らが、いい人達
だということも。」

「……それは……」

「けれど、今はする必要はないわ。きつと、いつかは分かり合える。話
し合えるのだから。」

アクアは小さく微笑む。

その日一日は楽しかった。

この暖かさが続くと思っていた。

けれど………現実には辛くのしかかる。

絶望へと。

ーマークス達は暗夜王ガロンの元にいた。

「……お前たち。此度の失態は、不問にする。」

「……ありがとうございます、父上。父上の配慮、感謝いたします。」

マークスは頭を下げる。

暗夜王ガロンは頬杖をつき、

「さて、お前達にはこれから、白夜王国に行ってもらおう。」

「白夜王国に……ですか？」

「そうだ。そこに、カムイが捕まっているそうだ。助けに行つて参れ。」

マークスは返事をしようとした。

そうしなければ、この暗夜王ガロン^{偽物}を殺せないからだ。

「……わかりー」

「だが、カムイが自らの意志で白夜王国に組したのであれば、その時は殺せ。良いな。」

「……ですが、父上。白夜王国には、白夜王妃の結界があります。行つてもー」

「それはもはやありはせぬ。何故なら、白夜王妃は時期に死ぬ。カムイの手によつてな。」

そう言つて、暗夜王ガロンは冷たい笑みを浮かべる。

マークス達は拳を握りしめていた。

だが、必死にそれを堪え、

「……わかりました、父上。その任、我ら兄弟姉妹^{きょうだい}が見事果たしましょう。」

そう言つて、出て行つた。

暗夜王ガロンは大笑いを始めていた。

「くはははは！ さあ、絶望しろ！ 破滅への道へ!!？ 全ては、我が神のため!!？」

ーカムイはお花見を終え、母ミコトと王の玉座にやつて来た。

ミコトは玉座のの隣に立ち、

「カムイ、実はあなたに一つ頼みがあります。」

「なんですか？」

「カムイ、この玉座に座つてみませんか？」

「え？ どうしてですか？」

「……カムイ。この玉座には、古の神である神祖竜の加護が宿っているのです。座る者は、真の姿、真の心を取り戻すと伝えられています。」

す。」

「それはつまり、私が暗夜に術を掛けられていると言うのですか？やはり、私は信用されていなかったんですね……当然ですよね。」

「いいえ、カムイ。違うのです。あなたを、傷つけたのなら謝ります。ただ、もしもあなたが暗夜によって記憶を封じられていたなら……最後に、私のことを思い出してくれるかも……そう思っただ。ごめんなさい。私は、あなたを傷つけてばかり……けれど、忘れないで……この玉座のことを。」

ミコトは視線を落とし、カムイの横を歩いて行った。

その日の夕飯、一人の眼鏡をかけた男性がミコトの横にきた。

「失礼します、ミコト様。先日、言っておられた準備が整いました。」

「ありがとう、ユキムラ。」

ミコトは、彼に笑顔を向ける。

そしてカムイを見て、

「カムイ、彼はユキムラ。軍師として、白夜王国の政務を助けてくれています。」

「浅学非才の身ではありますが、どうかお見知り置き下さいませ。」

軍師ユキムラはカムイに頭を下げる。

ミコトは手を合わせ、

「カムイ、実は民の皆に、あなたが戻って来たことを正式に知らせようと思っただ。知らせを回したのです。」

「そこで、カムイ様のお披露目を明日の昼、炎の広場で行います。」

軍師ユキムラは、簡単に説明する。

ミコトは、ヒノカ、タクミ、サクラ、アクアを見て、

「ヒノカ、タクミ、サクラ、アクア。あなた達で、カムイを炎の広場に案内してあげて。私は執務を終えてから、リョウマ達と一緒に行きます。カムイを、よろしくお願いしますね。」

「承知しました、母様。」

「わかったよ、母上。」

「はい、母様。」

「……ええ、ミコト様……」

その日の夜は、どこか悲しく不安だったのを覚えている。
リヨウマとアクアは、起こる悲劇を知っていた。

けれど、何もできない自分をどこか悲しく、悔しく、齒痒かった。
それでも、託された思いを守り通すと誓う。

ヒノカやサクラ、タクミは、彼らのそれに気付けなかった自分を悔
いた。

いや、気付いていたのかもしれない。

けれど、母のあの笑顔がそれを見せなかったのだ。

母の想い、兄弟姉妹きょうだいの想いを。

それでも彼は、受け入れられなかった。

この後の悲劇を。

大切な兄弟姉妹きょうだいであり、家族だったからこそ……

カムイは嘆く。

誰かを護りたいと、のちに思うのはこの為か……

違う。

母の想いに気付けなかった自分。

それもある。

なによりも、自分が壊してしまったあの暖かさ。

やり直せると思つた母と子の……家族の絆を。

自分が壊してしまった全てを、自分は背負い歩む。

だからこそだ。

自分は選び取つた。

全ては、自分の信じる未来のために……

第七話 悲劇

とある執事は思い出していた。

幼き頃自分は、それなりの金持ちの家の坊ちゃんだった。

だが、両親は自分に興味なかった。

自分は両親の愛情を知らずに育った。

そしてついに自分は両親捨てられた……

いや、売られた。

暗夜城から離れた森の中。

その巨大な高い壁に囲われた城。

そこに自分は押し込まれた。

元は坊ちゃんだった自分に取って、ここでの生活は苦でしかなかった。

水拭き、窓拭きといった掃除や野菜を取り、切ったりする食事の支度などやることは沢山ある。

自分は何一つできない。

いや、知らない。

できない自分は怒鳴れ、殴られる。

そんな日々が続いた。

外階段の一角で、自分は膝を抱えてうずくまっていた。

何度ここを逃げ出そうと思ったか……

だが、ここを逃げ出しても自分には行く当てはない。

何もできない自分は、ここを逃げ出しても死ぬ自信がある。

情けなかった。

悔しかった。

そう思うと、涙がこみ上げる。

「……あの、よかつたらこれを使ってください。」

自分の目の前に、自分を心配そうに見る赤い瞳。

そして、花柄のレースがかかったハンカチ。

「えっ？」

「頬に汚れが付いています。これで拭いてくださいな。」

「あ、ああ……」

自分はそれを受け取り、頬を拭く。

自分にハンカチを渡してきたのは、自分よりも幼い少女。
その少女は自分に微笑みかける。

「悪いな。これ、汚しちゃった。」

「構いませんよ。それは、もともと差し上げるつもりでしたから。」

「は？」

「時々ですが、お見かけしました。一生懸命働くあなたを。」

「無様の間違いじゃないのか。」

「いいえ。どんなに失敗しても、あなたは何度も繰り返し頑張っていた。それは無様ではありません。」

自分はさつきとは違う涙がこみ上げる。

ここに来て……いや、生まれて初めて自分は自分を褒めて貰えた。

自分を見てもらえた。

そう思った。

「……お前は、こんな所にいて辛くないのかよ。」

「勿論、ありますよ。でも、私は色んな方に支えられてる。そう思うと、心が楽になります。あなたにも、きっとわかる日がきます。少なくとも、私はあなたのことを見ています。」

「……あつそ。」

自分は頬を赤くして、視線をそらす。

少女の笑顔は輝いていた。

自分にはない輝きだ。

自分よりも幼いこの少女が頑張っているのなら、年上の自分も頑張らなくては。

ここで逃げたら、自分は本当にダメな奴だ。

そう思う。

「カムイ様、ここにおられたのですか？そろそろ、お勉強のお時間です。」

「ギユンターさん。もうそんな時間ですか……」

一人の男性がやって来る。

鎧を着た騎士だ。

それに、この少女を『カムイ』と呼んだ。

「……え？カムイってこの城の主人の名じゃ……」

「そうだ。この方は、この城の主カムイ様だ。」

「し、失礼しました！そうとは知らず、とんだ無礼を！」

自分は立ち上がり、頭を下げる。

どんな罰を受けるか。

知らなかったとはいえ、自分は何ということ……

「いえ、無礼な事なんて、何もしてませんよ。」

「え？」

自分は顔を上げる。

少女は変わらず、輝いた笑顔を自分に向けていた。

「淋しくて、泣きそうだった私の話し相手になってくれた。あなたは、とても優しい方です。」

「それは……」

「また、私の話し相手になって下さい。お願いしますね。」

そう言って、騎士とともに歩いて行った。

自分はその後、あの少女について調べた。

自分が知らなくても当然だった。

あの方は体が弱く、部屋をあまり出ない。

あの場で会ったこと自体が、奇跡だったのだ。

自分はその方から貰ったハンカチを包み込む。

ここで生きる意味を得られた気がする。

「俺を鍛えてくれ！いや、鍛えてください！」

自分は、ある騎士に頭を下げた。

「……何故だ。」

「あの方の側においても、恥ずかしくない執事なる為です。あの方をお護りする為には強さがある。だから……お願いします！」

「……いいだろう。だが、生半可な心意気では持たんぞ。」

「構いません！」

自分は普段の仕事も、今までとは違った。

失敗しても、叱られ殴られても、あの方の笑顔を思い出す。
自分は挫ける事なく、仕事をこなす。

そして騎士に鍛えてもらう。
そんな日々を過ごしていた。

今日も、自分は尻餅をついた。

「っ痛！ジジイ！絶対叩き潰す！」

「ジョーカー、お前が私を叩き潰すのに、一体何年後か……」
「うるせー！」

自分は騎士を見上げ、睨む。

と、駆け足でやって来る人影があつた。

「ギョウンターさん！」

「カムイ様、どうなされたのです？」

「お化けがいたんです！」

「ああ、また怖い夢を見たのですな。大丈夫ですよ。」

騎士は膝について、泣く彼女をなだめる。

と、少女は自分に気づいた。

目があう。

でも、自分の事は覚えていないだろう。

そう思った。

「こんにちは……えっと、あの時お話ししてくれた方ですよ。ごめんさい。」

と、涙を拭う。

そして、あの時あつた笑顔で、

「お名前を、聞くのを忘れていました。」

「え……あ、はい。私は、ジョーカーと申します。」

と、立ち上がって頭を下げる。

嬉しかった。

自分を覚えてくれていた事に。

「ジョーカーさんですね。……あ、また頬に汚れが。」

少女はハンカチを取り出し、

「これを使ってください。」

「で、ですが、汚れてしまいます。」

「……では、いつかジョーカーさんが返して下さい。」

「え?」

「凄くなつて、私の側に来て下さい。そうすれば、淋しくないでしょ? 私も、淋しくありません。」

「あ……はい。」

自分は涙を流していた。

あの時、見透かされていた。

この少女は自分に、また生きる希望を意味をくれた。

自分はこの方の為に生きよう。

この恩を返す為に……

――翌日、カムイ達は炎の広場にやって来た。

多くの人々が集まっている。

みんな嬉しそうに、カムイを見る。

カムイは、顔を赤くして照れる。

カムイ自身、こんなに多くの人に見られたこともなければ、触れ合ったこともない。

その中に、仮面の者もいた。

『……約束は守ろう。あなたの命は救わない。そして、カムイが魔剣を手放せないのも、やはり必然なのだろうな。……救える命と救えぬ命。それでも私は、やり遂げる。』

そこに、ミコトとリヨウマがやって来る。

ミコトは、民達にカムイを紹介する。

人々は歓声を上げる。

ミコトは、カムイを見て微笑む。

リヨウマは見た。

人混みの中、あのあの^彼フードの者^女と同じような者がいたのを。

ただ違うのは、その者は身に纏う禍々しいオーラがあった。

得体の知れない何かを。

その者が、ミコトとカムイの近くそつと近づいて行く。

が、止まる。

その者の首には、短剣が突きつけられたからだ。

「そこまでだ。魔剣の暴走はさせない。」

「いや、魔剣の暴走は必然だ。やはり、ミコトを助けたいか？」

「……助ける必要はない。約束したからな。私は、あなたとも約束した。だから、止めるのだ。」

「そう……だったな。だが、私が暴走させるのではない。なぜだか分かるか？それは、傍観者であったお前自身が動いたからだ。そして、あの者も。」

「……まさか……！」

フードの彼女は辺りを見渡す。

そこに、もう一人同じような人物を見つけた。

フードの者を離し、カムイとミコトの側に駆け寄る。

「魔剣を捨てろ!!？」

「え……？」

だが、遅かった。

カムイの腰にあった魔剣が、暴れ出す。

それが宙に浮き、大きな闇を作り出す。

フードの彼女は地面に手を着き、魔法神を作り出す。

それとは、相反するような力がぶつかり合う。

そして、近くにいた人々を結界のような何かを守る。

宙に浮いた魔剣は爆発する。

その刃の欠片がカムイを襲う。

それを、ミコトが抱きしめて守る。

突き刺さった刃の破片は燃えて消えた。

ミコトは、カムイの腕の中で倒れる。

「無事……ですか……カムイ？どこも……怪我は……ありませんか？」

ミコトはカムイの顔に手を当てる。

「は……い……」

「良かった……た……」

ミコトの腕が地に落ちた。
カムイは見た。

彼女から、血がたくさん流れ出る。

自分の手にも、彼女の血がついている。

瞳を揺らす。

「……お母……様……お母様!!？」

カムイは、ミコトを抱きしめた。

ミコトの白夜を護る結界が消え、フードの彼女が作った結界も消えた。

サクラが、怪我をしたミコトに駆け寄ろうとするのを、リヨウマが止める。

そして刀を抜き、

「貴様、何者だ!!？」

フードの彼女が刃を向けていたものではなく、魔剣の力を暴走させたもう一人のフードの者を斬り裂く。

だが、それを簡単に避け、笑みを浮かべていた。

リヨウマの後ろで、フードの彼女は膝を着き、

「……ゴフ!!？」

血反吐を吐く。

そして、魔剣の刃の欠片をが腹に刺さったのを抜く。

それも、燃えて消えた。

アクアが彼女に駆け寄り、

「……ひどい怪我!!？」

サクラが駆け寄り、治癒をかける。

だが、そのサクラを突き飛ばして、

「……私のことはいい。構うな……」

そして、腰にあった剣を抜き、リヨウマに向けられた剣を受け止める。

「……必然を変えるのは、無理なのだよ。」

「それを打ち壊すために、私がいる！」

「お前では無理だ。何故なら、君もまた、私と同じであり……あの方の

望む破滅の一部なのだから。」

「黙れ!!？」

フードの彼女は、その者と刃を交える。

だが、再び彼女は血反吐を吐いた。

「ゴフ……!!？」

「……お前は、己を犠牲にし過ぎだ。そして、お前の中の呪いが、お前を殺す。後は、『カムイ』が墮ちるのを待つだけだ。さあ、あの方のために、その力を見せてみる。」

その者は、突如消えた。

リヨウマが、フードの彼女に近づき、

「大丈夫か。」

「白夜の第一王子……私を気にかける暇があったら、民を守れ。『カムイ』の……竜の暴走が始まる。」

そう言っつて、胸を押さえていた。

リヨウマ達は、カムイを見る。

カムイは震え出し、彼女の周りには禍々しいオーラが囲い出す。

そして、それがカムイを包み込む。

彼女の姿は人から、白銀の……いや、少し黒みがかった角の生えた四つん這いの竜へと変わる。

羽を広げ、角や尾を振り回して、家を、石像を壊す。

タクミは眉を寄せ、

「え……!!？あ、あれは……!!？」

「古の神……竜！」

リヨウマがハツとした。

カムイの竜の尾が、近くにいた家族に襲いかかる。

それを、フードの彼女が剣で受け止める。

「……やはり、理性を完全に失っているか……」

だが、力負けしているのはフードの彼女。

カムイの爪に裂かれそうになる彼女を、リヨウマが抱えて避ける。

リヨウマは気付く。

彼女の余りの軽さに。

そして、彼女に触れて感じる懐かしさと悲しみ。
自分の中にある罪悪感と後悔を。

カムイの暴走は続く。

そこに歌声が響き渡る。

「ユラリ〜、ユルレリ〜♪」

その暴走するカムイに、アクアが手を広げて歌を歌いながら近づく。

彼女の周りを、水が覆う。

リヨウマはフードの彼女を下ろし、アクアに駆け寄る。

「よせ！危険だ！！？」

だが、彼女の周りの水が彼を弾く。

彼女は歌い続け、カムイに近く。

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

彼女の胸元にあるペンダントが、光を放つ。

カムイはそれに反応し、恐るようには後退する。

アクアは優しく微笑み、彼女に近く。

カムイは咆哮をあげて、アクアを切り裂く。

「ぎゃあ！！？」

サクラの悲鳴が響く。

アクアの歌が止まり、倒れこむ。

しかし、再び彼女の歌が辺りを覆う。

そして、彼女とカムイを水が覆う。

カムイが、アクアの首を抑え込む。

アクアは、カムイの竜の手を優しく包み、

「殺してもいい……だから戻ってきて……」

カムイは震え出し、アクアを離す。

水がカムイを包み込み、彼女は人の姿へと戻る。

「記憶の封印は……もういらない。」

フードの彼女は小さく呟き、その場から立ち去る。

カムイが人の姿になり、頭を抱える。

カムイは思い出す。

あの日、何があったのか……

ーシユヴァルトウ公国に、父スメラギと兄リヨウマと共に出かけた。

カムイは、広場で噴水を見ていた。

すると、噴水の水がカムイに向かって襲いかかる。

そう、まるで何かの意志があるように。

「カムイ!!?」

それを兄リヨウマが、カムイを抱えてた。

そして、父スメラギが水を斬り裂いたのだ。

父スメラギはカムイを抱きしめた。

「カムイ……良かった……無事で!」

「父上様?」

その時だ。

父スメラギの後ろから、声が聞こえたのは。

「放て。」

そして、父スメラギの背の向こうから無数の矢が飛んできた。

父スメラギは、リヨウマを突き飛ばす。

「父上!!?」

だが、それと同時にカムイは、水の中に引つ張られた。

「くそっ!カムイ!!?絶対!に渡しはせぬ!我が愛しき子らを!!?」

それを、父スメラギが広い上げ、カムイを庇うように矢を受け止めた。

「愚かだな、白夜王スメラギよ。これは必然。全ては神の意志だ。」

父スメラギは、カムイの前で倒れ込む。

兄リヨウマが近寄ろうとするのを、フードを深く被った者が止めた。

「離せ!父上!カムイ!!?」

「お前を、死なせるわけにはいかない。」

そして、兄リヨウマの腹を殴った。

彼は膝を着き、お腹を押さえながらカムイを見る。
カムイは父スメラギを揺らす。

だが、彼は動かさず、血だけがたくさん流れ出る。

そして、カムイ自分の側に暗夜王お父様ガロンが居た。

カムイ自分の髪を掴み、

「お前だ。お前がカムイだな。お前は生かしてやろう。我が子としてな。くははははは！」

「兄さん！リヨウマ兄さん！助けて！父上様！！？」

カムイ自分は泣き叫びながら、二人を呼んだ。

けれど、それは虚しく散ったのだ。

カムイは地面に手をつけて泣いていた。

「お父様……父上様！！？」

「……カムイ、大丈夫？」

アクアが彼女を抱きしめる。

カムイもアクアを抱きしめ、

「すみません、アクアさん……私のせいで……怪我を。」

「気にしないで。私は、私にしかできないことをしただけよ。それに、私を傷付けたのは、あなたの中にある……神祖竜の血よ。」

「……え？でも、神祖竜は暗夜王族の……ですか？でも、私は白夜の生まれのはず……」

カムイが顔を上げる。

リヨウマが膝を着き、

「ああ。俺たち白夜王族も、暗夜王族と同じく神祖竜の血を引いている。暗夜の闇竜と対を成す、白夜の光竜の血だ。だが、竜の……神の姿になれる者など、神話の世界だけだと思っていた。」

「そうね……神祖竜の血を引く王族、中でも特に血を強く継ぐ者だけが、その姿を竜に変えられるというわ。」

アクアも付け足した。

カムイはハツとして、

「そうです！町の人たちは！！？」

辺りを見渡す。

家や広場はメチャクチャになり、倒れこんでいる人もいる。

「そんな……町が……！！？」

「……いいか、カムイ。これが暗夜王国のやり方だ。おそらく、あの魔剣を持たせたのは、暗夜王ガロンだろう。」

「はい……」

「畏だったのだ。全て……お前が危機を乗り越え、白夜に救われて城に着くことまでも……全ては奴の計画だったに違いない。そうやって、お前を送り込み……魔剣をもって、この国を……母を……」

「どうして……どうしてここまで！私……私はどうやって詫びたら……いいんですか……あの人に教えられていたのに……それでも、お父様から頂いた物だからと……手放せずに……私のせいで……」

「詫びて済むような話じゃないだろう!!?お前のせいだ……!!?やっぱりお前は、スパイだったんだ！お前が来たから、こんなことになったんだ！お前さえ現れなければ、母上も……町の人みんなも……!!?」

タクミはカムイを怒鳴りつける。

リヨウマは立ち上がり、

「おい、タクミ。よせ。」

「それは、今言っても仕方のないことよ。」

アクアはタクミを見る。

だが、タクミはアクアを睨み、

「うるさい！お前だって、同類だ！アクア!!?あんたも、カムイも、出て行け！この疫病神!!?」

「タクミ!!?」

リヨウマは、タクミの頬を叩いた。

リヨウマは拳を握りしめ、

「よく聞け、タクミ。カムイも、アクアも、俺たちの大切な兄弟姉妹だ。それに周りをよく見ろ。死者は……母上だけだ。町の者たちは、怪我こそしたが命には別状ない。あのフードの者が、護ったおかげだ。それに……母上も知っていたのだ。今日、この場で死ぬことを。そして、この俺も。」

「リヨウマ様の言う通りです。タクミ様。ミコト様は仰っていた。これは避けられない運命……必然なのだ。全ては、暗夜王ガロンの……いえ、もつと恐ろしい悪魔のなせる業と……」

こちらに歩いてきた軍師ユキムラが歩いてきた。
タクミは眉を寄せ、

「……なん……だって!?……なら、どうして、止めなかった!どんな理由があるうと、止めるべきだったんだ!」

「だが、これは母上の意志だ。タクミ、お前の気持ちは痛いほど分かる。だが、母上の気持ちを察すれば……お前だって分かるはずだ。」

「……くっ!けど!!?」

そこに、スズカゼが駆け込んできた。

膝を着き、

「失礼いたします!たった今知らせが……!」

「何があった!」

リヨウマはスズカゼを見る。

スズカゼは顔を上げ、

「国境より、暗夜王国の大軍勢が、白夜王国に攻め込んで参りました!」

「おのれ暗夜軍!!?」

リヨウマは刀に手をかけ、軍師ユキムラを見る。

「すぐに兵を率いて迎え討つ!準備せよ!!?」

「すぐに!」

軍師ユキムラは近くにいた兵に命じ始める。

カムイは拳を握りしめ、覚悟する。

彼女は立ち上がり、

「……私も行きます!行かせてください、リヨウマ兄さん!私は、確かめたいんです!今度こそ、自分の成すべき事を!!?」

「だが、カムイ。お前は武器を持たない。そんな状態で行けば、命に關わる!」

リヨウマは腕を組んで、カムイに怒鳴る。

それでも、カムイはジツとリヨウマを見続けた。

すると、破壊された中央の石像が光り出す。

否、その中央に刺さっている剣が光っていた。

カムイはそれを見て、

「黄金の刀……う？」

「……あれは……まさか、伝説の……神刀『夜刀神』か！本当に、この白夜王国に祀られていたのか！」

リヨウマは、驚きながら見た。

軍師ユキムラムも、再びやってきて付け足す。

「リヨウマ様が、スメラギ王から受け継いだ『雷神刀』。タクミ様が、ミコト様から受け継いだ『風神弓』。この二つが闘いの神を宿す武器だとすれば、その『夜刀神』は資格持つ者だけが手にできる、この世に救いをもたらす唯一無二の刀。それが、あそこにあつたなんて……」

「救いをもたらす刀……やとの……かみ……」

カムイはそれを見て、呟く。

そして、自分の中にどこか懐かしく、辛い感情が芽生える。けれど、自分はそれと同じくらいこの神刀と共に、何かをしなければならぬ。

そう思った。

その気持ちに伝えるかのように、剣が岩から外れて宙に浮く。そして、カムイの前に来たのだ。

カムイはそれを握ると、光は収束された。

「……『夜刀神』が、カムイを選んだ……!?？」

「まさか、カムイが……世界を救う英雄……?？」

リヨウマとタクミは、夜刀神を握るカムイを見る。

ヒノカとサクラも、カムイを見つめていた。

「カムイ……」「カムイ姉様……」

「……………」

そんな中、アクアだけはカムイを悲しく見守っていた。

——マークス達は三団体で動いていた。

その中で、自分達は兄弟姉妹は、馬を懸命に走らせていた。

カミラは飛龍だが、彼女も彼らと共に急ぐ。

「急ぐんだ、お前たち！このままでは、カムイが実の母を失う。そうなれば、カムイの竜の暴走が始まり、白夜王国は滅びる！」

「……マークス兄さん、気持ちには分かる。けど、兄さんらしくない。どうしたのさ。」

「そうだよ、マークスお兄ちゃん！カムイお姉ちゃんのお母さんが、危ないのはわかってよ。それに、お姉ちゃんの竜の暴走って？」

「それも、白夜王国が滅びるなんて……そう簡単には……」

レオン、エリーゼ、カミラがマークスを心配そうに見ている。

マークスは手綱を握りしめ、

「……今ならば、あの者のいう必然が何なのか分かる。私は見たのだ。カムイは……自らの意志とは関係なく、白夜王国を破壊する。そして、母親を失う。あの魔剣によって……これから先、あの子は我らの手を取れば白夜の兄弟姉妹きょうだいを失う。」

と、斜め前の方で、暗夜軍と白夜軍が戦闘しているのが見える。

「……暗夜軍が戦闘を行っているということは、白夜王国の王妃が死んだということ。すまぬ、カムイ！だが、これ以上失わせぬはしない！カミラ、レオン、エリーゼ！お前たちはこのまま進め！そして、カムイと合流するんだ！」

「兄さんは？」

「私は……白夜王国の第一王子リヨウマに会ってくる！」

マークスは馬を横に走らせて、戦場の方に行く。

ーカムイを逃がすため、囷となったジョーカー。

彼は、白夜兵を巻いてからはカムイの後を追っていた。

そして、カムイが白夜王国にいると聞き、白夜王国に入っていた。

フードで顔を隠し、カムイの居所を探る。

すると、話し声が聞こえて来る。

「ねえ、聞いた。」

「知ってるわよ！闇夜に攫われていた王女様が、帰ってきたのでしよう。」

「私は見たわよ。さつき、家族で買い物をしてらしたわよ。」

「ウソ!? あたし、見に行こうかしら？」

「やめなさいよ。やっと家族で過ごせるんだから！」

「そうね、そっと見守りましょう。」

ジョーカーは建物に隠れ、聞いていた。

『暗夜に攫われていた王女……？まさか、カムイ様か？だとしても、俺の心は決まっている。』

ジョーカーは、その買い物をしているという白夜の王族を捜していた。

そして見つけた。

楽しそうに、けれど少しぎこちない姿で買い物をしていたカムイの姿。

そこには、暗夜の兄弟姉妹きょうだいとは違う兄弟姉妹きょうだいの姿。

そして、母親らしい女性との触れ合い。

ジョーカーは、それをそつと見守った。

たとえカムイが暗夜の王族でなくても、自分はある方に仕える。

そう彼は、あのとき決めた。

暗夜ではなく、カムイ自身に仕えることを。

たとえ、この手が汚れても、どんなに蔑まれても、あの方の為に生きる……

その翌日だった。

カムイの持っていた魔剣が爆発し、彼女の母の命を奪った。

彼女はその悲しみに飲まれ、その姿を竜と化した。

ジョーカーは瞳を揺らし、駆け寄ろうとした。

けれど、あの優しきカムイがこれ以上誰かの命を、己のせいで失ったと知ったらどれだけ悲しむか。

ジョーカーは、白夜の人間を助けることにした。

そして、カムイを止めてた歌姫の少女に感謝した。

だが、悲しみに包まれていた中、彼らは動く。

攻めてきた暗夜から、この白夜白国を守るために。

ジョーカーも動く。

カムイを守るために。

彼女がこれ以上、大切なモノを失わぬように。

リリスは亡くなったミコトの側により、

《ミコト様……約束は守ります。何があっても、カムイ様の側に……》
リリスは涙を拭い、カムイの側による。

アクアはカムイにあるひし形の宝石の球を渡す。

「カムイ、これを。」

「これは？」

「それは竜石。あなたの中の、竜の血を抑えるもの。使い方に慣れれば、竜化もできるようになると思うわ。」

「そう、ですか……。これは、リリスさんとは少し違うんですね。」

カムイは、近付いてきたリリスの抱える竜石を見る。

アクアもそれを見て、

「……そうね。その子のそれは、その子の為だけの竜石。それは誰から？」

カムイはリリスをジッと見てると、リリスは頷く。

カムイはアクアを見て、

「これは、フードの者です……。えっと、女の方の方です。色々言ってくる人の方です。見た目的には強そうではないですが、物凄く強い方なんですけど。」

「……そうね。その人が誰かは分かったわ。そう、彼女が……」

アクアは少し間をあけてから言った。

アクアの中では少しだけ、彼女を同情していた。

無論、それはリリスも、である。

リヨウマが馬に乗ってやって来た。

「カムイ、お前はヒノカたちと共にいるんだ。俺は馬で先に行く。」

「は、はいーリヨウマ兄さん！」

リヨウマは馬を走らせる。

カムイ達も、国境に向かって動き出す。

ーフードを深く被った少女は、白夜軍と暗夜軍の戦闘を見ていた。
それは探していたからだ。

白夜王国の第一王子リヨウマと暗夜王国の第一王子マークスを。

彼らが刃を交えるのを待っていた。

あの白夜王国の炎の広場で、受けた腹の傷を抑える。

そして、見つけた。

二人は刃を交えていた。

彼女は動き出す。

リヨウマとマークスは迎えあっていた。

「俺の名は、白夜王国第一王子リヨウマ！」

「……私の名は、暗夜王国第一王子マークス！」

「俺は、貴殿に一騎打ちを望む！」

「ああ……受けよう！」

二人は剣を構え、幾度と刃を交える。

マークスの後ろでは、暗夜軍が白夜軍と戦っている。

彼と話せる絶好のチャンス。

だが、これではマークスは彼と話せない。

その二人の間に、フードを深く被った少女が左手に長い剣と右手に短剣を持っていた。

それで、マークスの剣を長剣で受け止め、短剣でリヨウマの刀を受け止めた。

「お前は!!?」「貴様!!?」

二人は、そのまま彼女を見た。

彼女はその状態で、

「この状態で話を聞け。白夜の第一王子、暗夜の第一王子には監視が付いている。故に、私を通して話せ。」

マークスはジツと、リヨウマを見る。

「そういう事か。感謝する……リヨウマ王子、私は暗夜王ガロンを討つ。」

「な……に?」

「我が父は、もうこの世にはいない。今、暗夜にいるあの王は……父の姿をした何かだ。だが、あの偽物を打ち倒しただけでは意味がないのだ。暗夜と白夜、双方が力を合わせぬ限り。」

「……それを、信じろと言うのか。」

「私は、知っている。暗夜と白夜が手を取り合っている未来を。共に戦える未来を。」

マークスは目をそらさない。

リヨウマも、この意味がわかる。

彼の目に、嘘はない。

「……すぐに信用してくれとは言わない。だが、どうか頼む。」

と、フードの少女が血を吐く。

リヨウマは彼女を見て、

「やはり、あの時の傷が！」

「……気にするな。ここまで来たのなら、教えておく。貴殿らの仲間の中に、敵はいる。だが、その者は気付いていない。その者の目や耳を使つて、奴は貴殿らの情報を得ている。あいつは心に宿る。心の闇に。だがからこそ、お前達ならば気づけるはずだ。守り通してみせろ。国も、民も、兄弟姉妹も、きょうだい家臣も……。その為に、私はカムイを拐う。」

「なんだと☒」

「……真の敵は、カムイという名の器が欲しいのだ。生きていようが、死んでようが関係ない。本人に自覚させる為にも、一度見えない敵を目視させる必要がある。そして、貴殿らに意志があるのであれば、汝らにもそれを見せれるようにする。だが、今は危険だ。だからこそ、敵同士であるフリをしろ。白夜の第一王子、カムイをこの場で救いたいのなら、私に従え。そして見極めろ。真の敵を。暗夜の第一王子、機会を見誤るな。忘れるな、敵の目と耳はすぐ側にある。そして拐う合図は、カムイの選択のとき。」

そして二人の剣を弾く。

距離を開け、

「聞け！ 白夜王国の兵よ！ 暗夜王国の兵よ！ 汝らの敵を見誤るな！ 汝らの選択が、世界の破滅を呼び寄せる！ 見極めろ、汝らの大切なモノの為に!!？」

彼女は地面に手をつき、白夜と暗夜を岩で別ける。

それは大きな壁へと変わっていく。

マークスはリヨウマが見えなくなる前に、

「リヨウマ王子、もし我が話を信じてくれる時はカムイを使ってくれ。私たちにとっても、カムイは大事な兄弟姉妹きょうだい。それは、貴殿らも同じだろう。たとえ……血が繋がっていなくても。」

「……貴殿は何を知っている。」

「私は夢を見たのだ。そして知った。彼女のいう必然を。彼女のいう私の大切なモノたちのことを。貴殿もまた、私と同じ。私は、あの子にかけてしまった鎖を解き放ちたい。あの子の……笑顔を取り戻したいのだ。そして、あの夢のような未来を、時間を取り戻したいのだ。きつと、貴殿にも分かる。貴殿は、そういう男だ。」

そう言っつて、マークスはリヨウマからは見えなくなる。

マークスは後ろを振り返り、叫ぶ。

「一旦引くぞー！態勢を整える！」

そして、馬を走らせる。

リヨウマは、マークスの言葉の意味を考える。

もしかしたら、自分が見た夢と近いものを見たのかもしれない。

リヨウマは振り返り、叫ぶ。

「一旦引くぞー！態勢を整える！」

リヨウマは馬に乗り、駆ける。

彼らはカムイの元へ集う。

運命の選択が近付いていた。

それと同じだけ、破滅への道が進む。

彼らが、選び取るのはどちらか。

救世か、破滅か……

第八話 選択のとき

黒き国の王子は想い馳せる。

懐かしき、少年時代を。

自分の憧れた王^父の姿を。

幼き頃、自分には沢山の異母^{きよ}兄弟^う姉妹^だがいた。

そして父には多くの妻がいた。

父は優しかった。

自分の母エカテリーナ以外の妻は、無理やり父に嫁がされた。

名のある貴族の娘たち。

父が彼らを拒めば、国は落ちる。

父は全てを愛していた。

子も、妻も。

自分は、そんな中生まれた。

正妻の子として、真の跡継ぎとして、第一王子として。

自分は、周りの大人達の望む姿でなくてはいけない。

けれど、自分はそれが苦手だった。

剣も、王族としての振る舞いも。

そんな時、父が自分の頭に手をやって撫でた。

「よいか、マークス。お前は皆の為に頑張ねばならぬ。」

「ですが、父上……私には……」

「お前しかおらぬのだ。お前が兄弟^{きょうだい}姉妹^{だい}を守らねばならぬ。お前のや

りたいように、お前の想うがままに進めばよい。」

そう言つて、腰にあった剣をくれた。

神器『ジークフリート』、父が王位を継がれた時に先代から受け継い

だモノ。

それを自分にくれたのだ。

それを大切に握りしめ、

「……父上……わかりました。私は努力します！」

この日、自分は決めた。

この王^父のようになりたいと。

けれど、周りの大人達の醜い争いは続く。

自分は異母兄弟姉妹達との交流を試みても、周りが許さなかった。異母兄弟姉妹達の母による父へのアプローチ。

彼らは、自身の子を使う。

次第に、母の様子がおかしくなった。

まるで何かに囚われるかのように、魘された。

そして、あつという間に死んだ。

父は悲しみに溢れ、王城からよく抜け出しては湖で泣いていた。

ある日、父がシユンメイと言う女性を連れて来た。

父の第二の正妻として。

彼女を愛し、けれど、どこか儂げに接する。

彼女には子がいた。

父の子だと。

彼女の子は、酷い仕打ちをされた。

多くの大人に、異母兄弟姉妹達に。

何もできない自分が悔しかった。

そして父はあの日から、おかしくなったのかもしれない。

新しく入ってきたあの女性が、亡くなった。

遺体はなく、父はまたしても悲しみにくれた。

その日から、暗夜の王の周りは災厄が襲う。

他の妻達が次々と亡くなり、子らは王位争いを始めた。

自分も、それに巻き込まれていった。

争いが終わり、残った異母兄弟姉妹と共に、自分は歩んだ。

すぐには仲良くはなれなかった。

けれど、兄弟姉妹なのだ。

自分は諦めず、父の言葉を信じて歩む。

妹は愛情深い子で、他の兄弟姉妹も大切にしている。

弟は聡明だった。

自分にはない、才能に溢れていた。

その実力故に、暗夜のもう一つの神器『ブリュンヒルデ』を継承した。

末の妹は元気だった。

王位争いをしていた頃、彼女は赤子だった。

だからこそ、彼女の笑顔はこの暗き国の光だった。

そしてあの事件が起きた。

シュヴァルトウ公国で父は白夜王を殺し、白夜王国の王女を誘拐した。

彼女の恐怖と悲しみに満ちた、あの顔が忘れられない。

自分は彼女の元へ何度か様子を見に行っていた。

彼女には記憶の混乱があり、自分を白夜王国にいる兄と間違えていた。

次第に、妹達も遊びに来るようになった。

当時、彼女の遊び相手としていた少年が彼女を外に連れ出した。

それが悲劇を生んだ。

彼女は白夜の忍びと出会い、記憶を思い出す。

自分を見る彼女の目が変わった。

恐怖や悲しみに満ちたあの瞳。

そして、帰りたいと望む彼女への想い。

私は躊躇してしまった。

白夜の忍びが彼女を連れ出す。

けれど、それは罠だった。

自分がそれを知り、駆けつけた時にはもう遅かった。

彼女の記憶と心は完全に壊れ、放心状態が続いた。

自分は決めた。

この子の兄になる事を。

彼女は時折、思い出す。

あの日の悲劇を。

怖いと言って恐怖し、泣き出す。

けれど、夢は覚えていない。

彼女の頭を撫で、

「……大丈夫だ、カムイ。お前の怖がるお化けは、私が退治しよう。側において、お前を守ってやる。」

自分は彼女のそれを打ち切るため、彼女の部屋の下で鍛錬するようにした。

それが彼女の心を安心へと導いたかはわからない。

けれど、これは自分にとっての事でもあった。

父の変貌ぶり。

あの優しい父が、国を、民を平気で犠牲にするようになった。

恐ろしかった。

認めたくはなかった。

いつか、元に戻ると信じて……

彼女が剣を持って、鍛錬を共にやるのは楽しかった。

嬉しかった。

けれど、それと同時に恐れた。

彼女の体を。

まるで呪いであるかのように、時折体が弱くなる。

熱を出せば、そのままどこかへ連れて行かれてしまう。

もう会えなくなるのではないかという恐怖。

それくらい、彼女は脆く、病弱であった。

父が白夜王国への進軍を本格的に決めた。

あの子の故郷。

そして父は、あの子も使うと言った。

あの子に、自身の故郷を襲わせると……

あの子を守りたい。

けれど、自分は父を信じた。

いや、信じたかった。

あの子が父から魔剣をもらった日、夢を見た。

あの子が、これから行く国境の偵察。

白夜王国の兵が待ち伏せしているのを。

不安に駆られた。

そして、本当に白夜王国の兵がいると知らせが入った。

夢は続いた。

これからのあの子の選択。

白夜王国の手を取れば、あの子は暗夜の敵となり自分の前に現れる。

自分と末の妹の命、そして父の命を元に、彼女は平和をもたらす。暗夜王国である自分達の手を取れば、あの子は故郷である白夜の敵となる。

愛しき兄弟姉妹達に剣を向け、兄と弟の命を奪った。

多くの白夜の者達の命を奪った。

そして、教えてくれた。

あの父が偽物だと。

そして彼女は平和をもたらした。

自分たちの手もとらず、白夜の手もとらないあの子の姿があった。

見えない敵、それらと立ち向かう。

両国の手を借りて。

けれど、この夢は曖昧だった。

だが、覚えている。

暗夜と白夜が手を取り合い、共に戦い、平和をもたらす。

あの夢のような時間。

けれど、その未来の先は破滅へと続いていた。

本当の敵を倒さねば、平和への道はこない。

滅びゆく世界で、彼女の悲しみの顔を覚えている。

泣きながら、謝る彼女の姿。

約束を守れなかったと、泣くあの子の姿を……

——カムイはヒノカ達と共に、国境前の平地へ向かっていた。と、横の方から暗夜兵が襲って来た。

カムイ達はそれを撃退する。

が、カムイの背後に敵が迫る。

「カムイー！」

ヒノカが叫ぶと共に、カムイの前に一人の男性が立つ。

そして、カムイを襲いかかる暗夜兵を短剣で斬り裂いた。

「カムイ様ー」無事ですか！」

「ジョーカーさん!?!?」

「合流が遅くなり、申し訳ありません。このジョーカー、只今よりカムイ様に従います!」

カムイは目の前に現れた彼を見る。

それは、ジョーカーだった。

ヒノカが薙刀を彼に向け、

「貴様、暗夜の者だな!」

「ま、待ってください、ヒノカ姉さん!彼は、大切な仲間です!」

「な、なにがだが、カムイ!」

「私は、ジョーカーと申します。我が主人、カムイ様の姉君であるヒノカ王女ですね。私は、カムイ様が暗夜の城にいた頃に使っていたものです。カムイ様が暗夜の王族ではなく、白夜の王族と言うのは先ほど聞きました。この私が怪しいと思うのであれば……どうぞ、殺して下さい。この命は、カムイ様のために捧げています。」

ジョーカーは、ヒノカの前で頭を下げる。

ヒノカは薙刀を引き、

「わかった。お前を信じよう。だが、もしもカムイを裏切るような真似をすれば、躊躇いなく斬る!」

「はい。それで構いません。」

ジョーカーは顔を上げる。

そして、彼らは国境前の平地へとやって来た。

遠くから、暗夜軍が見える。

沢山の兵を率いて。

その中に、暗夜の兄弟姉妹の姿があった。

彼らの到着と同時に、マークスとリヨウマも到着する。

マークスはリヨウマを少し見た後、カムイを見る。

「無事か、カムイ。よく生きていてくれた。」

「マークス兄さん!どうしてこんな戦争を!!?」

カムイは拳を握りしめて、マークスを見ていた。

その瞳は怒り。

けれど、まだ信じたいと言う気持ちが見える。

マークスは、その目を受け止める。

手綱を握りしめ、

「……さあ、行くぞ、カムイ。父上が、お前の帰りをお待ちだ。我らに加わり、白夜を討つ。お前が加われれば、戦いなどすぐ終わる。無駄な犠牲を出さずに、白夜王国を征服できるだろう。」

「マークス兄さん……私は……」

カムイは視線を落とす。

リヨウマは馬から降り、カムイの前に立つ。

「……気をつけろ、カムイ。この男は暗夜王国の王子だ。」

「リヨウマ兄さん……」

カムイは顔を上げる。

カミラがカムイを見て、

「ああ、カムイ……あなたが無事で良かったわ。だからお願いよ。私たちと共に来て。」

「本当だよ、カムイ姉さん。無事で良かったよ。やっぱり、悪運が強いね。」

「お願い、カムイお姉ちゃん！ 私たちと共に行こう、ね？」

カムイは泣きそうな顔で、彼らを見る。

ヒノカが怒りながら、

「何を言う！ 妹をさらった暗夜の者め！ カムイは、私の妹だ!!？」

「……けれど、私の妹でもあるのよ。何があっても。だから、誰にも渡さないわ。」

カミラはジッとヒノカを見据えた。

二人は睨み合う。

リヨウマは刀を抜き、

「……騙されるな、カムイ。お前は、俺たちの家族だ。」

「戻ってこい、カムイ！ また兄弟姉妹きょうだい一緒に暮らそう。」

そうやって、二人はカムイを見る。

そして叫ぶ。

「カムイ!!？」

カムイは周りを見る。

白夜軍と暗夜軍に囲まれた中央。

白夜の兄弟姉妹きょうだいと暗夜の兄弟姉妹きょうだいが自分を見つめる。

兄二人が自分に手を差し出す。

カムイはさらに手を握りしめる。

「私は……私は……決められません。だって……私は……」

「それでいい。」

突如、フードを深く被った少女が目の前に現れる。

「……高位魔術！姿を消して、ずっとそこにいたのか」

レオンが驚いて、彼女を見ていた。

そのフードの彼女は、カムイの腹を肘で打つ。

「うっ」

「カムイ様！」

ジョーカーが武器を構えるが、

「……ちようどいい。お前が運べ。」

「は」

「ふざけてない。」

フードの彼女はカムイをジョーカーが突き飛ばし、腰の長剣を抜く。

ヒノカの薙刀を防ぐ。

「貴様！」

「……白夜の第一王女。あの貴殿が、何を持ってその武器を持つのか知っている。だが、貴殿が自分を責める必要はない。」

そう言つて、薙刀を押しやり、蹴り飛ばす。

「くっ！」

「ヒノカ！」

リョウマが受け止める。

フードの彼女は、タクミの矢とレオンの魔術を斬り裂き、ジョーカーの横に立つ。

側にいたアクアの手を引き、

「……ついでにあなたも、もらって行く。」

彼女は魔術を練る。

そして、それを川に向かって放つ。

「くっ！全員後退！」

マークスは後ろの兵達に命じる。

そして、馬を走らせる。

リヨウマも、兵達を見て、

「我らも後退！高台へ行け！」

ヒノカを抱えて、リヨウマは走り出す。

フードの彼女はカムイを抱えるジョーカーを掴む。

「……さて、禁忌の国へ行くぞ。」

川の水が、彼らを飲み込む。

ジョーカーは、カムイを抱きしめた。

第九話 透魔王国

歌姫は願ひ続ける。
やり続ける。

自分にしかできない事を。
今の自分ではない自分。
何度も繰り返し返される悲劇。

失う大切なモノたち。

家族、仲間、絆……

いつかそれらを乗り越え、またあの日々を取り戻したい。
口にははいけない。

自分の気持ちを殺して過ごす日々。

想いが溢れ、どんなに辛く悲しかったか。

けれど、自分は泣き言は言えない。

立ち向かう彼女を知っているから。

自分は、彼女とともに幾度となく立ち向かった。

自分にかけられた呪いも、残された時間も、恐れずに。

本当は怖かった。

けれど、彼女の成長を見れば怖くない。

それがあれば、自分は進める。

自分の信じる未来を。

彼らと約束した未来を、願いを、想いを。

あの子を守ると、見守り続けると……

ーフードの彼女の魔術で、水に飲まれた彼ら。

だが、すぐに感覚が軽くなる。

「……私の加護の力だ。」

彼らを水の膜が覆う。

そして、水の中を移動していく。

膜が消えて、地面に立つ。

ジョーカーは驚いた。

そこは空中都市のような場所。

青い空と白い雲に覆われている。

そして、空中にも岩のような大陸が浮いていた。

けれど、建物のほとんど破壊され、廃家と化していた。

木々も、あるところは枯れ、岩が丸出しの所もある。

この国は歪だった。

彼女は、近くの洞窟へと入っていく。

彼女が連れてきたアクアも、その後ろに続く。

ジョーカーはカムイを抱えて、後ろに付いてく。

ひとまず、岩場に横にさせる。

彼女が火を焚き、辺りを警戒していた。

アクアは、カムイの側にいるリリスを見て、

「大丈夫よ、リリス。カムイは眠ってるだけだから。」

それを聞いたジョーカーは、

「は？……いえ、失礼しました。あまりにも、聞き慣れた名でしたので。」

「一つ言っておくが、その子竜は考えていた人物で間違いない。元は竜の子だからな。」

フードの彼女は言う。

ジョーカーは、笑顔を保ったまま、

「……私の知るリリスは、人間です。しかも、竜!?? そんな馬鹿な……」

《本当ですよ、ジョーカー様。》

「ぐっ！この声は、確かにリリス。カムイ様は知っているのか？」

「むしろ、その姿にならなければ、死んでいたところだ。で、なぜ今になって喋ることにしたのだ？」

《……この地に入ってしまったからです。本来なら、私からは何も言いません。けれど、あなたからはお父様の匂いがあるので。そして、アクア様は歌姫でした。それに、あなただから、です。》

「……そう、か。やはり気づいていたのか。だが、話すな。」

《ええ、わかっています。あなたが私の秘密を知るように、私もあなた

の秘密を知る。ふふ、面白い関係ですね。》

「……そうだな。」

二人だけの会話が続いた。

と、ジョーカーは彼女を睨んで、

「で、ここはどこなんです。」

「……ここは透魔王国よ。」

彼の問いに答えたのは彼女でなくアクア。

ジョーカーが眉を寄せ、

「……透魔王国？聞いたことないですね。」

アクアは燃える火を見つめ、

「当然よ。失われし、国の名ですもの。そして、呪われた国。」

「申し訳ありません。言ってる意味が、よくわかりません。」

ジョーカーはさらに眉を寄せた。

と、カムイが目を覚ます。

「ん？ここは？」

「カムイ様！良かった！」

「ジョーカーさん。えつと……どういう状況ですか？」

「……そうね。詳しく教えてあげる。けれど、それは私より、あなたの

口からの方がいいと思うの。」

と、アクアはフードの彼女を見る。

フードの彼女は少し黙っていた。

けれど、口を開く。

「……知っていて、私が話すのか？」

「ええ。だってあなたは……いえ、だからこそ、私はあなたから聞きたい。

私は全てを知ること、あなたの知る全てを、あなたから聞きたい

の。」

アクアはジッと彼女を見つめた。

フードの彼女は諦めたように、

「……分かった。全ては今言えないが、少し話そう。さつきも言われていたが、ここは透魔王国。簡単に言えば、お前達のいた世界とは異なる時空に存在する異界の地。竜の加護がある国だ。いや、こう言え

ば早いのか。全ての竜の生まれ故郷。その子竜も、元はこの出身だ。そして、この国は竜の呪いで滅んだ。この国の王は、加護せし竜とは友であったのだ。けれど、加護せし竜は人が信じられなくなっていった。そして、己の中の竜の血が暴走しだした。加護せし竜は、友であった王を殺し、国を滅ぼし、呪いをかけた。加護せし竜は、精神を操る。民を互いに殺し合わせた。奴の力は、死人ですら操る。だからこそ、民達は竜を恐れ、従う。この国の大地は恩恵が消え、荒れて……そうやって滅びた。」

フードの彼女は拳を握り、

「白夜と暗夜の神祖竜も、元はここに居た。この国の加護せし竜とは違い、双竜は人間に己の血を与え、竜の力を与えた。それが子をなし、子孫となりて王となってきた。それが今の白夜と暗夜だ。この国がまだ滅ぶ前、若かりし頃の白夜王スメラギと暗夜王ガロンの時代まで、ずっと交流を持っていた。と言っても、交流があったのは王たちだけだ。白夜と暗夜を結ぶ中心……今は無限溪谷のある場所。あそこにかつてはこの透魔王国に繋がる門があったのだ。けれど、先言っていた事が起こったために、門も破壊され、その交流も絶たれた。私は竜の呪いを考え、白夜と暗夜の元にある透魔の情報は消した。」

「……その呪いとは？」

カムイはグツと息を飲む。

フードの彼女はカムイの方を見て、

「この国以外で、この国の事を話せば泡となって死ぬ。」

「……え？」

「だから、この国の事は、この国に入らなくては話せないのだ。さらに厄介なのが、この国の事を知らない者には見えないのだ。この国の竜によって支配された兵が。故に、白夜や暗夜はそれに気付けない。」

「……兵の事を教えたくても、見えてる人は呪いで言えない。そういう事ですね。」

「そうだ。だからこそ、私はあえて気づかせるために動いてきた。透魔兵を魔術で潰していく事で、鋭い奴は気づく。そこに、見えない何かがいると。」

「……えっと、この国の竜はそれ程に凄いですか？加護してたと言うくらいですから。」

「……ああ。この国の加護せし竜の名は、『ハイドラ』。もうほとんど理性は残っていない。あるとすれば、世界の破滅のみだ。それこそが、奴の目的。その為に、この国だけでなく白夜や暗夜に手を出した。全ての裏にあいつがいる……そう、彼らも……」

フードの彼女は拳を握り締める。

カムイはその姿を、彼女のこれまでの行動を想い、

「教えてください。何故、あなたはそこまでして戦うのですか？確かに、あなたはこの国の出身の方です。けれど、一人で戦い続けるなど……」

「……約束だ。」

「え……？」

「大切な人たちと約束したからだ。その約束を果たす為なら、何を犠牲にしたって、私はやり遂げる。その為の覚悟はどうにしている。だが、お前にはその覚悟がない。」

「……確かに、そうですね。私は中途半端です。でも、私は白夜も暗夜も救いたい。きつと手を取り合って、共に居られる……そう思うんです。」

カムイは視線を落として、眉を寄せた。

フードの彼女は立ち上がり、

「それは可能だ。だが、大元をなんとかせねば、来るのは破滅だ。だからこそ、お前は覚悟を決めろ。救える命と救えぬ命。それを受け止めるだけの覚悟を。」

カムイは俯いたまま黙り込んでいた。

フードの彼女はアクアの耳元で、

「……黒き騎士に気をつける。あれはすでに飲まれた。その前になんとかしたかったが、間に合わなかった。」

「……そう。分かったわ。あなたはどうするの？」

「待ち人に会いに行く。あの秘密の小屋を知っているか？」

「ええ、知っているわ。」

「……では、そこで再び合流しよう。」

フードの彼女は立ち去った。

アクアはカムイを見て、

「……そろそろ移動しましょう。ここも長居はできないから。」

「わかりました。」

カムイ達は移動を開始した。

フードの彼女は道無き道を進む。

岩陰に隠れながら移動していく。

そして、小さな穴へと入る。

「……やあ、おかえり。」

彼女の前にはフードを被った男性がいる。

彼のフードからは、髪が少し出ている。

その髪の色は青。

声でもわかる優しき男性。

「お前の子供が、こちらにきている。会いたいか？」

「……会いたいけど、今はやめておくよ。君のおかげで、私はここにいます。私のなすべき事を見定めてからでも、遅くはない。」

「そうか……。だが、移動するぞ。奴にここが見つかった。」

「わかった。」

フードの彼女は彼を連れて移動する。

その数分後、彼らが先ほどいた所には、透魔兵達が押し寄せて来たのだった。

カムイ達は洞窟内を歩いていた。

アクアはカムイを見て、

「カムイ、さっきの彼女の話は本当よ。実を言うとね、私も、私の母も、私の父も、この透魔王国の出身なの。」

「……え？でも、アクアさんは……」

「私は暗夜の人間でも、王族でもないわ。彼女の言ったこの国の王にして、加護せし童の友だったのは……私のお父様。私は、この透魔王国の王女だったの。」

「……じゃあ、アクアさんは国を追われて……」

「そうなるわね……。誰にも話せないのは、辛かったわ。この国を誰かに言って、助けを求めたかった。けれど、呪いのせいでそれもできない。いくら両親が恋しくても、故郷が気ががりでも、この国の民達を想っても、口にするには許されない。自分の気持ちに蓋をして生きる日々。今までずっと……。それは、きつと彼女も同じ。」

「アクアさん……」

「だからこそ、彼女の意志は強い。その思いも半端なく強い。カムイ、あなたもまた選ばなくてはいけない。これから先の未来を。あなた自身の答えを。」

「……はい。私も、覚悟を決めます。私は白夜も、暗夜も、救いたい。そして、この透魔も救いたい。」

「なら、なおのこと覚悟が必要よ。カムイ、私はあなたと共に未来を掴むわ。」

アクアは小さく笑う。

今まで黙って聞いていたジョーカーとリリスも、

「カムイ様、私は何があつてもあなたと共に。この命はあなたの為に。」

《私も、です。カムイ様、私もこの故郷を救いたい。父の思いに応えたい。その為にも、私はあなたと共にいきます。》

カムイは拳を握り、

「はい。みんなで、頑張りましょう！私も、みんなを守れるように強くなります！」

「……ふふ。そうね、みんなで頑張りましょう。」

笑顔だったアクアの表情が変わる。

「……いけない。敵が近くにいるわ。気をつけて！」

アクアが薙刀を構える。

彼女のの前からは、兵達が数人やって来る。

カムイも剣を抜き、ジョーカーも短剣を抜く。

《カムイ様、彼らは死人です。気をつけてください！》

「わかりました！」

カムイ達は戦闘を始める。

カムイ、アクア、ジョーカーは敵を斬り裂きながら進む。
そして、走り出す。

「この人数でまともに殺りあっていたら、こちらが不利なるわ。ここは、ひたすら走って！戦闘は最小限に！」

「は、はいー！」

カムイ達は、前にいる兵達をなぎ倒して行く。

少し広い所に出ると、彼らは囲まれた。

「くっ！カムイ様、どうしますか。」

「……アクアさん、投降するのはマズいですよね。」

「そうね。彼らにしてみれば、生死は関係ないもの。でも、ここを抜ければ目的の場所まですぐなのだけれど……」

彼らは背中合わせで、身を守る。

カムイが竜石を取り出し、

「……私が竜になってなぎ払ってー」

「それはダメよ。あなたもよ、リリース。ここで竜の力を使えば、ハイドラにバレてしまう。こいつらは、あくまでこの場所に迷い込んだ者を排除する為にいるだけ。まだ、ハイドラには完全にはバレていないわ！」

リリースが竜の力を使おうと考えていた。

だからこそ、アクアが先に止めた。

ジョーカーが、視線だけをアクアに向け、

「では、どうするのです。この敵を全て薙ぎ払うのは無理ですね。あともう一人、強いお方がいれば……！」

ジョーカーは襲い掛かる兵を斬り裂く。

と、奥の方から馬の鳴き声が響き渡る。

そして、敵に槍が突きつけられて、吹き飛んだ。

その姿を見たカムイ、ジョーカー、リリースは、

「ギンターさん☒」「ジジイ!?!?」《ギンター様!!?》

「カムイ様、ご無事で何よりです。」

槍を構え直したギンターが、カムイを見る。

「ど、どうしてここに？いえ、それよりも無事でよかったです！」

「いやはや、自分も、もうダメかと思いましたよ。この洞窟内で迷っていたところ、聞き慣れた声が聞こえてきたもので。馳せ参じました。さて、私が先陣を切りましょう。いけるな、ジョーカー。」

「誰に言ってるよ。」

彼らは武器を構え直す。

そしてギウンターを先頭に、この場を駆け抜ける。

外に出て、アクアに案内された小屋で一行は落ち着く。

「でも、本当に無事でよかったです、ギウンターさん。」

「それはこちらでもありますよ、カムイ様。しばらく見ない内に、ずいぶんとお強くなつて……。さて、ここはどこで、どういった状況でしょうか？」

「はい。ここは、透魔王国という見えない異界の国です。この国を今支配しているのは、ハイドラという竜だそうです。そして、この国のことはここ以外では言えません。言うところ、竜の呪いによって泡となつて消えてしまいます。私たちが襲っていたのは透魔兵で、リリースさんが言うには、死人らしいのです。ハイドラは、心を操るそうなんです。しかも、死人ですら操れる。そのハイドラという竜を倒さない限り、白夜と暗夜に平和は訪れません。」

「……成る程。そちらのお嬢さんが、アクアさんですね。もしや、暗夜王国の王女ではございませんか？以前、お会いしたことがあります。ですが、リリースはどこに？」

「あ、はい。この子ですよ。」

と、カムイは抱いていた子竜を見せる。

ギウンターは沈黙ののち、

「……………申し訳ございません、私の知るリリースとは違ったみたいですね。」

《いえ。あつてますよ、ギウンター様。私は人間ではなく、竜の子なのです。》

「……………むう、この声は確かにリリース。なんとも、色々なことがありますな。」

ギウンターは頭を抱えた。

アクアは一步前に出て、

「……初めまして。いえ、お久しぶりと言うべきなのかしら……。でも、私は一応、暗夜王国の王女ということになっているけれど、私はこの透魔王国の王女よ。残念ながらね。」

「それは申し訳ございません、アクア様。言葉が過ぎました。そして暗夜にいた頃はお守りできず、誠に申し訳ございませんでした。」

「気にしてないわ。」

頭を下げる彼に、アクアは小さく笑う。

ジョーカーがギウンターを見て、

「チツ。ジジイ、カムイ様から少しだが聞いていた。心配していた、この俺の時間を返せ。」

「……ふん。その減らず口は、相変わらずだな。もう少し、ましな言葉はかけられんのか。」

「は。いいか、ジジイ。色々と危険な国だ。くれぐれも、気をつけろよ。」

「言われなくとも、わかっておるわい。」

「すみません、ギウンターさん。おそらく、辛く苦しい戦いになります。白夜と暗夜の協力も得なければなりません。それでも、私たちについて来てくれますか?」

「はい。お供します。このギウンター、いつまでも貴女様と共に……」

「ありがとうございます、ギウンターさん。」

「いいえ、お礼は不要です。これで、ここで彷徨い生き延びた甲斐があるというもの。それにしても、あのガンズも大したことはありませんでしたな。落とされはしましたが、この通り私はピンピンしております。」

「あ、そういえば……ガンズさんは言っていました。ギウンターさんを急襲したのは、ガロン王の命令だったと。でも、どうして……」

カムイが眉を寄せる。

と、そこに扉をコンコンと叩く音が聞こえた。

ギウンターとジョーカーが武器を構える。

「……私は、この世の闇を知る者。真実を知る一人。」

「……いいわ、入って。」

アクアがそう言うと、フードを深く被った少女が入ってくる。

カムイがパツと明るくなつて、

「良かった、無事ですね。」

「……何かあったか？」

「……敵襲があったわ。」

「そうか。」

そう言つて、フードの彼女はギユンターの方を向く。

「……………」

「私は、ギユンターと申します。カムイ様の従者をしております。以後、お見知りおきを。」

「……カムイと復讐、どちらを選ぶ。」

「……え？」

カムイは、フードの彼女の言葉に反応した。

ギユンターは苦笑して、

「……ふう。カムイ様、先程のお話ですが、恥ずかしながら……私は、ガロン王に恨まれているのですよ。」

「恨ま……れている？」

「はい。かつて戦場で、幾多の武勲を立てた私は、ガロン王に謁見を許されました。そして、王から竜の血を賜る機会を授けられたのです。それは大変な栄誉でした。王を守る最高位の騎士となれるのですからな。……ですが、私は固辞しました。故郷の街に妻と子がいたからです。私とその役目につけば、家族とは今まで通りには暮らせない。私は平凡な一生を送りたい……ですから、お許しくださいと申しました。あの時のガロン王の憤怒は、今でも忘れません。」

「……そんなことが……」

「……ですが、私はカムイ様にお仕えすると決めた。あなたの為なら、復讐は後回しです。」

「ギユンターさん……」

カムイは視線を落とす。

フードの彼女はハツとして、

「移動するぞ。敵が近い。」

「……え？」

カムイ達も気を引き締め、彼女に従う。

カムイ達は彼女の誘導の元、外に出る。

しばらくして、先頭を歩いていた彼女が立ち止まる。

アクアを見て、

「……少し離れる。物陰に隠れて、やり過ごせ。」

「……わかったわ。」

アクア達は物陰に隠れる。

そして、彼女はどこかに走っていく。

すると、突如女性魔導師と数人の兵が現れた。

だが、何かに包まれており、顔は解らない。

女性魔導師は辺りを見て、

「あそこね……」

アクア達が隠れていたところに、魔術を放つ。

それを避け、彼らの前に出たカムイ達。

そして、武器を構える。

カムイ達を見て、

「去りなさい……。ここは、あなた達のいるべき場所まではありません。」

「何者ですか!?!?」

「私は透魔王国の魔導士。透魔兵よ、この者たちを排除さなさい。」

「まずいわ……。今の私たちでは、こいつらには勝てない!」

アクアは眉を寄せ、冷や汗が出てきた。

透魔兵達が襲いかかる。

「くっ!カムイ様、アクア様、お退りを!ジョーカー、いけるな!」

「はっ、誰に言ってるやがる、ジジイ!カムイ様の為なら、このジョーカー、何があってもやりますとも!」

「ギョんターさん!ジョーカーさん!」

ギョんターとジョーカーは、近づいてきた兵を斬り裂いていく。

だが、数からしてもこちらが不利なのは変わらない。

と、戦う彼らと透魔兵の間に魔術が飛んできた。

カムイ達や透魔兵達はそこを見る。

高い岩に乗った一人の女性がいた。

銀髪を左右に結び上げた黄金の瞳を持ったフードの付いたマントを着た魔導師の姿。

女性魔導師がその彼女を見て、

「ルフレ卿、どういふつもりです。」

「いえ、ここで彼らを殺すのは得策ではないと思っただけです。ですので、兵をひいてください。」

岩からおり、こちらに歩いてくる女性。

だが、女性魔導師は彼女に敵意を向ける。

「……あなたは、怪しいわ。突然現れ、ハイドラ様の信頼をすぐに取った。だいたい、これはハイドラ様の命なのよ。それを……あなたはあの方の逆鱗に触れるきですか!」

「……いいえ。私は、ハイドラ様を思つての行動です。先も言った通り、ハイドラ様の願いを叶えるのであれば、彼らは今は逃すのがいい。これは、私が考えるいくつもの作戦の一つです。確実に、あの方の望み通りになるように、のね。だから、兵を引いてください。さもないと……」

彼女は腰にあつた剣を抜き、近くにいた兵を斬つた。

兵は燃えて消える。

「味方を!?」

カムイは目を見開く。

女性は笑みを浮かべ、

「あなたも、こうなりますよ。私としては、ここであなたを失うのは得策ではない。ですから……ね?」

「くっ! わかりました、ここは引きましょ。けれど、私はあなたを信用していない事をお忘れなく。」

「ええ、それで構いませんよ。私は、私のやり方をするだけです。」

兵達と共に消える女性魔導師を、彼女はなおも笑顔のまま見送つた。

彼らが消えると、彼女はカムイ達を見て、

「……あの方の為にも、あなたがたにも頑張つて貰わねばなりません。簡単には、死なないでください。」

彼女はスツと消えた。

アクアは腰を落として、拳を握り締める。

「……なんとかあったみたいね。けど、安心はできないわ。」
「だろうな。」

フードの彼女が、後ろから現れた。

アクアに手を伸ばし、彼女を立たせる。

ジョーカーが、フードの彼女を見て、

「あなたがいない間、大変でしたよ。敵の奇襲にあったのですから。」

「……だからこそ、私は向こうに戻る手配をしてきた。この人数では、危険だからな。向こうに戻つて、白夜と暗夜を味方につける。」

「……協力してくれるでしょうか……」

「してくれる、のではない。させるのだ、お前がな。」

そして、歩き出す。

カムイ達も、それに続く。

カムイは拳を握り締め、

「……私頑張ります。きつと兄さん達はわかってくれると思います。私は信じる。」

「……そうね。私も手伝うわ。」

「勿論、この私もです。」

「そうですね、共に行きますぞ。」

「はい。ありがとうございます。」

カムイは彼らに笑顔を向ける。

そして、拳を握り締める。

「……ですが、あのルフレという方、仲間を斬り捨てるなんて!」

《私も、アクア様よりここに長くいましたが、『ルフレ』という方を聞いたことはありません。》

「……あなたは、何か知ってるかしら?」

アクアはフードの彼女を見ていた。

彼女は歩みを緩めず、

「……『ルフレ』は、あるとき突然現れたハイドラの軍師らしい。だが、軍師としての策だけなく、戦闘も行える。故に、ハイドラは駒として仲間に行っているらしい。しかし、ルフレはほとんど表には出ないと聞いている。あいつまでもが動き出したのなら、こちらはその倍は急がねばいけない。」

「……そうですか。色々やるのが山積みですね。」
「ああ。」

と、ギンターが馬を引きながら、

「……それよりも、カムイ様。お体の方は大丈夫なのですかな？ほとんど休まずに進んでおりますゆえ。」

「大丈夫ですよ、ギンターさん。何とか、とても体が軽いんです。」

「ですが……」

「ここは竜の波動が強い。竜の血が濃いそいつには、ちょうどいいだろう。それに、そいつの体の不調は、特異体質なだけだ。色々なモノ、な。」

「……あなたは、カムイ様のお体について何かご存知なのですか。」
「さてな。」

「……あなたは、何者なのです。私はまだ、あなたの名をお聞きしていません。」

ギンターはフードの彼女を睨む。

それを、彼女は簡単に受け流す。

カムイが思い出すように、

「そういえば、私もお聞きしてませんでした。」

「そうですね、私もです。」

《……それは、私もです。ですがー》

「そうね。私も、これからあなたを呼ぶのに困るわ。」

それに、ジョーカー、リリス、アクアが続いた。

フードの彼女は歩みを止め、

「生憎、自分の名はもうない。……私の事は好きに呼べ。」

そして、フードの彼女の足元に魔方陣が浮かぶ。
そこから水が溢れ出る。
それによって、彼らは来た時のようにして包まれた。
彼らは、元いた世界へと戻る。

第十話 仲間を求めてくその1く

とある黒騎士は思い出す。

愛しき妻子家族と共に過ごした懐かしき故郷での思い出。けれど、その故郷にも、愛しき妻子家族には会えない。

復讐すると決めた。

自分から愛しきモノを奪ったあいつに……

その機会が来た。

居たのは、幼い少女。

記憶の混乱が激しく、まともにコミュニケーションも取れない。

自分はその子に、自分の娘の影を見る。

ある時、少女が記憶を取り戻した。

そして、また失った。

今度は記憶だけでなく、感情までも。

あの時の少女を想うと、自分は彼女を利用しようとしていたことを思い出す。

復讐と少女。

この天秤に、自分はどちらを選ぶのか……

——白夜と暗夜がある世界に、戻って来たカムイ達。

その場所は、雷鳴轟く無限溪谷の場所だった。

カムイは思い出したように、

「そう言えば、ここに昔は扉があったと言っていましたね。」

「ええ。けど、それは少しだけ力が残っているだけよ。……『白夜が暗夜に。暗夜が白夜に。そのとき扉は閉じられる』。」

アクアは瞳を閉じて、思い出すように言う。

カムイはアクアを見て、

「……え？なんですか、それは。」

「昔、お母様から聞いたの。『暗夜が白夜に、白夜が暗夜になるとき、『次』にそれが起きたときは無限溪谷の扉は閉じられる』って。」

アクアは目を開ける。

それを聞いたギウンターは、

「……暗夜が白夜に、白夜が暗夜に。聞いたことがありますぞ。確かそれは、十数年に一度、暗夜と白夜の空の色が入れ替わる現象。あと数ヶ月で、起きることではありませんか。」

「ええ。きつと、扉があつた頃はそうやって開閉を繰り返していった。けれど、扉は壊されてしまった。おそらく、残った力の残留はその時、完全に失われると思うわ。つまり、こちらからあの禁忌の国には行けなくなる。もう時間がないわ……」

「……では、あのと禁忌の国に行ったあの力。あれは、あなたの力ではないのですか？」

カムイがフードの彼女を見る。

彼女は首を振り、

「あれ自体は、私の力だ。だが、限度がある。白夜と暗夜の協力を得た時、私の力ではあの禁忌の国には行けない。元々の、力の質の違いだな。」

「……そうですか。だったら、どうやって兄さん達を禁忌の国へ？」

「私が用意する。その為に、色々準備してきたのだからな。その為に、彼らをここに呼ぶ必要がある。」

「……分かりました。行き方は、あなたに任せます。私は、兄さん達の協力を得られるように……いえ、得る為に頑張ります。」

「ああ……そうだな。」

そう言うと、彼女は腹を抑えて膝をつく。

カムイが驚き、彼女に近づく。

「だ、大丈夫ですか!?!」

「やっぱり、あの時のケガが……」

アクアも、側による。

ジョーカーが手当をしようとしたが、それを拒否した。

そして、フードの彼女はカムイの手を掴み、

「……しばらく、じっとしている。」

「え?は、はい……」

フードの彼女はカムイの手を掴んだまま、肩を上下して深呼吸す

る。

しばらくそうした後、カムイの手を離し、立ち上がる。

「……もういい。気にするな。」

「ですが……」

「もう、本当にいいのだ。それよりも、お前には成さなければいけない事があるだろう。」

「はい……」

カムイは頷く。

アクアはカムイを見て、

「……とりあえず、白夜に行きましょう。リヨウマなら、話に耳を傾けてくれるかもしれないわ。」

「……そう、ですね。分かりました、白夜に行きましょう。」

カムイは頷く。

フードの彼女は彼らに背を向け、

『……さて、白夜と暗夜。どう動き出すか。そして、あいつも動き出した今、私も前に出なくては。透魔での動きも気になるが……』

だが、一度考えを隅に置く。

すでに行く気満々のカムイを見たからだ。

フードの彼女はカムイの横に行き、

「どちらにせよ、今日は休むべきだ。場所は、私が用意してある。」

「え、は、はいー！」

歩き出す彼女を、カムイ達もついていく。

森のどこかの小屋、そこに身を寄せた。

「……安心しろ、すでに魔術を発動してある。外からは、ここは見えない。」

「ありがとうございます。」

カムイは部屋の隅にいる彼女を見る。

と、ジョーカーの作るスープが完成した。

「さ、カムイ様。」

「は、はい。ありがとうございます、ジョーカーさん。」

「アクア様も、遠慮せずに食べてくださいね。」

「ええ、ありがとう。」

カムイとアクアは、ジョーカーからスープを受け取る。

ジョーカーはギョントアを見て、

「ほらよ、ジジイ。」

「うむ、お前の料理が上達してると良いのう。」

「黙って食えよ。」

ジョーカーはギョントアを睨んでいた。

カムイの側にいるリリスにも、渡す。

《ありがとうございます、ジョーカー様。》

そして、ジョーカーは立ち上がると、

「あなたも、食べてください。言っておきますが、私は借りを作りたくないタイプなのです。」

「……わかった。」

彼女はそれを受け取り、食べる。

と言うより、黙って黙々と食べていた。

そして、彼に返して戻った。

その間、カムイ達は話をしながら食べていた。

カムイもジョーカーに器を戻し、

「……なんか、彼女は変わってます。なんというか、距離をあえて作っているかのよう……」

「彼女にしてみれば、私たちは仲間ではなく協力者。関われば、情が生まれてしまうから……かもしれないわね。」

アクアも、ジョーカーに戻しながら言う。

ギョントアは顎に手をやり、

「情……ですか。確かに、そうかもしれないませぬな。」

「ええ。時に、情は厄介なものだから……」

アクアは視線を落とす。

そして彼らは、明日に向けて眠る。

フードの彼女は、彼らが眠るのを確認して外に出た。

彼女は長剣を抜き、走り出す。

彼女は一人、見えない敵^{透魔兵}を相手に戦う。

と、後ろから槍が突きつけられる。

「……彼らの側にいなくていいのか。」

「あちらはジョーカーとリリスに任せてありますゆえ、お気遣いなく、それよりも、教えてくださればお供をしたのですがね。」

「……必要ないからな。」

彼女は次々と、敵を斬り裂いていく。

それを見たギョントターは槍を構え直し、

「負けておれませんか。」

二人は颯爽と戦い終わった。

フードの彼女は長剣についた血を払い、鞆に戻す。

ギョントターも槍を立て、

「しかし、お強いですな。その剣技は、誰から習ったのです？」

「……………」

「これは失礼。あなたの剣技が美しかったもので。いけませんな。」

「……幼い頃、父の側近の人に教わった。それ以外にも、兄や父にも教わった。」

「そうなのですか。ご家族は今……」

「それは言う必要はない。私は、仲間ではないからな。」

そう言つて、小屋に向かって歩き出した。

ギョントターはため息を一つついて、後に続く。

翌朝、カムイ達は白夜のテンジン砦に向かって歩いていった。

アクアはフードの彼女を見て、

「正直なところ、あなたから見て白夜と暗夜は味方につくと思う？」

「……本来なら無理だな。現在、我らは白夜からも、暗夜からも敵として見られている可能性もある。それは、白夜の広場の事件、戦場での行動を考えれば解るはずだ。それに、お前たちが関与したという疑いが向かなければな。でなければ、私に誘拐された集団だ。だが、強いと言うのなら……白夜の第二王女であるサクラ王女、暗夜の第二王女であるエリーゼ王女は仲間にしやすいのではないか。」

「サクラさんとエリーゼさんですか？確かに、あのお二人なら私の話を素直に聞いてくれるかもしれませぬ。」

カムイが二人を思い出す。
ジョーカーが笑顔のまま、

「待ってください、カムイ様が第二王女のはずです。暗夜王国の王女ではなかったとは言え、白夜での彼女は第二のはずです。」

「……いや、サクラ王女が第二であってるのだ。」

フードの彼女は淡々と言う。

カムイは首を傾げながら、

「それは、私がサクラさんたちとは異母姉妹きょうだいだからですか？」

「……………さてな。」

彼女は長い間の後、呟いた。

そしてフードの彼女は立ち止まり、

「そして、仲間にしにくいのは白夜の第二王子であるタクミ王子と暗夜の第二王子であるレオン王子だ。」

「タクミさんとレオンさん……そうですね。あのお二人はそうなるかもしれませんが。タクミさんは、お母様を死に追いやった私を許さないでしょうし、レオンさんは正義感が強い方です。場合によつては……………」

カムイは視線を落とした。

フードの彼女は再び歩き出す。

「……………だが、あの二人はそれだけ家族想いなのだ。お前なら、気付けるだろうさ。」

「何をですか？」

「……………少しは、自分で考えろ。」

「え？待ってください！その少しだけでもいいので、教えてください！」

カムイは顔を上げて、彼女を追いかけた。

それを、他の者たちは苦笑して、二人を追う。

しばらく歩き続け、ギョウターが辺りを見渡す。

「カムイ様、もうじきテンジン砦です。おそらく、白夜王国の者たちが多くいるはず。何かあるかわかりません。いちを、警戒を怠らぬようお願いします。」

「分かりました。兄さん達がいるといいんですけど……」

「そうね。けど、呪いのことを忘れないで。何があっても、喋ってはダメよ。」

「はい。気をつけます。そして、信じてもらえるよう頑張ります。」

そして、砦の入り口に近づいた。

辺りが静かなのを感じる。

だが、その中には冷たい殺気を感じる。

フードの彼女は長剣の柄を握り、マントの中で隠していた。

カムイはキョロキョロし、

「やけに静かですね。もしかして、誰もいないのでしょうか？」

「……いや、誰か来たみたいだ。」

カムイの問いかけに、フードの彼女が答える。

砦の中から、眼鏡をかけた一人の男性が歩いて来た。

「ユキムラさん！」

彼の名は、ユキムラ。

白夜王国の軍師である。

彼はカムイをジッと見て、

「……カムイ様。それに、アクア様も、ご一緒ですか。」

「良かった、ユキムラさん。実は、話したいことがあって来ました。」

「話、ですか？」

「はい。実は、本当の敵を見つけましたんです！だから話をー」

そう言ったカムイに、矢が飛んできた。

それを、フードの彼女が長剣で叩きおとす。

ジョーカーとギンターが、カムイの前に出る。

「カムイ様、お怪我は？」

「ありません。ですが……」

「これは、どうやら我々は敵として見られているようですね。」

「そんな……」

アクアも、眉を寄せた。

カムイは拳を握りしめた。

フードの彼女は長剣を、白夜軍師ユキムラに向かって構える。

カムイがジョーカーとギョントーの間から出て、フードの彼女の前に手を広げて立つ。

「待ってください！まだ、事情も聞いてないのに敵と判断するのは早いです！」

だが、カムイの背から、

「何が今更事情ですか！言い訳はよしてください！」

「ユキムラさん……？」

カムイは困惑しながら、白夜軍師ユキムラを見る。

彼は怒りを露わにし、

「……ミコト様の命を奪っただけでは事足りず、白夜王国を裏切り仲間を見捨てた。あなた自身で、暗夜兵を送り込んだせいで……!!？」

彼は一呼吸おく。

そして拳を握りしめ、

「リョウマ様は行方知れずとなり、タクミ様は暗夜王国に捕らわれてしまった！」

「そ……んな、リョウマ兄さんとタクミさんが☒」

「一体、誰が……」

カムイとアクアが冷や汗をかき、息を呑む。

白夜軍師ユキムラは眉を寄せ、

「白々しい。全ては、あなた方二人が仕組んだことではないですか！」

「え……？」

カムイ達は困惑する。

フードの彼女は斜め横の木を見上げる。

そこには、一人の白夜の忍びがいた。

その忍びは片目を怪我をし、口元を隠していた。

彼から感じる怒りと殺意。

「……どうやら、私達より先手を打ったものがあるようだ。この必然を知る誰か、が。」

カムイは拳を握りしめて彼に言う。

「……ユキムラさん！私たちは敵ではありません！私も、アクアさんも、白夜を裏切っても、裏切ったつもりありません！」

「問答無用！兵達よ、裏切り者を仕留めなさい！」
砦の中から、白夜兵達が出てくる。

一人の占い師が、白夜軍師ユキムラの横に立ち、
「わらわは、亡きミコト様の臣下のオロチ。そなた達のことは許さぬ。
……ミコト様の仇、討たせてもらおうぞ！わらわのまじないの前に、倒
れ伏すがよい！」

「亡きミコト様の為、白夜に仇なす者たちは私がこの手で討ちます！」
白夜軍師ユキムラは獅子舞を取り出した。

そして、木の上から白夜の忍びが降りて来た。

「我が名はサイゾウ。リョウマ様の臣下だ！お前達のせいで、リョウ
マ様は……許さんぞ！」

彼もまた、暗器を構える。

彼の投げた暗器を、フードの彼女が弾く。

そして剣を構え、

「……覚悟を決める。この場を落ち着かせるには、一度落とすしか
ない。」

「ですが！」

フードの彼女は、占い師オロチの術を魔術で阻止する。

そして、白夜軍師ユキムラに暗器を投げる。

そのまま突っ込み、白夜の忍びサイゾウと刃を交える。

奥からくる白夜兵達の前に魔術を放つ。

「カムイ、ここはやるしかないわ！」

「カムイ様、もし無理なら後ろにいて下さい。我らでお守りいたしま
すゆえ。」

「大丈夫です、カムイ様。なんとしても、カムイ様をお守り致しま
す。」

「アクアさん、ギウンターさん、ジョーカーさん……」

彼らはカムイの前に立ち、武器を構える。

カムイは拳を握りしめた後、自分の頬を両手で叩く。

そして剣を抜き、

「私もやります！誰も失わないように、力を貸して下さい！」

「はい!」「ええ!」

彼らは襲いかかる兵たちと武器を交える。

フードの彼女は白夜の忍びサイゾウと武器を交えていた。

左手に長剣と右手に短剣を構えて、彼と戦っていた。

時折、短剣を宙に投げ、暗器を白夜兵に向けて投げる。

「……貴様、中々できるな。一体何者だ!」

「……私は禁忌の国の者。私は、必然を壊す為にここにいます。」

「訳のわからんヤツめ!」

二人の攻防戦は続く。

カムイ達は白夜軍師ユキムラと、占い師オロチと対峙していた。

「はああああ!」

カムイは兵たちを吹き飛ばす。

そこに、アクアも加わり、打ち払う。

「負けておられんな。ジョーカー!」

「うるせー、ジジイ!そんな事はわかってんだよ。」

二人も敵を薙ぎ払う。

カムイを背後から襲うとした敵をリリースが叩く。

カムイが彼らに叫ぶ。

「ユキムラさん!オロチさん!一体白夜に何があつたんですか!」

「……あの後、白夜王国はミコト様が亡くなった事で結界がなくなつた。川の暴流によって、暗夜兵は引きました。リヨウマ様が態勢を整え、落ち着いた頃でした。敵襲を受けたのです。そして、ガンズと言う暗夜兵軍団が襲つてきました。」

「ガンズさんが!?!」

「……誰かが、手引きをしたという事ね。」

「そうです。ある村人が言っておりました。『カムイ様とアクア様が、白夜王国を裏切った』と!」

「違います!私たちは知りません!私達じゃないです!」

「では、何故今になって現れたのです!今なら畳み掛けれると思つたからなのではないですか!」

「許さぬ!ミコト様の想いを踏みにじるそなたを!」

二人の猛攻は続く。

――透魔王国のとある城の中。

一人の少女が魔導書を持って長い廊下を歩いていた。

その彼女の背に、声がかかる。

「これはルフレ卿。貴女をお見かけするとは、なんとも珍しい事ですね。」

「……ああ、アベル殿。それは、こちらの話ですよ。私としても、貴方が動いたと聞いて驚いているところです。」

彼女は立ち止まり、振り返る。

そこには黒騎士の姿をした男性が立っていた。

黒い近い紫で、深い蒼い瞳をしていた。

「ご謙遜を……私など、それ程でもないですよ。私よりも、あなたを見る事自体稀ですからね。それに、私が動いたところで、貴女の戦術には組み込まれているでしょう。」

「ふふ、当然ですよ。」

透魔軍師ルフレは本を抱え、口元に手を当てて微笑む。

黒騎士アベルは目を細め、

「ところで……噂では、ハイドラ様の命に背いたとか。」

「背いた覚えはありませんよ。私はいつだって、ハイドラ様の為に動いています。私の考えた数多の作戦を、ハイドラ様が受け入れてくれるからこそです。」

「そうですか。それなら結構。では……」

と、自分の横を通る彼に、

「……知っていますか、アベル殿。我らの邪魔をする者の事を。アベル殿は、その者を……存知で？」

「……ええ。私の第二の弟子とも言える子ですよ。」

「弟子……ですか。」

「はは、あの子も大変なんですよ。全てを破壊する為に、『カムイ』に継るしかない。」

そう言っ歩いていく。

透魔軍師ルフレは彼に振り返り、

「……その者が、その『カムイ』と行動を共にしているのを知っていますか？先ほど、透魔兵達から報告を受けました。」

「そう、ですか……それは意外だ。ちよつと見に行ってみようかな。」

彼は冷たい笑みを浮かべる。

透魔軍師ルフレは笑顔で、

「では、アベル殿。私はこれで。」

「ええ、ルフレ卿。」

彼は歩いていく。

透魔軍師ルフレは長い廊下を歩きながら、

「弟子、か。嘘つきですね……」

彼女は自室へと戻った。

アクアはフードの彼女を見る。

彼女は白夜の忍びサイゾウとまだやりあっていた。

アクアは薙刀を構え直し、

「……私も頑張るわ。」

カムイの横に並び立つ。

「くっ！やはり強いですね。」

「負けられぬのじゃ！」

二人はボロボロになりながらも、カムイ達に向かってくる。

カムイとアクアが占い師オロチを、ギウンターとジョーカーが白夜軍師ユキムラに一撃を与えた。

彼らは肩で息をし、殺されるのを待つ。

だが、カムイは剣を下す。

白夜軍師ユキムラは困惑しながら、

「……何故、殺さないのですか？あなたは、白夜兵を簡単に殺せるでしょう。」

「……いいえ。私には、理由も無しには殺せません。それに、ユキムラさん達は勘違いをしています。私たちは、別れたあの時から白夜兵たちを殺してもいなければ、白夜を攻撃もしてません。それに、私たちは白夜王国と暗夜王国の無益な殺し合いを終わらせる方法を知つ

ています。その為に、あなた方の力をお借りしたいんです。」

カムイは剣をしまいながら言う。

白夜軍師ユキムラは拳を握りしめ、

「……都合のいいことを！ 私は信じません！ 私の大切な人たちを奪った貴女の言葉など……」

「そ、そうじゃ！ うつ、グス、ミコト様を……仲間を返しておくれ！
うう、うう……」

膝について泣き出した占い師オロチ。

フードの彼女も、白夜の忍びサイゾウを壁に叩きつけた。

彼は膝をつく。

フードの彼女は、持っている武器を握りしめていた。

だが、白夜の忍びサイゾウが立ち上がり、

「……仕方ない。こうなれば、この身をもって暗夜どもに一矢報いてやる！」

そう言って、彼は札を持って術を練り出す。

それを見たフードの彼女は、白夜の忍びサイゾウに近づく。

「……まずいな。」

「くっ……ぐぐぐっ……」

彼からは炎が湧き出てくる。

ギョンターも、それが何を意味するかを理解した。

「いかん！ あやつ、自爆をする気だ！」

「やめてください、サイゾウさん！」

カムイが近づこうとするのを、ジョーカーが止める。

「危険です、カムイ様！」

「ですが！」

カムイは眉を寄せて訴える。

フードの彼女は、彼の練る札を斬り裂く。

白夜の忍びサイゾウは瞳を見開く。

彼は爆薬を沢山出し、それを暗器に付ける。

「くっ！ だが、まだだ!!？ 我が信は白夜にあり！ 死んでも、貴様らの好きにはさせせん！」

そして、フードの彼女へと向かう。

火を灯そうとした瞬間、馬の鳴き声とともに、

「兄さん、いけません！」

「ダメです、サイゾウさん！カムイ姉様を傷つけないでください！」

その聞いたことのある声に、カムイは振り返る。

そこには、馬に乗ってやってきた二人がいた。

「スズカゼさん、サクラさん！」

スズカゼが馬から降り、サクラを下す。

白夜の忍びサイゾウは武器を構えたまま、

「なんのつもりだ、スズカゼ。あいつは白夜を裏切った逆賊。憎き相手なのだぞ！」

「いいえ、兄さん。カムイ様は信頼に値するお方です。この方は、暗夜王国に囚われていた私を救ってくださいました。自らの危険を顧みず、敵である私の命を！」

「それに、カムイ姉様はとても優しい方です。現に、この砦の方たちは、みんな無事です。怪我はしていますが、誰一人として死者はいません。本当に、姉様が私たちを裏切ったのなら、そんなことをする必要がありませんか？あの時のことは、何か事情があったのではないのでしょうか。それに、私たちは誰一人として、その場で姉様達を見ていません！だからどうか、話を聞いてあげてください！」

「むむむ……」

白夜の忍びサイゾウは、スズカゼとサクラの真剣な眼差しを見た。

武器を下ろす。

スズカゼはホツとして、

「兄さん、ありがとうございます。」

「ふん。信じた訳ではない。だが、話は聞かせてもらおうか。」

カムイを睨む白夜の忍びサイゾウ。

フードの彼女は一步彼から下り、武器を下す。

カムイは頷き、

「はい。私たちの本当の敵は、暗夜王国ではありません。本当の敵は、もっと別のところにいるんです。お母様……ミコト女王を殺し、白夜

王国を壊滅に導いたのはガロン王ではないのです。もっと強大で、もっと恐ろしい野望が、私たちの知らないところで動いているんです。」

「ほう。恐ろしい野望だど？なかなか面白いことを言うな。では、お前の言う真の敵とやらは誰だ。どこにいる。」

「……すみません。それは、言えないのです。ですが、彼女の言っていたように、禁忌の国としか言えないのです。そして、もうすぐ白夜と暗夜の空の色が変わる日が来ます。それが、その敵を討つ最後のチャンスなのかもしれないのです。もし、私たちの事を信じてくださるのなら、その日に無限溪谷に来て欲しいのです。私の話は、それだけです。」

白夜の忍びサイゾウは睨みが増し、

「貴様、ふざけているのか。」

「いいえ。ふざけていません。でも、今の私が言えるのは、ここまでなんです。」

「……聞くだけ無駄だったようですね。話は終わりです。お引取りを。」

白夜軍師ユキムラは、カムイを睨んで言った。

カムイはアクア達を見て、

「行きましょう、皆さん。」

そう言って、歩き出す。

そこに、叫び声が響く。

「ま、待ってください！カムイ姉様！」

「サクラさん？」

カムイは立ち止まり、声の主をみる。

サクラはグツと拳を握りしめて、

「あ、あの、私も連れて行ってください！私のような者でも、何かの役に立てるはずですよ！」

「サクラ様、何を!?？」

「ごめんなさい、ユキムラさん。でも、私はカムイ姉様を信じます。過ぎた時間は短いけれど、それでもわかるんです。姉様の目には、嘘

を感じません。それに、姉様からは何か大切な使命を感じるんです。」
「全く……今のあなたに、何を言っても聞いてはくたさらないでしょうね。ご誕生された時からずっと、サクラ様の成長をお側で見参りました。だからこそ、サクラ様の事は、他の誰よりも理解しているつもりです。ですから、お止めはしません。どうか、くれぐれもお気を付けて。」

「ありがとうございます、ユキムラさん！」

サクラは白夜軍師ユキムラに笑みを返す。

スズカゼもまた、兄サイゾウを見る。

「お許しください、兄さん。私も、カムイ様と共に参ります。」

「……好きにしろ。それだけの覚悟があるのならな。」

「はい。」

カムイは二人を見て、

「ありがとうございます。サクラさん、スズカゼさん。私の事を信じてくれて。では、行きましょう。次の目的地へ！」

彼らは歩き出す。

フードの彼女は武器しまい、

『……ここでも、必然が起きた。変えられない……いや、変えてみせる。打ち壊してみせる！』

彼らの後に続く。

カムイ達は水辺をあるいていた。

それが湖だと解る。

カムイは立ち止まり、湖を見つめる。

前を歩いていたサクラが立ち止まり、

「どうしましたか、カムイ姉様？」

「い、いえ……ここでアクアさんに会ったなっと思つて。それに、短かったけれど、白夜王国での生活も楽しかった。家族みんなで集まつて花見をして……」

「また、みんなで花見をしましよ、姉様。」

「はい。きつとみんなで。」

カムイはサクラと笑い合う。

と、天馬の羽ばたき音が聞こえてきた。

彼らの前に、天馬に乗った長い茶髪を結い上げた青年が現れた。

「ふう、良かった。やっと追いつきましたよ、サクラ様♪いきなり、スズカゼと共に白夜城から出て行った時は焦りましたよ。」

「わわっ……!? ツ、ツバキさん!?」

そして、それを追いかけるかのように走りこんできた一人の少女。クリーム茶髪にカールのかかった髪。

彼女は息を整え、

「もう、サクラ様！あたしたちを置いていくなんて、酷いですよー！」
「カ、カザハナさんまで……二人とも、どうして……」

「はい！サクラ様を追って、テンジン砦に向かったら、ユキムラさんから伝令を貰ったんですよ。サクラ様が白夜王国を出るって。」

「ユキムラさんが……」

「ま、ユキムラさんに教えてもらわなくても、サクラ様がいなくなったら、絶対に追いかけますけどね。」

「うん。俺たちには、サクラ様を完璧にお守りする使命がありますのでー。サクラ様の行くところ、当然どこでも、どこまでもついて行きますよ。俺たちはいつでも、あなたの力になります。」

二人はサクラを見て微笑む。

サクラは笑顔で、

「あ、ありがとうございますー！」

頃合いを見計らって、

「……あの、サクラさん。この方たちは？」

「えつと……私の臣下のツバキさんとカザハナさんです。いつも私のことを守ってくれる、強くて優しい方たちなんですよ。これから一緒に闘ってくれるので、きつと心強い戦力になって下さいます。」

サクラは嬉しそうに言う。

天馬に乗った青年はツバキ。

サクラの説明にあった通り、彼女の臣下である。

駆け込んできた彼女、カザハナもまたサクラの臣下である。

ツバキとは少し違い、サクラとは仲が物凄くいいみたいだった。

カムイは微笑み、

「そうですね。それはありがたいです。これからお願いします、ツバキさん、カザハナさん。」

カムイは彼らに手を差し出す。

ツバキは天馬から降り、カムイの手を握り微笑む。

「はい。任務は完璧に遂行しますよー。」

「まあ、サクラ様をお守りするついでに、加勢してあげるわ。」

カザハナは若干カムイを睨みながら言う。

カムイは後ろの彼らを見て、

「えっと、この二人は私の臣下のギウンターさんとジョーカーさんです。」

ギウンターとジョーカーは頭をさげる。

そして、リリースに関しては「キユン」と鳴いただけだった。

カムイは斜め横のフードの彼女を見る。

「で、あの方は……えっと……」

「私は仲間ではなく、協力者に過ぎない。私のことは好きに呼べばいい。」

と、フードの彼女は木の陰を見て、暗器を握る。

「どうしましたか？……もしかして、敵ですか？」

「……いや、気のせいだったみたいだ。」

彼女は暗器から手を離す。

そして歩きながら、

「ひとまず、休める場所を探すぞ。」

「は、はいー！」

カムイ達は進む。

サクラはアクアに近づき、

「あ、あの、アクア姉様。彼女は、結局誰なのですか？」

「……あの子は、禁忌の国の者よ。そして、私たちと目的を同じにする者。」

「……あの方のお名前は？」

「残念ながら、私たちも知らないの。」

「そ、そうなんですか……」

彼らは少し先の小屋で休んだ。

そして、サクラ達から白夜王国襲撃についての詳しい話を聞いた。

「そうだったんですね……」

「はい……姉様たちがいなくなった後、白夜王城に戻りました。しばらくして、城下町で爆発が起きたんです。兄様たちも駆けつけたときには、暗夜兵たちが暴れていました。その時に、タクミ兄様は暗夜に捕らわれ、リヨウマ兄様がそれを追ったのですが……」

「行方不明となつてしまわれたのです。」

サクラやスズカゼ達は視線を落とす。

アクアはフードの彼女を見て、

「あなたは、これについて何か知っているかしら？」

壁に寄りかかりついていた彼女は、

「……いや。ただ、あるとすれば透魔兵見えない敵の仕業であるのは確かだ。しかも、それを『カムイとアクア』と言う特定まで仕込んで……。それができるのは、あの場に駆けつける事ができないと判断しての行動。そして、テンジンあそこ砦『カムイ』が現れると知っている者……」

フードの彼女は右手を握りしめる。

「心当たりがない訳ではない。だが、ここでは詳しくは言えない。」

「そう……」

アクア達は察するが、サクラ達は疑問を拭えない。

フードの彼女は彼らの方を見て、

「……こちらは、白夜の第二王子のタクミ王子の救出に向かうべきだ。あいつが必然を望むのなら、次に仕掛けてくるのはそこだ。」

アクアはカムイを見て、

「……そうね。カムイ、タクミが仲間になつてくれるかは置いといて、暗夜からは救出した方がいいと思うわ。すぐには殺されないとは思いますが、あのガロン王がいつまでも生かしておくとは思えないもの。」

「そうですね。でも、タクミさんは、どこにいますか？」

「中立国イズモ公国。」

フードの彼女が、カムイの問いに即答する。

そして、拳をさらに握りしめていた。

「あいつは、必ずそこで仕掛けてくる。なら、そこで暗夜の者とも接触する絶好のチャンス。これを逃す手はない。」

カムイ達は頷き、話し合う。

イズモ公国に最短で、かつ早急に行ける手段を。

第十一話 仲間を求めてくその2く

黒き王子は、周りを警戒していた。

自分の母は、父を振り向かせる為に子供である自分を使った。

自分、周りの異母兄弟姉妹とは交流を持てなかつた。

持てば、母がいい顔をしない。

自分としては、どうでも良かった。

自分は、母にとつては父を振り向かせる道具に過ぎない。

と、母はイラついていた。

正妻が消え、誰もが正妻の座をかけて争っていた。

だが、正妻の座に着いたのは見知らぬ女性。

しかも、その女性には子がいた。

誰もが、彼らを邪険にした。

だが、その女性が消えると争いは激しくなった。

異母兄弟姉妹達による王位争い。

妻たちによる正妻の座。

多くの者がそれによつて死んだ。

そんな時だ。

正妻の子であつた第一王子に会つたのは。

彼は自分を含めた残つた異母兄弟姉妹を集め、交流を図つた。

彼は素直に自分達を受け入れてくれた。

兄弟姉妹として、絆を深めた。

そんな兄に、連れられて行つたのは古びた城。

壁が高く、使われていないはずの城。

そこには、母を持たない異母姉がいた。

けれど、彼女は城から出られない。

そんな姉に、自分は何度も会いに行つた。

彼女は自分にとつて、かけがえのない姉だ。

けれど、自分は気づいてしまった。

彼女が、自分とは違う血を引いてる事を。

彼女は、黒ではなく白の者。

それでも自分は、彼女か向けてくれる笑みが好きだった。

――暗夜城の王座にて

暗夜王ガロンは、とある女性魔導師からの報告を受けていた。

それは彼以外には見えない女性魔導師。

「そうか。やはり、『カムイ』は生きていたか……。そして知っている。知ってはならぬ真実を。うむ、案ずるな。手は打つてある。『カムイ』など、恐れるに足らぬ。簡単に捻り潰してくれる。主も分かっただろう。わしを止めることは誰にも出来ぬ、とな。この世界は、もうすぐワシのもの！……全ては、我が神の為に。クハハハハツ!!？」

その姿を密かに、扉の向こう側で聴いていたエリーゼ。

『……やっぱり、あいつは変だ。お父様の皮を被った悪魔……絶対に、カムイお姉ちゃんは守ってみせる。マークスお兄ちゃんに言わないと！』

エリーゼはそつとその場を離れて、走り出す。

カムイ達はタクミ救出の為、黄泉の階段と呼ばれる道を歩いていた。

その道のりは階段で坂道が続く。

ギユンターが立ち止まり、

「少し、休憩と致しましょう。カムイ様のお体のこともあります。」

「はあ……はあ……いい、いえ、私は大丈夫……です！」

「では、言い方を変えましょう。この階段と坂道は、老体の私には少し厳しいのです。」

ギユンターは、カムイを見て微笑む。

カムイは深呼吸して、

「……わかりました。休憩にしましょう。」

彼らは腰を下ろして休憩にする。

フードの彼女は一人立って、辺りを警戒していた。

カムイは階段の上を見上げ、

「ですが、この階段はどこまで続くのでしょうか？」

「……はつきりは言えないわ。でも、目的に最短で行くには、この黄泉の階段を抜けた方が早いのだ。」

アカアも、上を見ながら言う。

サクラは眉を寄せて、

「はい。中立国のイズモ公国ですからね。白夜からも、暗夜からも、攻めにくい所に配置されています。」

「そう、だからひとまず白夜の追っ手との戦いも避けられるわ。あの国では、全ての戦闘行為が禁止されているから。」

「な、なんだか霧が濃くなってきましたよ。」

サクラは辺りを見渡す。

フードの彼女は前に歩み出る。

そこにはノスフェラトウが二体、突如現れた。

「きゃあああつー！皆さん、ノスフェラトウです！」

サクラの悲鳴が響く。

「サクラ様、お下がりを！」「カムイ様！お下がりを！」

サクラとカムイの臣下が彼らの前に出るが、

「……お前達が構える必要はない。あれは、人だ。」

「え？」

そう言うと、彼女は思いつきり、ノスフェラトウの腹と頭を蹴る。

それは後ろと前乗りに倒れる。

それは彼女の言う通り、人に変わった。

アカアは倒れこんだ彼らを見て、

「……風の部族の人たちね。」

フードの彼女は斜め後ろの岩を見上げる。

そこに、暗器を投げる。

「ひいー！」

そこには、暗夜軍師マクベスがいた。

フードの彼女は彼を見て、

「暗夜王ガロンに伝えよ。お前の計画はすべて壊す、とな。」

彼はすぐさま転移魔法を使って、その場から消えた。

カムイはフードの彼女を見て、

「えつと……何が、どうなったんですか？」

「……お前達を罠にはめようとしたのだ。風の部族の者を殺させ、争わせるために為にな。」

「……そうだったんですか。」

カムイは視線を落とす。

カザハナは、フードの彼女を睨んで、

「何で、そんな事が分かったのよ。」

「……同じ事をされた事があるからだ。」

「は？え？」

「そして、必然を望むのなら……やると思った。」

フードの彼女は、倒れこんでいる風の部族の者を見る。

カムイが倒れこんでいる者の一人の手を取り、抱える。

「このまま、ほっとけません。風の部族の方々の所に戻しましょう。」

「はい、姉様！」

サクラも手伝う。

それを他の者達は苦笑して、カムイとサクラと変わる。

フードの彼女は考え込んでから歩き出す。

風の部族がある場所へ向かう。

そこは砂漠だった。

フードの彼女が先頭を歩き、

「あそこが、風の部族長が治める烈風城だ。」

「これが……」

カムイが城の見つめる。

と、フードの彼女は立ち止まる。

カムイも止まり、

「ど、どうしましたか？」

その瞬間、突風が彼らを襲う。

それが治ると、フードの彼女は城に向かって走り出した。

「えっ？ええええ」

カムイの困惑の叫び声は、風にかき消された。

カムイ達が、彼女を追って城に来ると、そこは戦場とかしていた。

カムイ、アクア、ジョーカー、ギョウター、リリスの目には、透魔兵が視えていたが、他の者には見えていない。
なので、

「ど、どういう事よ！何でいきなり斬られているの!?!?」

「うーん、これはマズイな。サクラ様、危険ですので下がって下さい。」
「で、でも……」

カザハナ、ツバキの二人は、サクラの前で剣を構える。
スズカゼは眉を寄せ、

「まるで、何かがいるような……そんな気配を感じますが……」
と、視えていないサクラ達の元に透魔兵が襲いかかる。

カムイが剣を抜き、透魔兵を斬る。

「えっと、サクラさん達には視えていない敵がいるんです！危険ですので、下がって下さい！」

「そうね。ここは、視えてる者が動くしかないわね。」

「ですが、この人数では厳しいですね。」

「泣き言を言つとる暇はないぞ、ジョーカー。」

「うるせー、ジジイ！」

彼らは二組で動き出す。

リリスは、サクラ達を守るように、側にいる。

と、カムイの背後から襲いかかる透魔兵に矢が刺さる。

その方向を見ると、城の屋根の上で矢を番えて再び矢を放つフー
ドの彼女の姿。

それを見たジョーカーは、

「あの方は、弓も使えるんですね。」

「はい。凄いですー！」

だが、その彼女の後ろにも透魔兵が襲いかかる。

彼女は屋根から飛び降りる。

空中で回転して、自分に襲いかかる透魔兵を射る。

そして、カムイとジョーカーの前に着地した。

「……遅いぞ。」

「何も言わずに走って行ったのは、あなたですよ。」

ジョーカーは笑顔と共に、怒りがあつた。

それを、彼女はさっと受け流し、

「……まあ、いい。片付けるぞ。」

弓を捨てて、左手に長剣と右手に短剣を握る。

敵に向かつて、走って行つた。

「わ、私たちも頑張りましょうか。」

「……そうですね。」

二人も再び戦い出す。

と、カムイは見覚えのある人を見つけた。

「リンカさん☒」

「ん？カムイか！」

それは、炎の部族リンカがいた。

その隣には、ムキムキの坊さんのような男性がいた。

「知り合いか？」

「ああ、あいつはカムイ。白夜王国の第二王女だ。」

「む？あれがそうか……。私の名は、フウガ。この風の部族の長だ。」

「あ、はい。私はカムイです。」

カムイは、リンカの横の風の部族長フウガに頭をさげる。

そして、剣を構え直し、

「えつと、ここは任せてください！みなさんには、見えない敵がいるんです！」

「……わかった。ここは任せよう。」

「はい！」

カムイ達が透魔兵を倒しきり、風の部族長フウガの前に立つ。

「城の者達から聞いた。倒れた仲間を連れて来てくれたそうだな。礼を言う。」

「い、いえ、あれはこちらが招いた事故でもあるので。」

「……だが、噂とは当てにならぬものよ。」

「噂？」

カムイは風の部族長フウガの言葉に首を傾げる。

サクラ達も、心あたりがない。

リンカがカムイを見て、

「実は、お前が白夜と暗夜を裏切り、世界へ破滅を迎えようと動いている、という噂が流れているのだ。」

カムイ達に少し間が生まれた。

フードの彼女は腕を組んで考え込んでいた。

カムイはハツとして、

「いえ、違います、フウガ様！リンカさん！私は、そんなこと考えていませんし、やろうとも思ってません！」

「それは知っておる。先のお前たちを見て、そう思った。」

「ありがとうございます。私たちを信じてくださり。」

風の部族長フウガは、カムイを見る。

そして笑みを浮かべ、

「はは！スメラギよ、喜ぶがよい！お前の娘は立派に成長しておるぞ。」

「え？父上様をご存知で？」

「そうだな。私はかつて、白夜王スメラギとは親友だったのだ。若き日のあいつとは、共に闘い、背中を預け合ったものだ。」

「そう、なんですか……」

カムイは驚く。

カムイは真剣な顔に戻り、

「フウガ様。私たちは今、さっきの见えない敵と戦うために仲間を集めています。あれが、私たちの真の敵なんです。」

「……信じがたい事ではある。お前たちが戦っておる姿を、確かに見た。だが、それでも私は長として、すぐには決められん。」

「……そうてすね。」

「だからこそ、見極めたいのだ。……ツクヨミ！」

「なんですか、フウガ様。」

彼がそう言うと、一人の占い師の少年がやって来る。

「こ奴は、ツクヨミ。ツクヨミよ、この者たちと共に行き、修行して参れ。カムイ、こ奴はこう見えても、類い稀な才能を持つておる。きつと、お前たちの力となるだろう。」

と、彼の頭を豪快に撫でながら言う。

彼は少し照れた後、

「……フウガ様。こんな弱そうな奴らが、さっきの见えない何かとやらを倒したのか？ 私のまじないも、効かなかったのに。」

「そう言うな。何しろこのカムイは、あの『夜刀神』を持つ者だ。この刀の事は、スメラギより聞いている。神の刀である『夜刀神』は、『炎の紋章』を繋ぐ鍵となるもの。炎の紋章は、絶対的な力を持ち、創造主である神さえも、滅ぼせると言われているものだそうだ。」

「神さえも滅ぼせる力……？」

カムイは眉を寄せる。

フードの彼女は無言で何かを想いながら、彼らを見る。

カムイはアクアを見て、

「アクアさん、その力ならあいつを……」

「ええ、可能よ。希望が見えてきたわね。」

「はい。フウガ様、夜刀神について、他に何か知っていますか？」

「私も、そんなには詳しくないのだ。だが、夜刀神について詳しく知っているのは、イズモ公国のイザナのはずだ。炎の紋章について聞いてみるといい。」

「はい。ありがとうございます、フウガ様。ツクヨミさん、これからよろしく願います。」

「仕方がない。フウガ様の頼みだ。特別に力を貸してやる。感謝しろ。」

ツクヨミは両手を腰に当てて、頷く。

リンカが、カムイを見て、

「カムイ、あたしもついてくよ。あんたの敵とやらを一緒に倒そうじゃないか！」

「ありがとうございます、リンカさん。」

カムイはみんなを見て、

「行きましょう、みなさん。イズモ公国には、暗夜に捕まったタクミさんもいる。そして、イザナ様から炎の紋章について聞きましょう。」

カムイ達はイズモ公国へと急ぐ。

その途中、カムイは思い出した事をフードの彼女に言う。

「そういえば、あなたは弓も使えたんですね。魔術も使えるし、なんでも出来て凄いです。」

「……昔、教わっただけだ。」

「そうなんですか？誰からですか？」

「……先を急ぐぞ。」

「え？あ、はい……」

彼女はどんどんスピードを上げて、進んで行った。

——透魔王国、透魔軍師ルフレの自室にて。

そこには沢山の本があった。

かつては、とあるこの国の王家に関係する者の部屋だったらしい。いや、なるはずだった部屋だ。

机の上には、ここ最近考えた戦術が散らばっている。

窓からは、荒れた大地が見える。

透魔軍師ルフレは、ソファに腰をかけて寝ていた。

と、戸が叩く音が聞こえる。

彼女は目を覚まし、

「どうぞ……」

「……失礼する。」

彼女の部屋に入ってきたのは、黒騎士アベル。

透魔軍師ルフレは少し意外そうな顔をした後、笑顔になる。

「これは、アベル殿。珍しいですね。どうぞ、お掛け下さい。」

「どうも。」

彼は、彼女の前のソファに座る。

彼女は立ち上がり、紅茶を淹れる。

それを彼に渡し、

「お口に合うかわかりませんが、よかったですらどうぞ。」

「頂こう。」

彼は紅茶を飲む。

彼女は残っていた自分のコーヒーを一口飲み、

「それで、アベル殿。私の部屋に来たのは、どう言ったことですか？」
「この間、ルフレ卿の言った子の様子を見に行つて参りました。確かに、『カムイ』と共に行動してましたよ。おかげで、あるべき必然を作り出すのに苦労しました。ですが、彼女はそれを打ち壊しに来る。」
「……では、アベル殿は必然を起こすたい。だから私に、戦略を立てさせる為に来たのですか？」
「いいえ。貴女には、彼女を捕らえる方法を考えて貰いたいのですよ。」

黒騎士アベルは冷たい笑顔になる。
透魔軍師ルフレは、彼をジツと見る。

「……情ですか、アベル殿。あの者は貴方の弟子だ。だから、生かしたいのですか？」
「いいえ、違います。捕らえて、ハイドラ様の前に突き出す。そして、あの子の前で希望を殺す。ただ、それだけの為にですよ。」

「……貴方も、随分と人が悪い。確かに、『カムイ』という名の器が欲しいとはいえ、生死は関係ない。……わかりました、アベル殿。作戦は考えておきます。」
「そうですか。ありがとうございますよ、ルフレ卿。」

黒騎士アベルは立ち上がる。

そして、ドアを少し開け、
「ああ、そうだ。紅茶、美味しかったですよ。懐かしい、とても懐かしい味でした。昔、あの子が淹れてくれた味にソックリです。」

「……そうですか。あれは、この城に残っていた茶葉です。元この騎士であつた貴方には、さぞや懐かしいことと思いますよ。」
彼女は笑顔のまま、そう言った。

黒騎士アベルは冷たい笑みを浮かべ、
「……ふ。やはり貴女の……その笑顔の下にある悪意は、嫌いじゃないですよ。では、また。」

黒騎士アベルは、透魔王国軍師ルフレの部屋から出て行った。
彼女は再び寝だし、

『……何とも、厄介で面倒な事を考えるものだ。』

カムイ達がイズモ公国の前に来ると、

「ここからは、別行動をさせて貰う。頑張つて、事を成せよ。」
彼女はどこかに走り出して行った。

カムイは手を伸ばしていた手を引き、

「え？あ……行っちゃいました。」

「仕方ないわ。こちらは、こちらで動きましょう。」

「はい。」

カムイ達は王宮の方へと進む。

カムイは辺りを見て、

「なんだか、神々しい雰囲気のところですね。」

「ええ。イズモ公国は古くから神々の国として知られているわ。他の国々が対立をしている時も、常に中立を守り続けているの。でも、無事につけて良かったわ。さっそく、公王様に会いに行きましょう。炎の紋章のこともそうだけど、タクミの事も調べないと。」

アクアがカムイを見る。

カムイは頷き、

「はい。タクミさん、無事で居てくれるといいんですけど……」

「大丈夫ですよ、姉様。タクミ兄様は、きっと無事にいると思います。」

「ええ、信じましょう。」

彼らは王宮へと足を踏み入れる。

すぐに、公王イザナとの謁見が叶った。

と、言うより彼の方から来たのだ。

「ボクは公王イザナ！以後、お見知りおきを！相当長旅だったんでしょ？ささ、ゆっくりしてっちゃいなよ！何ならずっといてくれてもいいんだけど……なんてね！」

と、白い衣を纏った長髪の男性が明るい声で言う。

カムイ達は目をパチクリして、しばらく固まった後、

「あ、ありがとうございます……」

「いや〜！それにしても、よお〜く来てくれちゃったねえ！お客さんなんて久しぶりだから、ボク嬉しくなっちゃうな〜！」

その公王イザナの姿に、ツクヨミは半顔で、

「はあ……なんだ、この軽いノリは……。外の世界の王は皆、このような感じなのか？」

「い、いえ……違います。ちょっとこの人が特別なだけで……」

サクラが眉を寄せて、彼から距離を取り始める。

カムイも、一歩引きそうになったが、

「えっと……あ、あのイザナ公にお聞きしたいことがあります。」

「なにになに〜？何でも聞いてよ。ちなみにボクの好きな言葉は愛ね、愛！」

「そう、ですか。では、白夜王国第二王子タクミさんがここにいませんか？それと、この刀『夜刀神』にまつわる『炎の紋章』について教えてくださいいただきたいんです。」

「え？知らないよ。それに、タクミ王子も、ここにはいないよ。」

公王イザナは即答だった。

カムイは視線を落とし、

「……そうですか。せっかく手掛かりが掴めたと思ったのですが……」

「まあまあ。そんなに肩を落とさないで。あつちに酒宴の用意してるしさ〜！とりあえず食べて飲んで、盛り上がっちゃえばいいさ〜！」

と、くるつと反転して、カムイ達を案内しようとするが、

「……待って。本当に知らないの？とても大事な事なの。」

「うーん、知らないものは知らないってば〜！」

彼は頬を膨らませる。

ギウンターが槍を構え、

「ああ……確かにお前は知らぬだろうな。偽物のイザナ公よ。」

「え……？偽物？」

カムイは、ギウンターと公王イザナを交互に見る。

そこに駆け足が聞こえてくる。

サクラがその人物を見て、

「タクミ兄様！」

「サクラ！」

タクミはサクラの前に立つ。

そして、サクラは彼と共に来たもう一人の男性を見る。

「そ、それに……イザナ公がお二人!?」

ギウンターは槍を彼に突き立て、

「……やはりそうか。私の甘く見てもらっては困る。この汚らしい幻術、見覚えがあるぞ! さあ、正体を見せろ!」

その偽物かもしれない公王イザナの後ろに、フードの彼女が現れる。

彼の首元に短剣の刃を突き立てる。

「くっ! 私の術を見破るとは! ギウンターめ! お前も、あいつらを連れてくるとは!!?」

そう言うと、彼にノイズが走る。

その姿は公王イザナから魔術士へと変わる。

「ひょーっほほほほ! お久しぶりでございますね! ギウンター!」

「やはり貴様か、ゾーラー!」

「か、彼は?」

カムイ達も武器を構える。

ギウンターは眉を寄せ、

「お気をつけよ。こやつは幻術を見せるのが得意な、暗夜王国の魔術士です!」

「さあ! 殺っちゃってください!」

そう暗夜の魔術士ゾーラーが叫ぶと、物陰に隠れていた暗夜兵が出てくる。

そして、自分の首に短剣を突き立てているフードの彼女とギウンターに魔術を放つ。

二人は彼から距離を置く。

「ふふふ! この、ガロン王様より賜った氷の魔法具で、やっつけてあげますよ! ひょーっほほほ!」

と言って、氷魔法をぶっ放してくる。

それを、フードの彼女が長剣も構えて斬り裂いていく。

その間に、暗夜兵達がカムイ達を囲い出す。

「さてさて、ボクは見てるからヨロシク〜♪」

と、公王イザナは安全な真ん中に来る。

タクミはサクラを見て、

「サクラも、真ん中に！」

「は、はい！でも、タクミ兄様たちはどうして☒」

「……そのイザナ公と共に、牢屋に打ち込まれてたところをあいっ
に助けられたんだ。」

タクミは襲いかかる暗夜兵を、弓で倒しながら言う。

カムイは先頭で敵を斬りながら、

「ですが、無事で良かったです、タクミさん。」

「フン。裏切り者の奴の言葉なんかいらない！」

「タクミ兄様！それには……」

「サクラ、今は戦いに集中して。カムイ、タクミ、あなたたちもよ。」

「はい！」「わ、わかってるよ！」

アクアが槍で敵をさばきながら言う。

彼らは暗夜兵を、次々となぎ払っていく。

そして、再び魔導士ゾーラの前へと来る。

カムイが彼の前に立ち、

「勝負ありました。もう逃げられませんよ、ゾーラさん。降伏して下
さい。」

「くっ！これで、勝ったと思わないで下さい！これだからお嬢様育ち
の甘ちゃんが！」

彼は懐から短剣を取り出し、

「隙ありいはい〜！」

「なっ!!??」

「いいですか、最後に勝った者こそが正義なのですよ!!??」

それをカムイに向けて突き出してきた。

だが、それをフードの彼女が刃を掴む。

「な、な、な☒」

「……気は済んだな。ならー！」

彼女は、彼の腹を思いつき殴る。

「グハッ！」

彼は腹を押さえて倒れこんだ。

フードの彼女は建物の影を見て、

「居るのだろうか、暗夜の第二王子。」

「え？レオンさんがいるんですか？」

カムイもそこを見る。

すると、レオンが出て来た。

「……久しぶりだね、カムイ姉さん。意外と元気そうだね。」

「レオンさん、あのー」

「そのゾーラに関しては、礼を言うよ。暗夜王国軍の恥さらしを止めてくれたこと。」

彼は冷たく言う。

カムイは拳を強く握りしめ、勇気を出す。

「……えっと、つまり今回の事は間違이었다ということですよ。ですが、ここでレオンさんに会えて良かったです。」

カムイは笑みを浮かべる。

レオンは少し頬を赤くした後、

「……こ、今回の件は父上の命があった。けれど、僕自身はこのやり方を良しとしなかっただけだよ。」

「やっぱり、レオンさんは正義感の強い方です。レオンさん、それにタクミさん。お願いです、力を貸して下さい。私たちは、この世界の真実を知っています。暗夜も、白夜も争う必要はないんです。」

「それを信じろというのかい、カムイ姉さん？見るところ、その白夜王子も信じてないみたいだけど。」

レオンはタクミと目が合う。

二人は睨み合う。

カムイは彼らをジッと見て、

「……そうですね。ですが、信じて下さい！それに、ガロン王は操られているんです。ここではない、禁忌の国の者に。」

「……姉さんの言うことが本当だったとして、禁忌の国ってのは、どこかの国なのさ。場所は？王の名は？」

「そ、それは言えません。ですが、これは本当のことなんです。暗夜と白夜が戦争に導いているは、その国にいる黒幕なんです。その真の敵を倒さなければ、両国に平和はやって来ません。」

カムイは真剣な表情で言う。

と、レオンとタクミは再び目が合う。

二人はムツとした後、レオンはカムイに背を向ける。

「……全く。姉さんの訳の分からない事は、今に始まったことじゃないけど、なんとも曖昧な言葉だ。」

「あ、レオンさん！もし……もし、私を信じて貰えるのなら、暗夜と白夜の空が入れ替わる日に、無限溪谷に来て下さい！お願いします、レオンさん！」

「……悪いけど、姉さんが僕らをどう思っているかが、僕らとはもう関係のないことだ。」

そう言って、彼は歩いて行った。

フードの彼女は彼の背を見て、

『……これで暗夜の王族にも伝わる。そうなれば、暗夜の第一王子が動きを見せるはずだ。彼らは知っている。すでにあの王が、ガロン王ではない事を。』

カムイは視線を落とす。

そんな彼女に寄り添う、アクア。

「カムイ、わかってているはずよ。」

「はい……」

カムイは顔を上げる。

そして、タクミを見る。

「言つとくけど、僕も、あんたたちを信じない。白夜を裏切ったんだからな！サクラをうまく手懐けたようだけど、僕は騙されない。」

そう言って、カムイに背を向ける。

サクラが彼に近寄り、

「タクミ兄様！」

「……サクラ。サクラはしたいようにすればいい。僕は、少し確かめたいことがある。だから、今はサクラの味方にはなってもらえない。」

そう言つて、彼は歩いて行つた。

カムイは拳を握りしめ、

「……タクミさん。」

「タクミ兄様……」

サクラは涙を拭う。

アクアはハツとして、フードの彼女を見る。

「あなたの怪我は、大丈夫？」

「……問題ない。」

「でも、血がたくさん出ています！見せてください！」

サクラが彼女の手を取り、治療をかける。

傷がふさがったその手を見ながら、

「礼は言わない。貴殿が勝手にやったことだ。」

「ちよつと！せつかくサクラ様が治してくれたのに、その態度は何よ
！」

カザハナが、フードの彼女に睨みながら怒鳴る。

フードの彼女は無言となり、それを受け流して背を向ける。

さらに怒り出そうとするカザハナを、ツバキが苦笑して、

「落ち着きなよ、カザハナ。」

「そ、そうですよ。それに私は、それで構いませんから……」

と、サクラも言うが、いまだに怒るカザハナ。

それを落ち着かせようとするサクラとツバキ。

そんな重苦しいような雰囲気、

「はいはい！とこころで、ボクに聞きたいことがあるんじゃないの？」

「はい……。実は、イザナ公に炎の紋章について、教えて頂きたいので
す。」

「ん、いいよ。じゃ、先に城の中に入って。すぐに準備を済ませて
いくから〜♪」

「わ、わかりました。」

彼らは、公王イザナが呼んだ従者に連れられて、城の中に入って行
く。

フードの彼女は彼を見て、

「私が、炎の紋章について言ってもいい。そうすればー」

「それじゃ、意味がないんだよ。代々、これはボクの一族の役目。ボクは彼女を認めてる。だから悔いはないんだ。それと、始めて会った時にも思ったけど、君はやっぱり禁術を使ったね。それをやる為に、どれだけの犠牲を出したの？」

公王イザナは、彼女を鋭く射抜く。

彼女は少し黙った後、仮面に手をかける。

そして彼女は仮面を外し、彼だけに見えるようにする。

「私は、この選択に悔いはない。そして逃げる訳にはいかないのだ。私は全てを背負い、持っていく。受けた憎しみも、悲しみも、私に向けられた、あらゆるものを全てを。その為に、この身がどうなろうと構わない。その覚悟は、とうの昔にしている。」

彼女の顔を見た公王イザナは、息を飲んだ。

けれど、表情を改めて、

「そうか……君の覚悟は本気のような。なら、ボクはやっぱりやるよ。だから止めないでくれ。」

「……わかった。」

彼女は仮面を付ける。

彼らも、カムイ達が待つ城の中に入って行く。

カムイ達の前に立つ公王イザナは、

「さてきて、炎の紋章についてだったね。」

「は、はい。」

カムイが頷くが、サクラの隣にいたカザハナが警戒しながら聞く。

「そ、その前に、あなたが本当にイザナ公王様なのですか？」

「うん、そうだよ♪どこからどう見ても、神々しい公王様でしょ？何たってボク、神々の末裔だからねっ！」

「に、偽物よりも軽い……」

流石のサクラも、眉を寄せて苦笑する。

公王イザナはサクラに微笑み、

「そうそう、サクラ王女。安心していいよ。タクミ王子も、ちゃんと分かってくれる。勿論、リヨウマ王子も、ヒノカ王女も、ね。」

「…………え？」

「間違いないって。何たって、神様からの予言だもん♪」

「なんとも軽い予言ね…………」

カザハナは眉を思いつきり寄せた。

彼はとびつきりの笑顔を向け、

「そうそう、予言ついでに、この予言を他の人たちにも伝えてね♪それっじゃく、神様からの予言を受けるよ〜♪」

と、彼は水晶を取り出す。

そして、真剣な顔つきになり、瞳を閉じて手を水晶にかざす。すると、水晶が光り出し、

『見えているものが全てとは限らない。真実は深く透明な場所にある。水面に映る、すべてを知る者こそが真の敵。…………さらなる暗闇に潜みし悲しき竜の子。闇に堕ち、光さすのを待ちわびる。全ては愛しき約束のため…………』

光が収まり、カムイが首を傾げる。

「…………さらなる暗闇に潜みし悲しき竜の子？何か知っていますか、アクアさん？」

そう言つて、アクアを見る。

彼女は瞳を揺らして涙を流す。

膝を着き、手を顔に覆つて泣き出した。

「ア、アクアさん!?!?」

「ご、ごめんなさい…………禁忌の国に戻ったら話すわ。」

アクアは涙を拭い、立ち上がる。

その姿を見たフードの彼女は、誰にも聞こえない声で呟いた。

「…………やっぱり知っているのか。…………ごめんなさい…………」

そう言つて、拳を強く握りしめた。

公王イザナは真剣な表情のまま、

「そうそう、それでね…………炎の紋章のことだけど、あいにくボクはよくは知らない。けど、言い伝えはあるよ。『明るき道、昏き道、どちらも歩めぬ迷い人が訪れたとき…………』我が一族がもう一つの道を示す」
『つてね。と、言うわけで古の神に聞いてみるよ。』

彼は深呼吸して、再び水晶に手をかざす。

そして瞳を閉じ、集中した。

「……『竜に会え。汝の望む答えは、そこにあり。』」

「え？竜？」

カムイが眉を寄せて、リリスを見た。

リリスは首を振る。

と、水晶をかざしていた公王イザナが倒れこんだ。

「イザナ公☒」

カムイが彼を抱き上げる。

彼はカムイを見て、

「……今は意味が分からなくてもいい。その内分かるはずだ。何たって、このボクの命をかけた神託だからね……」

「そんな!?？命をかけたですって！なんで……なんで言ってくれなかったのですか！」

カムイは眉を寄せて、彼を見る。

フードの彼女は、カムイが抱え込む彼の前に膝を着き、

「……いつだって、何かを得るときは犠牲がついてくる。古の神の持つ力は増大だ。いくら神の末裔と言えど、今は人の身。人の身では、それを受け止めることはできない。だからこそ、神託は命を対価として行われる儀式だ。」

「あなたは知っていたのですか？こうなる事を！」

「……ああ。」

「なんで止めてくれなかったのです！誰かの命を奪ってまで、私は情報を得たくなかった！何か、別の方法があったはずです！」

カムイが泣きながらそう言うと、

「ふざけるな！犠牲を出さねば、成せない事もある。犠牲が伴って成した場合、それを受け止めるのは、その代償を知る者だ！お前は、真の敵を討つ為に『炎の紋章』を知りたかった！その代償を知らながら、イザナ公はお前を信じ、認め、託したのだ！その行為に目を背けるな！お前は覚悟していたはずだ！だからお前は、その代償を知った者として受け止めろ!!？」

カムイの襟首を掴んで、フードの彼女は怒鳴りつける。

カムイは泣き続けた。

そのカムイの襟首を掴んでいたフードの彼女の手を、公王イザナが手を伸ばして離す。

「……彼女をあまり責めるものではないよ。さっきの神託で、真の君の事も知れた。あまりにも君は業を、呪いを背負いすぎてる。けど、あまり自分を責めるべきではない。そしてなりよりも、『カムイ』を責めるべきではないんだ。君は君で、カムイは彼女としての責任と意志がある。」

「……これは、私の背負うべきものだからだ。逃げるわけにはいかない。そう言ったはずだ。」

「ああ……だからこそ、お礼を言うよ。約束を守ってくれてありがとう。実はさ、ボクもこの戦争をなんとかしたかったんだ。戦争を止める為に、この身を捧げる……ボクってば伝説になるかも♪」

「はい……きつと。イザナ公、私はあなたの勇気ある行動を忘れません。ありがとうございます……」

カムイは涙を拭う。

彼は、カムイに微笑んだ。

そしてとびつきりの笑顔に向けて、

「じゃ、ボクは逝くよ……バイバイ……」

フードの彼女の手を取っていた彼の手は落ち、静かに息を引き取った。

カムイやアクア、サクラはしばし泣く。

ギョンターは公王イザナに頭を下げ、

「民の笑顔を望み逝く……イザナ公、あなた様は真の王でしたな。」

「私は進みます。イザナ公の想いを無駄にしない為にも……みんなが幸せになれる未来の為にも！」

カムイは立ち上がる。

彼らは進む。

次の道標を掴む為に……

第十二話 仲間を求めてくその3く

白き王女は後悔していた。

自分が生まれる少し前、姉がもう一人いた。

けれど、その姉は暗夜王国に攫われた。

幼い自分は、その意味が分からなかった。

会ったことのない姉に、ただ会いたいと純粹に思っていたあの頃。

けれど、ある時間いてしまった。

……姉は自分の代わりに攫われたのではないかと、と。

怖かった。

会ったことのない姉に会うのが。

けれど、会いたいと思ってしまう。

姉に会った時、姉は自分をどう思うのか。

怖いけれど、知りたい。

そして姉は帰ってきた。

自分達の元へ。

危ないところを、助けに来てくれた。

身をていして、自分達の元へ来てくれた。

けれど、姉は自分達の事を覚えていなかった。

それでも、姉と共に過ごした時間は楽しかった。

嬉しかった。

こうして、家族として過ごせるこの時間がとても愛おしい。

そう心から想った……

ーフードの彼女とは、別行動をしていた。

彼女との待ち合わせ場所に向かうために歩いていた。

そのカムイ達が歩く先に、煙が見える。

カムイがそれに気付き、

「ん☒皆さん、待ってくださいー向こうに煙が……」

「あれは狼煙ね……」

アクアもそれを見る。

スズカゼは眉を寄せて、

「ええ。あれは、兄さんの上げた狼煙です。」

「サイゾウさんの？意味はなんですか？」

カムイがスズカゼを見る。

スズカゼは静かに、

「はい、『大規模な敵兵力と交戦中』を示したものです。」

「なんですって!??!でしたら、助けに行かないと!!?!」

「いえ、忍びがああ狼煙を上げる意味は、助けを求めていることではありません。この敵に襲われぬよう、自分を見捨てて逃げろ、と言う意味なのです。……だから、行くべきではないのです。」

「そんな……」

カムイは俯き、拳を握りしめた。

そして顔を上げた。

「皆さん、戦闘準備を！すぐに助けに向かいます！」

「それでこそ、カムイ様ですな。」

「ええ。流石、カムイね。」

「では、すぐに準備を致します。」

「全く、変わらないな。」

ギョントー、アクア、ジョーカー、リンカが笑みを浮かべて武器を整える。

カザハナ、ツバキ、サクラも、

「たく、仕方がないわね。」

「完璧に任務遂行しますよ〜♪」

「はい！私も頑張ります！」

彼らも闘いの準備をする。

スズカゼは驚きながら、

「待ってください！ど、どうして?!?!危険なのですよ!!?!」

「だからと言って、見捨てる訳にはいきません！私たちは逃げる為にいるわけではありません。ただ、真の敵を討つ為にいる訳でもありません。仲間を集め、大切なモノを護るためです。一人ではダメなことも、強敵に会っても、皆んなで立ち向かうために！」

「ですが……」

「それに、サイゾウさんは大切な仲間です。その仲間を見捨てることはできません！」

「カムイ様……ありがとうございます。」

スズカゼはカムイに頭をさげる。

そして彼らは、急いでそこに向かう。

フードの彼女はカムイ達と別れ、森に来ていた。

辺りを探り、

『……確か、この辺りのはずだが……』

と、目的の団体を見つけた。

丁度、すぐ近くでは狼煙を上げた所だった。

『……あそこか。全く、こころも同じ必然を作り出してくれるとは。』

彼女の目の前には、捕らえられた白夜のくノ一達と敵の忍び達フウマ王国がいる。

「罠にかかったな、白夜王国リョウマの臣下であるくノ一カゲロウ！」「くっ！フウマ公国は、白夜王国の同盟国であつたはずだ！」

「ふん、白夜の同盟国だと？残念だが、私はガロン王と手を組んでいたのだ。こうして、戦端が開かれるのを、今か今かと待ち望んでいたのだ。この戦で白夜を滅ぼせば、フウマは白夜に代わる王国にはとして認められる。そうすれば……この私はフウマ王国の王となるのだ！」

「この……外道が！」

「ははっ！どうとでも言え、負け犬が！どうせ、人質の価値が無くなれば、お前は死ぬ。」

「……それは仕方ない。任務で死ぬことは、覚悟していた。だが、リョウマ様のご命令を……あの伝言を皆に伝えられないことだけが……私の心残りだ！」

白夜のくノ一カゲロウは唇を噛む。

彼女は、長剣を抜く。

そして斬り込む。

同時刻、白夜の忍びサイゾウの集団。

彼らは辺りを警戒しながら、森を駆ける。

「おい、カゲロウが捕まっているというのは、この辺りか!?」「そうじゃな……情報によれば、そのはずじゃが……」

白夜の忍びサイゾウは隣を走る白夜の占い師オロチを見る。

白夜王国の忍びサイゾウは、白夜王国第一王子リョウマの臣下である。

カムイ達とは、テンジン砦で刃を交えた。

隣の占い師オロチは、白夜王国の王妃ミコトの臣下。

彼女もまた、テンジン砦でカムイ達と刃を交えた。

と、彼らの前方の方から金属音が鳴り響く。

オロチの上空を金鷄に乗って飛んでいた女性が、

「ふふ、焦っても仕方ないですわ。それにしても……この殺気に満ちた場所。邪魔者の殲滅は、このユウギリにお任せくださいな。ここでなら、敵の断末魔はさぞかし美しく響くでしょうね……」

金鷄に乗った女性は、ユウギリ。

オロチと同じ、白夜王国の王妃ミコトの臣下だ。

白夜の忍びサイゾウはため息をつき、

「はあ……くれぐれも、無理はするなよ。こんな所で、命を落とすわけにはいかん。カゲロウ……待っている。今、助けに行く。」

彼らは、そこに向かう。

そこにはフードを被った者が、長剣を振るい気絶した白夜のくノ一カゲロウを守る姿があった。

フードの者は、彼らに気づく。

「……やっとな来たか。」

そう言つて、気絶していた白夜のくノ一カゲロウを投げる。

縛られた彼女は、白夜の忍びサイゾウに受け止められる。

彼が縄を解き、

「貴様、どういうつもりだ!」

「今に、あいつらも来るだろうさ。それより、来るぞ。」

フードの者は長剣を振るう。

白夜の忍びサイゾウ達も、武器を構えて応戦した。

狼煙が上がっただろう場所にカムイ達は来た。

カムイは辺りを見て、

「狼煙はこの辺で上がっていましたか……」

「カムイ、気を引き締めて。ここは、もうフウマ公国の領内よ。ずいぶんと暗い森だから、迷わないようにしないといけないわ。それに、足元を見て。戦闘の後が残っているわ。複数の足跡……奥に続いているわね。これを追っていけば、合流できるかもしれないわ。」

「はいー！」

彼らは奥に進む。

サクラは肩をすくめ、

「な、なんだか暗くてジメジメしています……ちよつと、怖いかも……」

「サクラさん、手を繋ぎましょうか。」

「え？」

「実は、私も少し怖かったんです。ね。」

「は、はい！姉様！」

カムイの差し出す手を、サクラは嬉しそうに握る。その状態で、さらに奥へと進む。

と、金属と金属がぶつかり合う音が聞こえてくる。

彼らは武器を構えて突入した。

そこには、フードを被った彼女が戦っていた。

「チツ、また乱入者か!!？あいつらも仕留めろ！」

「はっ！コタロウ様！」

敵の将らしき忍びが声を上げる。

カムイは正面の方に白夜の忍びサイゾウ達を見た。

「居ました、サイゾウさん達です!!？」

「そうね。彼女も居るみたいだし、私たちも……！」

アクアがそう言うと、表情を変える。

そこには透魔兵達が現れる。

カムイは眉を寄せて、

「くっ！こんな時に！サクラさん達は、サイゾウさん達をお願いします！私たちは視えない敵を倒しますので！」

「わ、わかりました！」

透魔兵達が見えるカムイ達は、サクラ達と別れる。

フードの彼女と合流し、

「やはり来たか。お前達も来たのなら、注意しろ。見える敵と視えない敵を、同時に相手することになる。」

「はいー！」

カムイ達も、応戦を始めた。

カムイは白夜の忍びサイゾウと目が合った。

「貴様までも、ここにいるとは！何故いる!!？」

「え？は、はい。助けに来たんです。さっきの狼煙は、サイゾウさんですよね？」

「なに？狼煙を？……だが、あれは助けを求めるものではないのだから!!？スズカゼはそんな事も、教えなかったのか。」

「いえ。スズカゼさんは、意味を教えてくださいました。あの狼煙は、敵勢力に襲われないよう逃げろと示す為のものだと。だからこそ、放っておけませんでした。信じて貰えなくても、敵だと思われても、私にとってあなたたちは大切な人なんです。それを失う訳にはいきません！」

カムイは襲いかかる透魔兵を斬り、ジツと白夜の忍びサイゾウを見る。

彼は手裏剣をフウマ公国の忍びに向かって投げ、

「……たったそれだけのことで、わざわざこんな死地まで来たというのか。俺たちを助けるために……」

彼はカムイの方に手裏剣を投げる。

それは彼女の横を通り、後ろから彼女を襲うとしていた敵に当たる。

「注意が足らん。だが、お前には敵わない。裏切り者のやる事とは到底思えん。サクラ様の言うように、何かしらの事情はありそうだ。お前達は、そのまま見えない敵と戦えー！」

「はいー！」

二人は互いに背を向け合い、互いの敵を倒していく。

白夜の忍びサイゾウ達の共闘もあり、カムイ達は透魔兵達を速く倒す事が出来た。

そして、敵の将らと向かい合う彼らと合流する。

敵の将コタロウと白夜の忍びサイゾウが互いに武器を構えていた。

「くそっ！私はお前たちを全て倒し、フウマ王国の王となるのだ！それを……よくも！」

「ふん。知るか、そんなモノ！だが、フウマ公国国王コタロウ！よくもカゲロウを人質にしようとしてくれたな。」

「貴様は……白夜王国の王族に、代々仕えているサイゾウか。」

「ああ、五代目サイゾウだ。」

「ふ。あの老いた上忍の息子か。」

「ほう。やはり、知っているのだな……父を。昔、この国に来てそのまま帰ることのなかった……俺の父のことを！」

「ああ。あの小癩な上忍は、この私の野望に感づいたのうでな。同じ忍びとして、そのような真似はするなど説教してきた。そんな時だ、白夜王スメラギが死んだのは。しかも、話によれば姫を暗夜に攫われたと。その姫を助けに行くと言ったあ奴に、協力してやったわ。そして、あ奴をそこで始末してやった。」

「くっ……！やはり、お前が!!？」

「知らぬ存ぜぬで通す心算だったが、息子には感づかれていたか。親子揃って、勘だけはいいいようだな。ただ、腕が伴っていないければ、全くの無意味だが。」

「貴様、弱かったというのか。俺の父が！」

「ああ。弱かったぞ、ヤツは。弱すぎて弱すぎて、この私に指一本触れることすらできずに、地獄に堕ちていきおったわ！全ては、姫を預けなければこうなる事もなかったのだがな！あははは!!？」

「くそっ!!？許さんぞ、貴様だけは!!？父の仇、討つてみせる！」

怒りに燃える彼の前に、長剣を構えたフードの彼女が立つ。

「感情的になるな、白夜の忍び。」

「貴様に言われるまでもない！」

「そうか……先程は気付かなかったが、お前は……ふははは！これは

傑作だ。いい事を教えてやろう、その娘はあの時……お前の父を見捨てた者だ！」

「なに……？」

「……だからなんだ。」

彼女は剣を振るう。

白夜の忍びサイゾウは、暗器を握りしめ、

「後で問い詰める！」

「好きにしろ。答えるかどうかは、別だがな。」

二人は睨み合う。

というより、彼女の顔が見えない以上雰囲気ではないが……

そして、敵の兵をカムイたちが、フウマ公国国王コタロウを白夜の

忍びサイゾウが相手をする。

兵を全て片付けると同時に、白夜の忍びサイゾウが一撃を与えた。

フウマ公国国王コタロウは地面に倒れ込み、

「グッ……ば、馬鹿な……こんな、若造に……この私の野望が……私の、

フウマ王国が……」

「……指一本触れたぞ。仇は討った、父上……」

白夜の忍びサイゾウは拳を握りしめた。

カムイ達は休める場所に移動する。

カムイは、イズモ公国国王イザナの言葉を彼らに伝える。

「イザナ公王様が……そうか。それで、お前はさっきのはどうなんだ。」

「……答えるかどうかは、別だと言ったはずだ。」

「貴様！」

白夜の忍びサイゾウはフードの彼女を睨みつける。

そこに、ギウンターが一步前に出て、

「先の話、おそらく暗夜に攫われた姫とはカムイ様の事でしょう。おそらくカムイ様は、それ自体覚えてはおられないでしょう。一度、カムイ様は記憶を取り戻した事がありました。その時、白夜兵がカムイ様を取り戻しに来たのです。ですが……」

ギウンターは視線を落とし、拳を握りしめる。

フードの彼女は視線を彼らから外し、

「……だが、白夜兵は仲間の裏切りにあつた。まだ息のあつた白夜の忍びはなんとかその姫を護り抜いた。だが、すぐ側には暗夜兵達が居た。それを、私が倒した。だが、その幼い姫の心は、その光景に耐えられず、壊れかけていた。すぐに、次の追撃が来る。あの白夜の忍びも、最後まで守りきれなかったと悔やんでいた。だから私は、カムイの記憶を封じ、『カムイ』を生かした。そういった場に、私が居たにすぎない。……けれど、私はあの勇姿を忘れる事はないだろう。今も昔も。『カムイ』のために、己が命をかける彼らを。」

フードの彼女は壁に寄りかかったまま、最後は静かに呟いた。

白夜の忍びサイズウも、彼女から視線を外し、

「……少しだが、我が父のことを教えてもらった事には感謝しよう。」隣では、スズカゼが頭を下げた。

そして、白夜のくノ一カゲロウが目を覚ました。

「ん……？私はどうだ！」

ガバツと起き上がる。

白夜の忍びサイズウが彼女を見て、

「目を覚ましたな、カゲロウ。」

「サイズウ……それにカムイ様も!?？」

「良かったです、カゲロウさん。」

カムイも、白夜のくノ一カゲロウをホツとして見る。

白夜のくノ一カゲロウは、サイズウと同じく白夜王国の第一王子リョウマの臣下である。

そして、カムイが白夜王国に戻った頃は、カムイの身の回りの世話
は彼女が行ってくれた。

カゲロウはカムイの前で頭を下げる。

「良かった、カムイ様。実は、リョウマ様より言付けを預かっており
ます。」

「リョウマ兄さんから?」

「はい。リョウマ様は、カムイ様は敵ではないと。真の敵は、暗夜王ガ
ロンでもなく、水面に隠れる者だと。」

「そ、それは！イザナ公の言っていた事と、ほとんどあってます。もしかして、リヨウマ兄さんは禁忌の国を知っているのでしょうか？」

カムイはアクアを見る。

アクアは首を知り、

「どこまで知っているかはわからないわ。それは直接聞いてみないと。けど、リヨウマと合流できればこちらの事はある程度言えるわ。」

「はい。カゲロウさん、リヨウマ兄さんはどこに？」

「リヨウマ様は……暗夜王国にほど近い、シュヴァリエ公国に向かっています。暗夜王国第一王子マークスに会うと言っておられました。」

白夜のくノ一カゲロウは顔を上げる。

カムイは一瞬間を置き、

「マークス……兄さんに会う？それって……？それにシュヴァリエ公国って……」

「はい。カムイ様が、暗夜に攫われた場所です。そして、今は反乱が起きている地です。暗夜のやり方に耐えられなくなった民たちが反乱兵となり、暗夜の者と闘っているらしい。リヨウマ様は生き残った兵たちを味方につけ、暗夜王国第一王子マークスと共に……暗夜王ガロンを討つつもりなのです。」

カムイは胸の辺りで拳を握りしめ、

『……お父様を……兄さんたちが……』

白夜の忍びサイゾウは腕を組み、

「ふん。相変わらず、我が主は無茶をする御方だ。一刻も早く合流し、御身を守らねばな。」

「……それなら、他の白夜の人にも伝えるべきよ。それに、イザナ公王の言葉も含えてね。タクミの事も気になるし。」

アクアが彼らを見て言う。

フードの彼女も壁から腰を離し、

「それには同意する。白夜の第二王子とは、合流を図るべきだ。それに……白夜王国第一王子が、暗夜王国第一王子と手を組むのであれば、あちらも動き出す。問題は、暗夜の第一王子に向けられている監

視をどうするか。それを壊すためにも、こちらは急いで彼らと合流し、見えない敵に対処した方がいい。」

「タクミ様や、リヨウマ様の伝言、イザナ公の予言については、わらわたちが行おう。」

「ええ、私たちにお任せを。飛んで行った方が早いですし、私たちならば、話も伝わりやすいでしょうからね。」

白夜の占い師オロチと金鷄使いユウギリが名乗り出る。

カムイは彼らを見て、

「お願いします、オロチさん、ユウギリさん。」

「安心してください、カムイ様。私は、ミコト様のあなたに対する愛情を知っています。そして、幼き頃のあなたも。だからこそ、やり遂げてみせますわ。」

と、金鷄使いユウギリは微笑む。

白夜の占い師オロチは背を向け、

「善は急げじゃ！行くぞ、ユウギリ！」

「ええ。」

二人は、外に出て金鷄に乗って飛んで行った。

アクアがカムイを見て、

「決まりね。カムイ、港に向かいきましょう。」

「港に？」

「ええ。シユヴァリエ公国に行くには、船に乗らなくてはいけないの。」

「わかりました。港に向かいきましょう。」

と、カムイ達が動き出すと、

「待て、カムイ……様。」

「えつと……サイズウさん、もし私のことをまだ疑っているのなら、呼び捨てで構いませんよ。」

「いや、主君が敵でないと言ったのだ。なら、俺はそれに従う。カムイ様、我ら二人の動向を許していただきたい。」

「いいのですか？」

白夜の忍びサイズウと白夜のくノ一カゲロウは頷く。

カムイも頷き、

「わかりました。これからよろしくお願いします、サイゾウさん、カゲロウさん。」

「御意。」

彼らは港に、急いで向かう。

――透魔王国、透魔城にて

透魔軍師ルフレは長い廊下を歩いていた。

それは、黒騎士アベルの言う戦略を立てたからだ。

『アベル殿は、どこにいるのか……』

と、一人のフードを被った男性がいた。

透魔軍師ルフレは彼に話しかける。

「これはこれは、お久しぶりですね。」

「ん？ルフレ殿か。お主が、部屋から出ているとは珍しいのう。」

「……私も、部屋に閉じこもってばかりはいられませんよ。でも、今はアベル殿を捜しているだけなのですが……知りませんか？」

「アベル殿なら、外に行きましたよ。」

「は……？」

透魔軍師ルフレは思わず眉を寄せて、笑顔が崩れた。

そして、一度咳払いし、

「失礼。わかりました。外ですか、そうですか、外に……。では、私はこれで……」

彼に背を向け、来た道に戻る透魔軍師ルフレ。

早歩きで歩き、

『私に、作戦を立てさせておいて居ない。全く、自分勝手にも程がある。さて、これからどうするか……』

彼女は、自室に急いで戻るのであった。

カムイ達は港に着き、船に乗り込んだ。

何とか、今日最後の船に乗ることができたのである。

カムイは甲板で海を眺めながら、

「ふう、なんとか出航に間に合いましたね。」

「そうね。」

カムイの隣で、同じように海を眺めていたアクアが言う。
と、その二人の元に、

「カムイ姉様、アクア姉様。お疲れではありませんか？ずっと戦闘続きで、カムイ姉様も疲れが溜まっていると思います。姉様は、お身体が弱いのですから、船の上では沢山休んでくださいね。」

サクラが歩いてきた。

アクアはサクラの言葉に同意し、

「そうね。カムイ、あなたはもう休みなさい。」

「はい、そうさせていただきます。ありがとうございます、サクラさん。」

彼らは疲れを癒す。

船の旅が数日続き、

「失礼します、カムイ様。」

「ジョーカーさん。」

「お体は大丈夫ですか？」

「はい。この数日、いっぱい寝ましたから！」

「それは良かった。では、船は順調に進んでおります。明日には、港に着けるでしょう。」

「そうですね。それは良かったです。ありがとうございます、ジョーカーさん。」

と、カムイは窓の外を見る。

空が薄暗くなってきた。

「……外の雰囲気が変わってきましたね。波も高くなっています。」

「ふむ、嵐の予兆かもしれませんね。」

《船に影響が出なければ良いのですが……》

カムイの横で浮いていたリリスも、心配そうに外を見る。

と、その瞬間だった。

外で爆発音が鳴り響く。

船が大きく揺れ、

「きゃっ！」

「カムイ様！」

ジョーカーが、カムイを支える。

「船が止まった……？大丈夫ですか、カムイ様。」

「はい。私は大丈夫です。ありがとうございます、ジョーカーさん。でも、どうしたんでしょう。船の故障でしょうか？」

「様子を見て参ります。」

「私も見に行きます。」

二人は部屋を出ると、フードの彼女と鉢合わせる。

「……敵襲だ。いちを、警戒はしろ。」

「え？敵襲？」

カムイが驚く。

ジョーカーは笑顔のまま、

「その割には、あなたは落ち着いておりますね。」

「今回の敵襲は、知る顔だからな。いや、お前にとっては、か。」

フードの彼女は、カムイの方を向いて言った。

そして、甲板へと急ぎ足で歩いていく。

「わ、私の知ってる顔？……まさか、暗夜の誰かでしょうか？とりあえず、私たちも向かいましょう！」

「はい、カムイ様！」

二人は駆け足で甲板に向かう。

フードの彼女が出て来たカムイ達を見て、

「来たか。今に来るぞ。」

外に出たカムイ達は、海を見渡す。

と、海は一面見渡す限り、凍っていた。

「う、海が……凍ってる……？」

「こ、これは……まさか、いきなり冬になったなどという事は……」

ジョーカーが辺りを見渡す。

正面の方には、何隻かの船が見える。

と、その船の奥の方から飛竜に乗った人影が見える。

「ん？誰かがこちらに向かってきます。もしか、あれは……カミラ様

……？」

「え？カミラ姉さん……？」

彼らの上空に、飛竜が現れる。

その背には、紫色のフワツとした髪をなびかせるカミラが現れた。船の横に並び立ち、

「ああ、カムイ……元氣そうで良かったわ。私、あの日から心配で心配で……ずっと、あなたに会いたかったのよ。」

と、フードの彼女に魔術を放つ。

彼女はそれを交わすと、今度は飛竜に乗ったまま襲いかかる。

フードの彼女は長剣を抜き、彼女の斧を受け止める。

「やめてください、カミラ姉さん！彼女は敵ではありません！」

「ああ、カムイ……可愛い子。私をまだ姉と呼んでくれるのね。でも、もう私のことを……そんな風と呼んでは駄目よ。あなたは白夜の本当の兄弟姉妹きょうだいを得てしまったのだから……」

「カミラ姉さん……」

カムイは視線を落とす。

カミラは表情を暗した後、小声で話し始める。

「……マークスお兄様からあなたに伝言よ。『私たちは動く。だが、今は動けない。』と。」

「だろうな……貴殿達には見えない敵が、暗夜王ガロンの元にいる。貴殿達が奇襲をかけた所で、見えない敵に殺られるだけだ。ところで、白夜の第一王子が動いているのは気づいているか？」

「ええ。だから、彼と合流をしようとっていたわ。そして私とエリーゼは、カムイの元に居ると。けど、私たちも、お兄様達の方にも……」

「監視が付いている、か。」

「……自身の家臣達に加え、あの王の配下が数人いるわ。そして、あの邪悪な奴からは、カムイを殺せと言われているの。」

「なるほど。では、それはこちらでなんとかしよう。」

彼女は、カミラの斧を弾く。

そして距離を置く。

カミラは体勢を整え、斧を構え直す。

「ああ、カムイ……愛してるわ。けど、お父様からの命令なの。だから、カムイ……あなたを愛してるからこそ、私の手で殺してあげる

わ。」

「構えろ。ひとまず、敵を無力化する。」

「は、はい！」

カムイも構える。

そして続々と、

「カムイ！」「カムイ姉様！」

アクアやサクラ達がやって来る。

彼らも武器を構える。

カミラの後ろには、暗夜兵が沢山出てくる。

カミラは上昇し、

「フローラ。」

「はい、カミラ様。」

船の縁に立ったフローラが手をかざす。

すると、吹雪が吹き荒れ始める。

カムイは腕で顔を覆う。

「ぐっ!!？」

「申し訳ありません、カムイ様。ですが、こうなってしまう以上、私
はあなたの敵です。例え、カムイ様が相手でも!!？」

フローラがカムイ達を睨みつける。

ジョーカーがカムイの前に出て、

「下がってください、カムイ様！フローラ、お前本気か！本気で、俺た
ちを殺しに来たのか!？」

「ええ。私は、本気よ。私たちが氷の部族は、あなた達の逃げ場をなくす
為に海まで凍らせた。カミラ様に従い、あなた達を殺すようガロン王
より命じられた。逆らえば、私たちが部族は殲滅させられる。仕方ない
のよ！」

「だが、お前はカムイ様に忠義を誓ったはずだ！それは、家臣のやるこ
とじゃねえぞ!!？」

「無駄よ、ジョーカー。今のあなたが、私に何を言っても届きはしない
わ。私は氷の部族の女……だから、今はただ、冷たく、硬く、心を凍
らせる。」

フローラは、ジョーカーに向けて氷の刃を放つ。
そこに同じく氷の刃が飛んできて壊れる。

「姉さん、やめてー!」

そこには、フェリシアが駆けつけた。

フェリシアは、ジョーカーの横に並ぶ。

フローラは拳を握りしめて、

「フェリシア……あなたも、氷の部族の一員なら戦いなさい! 私たちには、この道しかないの!!?」

「姉さん!」

「くそっ! フローラ、てめえ……お前は俺が相手する! 目を覚まさせてやる!」

ジョーカーは武器を構え直し、フローラに向かって走り出す。

「カムイ。待っているわ、あなたが私の元に来るのを。」

カミラは後方へと飛んでいく。

フェリシアはカムイを見て、

「カムイ様、申し訳ありません! ですが……姉さんを殺さないでください! みんなを……」

「わかっています、フェリシアさん。止めましょう、一緒に。」

「カムイ様! はい!」

フェリシアも、武器を取り出す。

カムイ達も武器を構え直し、

「来ます!」

カムイ達は陣形を作つて対応していく。

敵がある程度倒していくと、敵の隙間が見えるようになって来た。

フードの彼女はそれを見て、

「……私は少し席を外す。私のいない間に死ぬなよ。」
「え?」

カムイが彼女を見ると、彼女はすでに敵の間を抜けて行っていた。

フードの彼女は氷の部族の元へと向かう。

そして氷の部族長らしき男性の前で止まる。

「何者だ。」

「……氷の部族長クーリアであっているな。私は戦いに来たのではない。話し合い……いや、取引をしに来た。」

「取引だと?」

「ああ。氷の部族は、暗夜王ガロンを討ちたいのだろう。なら、ここは一旦退くべきだ。そして、暗夜王国第一王子であるマークス王子と共闘する事をオススメする。」

「暗夜の王族に? 馬鹿な事を。だったら何故、暗夜王ガロンの言うことに従っている。」

「暗夜の王子と王女は、あの王がかつての父^王でない事を知っている。だが、あいつを討つには見えざる敵をなんとかしなければならぬのだ。」

「見えざる敵、だと?」

「ああ。禁忌の国の見ええない敵……それが暗夜王を守っている。あの傀儡には禁忌の呪い^{加護}がかけられている。それをなんとかしない限り、暗夜王を倒す事は出来ない。」

「……それでどうすると?」

「ここには、『夜刀神』の使い手が居る。その者に、カミラ王女を抑えてもらう。彼女らの近くには、暗夜王ガロンのつけた監視がある。それを利用して、カミラ王女らを敗者にする。暗夜王ガロンは敗者を許さない。だから、カミラ王女らをこちらに取り込む。その間に、頃合いを見て、ここから離脱して貰う。」

「そんなことをすれば、我が部族は壊滅だ。」

「いや。離脱と同時に故郷に帰れ。そして、部族全員を連れて、しばらくの間だけ隠れ過ごしてほしい。あの暗夜王ガロンは、必ず必然を望む。今回の件で、すでに必然は大きく変わりつつある。それを戻すために動くはずだ。そうなれば、敗者となった氷の部族に構っている暇はないだろう。だが、策は多いほうがいい。だからこそ、しばらくの間隠れて欲しいのだ。つまり、私の出す条件は、ここからの撤退と身を隠すこと。」

「……よくわからないが、ガロン王には何かをしようとする為の時間が欲しいというわけか。だが、どうやるというのだ。」

「カミラ王女らの戦いが終わったら、合図を送る。それと同時に、双子を帰す。」

「合図とは？」

「この氷を溶かす、火の玉だ。安心しろ、船に当てるハマはしない。」と、彼女は足元の分厚い氷を蹴る。

氷の部族長クーリアは眉を寄せ、

「そんなことー」

「できるさ。」

彼女は指をパチンと鳴らす。

彼女の周りの氷が炎に包まれ、氷が溶ける。

水の上に立っている彼女は、

「魔術は得意だ。剣と同じく、頻度も、経験も大いにある。何度も、何度も、繰り返し使って得た力だ。それに、水に変わればこちらの領分。私の加護は水だからな。」

「……わかった。君との取引に乗ろう。では、こちらの条件は我らを生かし、我らと共に暗夜王ガロンを討つことだ。」

「いいだろう。」

彼女は彼らかに背を向ける。

『……これで、氷の部族は無力化できたな。』

そして、次の目的地へと向かう。

フードの彼女が氷の部族長と話していた頃、カムイは飛竜に乗った暗殺者と武器を交えていた。

「私はベルカ。カミラ様の臣下。私の任務は、あなたたちの船を沈めること。そして、あなた……カムイの殲滅。邪魔をする者は全て、消す。カミラ様の為に！」

飛竜に乗った暗殺者の名はベルカ。

カミラの臣下で、カミラと同じように飛竜の使い手でもある。

カムイは剣を強く握り、

「させません！ 私たちには、やらねばならないことがあるんです！」

「私だって、カミラ様の為に殺る！」

二人の攻防戦は続く。

フードの彼女は、この戦場から一番遠い船にやってきた。

その船の甲板に立ち、エリーゼに剣を向ける。

「暗夜の第二王女……ここで人質になって貰おう。暗夜の第一王女を止める為に。」

「エリーゼ様、お下がりを！」

「ここは我らが！」

と、エリーゼの前にピンクの鎧を着た女性と斧を構えた男性が立つ。

二人は槍と斧を構えて、フードの彼女を睨む。

そして、ピンクの鎧を着た女性が槍を振り下ろす。

フードの彼女はそれを避けると、その部分の氷は大きくヒビが入る。

その横に、斧を持った男性が第二波を繰り出す。

それすらも、フードの彼女は避ける。

エリーゼは杖を握りしめ、船の上から叫ぶ。

「エルファイ・ハロルド！」

ピンクの鎧を着た女性はエルファイ。

エリーゼ様臣下で、怪力の持ち主である。

斧を持った男性はハロルド。

彼も、エリーゼの臣下である。

フードに彼女は長剣を構え直し、

「……面倒だな。」

彼らに向かって走り出す。

否、彼らの奥の暗夜王ガロンの向けた兵を暗器を指の間に挟んで放つ。

そして、長剣でトドメを刺す。

フードの彼女は後ろに一回転し、

「さて、他は……」

彼女は暗器を指の間に挟む。

それをどれくらいやったか、彼女は剣をしまう。

そしてエリーゼを見て、

「暗夜の第一王女カミラから聞いている。これで、貴殿を監視する兵はいない。」

それを聞いたエリーゼは頷き、

「エルファイ、ハロルド！止めて！みんなも！」

「エリーゼ様？」

エリーゼは二人の前に駆けて行き、フードの彼女の前に両手を広げて立つ。

「この人は敵じゃないわ。私たちの敵は、偽物の暗夜王よ。それに……私たちに見えない敵。そうマークスお兄ちゃんは言っていた。だから、この人との戦闘はここまで。私につけられていた監視はいなくなつた。だからやつとみんなに言えるわ。」

「……エリーゼ様、それはつまり……」

「ガロン王を裏切る、という事ですわね。」

「あれは、もうお父様じゃないもん。」

一同、シーンとする。

そして武器を下ろし、

「それがエリーゼ様の命令とあれば、私たちは従います。」

「どこまでも、エリーゼ様と共に。」

「ありがとう！」

エリーゼはパツと明るくなる。

フードの彼女はエリーゼを見て、

「では、貴殿は人質になって貰おう。暗夜の第一王女であるカミラ王女の監視は殺さず、奴の元に戻さねばならないからな。その為にも、貴殿らは『カムイ』に負けたと言う事実を作らねばならない。そして、あの王は敗者を許さない。待っているのは死だ。だから貴殿らの命は『カムイ』が貰う。これで、貴殿らをうまく引き入れる事はできる。」

「……分かつた。それでどうしていればいい？」

「これは貴殿の姉君にも言うつもりであったが、臣下二人以外は氷の部族を守って貰いたい。彼らが無事、故郷まで帰り、来るべき時が来るまで、彼らには生きていてもらわねばならない。氷の部族には、すでに言つてある。」

「うん。エルファイとハロルド以外は、氷の部族を守って。でも、バレないようにね。」

エリーゼは部下たちを見る。
彼らは頷き、行動に移す。

「頃合いを見て、カムイ達と合流して貰う。合図はカミラ王女が負けを宣言し、私が貴殿を人質に取った時だ。」

「えっと、わかった……？」

フードの彼女は既に走り出していた。

エリーゼは困惑しながらも、臣下二人と共に動き出す。

フードの彼女がエリーゼを人質に取っていた頃、フローラと刃を交えていたジョーカーとフェリシア。

「姉さん！もう止めて！」

「そうだ！フェリシア！敵は、カムイ様じゃねえんだ！」

「……無駄よ。私は氷の部族として闘うだけよ。」

彼女の氷は、容赦なく二人を襲う。

ジョーカーはそれを避け、

「お前に取って、カムイ様との生活は何だったんだ！」

「……私たち双子は元々、人質としてあの城に押し込まれていたのよ。」

「なに……？」

フローラの言葉に、ジョーカーはフェリシアを見る。

彼女は顔を伏せていた。

フローラは武器を構え直し、

「……私たちは、氷の部族長クーリアの娘。氷の部族が反乱を起こさぬように、私たちは人質にされた。あの城ですと……」

「でも、お姉さん！それでも私は、あそこでの生活は大好きだった。楽しかった。カムイ様に家族と言われて嬉しかったの！」

フェリシアは泣きながら叫ぶ。

フローラは武器を握る手が強くなり、

「そんなの……当たり前じゃない！あの方は、なにも知らない。恨みたかった。いざとなったら、カムイ様を殺してでも、フェリシアを連

れてあそこから逃げたかった！けれど……あの方はいつも笑顔で私を見る。そんな想いを抱いてる私に……。私だって、あの方との生活はとても楽しかった！大切だった！でも、私たちは氷の部族、部族長の娘として責務を果たさなければならぬのよ！」

そして、暗器を振るう。

が、それを短剣で抑え込まれた。

「ここに居たか。」

「あなたは!?？」

フローラを抑え込んだのは、フードの彼女だった。

「戦いはここまでだ。氷の部族長クーリアは、闘いをやめた。」

「嘘よー！」

「嘘ではない。私は、彼と取引した。氷の部族を、ここから無事逃す。そして、生かすとな。」

「……本当に?？」

「ああ……だから、もう争う事はない。そして、お前にまだ『カムイ』を想う気持ちがあるのなら、力を貸すんだ。」

「……わかりました。ひとまず、ここはもう止めます。」

フローラから敵意が消える。

フードの彼女も、短剣をしまう。

「お前たちは、部族の者たちと一旦ここから合流し、離脱しろ。合図は、部族長に教えてある。」

「わかりました。……カムイ様の事、お願いいたします。ジヨーカー、あなたもカムイ様をよろしく。」

「当たり前だ。あの方は、命に代えてもお守りする。」

ジヨーカーも武器を下ろす。

フローラは少し微笑み、

「ええ。あなたはきつと……」

フェリシアは泣きながら、

「絶対、後で合流しますからねー！」

「行くわよ、フェリシア。」

フローラが、泣いているフェリシアを連れて歩いて行く。

フードの彼女はジョーカーを見て、

「お前はカムイと合流しろ。」

「あなたは？」

「生憎、まだやらねばならない事がある。」

彼に背を向け、再び走り出す。

『これで、だいぶ戦況が変わる。』

そして、この戦場において目的の人物を探す。

フードの彼女は、赤い髪を左右で結び上げている女剣士を見つけた。

その女剣士の剣を、長剣で受け止める。

「誰だか知らないけど、あたしはカミラ様の臣下、ルーナ！カミラ様の為に、倒れて貰うわ！」

女剣士の名はルーナ。

ベルカと同じくカミラの臣下であった。

彼女は飛竜には乗っていない。

フードの彼女は、女剣士ルーナの剣を下に抑え込み、

「召喚されし者よ、このまま聞け。」

「!!?あんた×まさか、ラズワルドが言っていた……」

「禁忌の国の兵は見えているな。奴らは、必然を起こすのに必死だ。だからこそ、今がチャンスなのだ。『カムイ』に集まる仲間へ禁忌の国のことを教える。その為に、向こうへ連れて行く。」

「それって……」

「私は、お前たちがここに呼んだ召喚士を知っている。そして、カミラ王女はこの戦闘を望んでいない。カミラ王女を止めるのに、手を貸せ。」

「それが本当として、カミラ様は何でそのことを私たちに言わないのよ。」

「暗夜王ガロンは、既に禁忌の国の呪い加護を受けている。そして、あの王の側には透魔兵見えざる敵がいる。それを少なからず理解しているから、動けないのだ。」

「つまり、動けるようにしたいってわけね。」

「ああ。」

「……どうすればいいの?」

「カミラ王女のもう一人の臣下と合流しろ。そして、上手くごまかせ。」

「え?ちよつと!それって、かなりの無茶ぶりよね!?!」

「……そういう事で任せたぞ。私は、暗夜の第一王女を止めねばならないのでな。」

と、フードの彼女は走って行った。

そこに、女剣士ルーナの怒りにも似た叫び声が響き渡る。

「ちよつとー!!?」

彼女の後を追うかのように走り出した。

ーカムイはカミラの臣下ベルカと刃をまだ交えていた。

そこにジョーカーが駆けつけ、

「カムイ様!ご無事ですか!!?」

「ジョーカーさん!?!?フ、フローラさんとフェリシアさんは☒」

「えつと……申し訳ありません、不測の事態に見失いました。」

ジョーカーは、カムイに襲いかかるカミラの臣下ベルカの斧を防ぎながら言う。

カミラの臣下ベルカは舌打ちをして、

「余計なのが増えた……」

そこに、また一人駆けてきたのが、

「わ、私もいるわよ!」

「ルーナ、何故ここに?持場は?」

「えつと……不測の事態が起きたのよ!走ってたら、丁度アンタを見つけて……じゃなくて、カミラ様の元に……ってカミラ様来てるし!?!」

カミラの臣下ルーナは相方のベルカを見た。

そして、その後方からはフードの彼女と剣と魔術を交えながらやって来るカミラの姿。

それにはカムイ達も驚いた。

「ああ、カムイ……生きていたわね。良かったわ、これで私があなたを

殺せるわ。」

「カミラ姉さん……!」

カミラはカムイへと魔術を放つ。

カミラの臣下ルーナは剣を抜き、

「あー、もう!どうにでもなれ!!?」

「全てはカミラ様の為に!」

カミラの臣下ベルカもまた、武器を構えなおす。

カミラから距離を取ったフードの彼女はカムイを見て、

「止めたいのならば、戦え。そして勝利するんだ。」

「わかりました。カミラ姉さん、行きます!」

カムイは剣を構える。

カミラは瞳を一度揺らした後、

「……ええ。いらつしやい、カムイ。」

武器を構えて、カムイに襲いかかる。

カムイはカミラの振るう斧を剣で弾いていく。

フードの彼女はカミラの臣下ベルカを相手にしていた。

もう一人の臣下ルーナは、場を把握しながら動いていく。

だが、戦況は一気に変わる。

カミラの臣下ベルカを相手にしていたフードの彼女が、その彼女を

叩き伏せる。

そして今度は、剣をもう一人の臣下ルーナに振るって叩き潰した。

カムイも、カミラの斧を思いつきり弾き飛ばす。

斧は回転して、氷に突き刺さる。

体勢を崩したカミラは、氷の上に落ちた。

カムイ達はカミラ達に勝利した。

カミラは膝を着き、

「うっ……あなたの勝ちよ、カムイ。……さあ、私を殺さない。」

「カミラ姉さん!?!」「カミラ様!?!」「」

カムイや臣下達は驚く。

カミラの臣下ルーナは慌てて、

「止めろってこういう事なの!?!カミラ様、考え直して!!?」

「そうです、カミラ様！負けを認めるのは早い……命さえあれば、また好機はある。」

カミラの臣下ベルカは、斧を支えに立ち上がる。

だが、フードの彼女がどこかに隠していたかのように、エリーゼに短剣を突きつけ、

「それは無理だ。こちらには、エリーゼ王女が人質にいるからな。」

「カミラお姉ちゃん……」

「エリーゼ……」

二人はて目で語り合う。

と、横の方からタイミングを合わせたように、

「エリーゼ様!!?」

エリーゼの臣下二人が武器を構えて現れる。

カムイはフードの彼女を見て、

「や、やめてください！エリーゼさんに、そんなこと!!?」

「どちらにせよ、この戦いは終わらせなければならぬ。」

「だからって!!?」

「……今更、人質をとつても意味はないわよ。ここで、カムイを殺せなかった私たちが戻ったところで、待っているのは死よ。だったら、カムイの手で私は死にたい。」

カミラは視線を落とす。

カムイはジッと二人を見る。

まるでそれは事実だというかのように。

カムイは拳を握りしめ、

「それは本当なのです……だったら、お二人の命を私にください。」

「ええ、あなたの手で殺して。」

「はい。ですが、お二人の命は今消えました。今のあなたたちは自由です。その命をください。」

「カムイ……」「カムイお姉ちゃん……」

二人はカムイを見る。

そして涙で、

「信じていたわ、カムイ。」「信じていたよ、カムイお姉ちゃん。」

「え？」

フードの彼女は手を掲げる。

「全員、急いで船に上がれ。でないと、巻き込まれるぞ。」
そう言うと、彼女の足元には魔法陣が浮かび上がる。

それは空に上がっていき、そこから火の玉が落ちてきた。

「ええ!? み、みなさん、急いで船に！」

カムイ達は乗ってきた船に乗り込む。

無論、カミラやエリーゼ達はカムイの乗る船に乗り込む。

火の玉は綺麗に船を避けて氷に当たる。

氷が溶け、辺りは海へと戻る。

フードの彼女は船のふちに立ち、

「さて、上手くいったなによりだ。」

「ええ。本当に……」

カミラがホツとしたように微笑む。

カミラの臣下ルーナは辺りを見て、

「こんな凄惨な魔術を持っていながら、名が知れてないなんて……けど、カミラ様。他の者達はどうするんですか？」

「大丈夫よ。みんなには氷の部族を護るように言っているわ。それに、不測の事態が起きた時は、エリーゼの部隊に理由を聞くように言っているわ。それでわかるはずよ。」

「けど、カミラ様……これは一体どういうことですか？」

もう一人の臣下ベルカが、カミラを見る。

カミラはジッと臣下二人を見て、

「……私たちは、偽物の暗夜王^{お父様}を討ち取る為に動いていたの。けど、見えない敵と私たちにつけられた監視の目が邪魔でみんなにも言えなかったのよ。当初は、私たち兄弟姉妹^{きょうだい}だけでやるつもりだったのだけど、見えない敵のせいで手を出せずにいたの。でも、白夜の第一王子が動き出しでもきた。お兄様は、彼にも手を貸して欲しいと言っていたみたいだから、そうだろうと。だから、私とエリーゼがカムイの仲間になれるように、彼女に手を貸してもらったのよ。」
と、フードの彼女を見る。

フードの彼女はふちに座り、

「あの双子も、今頃は故郷に戻る所だろう。暗夜王ガロンを討つまでは、氷の部族は大人しくしているだろうさ。」

カミラは視線を落とし、

「本当にごめんなさい、カムイ。あなたに刃を向けて……」

「い、いえ……私も何も知らなかったとはいえ、姉さん達に剣を向けてしまったのは事実です。……お互い様、という事です。」

カムイは苦笑する。

カムイは笑顔になり、

「仲間が増えましたよ、みなさん！ さあ、行きましょう。兄さん達に会いに！」

カムイ達は次の目的地へと急ぐ。

第十三話 仲間を求めてくその4

黒き王女は想う。

幼き頃、自分には多くの異母兄弟姉妹がいた。

たまに見る王は、側に来ない。

側に行く子供はいつも、正妻の子。

けれど、目が合えば微笑みかけてくれた。

幼いおぼろげな記憶にある王は、そうだった。

けれど、いつからか王は変わった。

あれは確か……そう、正妻が亡くなったからだ。

自分の母や他の異母兄弟姉妹達の母が荒れていたのを覚えている。

異母兄弟姉妹同士の戦いも始まっていた。

そして、正妻の座に着いたのは見知らぬ女性。

彼女には子供がいたと言う。

名は確か……アクア。

けれど、それがその子供にとっては悲劇の始まりだったのかもしれない。

見れば、酷い仕打ちを受けていた。

自分は見ても見ぬフリをするしかなかった。

関われば、自分も同じ目にあうのは目に見えている。

だから、忘れるように、気付かぬように過ごした。

そしてそれは、次第にそれは薄れていく。

突然、彼女の母が死んだ。

再び、正妻が亡くなったのだ。

異母兄弟姉妹の王位争い。

正妻の座をかけた女の醜い争い。

けれど、妻も子も次々と死んでいった。

残ったのは正妻の子ども二人と自分、幼い弟と妹だった。

自分は正妻の子である兄に連れられ、幼い弟と妹に出会った。

可愛い、愛おしい子ら。

ある時、後妻の正妻の子は誘拐されたと聞いた。

代わりに、新たな姫が北の城で発見された。

その子は病弱で、城から出る事は出来ないのだと。

けれど、自分は噂を聞いた。

ーあの城にいるのは、白夜王国から誘拐された姫だと。

それは確かかもしれないと思う。

まるで檻に囚われた生活。

籠の中の鳥。

初めて会ったあの子は、あまりにも弱かった。

父を失い、母もいない。

本当の兄弟姉妹きょうだいからも引き離された、可哀想な子。

何も知らないこの子を、愛おしく思う。

自分達を兄弟姉妹きょうだいと言う、この子の事を……

ーカムイは甲板の上で、カミラとエリーゼと話していた。

「フローラさんたち、上手く逃げれたらいいのですが……」

「大丈夫よ、カムイ。私やエリーゼの部隊が共にいるんですもの。それに、フローラやフェリシアも、とても強いもの。その気になれば、氷を自在に使って逃げ延びるわ。それこそ、昔あなたが作った隠れ家みたいな、ね。」

「ふふっ、懐かしい話ですね。」

「そうだよ！カムイお姉ちゃんが居なくなつて、大騒ぎになつたんだよー！」

「そうでしたね。」

と、三人は笑いあう。

カムイはホツとしたような笑顔で、

「私、嬉しいです。こうして、カミラ姉さんやエリーゼさんと昔みたいにお話できて……本当に嬉しいんです。」

「それは私もだよ、お姉ちゃん！」

「ふふ。そうね、まるで夢でも見てるみたいね。あなたのおかげで、私もエリーゼもこうして笑える。あなたを信じて良かったわ。」

「もちろん、私も、いつだってお姉ちゃんを信じてるよ。」

「……カミラ姉さん、エリーゼさん。」

二人は、カムイに微笑む。

カミラは笑顔のまま、

「けど、やっぱりまだ信用はされてないみたいね。そちらで盗み聞きしているのは、白夜の方々かしら？」

と、船の隅を見る。

ガタつと言う音と共に、

「ひゃっ!? ええ、えつと、私は、その……」

「ごめんなさい。盗み聞きするつもりはなかったのだけど、どうしても気になってしまつて。」

サクラが慌てて出てくる。

その後ろから、アクアがゆっくり出てくる。

カムイは苦笑して、

「サクラさんに、アクアさん……多分、それだけではないとは思いますが……」

おそらく、物陰に隠れた白夜軍勢と暗夜軍勢。

もしかしたら、フードの彼女もいるかもしれないとカムイは思う。

だが、カムイの言葉を、いや、カムイが言った名を聞いたカミラが表情を変えて、

「アクア……?もしかして、あなたは……あのアクアなの?あの日、城から連れ去られた……」

「……私を覚えていたの?」

「ええ。城で何度か、見ていたわ。ごめんなさいね、アクア。あの頃の私は、あなたを救ってあげられなかった。あなたがどんな辛い目にあっていたか、知っていたのに……」

カミラが涙目になる。

カムイはアクアとカミラを交互に見て、

「え?アクアさんが?」

「アクアはシュンメイ王妃と言う、お父様の後妻の子なの。けれどお城では、前妻であるエカテリーナ王妃の派閥が強くて……私のお母様も、エカテリーナ派だったわ。だから、アクアには関わるなど言われていたわ。それはもちろん、エカテリーナ王妃の子であるマークスお

兄様も。そしてしばらくして生まれたレオンも、同じことを言われていたわ。でも、私たちはずっと、アクアとは兄弟姉妹きょうだいとして過ごしたかった。マークスお兄様は、あなたをずっと救いたいと想っていたわ。忘れることのできない……大切な妹。私の可愛い妹だもの、アクアは。」

カミラは真剣な表情でアクアを見つめる。
ずっと考え込んでいたエリーゼが、

「つまり、あなたは私のお姉ちゃんになるんだよね？嬉しいな、お姉ちゃんが増えた！よろしくね、アクアお姉ちゃん！」

パツと笑顔になって、大いに喜ぶ。

アクアは視線を落として、

「カミラ、エリーゼ……ありがう。また、あなたに妹と、姉と呼ばれて、私は嬉しいわ。けど、私は暗夜の血を引いていないの。詳しいことは、ここでは言えないけど……」

「そうなの？でも、お姉ちゃんには、変わらないよ。」

「ええ、そうね。カムイが、私たちとは血は繋がってないとわかって、兄弟姉妹きょうだいと呼んでくれるように……あなたも、私たちの大切な兄弟姉妹よ。」

「ありがとう……」

アクアは顔を上げる。

カミラはサクラを見て、

「すぐに信じる、とは言わないわ。元々、敵同士でいたものね。けど、安心して。私はカムイの悲しむことはしないわ。これから先は、暗夜と白夜が手を取り合って戦うことができる。共に、平和な世界を作りましょう。だから、よろしくね。」

「は、はい……、こちらこそ！」

サクラは元気よく返事する。

エリーゼはサクラを見て、

「サクラ王女、年が近いもの同士仲良くしようね！」

「は、はい。エリーゼ王女、よろしくお願ひします。」

二人は互いに微笑み合う。

それから、各々休息や話をしだす。

カムイはリリースと共に、甲板を歩いていった。

「こうして、白夜と暗夜の姉妹きょうだいで、旅ができるなんて夢の中ようです。まだまだ道のりは遠いかも shouldn't。けれど、希望は見えてきた。白夜と暗夜の平和への道、きつと大丈夫。私たちならきつと……」

《はい、カムイ様。きつと、カムイ様たちなら大丈夫です。》

と、カムイはオロオロして悩んでいるエリーゼとサクラを見つけた。

カムイは二人に近づき、

「どうしたんですか？サクラさん、エリーゼさん。」

「あ、姉様！じ、実は……」

二人は互いに見合う。

そしてエリーゼが、

「あの人が、あそこで寝てるみたいなんだけどね、ここだと寒いと思うの。でね、毛布を渡そうかなって思ったんだけど、それよりも、部屋で寝たほうがいいかなって……」

そうエリーゼが見る先には、フードの彼女が船の柱に背を預けて座っていた。

その彼女の方が上下しているのを見て、寝ているとわかる。

カムイも頷き、

「そうですね。ここでは風邪を引いてしまいますね。」

「じゃ、みんなで行こう！そうすれば、怖くない！」

「そ、そうですね！」

二人は頷き合う。

カムイは苦笑して、二人と共にフードの彼女に近づく。

そして、エリーゼとサクラが声をかける。

「あ、あの！……ここだと、風邪を引いてしまいますよ！」

「だから起きて！ね！」

エリーゼが彼女の肩を触れようとした時、フードの彼女が反応する。
彼女から放たれる殺気は怖かった。

彼女は短剣を抜き、振るう。

「きゃっ!!?」

「サクラさん・エリーゼさん!」

カムイが咄嗟に二人の前に手を広げて立つ。

リリースが慌てる。

が、彼女の短剣は、カムイの顔の前でピタッと止まる。

しばらく固まり、彼女は頭を押さえて辺りを見渡す。

彼女は短剣をしまい、

「……すまない、寝ぼけていた。こちらの不手際で、危ない目に合わせ
てたな。」

「い、いえ。大事がなかったのでよかったです。」

カムイは手を下す。

サクラとエリーゼも頷く。

フードの彼女は伸びをして、

「……普段は誰の目にも止まらないところで寝るのだが、どうやら寝落
ちしてしまっただようだ。」

カムイはその言葉に、フードの彼女を見る。

「どうしてですか?一緒に寝ても、誰も怒りませんし、不快にも思いま
せんよ?」

「……それは、お前の価値観だ。誰しも皆が、そうではない。それに、
寝込みを襲われて死ぬのは避けたいからな。」

「!!?そんなことー」

「無論、ここの連中がそんな事をするとは思っていない。が、警戒は解
かないほうが良いのだ。どこに敵の目があるかは、わからないのだから
な。」

「ですが……」

「忘れるなよ。私は仲間ではない。あくまで協力者として、共にい
る。」

フードの彼女はカムイ達に背を向けて歩いて行った。

サクラは困ったような顔をして、

「あの方は、よくわかりませんね。味方だけど、とても遠い。」

「はい。ですが、いつだって私たちを助けてくれます。」

「うん。あの人はきつと、カムイお姉ちゃんと同じくらい優しい人なんだと思う。けど、それと同じくらい自分に厳しい人なのかも。」

「そうかもしれないね……いつか、あの人も、本当の仲間になれると良いです。いえ、きつと頑張ってみせます。」

カムイは、表情が暗くなる二人を見ながら言う。

二人も、明るい表情になって頷く。

船は順調に進み、港に無事着いた。

ここからは徒歩で進む。

すると、シュヴアリエ公国が見えてきた。

だが、遠目からでもわかる。

煙が見えてくる。

これは戦闘での煙だ。

カムイ達は急いで向かう。

シュヴアリエ公国に着くと、辺りは倒壊していた。

所々、戦火の煙や炎、瓦礫の後がある。

そして、未だ戦闘音が鳴り響くアミュージアへとやって来た。

カミラが辺りを見渡し、

「なんてことなの……アミュージアが見る影もないわ。」

「……戦いがあつたのは間違いないですね。」

カムイも辺りを見渡す。

カミラは苦しそうに、

「ああ……そんな、アミュージアは戦いとは無縁の町だったのに。」

「私たちが白夜にいる間に、こちらで何かあつたのかもしれないね。」

「そうね……リヨウマたちが、どこがにいるはずだけど……」

アクアは眉を寄せて、フードの彼女を見る。

「……本来なら、ここで訪れる必然は少なからず、回避にしたに近い。なのに、被害はここまで拡大している……だとすると、やはりあいつが……」

フードの彼女からは殺気が放たれる。

カムイ達はビクツと反応し、何人かは視線をそらす。と、カムイは向かいの方から誰かが来るのを見た。

「ん？こつちに、誰か来ますね？」

「あれは……」

カミラも、遠目で同じものを見る。

そこには大きな金狐が、耳と尻尾が生えた人型の何かを啜えてやって来た。

見ると、怪我をしている。

そして、カムイ達の前に来ると彼を下ろし、金狐は彼と同じ人型へと変わる。

金狐の方は膝を着き、

「そ、そこのヒトたち……来ちゃダメだ……」

「この町は……危険だ。近付くな。」

金狐が啜えてきた彼が起きる。

カムイは真剣な顔になり、

「サクラさん、エリーゼさん、治療をお願いします！」

「は、はい！」「う、うん！」

二人は彼らに治癒をかける。

二人の傷が癒え、

「へへ、傷が治ったぜ！生き返った気分だ！」

「ありがとう、親切なヒト！この恩は必ず返すよ！」

と、二人は元気にサクラとエリーゼを見る。

二人は微笑み、

「い、いえ、私たちはできる事をしただけで……」

「そうそう、元気になって良かったわ！」

アクアが二人の前に立ち、

「ねえ、ところであなたたち。どうして、ここがこうなったか知ってるかしら？」

「えっとね、ボクたちは、ただこの町に立ち寄っただけなんだけど……不思議な事に、暗夜の第一王子と白夜の第一王子が共闘をすると聞いたんだ。そして、反乱兵とも共闘をするってさ。けど、そこに暗夜軍

が押し寄せてきたんだ。そんなに多いわけでもないのに、彼らのほうが苦戦しててね。一気に戦火が広がったんだ。」

「しかも、戦闘が行われていなかった場所でも、兵士もいないのに町が破壊されていくんだ。俺らはなんとかしようとしたけど、何かに返り討ちにされた。」

二人は眉を寄せて、思い出して言う。

フードの彼女は腕を組み、

「なるほど……なら、見えない敵は見える我々が、他の者たちは第一王子達と合流しろ。」

「え？でも……」

心配するカミラ達。

だが、カムイは武器を構えて、

「大丈夫ですよ！見えない敵は、私たちに任せて下さい！それよりも、兄さんたちも心配です。それに、この町の人たちの避難も済ませないと！」

「そうね……わかったわ、カムイ。」

カミラは力強く頷く。

と、二人がカムイ達を見て、

「それなら、ボクらも手伝うよ。恩は返さないよ！ボクは世界一美しい妖狐のニシキ。」

「俺は、ガル一族のリーダー、フランネルだ！町の連中は俺らがなんとかする。俺らは獣石と呼ばれる石を使って、狐と狼になれる。だから、戦闘も可能だしな。」

「わかりました。私はカムイ。ニシキさん、フランネルさん、お願いします。」

カムイ達は、三手に分かれる。

カミラ達は戦闘を行っている兄達の元へ行く。

「お兄様！」「マークスお兄ちゃん！」「兄様！」

カミラ達が武器を構える。

マークスとリヨウマは敵をなぎ払い、

「カミラ！エリーゼ！」「サクラ！」

二人は彼らと合流する。

マークスは、カミラとエリーゼを見て、

「お前達が、白夜の者達と共にいるということはカムイと合流できたのだな。カムイは？」

「ええ。カムイ達は見えない敵を倒しに行ったわ。私たちは、お兄様達を助けに！」

カミラとエリーゼ、サクラ以外はすでに動き出した。

リヨウマは敵を見ながら、

「なら、頼む！だいぶ、兵の数は減らしたが、ここにも見えない敵がいるみたいでな……苦戦している。敵は暗夜王の放つ敵だけではないということだ。向こうはすでに、裏切り者マークスを討つ為に来ている。そして、ここに来るであろう『カムイ』を殺すつもりだ。」

「そんな？？」「お姉ちゃんが」

サクラとエリーゼは悲鳴をあげる。

エリーゼはグツと拳を握りしめ、

「よーっし！行くよ、サクラ王女！みんなを回復しに！」

「は、はい！エリーゼ王女！」

二人は駆けていく。

リヨウマも、奥の方での爆発を聞き、

「あっちもか！俺はあちらに行く！」

そこに向かって駆けて行った。

カミラは眉を寄せ、

「お兄様、レオンは……」

「レオンは、後から合流するはずだったのだが……」

「きつと、無事ですわ。あの子はとても聡明ですもの。」

「そうだな。」

二人は頷き合い、敵と向かい合う。

フードの彼女は暗器を投げて、見えない敵を倒していた。と、鳴き声と呻き声が消えてくる。

「うわーん、お母さん！」

「逃げなさい！あなたまで下敷きになってしまおうわ！」

「イヤだ！絶対にお母さんを助けるんだ！」

フードの彼女は二人を見た。

子供は、瓦礫の下敷きになった母親を必死になって助けようとしていた。

『……救える命と救えぬ命。』

その親子の元に、暗夜兵が近づく。

フードの彼女は長剣を振るい、兵を斬る。

そして剣をしまう。

と、彼女のフードを引つ張る。

「お願い、します！お母さん……お母さんを助けて！」

彼女は子供を見る。

子供の姿が変わる。

彼女の中にある、一人の男の子。

——絶対に……お母さんを助ける……んだ！ボクが……ボクが！！

？約……束……するよ……

そして彼は死んだ。

その姿を、ふと思い出す。

フードの彼女は少し沈黙した後、母親を押しつぶしている瓦礫に手をかける。

そして上に持ち上げようとするが、ビクともしない。

魔術という手もあったが、それでは逆に危険だと判断したのだ。

だからこそ、瓦礫を退かそうとしたのだ。

「お願いです……私の事はいいです……だから……お願いします。この子を……この子を安全なところへ……この子だけでも……」

母親が、フードの彼女に訴える。

彼女は瓦礫から手を離そうとした時、

「諦めるな！いま助ける！」

男性の声が聞こえてきた。

その声と共に、瓦礫が持ち上げられる。

フードの彼女は、彼を見る。

赤い鎧を着た白夜の王子。

彼はそれを退かし、瓦礫から解放された母親が起き上がる。そして子供と抱き合う。

母親は涙を流しながら、自分を救ってくれた二人を見る。

「ありがとうございます！」

「いや、いい。それより、早くここから避難するんだ。」

「は、はい。」

親子は頭を下げてから、避難する。

フードの彼女は彼を見て、

「……礼を言う、白夜の第一王子。」

リヨウマは、フードの彼女を見下ろし、

「礼には及ばん。助けられる命があるのなら、助けて当然だ。だが、あのとき諦めようとしたか？」

「ああ……私では、あの母親は救えない。そう判断した。なら、あの母親が望むように子供だけは助ける、そう決めた。それが、関わった者の責任だ。」

「そうだな。確かに、そうだ。」

「白夜の第一王子、救える命と救えぬ命が目の前にあった時……貴殿ならどうする。」

「どちらも救いたい。だが、それができぬ時もある。それでも、一人でなければ救える道はあるはずだ。」

フードの彼女は、彼の力強い瞳を見た。

そして、やって来た敵を見て、小さく呟いた。

「……貴殿は、変わらぬな。」

「ん？何か言ったか？」

「気にするな。それより、退がれ。」

自分の横で、刀を構えるリヨウマに彼女は言う。

リヨウマは眉を寄せ、

「何故だ。この程度の数ならー」

「ああ、貴殿なら問題ないだろう。だが、貴殿には見えぬ敵にも囲まれ

た。なら、ある程度まとめ一掃した方がいい。」

そう言つて、彼女は右手を上げる。

足元には魔法陣が浮かび、空に上がっていく。

「貴殿の雷神刀武器とは、相性が良すぎる。」

そう言つと、空から雷が鳴り響く。

雷が敵にめがけて、何本も落ちてくる。

カムイは飛竜に乗った女戦士と会った。

「……もしかして、アンタがカムイかい？」

「は、はい。」

「やっぱりね。私はクリムゾン。このシュヴァリエ公国で、反暗夜のレジスタンスをしている。あんたの事は、リヨウマから聞いているよ。」
彼女が、カゲロウが言っていた反乱軍のメンバーであるクリムゾン。

暗夜の方針に、反旗を掲げる女戦士。

カムイは少し驚き、

「リヨウマ兄さんから？」

「ああ。元々、私とリヨウマは暗夜を倒す協力者同士だったんだ。そんなリヨウマから、幼い頃のあんたのことや帰つて来たあんたの話を聞いた。話じや、白夜と暗夜の両方と協力して平和を掴もうとしてると聞いた。」

「はい。」

飛竜使いクリムゾンは、カムイの瞳を見る。

彼女は、カムイの瞳を見て微笑む。

「ふふ。思った通り、いい目をしてる。リヨウマと同じ、嘘のない澄んだ目だ。……リヨウマが、暗夜の王子と共闘をするって言った時は驚いた。けど、『自分は知っている。暗夜と共に戦えることを。』そう言つたんさ。そして暗夜の第一王子に、『自分はカムイを信じる。カムイの平和を守ろうとする意志を知っている。自分は白夜の王子として、あの子の兄として、真の敵を討つ！』。そう言つて、手を握り合うリヨウマを見たら、嘘じやないって思った。」

「兄さん……」

飛竜使いクリムゾンはカムイをジツと見て、

「私にあんたを信じるよ、カムイ。だから私も、あんたらの仲間になった。それを裏切らないでおくれよ。」

「はい、クリムゾンさん！その為にも、今はここをなんとかしてみせます！」

「ああ、期待してる。見えない敵とやらを倒してくれ。見える敵は、私らがなんとかする！」

二人は互いに背を向けあい、敵に向かっていく。

フードの彼女はリヨウマを見て、

「これくらいなら、いいだろう。片付けるぞ、白夜の第一王子！」

「おう！」

二人は互いに背を預ける。

リヨウマは敵を倒しながら感じる。

彼女には、自分の背中を預けられる。

強く懐かしい、それでいて護りたくなる。

やはり自分は、この少女を知っている。

なのに、思い出せない。

フードの彼女は、リヨウマには見えない透魔兵^敵も、暗夜兵も斬っていく。

そして想うのだ。

この懐かしさを。

けれど、彼女はその想いを捨てる。

戦いに集中する為に。

彼を、いや、彼らとの絆^{関係}を作らぬように。

カムイは、アクアと合流する。

飛竜使いクリムゾンは、避難している村人達の方を手伝いに行つた。

カムイとアクアはマークス達の元へ向かっていた。

マークスの臣下であるラズワルドが、

「マークス様！」

マークスを背後から斬ろうとしていた見えぬ^透魔^兵の敵を斬る。

マークスは彼を見て、

「ラズワルド、お前は見えているのか？」

「……はい。自分がかつて、彼女の言った禁忌の国に訪れております。そして僕は、あの国の秘密を知っています。」

「……ならば、お前は見えぬ敵を討て。この場で、見えぬ敵を討てる者は多い方がいい！」

「わかりました！」

彼は武器を構え直し、見えぬ^透魔^兵敵を斬っていく。

カミラは飛竜に乗り、斧を敵に降り下ろす。

だが、カミラを狙った矢が飛んでくる。

「カミラ様！」

ルーナが、矢を斬り裂く。

そして、矢を放った見えぬ^透魔^兵の敵を斬る。

カミラが眉を寄せ、

「ルーナ、あなたは見えてるのね？」

「……はい。」

「なら、あなたは見えぬ敵を倒して。」

「はい、カミラ様！」

ルーナは剣を構え直し、見えぬ^透魔^兵敵を倒していく。

と、同じく見えぬ^透魔^兵敵を倒していたラズワルドと会う。

「ルーナ、君もか。」

「ええ。私たちは与えられた使命と命令を果たす。」

「ああ！」

二人は背中を合わせて闘う。

カムイとアクアはマークス達を見つけた。

「マークス兄さん！」

「カムイか！」

「無事よかったです。……リヨウマ兄さんは？」

カムイは辺りを見渡すが、リヨウマの姿はない。

マークスは真剣な顔で、

「リヨウマ王子は別行動中だ。今に合流できるだろう。」

マークスはカムイの横のアクアを見て、

「ある程度の事は、カミラから聞いています。だが、カムイと同じく、アクアも大切な我らの兄弟姉妹きょうだいなのは変わりない。共に、真の敵を討とう。」

「マークス……ありがとう。」

アクアは凧刀を握り締める。

マークスは二人に背を向け、

「では、この敵を倒すぞ。」

「はいー」「ええー！」

二人も武器を構える。

フードの彼女は、その場の敵を全て倒し、剣をしまう。

リヨウマも敵を倒しきり、剣をしまう。

「そつちも、終わったようだな。」

「ああ。これから、お前は どうする？」

「……他の者達とも、合流した方がいいだろう。こうなった以上、敵の動きを正確に把握しておきたい。それに、残りの戦力を全て送り込む可能性もある。」

「そうか。よし、行くぞ。」

二人は走り出す。

『おそらく、この透魔兵の指揮を待っているのは、あいつだ。なら、必ずカムイを襲う。もしくは、歌姫か。』

カムイは剣を振るっていた。

が、見えない敵透魔兵に気を取られ過ぎていた。

背後からカムイに襲いかかる暗夜兵。

アクアとマークスがそれに気づき、

「カムイ!!?」

「ハッ!!?」

カムイは咄嗟に振り返るが、防御が間に合わない。

そこに、矢と魔術が放たれる。

「全く、見えない敵とやらの気を取られすぎだよ。カムイ姉さん。」

「レオンさん!」

そこには馬から降りるレオンの姿。

そして、空から天馬の鳴き声と羽ばたき音が聞こえ、

「そうだぞ、カムイ。」

「僕の矢が間に合って、よかったよ。」

「ヒノカ姉さん!それにタクミさんも!」

天馬に乗ったヒノカとその後ろに乗ったタクミが降りてきた。

レオンとタクミは互いに目が合う。

二人はムツとし合った後、視線をそらす。

他にも続々と、

「レオン様、置いてかないくださいよ!」

「いくら、カムイ様が危なかったとはいえ、敵の中に突っ込むんですから……もつと注意を。」

「オーデイン、ゼロ。」

レオンを追ってきた魔術師と弓使いも、馬を降りる。

レオンはカムイを見て、

「姉さん、この二人は僕の臣下。あつちの魔術師はオーデイン、弓使いの方はゼロ。」

「よろしく願いますね、カムイ様!」

「世話になりますよ。」

二人はさつとカムイを見る。

カムイも頭を下げ、

「はい、こちらこそ。」

「さて、オーデイン。お前に命令だ。見えない敵とやらを倒して来い。どうやらお前は、見えてるみたいだしな。ここに来る途中も、倒してたろ。」

レオンは臣下オーデインを見る。

彼は少し驚いた後、

「いやー、レオン様には敵わないな。わかりました、俺行ってきまーす

！」

彼は駆け出していく。

そして白夜側でも、

「タクミ様ー！追いつきましたよ！」

侍と槍使いが、馬を走らせてやってきた。

「ヒナタ、オボロ。」

タクミはカムイを見て、

「カムイ……姉さんは、初めてだよね。僕の臣下のヒナタとオボロね。」

「よろしくっすー！」「よろしくお願いいたしますわ。」

二人はカムイを見た。

カムイ 頭を下げ、

「はい、こちらこそ。」

タクミの臣下の侍はヒナタ。

タクミとは仲が良く、剣の稽古も共にやるとか。

同じくタクミの臣下の槍使いはオボロ。

彼女はオシャレ好きで、時々タクミの髪をといてるとか。

その彼らの後ろから、

「ヒノカ様……やっと追いついた。」

「いやはや、とてもお速い。さすがですねえ。ユウギリさんとオロチさんも、戦闘を始めております。」

ボヤツとした感じの弓使いとフワツとした僧侶が馬を走らせてやってきた。

ヒノカは頭を抱え、

「なら、お前たちも戦わないか……」

「おやおや。セツナならともかく、私は治療専門ですよ。」

「なら、治療に回ってくれ。セツナは援護を。」

「ええ、了解です。」「はい。」

二人は駆けていく。

タクミの臣下の二人を見て、

「心配だから、二人もよろしく。」

「おう、任せとけ!」 「お任せを!」

二人も、二人を追っていく。

ヒノカはカムイを見て、

「すまん、カムイ。あれは私の臣下のセツナとアサマ。あの二人はちよつと……いや、かなり危なかつしくてな。特にセツナが……」

ボヤツとした感じの弓使いはセツナ。

ヒノカの臣下で、彼女を守るといふより守られる方が多い。

フワツとした僧侶はアサマ。

彼もヒノカの臣下で、戦闘は不向きだが治療は得意。

頭を抱えているヒノカを見たカムイは、

「そ、そうなんですか……」

苦笑していた。

それは、エリーゼのところの臣下ハロルドを思い出す。

船の中で、彼はことごとく不運に見舞われていた。

そこに、フードの彼女とリヨウマが駆けてきた。

カムイの仲間が次々とそろっていく。

「リヨウマ兄さん!」

「カムイ! 無事でなによりだ。それに、ヒノカとタクミも駆けつけてくれたか!」

「お待たせしました、兄様。」

ヒノカがリヨウマを見る。

フードの彼女は見る。

カムイを中心に、白夜と暗夜の者が共にいる。

それはかつての仲間^{自分}を思い出す。

「どうかしたのか?」

リヨウマが一人離れていたフードの彼女に声をかけた。

フードの彼女は自分の仮面を触れ、

「……いや、昔を思い出しただけだ。」

そして、仮面を触れていた手を離す。

マークスが近づき、

「ずいぶんと、リヨウマ王子とは仲が良いのだな。」

「……気のせいだ。」

「いや、私の時とは雰囲気が違う。それに、何故だろうな……それが本来の姿ではないか、と思うくらいだ。」

「……それは気のせいだ。それより、武器を構えろ。沢山いるぞ。」

彼女は、そう言いながら武器を抜く。

他の者達も武器を抜き、大量にやってきた暗夜兵に戦いを挑む。

フードの彼女は暗夜兵を斬りながら、

『おかしい……透魔兵がいない。あいつなら、仕掛けてくると思ったが……』

暗夜兵の数も減つてくると、ラストスパートはあつという間に終わる。

だが、それなりに体力も、気力も、減つているところに見えない敵が現れる。

「ここに来たか……」

「行きますー！」

見えるカムイ達はもうひと頑張りする。

カムイとアクアは息を整える。

すぐ近くでは、フードの彼女による魔術が放たれている。

おかげで、敵はだいぶ減っている。

だが、高位魔術を使い続けている彼女にも、疲労は出ている。

アクアは息を整え、

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

歌を歌い出す。

その歌を聞いた見え^透ない敵^{魔兵}の動きが鈍り始める。

「敵が！一気に叩き込みますー！」

カムイが剣を振るい続ける。

フードの彼女も、その歌を聴き魔術のペースを上げる。

アクアは膝を着き、歌が止まる。

リヨウマとマークスが側に寄り、

「大丈夫か、アクア！」

「無理をするな。」

アクアは息を整え直し、立つ。

「大丈夫よ、リヨウマ、マークス。私の歌には力がある。ただ、これは呪いの力も受けてしまう。けど私は、私にしか出来ないことをすると決めたの。」

アクアは力強い瞳を向ける。

カムイもその場に来る。

「アクアさん！大丈夫ですか!?!?」

「ええ、大丈夫よ。まだやれるわ。」

すると、パチパチと言う音が聞こえてきた。

彼らの前、ミュージアムの舞台があつた場所。

そこに黒い騎士が立っていた。

彼が、アクア達を見て拍手していた。

「いやはや……変わりませんね、アクア様。あなたの、その強い瞳は昔から変わらない。」

アクアは、その黒い騎士を見て驚く。

彼女の頬に汗が一つ流れ、

「……アベル。」

「おや？幼かったあなたには、私の事など覚えていないと思っております。」

拍手を止め、腕を組んで悩むアベルと呼ばれた黒騎士。

アクアは凧刀を持つ手に力を込める。

「覚えていて当然よ。私の愛しき者たちを傷付けた。あなたは、私の父だけでなく、父の騎士であつたあなたの実の兄までも殺した。そして、私と母を死に追いやろうとした張本人。私の目には、今でもあの光景が残っているわ。」

「アクアさん……それって……」

カムイは透魔王国で聞いた事を思い出す。

彼女は透魔王国の王女。

彼女は父を殺され、透魔王国^{故郷}を追われた。

黒騎士アベルは頷き、

「なるほどね。……それにしても、白夜と暗夜の合流が早いな。」

辺りを見渡す。

そして、カムイの持っている刀を見て、

「おや？あの時は気づかなかったが、夜刀神を君が持っているとは。」

「え？」

カムイは眉を寄せる。

彼は冷たい笑みを浮かべ、

「でも、当然か……あの子が、その刀を所持していない時点で、『カムイ』の元に『夜刀神』があるのは必然。あの子が、この『カムイ』を殺していない時点で、起こりうる必然か……」

「何を言っているんです？」

カムイは困惑する。

逆にアクアはハツとしたように、眉を寄せる。

黒騎士アベルは笑みをより一層深くし、

「その『夜刀神』は元々、あの子の父親の刀だからですよ。ね、アクア様。」

そう言つてアクアを見る。

それは、アクアが知っているかと判断したからでもある。

アクアは額に汗を出し、拳を握り締める。

リヨウマは眉を寄せ、

「バカな！夜刀神は、伝説の神刀！時代が合わない……いや、待てよ。あの者なら……」

リヨウマの中には、ある者を思い出す。

そして、それは确实となる。

「はあああああ！」

そこに、声が響く。

黒騎士アベルは剣を抜く。

真上から来た剣を受け止め、

「全く……師にむかつて、挨拶もなしに斬りかかるとは。」
「黙れ！」

それは、フードの彼女だった。

彼女には怒りが見える。

だが、それよりも彼が、彼女の師と言うのに驚いた。彼女の剣を交えるその剣技は、確かに似ている。

「やれやれ。昔の君はもつと素直でいい子だったはずだが？」

「黙れと言っているー！」

「……そんなにも、私が憎いかい？」

黒騎士は目を細めた。

フードの彼女の剣が重くなると同時に、軽くなる。

彼女は吹き飛ばされた。

瓦礫に叩きつけられ、

「ぐっー！」

追撃を防げない。

それを、リヨウマとマークスが剣を振って守る。

「おっと。」

黒騎士アベルは距離をとる。

リヨウマが彼女を見て、

「大丈夫か!?？」

「……問題……ない。」

彼女は剣を支えに立ち上がる。

そして二人の前に出ると、剣を構え直す。

黒騎士アベルは面白そうに、

「いやー、王子たちと仲良くなっちゃって。それともー」

彼の雰囲気が変わり、

「懐かしくなった？かつての仲間を思い出しちゃったかな？」

「もとより仲間はいない……。アベル……。何故、父を裏切った。」

フードの彼女は握る剣に力が入る。

黒騎士アベルは構えず、笑みを浮かべた。

「それは、どちらの父君かな？」

「両方だ！」

「……決まってる。それが、君の父君の望みだからだ。世界の崩壊を、人類に滅亡を。」

「違う！父は人も、世界も、仲間も大切にしていた。何よりも、家族を

愛していた！確かに、人を信じられなくなった父はいた。闇に飲まれた父はいた。けれど、それを嘆き苦しんでいる！」

フードの彼女は剣を握る力が、さらに強くなる。

黒騎士アベルは左手を顔にあて、

「ふ、ふははは！それは、そうだ。あの方々は優しい。けれど、彼らのもたらず闇は美しい！光を塗り潰し、暗よりもなお、黒く輝く……君も、今に同じになる。君は、私と違い非情になりきれない。何故なら……」

顔から左手を外し、

「再び繋がりを使ったからだ！今の君は、殺せない。『カムイ』の仲間を！」

「……アベル!!？」

フードの彼女は再び剣を降り上げるが、

「そこまで、です。」

彼女の剣は黒騎士アベルではなく、白き騎士に止められた。

フードの彼女は距離を取り、

「……なぜだ……」

「なんであなたが……カイン！」

アクアも眉を寄せて叫ぶ。

カインと呼ばれた白騎士。

彼はアクアに頭を下げ、

「お久しぶりです、アクア様。しばらく見ないうちに、ますますお綺麗になって。あのお二方とソツクリです。」

「ちゃんと答えて、カイン！あなたは、あの日アベルに殺されたはずよ！私とお母様を守って……」

アクアは首に下げているペンダントを握り締める。

白騎士カインは顔を上げ、

「ええ、私は死にました。けれど、あの方の呪い加護を受けて復活したので。今の私は、あの方を裏切れない。」

「……カイン！ごめんなさい……」

アクアは瞳を揺らした。

白騎士カインは黒騎士アベルを見て、
「アベル、あまり度の過ぎた行動は慎め。それに、我らが軍師殿が探している。」

「そうでした。ですが、兄上は会ったことはないはずでしょう。」
「白王殿から聞いたのだ。」

「なるほど。では、帰りましょうか。」

黒騎士アベルは笑顔でそう言った。

白騎士カインは拳を握り締め、

「待っていますよ、アクア様。あなたが、私の前に来てくださることを。」

「ええ。必ず……」

アクアは白騎士カインの背を見つめる。

黒騎士アベルと白騎士カインは黒い炎に包まれて消えた。

そして、戦場にいた見え^透魔^兵敵も、黒い炎に包まれてその場から消えた。

フードの彼女は剣をしまい、

「……クソ。」

唇を噛む。

アクアはカムイとリヨウマ、マークスを見て、

「……ごめんなさい、詳しく話せないの。話すには、禁忌の国に行かないと……」

アクアは風刀を下す。

フードの彼女は彼らに近づき、

「冷静さに欠けていた。後、先ほどの事は礼を言う。」

そこにタクミ達がやってくる。

タクミはリヨウマ達を見て、

「兄さん、ちよつといい?」

「どうした、タクミ。」

「えっと、イザナ公王の言っていた『竜に会え』って言葉があったよね。あれも含めて、僕は父上の書物を漁ったんだ。そしたら、『竜について知りたければ、ノートルディア公国に迎え。』て言う紙を見つけたん

だ。」

そう言つて、その紙をリヨウマに見せる。

リヨウマはそれを見て、

「確かに、これは父上の字だ。」

「ノートルディア公国という事は、『虹の賢者』か。」

マークスがリヨウマを見る。

リヨウマも頷き、

「ああ、おそらくそうだろう。」

「ノートルディア公国？虹の賢者？それつて、なんですか？」

カムイが首を傾げる。

ヒノカが腰に手を当てる、

「賢者様はなんでも知ってるお方らしいぞ。だが、強い者にしか会えないと聞く。」

「そうなんですか……」

「そうね。賢者様に会つて戻ってきた者は、これまでに五人しかいないと聞くわ。一人目はかつての白夜王スメラギ、二人目は若かりし頃のお父様、三人目は名もなき騎士様で、四人目はマークスお兄様、そしてリヨウマ王子よ。」

カミラも頬に手を当てる言う。

カムイはマークスとリヨウマを見て、

「マークス兄さんとリヨウマ兄さんが!?？」

「ああ……だが、賢者様からは竜については聞かなかつた。だが、賢者様なら知つていて言わなかつたのかもしれない。」

「確かに、そうかもしれない。あのお方は、そういうお方だ。」

二人は互いに見合う。

カムイはグツと手を握りしめ、

「ノートルディア公国、行つてみます！」

「その前に、私から提案だ。」

フードの彼女が彼らを見る。

彼女は腕を組み、顎に左手を当てる。

「これからの行動は限りがある。透魔兵を認知できない以上、暗夜王

を倒す事はできない。だから暗夜の第一王子の臣下二人以外の部隊は暗夜の近くに戻すべきだ。敵の動きを見張る必要もある。王女たちの部隊は、氷の部族を守ってもらっているからな。白夜の第一王子の部族と王女の部隊も、白夜へ戻すべきだ。何が起きるか分からんかな。それに、白夜にはやってもらいたいことがある。」

「何だ？」

「……あの暗夜王を討つのは白夜で、だ。その為には、あの傀儡には白夜の玉座に座ってもらう。」

「ば、バカな!? 白夜を開け渡せと言うのか！」

リヨウマは眉を寄せ、刀に手をかける。

カムイはハツとして、

「白夜の玉座……お母様が言っていました。あの王座には、古の神である神祖竜の加護が宿つてると。座る者の真の姿、真の心を取り戻すと。」

「それが本当だつとして、何の意味がある。我々はこの王が偽物だと知っている。」

マークスも眉を深くする。

フードの彼女は右手を腰に当て、

「……では、貴殿は何も知らぬ兵を手にかけるか。」

「なんだと？」

「今の王が編成している直々の軍は、あいつが集めた殺しを楽しむ集団や犯罪者。だが、暗夜に残る兵達の大半は違う。彼らは、王を本物だと思い、恐ろしくとも国や家族、仲間を守る為にあそこに居る。その兵を、貴殿は討てるか？そして、白夜においてもそうだ。いくら王子の名とはいえ、暗夜に恨みを持つ者は多い。そんな暗夜と共闘するといった王子をどう見るか。だったら、王が偽物だというのをすべての者に教えればいい。」

「……けど、それには場所が限られるわ。謁見の間にも限度がある。もっと広いところにしたくないと……」

アクアがあの場合を思い出す。

フードの彼女はリヨウマを見て、

「あれは移動できるか？」

「……可能だとは思いますが……」

「なら、広場がいいだろうな。敵を討つのも便利だ。」

「確かにそうだが……」

リヨウマは周りを見る。

崩壊した街の姿。

「無論、できればここの復旧と護衛も頼みたい。いくら必然的に、こうなる運命だったとはいえ、変えられたはずの運命でもあった。それをできなかった時点で、ここは何とかしたい。」

「また必然ですか……」

カムイはフードの彼女を見る。

彼女はカムイの方を向き、

「そうだ。この時点では、白夜も暗夜も敵のままだった。だが、その必然は変わり、手を取り合った。なら、ここは戦火になるはずはなかったのだ。けど、その必然は来てしまったのは、私の考えが足りなかった。」

「……あの、アベルと言ったあの黒騎士。あの彼が言う『あの子』とは、あなたのことですよ？ だったら、この夜刀神はあなたのお父様の刀何ですよ？ なのにー」

フードの彼女は長剣を素早く抜き、カムイの首元に触れるところに刃を向ける。

「……今は、あの黒騎士の言葉は忘れる。答える気があれば、向こうで教える。」

剣をしまう。

レオンが警戒しながら、フードの彼女を見て、

「とりあえず、僕の隊は彼女の言う通り、ここの復旧をするよ。」

「それは、僕の部隊も手伝う。兄さんと姉さん、サクラの部隊を白夜に戻る。玉座を動かしたりするのに、人手は多いほうがいいからね。白夜の守りはユキムラがいるけど……」

「それは、わらわとユウギリが受け持とう。」

「白夜の事は、任せてくださいいな。」

オロチとユウギリが名乗りを上げる。

そこにもう一人、

「もちろん、私たちの部隊も普及作業をやるよ。」

飛竜使いクリムゾンが前に出る。

そして腰に手を当て、

「私はついてくけどね。」

「はい。では、みなさんお願いします。」

カムイは頭を下げる。

フードの彼女は部隊の者達が消え、リヨウマ達だけになると、

「さて、肝心な事は詳しくは言えない。味方の中に、敵の目や耳があるからな。今は互いに疑っていても仕方がない。本人には自覚がない者、それを無意識に押さえ込む者、押さえ込んでいる者という。だったら、ある程度は口に出しておけば、対処はできる。」

「……そうですね。でも、わたしはみんなを信じています！きつと大丈夫です！さて、ノートルディア公国に向かいますよ。」

カムイは元気よく歩き出した。

他の者達もそれに続く。

フードの彼女はカムイの後ろを歩く、ギウンターを見てから歩き出す。

そしてレオンとタクミを見て、

『……さて、あの二人は和解できるか？』

彼らは進む。

白夜と暗夜との共闘。

真の敵を討つためにも、彼らは進見続ける。

第十四話 虹の賢者

若き黒き騎士は想い続ける。

幼い頃、親から王家の命令が下された。

ある城に行き、王女の遊び相手をする事。

けれど、決してその王女の事を外に漏らしてならないと。

自分の会った王女は、体の弱い自分よりも年下の子。

記憶が曖昧で、彼女の話す事は自分の故郷暗夜にない事ばかり。

何となく分かった気がした。

壁に覆われ、隔離された城。

彼女は暗夜の人間では無いと。

けれど、彼女と共にいる時間は楽しかった。

ある日、暗夜の第一王子に会った。

彼女は、彼に誰かを重ねていた。

第一王子は戸惑いながらも、何かに償うかのように彼女に接していた。

しばらくして、今度は暗夜の第一王女がやって来た。

彼女は愛おしそうに、けれど少し憐れむように彼女に接する。

そして、城に来るたびに大量のお菓子を持って来る。

自分は彼女あの子と共にそれを食べる。

あの子はいつも、外を見ていた。

暗い空を見ながら、いつになったら晴れるのか。

そう呟いていた。

彼女は外に出たがっていた。

その瞳は、どこかに帰りたいと想わせる。

自分は彼女を連れて、こっそり城を出た。

それが悲劇の始まりだった。

外に出たら、白夜の忍びがいた。

まるで、ずっと機会を伺っていたかのように。

彼女の前に膝を着き、彼女を王女と呼び、助けられずにいた事を詫
びていた。

彼女は涙を流し思い出した。

自分が白夜の王族だという事を。

彼らの手を取ろうとしたが、そこに暗夜の第一王子が兵を連れてやって来てしまった。

あの子は泣きながら、懇願した。

「ー国に返してくれと。」

みんなの元に返して、と……

白夜の忍びに連れ去られ、自分は発見した。

白夜と暗夜の争った跡。

そして、双方の返り血を浴び、放心状態の彼女。

その彼女の前にはフードを深く被った者がいた。

その者は自分を見ると言った。

「……カムイを守ってくれ。」

そう言うと、その者は走って行った。

第一王子が駆け付け、血で汚れたあの子を抱きしめる。

しばらく経って、自分たち一族全員の死刑が決まった。

けれど、それを止めてくれたのが第一王子と放心状態だったあの子だった。

自分たち一族は死刑を免れた。

けれど自分は、あの子の側からは降ろされた。

あのフードの者の言葉が残る。

自分は、彼女を守りたい。

友と呼び、自分を助けてくれたあの子を。

必ず、再び会いに行く。

そのためにも強くなる。

今度は自分の手であの子を守れるように……

カムイ達はノートルディア公国に向かう為、港町ディアにやって来た。

「……ここが、港町ディアですか？」

「ええ。ノートルディア公国行きの船を探しましょう。」

と、馬の鳴き声と走り音がこつちに向かって来る。
そして、馬を落ち着かせる。

「やっと見つけたぞ、カムイ！久しぶりだな！」

そこには馬から降りる黒い甲冑を来た暗夜兵の青年。

カムイは目をパチクリした後、

「え……う？えっと？」

「やっと会えて嬉しく思うぞー！この日の為に、俺は王城騎士までに力をつけたんだ。今度こそ親友の俺が、お前を守ってやるからな！」

「え？親友？あなた……が☒」

「……もしかして覚えていないのか？幼い頃、お前と共に居たんだが……それもそうだよな。俺のせいであんな危険な事に合わせてしまったからな。」

と、頭を手に当てる眉を寄せる彼。

そこに、マークスがやって来る。

「ん？そこにいるのは、サイラスか。」

「マークス王子。ご無沙汰しております。」

サイラスと呼ばれた彼は、頭をさげる。

カムイはマークスを見て、

「マークス兄さんは、彼を知っているのですか？」

「ああ、そうか……カムイ、覚えてないか？サイラスはお前の遊び相手として、城に連れられてきたのだが。」

「そ、そうなんですか？」

「……ああ、カムイがあそこに置かれて少し経ったくらいだからな。カミラも少しだが、サイラスとは関わりがある。」

「そう、なんですか……でも、私は覚えてなくて。」

カムイが視線を落とす。

サイラスと呼ばれた彼は、カムイの遊び相手として北の城塞に連れてこられたらしい。

王城騎士という事は強い。

「それは仕方ない。俺のせいでカムイは白夜での記憶が戻ってしまっただからな。」

「え？」

「外の話をするお前は、暗夜にはない事ばかりだった。それで俺はなんとなく気づいた。暗夜の人間じゃないと。けど、お前は無意識だったんだ。だから俺は、この暗夜を教えようと思った。城の外に連れ出したんだ。そしたら、白夜の忍びに会った。それをきっかけに、お前は白夜の事を思い出してしまった。だが、お前は白夜と暗夜の両方の戦闘を見た。おそらく、幼いお前は耐えられなかったんだろうな。しばらく放心状態だった。そのこともあって、俺はお前の側から降ろされた。一族まとめて死刑になるところを、マークス王子に救われたんだ。何より、放心状態になってしまったお前に救われた。だからこそ、今度は俺自身の力でお前を守る為にここに来た。」

「……すみません。」

「お前が謝ることじゃない。それにな……俺には、『騎士の誓い』がある。救われたこの命は、守りたいものの為に使う。その覚悟はどうにしている。俺は、俺のしたいようにしたんだ。」

「……分かりました。これからよろしくお願いします、サイラスさん。」

「おお、任せといてくれ。」

サイラスはバツチコイという顔で、カムイを見た。

アクアがカムイを見て、

「話は済んだみたいね。サイラス、私はアクア。よろしく。」

「はい。えっと、暗夜の王女様ですよね。話は聞いています。サイラスです、お願いします。アクア様。」

「……じゃあ、私たちは船を探してくるわ。行きましょう、カムイ。」

「はい。」

アクアとカムイは歩いていく。

サイラスはマークスを見て、
「申し訳ございません、マークス王子。本来なら、こうしてカムイの前に俺がいるのも嫌でしょうが……」

「いや、私は嬉しく思う。カムイの為にも、よろしく頼むぞ。」

「はい。」

二人も、船を探しに行く。

一方、リヨウマ達の方には二人のメイドが来ていた。

「白夜王家の方ですね。私たちは、カムイ様が北の城塞にいた頃にお世話係として、共に居ました。私はフローラ、隣はフェリシアと申します。カムイ様のお力となる為、参りました。」

「……カムイの？」

リヨウマは辺りを見て、カムイを探すがない。

そこに、サクラとエリーゼがやって来た。

「あ、あなた達は……」「あれ？フローラとフェリシアだ。」

二人は彼女らを見ていた。

リヨウマは二人を見て、

「うむ。二人が知っているのなら、間違い無いだろうな。二人は、カムイの為に来てくれたようなのだ。」

「そうなんだ！ありがとう!!？お姉ちゃんきつと喜ぶと思う！」

「はい、これからよろしくお願いします。」

フローラとフェリシアは頭をさげる。

二人も、船を探すのを手伝うのであった。

——透魔王国、ある廊下にて。

「お初にお目にかかります、我らが軍師殿。私は、カインと申します。これより、正式に透魔軍に加わります。」

白騎士カインが透魔軍師ルフレに頭を下げる。

彼女は笑顔のまま、

「……お初にお目にかかります、カイン殿。聞けば、アベル殿の兄君とか。」

「ええ、アベルは私の弟です。」

彼は顔を上げる。

彼女を見つめて、

「……あなたは似ています。」

「誰にです？」

透魔軍師ルフレは、ジッと白騎士カインを見つめる。

彼は懐かしむように、

「あなたの身に纏う独特の雰囲気はどこか、かつての主のご友人を思い出します。それに、その容姿もまた……あの赤子を思い出す。名は確か……『カムイ』様でしたかな。」

「……そうですか。それなら、歌姫の元にいますよ。『カムイ』は、ハイドラ様の大切な駒であり、器の一つですから。」

そう言つて、彼女は目線だけを斜め後ろに向ける。

そこには、黒騎士アベルが身を隠して聞き耳をたたえている。

それは白騎士カインも気づいているだろう。

「ルフレ殿、あなたの策戦を見ました。どれもこれも、その年で考えたとは思えませんな。本当に、そのお姿のご年齢で？」

「ふふ、私の年齢は秘密ですよ。さて、カイン殿。私はこれで失礼します。まだ考えたい策戦もありますので。それと、これはアベル殿にお渡し下さいな。」

「ええ、確かにお預かり致しました。渡ししておきますね。」

透魔軍師ルフレは書類を渡して、彼の横を通って行く。

「では、また後で。」

彼女は長い廊下を歩き、

『……全く、アベル殿はどちらも信用していないな。いや、それ以前の問題か。』

カムイ達はノートルディア公国行きの船を見つけ、航海を始めた。サイラスやフローラ、フェリシアに加え、ニシキとフランネルも正式に加わった。

船では、白夜と暗夜関係なしに話して盛り上がる。

そんな中、アクアは海を眺めていた。

「アクア姉様。」

アクアが振り返ると、そこにはサクラとエリーゼがいた。

「なにかしら？」

「と、特に用というわけではないのですが……」

「えつとね、アクアお姉ちゃん。向こうで、お兄ちゃん達が盛り上がってるの。アクアお姉ちゃんもどうかなくて。」

「……そうね。もう少し、したら行くわ。今は海を眺めていたいのに。」
「うん、わかった。待ってるね、アクアお姉ちゃん！行こ、サクラ！」
「は、はい、エリーゼさん。では、また後で、アクア姉様。」

二人は楽しそうに駆けていく。

アクアはそれを嬉しそうに微笑み、

「また、仲良くなれてよかったわ。サクラ、エリーゼ……」

あの二人は、もう仲の良い友達となった。

王女として、そしてただの一人として、友となったのだ。

アクアは海を見つめる。

「……いつかきつと、またあの時のような……白夜と暗夜が平和になる日がやって来る。だからこそ、今度は本当の平和を。……待っていて。私たちは、あなたを必ず救ってみせるわ……」

そしてアクアは、胸のペンダントを優しく、それでいて強く握りしめる。

今回は無事航海が進み、ノートルディア公国に着けた。

船を降り、虹の賢者について聞き込みを行っていた。

リヨウマやマークスは、別の方法で虹の賢者を探しに行っていた。

カムイはアクア、リリス、そしてフード彼女と共に聞き込みを行っていた。

ある家の前に座っていた老人と話をした。

それは、カムイがある情報を手に入れたからだ。

「このノートルディア公国まで、よく来なすったのう。異邦の旅人殿。して、わしに何用じや？」

「はい。公国内では、あなたが最も『虹の賢者』について詳しいと聞きました。お願いします。賢者様の居場所を教えてください。」

すると、老人は顔付きが変わる。

カムイをジツと見つめ、

「……ふむ。お前さんが持っている武器は夜刀神じやな？」

「え？は、はい。そうです。よくご存知で。」

「なぜ、賢者に会いたい？お前さんも力を求めるのか？」

「いえ、私は力を望んで、ここに来た訳ではありません。賢者様にお

聞きしたいことがあって来たんです。」

すると、老人は意外そうな顔をして、

「……ほう、知識を求めるか。なるほどのう。ノートルディア山の頂に、『七重の塔』が建つておる。賢者は、その塔の最上階にいるらしい。もつとも、ノートルディア山は高峰じゃ。ほとんどの者は、塔にすら辿り着けんがな。わしが知るのは、これくらいじゃ。」

カムイは老人に頭を下げてから、

「ありがとうございます。賢者様に会うことが出来たら、必ずここにまたご挨拶にきます。」

「ああ、くれぐれも死なんようにな。」

老人はカムイ達を見送る。

カムイはみんなと合流した。

リヨウマとマークス、その臣下とは合流はできなかったが、老人から聞いた事を話す。

彼らは一先ず、ノートルディア山に登る事にした。

フードの彼女に聞かしては、途中から抜けた。

彼女は、『カムイが賢者様に会う時に、いる』と言って、離れたのだ。

カムイ達は山脈を登っていると、

「くっ、確かにキツイ。こんなの初めてだよ。」

「おや？もう泣き言かい、タクミ王子。」

タクミが汗を拭いながら言うと、隣でレオンが鼻で笑いながら言う。

タクミはムツとすると、

「そう言う、レオン王子も辛そうだけど？」

「僕は平気さ。これくらい！」

二人は睨み合う。

カムイは汗を拭いながら、

「ふふ、お二人とも仲が良いですね。」

「どこが!?？」

タクミとレオンは声を合わせて言った。

そしてタクミは腕を組み、

「大体、僕はカムイ姉さんを心配して言ったんだ。体の弱い姉さんじゃ、辛いだろうからね。」

「それもそうだ。カムイ姉さん、ここで休憩を取ろう。」

レオンも頷き、カミラがカムイの顔を見て、

「そうね。カムイの顔も、少し辛そうだわ。」

「ああ、そうだ！カムイ、こっちの日陰に入るといい。」

ヒノカが、日陰を見つけてカムイを引っ張る。

サクラとエリーゼが、水とハンカチを渡す。

「姉様、お水です。」

「はい、お姉ちゃん！」

「あ、ありがとうございます。ですが、皆さんもちゃんと休憩して下さいね。」

カムイ達は休息を取る。

それから、再び山を登り出す。

と、タクミが先の方を見て、

「ん？……見て、塔が見えてきたよ。」

「本当です。あれが、七重の塔ですか……という事は、頂上が近いようですね。頑張りましょう！」

カムイは拳を握りしめ、腕を上げる。

「賢者様に会うには、圧倒的な強者ではないといけないようですので！張り切って行きますよ！」

カムイの足取りが早くなる。

タクミとレオンがその後ろを追って、

「姉さん、張り切るのには構わないけど気を付けて！」

「そうだよ、姉さん。何が起るかわからないんだから！」

他の者達も、それぞれ互いに見合っ後を追う。

そして、彼らが塔の前に立つ。

「よく来たな、異邦の者達よ！虹の賢者に会いたくば、七つの試練を突破せよ。そして、最上階にある扉を開くがよい！」

塔の上から、一人の陰陽服を来た術士が叫ぶ。

カムイは扉に手を掛け、

「行きますよ、皆さん！」

カムイは扉を開ける。

彼らは中へと進む。

――透魔王国、とある部屋。

そこは長い机があり、その一席に透魔軍師ルフレは座っていた。

斜め右前には、フードで顔を隠している白き王。

その奥には、影で見え辛いが白き巫女。

その向かえには、フードで顔を隠している女魔術師。

透魔軍師ルフレから見て左の方には、黒騎士アベルと白騎士カインがいる。

透魔軍師ルフレは机に肘をつき、手のひらを組む。

「なるほど……シユヴァリエ公国の事は大体分かりました。それにしても……アベル殿は、いささかお遊びが過ぎたのではないですか。いくら、お弟子さんが可愛かったからと言って……」

黒騎士アベルは冷たい笑みを浮かべ、

「ええ、可愛い弟子ですよ。可愛いからちよつかいを出してしまうんです。……そして、早くあの子の絶望する姿見たい。」

「……まあ、良いですよ。それより、あの資料は見ていただけましたか？」

「ええ。流石は、我らの軍師殿だ。とてもいい策戦でした。ああ、楽しみだ……あの子の絶望する姿が！」

彼は右手で顔を覆って笑い出す。

透魔軍師ルフレは苦笑した後、真剣な顔つきになる。

「と、いう訳で、アベル殿のフライングがありました……我らのハイドラ様への良き余興ぐらいにはなるでしょう。時期に、白夜と暗夜の空が変わる日がやって来る。カムイ達一行が、この国に入ってきて来る。おそらく、姿を隠している彼も、そのとき動き出すでしょうし……。我々も、準備が必要なのですよ。その為に、皆様方にも動いてもらいます。」

彼女は笑みを浮かべる。

女魔術師は透魔軍師ルフレを見て、

「では、あなたの言うその準備とやらが終わるで、我々は動かないと？」

他の三人も、透魔軍師ルフレを見る。

彼女は笑顔のまま、

「ええ。我々は足止めですから。」

「足止め？」

「ふふ。暗夜王には、向こう側で動いてもらいます。カムイ達一行が、こちらにいる間に戦力を整え、白夜を落とす為の。彼らは必ず、こちらに来た後、向こうに戻るでしょうし。それに、カムイ達一行には、やる気を出してもらわなければ……我が王の為に。」

彼女は深い笑みを浮かべ、握りあわせる手を強く握りしめた。

そして立ち上がり、

「では、皆さん。この資料には目を通して置いて下さいね。後、あなたにはまた、暗夜王へこの事を教えて置いて下さい。」

そう言って、女魔術師を見た後歩いて行く。

部屋を出て行き、

『さてっと、これから忙しくなる……』

カムイ達は一階から力を合わせて、幻影兵と戦い登っていく。

階を上がるごとに、試練の難易度は上がっていく。

最上階まで後少しのところで、カムイ達は驚く。

それは先客が敵と戦っていたからだ。

黒い盗賊姿の男性だ。

「はあ……そろそろ、最上階か？力を得る為に、ここまでさせるなんて……虹の賢者様はガード固い事だな。けど、諦めるわけにはいかない。俺は力を手にして、故郷を再建させるんだ。その為なら、なんだってしてみせる！殺しも、盗みも、略奪も！そう……国が滅びたあの日から俺は、そうやって生きてきたんだ!!？」

そこにもう一人いた。

こちらは顔を隠した魔術師の少女だった。

「煩わしいわね。どうしてこんなに兵がいるのよ。戦乱を避けようと

思つて、この地まで来たのに迷いこんだここで、こんな事になるなんて意味がないじゃない。この身は、誰にも見せるべきではないのだから……私は、ずっと一人の方がいい。一人で生きていくのよ……」

カムイは駆け出していった。
少女の方に向かい、彼女に振り下ろされる剣を弾く。

そして、彼女を見る。

「私は、カムイと言います。えっと、あなたはここに迷い込んだのですよね。なら、私たちが保護します。子供が一人でいては危険です。こちらにー」

「いらないわ、保護なんて。私は子供ではないもの。」

カムイが手を差し出したが、少女はカムイを見上げて睨んだ。

カムイは少女の言葉に困惑し、

「え?でも……」

「お嬢ちゃん、耳が遠いの?必要ないと言っているのよ。」

彼女はさらに睨んで言う。

カムイはさらに困惑し、

「ええ!??お嬢ちゃん☒どう見ても、私の方が年上ですよね!??」

「私、面倒事はごめんだわ……。だから、私には関わりたくないけど。私はただ、誰の目にも触れず一人で生きていきたいだけなの。」

「一人?あなた、一人なのでですか?ご家族は?」

「ええ。そんなもの……とつくの昔にいなくなつたわ。みんな、私のことを気味悪がつて離れていった……。だから、私は一人よ。今でも、これからも、ずっと……」

少女は瞳を閉じ、呟いていく。

カムイは彼女をジツと見て微笑み、

「そうですか。じゃあ、私たちと共に来ませんか?いえ、共に行きましょう。」

「はあ?何言ってるの。人の事情も知らないくせに、仲間招き入れるだなんて……貴女正気?」

少女はもの凄い目で睨む。

カムイは頷き、

「はい。確かにあなたの事情はわかりません。ですが、仲間にはなれるでしょうか？誰にだって、人には言えない事情や秘密はあるものです。現に、私の仲間にはそういう方もいますし、私にもあります。それでも、私を信じてくれます。だから私は、あなたを一人にはしたくないのです。」

「……ふうん。若いのに、知った風な口を利くじゃない。」

「はい。それに、子供を一人にはしとけません。」

「もう、子供じゃないわよ。……いいわ、仲間になってあげる。あなたを信じてあげるわ。そして、あなたも私を信じて、理解しなさい。あなたには、理解できる気がするの。」

彼女は深呼吸し、

「私の名は、ニユクス。この力、あなたの好きに使いなさいな。」

「はい。よろしくお願いします、ニユクスさん。」

カムイは彼女を連れて、仲間の元に行く。

タクミがカムイを見て、

「姉さん、どこに行ってたの。」

「はい、新しい仲間を連れてきました。ニユクスさんです。」

カムイが連れてきたニユクス少女を見て、タクミが眉を寄せる。

「子供じゃないか。」

「黙れ、小僧。私は子供ではない。さて、それとなく私も働くか。」

ニユクスは歩いて行く。

カムイは苦笑いし、

「彼女にも、何か理由があるみたいなんです。私も行きますね。」

カムイは剣を構え、敵に向かっていく。

と、敵と交戦していたカムイは先客だった男性を見つけた。

彼が背後から斬られそうになるのを見て、

「危ない！」

その剣を受け止める。

男性は驚き、カムイを見る。

カムイは敵を吹き飛ばし、男性に向き直る。

「大丈夫そうですね。よかった。あの、あなたはなぜお一人でここに

「盗賊……のようですが、宝でも盗みに来たのですか？」

「んにゃ、俺が欲しいのはそんなものじゃない。虹の賢者の力だ。俺には力が必要なんでな。憎きフウマ公王を倒し、俺の故郷を再建するためのー」

「フウマ公王……それは確か、あの時の……」

カムイは眉を寄せて思い出す。

男性は真剣な顔つきで、

「なんだ、お前。奴を知っているのか。」

「はい。彼は、もうこの世にはいません。私たちが討ち倒しました。」

「なんだと!?!?」

彼は目を見張る。

だが、一呼吸おき、

「そうか……では、俺たちコウガの民の仇は、あんたたちが討ってくれたって事だな。礼を言う。俺の名は、アシユラ。フウマ公国に滅ぼされた国の忍びだった者だ。あんたは？」

「私はカムイです。」

男性はカムイの名を聞くと、先程とは違う驚いた顔になり、

「ん?カムイ……?もしかして、あんたが白夜王国から連れ去られたっていう王女か?」

「……私の事をご存知で?」

「ははっ。俺の情報網を舐めるなよ。あんたの噂は色んなところから聞いているぜ。なんでも、伝説の刀を持ち、白夜王国と暗夜王国を平和へと導こうとしているとか。」

「ええ。私たちは、真の敵を倒すために闘っています。だから、ここに来たんです。賢者様に会い、この世界を救う方法を聞くために。」

「なるほどね。あんたの事情は大体わかった。それなら、俺も力を貸そう。」

「本当ですか!」

「ああ。あんたには、フウマの公王をぶっ潰してくれた恩がある。それに、あんたについていけば、俺の野望も果たせるやもしれんしな。」

「分かりました。とても心強い仲間です。ありがとうございます、ア

シユラさん。」

「ああ、俺に任せな。これからは、あんたが俺の主だ。よろしく頼むぜ、カムイ様。」

カムイは新たな仲間、アシユラと元に敵を倒していく。

最上階の扉を開き、カムイ達は中へ入る。

と、扉が閉められる。

炎が灯り、目の前には陰陽姿の幻影兵が現れる。

「よくぞ最上階まで辿りついた、勇敢な者たちよ。試練の終わりは近い。この私、塔の番人たる我を倒せば賢者への扉が開かれるであろう。」

そう言うのと、多くの幻影兵が現れる。

カムイは剣を構え、

「行きますよ、みなさん！」

カムイ達は挑んで行く。

カムイは剣や槍、斧を受け流す。

目的は、敵の頭を討つこと。

仲間のサポートを受け、カムイは奥へと突き進む。

そして、番人の術を避けて剣を構える。

「行かせて貰います！」

カムイは剣を振るう。

敵の術を避けては、前へと進む。

カムイは最後の攻撃を避けて、番人に一撃を与える。

彼は膝を着き、

「見事……そなたこそ、六番目の勇者に相応しい。」

そう言うのと、彼は消える。

他の兵達も消える。

エリーゼが笑顔になり、カムイの元に駆けていく。

「すごいー！とうとう最上階だね！その扉の向こうに、虹の賢者様がいるのかな？」

カムイの斜め後ろにある扉を見る。

タクミが眉を寄せて、

「いや、まだ油断は禁物だよ。扉の向こうから、妙な気を感じる。」

「タクミ王子の言うとおりだ。これは高位魔術か？」

レオンも眉を寄せる。

カムイは頷き、

「分かりました。」

カムイは慎重に扉に近づき、扉に手を当てる。

深呼吸して、

「あ、開けます！」

扉を開く。

辺りは光に包まれた。

フード彼女は、カムイ達と別れた。

その彼女はある場所へと向かっていた。

そしてある老師の前に立つ。

「来たようじゃな、待っておったよ。」

「……やはり、あなたには隠せないか。」

フードの彼女は仮面を取る。

老師にだけ、その顔は見える。

その彼女の顔を見て、老師は瞳を細める。

「……お前さんは禁忌を犯してまで、救いたいんじゃないか。」

「約束した。その為に、私は何度も犠牲を払ってここにいる。その為なら、この身は捧げる。今回が、私にとっては最後の機会……だからこそ、私はやり遂げねばならないのだ。」

彼女は右手を握りしめる。

老師はジッと彼女を見つめ、

「……お前さんの覚悟は見て分かる。幾度となく、己の身や大切なモノを対価として支払ったのだろうな。だが、お前さんは気づいとるはずじゃ……お前さんは、あのカムイを殺さぬ。」

「だろうな。初めて会った時も、再びあいつの前に出た時も……向けた刃は鈍る。けれど、必要なら私はやる。その為に己自身を捨てて、ここに居るのだから……。全ては約束を果たす為に、私は存在する。」

「ふむ……」

「……だから私は、あなたの命さえも利用する。怨むのなら、私を恨んでくれて構わない。」

彼女は仮面をつける。

老師は笑みを浮かべ、

「恨みはせぬよ。お前さんは、お前さんの道を信じればよいのじや。のう、ーー。」

彼女は背を向け、拳を握りしめる。

しばらくして、リヨウマとマークスがやって来た。

「やはり、ここにおられましたか……賢者様。」

「お探しました。」

リヨウマとマークスは、フードの彼女の側にいた老師に頭を下げる。

老師は嬉しそうに微笑み、

「うむ。リヨウマ王子に、マークス王子か。あの時より、随分と成長しておるの。して、何の用じや？」

「はい。賢者様なら、竜について何かご存知でないかと。」

「我が父、スメラギ王がそのようなメモも、残しております。」

二人は老師を見る。

フードの彼女は彼らの後ろを見て、

「それは、カムイ達と共に聞いてはどうだ。」

彼女の言葉に、リヨウマとマークス達は後ろを見る。

そこに魔法陣が浮かび、カムイ達が現れた。

カムイは瞳を開けると、そこは先ほどまでとは違う場所だった。

そして、目の前には兄二人とその臣下達が出た。

「え×()こは……それに兄さん!?？」

戸惑っているカムイの後ろから、

「これは転移魔術か……」

レオンがため息をつく。

と、リヨウマ達の間から老人が歩いてくる。

「ふおっふおっふおっ。よく帰ってきたのう、お前さんたち。」

「ええ!?? あなたは、さっきのおじいさん☒ど、どうして?」

カムイは目を見張る。

老人は微笑み、

「あの塔の最上階の扉を開けると、ここに転移するのじゃよ。試練を乗り越え、よく辿り着いた。お前さんたちこそ、六番目の勇者じゃ。」

と、最後の方は真剣な顔で言う。

カムイはジツと老人を見て、

「ま、まさか……あなたが虹の賢者様だったのですか☒」

そう、その老人とはフードの彼女と話していた者であり、リヨウマとマークスが賢者と呼んだ者。

老人は光に包まれ、姿が変わる。

杖を持ったヒゲの長い老師へと。

「いかにも。虹の賢者とは、わしのことじゃ。聞きたいことがあるのじゃろ。さあ、なんでも言うてみい。それは、リヨウマ王子とマークス王子が知りたい事でもある。」

カムイは頷き、

「はい。あなたに聞きたいのは竜の居場所です。私たちはどうしても、イザナ公王は、竜に会えと予言を受けました。だからこそ、私たちは竜に会いたいです。そして、この戦争を終わらせる方法を聞きたい。白夜と暗夜の無益な戦争を終わらせる為なら、なんでもします！」

「ほう、戦争を終わらせる、か。……なるほど。では、竜の居場所を教えてください。その前に、その夜刀神をわしに貸してごらん。」

「は、はい。」

カムイは腰から夜刀神を抜き、渡す。

虹の賢者はそれを受け取り、その刃に触れる。

「――我は神刀を鍛えし者、禁忌を犯せし者、伍色を紡ぎし者……我が名に応えよ、『炎の紋章』よ――」

そう叫ぶと、夜刀神が光出す。

その光が収まり、虹の賢者は刀をカムイに返す。

「これで、お前さんの刀は力を得たはずじゃ。」

「ありがとうございます！もしかして、これがフウガ様が言っていた『炎の紋章』ですか？」

「いんや、違う。炎の紋章を完成させるには、五つの神器が揃わねばならなん。そして、心を通わせねばならぬ。それが出来た時、炎の紋章は伝説の『ファイアーエムブレム』となる。」

「『ファイアーエムブレム』……」

「ああ。それを得なければ、お前さんたちは、強大な敵には勝てんだろう。だが、案ずるな。自分の信じる道を真つ直ぐに進めば、完成する。」

虹の賢者は頷く。

が、突然苦しみます。

「うっ!!?」

「賢者様!?!」

カムイは虹の賢者を支え、

「サクラさん、エリーゼさん！治癒をお願いします！」

「は、はい！」「う、うん！」

二人が駆け寄るが、虹の賢者は手を上げて止める。

「やめておけ。わしはもう、寿命じゃよ……」

「え？」

「それに、『人』の魔法は……わしには効かん。」

「『人』の魔法？もしかして、あなたは！」

「ああ。このわしが、お前さんの探していた『竜』じゃ……」

カムイはハツと思い出して、カムイは奥で自分達を見るフードの彼女を見る。

「そうです！あなたなら、賢者様を癒せるのでは？前にリリスさんを治してくれたように！」

「無理だ。私の治癒は限られた者だけだ。」

「そんな……」

カムイは眉を寄せる。

虹の賢者は語る。

「よいのじゃ。……遙か昔、十二の竜はみな野心にあふれ世界の覇権

を巡って争った……わしは夜刀神や神器を創り、竜の戦いに人間たちも巻き込んでしまった。その罪滅ぼしができるまでは、死にきれなかったのじゃ……」

「そんな……では、巡り巡ってこの夜刀神は白夜に……あなたのお父様の刀が……」

カムイは再びフードの彼女を見る。

彼女は無言だった。

虹の賢者はカムイを見つめ、

「お前さんの夜刀神には、わしの最後の力を込めておいた。カムイよ、その夜刀神で……自分の道を切り開くのじゃ。そしてカムイの仲間たちよ、彼女を支え共に歩むのじゃ……」

虹の賢者は瞳を閉じる。

フードの彼女は静かに頭を下げた。

リヨウマやマークスは拳を握りしめ、悲しみを堪える。

カムイは虹の賢者を降ろし、

「賢者様……兄さん、賢者様を弔いましょう。」

「そうだな。」「ああ。」

彼らは急いで準備する。

——暗夜王国の王の間にて、

「ガロン様、報告致します。カミラ王女とエリーゼ王女は、カムイ討伐に失敗。その後は、カムイと共に行動していております。氷の部族も姿を消し、現在は行方を捜しております。レオン王子は任務中に行方が分からなくなっておりますが、マークス王子と共に行動しております。なお、マークス王子と白夜王国第一王子リヨウマ討伐は失敗。彼らはどうやら、ノートルディア公国に向かっている模様です。」

王座に座る暗夜王ガロンに、報告をする暗夜軍師マクベス。

その彼の声は震えている。

暗夜王ガロンは頬杖をつき、

「……やはり、ノートルディア。虹の賢者に会いに行ったのだろうか……マクベス。」

彼は冷たい目で、暗夜軍師マクベスを見据える。

彼は震えながら、

「は、はい……」

「氷の部族は捨てておけ。どうせ、あの部族は何もできはせぬ。お前は、ガンズと共に白夜の進軍を考えよ。カムイ討伐は、その時に行なう。」

「わかりました！」

暗夜軍師マクベスは頭を深く下げて、出て行く。

暗夜王ガロンは立ち上がり、両手を広げる。

「く、くはははは！ 白夜も、暗夜も、滅べ！ 世界に破滅を!!？ ふははははは!!？」

カムイ達は皆で虹の賢者の墓を作り、弔う。

長い黙とうの後、マークスはカムイを見て、

「カムイ。」

「なんですか、兄さん。」

「実は、お前に知らせがある。賢者様を探している最中に見つけた新たな仲間だ。」

マークスの見る方には、鎧の重層騎士と女性騎士がいた。

二人はカムイに近づき、

「初めまして、カムイ様。私は、シャーロットと言います。以後、お見知りおきを。」

「俺はブノアと申します。これから、お願いいたします。」

頭を下げる。

マークスはカムイを再び見て、

「彼らは先の戦いで、暗夜兵として戦っていた。だが、あまりにも理不尽な虐殺にも近い戦いに、刃を向けられなくなったそうだ。それが見つかり、兵を追い出されてしまったらしいのだ。行く当てもないのとこのだったので、力になってもらう事にした。」

「そうですか。これから、よろしくお願いしますね。シャーロットさん、ブノアさん。」

「はい、喜んで♪」「お任せを。」

カムイは頭を下げる。

そしてカムイは、虹の賢者の墓に向き直る。

膝を着き、墓に触れて、

「……賢者様、ありがとうございます！いえ、いにしえの時代から生きた偉大なる竜よ。あなたの想い、あなたの力は決して無駄にはしません。」

カムイは腰の夜刀神の握りしめる。

そして立ち上がり、

「行きましょう、みなさん。無限溪谷へ！白夜と暗夜の空が入れ替わる日は、もうすぐです。」

彼らは港に向かう。

港に着くと、フードの彼女はカムイ達を見て、

「ここからは別行動だ。私は先にあちら側に行つて、最終準備をしてくる。次に会うのは禁忌の国だ。」

そう言つて、海の上に立つ。

カムイが彼女を見て、

「待つてください！」

「安心しろ、行けばわかる。」

「え？あ！」

カムイの困惑をよそに、彼女は水の中へと入つていった。

カムイはアクアを見る。

彼女は苦笑して、

「仕方ないわ。彼女らしいと言えばらしいもの。信じましょ、カムイ。」

「はい。そうですね、信じましょ。」

カムイ達は無限溪谷へと急ぐ。

第二章 運命の闘い 第十五話 いざ、透魔王国へ

黒き幼い王女は想う。

自分が赤子だった頃、自分には多くの異母兄弟姉妹がいた。けれど、争いごとが起こり、多くの人がいなくなつた。

当時の自分は下町の乳母の家に預けられていた。

だから、争いに巻き込まれる事はなかつた。

そして、普通の子として少しの間暮らしていた。

だから自分が暗夜の王族だと聞いた時、とても驚いた。

そして、その事を聞いた時は、とても悲しかった。

どうして仲良くできないのか、と。

ある日、兄や姉が会いに来た。

自分は王族として暮らすようになる。

暗夜王お父様に会つた。

とても恐ろしく、怖かつた。

冷たい瞳、色のない肌。

あれは人間なのだろうか、と。

幼い自分にも分かつた。

けれど、本当の父を知る兄や姉は信じていたのだ。

いつか、優しき頃の王父に戻ると。

自分は初めて彼らとは違ふきよう姉だいに会つた。

体が弱く、加護のある北の城塞から出られないと言う。

初めて会つた時は、一番上の兄の影に隠れて戸惑つていた。

けれど、次第に自分に笑いかけてくれるようになった。

話しかけてくれるようになった。

自分は嬉しかつた。

この姉に会いに行くのが楽しみだつた。

それは、兄弟姉妹きょうだいみんなだで笑えあえる、この時間がとても幸せだつた。

姉が行方不明となってしまった。

そして父が偽物だと知った時、自然と受け入れるのは早かった。

それは自分が、本当の王父を知らないからかもしれない。

それ以上に、あの優しい姉が自分たちとは血の繋がりがないと知ったのが悲しかった。

姉は自分たちを恨んでるかもしれない。

そう思うと辛く、悲しかった。

けれど、あの姉にもう一度会いたい。

兄たちと共に、あの父王偽物を討つ。

自分は護りたいモノの為に戦うと決めた。

兄きょうだい姉を、仲間臣下を。

守られてばかりの自分が、彼らを守る。

姉と共に行くと、一番上の兄が言った。

自分は覚悟を決めて向かう。

姉は昔と同じ、優しい笑顔で自分を迎えてくれた。

新しい姉も出来た。

たとえ、血の繋がりがなくとも、きょうだい家族にならるのだと。

姉の本当の家族妹。

彼女との出会いは、本当に良かった。

年も近く、自分より大人しい。

けれど、意志の強い白夜の末の王女。

彼女も、自分と同じくらいあの姉が好きなのだ。

そして次第にあの姉を中心に仲間が集まってくる。

暗夜も、白夜も。

とても楽しい。

暗夜も、白夜も関係なく共に戦い、笑いあい、悲しむ。

姉はいつだったか言っていた。

暗夜と白夜は共に過ごせる日が来る。

共に手を取り合い、平和な世を創れるのだと。

自分は思う。

それは意外にも簡単なのだと。

けれど難しい。
でも、実現できる未来だと。

ローフードの彼女は、ある人物と会う。
岩の上に腰を掛けていたフードを被った男性。
彼は彼女を見て、

「君が戻って来たという事は……」

「ああ、カムイ達が来る。仲間を連れてな。」

「そうか……では、行こうか。」

彼は立ち上がる。

敵の目をかい潜り、ある場所へとやって来る。

目の前の巨大な魔法陣を見る。

「ここだね。けど……」

そして辺りを見渡す。

彼女は右手を腰に当て、

「安心していい。この辺り一帯は、結界を何重にもしている。それに、すでに感知されないように隠している。」

そして目の前の魔法陣を見る。

カムイ達は無限渓谷へとやって来た。

相変わらず、雷鳴が轟いていた。

カムイは辺りを見て、

「空が入れ替わる前に着けたのは良かったのですが……どうしまし
ょうか、アクアさん。」

「そうね……彼女の事だから、もしかしたら……」

アクアはある場所へと向かう。

そこは岩陰に隠れた広い場所。

アクアは辺りを見て、

「かつては、ここに扉があったの。」

アクアがその広い場所を歩く。

と、足元に大きな魔法陣が浮かび上がる。

ここに居る全ての仲間が入るくらいの大きさだ。

リヨウマ達もその魔法陣の上に乗るが反応がない。

レオンは魔法陣を調べ、

「……凄いな。これは相当細かく調整された陣だよ。こんなのできて、名が知れてないなんて……」

「レオン、つまりこのままでは反応はしない、という事か？」

マークスが眉を寄せる。

レオンは頷き、

「そういう事になるね。空が入れ替わる時に、何らかの力が働くと考えても……ピースが足りない。これは恐らく僕らが捕まって、ここに連れてこられる可能性も考えた策だと思うんだ。だから、他にも何かあるはずだ。」

「レオン王子の言うとおりなら、どうしたものか……。もう時期空の色が変わってしまう。カムイやアクアは、何か聞いてないか？」

リヨウマは腕を組んで二人を見る。

カムイは首を振り、

「私たちは、ここに来れば分かると言われただけです。」

「そうか……」

リヨウマは眉を深く寄せる。

と、マークスがハツとして、

「そうだ！これがあつた！」

マークスは懐から紙を取り出す。

それをリヨウマに渡す。

「それはかつて、彼女が私の机に置いていったものだ。」

「……水、竜？……もしや、虹の賢者以外にも、いにしえの竜がいるのか？待てよ、彼女はいつだったか言っていたな。自分の加護は水だと。」

「だが、その彼女はいない、か……」

マークスはさらに眉を深くした。

アクアは胸のペンダントを握りしめる。

そしてそれを離し、カムイを見る。

「カムイ、竜化はできるかしら？」

「え？あ、はい。やってみます。」

カムイは以前、アクアから貰った竜石を取り出す。

石が光り、カムイは包まれる。

姿は人から白銀の竜へと変わる。

初めてそれを見た暗夜の兄弟姉妹は、

「こ、これは竜……じゃあ、やっぱり姉さんは竜の血が濃いんだね。」

「ああ、カムイ。凄いわ。」

「お姉ちゃん、すつごーい！」

「……ああ。とても綺麗だ。」

それを見たリヨウマは納得したように、

「マークス王子たちは、初めて見るのだったか。だが、アクア。カムイを竜化してどうするのだ？もしや、この竜とはカムイの事なのか？」

「ええ。たぶん、そうよ。」

アクアは空を見上げる。

白夜と暗夜の空が、変わり始めた。

アクアは歌を歌い出す。

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

魔法陣を包み込むように、水が覆い始める。

魔法陣が光だし、彼らは包まれる。

光が収まり、瞳を開けるカムイ達。

そこは雷轟く無限溪谷から、辺りは森へと変わる。

空には宙に浮かぶ大地の欠片、その近くには廃墟もあった。

カムイは人型に戻り、辺りを見る。

「ここは……透魔王国。では、来れたんですね！」

「ええ、良かった。」

カムイとアクアは胸を撫で下ろす。

リヨウマ達も辺りを見る。

リヨウマは辺りを見て、眉を寄せる。

「……………」

そして、マークスと互いに見合うのであった。

と、彼の前にフードの彼女ともう一人のフードの者が立つ。

「よく来てくれた。心から感謝する、ありがとう。私は君たちを待っていたよ。」

フードの者が微かに見える口元から笑みがこぼれる。と、カムの側に浮いていたリリスが震え出す。

それに気付いたカムイはリリスを見上げ、

「リリスさん？どうかしましたか？」

「お、お父様ー！」

リリスは、フードの者に飛んで行く。

そして彼女は人の姿に戻り、抱き付いた。

リリスの竜の姿しか知らない者達、リリスとは違う竜だと思っていた者達は声を上げられないくらい驚いていた。

カムイに至っては、リリスの言葉に驚く。

リリスは涙を拭い、

「お父様……私は確かにあの時、あなたの死を確認しました。なのに……」

「ああ、けれど……彼女に救われた。こうして、娘に会えたのは嬉しく思うよ。」

「お父様……そうです、お父様！あの方がー！」

リリスが彼に何かを言おうとした。

けれど、リリスの口に指を当てて、首を振る。

そして、悲しそうに微笑んだ。

フードの者はある三人を見て、

「君たちにも、こうしてまた会えて良かった。」

その三人は覚悟を決めて、前が出る。

「はい。僕らも、あなたにもう一度会えて良かった。あの時はとても急なことでしたから。」

ラズワルドは、そうフードの者に言った。

そして、その隣にはルーナとオーデインも居た。

ラズワルドはマークスを見て、

「マークス様、シュヴァリエ公国で言いましたよね。この国の秘密を知っていると。」

「ああ。」

「僕を含めたルーナとオーティンも、この秘密を知っています。僕たちは、この方に透魔王国、白夜王国、暗夜王国を救って欲しいと依頼を受けて、この世界に召喚されてやって来たんです。」

「つまり、この世界の住人ではないと？」

「……はい。そして、依頼が完了すれば、僕らは元の世界に戻る。そう言う契約なんです。」

「……そうか。だが、それはお前の……いや、お前たちの自由だ。好きにすればよい。私たちの事は気にせずにな。」

マークスは彼をジッと見て頷く。

フードの彼女が咳払いをし、

「ゴホン。積もる話もある。だが、ここで長話は禁物だ。幾ら嚴重に結界を張ったとはいえ、敵の懐なのだ。注意しろ。」

彼女は彼らに背を向ける。

そして歩き出す。

「隠れ家に案内する。ついて来い。」

彼女に連れられるまま、家に来る。

馬や天馬、飛竜を庭で休ませる。

彼女の案内された隠れ家は、ある種広い屋敷だった。

カムイがフードの彼女を見る。

「……は？」

「……は、父や母に隠れて、兄と共に遊んでいた隠れ家だ。敵にも、簡単には見つからないだろう。それに、ここならいい拠点になる。」

そう言う彼女の声は、どこか嬉しそうだった。

中に入り、広い部屋でフードの彼女が説明を始める。

「では、説明しよう。……は禁忌の国となった透魔王国。竜たちの生まれ故郷にして、竜の加護のあった国だ。そして、かつては白夜と暗夜の王族とも交流があった。」

「……過去形か。」

リヨウマは目を細める。

フードの彼女はそれを受け流し、

「この国は、加護を与えていた竜が闇に堕ち、呪いを与えた。」

「呪いだど？」

マークスも、目を細める。

フードの彼女はそれも受け流し、

「この国以外で、この国の事を話せば泡となって消える。つまり、死ぬという事だ。」

フードの彼女はアクアを見る。

アクアは頷き、

「この国の竜の力は強いわ。その竜は、現在はこの国の王をしているの。名は、ハイドラ。そして、見えない敵とはこの国の兵たち。彼らは死人……透魔王ハイドラは、心を操る力があるの。だから、死んだ者も操られる。暗夜王ガロンも、同じ。あの王はもう、傀儡なの。そして、心に潜む。だから闇を持つ者の中に隠れて、こちらを監視してる。おそらく今も……」

「……アクアさんのお父様は、この国の王で、その竜とは友だった。けれど、殺されてしまったんです。国を追われたアクアさんは、暗夜に流れ着いたみたいなのです。」

カムイも説明する。

アクアはマークス達を見て、

「そう。だから私は、暗夜王ガロンの血は引いていないの。」

マークス達は黙って見つめた。

それはたとえ血の繋がりがなくとも、自分達は兄弟姉妹きょうだいだということ。
と。

そしてそれは、白夜も同じと言うように見る。

そんな中、椅子に座っていたフードの者は拳を握り合わせ、俯いた。

「すまない、アクア。」

「いいえ、あなたが私と母を暗夜に飛ばしてくれたから、私は生き残れた。こうして、透魔王国を救う手段を……大切な人を救う手段を得たのだから。だから、顔を上げて下さい……ハイドラ様。」

アクアは膝を着き、彼の握り締める手を包む。

いや、それ以前にアクアは今、彼をなんと言ったか……

「ア、アクアさん……えっと、今なんと？」

カムイが目をパチクリさせる。

フードの彼女は反応はない。

彼に召喚された三人も反応はない。

が、他の者達は違う。

武器をいつでも構えられる体勢に変わる。

何故なら、彼を『ハイドラ』と呼んだのだ。

アクアは立ち上がり、

「ハイドラ様、と言ったのよ。けど、安心して。彼は、この国を支配しているハイドラとは少し違うの。」

「どういうことですか？」

カムイがアクアを見てみると、

「ここにいるハイドラ様は、この国を支配しているハイドラの欠片とも言える。あの竜は闇に堕ち、自我を失った。あるのは世界の消滅。ここにいるハイドラ様は、その残された心の欠片だ。」

「そう、なんですか……リリスさんのお父様は凄いですね。」

カムイが少しホツとしながら言う。

が、とうのリリスはどこか悲しそうな表情も見せる。

「……リリスは堕ちたハイドラが、器を手に入れる為に用意した存在だ。リリス自体は竜に近い……のだろうな。」

フードの彼女が少し冷たく言う。

カムイは少しムツとする。

だが、彼女は本題に入った為に反論することができなかった。

「これで、向こうに戻ったら透魔兵を見ることが出来る。だが、忘れるな。向こうで口にすれば、それは死に繋がる。」

「けど、どうやって向こうに戻るの？あなたとハイドラ様……それに私の力を使っても、この人数を向こうには簡単には戻せない。それに、白夜と暗夜の空は入れ替わってしまったのよ。扉が失われてる今、向こうに戻っても、こちらには戻って来られないわ。」

フードの彼女は腕を組み、左人差し指を顎に当て、

「それは問題ない。あの魔方陣には、あの場で発せられる力を溜め込

み、維持する術式を組み込んだ。ある程度、扉の代わりぐらいにはなるだろう。それ故に、力自体はそんなにない。だから、向こうに戻り、こっちに帰れるのは一回ずつだけだ。透魔王さえ倒せれば、あとは扉が復活する。元の国には帰れるから、安心していい。」

「……ねえ、一ついいかしら。向こうに戻って暗夜王を討つ。そして、こちらに戻って来て透魔王を討つ。そうしなければ、世界は平和にはならない。けど、それは敵にも分かっているはずよ。素直にこちらの策戦に乗ってくれるかしら？」

アクアが眉を寄せる。

カムイが思い出したように、

「あの軍師のルフレさん、ですね。ですがー」

「ちよつと待って下さい、カムイ様！」

透魔軍師ルフレを思い出し、何かを言おうとしていたカムイを、ラズワールドが止める。

ルーナとオーデインも、どこか納得のいかない顔になっていた。

「カムイ様……今、『ルフレ』って言いましたか？」

「はい。もしかして、知っているのですか？」

「……ルフレは、僕らの世界の国の王の友であり、軍師と同じ名です。軍師としての才に優れ、王を導いていた。けど……いえ、そのルフレはどんな人ですか？」

「えっと、銀髪で綺麗な黄金の瞳を持っています。剣だけでなく、魔術も使えるみたいです。あ、紫に近いコートを着ていて、フードとかもありましたね。こうして考えると、あなたに似てるかも。」

ふと、カムイはそう思い、フードの彼女を見る。

彼女はカムイの方を向き、

「お前の見た目の間違いではないか。」

「……そうですかね？」

カムイは自分の銀の髪を触る。

ルーナは頬に汗を一つ流し、

「カムイ様、そのルフレの右手の甲に、赤い痕はなかったかしら？」

「……すみません、そこまで詳しくは。」

「そう。でもそうね。『彼』が敵にいるなんて、思いもしなかったわ。」
ルーナは眉を寄せる。

カムイは「ん？」と思い、

「あ、あの……私たちの知るルフレさんは『女性』ですよ。こう髪を左右に結び上げた。」

カムイが髪を左右に髪を結び上げる。

それを戻すと、

「……女性？男性ではなく？」

「も、もしかして……『マーク』じゃないか？ルフレさんの娘の……」

「かもしれない。カムイ様、性格は？」

ルーナ、オーデイン、ラズワルドは互いに見合った後、カムイを見る。

カムイは頷き、

「一回しか会ったことはありませんが、常に笑っているんです。ですが、どこか本当の笑みとは思えない作りの様な感じがします。あと、仲間を平気で斬ります。」

「………そうですか。これは、直接確かめてみないと無理かもしれない。マークか、もしくは僕は僕らの知らない世界のルフレさんかも。」

と、三人は眉を寄せる。

フードの彼女は一人沈黙していた。

と言っても、フードや仮面で表情は解らないのだが、

「………話を戻すが、まずは向こうに戻って暗夜王ガロンを討つ。おそらく、向こうには簡単には戻れないだろうな。私たちが向こうにいない事を利用して、それに伴い暗夜王ガロンは必ず白夜に進軍する。白夜を落とせば、こちらとして策戦は失敗。透魔王を討ったとしても、意味がなくなる。その為に、敵は足止めに来るはずだ。その間に、暗夜王ガロンは白夜進軍の準備を整え、動く。なら、こちらはあえて相手の策戦に乗るだけだ。私たちは敵の策戦に乗りつつ、暗夜王ガロンが白夜に進軍する前に、白夜に戻って態勢を整える。無論、暗夜王ガロンには気付かれずに、だ。その為に、再びあの魔法陣を使わねばならない。」

「なら、今すぐ戻ればー」

「無理だ。」

リヨウマが立ち上がるが、フードの彼女はそれを即答で否定する。
リヨウマは彼女を見て、

「なぜだ。」

「そもそも、なんの為にこの拠点に来たと思っっている。この国の説明し、今後の策戦について話すだけなら、あの魔法陣の近くの茂みにも隠れて言えばいいだけだ。だが、貴殿たちも度重なる戦闘で疲労も溜まってている。今は休むべきだと言っている。」

「我々なら、問題ない。平和のためならー」

「お前たちは超人ではない。」

マークスも立ち上がり、フードの彼女を見た。

彼女は冷たく言い放つ。

「貴殿らが竜の血を引き、竜脈を操れるとしても限度があり、竜脈のある場所にも限りがある。これは変わらない。なにより、あの魔法陣を使うのにも力があるんだ。彼はともかく、私はそう何度もやれん。」

「そ、そうか……」「う、うむ……」

彼女の言葉はどこか怒っているかのように、重みがある。

リヨウマとマークスは一步退る面持ちだった。

タクミが素っ気なく、
「それは分かったけど、いい加減あんたの名前くらい喋ったらどうなのさ。」

「それには、僕も賛成だ。大体、君は約束の為に透魔王を討ちたいと言うが、普通だったら諦める話だ。たかが、約束の為に自分の命を賭けるなんて、普通は逃げ出す。」

レオンはジッと彼女を見る。

フードの彼女は彼らに背を向け、

「私の事は好きに呼んでいいと言っただけ。それに、私は元々約束の為にしか動いていない。貴殿の言う『たかが』約束の為に、私は幾度となく犠牲を支払っている。私はその犠牲になった者たちの為にも、逃げることも、諦めることも許されない。いや、私自身が許さない。」

何があるとうと、約束を遂げるまでは……それ以外に、今の私の存在理由はないんだ。」

彼女は部屋を出て行った。

と言うわけで、一行は休息を取る事となった。

近くに温泉も湧いていて、彼らはゆつくりしていた。

リヨウマとマークスは森の中で、互いに見合っていた。

そして手を互いに差し出す。

握手し合い、

「やつと、ここまで来れた。」

「ああ、マークス王子。あの時貴殿が言った言葉を、俺も強く想う。我がが欠けてしまった鎖……もう一度、あの笑顔を見たいと俺は想う。無論、今のカムイも大切だ。だが、俺たちはケジメを付けねばならない。」

「勿論だ。共に、運命を打ち砕こう。」

二人は手を離し、頷き合う。

と、リリスとハイドラが共にいた。

「リリスではないか。」

「マークス様。」

リリスは頭を下げる。

マークスは苦笑した後、

「親子の時間を潰してしまい、すまないな。」

「いえ。ですが、リヨウマ王子と何を？」

「互いの覚悟を誓いあっていたのだ。」

マークスはハイドラを見て、

「ハイドラ殿、どうか我々を信じて下さい。我々は平和の道を必ず作って見せます。」

「もとより、君たちの事は信じているよ。むしろ、こちらの都合で白夜も、暗夜も巻き込んでしまった。本当に申し訳ない。」

「……我らも、あなたと同じ立場なら同じ事をしたでしょう。」

リヨウマも、横で頷く。

ハイドラは小さく微笑み、

「ありがとう、本当に感謝している。君たちは、本当に若い頃のスメラギ王とガロン王にソックリだ。」

「父上をご存知で？いや、彼女が言っていたな。白夜と暗夜の王族とは交流があったと。」

「だが、それらしき文献は何もなかった。いや、消されていたという事は事実と捉えるべきか。」

「ああ。透魔王の呪いの事を考え、彼女が抹消したんだろう。暗夜に關しては、彼女が直に行って消したと言っていた。白夜の方は、察してくれたスメラギ王がやってくれた、と言っていたからね。」

「そうでしたか。もう少し、彼女と話そうと思っていたのですが、彼女が見当たらないので困っていたのです。知りませんか？」

リヨウマは苦笑しながら言う。

リリスが思い出したように、

「誰にも見つからないような場所で、休んでいるのではないでしょうか。以前、言われていましたから。」

「そうか、感謝する。もう少し、マークス王子と探してみよう。」

二人は彼らの前を後にする。

が、マークスは立ち止まり、リリス達に振り返る。

「リリス。お前やハイドラ殿が許すのであれば、二人でカムイに会いに行つてやつてくれ。そして、あの子の話し相手になつてやつて欲しい。真実を言えないのなら、なおのことそうしてやつて欲しいのだ。」
「そうだな。リリス殿やハイドラ殿が一緒なら、カムイも大喜びだろう。大切な時間を過ごして欲しい。」

リヨウマも、立ち止まっていう。

二人は二人に苦笑してから、再び歩き出した。

リリスは眉を寄せて、驚きながら、

「マークス様、リヨウマ王子……もしかして……」

リリス達も、その場を後にする。

フードの彼女は拠点の少し離れた所にいた。

自分の目の前にはベンチ型のブランコがある。

そこに腰をかけ、足を少し動かして、ブラブラ揺れていた。

それは自分の中に残る記憶。

兄と共に、両親に内緒でここに遊びに来た。

元は兄が見つけた秘密基地。

兄曰く、かつて透魔王国には多くの竜がいた。

その竜達の中に、人の姿となつて人間の生活をしていた者もいたと言う。

その竜が使っていた屋敷だろうと。

――さあ、おいで。俺が押してあげる。

――次はお兄ちゃんだよ。私が押すの。

――君じゃ、まだ無理だよ。代わりに、一緒に座ろう。

――うん！

兄は優しくかった。

ここを教えて貰つてからは、何かあるとこのブランコの所に自分はいた。

それを見つけて、共に家に帰るのは兄だった。

フードの彼女はブランコを止める。

右手で仮面を外し、左腕で目元に当てる。

兄が自分を見つけ、その兄と自分を見つけるのはアベル。

彼の優しくも厳しい顔を覚えている。

その後、父がやって来て心配そうに自分を抱きしめてくれた。

母はアベルと一緒にって説教する。

それを、いつも優しく味方してくれるのは父と兄。

あの懐かしい光景、二度と戻らない時間。

いつから、狂ってしまったのだろう。

あのアベルが父を裏切り、世界の破滅を望む。

何度も、何度も、それは繰り返される。

知っているのは、自分と彼と……おそらくアクア。

彼女は自分の言った『秘密の小屋』を知っていた。

覚えているはずのない『闇に堕ちた竜の子』を知っていた。

それに、彼女は歌姫にして、この国の王女。

そして、――なのだから……

フードの彼女は、人の気配を感じ取る。

仮面をつけ、短剣に手をかける。

だが、それはすぐに離す。

「……何の用だ、白夜の第一王子、暗夜の第一王子。」

奥から出て来たのは、リヨウマとマークス。

フードの彼女は立ち上がり、彼らの前に行く。

リヨウマが真剣な顔で、

「すまない、何やら想いにふけていたのだろう。邪魔した。」

「構わん。昔の事を少しだけ思い出したただけだ。」

「ここは、遊び場か？」

マークスが辺りを見る。

フードの彼女はブランコを見て、

「……私が幼い頃、兄と共に遊んだ場所だ。人間の真似をしていた竜の残したものではないか、と言っていた。」

「人間の真似をしていた竜？」

「虹の賢者様が言っていただろう。遙か昔、十二の竜は覇権争いをしていたと。その竜たちの中にも、こう言った人間の暮らしと言うものに興味があったのだと。人間と違い、竜たちは幾年も生き続ける。あゝ種、楽しみが欲しかったんじゃないか。だが、この地を後にした十二の竜は、お前たちの世界で覇権争いを始めた。ここでは、あの時代に夜刀神の真の使い手がいなかった。だから被害は大きくなった。」

「……お前の父上ではないのか？それか、お前の兄君か？」

リヨウマは腕を組み、何かを想いながら聞く。

フードの彼女は右手を握りしめ、

「……ここに、私の父は存在しない。あの父は存在できても、本来存在するはずだった父は消された。その因果は兄をも消した。私はもう最初の家族には会えない。父にも、兄にも、母にも……彼らにも。そしてそれと同じく、姉と妹にもなれない。」

「それは、どう言う意味だ？」

マークスに至っては、これでもかかってくらいに眉を寄せていた。

フードの彼女は彼らに背を向け、

「……私には、もう約束以外何も残っていないと言う話だ。それより、明日は向こうに戻る為の策戦などを話し合う。今日はもう休んだらどうだ。」

「なら、お前も休むんだぞ。」

「……やることが終わったらな。」

彼女は、彼らの前から離れて行く。

近くにある水も出ない、もう使われず壊れた噴水の石壁に横になる。

空中に文字を書くように指を動かし、それを口パクする。しばらくすると、彼女の肩は上下する。

――透魔軍師ルフレの自室。

彼女は大きなベッドに横になっていた。

目を両腕で当て、一人寝ていた。

目が覚め、起き上がる。

窓に近づき、自分を見る。

彼女はそのまま、窓の外に目を向ける。

相変わらず、この部屋から見える風景は荒れた大地。

元は綺麗な庭があったのだろうが、もう見る影はない。

それを冷たい眼差しで見た後、寝室を出る。

沢山の本の中から、一冊の本を取り出す。

それをソファアームまで持って行き、座って読み出す。

『……かつて、十二の竜は故郷を離れた。だが、故郷に残った竜がいた。その竜は、人間と交流を持ち、国を加護を与えた。一方、故郷を離れた十二の竜は争っていた。覇権を巡り、ある者は神器を創り、またある者は己の血を人に与えた。またある者は、その覇権争いから身を引き、別の世界へと旅立った。人を巻き込んだこの争いで、多くの竜が息絶えた。そして、人の命も失われた。けれど人は竜たちを、一族で受け継ぎ、国や部族で始祖竜として崇められた。けれど、この争いを悔やみ、今なお生きる竜は償いを求めて生き続ける……』

彼女は本を閉じる。

そして机の上に本を置き、

「……幾年も生き続けた竜は死に、故郷に残った竜は闇に堕ちた。なんと滑稽で、愚かなのか……」

彼女は瞳を閉じ、

『……そうでしょ、お父さん。あの時代には、夜刀神の真の使い手がいなかった。いれば、このような終わりは来なかっただろう。いや、それでも起きてしまうのは、やっぱり必然なのだろうか。』

そして目を開く。

天井を見上げ、

「運命は何を望み、叶えるのか。」

彼女の手を握り合わせ、おでこに当てる。

「私はただ、あの場所に帰りたいただけなのに……」

彼女は目を細め、悲しそうに呟いた。

そして唇を強く噛み締めた。

翌朝、カムイ達はある部屋に集まっていた。

と言っても、カムイ、アクア、ハイドラ、リリス、両王族しかいない。

フードの彼女がカムイ達を見て、

「さて、魔法陣の転移準備をしている間、敵は向こうに帰さない為の時間稼ぎをして来るだろう。奴らとの本戦は、暗夜王ガロンを討った後だ。本来、来る方法でこの国に来ていない以上、敵には居場所は特定されにくい。だが、この地を何重もの結界や魔術で誤魔化している以上、気付かれるのは時間の問題。なら、あえてこちらから出向き、攪乱すればいいだけのこと。」

「そうは言っても、どうするのだ？」

「こちらの最優先事項は、ここにいるハイドラ様を護ること。彼を失えば、あの魔法陣は意味を無くす。そうなったら、移動手段は完全に失われる。敵は別の意味で、このハイドラ様を手に入れたがっている。そこで、あえてハイドラ様を連れて行く。多少危険かもしれないが、その方が敵の目はそちらに向くからな。だから、こちらはハイド

ラ様を護りながら拠点をバレないようにする。という訳で、この陣形に目を通してくれ。」

フードの彼女が言う陣形は、4チーム。
内、二組は拠点に残り、護る。

もう二組は、常に互いを確認できる位置だった。

「これを交互に入れ替え、敵にこちらは人数がいる事を意識させる。カムイ、アクア、ハイドラ様は、常に敵には意識してさせる必要がある。無論、私もそちらに行く。リリスは拠点に残って、もしもここが攻められた時は残った者達を連れて逃げろ。土地勘がないと危険だからな。」

「ハイドラ殿やお前は分かるが、カムイやアクアも常に行くのか？」

リヨウマは、彼女に眉を寄せる。

フードの彼女は当然だと言うように、

「ああ。カムイは夜刀神の使い手であり、透魔王を討てる存在だ。そして、彼女は歌姫だ。彼女の歌には透魔王に操られた者の心呼び覚ますことも出来る。敵からしたら、殺しておきたい存在だ。それが今回は一つに固まって行動している。潰しておけるチャンスは逃さないはずだ。」

「問題なのは、軍師ルフレね。彼女の策戦が、どこまでこちらの策戦に乗ってくれているか。それに、逆に私たちが、彼女の策戦にはまっていないか。」

アクアが冷静に分析する。

「――同時刻、とある玉座の間。」

透魔軍師ルフレは階段を登っていた。

目の前には空席の玉座。

彼女はマントのようなコートを翻して、正面を見る。

そこには、多くの透魔兵。

横には、見慣れた同格の者達。

軍師ルフレは叫ぶ。

「さあ、やっと本格的にあなた方に動いて貰う日が来ました。我らが王、ハイドラ様の為にその身を投じなさい！全ては、ハイドラ様の夢

の為、世界に破滅を!!?」

軍師ルフレは腕を上げ、振り下ろした。

奥の物陰にいた白き巫女は、手を握りしめ、祈るように呟く。

「どうとう動き出してしまふのね……」

「大丈夫だ。あの子達なら、必ずことをなしてくれるはずだ。だから、信じるんだ。」

近くに控えていたフードの男性が呟く。

白き巫女は涙を拭い、

「ええ。」

軍師ルフレはさらに大きく叫ぶ。

それはリヨウマ達の側にいた彼女が、叫ぶ。

「さあ、皆さんー」「さて、ここからがー」

互いの目の前の者達を見て、

「戦争の始まりです!」「戦争の始まりだ!」

二人はまるで、互いの策戦を潰し、潰られるように叫ぶのであった。

第十六話 正体

とある双子は想う。

自分達の父は部族長。

その部族長たる父は、暗夜王を敵視していた。

昔は民を想う良き王だったと言う。

だが、王妃が死に、子が死に、おかしくなったのだと。

民を道具のように扱い、兵さえも平気で殺す。

そんな暗夜王は父の反逆を見抜いていた。

――部族長の娘二人を、ある城の世話係として寄越せ

つまり、人質だ。

この命に逆らえば、自分達の部族は滅ぼさせる。

従うしかないのだ。

自分達は身支度を整え、出頭した。

案内されたのは、高い壁に覆われた城。

そこには幼い姫が隔離されていた。

体が弱く、何かあるとすぐに熱を出す。

だが、双子の姉は関係ないと想っていた。

双子の妹は心配で心配で、忙しなく世話をしていた。

自分は想う。

この姫など、どうでもいい。

危なくなったら、何が何でも妹を連れて逃げると。

その為には、利用できるモノは何でも使う。

自分と妹は、戦闘訓練を受けた。

無論、メイドとしての訓練も。

けれど、触れ合う内に自分は恋をしてしまった。

自分の先輩にも当たる彼。

しかし彼は、自分には見向きもしない。

自分を救ってくれたと言う、あの姫だけを想う。

自分は別の意味で、あの姫が嫌いだった。

何も知らない世間知らずの姫。

けれど、それを言っでは仕方ないのだ。
自分は人質。

もし、何か起これば部族は滅ぼさせる。

それでも、自分は知っていた。

自分はその姫が嫌い。

……それでも、どこかあの姫が好きなのだ。

馬鹿正直な、あの姫の笑顔。

時に無下に扱っても、嫌な顔一つしない。

するのは、残念そうな悲しい表情。

ある日、あの姫が言う。

自分達の事を友だと。

それから成長した姫が言う。

自分達の事を姉だと。

自分はこの姫が大っ嫌いだ。

けれど、とても大好きなのだ。

とても大切なもう一人の妹。

救って貰ったこの命、大っ嫌いで大好きな、あのもう一人の為に。

自分は思う。

最初は怖かった。

人質としてやって来たあの城が。

けれど、その城の主人は自分よりも幼い病弱な姫。

日によっては、外に出て少し遊ぶだけで熱を出す。

何とも、弱い姫だと思った。

自分は少しでも、姉や父の役に立とうと思った。

けれど、いつもどこかで失敗してしまう。

城に来てからもそうだ。

メイドとしての仕事もまともにできない。

失敗しては、先輩の執事に怒られる。

姉はため息を吐きながら片付ける。

とうとう自分は物陰に隠れて泣いていた。

すると、一輪の花が目の前に見えた。

涙を拭い、顔を上げると汗だくになった姫がいた。

自分が驚いていると、笑顔で姫が言う。

ー笑っていて下さい、フェリシアさん。私はフェリシアさんの笑顔が大好きです。とても元気になれるんです。

自分は花を受け取り、彼女に負けないくらいの笑顔を見せる。

と、彼女はまた嬉しそうに笑ったが、倒れこんでしまった。

それから彼女は数日の間、熱で寝込んでいた。

自分は少しでも彼女が楽になるように、氷を作り続けた。

時には、姉に止められるまで彼女の額に手を乗せて冷やしていた。

彼女が元気になると、嬉しかった。

そして自分にお礼を言うのであった。

自分のせいで、あんなに苦しんでいたのに、彼女はそれを気にしていなかった。

自分は涙を拭い、彼女が大好きだったといった笑顔を向ける。

この主人の為なら、自分は何でもやれる気がする。

だって彼女は、自分を友だと、姉だと言ってくれた。

いつも、妹だった私にできた妹。

失敗しても、笑顔で許してくれる。

自分は少しでも彼女の役に立てれるように、彼女を守れるように強くなろう。

父達にも褒められた戦闘で、彼女が大好きだと言ってくれた笑顔で、そしていつか彼に負けないくらいの立派な世話係になろう。

彼女を何があっても護ろう、強くそう思う。

ーカムイは、タクミとレオンと共にいた。

二人は目が合う度に、互いにムツとした後そっぽ向く。

互いに水と油とも言える二人。

カムイはそれを苦笑しながらも、嬉しそうに見ていた。

それは隣のチームも見ていた。

そちら側に、フードの彼女はハイドラを護りながらいた。

リヨウマは彼女を見て、

「なぜ、あの二人を同じチームにしたのだ？あれでは、何かあった時に手を組めるかどうか……」

「リョウマ王子の言う通りだ。今のあの二人は、まるで水と油のようだ。私たちとは違い、そう簡単には手を取れないだろう。」

「いや、あの二人は共にいた方がいいんだ。似た者同士だからな。どちらも同じで真逆。いつだって、誰よりも愛に飢え、家族想いなのだ。だからこそ、似た者同士すぐに仲良くなれるさ……多分。」

「今、多分と言わなかったか？」

「……駄目だった時は、その時に考えるさ。」

彼女はリョウマ達の視線から逸れる。

しばらくして、透魔兵との戦闘を行う。

けれど、それは相手に認知させるため。

それが済み次第、戦闘を離脱する。

それを数回繰り返し、一行は拠点に戻る途中だった。

レオンの足場が突然崩れ、宙に放り出される。

「な!!?」「レオン王子、手を!!?」

側に居たタクミが手を伸ばす。

レオンはその手を取る。

そしてそのタクミを側に居た臣下達が落ちないように支えた。

タクミは急いでレオンを引き上げる。

「た、助かったよ、タクミ王子。」

「ぼ、僕こそ、君の臣下に助けられた。」

「……それはお互い様だ。」

「それも、そっか……」

二人は互いに目が合う。

二人はジッと見た後、笑い出す。

互いにいがみ合うのが、馬鹿げてきたのだ。

レオンは彼の髪を見る。

先程のはずみで、髪を束ねていた布が破れてしまっていた。

彼の長い髪が落ちていた。

「すまない、タクミ王子。僕のせいで……」

「ああ、気にしないで。」

タクミは手を差し出す。

意図を察したレオンは、自分も手を差し出す。

二人は手を握り合わせ、

「レオン王子、これからは互いに協力し合おうか。」

「そうだね。これからは仲良くやろう、タクミ王子。」

二人は話をしながら拠点に戻った。

カムイや他の者達の心配をよそに、彼らは仲良くなったのだった。

フードの彼女は、タクミを呼び止める。

「……白夜の第二王子。」

「……なに？」

「……………」

「なんなのさ、あんた。」

怒り出すタクミ。

フードの彼女は少しの間沈黙した後、一枚の布を渡す。

綺麗な赤い布、白い竜の刺繍の入った髪留めだった。

「……使う分には問題はないだろう。」

「ふーん。じゃ、向こうに帰ったら返すよ。」

「必要ない。それはもともと、貴殿に渡すつもりだった。」

「は？」

「……昔のカムイから、貴殿への贈り物だ。」

フードの彼女は、そう言って離れて行った。

タクミはそれを見て、

「……姉さんから？あれは夢じゃなかった……のか？でも、あれは

……」

と、一人悶々と考え込んだタクミ。

その彼に近付いたりヨウマが、

「タクミ、どうした？」

「ああ、兄さん。いや、あいつからこれを渡されたんだ。姉さんからの

贈り物だって。」

タクミが向こうで、マークス達と話しているフードの彼女を指差し

た。

そして、先ほどの髪留めを見せる。

リヨウマはそれをジツと見て、

「これは……やはり、そうか……」

「? 兄さんは、何か知ってるの?」

「いや、忘れてくれ。だが、タクミ……それはカムイからの贈り物で間違いない。カムイが、お前の為に選んで買ったものだ。」

「ふーん。ま、ありがたく使わせて貰うさ。」

タクミはそれを使って、髪を結び上げる。

そして、タクミはその輪の中に入って行った。

リヨウマは一人、フードの彼女を見てから、自分もそこに加わった。そう言ったこともあったが、白夜と暗夜は手を取り合って協力し合う。

カムイ達は、昨日待機していた拠点組だった者達と回る。

それを数日行っていた。

長い廊下を歩いていた透魔軍師ルフレ。

彼女は魔導書を持って、歩いていた。

彼女は視線だけを後ろに向ける。

そこには、黒騎士アベルが白王と共に歩いていた。

そして、後ろの彼らもそれに気付き、

「おや? ルフレ殿ではないですか。」

彼女は立ち止まり、振り返る。

「アベル殿に、白王殿。珍しい組み合わせですね。」

と、笑顔で近付き話し込む。

ある日、ハイドラとリリスは拠点からかなり離れていることに気づく。

それに気づいたラズワルド、ウッド、ルーナが駆けて来た。

彼らと共に、拠点に向かっていると、

「やっと見つめましたわ。あら? そこに居るのは、裏切り者のリリスね。まさか、欠片とともに居るとは思わなかったわ。」

それは、女魔導師だった。

敵に囲まれる。

「くっ！なんと少しでも、逃げるぞ！」

「分かってるわよ！」

「こっちは俺が！」

三人は武器を構える。

リリスはハイドラを護るように、立っていた。

人数的にも、こちらが不利なのは確か。

だが、三人はハイドラによって実力を認められている戦士。

そう簡単には倒せない。

が、一瞬の隙間をぬってハイドラの方に魔術が飛ぶ。

リリスがバツと覆いかぶさる。

二人は倒れこむ。

リリスはそつと目を開けると、ハイドラが驚いたように前を見ていた。

リリスもそこを見ると、銀髪の長い髪を左右に結い上げた魔術師が自分達を護っていた。

女魔導師は驚き、

「ルフレ卿、何故ここに!!？」

「どうもこうも、ないですよ。私も、貴女がここに居るなんて思いもしませんでしたから。」

透魔軍師ルフレは、女魔導師に笑顔を向ける。

そこには、静かな殺気があった。

「くっ！あなたの策戦を無視したのは事実です。ですが、これは好機なのですよ。ここで、欠片を手に入れれば——」

透魔軍師ルフレは剣を抜き、剣先を女魔導師に向けた。

女魔導師は一步後ろに退がり、

「ル、ルフレ卿！な、何をするので。」

「ここにいる全員、生かして連れて行きます。後は私にお任せを。」
「で、ですが！」

透魔軍師ルフレは冷たい笑みを浮かべたまま、黄金の瞳を細める。
その瞳には、なんの躊躇いもない。

女魔導師は拳を握りしめ、

「わかりましたわ。ここは、あなたに任せましょう。ですが、兵を数名置いて行きます。」

彼女は三人の兵を残して、炎と共に消えた。

透魔軍師ルフレはラズワールド達、主に三人に振り返る。

彼らは眉を寄せ、

「君が、『ルフレ』か……確かに似てる。」

「くっ！あなた、マークじゃないの！少し姿は違うかもしれないけど、セレナよ！わかる？」

「俺はウードだ！クロムさんの妹のリズの息子の！あつちはアズールだ！」

三人は、彼女をマークだと思って叫ぶ。

仮に、別の世界のルフレだったとしても、『クロム』や『リズ』は分かるかと判断したからだ。

だが、彼女は無反応だった。

透魔軍師ルフレは辺りを見て、

「さて、そろそろ良いですかね。」

「ルフレ様、我々は何をすれば良いでしょうか？」

「……では、死んで貰います。」

「は……？」

透魔軍師ルフレは冷たい笑みのまま、剣をは振り下ろした。

一人の兵は青い炎に包まれて消える。

残り二人の兵は武器を彼女に向ける。

「な、何をするのです！ルフレ様!!？」

「こ、これは裏切り行為ですよ!!？」

彼女は剣を一振りして、

「そもそも、裏切るもない。私は味方ではないからな。」

兵の一人は見た。

それは兵の目を通して見ていた透魔王ハイドラ。

彼女の黄金の瞳が、違う瞳の色になるのを見逃していなかった。

透魔軍師ルフレは剣をしまい、

「全く……次は庇いきれんぞ。」

「あ、あんたは……!!？」

ルーナ達は驚く。

透魔軍師ルフレにノイズが走り、フードの彼女へと変わる。

ラズワルドが彼女を警戒しながら、

「……君が、ルフレだったのか？つまり君は、敵の軍師……敵だったという訳か！」

「……私は、あの軍師の姿を借りただけだ。大体、軍師だったとして、私に何の利益がある。それに、私が軍師となるのなら、わざわざ敵の有利になるような状況は作らない。」

「あなたはルフレなの？それともマークなの？」

「お前達の知るルフレでも、マークでもない。それより、急ぐぞ。敵には、すでにばれてる。」

「わ、わかった……」

彼らは急いで拠点に戻る。

——廊下で話をしていた透魔軍師ルフレの元に、駆け足で兵達がやって来る。

彼女に槍を突き立て、囲う。

彼女は目を細め、

「なんです、これは。」

「あなたが、裏切り者という事です！せつかく欠片を見つけ、捕らえられたものを！」

女魔導師が透魔軍師ルフレに指をさす。

彼女は首を傾げ、

「……欠片を見つけた？つまり、あなたは私の策戦を無視したと。いくら、アベル殿の独断行動があったとは言え、貴女までも独断行動とは……」

「それは……そうでしたが、問題は貴女です！」

「そうでしたね……私は、今日は一度も外には出ていませんよ。それに……お言葉からすれば、ほんの少し前くらいに起きた事でしょう。でしたら、私はアベル殿や白王殿と雑談をしていました。そうですよ

ね？」

透魔軍師ルフレは二人を見る。

黒騎士アベルは頷き、

「ええ、長い事お話ししていましたね。」

「……で、ですが！あれは、ルフレ卿です！大体、あの時もそうでした。カムイ達を殺せたチャンスを奪った。貴女の行動は、不自然です。」
「成る程、貴女のお気持ちはわかりました。そう思うのなら、そう思えばいいです。ですが、そうなった場合には、私は私のしたいようにさせてもらいます。」

透魔軍師ルフレは殺気めいた瞳で、彼らを見る。

彼女の髪がブワツと上がると、彼女を囲んでいた兵達が氷漬けとなつて碎け散った。

彼女は彼らに背を向け、

「今日の所は自室にこもらせて貰います。と、言うよりかは、いた方がいいでしょうし。それでは失礼します。」

彼女は自室に向かって歩いて行つた。

女魔導師は唇を噛み、透魔軍師ルフレの背を睨んでいた。

リリス達が無事に戻つてからは、フードの彼女は事実上疑われていた。

けれど、彼女はそれを気にしない。

むしろ、疑いたいのであれば疑えばいい、と言つていた。

その理由として、仲間ではなく協力者だからだと。

疑われようと、殺されようと、仲間ではない時点で関係ないと。

カムイ達は、そのような重苦しい中で動いていた。

暗夜王ガロンを討つには、フードの彼女の協力は必須だ。

ここで、辞めるわけにはいかない。

何より、カムイは彼女を敵だとは思えなかつたのである。

そんな事を考えていたカムイは、両頬を叩く。

気持ちを切り替え、任務に挑む。

今日も、透魔兵には存在を見せた。

今日は少し戦闘が長引いたが、みな無事だ。

と、カムイは隣にいたクリムゾンを見る。

彼女の胸の鎧には、一輪の白い花がついていた。

「クリムゾンさん。そのお花、とても似合ってますね。」

「そうかい？ありがとうございます。これは、シユヴァリエ公国の女騎士のしきたりなんだ。一世一代の勝負の前には、胸元に花を挿す。本当の闘いはこれからだろうけど、これも大事な闘いだ。それを忘れない為にもつけてんだ。カムイ、私はあんたを信じて良かったよ。」

「クリムゾンさん。はい、私もです。みんなを信じて良かったです。」
二人は笑い合う。

それをフードの彼女は、仮面の下で視線だけを向けて見ていた。
少しして、リヨウマ達と合流して休息を取った。

カムイはフードの彼女に呼ばれていた。

「どうしたんですか？」

「……いや、お前にやって貰いたいことがあるんだ。」

「やって貰いたいことですか？それはー」

カムイは首を傾げると、フードの彼女が心臓を摘んで膝をつく。

カムイは眉を寄せて、駆け寄る。

「だ、大丈夫ですか？？」

フードの彼女はカムイの腕を掴み、

「騒ぐな……」

そこから、意識は途絶えた。

カムイは、リヨウマ達の元に走っていた。

と、目の前からジョーカーとフローラ、フェリシアが駆けて来た。

「良かった、カムイ様！急に居なくならないで下さい！」

「ここは敵の懐です。もっと、気を引き締めて下さい。」

「はわわ！ジョーカーさん、姉さん、そんなに怒らなくても……」

心配したが故のお叱りに、フェリシアがテンパる。

カムイは苦笑して、

「すみません、皆さん。彼女に呼ばれて来たのですが、彼女の体調が悪くなってしまうようなんです。それで、いまは奥で休んでるんです。」

「そうですか、あの人が……」

「でも、良かったです。彼女には止められたのですが、サクラさんとエリーゼさんを呼びに行く所だったんです。すみませんが、彼女の側に居てあげて下さい。すぐに呼んできますので！」

カムイは駆けて行く。

ジョーカーは二人を見て、

「仕方ない。行くぞ。」

そして三人は、彼女の元に駆けて行く。

カムイはリヨウマ達と合流した。

マークスがカムイを見て、

「カムイ、どこに行っていたんだ。いま、ジョーカーたちがお前を捜しに行ったぞ。」

「はい。ジョーカーさんたちは、後から来ます。」

「それはー」

マークスが疑問に思った瞬間、透魔兵が現れる。

その指揮を取るのは黒騎士アベル。

彼は冷たい笑みを浮かべ、

「皆さん。随分と挨拶が遅れてしまいました事を、まずはお詫びします。では、改めて……ようこそ、我らが国へ。この透魔王国の者として、我らが主^主に代わって歓迎致しますよう。」

彼は腰の剣を抜く。

彼の側から黒い炎が上がる。

その炎の中から、透魔兵達が現れる。

カムイ達は剣を構えて、戦闘を開始した。

透魔兵達をさばっていると、黒騎士アベルがカムイに襲いかかる。

カムイは剣をサツと上げて、受け止める。

「ほう、よく反応できましたね。えらい、えらい。」

「あ、あなたは どうして、このような事を！」

「……君にはわからないでしょうが、私は本当の君という存在を知っている。そして、君たちと居るあの子の事も知っている。」

黒騎士アベルは笑みを浮かべ、カムイを弾く。

カムイは空中で、一回転して着地する。

ハイドラが黒騎士アベルを見て、

「アベル！もうやめるんだ！こんな事をして、何もいい事はないのだよ！」

「ええ、お優しいあなた様にはそうでしょうね。ですが、あなたは知らない。本当の『カムイ』を。何故、あの子があそこまで約束に縛られてるのか、さえも。」

「そ、それは……」

「何より、あなたの愛しき人を見殺しにしたのは、他でもない『カムイ』ですよ。」

「……知っている。報告を聞いているからね。けど、それは彼女の意志。彼女は、愛しき子らを守る為の選択を選んだのだ。私は、そんな彼女の選択を誇りに思う。」

「そうですか……残念だ。あなたには、怒りに満ちて欲しかったですよ。我が懐かしき主よ！」

ハイドラに剣を振るう黒騎士アベル。

その剣をカムイが受け止める。

「ぐっ!!?」

「……ルフレ卿には、もう少し後でと言われましたが……致し方ない。あの子が居ないのが残念だが、君を壊させて貰う。」

黒騎士アベルは笑みを浮かべて、カムイを吹き飛ばした。

カムイは倒れる。

「くっ！」

「カムイ!!?」

リヨウマとマークスが気付く。

だが、カムイに振り下ろされる黒騎士アベルの剣を止めるのには間に合わない。

「させないよ！」

近くにいたクリムゾンが、飛竜でぶつかると。

それを見た黒騎士アベルは冷たい笑みを浮かべ、

「君は、死にたいのかい？いや、必然を考えるのなら……君は既に死ん

でなければならなかった。そうだね……君は必然に従って貰おう。だから、ここで死んで貰おうか！」

「なに言ってるか、わからないね！けど、カムイは殺させないよ！」

そして、クリムゾンは飛竜から飛び降り、斧を振るう。

が、黒騎士アベルはその斧を弾き、剣を振り下ろす。

カムイは冷たい笑みを浮かべ、

「やると思ったよ、アベル！」

クリムゾンの腕を引き、カムイは前に出る。

そして、黒騎士アベルの剣をカムイの夜刀神が受け止める。

いや、受け止める瞬間に刀はフードの彼女が使う長剣へと。

それに加えて、カムイの姿もフードの彼女へと変わる。

「必然にくだわるお前なら、必ずやると思った。あの時、お前もカムイたちの会話を見聞きしていたのだろう。」

「成る程ね……全然気付かなかったよ。この間のルフレ卿の一件も、案外これかな。後で、報告しておかないと。」

互いに剣を弾いて、距離を取る。

ジョーカー達は、カムイに言われたように奥へと来た。

そして驚く。

木々に倒れていたのは、カムイだったのだ。

「カ、カムイ様×え!?？」

ジョーカーが駆け寄る。

フローラが倒れていたカムイを見ると、

「気絶しているみたい。……フェリシア。」

「は、はい！姉さん！」

二人はカムイにほんの少しの冷気を当てる。

カムイがハツとして、目を覚ます。

「フローラさんにフェリシアさん……それにジョーカーさんも。そうです！あの人は!?？」

フローラは眉を少し寄せ、

「……では、あの時のカムイ様は偽物だったと言う事ですね。」

「で、でも……見た目も、喋り方もそっくりでしたよ。」

「俺が、カムイ様を見間違えるはずがない。俺が、カムイ様を見間違えるはずが……」

フェリシアも困惑し、ジョーカーに至っては同じ事を繰り返して返した。

カムイは立ち上がり、

「えっと、どういう事ですか?」

「実はここに来る前に、カムイ様にお会いしたのです。私たちに、ここで彼女が休んでいるので、側にいて欲しいと。だから我々は、ここに来たのです。ですが、偽物だとは思えない程のカムイ様でした。もしあれが、あの方ならば……私たちは、とんでもない方と手を組んでいるのだと。」

「……そう、なのでしようね。ですが、今は急いで戻りましょう。あの人が、理由も無しにこんな事をするとは思えません。」

「そうですね。」

カムイ達は急いで戻る。

黒騎士アベルは剣を構え直し、

「だが、驚いたな。君が、『カムイ』を演じるとは……あのカムイは、君とは正反対だったろう? まあ、真似するのは誰にでもできる。けど、君ほど『カムイ』を演じる事ができる者はいないだろうね。なにせ、君ほど『カムイ』を知る者もいなければ、『カムイ』という名の呪いを知らない。」

「……アベル。お前も、その一人のはずだ。なのにお前は、闇を望む。」

私は、あの悲劇を繰り返さない為に……お前を討つ!!?」

フードの彼女も、剣を構え直す。

お互いに地を蹴り、刃を交える。

リヨウマ達は透魔兵達を倒しきり、彼女らを見る。

フードの彼女の刃が、彼の頬を掠る。

黒騎士アベルは、いつにない真剣な顔つきになり、

「……今回は本気と言う事か……なら、私も少し本気になろうではないか。」

黒騎士アベルは一步踏み出し、彼女の剣を受け流す。

彼女の剣を弾く。

その剣はタクミの前に落ちる。

そのまま続けて、彼は剣を突き出す。

それは、彼女の右顔を掠る。

それはフードを裂き、仮面にヒビを入れる。

フードの彼女はとっさに大きく左に回転して、大きく退がる。

フードが落ち、彼女の隠して髪がブワツと広がる。

銀色の、少しフワツとした長い髪。

「……そうそう、君の存在に透魔王は気付いたよ。君という、存在を……」

黒騎士アベルは視線をタクミとレオンに向けた。

彼女はハツとして、駆け出した。

タクミとレオンはドクンと、何かゾツとするものを感じる。

レオンは頭を押さえ、魔術を展開する。

タクミも、瞳に光が消え、近くにあった彼女の剣を取る。

二人には黒と紫の禍々しいオーラが溢れ出す。

二人は近くにいたマークスとレオンにそれを向ける。

「に、兄さん……に、逃げて!」

レオンはマークスに叫ぶ。

それと同時に、魔術は放たれる。

タクミの方もまた、剣をリヨウマにつき出す。

カムイ達がリヨウマ達の元に戻ると、目を疑った。

カムイの瞳には、マークスに魔術を放つレオン。

リヨウマに剣を突き立てるタクミ。

「兄さん!!?」

カムイは叫ぶ。

だが、同時にレオンの魔術で、土煙が上がる。

カムイや、他の者達は顔を腕で覆う。

土煙が晴れると、

「な」

カムイは目を見張る。

マークスは眉を深く寄せ、

「こ、これは……」

彼の前には魔法陣が浮いていた。

それが、マークスを護つたのだ。

「どうやら……暗夜の第二王子の方は……それほどではなかったようだな。」

レオンは膝を着く。

マークスはレオンに駆け寄る。

そして彼女の方を見ると、彼女はリヨウマを庇っていた。

右手に短剣を持ち、左手で刃を持ち、受け止めていた。

だが、その刃は彼女の腹に刺さっていた。

剣の刃を伝って、血が流れ出る。

そこは、白夜にいた時に刃の欠片が刺さった所だった。

「お、お前……」

「白夜の第二王子は、こうなる事は何となくわかっていた……弟がこうなるのは、お互い分かっていただろう。」

タクミは光ない瞳を揺らぎ、剣から手を離す。

彼女の手から短剣が落ちる。

「ああ……だから注意していたが……すまん。」

「気にしなくていい……もとより、彼の攻撃を避けると言う選択肢はなかった。……受け止めると、受け止めてみせると約束したからな……」

彼女は剣を抜き、タクミを見る。

「彼を止めると約束していたからな……私には、歌の力はない……だが、私にできる事はやるさ……」

彼女は、アクアを見る。

アクアは頷き、歌を歌う。

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

タクミとレオンは苦しみ出す。

レオンは頭を押さえ、

「ぐっ!!?うわぁー!!?」

黒と紫の禍々しいオーラが弾け散る。
そして、手をつけて肩を上下させた。

マークスは膝を着いて、レオンの肩に手を置き、

「大丈夫か、レオンー！」

「あ、ああ……」

レオンはマークスの手を借りて立ち上がる。

だが、タクミはまだ囚われていた。

そして彼女は、傷を押さえ膝を着く。

リヨウマが、倒れ込みそうになった彼女の肩を支える。

「彼は、適合性が高い。それを一番よく分かっているのは、君だろう

……ね、カムイ様。」

「え……？」

カムイは首を傾げる。

と、リヨウマが支えていた彼女の仮面が砕け散る。

その素顔を見たカムイ達は驚いた。

中には、察しがついていた者もいただろう。

カムイは瞳を揺らして彼女を見ていた。

そこには、自分と同じ顔がある。

彼女の瞳を見て、カムイは胸を押さえる。

その瞳を知っている。

けれど、あの瞳にはもう『自分』は映らないことを……

彼女は、赤い瞳でタクミを見つめる。

その瞳には、苦しむタクミの姿。

彼女の瞳が揺れる。

彼女は視線を一度落とした後、何かを覚悟して顔を上げる。

そして立ち上がり、フラつきながら彼に近づく。

彼を抱きしめて、

「自分を……見失うな、タクミ。」

「……姉……さん？」

「お前は、私に言った。自分を止めて欲しいと……兄弟姉妹きょうだいでいた
かったと……。お前は知らないかも知れないが、リヨウマ……兄さん

も、私に同じ事を言った。それ以前に、お前は……白夜の一員として馴染めなかった私の手を引いてくれた。ずっと言いたかった……ありがとう、タクミ……それもずっと渡したかった……」

タクミが髪に結っている髪留めを見る。

その後、彼女は再びアクアを見る。

彼女は力強く頷き、再び歌い出す。

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

タクミは、彼女を突き飛ばす。

リヨウマがそれを受け止め、支える。

タクミは頭を押さえ、

「ぐっ!!?う〜、うあああ!!?」

タクミからも、黒と紫の禍々しいオーラが弾け散る。

それをカムイが駆け寄る。

「タクミさん!!?」

「うう……大丈夫……」

タクミは左手で頭を押さえながら言う。

黒騎士アベルは左手を顎に当て、

「おや、失敗ですか……仕方ありませんね。」

彼は目を細め、剣を構え直す。

彼女はリヨウマから離れ、左手を前に出す。

魔法陣が浮かび、魔術を放つ。

彼はそれを軽々避ける。

「あまり無茶をするな!」

リヨウマが彼女の肩を引く。

彼女は肩を上下させ、

「ここで、奴を討たなければ……討たないと……」

「全く……諦めが悪いですよ、カムイ様。いえ、カムイ様の娘の『カナ』様。」

彼は笑みを浮かべる。

アクアは大きく瞳を開き、瞳が揺れ動く。

そして、胸のペンダントを握り締める。

マークスは眉を寄せ、

「なに？何を言ってる……」

「カンナ……だど？バカな！カムイの子は、男子のはずだ！」

リヨウマが眉を寄せて叫ぶ。

彼女は瞳が揺れ動く。

『まずい……闇に飲まれる……』

彼女の瞳がおぼろげになる。

その瞳には、こちらに向かってくる黒騎士アベル。

リヨウマは剣を構え、迎え撃とうとする。

が、横から殺気を感じる。

彼女を中心に、黒い渦が生まれる。

そして、それが弾け飛ぶ。

アキラ、ハイドラ、リリスは息を飲む。

それは翼を広げた、カムイと同じ姿をした竜。

けれど、違うのはその色は白銀ではなく、漆黒だということ。

漆黒の竜となった彼女は、黒騎士アベルに爪を振り下ろす。

彼はそれを避ける。

「……カムイ！」

駆け寄るリヨウマに、彼女の尾が襲いかかる。

リヨウマは剣で受け止める。

アキラが眉を寄せ、

「ダメよ、リヨウマ！今の彼女は竜の暴走状態よ!!？それに、今のあの子に、その名は聞こえないわ……」

「くそっ！」

リヨウマは一端距離を取る。

黒騎士アベルは剣をしまい、

「やれやれ、困った子だ。巻き込まれるのは、避けたいですね。今回の私の仕事は終わりました。ですので、私はこれで失礼しますよ。」

彼は黒き炎に包まれて消える。

暴走した黒き竜は、近くにいたカムイとタクミを見る。

そこにハイドラが腕を広げて立つ。

そこにハイドラが腕を広げて立つ。

そこにハイドラが腕を広げて立つ。

「ダメだ！彼らを傷つけては！」

「グルルル！」

暴走した黒き竜は威嚇の声を上げる。

ハイドラはジツと見つめ、

「すまない……君が、そこまでなっていたとは気付いてあげられなかった。それほどまでの闇……君は、とてつもなく重く、苦しい状態だったのだね。」

ハイドラの彼女を見る瞳が揺れる。

暴走した黒き竜は爪を彼に振り下ろす。

カムイが前に出て、夜刀神を抜いて受け止める。

「ぐっー目を……覚まして下さいーあなたは、そんなに弱くない……はずです!!?」

カムイが叫ぶと、夜刀神が光り出す。

「グルルルウー!!?」

暴走した黒き竜は爪を離し、後退する。

首を振りながら、悲鳴にも似た声を上げる。

ハイドラがアクアを見て、

「アクア、歌をー」

「は、はい！」

アクアが歌いだそうとした時だった。

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

それはアクアが歌う歌と同じ。

けれど、男性の歌声だった。

暴走した黒き竜から何かが落ちる。

それが光りると、薄く透けた水色の髪の毛の男性が現れる。

その彼が歌っていた。

その歌を聴いた暴走し黒きた竜の動きが止まる。

男性は歌を止め、竜の頬に手を当てる。

「大丈夫です、カンナ……俺が、側にいますよ。世界の全てがあなたの敵になっても、お兄ちゃんだけは味方です。何度でも、俺が護ってあげます。それが、俺が君と約束した最初で最後の約束……」

そう言つて、微笑みかける。

アクアは涙を流し、

「シグレ……………!!?」

そして彼は再び歌い出す。

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

黒き竜は水に包まれ、人の姿へと戻った。

彼が彼女を受け止め、地に寝かす。

彼はアクアを見て、悲しそうに小さく微笑んだ。

そして水のように消えた。

リヨウマが駆け寄り、彼女をお姫様抱っこする。

彼女の側に落ちていたペンダントを見つけ、拾う。

それは、アクアがつけていたペンダントと同じ物だった。

「とにかく、拠点に戻ろう。ここではまずい!」

ハイドラの指示の元、彼らは急いで拠点に戻る。

——黒騎士アベルは城に戻り、透魔軍師ルフレに報告をしようと思つていた。

だが、ノックしても返事がなく、扉には鍵がかかっていた。

そこに、白騎士カインがやって来て、

「ルフレ殿なら、気分が悪いとお休み中だ。後にするんだ、アベル。」

「……………そうですか。そう言う事なら、致し方ありませんね。」

黒騎士アベルはドアノブから手を離し、離れた。

『……………まさか、な……………』

彼は、女魔導士の元へと向かう。

拠点に戻つて来たカムイ達。

彼女の顔を見た拠点組の方は驚いたが、すぐに状況を把握した。

彼女をベッドに寝かせる。

サクラとエリーゼが急いで治療をかける。

だが、効果が現れない。

「どうして!?」「そんな!?」

カムイも眉を寄せ、

「一体、どうして……」

「この子はもう、人ではないのよ。完全に、その身を竜と化しているわ。だから人の治癒など、意味はないのよ……」

アクアが瞳を揺らしながら言う。

カムイはアクアを見て、

「そ、そんな^{!!}? なにか、方法はないんですか!」

「……あるわ。けど、これは賭けよ。」

アクアはカムイを見る。

そしてカムイ、リヨウマ、タクミ、マークス、レオンをジッと見て、

「この子には、呪いが掛けられているわ。その呪いが大きく、そして何層にも積み重ねられてきた。カムイ、夜刀神を持って、彼女の手を握って。」

「は、はい。」

カムイは夜刀神を抜き、彼女の手を握りしめる。

アクアは、服の裾を強く握り締める。

「リヨウマ、タクミ、マークス、レオン。お願い、この子を救って……あなた達のこの子を救いたいと言う願いが、力となって治癒が効くようになるかもしれないの……お願い、カムイを……いえ、カンナを助けて。」

アクアは頭を下げる。

リヨウマ達は互いに見合い、そしてアクアを見る。

「当然だ。俺達は彼女に幾度となく、助けられた。今度は、俺達の番だ。」

リヨウマは腕を組む。

マークス達も頷く。

すると、神器が光り出す。

それが小さな光の塊となつて宙に浮く。

それは吸い込まれるようにカムイの持つ夜刀神に入る。

今度は、それがカムイを包み、彼女へと渡る。

傷口からの血が止まる。

サクラとエリーゼはハツとして、治癒をかける。

「傷はひとまず、塞がった。」

熱がまだあったが、呼吸は落ち着いた。

アクアはホツとしたように、胸を下す。

リヨウマがアクアを見て、

「それで、アクア……彼女がカムイではなく、カンナと言うのはどういう事だ？ 少なくとも、俺の知るカムイの子供『カンナ』は男の子のバズだ。」

アクアは椅子に座り、祈るように手を握り合わせる。

「正確には、カムイで間違いないわ。けど、この子の魂はカンナなの。」

リヨウマ達も、椅子に座ってアクアの話を聞く。

アクアは視線を落とし、

「……この子は、私と『カムイ』の娘のカンナよ。」

「なに？」

「イザナ公王が言った予言に出てきた、『闇に堕ちし竜の子』。あれは、カムイの事よ。」

「ア、アクアさん……それは……」

「最初の『カムイ』は男よ。ミコト様も、この透魔の出身なの。そして、ミコト様の子であったカムイは……私の夫。私の父から王位を譲り受けた王だったの。けど、彼の中に流れる竜の血は強い。『カムイ』は、ミコト様と竜の間に来た子なの。少し、長い話をするわね……」

アクアは顔を上げる。

彼らを見つめ、

「この始まりは、突然訪れたわ。カムイが、竜の血を暴走させてしまった。彼は竜の破壊行動獣の衝動に襲われ、国を滅ぼそうとしてしまったの。竜の暴走はカムイだけの事ではないわ。だからハイドラ様は、竜の暴走を止まる歌を創り出した。この歌は、竜の暴走だけでなく、争う心をも鎮める。私の母がそれを受け継いで来たの……このペンダントと共に。そして今は、私が受け継いだ。」

アクアはペンダントを握り締める。

そして思い出すかのよう、

「カムイは、私や子供たちの事も、両親の事も分からなくなった。私た

ちを含め、国も、民も、破壊し尽くした。私の歌も届かないくらい。私と彼女……いえ、カンナともう一人の子供であるシグレと共に、母達が命をかけて、過去に飛ばしてくれたわ。当時、交流関係のあった白夜と暗夜の力を借りて、カムイを止めようとした。けれど、カムイの暴走は止められず、再び国を滅ぼそうとしてしまったわ。そのせいで白夜と暗夜をも、巻き込んでしまった。このままではダメだと思っただ。もつと、過去に戻って対処をしなければいけない、そう思っただけを払って過去に飛んだわ。けれど、あのカムイはもう、完全に闇に飲まれてしまったの。時空の狭間に取り残され、ずっと苦しんでる。そのカムイの抜けた空席に、私とカムイの娘だったカンナの魂が、『カムイ』となったの。私は、あの子の姉として、共に力を尽くしたわ。けれど国は、少しずつ闇に飲まれ、崩壊を始めた。何度も繰り返したわ。時に、白夜と暗夜に赴き、再び力を借りて。けど、刻を重ねるごとに呪いは強くなり、とうとう透魔王国以外で口にする事を禁じられたわ。それはこの地に残ったハイドラ様をも、闇に墮くだとして……。それからは、辛く、苦しい闘いだった。何度も兄弟姉妹きょうだいを、仲間を、家族を失った。白夜と暗夜で、世界を救うために動き出した。白夜と暗夜に平和が来ても、闇が襲う。透魔王ハイドラを倒さない限り、災厄は終わらなかつた。なんとか、透明魔王国に味方たるあなた達を招き入れ、透魔王ハイドラを討ち倒した事もできた時があつたわ。けれど、闇が残っていた。それがカムイ。その時に、私たちは初めて知った。彼の状態を。だから、あの子は父を救う為に動き続けた。そんな中、微かな平和な時間であの子は『カンナ』を産んだ。それは空席だった自分。けれど、違う存在。それは覚悟していたみたいなの。自分がそうであつたから。父の代わりに、『カムイ』として世界を救う。何度、繰り返しても。そうしている内に、私もあの子も大切なモノが増えていった。救う為に、多くの犠牲を出してしまったの。それはあの子に、呪いとして降りかかってしまったの。怨み、憎しみ、悲しみ……くり返し、くり返し積み重ねられたそれは、とても強い。だからこの子は、人という括りをやめた。そして今回、カムイカムイと云う存在を捨ててまで、ここに居る。」

アクアは眠っている彼女を見る。

それは母の顔であり、姉の顔。

アクアはカムイに向き直り、

「……そして、今回の『カムイ』と言う空席の中に、新たなカムイが生まれた。それが今のカムイ。カムイ、あなたのその魂は、あの子が生んだカンナの魂。巡り巡って、ここにやって来た。あなたは希望なの。この選択を創り出した、唯一の希望。」

「私が……あの人の……」

カムイは胸を押さえる。

時折感じる懐かしさ。

あれは、それを意味していたのか、と。

アクアは頭を下げた。

「ごめんさない。本来なら、あなた達を巻き込むべきではなかったけれど、私たちに力を貸して欲しいの。私は、あの子の母として、姉として、見届ける。力を貸すと決めていた。ここは故郷であり、私はこの国の王妃であり、王女。果たさなければならぬ義務がある。けれど、あなた達は違うわ。巻き込まれただけ。だから、向こうに戻って暗夜王ガロンを討った後は、ここに戻らなくてもいいわ。だって、これはー」

「それ以上は言うな、アクア。お前達の気持ちは痛いほど分かる。」

マークスがジツと彼女を見つめて言った。

彼は続ける。

「私も、あの子に会ってから、夢を見たのだ。とても長い、長い夢を。あの子の敵になる自分、元に闘う自分。無論、この透魔の地のこともあった。だが、ここの記憶は曖昧だった。それはおそらく時差があったのだろう。実際、リヨウマ王子も夢を見ている。けれど、同じ夢に辿るまで、時間がかかっていた。そんな私たちだからこそ、わかるのだ。知っているのに助けられない。何度も、何度も、失う辛さと怖さの繰り返し。あれほど悔しく、自分の弱さを実感したものはない。むしろ謝るのはこちらだ。お前たちは、ずっと苦しんで闘ってきたのに、気付いてやらなかった。だが、今回は違う。共に、闘っていこう。」

「そうです、アクアさん。私はたとえば、自分が誰だったろうと関係ありません。今の私は、私なんです。私は、世界を平和にしたい。白夜と暗夜が共に手を取り合える世界。この透魔王国もまた、そうなることを信じます。だからこそ、闘うのです。」

カムイはぎゅつと、拳を胸のところで押さえる。

アクアは両手で顔を覆い、泣く。

「ありがとう、みんな……」

カムイはアクアを抱きしめる。

彼らは改めて、平和な世界を掴み取る為に闘う事を誓う。

永きに渡るこの悲しみの連鎖を断ち切る為に……

第十七話 記憶

それは昔の記憶。

黒騎士は思い出す。

それはまだ、『カムイ』様が透魔王国を継がれる前のこと。

まだ竜達も、この地にいた頃の話だ。

当時の透魔王リユウレイ様の命で、透魔王国を守護する竜の護衛をする事となった。

兄ではなく、自分に降った命。

不思議ではあった。

何故なら、元々竜の側には未来を見通す巫女が居た。

そして、竜もまた未来を見通すのだから。

そうでなくとも、双方強い。

巫女は虹の賢者と呼ばれる竜の創りし神器を持ち、その使い手だったのだから。

時は流れ、巫女は『カムイ』という名の男の子を産んだ。

彼は産まれながらに、婚約者がいた。

彼より、数年前に産まれた透魔王の娘。

彼女と結婚するということ。

つまり次期国王となるのだ。

自分は、その男の子の面倒も見ることとなった。

その子の師として剣や作法を教え、過ごす日々。

竜達も、彼の事は好きでよく話し相手になっていた。

彼らと過ごす日々は、嫌いではなかった。

彼は成長し、透魔王国の王女と結婚した。

それと同時に即位した。

彼らの間には、第一王子が誕生した。

母方の血を濃く受け継いだ王子。

彼の誕生で、国は盛大に盛り上がった。

しばらく経ち、竜達は人の生活と云うくくりをやめた。

一頭の竜は国を離れ、自身の星を創る。

また一頭、竜は国を離れ、時空を漂う。
そして、戦争は起きた。

十二の竜達は、降り立った地で覇権争いを始めた。

ある竜は新たに神器を創り、ある竜は己の血を人間に与えた。

竜と竜、人と人、時に竜と人の争い。

それを聞きつけたのは『カムイ』。

その地と透魔王国とは、時間の流れが違う。

それを知り、駆けつけた頃には犠牲は大きくなりつつあった。

彼は虹の賢者と呼ばれる竜の元に向い、共に争いを止める為に動き出す。

それは次第に、竜の血を受けた人間達とも協力するようになった。

彼は、虹の賢者から生誕の祝いで貰っていた『夜刀神』を用いて、戦争を終わらせた。

その後、竜の血を受けた人間達はそれぞれの国、部族を創り上げていった。

透魔王カムイは、彼らとの交流を続けた。

特に交流のあった白夜王国と暗夜王国には、記念の品を送るくらいに。

白夜には玉座を、暗夜には透魔の象徴を。

そうしている内に、白夜と暗夜は王の世代が随分と変わった。

そして透魔王国にも、第一王女が産まれていた。

彼女は父方の血を濃く受け継いでいた。

彼女は父のようになりたいと、剣を取る。

その剣を教えるのは自分と王。

彼女は父と同じく、竜の姿になれる守り神。

平和だった透魔王国。

その平和だった国を、滅ぼし始めたのは他ならぬ透魔王カムイ。

彼は竜の血が暴走し、暴れ出した。

自分は、それを見て心躍る。

光を塗り潰すほどの暗。

暗よりもなお、黒く染まっていく闇の姿。

神々しかった。

それはまさに、世界や人を滅ぼす真の神の姿^竜。そう思った……

目が覚めると、周りは元の平和な透魔王国。

自分の仕える王は、相変わらずの心優しき青年。

あの闇ではなく、いつもの彼。

何度でも言おう。

自分は彼も、彼らとも過ごすこの日々は嫌いではなかった。

未だに師としてみてくれる王^彼。

自分を家族のように慕ってくれる彼の娘^{あの子}。

共に競い合う強き兄。

けれど、再び滅びはやって来た。

全てを滅ぼす、あの瞬間が。

自分は理解した。

この滅びは必然なのだ。

なら、受け入れるべき事なのだ。

繰り返し、繰り返し、平和と滅びはやって来た。

だが、ある時を境に『カムイ』が変わった。

彼が消え、彼の代わりに娘が『カムイ』になった。

けれど、自分との関係は変わらず、師と弟子。

その変化があっても、滅びはやって来た。

そしてこの平和と滅びの物語は、透魔の外にまで及ぶようになって
た。

繰り返される透魔と白夜と暗夜の悲劇。

平和と滅びは広がっていく。

カムイの竜の暴走は、いつしか透魔王国を守護する竜へと変わる。

消えていく、自分と彼らとの繋がり。

それはいつしか、自分の心を変えた。

迎える必然。

自分は、それをうまく流れるように動こう。

例え、兄や彼らが相手でも。

何故なら、自分しかその事を覚えていないのだから。けれど、自分以外に覚えている者がいた。

他でもない、あの子。

彼女の見る目は昔と違う。

怒りと悲しみに満ちた目。

その奥に見える殺意の瞳。

当時のあの子からは、考えられない事だった。

必然を起こせば、あの子は変わる。

それはとても面白かった。

自分は今、とても面白かった。

自分の起こす破滅と、あの子の抱く希望。

どちらの力が強いのか……

――それは遠い遠い記憶。

自然に溢れた透魔王国。

城の庭には、色鮮やかな花畑が広がっていた。

そこを歩く銀色の髪を少し跳ねらせた青年。

彼の赤い瞳が、辺りを見渡す。

「カンナ、どこにいるんだー？」

「ここだよ、お父さん！」

花畑から出てきたのは、彼と同じ銀色の髪と赤い瞳を持つまた幼女。

彼女は髪をお団子のように結び上げていた。

青年は娘を抱き上げる。

と、彼の頭の上に何が乗る。

「お父さんにプレゼントー！この前、お兄ちゃんに教えて貰ったの！」

「お花の冠か……ありがとう、カンナ。」

彼は彼女を抱えたまま、城に向かう。

扉を開けると、黒騎士が頭を下げる。

「おかえりなさいませ、カムイ様、カンナ様。」

「アベル、ただいま。」「ただいま、アベル！」

二人は笑顔を向ける。

黒騎士アベルは頭を上げ、

「さて、カムイ様。もうじき、白夜王リヨウマ様と暗夜王マークス様がお見えになります。お支度を。」

「うん、わかった。」

カムイは娘のカンナを下す。

彼女の頭を撫でた後、アベルと共に話ながら歩いていく。

その背を見ていると、

「おかえり、カンナ。」

「お兄ちゃん、ただいま!」

そこには水色の髪で、右目を隠した前髪の少年。

彼は彼女の手を引き、歩く。

「ところで、お兄ちゃん……お母さんは?」

「母さんは、お爺様たちのところ。父さんは、今から会議だったね。アベルさんも、そっちに付きつきりなると思うから、今日の剣の稽古はなしかな。」

落ち込むカンナを見たシグレは、

「そうだ、カンナ!今日は、シノノメとジークベルトも来るらしいんだ。」

「お兄ちゃんのお友達?」

「うん。白夜王リヨウマの息子のシノノメと暗夜王マークスの息子のジークベルト。きつと、カンナとも仲良くしてくれるよ。」

彼女は、嬉しそうに頷いた。

しばらくして、馬に乗って来た者たちが来た。

赤い鎧に身を包んだ白夜王と黒い鎧に身を包んだ暗夜王。

その後ろには、彼らに似た少年がいる。

カムイは一步前に出て、

「いらっしやい、リヨウマさん、マークスさん。」

と、微笑みかける。

横からアベルが、

「ゴホン、カムイ様。一国の王が、そんなでは駄目ですよ。」

「えー。だって、型苦しいのは苦手なんだ。」

「ですが、礼儀は大切なんですよ。」

頬を膨らませて、笑う彼に叱る。

それを見た白夜王リヨウマは腕を組んで笑い出す。

「はは、カムイ殿は相変わらずだな。」

「ああ。だが、そこがカムイ王のいいところだ。」

隣で、暗夜王マークスも笑う。

そこに、カムイの息子のシグレと娘のカンナがやって来る。

それを見た白夜王子シノノメは手を上げて振る。

「おーい、シグレー！遊びに来たぞー。」

「おい、シノノメ。お前は碎け過ぎた。もっと、礼儀正しくしないか。」

「えー。俺も、カムイ王と同じで型苦しいのは苦手なんだ。」

彼は両手を頭で組んで、口を尖らせる。

それを、横で暗夜王子ジークベルトは苦笑しながら、困っていた。

だが、カムイが頷きながら、

「だよね。やっぱ、仲のいい者同士はこうだよね！」

「カムイ王、わかってる！」

彼はニツと笑う。

シグレは笑いながら、

「はは。シノノメは、父さんと相変わらず仲が良いみたいですね。」

カムイは、彼の足元に隠れている娘を見つける。

彼は笑顔で、

「そうそう、リヨウマさんとマークスさん達は初めてでしたね。紹介

します。娘のカンナです。」

「は、初めましてー！」

カンナは、シグレの後ろから出て頭を下げる。

白夜王リヨウマは頷き、

「初めまして、カンナ王女。今日は息子のシノノメを連れて来ている。

仲良くしてやってくれ。」

「カンナ王女、初めまして。私も、息子のジークベルトを連れて来ている。ジークベルト、後は頼むぞ。」

「は、はい！父上！」

暗夜王マークスが暗夜王子ジークベルトを見る。

彼は気をつけをして頷く。

カムイもシグレを見て、

「シグレ、アクアがオヤツを作ってくれてあるから、庭でみんなと食べるといい。カインが今に来ると思うから、何かあつたら彼に言つてね。」

「わかりました。」

カムイ達は中へと入っていく。

シグレ達も、オヤツを持って庭で父達の会議を終わるのを待つ。

庭のテラスに着くと、カンナは暗夜王子ジークベルトを見て、

「ジークは、マークス王のこと苦手？」

「え？ジーク？えつと……」

「はは！ジークか、良いなそれ。ナイスだ、カンナ。だが、こいつは父さんが苦手じゃなくて、王様だから話し辛いだけだ。親子なんだから、そんなん気にしなくても良いのにな。」

「シ、シノノメ！そんな事言つても、父上は王なんだ。いくら息子とは

いえ、礼節は大事だとー」

「あーあー、俺型苦しいの嫌いー！」

「シノノメー!!？」

耳を塞ぐ白夜王子シノノメ。

その彼の肩を、暗夜王子ジークベルトは揺らす。

シグレはクスクス笑う。

そんな事もあり、彼らの友好関係はとても良かった。

ある日、シグレがカンナを連れて城の外に出た。

兄と共にやって来たのは森に隠された屋敷だった。

屋敷の少し離れた場所に、ベンチ型のブランコがあつた。

二人でそれに座り、遊ぶ。

「カンナは、知らないかもしれないけどね。俺が小さい頃、沢山の竜がこの国に居たんですよ。人間のように生活をするに竜も居ました。」

ここも、もしかしたら、その跡地かもしれない。けど、ここを離れて行った。今の白夜王国や暗夜王国がある世界、あそこで大きな戦争があったんだ。それを、父さんが夜刀神を用いて止めたんです。」

「みんな、喧嘩をしたのかな……」

「そうですね……みんな、仲良くできたら良かったよですがね。」

シグレは悲しそうに、カンナの頭を撫でる。

その日から、カンナは何かあるとすぐここに来ていた。

そのカンナを迎えに来るのは兄シグレ。

彼と共に城に帰る途中で、アベルに見つかるのだ。

城に帰ると、父が心配そうに駆け寄り、抱きしめる。

その後、母とアベルの説教が始まるのだ。

それを、父と兄がフォローしてくれた。

ある日、カンナは兄と共にブランコに乗って、兄の歌を聴いていた。

母から教わった歌を。

カンナは、母と兄が歌う姿が好きだった。

兄を見上げ、

「お兄ちゃんはいいなく。」

「何がだい？」

「私も、お兄ちゃんみたいにお歌を歌えたらって。私はお歌へタだし、お母さんみたいにお父さんのお手伝いもできない。」

シグレはブランコを止め、カンナの頭を撫でる。

「そんな事はないですよ。カンナだって、父さんみたいに竜になれるじゃないですか。俺にはできない。だからカンナは、父さんを支えることができる。」

「お父さんを？」

「ええ。母さんが言ってました。竜の力は強いと。だから時に、暴走してしまうと。だから母さんは、父さんの為の歌を歌う。カンナは、父さんの竜の仕事を一緒にできるんですよ。俺には、その仕事はできない……」

「じゃあ、私も暴走しちゃうかもしれないんだよね。……だったら、お兄ちゃんはカンナの為にお歌を歌ってくれる？もしも暴走しちゃう

ても、カンナのこと嫌いにならない?」

「はい。カンナが暴走してしまった時は、俺が歌を歌います。それに、俺はずっとカンナのこと大好きですよ。何があっても、カンナの味方にずっとなります。」

「じゃあ、約束ね!」

「はい、約束です。」

二人は笑顔で指切りをした。

しばらく経ち、白夜王子シノノメと暗夜王子ジークベルトがやって来た。

彼らと共に遊び、彼らが帰るときに言う。

また今度、と。

けれど、彼らと会ったのはこの日が最後だった……

私は母に手を引かれ、走っていた。

「カンナ! もう少しだけ、頑張って!」

だが、カンナは木の根に躓き転ぶ。

母と繋いだ手が離れ、自分は泣き出した。

「うあああああ!」

「カンナ!!?」

母はすぐに自分を起こして、抱きしめる。

そこに弓を持った巫女と、フードを纏った男性が駆けて来る。

「アクア!」

「ハイドラ様! ミコト様!」

「アクア、カムイは……あの子は……」

「もう、私たちの事もわかりません。完全に暴走しています。私の歌も、届かなくて……」

それを聞いたミコトは顔を覆って悲しむ。

ハイドラが彼女を抱きしめ、

「アクア、シグレはどうしたんだ。」

「途中ではぐれてしまいました。けど、あの子なら大丈夫です。」

アクアは立ち上がる。

彼らは話し合っていた。

カンナは溢れ出す涙を拭いながら、気づく。父と母から貰った竜石がないことを。

失くさないように、首にかけていたのに。

カンナは立ち上がり、来た道を駆ける。

アクアはハツとする。

先程まで、側にいた娘がいない。

「カンナ!??カンナ!!?」

アクアは辺りを見渡す。

茂みからアベルが現れた。

「ここにおられましたか、アクア様。それにハイドラ様とミコト様も、ご無事で何よりです。急いで、リュウレイ様とシユンメイ様がお待ちです!急いで向かってください。兄とシグレ様もいます。」

「わかった。行こう!」

ハイドラがミコトの手を引く。

アベルがアクアの手を引き、

「アクア様も急いで!」

「待って!カンナが!カンナが居ないの!!?」

「それは私が!アクア様は急いで、シユンメイ様とシグレ様と合流を!歌い手としてのお役目を!」

「……わかったわ。アベル、カンナをお願い!」

アクアはハイドラ達と共に走って行く。

アベルは子供の足跡を見つけ、走る。

カンナは泣きながら、地面を漁っていた。

けれど、竜石は見つからない。

カンナは座り込み、

「うっ!うう!お父さん!お母さん!お兄ちゃん!アベル!」

「はい、何ですか?カンナ様。」

アベルが後ろから駆けて来た。

カンナを抱き上げ、

「ぎ、行きますよ。」

「うっ、失くしちやったの。お父さんとお母さんから貰った竜石。失

くしたちやダメって……とても大切な物だからって！」

カンナはアベルに抱きつき、泣き出す。

アベルは辺りを見渡し、光る石を見つける。
それを拾い上げ、

「ありましたよ、カンナ様。」

カンナはアベルの持つ竜石を受け取ると、泣き出した。

アベルはカンナを抱きしめ、背をさする。

と、地面が揺らぐ。

彼はカンナを抱えたまま、走り出す。

カンナを連れて、アベルはアクア達の元に辿り着く。

カンナを下ろすと、

「おかしさん!!?」

「カンナ!!?」

アクアは駆け寄るカンナを力一杯抱きしめる。

「アベル、ありがとう。」

「いえ。ところでカムイ様はやつぱり……」

アクアは頷く。

カンナを離し、立ち上がる。

「竜石も完全に壊れてしまったわ……完全に獣と化してしまった。もう誰の事もわからず、見えるモノ全てを破壊してる。」

「そうですか……兄さん、どうしますか。」

「それを、リュウレイ様とハイドラ様が検討していた。」

アベルはこちらにやって来た兄の白騎士カインを見る。

その表情は厳しい。

彼は普段から笑顔が絶えない穏やかな人。

だからこそ、不安になったカンナはカインを見上げ、

「カイン！」

彼の足にしがみ付く。

カインは膝を着き、彼女の頭を撫で、

「カンナ様、大丈夫ですよ。だから、カンナ様はお退がり。」

「カイン！お父さんね、さっきまでね……カンナと遊んでくれていた

んだよ。お花畑で……お花の冠を作ってたの。元に戻るよね、お父さん……優しいお父さんに戻るよね……また、カンナの名前を呼んでくれるよね……また笑ってカンナのこと思い出してくれるよね……」

カンナは涙を流す。

その溢れ出る涙を拭う。

けれど、涙は止まらない。

そこにシグレがやって来て、涙するカンナを抱き上げる。

彼女の背を摩り、

「カンナの目の前で暴走してしまっただけです。異変に気付いた母さんの歌で、その時は収まりました。けれど、すぐに理性を失い、側に居たカンナを襲ったんです。俺が間に合わなかったら、カンナは……父の手で死んでいました。」

「そうでしたか……カンナ様はカムイ様が大好きでしたからね。カンナ様をお願い致しますね、シグレ様。」

「はい。カンナは大事な妹ですから。」

カンナは疲れ、シグレの肩に眠っていた。

シグレはカンナを優しく抱きしめる。

すぐそこでは、暴竜となった父の姿。

もう、生まれ故郷である透魔王国は崩壊を始めていた。

大地は崩れ、人々の嘆きと恐怖が漂う。

父は血の涙を流し、悲しみが響き渡る。

——カンナが目を覚ますと、色とりどりの美しい透魔王国。

昔、家族でやって来た透魔王国の象徴である竜神ハイドラの石像の前。

そう、自分が意識を失う時に居た場所。

兄に抱かれ、最後に見た景色は暴竜とかした父が起こす崩壊する透魔王国。

あの時、父の悲しみが聞こえた気がする。

泣いていた父の声が……

「カンナ？どうしたんだい。」

振り返るとそこには父の笑顔。

暴竜と化す前の優しい父の姿。

カンナは顔をくしゃくしゃにして泣き出す。

「おとーさんー!」

彼に抱き付く。

カムイは苦笑して、抱き上げる。

「本当にどうしたんだい、カンナ?」

「ううん、何でもないの!お父さん、一緒に帰ろう。みんなが居る、あの場所に。」

「……うん?ああ、帰ろうか。アクアやシグレが待ってる。」

カムイは優しく微笑みながら、カンナを連れて帰る。

家族が暮らすあの城へ。

城に帰ると、アクアとシグレが門の前に立っていた。

二人も、カムイの姿を見ると涙を流す。

「つて、アクアとシグレもかい?」

「カムイ……」「父さん……」

二人もカムイに駆けて行き、抱き付いて泣いた。

シグレはアクアの前に居た。

「では、母さん……」

「ええ、私たちは過去に戻って来ただけ。あと数週間で、カムイの暴走は起こるわ。彼の竜石を見せて貰ったわ。……ヒビが入っていた。新しいのに変えたけれど、すぐにヒビが……ハイドラ様によれば、どうしようもないと。」

「……そんな。ここにきて、カンナは父が元に戻ったと思っているんですよ!それでも、幼いながらに感じている。父がまたああなってしまうのではないかと。だから、父の側を離れない。いえ、離れようとしなない。」

「分かっているわ。……シグレ、あの事を覚えているのは私たちだけなの。あの時、父たちが命を対価にして禁忌を行ってくれたから、私たちはここに居る。それは、カムイを救うため。」

「だからです!なのに父を救えないなんて……!!」

シグレは後ろを振り返る。

そこにはカンナが居た。

カンナは瞳を揺らしながら、

「お父さんは……またカンナのこと忘れちゃうの？お父さん……またあんなに泣いちゃうの？」

「……カンナ……」

アクアは、カンナを抱きしめる。

カンナはアクアを見上げ、

「お母さん、お父さんを助けるのに、シノノメやジークのお父さんの力は借りれないの？」

「……白夜王に暗夜王の……けど、これは自国の問題よ。他国の王に迷惑をかける訳には……」

「母さん、信じて貰えるかは分かりませんが、俺が両国に行つてきます。だから、母さんはお爺様たちをお願いします。カンナは父さんの側に居てあげてください。」

シグレはジツとアクアを見つめた。

アクアはため息をつき、

「シグレ……わかったわ。やれる事はやっていきましょう。」

カンナは二人を見上げていた。

二人の姿を誇らしく、かっこいいと思った。

父やアベル、カインの戦う姿は見た事がある。

よく、模擬戦や一対一の戦いをしていた。

父に聞けば、母も兄も凧刀を武器に戦う事もできると聞いた。

祖母も、魔術に弓を使うと。

自分はまだ、剣を素振りするのがやっとだが、いつかみんなと共に隣に立ちたいと。

そして、その日は来てしまった。

カンナは母方の祖父母に預けられていた。

カインも居るから安心だと。

だが、カンナは父の元に走っていた。

心配だったのだ。

地震が起きる。

カンナは頭を抑えてしやがむ。

それが収まると、また走り出す。

怖くて、足がすくむ。

けれど、父と約束した。

——お父さんは、カンナが助けるね。カンナが絶対、お父さんを助けるの！

——そっか……ありがとう、カンナ。カンナとシグレが僕の子供になつてくれて嬉しいんだ。カンナの笑顔は大好きだ。カンナも、シグレも、大好きだ。僕の愛しき我が子たち。カンナ、忘れないで。父さんも、母さんも、カンナを愛してる。カンナとシグレは僕らの宝だ。とても大切なんだ。

父の優しい笑顔を思い出す。

カンナは涙を拭って、立ち上がる。

再び立ち上がる。

それを繰り返していた。

しばらくして、走るカンナの上から岩が落ちてきた。

「危ない！」

「きゃっ！」

カンナを抱き上げ、横に避ける男性と岩を砕く男性。

彼女を抱き上げたのは、弓と剣を携えた白い鎧を着た青年。

岩を砕いたのは、剣と魔導書を携えた黒い鎧を着た青年。

彼女を降ろし、

「……もしかして、君はカンナ王女？」

「うん。助けてくれてありがとう。」

カンナは頭を下がる。

黒き鎧を着た男性がやって来て、

「タクミ王弟。その子にケガは？」

「大丈夫。さつきは、ありがとう、レオン王弟。」

「これぐらいは簡単さ。だが……カンナ王女、今は危険です。すぐに非難を。」

王弟レオンはカンナの前に膝を着く。

だが、カンナは首を振り、

「いや！私は、お父さんの所に行くの！」

「けど、カンナ王女……」

「行くったら、行くの！」

カンナは涙目で訴える。

王弟レオンと王弟タクミは互いに見合ってたため息をつく。

王弟タクミがカンナを抱き上げ、

「仕方ない。僕らで守りながら、王妃の元に連れて行こう。」

「そうだね。」

彼らはアクアの元に急ぐ。

カンナをアクアの元に連れて行くと、アクアが彼女の頬を叩いた。

「うわああああん!!」

「ア、アクア王妃！」「な、なにを☒」

二人は驚いた。

アクアは彼女の肩を掴む。

「カンナ！あれほど、来てはダメと言ったはずよ！」

「だって、お父さんが心配なんだもん！私だって、お父さんを止めるお手伝いする!!」

「……いい、カンナ。あなたのした事は、自分の身を危険にしなければいいわ。タクミ王弟やレオン王弟も、危険にさらしたのよ。」

アクアは眉を寄せて、声を上げる。

カンナはアクアの手を払い、泣きながら王弟タクミの足にしがみ付いた。

「お母さんのバカ！」

「カンナ！」

アクアが立ち上がる。

カンナはアツカンベーをして、走り出していった。

「カンナ!!」

カンナは泣きながら走っていた。

母の元を去った後、白夜兵と暗夜兵が言っていた。

——透魔王カムイを殺す

そんな事はさせない。

地面が揺らぐ。

「お父さん！おとーさん！」

カンナは叫んだ。

すると、竜の姿のカムイが現れる。

「……カンナ……？」

「お父さん！」

カンナが嬉しそうに駆け寄った。

彼に抱き付き、

「お父さん！お父さん！」

「……カン……ナ……逃げ……ろ。」

「え……？」

カンナは父を見上げる。

父の手が、自分の首を絞め始めた。

「あつ……うっ！」

父の手は緩まない。

竜の姿となった父の表情はよく解らない。

けれど、泣いている。

悲しんでいる。

母が自分を祖父母の元に置いて行った時の言葉がよみがえる。

——カンナ、絶対ここを離れてはダメ。お爺様たちの側を離れてはダメよ。あなたはまだ幼い……だから、これから起きる事を理解できないかもしれない。けれど、大きくなったときにわかるわ。だから、カンナ……あなただけはお父さんを信じて、嫌いにならないで。

カンナは父の顔に手を伸ばす。

けれど、届かない。

「カンナ!!」

そこに、兄の声が響く。

父に凧刀を振るう。

それが、肩に突き刺さる。
父が悲鳴を上げて離れる。

「ごほっ！げほっ！」

「カンナ、大丈夫ですか！」

「お兄ちゃん……」

意識がまだ朦朧とする。

視界がぼやける。

シグレはカンナの肩を揺する。

意識はある。

息もある。

ひとまず安心する。

けれど、自分の握る風刀を見る。

父に刃を向け、傷つけた。

覚悟していたとは言え、とても辛い。

シグレはハツとする。

竜の父が爪を突き上げている。

シグレは風刀で防ごうとする。

だが、それを尾で払われてしまった。

シグレはカンナに覆いかぶさる。

父の爪が背を抉る。

「ぐっ！！」

「お兄……ちゃん？」

カンナは自分に覆いかぶさる兄を見る。

兄の額に汗が吹き溢れる。

兄の背の後ろから竜の父が見える。

父の振り上げる手、爪には血がついている。

カンナは瞳を見開く。

兄の背を少し触り、掌を見る。

自分の手は真っ赤に染まっていた。

地面には血が溢れている。

「お兄ちゃん……お父さん……」

カンナは涙目になる。
再び父の爪が兄を抉った。

それは兄の背を貫き、自分の顔の近くまで兄の血に染まった爪がき
た。

顔には兄の血がかかる。

カンナは声にならない悲鳴を上げる。

父がその爪を抜くと、

「がはっ！」

兄は倒れ込む。

カンナは兄を抱きしめ、

「お兄ちゃんー！お兄ちゃん!!」

「カン……………ナ……………これを……………お守り……………です。カンナを……………守って……………くれます。」

シグレは優しく微笑む。

カンナの手には、母のペンダントが握られていた。

兄の息が上がっていく。

体温が冷たくなっていく。

「あ……………ああ……………!!」

竜の父は首を振り始める。

「シグ……………レ……………!!シ……………グレ!!」

「カムイ!!」

そこに、アクアが駆けて来た。

彼女は場の状況を見て、息を飲んだ。

娘のカンナを庇うように、血を流してうつ伏せの息子のシグレ。

そして夫のカムイは竜の姿で、木々に体をぶつけていた。

その彼の手には、爪には血が染みついていていた。

「ア……………クア……………もうダメ……………だ。お願い……………いだ……………僕を……………」

「カムイ……………」

アクアは涙を溜め、凧刀に力を籠める。

彼女は、それを彼の心臓めがけて突き出す。

それは彼の心臓を貫く。

「あり……がと……う、アク……ア……ごめ……ん。」

「カムイ……ごめんなさい!!」

アクアはそれを引き抜く。

カムイは倒れ込む。

けれど遅かった。

この透魔王国は崩壊し始めていた。

「お父……さん……」

カンナの瞳には、母が父を討った姿が映る。

彼女の瞳は大きく揺れ動く。

もう息が小さくなった兄、倒れている父。

母が涙を流し、父を抱きしめる。

人の姿にすら、戻れない父。

カンナは声にならない声を上げていた。

カンナは、強い光で目を細める。

もう一度、瞳を開ける。

そこは青い空、流れる雲は緩やかだった。

起き上がると、手に何か当たる。

そこを見ると、兄があの時渡した母のペンダントがあった。

それを掴み、握りしめる。

「カムイ、ここに居たのですね。」

聞き覚えのある声。

祖母のミコトの声だ。

自分は思う。

父が側に居るのか……

けれど違った。

振り返ると、

「カムイ。」

祖母のミコトは自分を抱きしめて、そう言った。

「え……?」

祖母の瞳に映る自分は、変わらぬ自分。

少し違うのは、少しくせ毛があるくらい。

「アクアが捜してましたよ。」

自分は訳が解らず、黙り込んでいた。

そこに、一人の少女がやって来る。

自分よりも少し上の水色の長い髪の小さな母が……

「カムイ、ここに居たのね。捜したわ。さ、行きましょう。」

その彼女に手を引かれる。

自分が『カムイ』と呼ばれ、一言も喋らなくなった。

自分の子と呼ぶ祖母。

自分の友であり、妹と呼ぶ母。

「……カムイ、どうしたの？」

「……………」

「私……あなたに、何か怒らせるようなことをしたかしら？」

アクアは心配そうに、カムイの顔を覗き込む。

カムイはそっぽ向いて、首を振る。

「……カムイ、私ね……あなたに『アクア姉様』と呼ばれなくなって寂

しいの。あなたの、あの明るい笑顔が見れなくて哀しいの。」

アクアの悲しそうな声。

その声に、母だった頃の母を思い出す。

カムイは立ち上がり、駆け出した。

無心に走り続けた。

と、誰かにぶつかった。

「おっと、すまん。大丈夫か？」

それは赤い鎧を着た見た事のある男性。

そう、白夜王リヨウマに似ている。

その隣に居る男性も見た事がある。

黒い鎧を着た男性、暗夜王マークスに似ている。

赤い鎧を着た男性はしやがみ、カムイを起こす。

土汚れを叩き、

「怪我はないようだな。」

「リヨウマ王子、ここでは危ない。」

「そうだな。移動しよう、マークス王子。」

リヨウマ王子と呼ばれた彼は、カムイを抱き上げて歩く。

ここは深い森林。

子供だけでは危ない。

そう判断したのだ。

自分は知っているリヨウマと言う名は、白夜王のはず。

そして、マークスと言う名も、暗夜王のはずだった。

だが、彼らは白夜王子シノノメや暗夜王子ジークベルトと同じくらい。

そう考えるのなら、彼らは彼らの父となる前の彼らと言うことだ。

彼らに連れられ、森を抜ける。

透魔王国の城の前に来ると、兄の声が聞こえる。

自分はジタバタし始める。

白夜王子リヨウマが慌てて、カムイを降ろす。

カムイは兄の声がする方へ走って行き、足にしがみ付いた。

「おや？カムイではないか。どうしたのだ？」

「ん？リュウレイ殿のお子様ですか？」

「可愛らしいですな。」

白き鎧の王と黒き鎧の王が居た。

カムイが顔を上げると、それは兄と同じ顔の祖父だった。

そうだった、兄は祖父似だと言っていた。

声や容姿は若い頃の兄そっくりだったと……

透魔王リュウレイは、カムイの頭を撫でながら、

「いえ、この子は先ほどの巫女、ミコトの子ですよ。白夜王スメラギ、

暗夜王ガロン。」

「ミコト殿のですか。」

白夜王スメラギは膝を着き、

「どうやら、息子が何かしてしまいましたかな？」

「スメラギ殿の顔に驚いたのでは？」

「それは貴殿だろう。」

と、二人は笑い合う。

白夜王子リヨウマと暗夜王子マークスがやって来る。

「父上、申し訳ありません。」

「話をしながらここに来たので、もしかしたら私たちが何か言ってしまったのかもしれませんが。」

「カムイ!!」

アクアが走って来た。

そして彼女を抱きしめた。

カムイは白夜王子リヨウマと暗夜王子マークスに首を振る。

「ごめんなさい、この子は今喋れないの。」

「そうだったのか。」

そこに黒い鎧を着た騎士がやって来る。

カムイは透魔王リユウレイから離れ、彼に抱き付きついた。

黒い鎧を着た騎士は彼女を抱き上げ、

「どうしたんですか、カムイ様。」

カムイは無言で、彼を強く抱きしめる。

彼は彼女の背を撫で、

「リユウレイ様、私はカムイ様をミコト様の元に連れて行きますね。」

「ああ。頼むよ、アベル。」

「はい。」

「私も行くわ。」

アクアも彼と共に付いて行った。

そして再び、悲劇は起きた。

父であったカムイの代わりに、神竜ハイドラが暴走し出したのだ。

大地は父カムイの時のように崩壊を始めた。

自分は母ミコトとアクアに庇われた。

意識を失い、目が覚める。

自分は再び、あの崩壊する前の透魔王国にいたのだ。

カムイ、いや、カンナは理解し始めていた。

あの時の自分がとった行動によって、流れが変わってしまったのではないか。

自分の身勝手な行動で、父カムイの存在が消えた。

それは兄の存在も消えてしまったと言うこと。
それだけではない。

父の変わりに、ハイドラが暴竜となってしまった。

カンナは泣き続けた。

父は透魔王国を愛していた。

父は家族を愛していた。

その全てを破壊する存在となってしまうた自分を嘆き、苦しんでいた。

なら、自分は責任を取らねばならない。

母アクアがあの時やったように、今度は自分がその代りをしなくてはならない。

自分はカムイとして、父の変わりをしなくてはならない。

父がこの国を守るように、白夜と暗夜の交流を守らなくては。

カンナは『カムイ』として変わった。

アベルに剣を教わり、母ミコトに弓を教わり、アクアの母シユンメイから魔導を教わった。

父からも教わっていたとは言え、あの時は真面に剣を振るうこともできなかった。

けど、今は違う。

自分もそれなりに成長した。

透魔王国の崩壊も、竜の暴走も怒ってしまう必然ならば、自分はそれを壊す。

白夜王スメラギと暗夜王ガロンの力を借り、暴竜ハイドラを討つ。けれど、崩壊は免れない。

姉としてアクアは力を貸してくれる。

もつと、もつと策を投じなければならぬ。

それを繰り返しているうちに気付いた。

必然と言う呪いが強くなっている。

戻れば戻るほど、呪いが強くなっている。

透魔王国の事を口にする事は出来なくなった。

透魔王国は、幻の国へとなったのだ。

けれど、まだ白夜王国と暗夜王国の交流はあった。姉アクアと共に、両国に説得する。

そして、白夜も暗夜も巻き込む程、呪いが強くなった。それを気付いた時、自分の異変にも気付いた。

自分は過去に行くとき、誰かの命を対価にここに来ていること。それが無い時は、無意識に自分の余命を対価にしていた。体が弱くなっている。

けれど、立ち止まる訳にはいかない。

そして、自分がとうとう姉アクアとの交流も、もてない程幼い頃がやって来た。

赤子の自分が、母ミコトと共に白夜王国に来るといいう状況が続いた。

カムイは縁側に座って、桜を見ていた。

「カムイ、ここに居たのか。」

「……リヨウマ王子。」

カムイは床に正座し、白夜王子リヨウマに頭を下げる。

リヨウマ腕を組み、

「……カムイ、お前がそこまでする必要はない。お前は奉公人ではなく、俺の妹だ。」

「リヨウマ王子、私を妹と呼んでくださるのは嬉しいです。ですが、私には、ここの王族として居る事はできません。私に王位はないのですから。」

リヨウマは頭を下げたままのカムイの頭に手を乗せる。

「誰かに何かを言われたか？お前が例え妾の子だとしても、俺にとっては妹に変わりはないのだ。」

「……そうであったとしても、私は甘える事は許されませんので。」

リヨウマはため息を一つ付き、立ち上がる。

カムイはリヨウマが去るまで頭を下げていた。

顔を上げると、再び桜を見る。

「……だって私は、白夜の血は引いていないのだから……」
しばらく経ち、カムイは廊下を歩いていった。

今日は鍛錬の日だ。

と、後ろから何かが当たる。

後ろを見ると、自分よりも幼い幼児が二人。

「……タクミ王子、サクラ王女、どうなさいましたか？」

「姉たん、あそぼ。」「姉たま、あちよぼ。」

カムイはしやがみ、彼らの頭撫で、

「申し訳ありません。私は今から、リヨウマ王子と共に鍛錬の時間なのです。先程、ヒノカ王女が帰って来られました。今日は、姉君に遊んで貰ってはとうですか？」

「だったら、姉たんがいい。姉たんも、僕たちの姉たんですよ。」

タクミはサクラの手をキュツと握りしめて言う。

と、廊下を歩いて来た女人達がコソコソ言い始めた。

「なんと図々しい。」

「仕方ありませんわ、母親譲りなのですもの。」

「あれでは、イコナ様がお可哀想。」

「弟妹様を手懐けて、王位を奪う気かしら。」

カムイはタクミとサクラを抱き寄せ、コソコソ言っている女人達を睨みつける。

彼らは、脅えて早歩きしていく。

「ああ、コワイコワイ。」

「なんと恐ろしい。」

カムイは彼らをギュツと抱きしめ、

「私の側に居ると、タクミ王子やサクラ王女が悪く言われてしまいます。さ、ヒノカ王女の元に行きましょう。」

彼らの手を引き、ヒノカの元に連れて行く。

ヒノカがカムイを見ると、

「……カムイ。それにタクミとサクラも、どうしたんですか？」

「ヒノカ王女、タクミ王子とサクラ王女が遊んでほしいそうなのです。

私はこれから、リヨウマ王子と共に鍛錬の時間なので、申し訳ありませんがお願いできませんでしょうか。」

「……カムイは共に遊ばないのですか？カワイイお人形を買って来た

のですが……」

「お気持ちだけで十分です。」

カムイは二人の手を放して、来た道に戻っていった。稽古場に来ると、カムイが正座して頭を下げる。

「スメラギ王、お願いいたします。」

「……相変わらず、カムイは固いな。もう少し、柔らかくなくても良いのだぞ。私の娘なのだから。」

「申し訳ありません。」

「なに、責めている訳ではないのだ。」

スメラギは頭を掻く。

そこにリヨウマが駆けて来る。

「父上、遅くなり申し訳ありません。」

「来たか、リヨウマ。」

リヨウマは息を整え、頭を下げる。

そして、二人はスメラギの指導の元、剣の鍛錬をする。

カムイは湖に来ていた。

イコナ王妃が亡くなり、母のミコトが正式に後妻となった。

カムイは手を握りしめる。

イコナ王妃は優しい方だった。

素っ気ない自分にも、明るく声を掛けてくれた。

と、ポチャンという水の音が聞こえた。

何かが落ちたのか、そう思う。

顔を上げると、水が竜の形を取ってこちらを見ていた。

「……!!」

カムイは身構える。

透魔王国の事は口にはできない。

カムイは背を向けて逃げる選択を取る。

だが、足を掴まれ、水竜の体の水の中に引きずり込まれる。

息ができない。

意識を失いかけた時、

「姉たん!」「姉たま!」

タクミとサクラの声が聞こえた。

カムイはハツとして、竜の力を使う。

水が弾け飛び、思いつきり水を吐き出す。

「げほっ！」

カムイは水竜を見る。

再び形を取ろうとしていた。

カムイは二人の手を引っ張って場を離れる。

水の見えないところまで走る。

もう少しの所で、サクラがこけてしまう。

カムイは泣き出す彼女を抱え、辺りを見る。

気配は消えた。

カムイは解った気がした。

あの時、母が自分を叱った理由が。

あの時、自分に言っていた言葉が。

彼らは戦う術を持たない。

けれど、私を助けるためにその身をさらした。

それはまるで、あの時の自分。

自分は何も知らない子供だった。

もしもあの時、自分が意識を失っていれば、この子たちは死んでい

たかもしれない。

あの子達が、自分の後を付けている事を知っていた。

知っていて無視していた。

そう、命を預かると言うのは簡単ではない。

だからあの時、母は泣きながら自分を本気で叱ったのだ。

カムイはサクラを座らせる所まで運び、座らせる。

タクミも横に座らせて、

「ありがとうございます、タクミ王子、サクラ王女。おかげで、助かりました。けれど、あのような事はもうしないでください。あなた方に何かあれば、国の問題になります。」

「ごめんなさい、姉たん。」「ごめんなさい、姉たま。」

カムイは二人の頭を撫で、

「私は、お二人が優しい事を知っています。タクミ王子が、私の手を引いてくださったから、私は白夜での居場所を取る事ができました。サクラ王女が、タクミ王子と共に、私の味方になってくださるから、とても嬉しかったです。だから、お二人に何かあったら、私が哀しいんです。」

二人は、目に涙を溜める。

そこに、スメラギとリョウマが来た。

「タクミ！サクラ！二人だけでどこかに行くなど言っただははずだ！」

「何かあつてからでは、遅いんだ！」

タクミとサクラは泣き出した。

カムイは二人の前に正座し、頭を下げる。

「申し訳ありません。私のせいなのです。タクミ王子は、私を追ってここに。私の不手際で、サクラ王女にケガをさせました。全ては私のせいなのです。お叱りは、私だけにしてください。」

「ね、姉さんは悪くないの！お化けに捕まってたの！」

タクミが頭を下げるカムイにしがみ付いて言う。

リョウマが眉を寄せ、

「お化け？何だそれは。」

「……もう済んだことですので。お気になさらないでください。」

「ふう、もうよい。それより、カムイ。」

「はい……」

カムイは頭を下げたまま、スメラギの説教を待つ。

だが、カムイの頭に手拭いが当たる。

顔を上げると、スメラギが膝を着いて頭を拭きだした。

「まさか、湖に落ちたのか？ずぶ濡れではないか。」

「……申し訳ありません。」

「もうよい、風邪を引かぬうちに帰るぞ。」

「はい……」

カムイは彼に抱き起され、共に歩く。

ある日、とある伝令が王の間で響く。

「何だと?!間違いないのか!!」

「はい！暗夜王ガロンが、この白夜王国に向けて進軍を開始しました！」

それには、カムイも驚いた。

白夜と暗夜は友好関係にあったはず。

透魔王国で見た事のある暗夜王ガロン。

あの優しい笑顔を向けてくれた暗夜王ガロンが、攻めて来ようとしている。

これも、自分が招き入れてしまった災いか。

暗夜王国に行ったアクア姉様は大丈夫だろうか、と思う。

だが、今の自分は彼女との接点がない。

会ったのは、赤子の頃の自分のはずだ。

だが、彼女に会えるかもしれない。

そうなれば、透魔王国を救う手段が増える。

カムイは、スメラギとリヨウマと共に、戦場に向かう。

暗夜王ガロンは、人とはお前ないほど青い顔をしていた。

あれではまるで、死人だ。

そしてカムイの瞳は見た。

他の兵士達の眼には映らない透魔兵達を。

彼らもまるで、死人のような目をしていて。

透魔王国は暴竜ハイドラによって滅ぼされたはず。

そして、その道を母ミコト達が壊したはずだった。

だが、暴竜ハイドラを討たねばならない。

でないと、崩壊した余波が、こちらにまで来てしまうからだ。

スメラギは、話を持って暗夜王ガロンを止めるつもりであった。

「ガロン王、一体どうしたと言うのだ。なぜ、進軍など——」

スメラギが話している途中に、暗夜王ガロンは彼の心臓を斧で貫いた。

カムイ達は目を疑った。

スメラギは倒れ込み、大量の血が流れ出る。

リヨウマは剣を抜き、

「おのれ、ガロン王！許さぬ!!」

それが、開戦の始まりとなった。

カムイは、ここに居るかもしれないアクアを捜す。けれど、見当たらない。

そして、彼女を捜していて気付いた。

透魔兵が、白夜と暗夜の兵を殺している事を。

「何をしている！あの国は滅んだはずだ！」

——かの地は滅んだ。けれど、王は破壊を望む。

「な×バカナ、そんなこと……」

——王は望む、破壊を。歌い手は殺した。黒き王も死んだ。白き王も死んだ。巫女も死んだ。残るは竜の子。

カムイは敵から距離を置き、

「殺した……？歌い手を……アクア姉様たちを殺したのか!!それに巫女だと……まさか、ミコトお母様を……」

カムイの耳に伝令が届く。

「白夜王国が、崩壊しました！」

「何だと?！」

「生存者は……誰一人としておりません!跡形もなく、吹き飛んでしまいました!!」

「バカナ!!」

カムイは瞳を揺らす。

透魔兵は眩き続ける。

——王は破壊を望む。白夜王国も暗夜王国にも、破壊を……

カムイは透魔兵を斬る。

青い炎に包まれ、消えゆく兵。

いつだったか本人が言っていた。

自分は祈る心の声を聴くと。

我が加護は心にあると。

それは、死した者も含まれる。

今の彼は暴竜。

その狂った意志と祈りが、彼らを狂わせたのだ。

死人も、王も……

カムイは母アクアのペンダントを取り出す。赤子の自分だった時には持っていなかった。けれど、ある日起きたら自分の手の中にこれはあった。それを握りしめ、

「この戦争を終わらせるには、狂った王を討たねばならない。この災厄を起こしてしまったのが、私なら……」

カムイは走る。

笑いながら、兵を殺している暗夜王ガロンに剣を振り上がる。

彼の斧が剣を防ぐ。

冷たい笑みを浮かべる暗夜王ガロン。

それはもう、自分の知る彼の笑顔ではない。

カムイは竜の力を使う。

竜石を持たない今の自分では、暴走する可能性がある。

けれど、やらねばならない。

カムイは白銀の竜へと変わる。

尾で斧を弾き、爪を彼の心臓に突き立てる。

彼の血が顔につき、倒れ伏す。

カムイは人の姿に戻り、膝を着く。

手には、彼の血がついている。

思い出すのは、あの時の父と兄の姿。

そして、母の姿。

カムイは涙が込み上げてくる。

だが、ここは戦場だった。

「き、貴様！ 父上を!!」

顔を上げると、暗夜王子マークスが剣を振り上げるところだった。

そこに、もう一人彼に剣を振るうのがリヨウマだった。

「させんー!」

リヨウマの剣は彼の腹を貫き、暗夜王子マークスの剣はリヨウマの首筋を斬った。

二人は倒れ込む。

「申し訳ありません、父上……」

暗夜王子マークスは倒れ伏す父を見ていた。

カムイはリヨウマに駆け寄る。

「リヨウマ王子！」

「カムイ、すまぬ。兄として何も、お前に寄り添ってやる事ができなかった。」

「……違うんです、リヨウマ王子。私には、あなたの妹と名乗る資格はないのです。私は白夜の血を引いていない。私のせいで、この悲劇を引き起こしてしまった……謝るのは私の方なのです。」

「知っていたさ。俺は父上と母上から聞いていた。それでも、お前は俺たちの兄弟姉妹きょうだいであり、家族なのだ。父上も、ずっと気にしていた。お前が距離を開けている事を。俺たちには感情を見せてくれない、本心を見せてくれない。お前が頼れる兄になってやれなかった。」

リヨウマはカムイの頭を撫でる。

カムイは泣き出した。

「私は……私がしてしまった罪がある。私が消してしまった者たちを、忘れるわけにはいかない。私が犠牲にした者たちの事を忘れる訳にはいかない。私が幸せになる事はいけないんです。」

「……そうか、お前はずっと苦しんでいたのだな。自分を責め続け、許すこともできず……。カムイ、幸せになるのを恐れるな。俺はお前が何をしたのかは知らぬ。けれど、お前の悲しむ姿や心を閉ざす姿は見たくない。できることなら、お前の兄として共に居たかった……」

リヨウマの手が落ちる。

カムイは辺りを見る。

多くの兵が死んでいる。

カムイは涙を拭い立ち上がる。

「約束します、リヨウマ王子。次会う時は、逃げない。私は逃げずに、あなた方の想いに寄り添います。何よりも、自分の気持ちに気付かせてくれたあなた方の為に。」

カムイの足元に魔法陣が浮かび上がる。

瞳を閉じる。

カムイは瞳を開ける。

そこは見覚えのある白夜王城の廊下。

「カムイ、こんなところでどうしたんだ？」

カムイは振り返る。

そこには幼い頃に見たりヨウマがいた。

「……リヨウマ王子……」

彼はカムイは膝を着き、カムイと視線を合わせる。

「ふう、またそう呼ぶのか。前にも言ったが、俺はお前の兄だ。もうじき、お前の弟も生まれるのだ。そういつまでも、他人行儀はやめないか。周りに何を言われようと、お前は俺の妹なのだから。」

「……」

カムイは視線を落として黙り込む。

リヨウマはため息をつき、カムイの頭を撫でてから立ち上がる。

その横を通ろうとした時、リヨウマの服の裾が引っ張られる。

彼は立ち止まり、下を見る。

カムイが裾を引っ張っていた。

「カムイ？」

「……リヨウマ王子。これは、私のわがままです。私は白夜王家の血を引いていません。なので、あなたを兄と呼ぶのはおかしいことなのです。けれど、私はあなた達と過ごす時間はとても楽しかったのです。もし、そんな私があるあなた達の事を兄弟姉妹きょうだいと呼んでいいのなら……」

カムイは顔を上げる。

泣きそうな顔で、リヨウマを見る。

「あなたの事を兄と呼んでもいいですか。」

「……ああ、もちろんだ。カムイ。」

リヨウマはカムイを抱きしめる。

カムイは声を上げて泣き出した。

しばらくして、カムイはスメラギの元へ行った。

「して、何の用だ、カムイ。」

スメラギの横には、お腹を抱えた女性が居る。

カムイは二人の前に正座をして頭を下げる。

「……ずっと言いたかった事があります。血も繋がらぬよそ者である私を含め、他人である母を救っていただいたこと、本当に感謝しています。」

「カムイ……」

「その他人であるその私が、あんた方の事を父や母と呼んでいいのか……ずっと悩んでいました。いえ、怖かった。けれど、私はこの白夜で過ごす時間が楽しかったのです。もし、私があなた方の事を父や母と呼んでも良いのなら、どうかお許しください。」

カムイは抱きしめられた。

それはイコナ王妃だった。

彼女は泣きながらカムイを抱きしめる。

「カムイ、良かった。本当に良かった。私はあなたに嫌われているのではないか、あなたに肩身の狭い生活をさせているのではないかと……ずっと、ずっと心配しました。ミコト様も、あなたの事をずっと心配していたのですよ。カムイ、私はあなたを本当の娘のように思っています。たとえ、血の繋がりがあろうとなかろうと、大切なもう一人の我が子なのです。」

「イコナ王妃……」

「いいえ、カムイ。あなたが、私たちの事をもう一人の父と母と呼んで。」

「……イコナ母上様……スメラギ父上様……」

カムイは涙を流す。

スメラギはホツとしたように、襖を見る。

そこには、涙を流すミコトの姿。

カムイは、いや、カンナは想う。

自分は、自分のしたことを忘れてはいけない。

災厄の原因を起こしてしまった自分のしたことを。

自分が消してしまった者、犠牲にして来た者達を。

けれど、大切な彼らを悲しませることはしたくない。

「姉さん！」

「どうした、タクミ。」

タクミがカムイの元に駆けて来た。

カムイは彼を見て、

「イコナ母上様の側に居るのではなかったのか？」

「いるよ、もうじき僕は兄になるんだ。じゃなくて、姉さん。今度、シユヴァリエ公国に行くってホントなの？」

「ああ。父上様とリヨウマ兄さんと共に居って来る。」

タクミは頬を膨らませて、

「今度、遊んでくれるって約束したのに。」

「……そうだったな。なら、お土産を買ってこよう。」

「ホント？」

「ああ。約束だ。」

カムイは小指を立てる。

タクミは同じように小指を立て、指切りをする。

カムイはシユヴァリエ公国にやって来た。

辺りのお店を見て回り、

「ん？」

カムイは色々な飾りを売っている店に行く。

そして、赤い布に白い竜を綴られていたモノを見つけた。

「おじさん、これ下さいー！」

「はいよ。」

カムイはお金を渡して、嬉しそうに歩いて行く。

リヨウマがカムイを見て、

「嬉しそうだな、カムイ。」

「リヨウマ兄さん！見て下さい、コレ！」

リヨウマはカムイの持つ布を見る。

赤い髪止めのようだった。

「約束したんだ。タクミに、お土産を買って帰るって。コレ、タクミ合
うと思うんだ。それにね、コレには白い竜の刺繍もあるんですよ！タ
クミは、白夜の神祖竜の血が濃いみたいだったから、ピッタリだなっ

て!でね——」

カムイは無邪気な子供のように語る。

リヨウマは嬉しそうにそれを聞く。

自分の知るカムイは、その容姿に似合わず、どこか子供とは思えない時がある。

けれど、この子は誰よりも子供だったのだと思った。

ずっと自分に蓋をして、頑張つて大人ぶるようにしていたかのよう

に。

「そうか、タクミも喜ぶだろう。」

「うん、早く父上様の仕事が終わるといいな……!!」

カムイはリヨウマの後ろに、彼らには視えない透魔兵が数名いるの

を。

そして、その奥には居るはずのない暗夜軍。

その暗夜王ガロンは、あの時と同じ死人のような瞳だった。

「リヨウマ兄さん、逃げて!暗夜軍が!!」

「何だ?!」

「兄さんは、父上様にこの事を!!」

「だが、カムイ!」

「兄さん!!」

カムイはリヨウマを押し。

暗夜軍が矢を放ってきたのだ。

カムイは肩に突き刺さった矢を抜く。

「ここは私が防ぐ!だから、兄さんは父上様に!」

「カムイ!」

リヨウマを突き放し、カムイは暗夜王ガロンを見る。

「竜石がないのが、心細いが仕方ない。」

カムイは、母アクアのペンダントを取り出し、握りしめる。

「お母さん、お兄ちゃん……お父さん。カンナを護ってね……」

カムイはペンダントを首にかけ、服の下に入れる。

そしてその身を竜へと変える。

リヨウマは驚いた。

そして、彼女の覚悟を受けて父スメラギを呼びに行く。

カムイは暗夜王ガロンだけを目がけて、走り出す。

彼の首を締める。

他の兵達がカムイに剣を振るう。

それを尾で払い、力を込み続ける。

だが、暗夜王ガロンは冷たい笑みを浮かべ、

「我らが神は破滅を望む。歌い手は死に、黒き王はすでに堕ちる。」

カムイは彼の瞳を見る。

彼の瞳は冷たい。

「仕方ないのだ、破滅は必然。そうだろ、カムイ。」

「……!!」

カムイは彼から手を放し、後ろに退がる。

彼の瞳の中に、透魔王ハイドラを見た。

暗夜王ガロンは斧を振るう。

カムイはそれを避けるが、透魔兵が魔術を放つ。

それが命中し、体勢が崩れる。

そこに、暗夜兵達の剣が掠る。

さらに、暗夜王ガロンの斧が思いつきカムイを壁に叩き付ける。

カムイは人型になり、倒れ込む。

気がついた時、自分は暗夜王ガロンの前に縛られていた。

見上げる空は暗闇が見える。

そして周りが観客席。

「……ここは暗夜王国か……」

「ふふふ、ふははは！ああ、ここは暗夜王国だ。私は、お前を殺す。そして、白夜王国へと戻してやろう。この意味、お前にはわかるだろう。」

「……アクア姉様たちを殺したただけでなく、ミコトお母様たちまで殺すつもりか！ふざけるな!!」

「ふははは！存分に嘆くが良い。」

暗夜王ガロンは斧を振り上げる。

カムイは暴走覚悟で、再び竜となる。

縄が破れ、カムイは威嚇する。

カムイは相討ち覚悟で暗夜王ガロンを攻撃する。

そしてあの時と同じになった。

彼の心臓を貫く。

「ぐっ！」

カムイは人型になって、息を整える。

と、暗夜王ガロンはカムイを見て、

「礼を言うぞ、幼き竜の子よ……」

「暗夜王ガロン！あなたはまだ、意識があつたのですか！！」

だが、カムイが彼を揺すった時、彼はすでに死んでいた。

カムイは涙を堪える。

そこに爆発音が聞こえてくる。

「カムイ！どこだ！」

スメラギの声が響く。

カムイは父の声が響く方へと向かう。

「父上様！」

「カムイ！」

スメラギはカムイを抱きしめる。

カムイはスメラギを見て、

「暗夜王ガロンは死にました。だから——」

カムイは目を見張る。

スメラギは腹を貫かれ倒れ込む。

彼の腹からは血が流れ出る。

カムイの顔には、自分の頬を触れる。

そこには、父の血がついていた。

「……父上様……」

カムイは瞳を揺らして彼を見た。

そして、父を殺した黒い鎧を着た騎士を見る。

彼は冷たい笑みを浮かべていた。

「歌い手は死に、黒き騎士は死んだ。白き王も死んだ。」

「カムイ！」

その場に、神器『風神弓』を携えてやって来た。

黒き鎧を着た騎士を見た母は、眉寄せた。

そして、彼の眼を見て弓を構えた。

だが、彼の方が早い。

母は斬られた。

「巫女も死んだ。我が王は望む。世界の破滅を……」

この時、自分は思っていた。

彼もまた、暴竜ハイドラに操られていると思ったのだ。

「君は、どうしますか。」

「……アベル。」

カムイは眉を寄せて涙を流す。

立ち上がり、

「絶対に、破滅を止める！」

魔法陣が大きく包み込む。

カムイはハツとする。

そこは暗夜王ガロンの前。

縛られている自分。

「……………」

カムイは暗夜王ガロンを睨みつける。

今ここで、彼を殺しても意味がない。

「安心しろ、お前は殺さぬ。生きて、白夜王国へ戻してやろう。」

「なんだと？」

「今更、お前を殺して戻しても、白夜王スメラギはおらぬ。」

「どういう意味だ。」

「そのままの意味だ。ヤツは息子を庇って死んだ。」

カムイは目を見開く。

瞳を揺らし、涙を堪える。

カムイは彼に頭を押しさえつけられる。

「だが、すぐには返さん。」

カムイは意識を落とした。

気がつくくと、自分は牢に居た。

片手を鎖に繋がれていた。

そこに老騎士が入って来た。

「……申し訳ありませんな。これも命令ですので。」

彼の手には鞭があった。

すぐに察しがついた。

カムイは彼を見て、

「構わない。それが、お前の役目ならな。」

「……………」

彼はカムイの前までくると、座り込む。

「なぜ、やらない?」

「…………どうやら、あなたは聡いようだ。なら、素直になつてはどうですか。」

「どうしろと?」

「じきに、暗夜王国一の術師がやってきます。あなたに、術を掛けるようです。」

「それに、素直にかかれと言うのか。」

「ええ。」

「…………わかった。ただし、その術師の術が私に効いたらな。」

カムイは彼を睨みつけた。

老騎士はため息を一つ付き、

「ふう、いいですか。仮に、あなたが術にかからなくとも、あなたはかかったフリをなさるべきです。国に帰りたいのであれば。」

「…………なら、約束してくれ。私が術にかからなかったら、お前が私の側にいると。」

「はい。わかりました。」

彼は立ち上がり、部屋を出ようとした時、

「ありがとう、優しい人。」

「私の名はギユンター。また、お会いできることを楽しみにしております。」

彼は扉を閉めて出て行った。

第十八話 白夜王国

白き王は望む。

子や国に幸せが来ることを。

自分は王だ。

民や国の平和を強く思う。

けれど、父親でもある。

この成長を望まない親はいない。

けれど、想いとは、願いとは人を歪ませる。

強ければ、強いほどに……

幼き頃、扉をくぐった先に国があった。

今はもう、口にしてもいけない幻の国。

国内で何かがあったと言うことだけが伝わった。

まさかのちに、竜によって滅ぼされるとは思ってもいなかった。

暗夜王国とも、友好関係にあった。

けれど、いつしかその交流も途絶えた。

若い頃、自分は王城を抜けて城下町にいた。

ある女性に目を奪われた。

聞けば、故郷を抜け出して遊びに来たと。

その日、一日は心が躍った。

最後の別れ際、彼女の名を聞いた。

『ミコト』と。

自分も名乗る。

王族である事を。

彼女は少し驚いた後、首を傾げて微笑む。

良き友人ができて幸せだと。

そして言ったのだ。

ある国の巫女である事を。

忘れていた国の民である事を。

自分は王位を継ぎ、王となった。

妻をめとり、忙しくも幸せだった。

愛していた。

妻も、国も、民も。

そして生まれてきた子らも。

一人目の子が生まれ、二人目の子も生まれた。

三人目の子を身ごもった時、懐かしい友人が訪ねてきた。

ボロボロになって、生まれて間もない子を抱いていた。

自分を頼り、自分ではなく子を助けて欲しいと。

そして自分は気付いたのだ。

この友人に恋心を抱いていたことを。

けれど、妻も愛していた。

愛とは何か。

自分には理解しがたい。

だが、自分にできる事はある。

王の妾として、二人を受け入れた。

詳しくは言えない彼女だったが、言える範囲内の事を語ってくれた。

妻は受け入れてくれた。

自分は息子には彼らの事を話した。

息子は立派な子だ。

きっと良き王になるだろうと思う。

成長した彼女の子は、見るからに竜の血が濃かった。

幼い子供の瞳が語る。

自分がどういう立ち位置なのか。

だからだろうか、幼き子供は距離を取る。

父と子ではなく、王と子供として。

自分は、この幼き子供を我が子のように思っていた。

本当の父親になれずとも、彼女の父としてありたかった。

ある日、あの子は語る。

他人なのだ。

けれど、我らと共に居るのは楽しかったと。

許し貰えるのなら、父と我妻を母と呼びたいと。

自分は思う。

この子はもしかしたら、我々の知らない何かを知っているのではないかと。

自分はできるだろうか。

この子を背負える父親に。

いや、なってみせよう。

我が愛する子の為に……

——カムイは外を見ていた。

窓の外は黒い空。

そして高い壁。

まるで鳥籠だ。

だが、城の中だけなら自由がある。

そう思えば、まだいい方なのだろう。

今の自分は、暗夜王国の王女としてここに居る。

喋ることはほとんどない。

まずは国に帰り、二人の母を守るために。

カムイの所に、暗夜王国の王子マークス、レオン、王女のカミラ、エリーゼがよく来る。

特に、ここに足を運ぶのはマークス王子だった。

彼はいつも、土産を持ってこの城に来る。

だが、彼の瞳を見れば解る。

自分も知るものだ。

罪悪感。

それが、彼の瞳からは見て解る。

それでも、自分は彼らを受け入れるわけにはいかなかった。

自分はただ、国に帰りたいただけなのだ。

カムイはしばらくして、城から出された。

暗夜王ガロンの前に、カムイは居た。

王の玉座に座った暗夜王ガロン。

ここは王の謁見の間。

「よく来たな、カムイ。」

「……はい、お父様。御目通りが叶い、嬉しく思います。」

カムイは己の感情を押し殺して、頭を下げる。

ガロン王は続ける。

「いや……これも、お前の日々の精進ゆえだ。聞けば、マークスに引けをとらぬ強さになったと聞く。ようやく、暗夜の王族にふさわしくなったのだ。故に、お前を此度の白夜進軍へと加える。」

「……そうですか。わかりました。暗夜の王族として、お父様のお役に立てるよう心がけましょう。暗夜の神祖竜の名の元、暗夜の加護の為に。」

「うむ。よくぞ、言った。では、カムイ。お前を先陣として向かわせる。これは、そんなお前に贈り物だ。」

カムイは控えていた兵から、剣を受け取る。

自分は察した。

これは危険だと。

「従士は好きなのを連れて行け。」

「ありがとうございます、お父様。」

カムイは顔を上げ、謁見の間を後にする。

信頼できる従士ギンターとジョーカー、フェリシア、フロラ、そしてリリスを一番側に連れて出陣した。

白夜との国境である無限渓谷で、暗夜軍の奇襲を受けた。

『やはり、見抜いていたかー！』

カムイ達は戦闘を行った。

仲間とはぐれ、側に居るのはリリスのみ。

そして、足を踏み外して崖から落ちた自分を、リリスが助けってくれた。

己を竜の姿に変えて。

喋れなくなると解っていて……

だが、助けられた自分は途中で意識を失ってしまった。

目を覚ますと、木造の天井が映る。

視線を横に向けると、自分を護って、本来の姿とも言える小竜と

なったりリリスが泣きながら自分を見ていた。

彼女には悪い事をした。

透魔王国^あならともかく、加護を主が居ない土地で人ならざる力を使い過ぎれば何かしらのリスクを負う。

彼女の場合は、人の姿、人の言葉をもう紡ぐことはできない。

そしてもう一人、

「カムイ！良かった、目が覚めて。俺が、誰だかわかるか？」

「……リヨウマ兄さん。」

「本当に良かった。」

カムイは起き上がる。

兄リヨウマは涙を流して、カムイを抱きしめた。

そして離し、

「すまなかつた。お前を助けてやれなくて。」

「構いません。自分で進んでやったことです。それよりも、スメラギ様が亡くなったとお聞きしました。本当ですか？」

「……ああ。」

「そうですね。申し訳ありません、リヨウマ兄さん。」

「お前が謝る事ではない！父上は、俺を庇って死んだのだ。責がある」とすれば、俺だ。」

「……いいえ、私のせいです。兄さん、ミコトお母様は？」

「お前の寝顔を見て安心したのか、今は眠っている。一週間以上も寝ていたのだ。それをずっと看病していたのは、母上だったからな。」

「そうですね……」

カムイは立ち上がり、

「様子を見てきます。」

カムイは歩いて行く。

小童のリリスが、その後を追う。

リヨウマは拳を握りしめる。

彼は思い出していた。

幼い頃の距離を取っていた頃のカムイを。

兄と呼んでくれるが、言葉遣いやその距離感は昔に戻ったようだ

と。

カムイは眠っている母の姿にホツとした。

そして離れる。

側について来ていたりリスを抱え、外に出る。

それは、懐かしい声と歌が聞こえてきたからだ。

カムイは立ち止まり、見入っていた。

懐かしい姉として側に居たアクアの姿。

けれど、今の自分は彼女との接点はない。

でも聞いていた。

彼女が白夜王国に誘拐されていると。

自分の事は知らなくとも、母のミコトなら彼女を知っている。

まず、殺される事はないと解っていた。

それでも、悲しみをこらえる為に、カムイは唇を噛みしめていた。

「だれ？」

「すみません。とてもきれいな歌声でしたので、聞き入ってしまいました。」

「……もしかして、あなたがカムイ王女？」

「はい。……あなたは？」

「私はアクア。」

「アクア……では、あなたが暗夜王国から誘拐された王女ですね。前に、噂を聞きました。」

「ええ。私は、あなたの対になって誘拐された。けど、向こうよりは幸せよ。ミコト様が、私を白夜王国の一員として迎え入れてくれたの。

あなたの居場所を取ってしまつて、ごめんなさい。」

「いえ、気にしてません。私の選んだ道なので。」

「そう……」

カムイはアクアと仲良くなるのに、時間はいらなかった。

他の白夜王子王女は成長していた。

ヒノカ王女は、前の時とは違いお淑やかだった彼女は、失った家族を救う為に真逆の活発で武器を振るう女性に。

タクミ王子は、母ミコトから風神弓を譲り受けていた。

サクラ王女も、成長していて暗夜王女エリーゼと同じくらいになっていた。

自分は別に、暗夜の王子と王女が嫌いだったわけではない。彼らは、本当に自分を心配してくれた。

暗夜の王女エリーゼに関しては、本当の姉のように慕ってくれた。だからこそ、彼らとの戦闘は避けたいと思っていた。

そして、別れていたジョーカーとフェリシアと合流で来た。

次の日、国はカムイの帰国を祝って祭りが開かれた。

だが、突如カムイの持っていた剣がフードを被った薄透明の敵の手によって、暴れ出す。

剣が爆発し、自分を庇って母ミコトの命が奪われた。

街を破壊した。

白夜の民を多く犠牲にした。

そのすぐ、暗夜王国は攻め入って来た、という伝令が流れる。

カムイは、この犠牲を受け入れる。

と、白夜の石碑から一振りの剣が姿を現した。

それは『夜刀神』。

父の使っていた神器。

自分が生まれた時には、すでに十二の竜たちの覇権争いは終わっていた。

それも、随分昔の事として。

だから不思議だった。

あの神刀が、どこにあるのか。

だが、その刀は今自分の元になる。

父カムイは言った。

『夜刀神』は、使い手を選ぶ。

その使い手の想いに応えようと。

カムイは暗夜軍を見つめた。

そこには、自分が囚われていた時に優しくしてくれていた暗夜の王子と王女が居た。

「カムイ！良かった、無事で。さあ、戻ってこい。」

「何をぬかすか！カムイは、俺たちの兄弟姉妹だ！」

二人は武器を構えて睨み合う。

カムイは暗夜王子マークスを見て、首を振る。

「兵を退いてください。私は戻りません。私はただ、帰りたかっただけなんです。大切なモノがある、この国に。」

「……カムイ。そうか……なら、次に会う時は敵だ。」

彼は兵を退き、馬を駆けて行った。

カムイ達は暗夜王ガロンを討つために、暗夜王国に攻め入る準備をする。

けれど、その途中で兄リョウマと弟タクミが行方不明となってしまった。

彼らが消える前、『イズモ公国』に行ったという情報を得た。

その為には、『黄泉の階段』を使わねばならない。

だが、黄泉の階段で暗夜軍師マクベスによる罠にかけられた。

風の部族を『ノスフェラトウ』に変えて、自分達に風の部族殺しをさせてきた。

目的は風の部族との衝突。

違和感に気付いていたのに、敵の策略にはまってしまった自分が悔しかった。

風の部族に行き、部族長フウガに会わねばならない状況となった。

彼と和解し、父カムイの使っていた『夜刀神』の事について聞いた。

『夜刀神』の伝説を。

『炎の紋章』を『繋ぐ』鍵だと。

彼の友であった白夜王スメラギから。

自分も、この『夜刀神』については詳しくは聞いていなかった。

だからこそ、知る必要はある。

自分は透魔王国に少しいただろうアキラに聞くが、彼女は詳しく知らないと言う。

当然だと思った。

母だったアキラなら、知っていたかもしれない。

けれど、ここにいるアキラは違うのだから……

カムイは、姉ヒノカと妹サクラと共に、イズモ公国へと急ぐ。イズモ公国と言えば、神々の居る国だと昔聞いたことがある。確か、兄シグレが言っていた。

神の信託を聞くことのできる一族が居ると。

カムイはそのイズモ公国へと足を踏み入れた。

漂う感覚は、どこか透魔王国を思い出す。

だが、思い出に慕っている訳にはいかない。

イザナ公王と謁見が叶ったが、直感であれば魔術を感じた。

あの『ノスフェラトゥ』の一件で、見る者は全てを疑っていた。

だからこそ、気付けた。

が、敵の狙いが解らない以上は、従ってみる必要がある。

案の定、暗夜軍の魔術師だった。

だが、サクラを一人で守るのはきつい。

けれど、敵の中に潜りこんでいたヒノカ達に助けられた。

その時に、暗夜王子レオンに会った。

彼は自分を恨んでいた。

当然だと思った。

それから目を反らす気はない。

けれど、あの時に気付いていれば良かったのだ。

彼にもまた、透魔王ハイドラの闇が降りかかっていた事を。

自分の知る彼は、『どちらも優しかった』のだから。

本物のイザナ公王を助け出し、リヨウマ達の情報を得る。

話によれば、無限渓谷で戦闘があった。

そして落ちたのではないかと。

あの時は気づかなかつたが、確かあの場所は昔、こちらと透魔王国を結ぶ門があったはずだ。

運が良ければ、透魔王国に落ちているかもしれない。

けれど、運よく助かってても、透魔軍に捕まっている可能性がある。

その表情を汲み取ったイザナ公王が、占いをしてくれると言う。

神託とも呼べる彼の力。

軽い感じの彼からは、到底思えない真剣な彼が占った。

——『光へ手を伸ばす、穢れなき銀の剣。微睡み、想いを断ち切りて……』

その言葉の意味を、カムイは夜まで考えていた。そこにアクアがやって来た。

彼女も、その事を考えていたみたいだった。

「アクアさん……」

「カムイ、イザナ公王の占いだけれど……私のお母様から教わった歌に、占いと同じ歌詞があるの。」

カムイはハツとする。

確かに、母アクアと兄シグレが歌っていた。

なぜ忘れていたのか……

だが、アクアにも歌詞の意味は分からないと言う。

この歌は神竜ハイドラが、創り出した。

透魔王国に行けば、なにか解ったかもしれないが、それはできない。

「……カムイ。もしかしたら、これは運命なのかもしれない。この意味を解き明かし、世界を救う事ができれば……だって、この歌はまるでカムイを映しているようなもの。」

「そうですね、アクアさん。私も意味は解りませんが、頑張ってみます。」

カムイがアクアを見ると、アクアは泣いていた。

「アクアさん、大丈夫ですか？涙を流して……」

「気にしないで。さあ、行きましょう。」

「はい。」

何故、気付かなかったのだろう。

この時はただ、アクアは自分の母シユンメイを思い出しているのだと思っただけだ。

けれど、違った。

彼女は知っていたのだ。

透魔王国を真実を、本当の『カムイ』を。

カムイ達は進む。

リヨウマとタクミを捜すために、無限溪谷に向かっていた。

そして、フウマ公国に足を踏み入れた。

フウマ公国の公王は暗夜王国についた。

多くのフウマ公国の忍び達を相手にしていると、タクミが現れた。けれど、様子がおかしい。

カムイは気付く。

あの感覚は、操られた者の眼だ。

どうやって彼を元に戻すか考えていると、

「カムイ、彼の事は私に任せて。私の歌には、少し不思議な力があるの。彼を元に戻せるかもしれないわ。いえ、今ならまだ間に合うはずだわ。」

「分かりました。お願いします、アクアさん。」

カムイはタクミを彼女に任せる。

懐かしいあの歌を背に、カムイは戦う。

そして、正氣に戻ったタクミが味方に入ってくれたおかげで、戦いは優位に進んだ。

フウマ公国の公王を討ち、タクミから話を聞く。

タクミの話によれば、最初はイズモ公国の国境で戦いをしていた。だが、戦火が無限溪谷まで広がった。

その途中で、リヨウマと逸れてしまったようだ。

その後、崖崩れが起きたそうだ。

その崖崩れに巻き込まれ、彼は谷底に落ちたらしい。そしてあの状態になった。

とすれば、やはり透魔王国に落ち、透魔王ハイドラに操られたのだ。その後、フウマ公国の牢に捕らえられていたリヨウマの臣下カゲロウから兄の行方を聞いた。

暗夜王国で内乱が起きているらしく、その反乱軍がいるシユヴァリエ公国に向かったと。

一向は急いで、彼の元に行く。

船に乗り込み、カムイは考え込む。

敵に、こちらの動きが読まれていること。

考えられるのは、密偵が居るということだが、それらしい動きをす

る者はいない。

透魔王ハイドラに操られている暗夜王ガロン。

この全てが、透魔王ハイドラに寄る行動なら、心に隠れているのだ。なら、タクミが怪しいが、彼は先程アクアにそれを直してもらったはずだ。

考えても仕方ないのなら、あえて進むしかないのだ。

立ち止まる訳にはいかない。

透魔王ハイドラを暴竜と化したもう一人の父を討つまでは。

カムイはその考えを整理する為、甲板で海を眺めていた。

そこにサクラがやって来て話していた。

だが、空が異様におかしくなる。

嵐にしてはおかしい。

波も高くなり、ゾツと何かを感じる。

水の中から、フードを被った薄透明の戦士が現れる。

「お前は、あの時の!!」

カムイは剣を構える。

サクラを庇いながら交戦していると、アクア達がやって来る。

カムイの戦闘相手を見て、身構える。

その者としばらく戦闘を行うと、その者は炎に包まれて消えた。

カムイは眉を寄せる。

サクラはアクア達に先程の事を説明していた。

シュヴァリエ公国に辿り着く。

そこは賑やかな場所だった。

と、獣人族のニシキに会う。

彼の話によれば、恩返しの手相手である歌手が困っていると言う。

母の元に行きたいが、暗夜王ガロンの前で歌を歌わねばならない。

「暗夜王が……」

カムイは考え込む。

ここで暗夜王ガロンを討つことが出来れば、暗夜の王子と王女達と戦わなくてもいい。

だが、どうするか。

「私がやるわ。」

「アクアさん？」

「これは敵の懐に近付ける。」

「ですが、怪しまれますよ。」

「大丈夫よ、魔術を使えばね。」

アクアの提案により、イズモ公国で仲間となった魔術師の力を使う。

彼女の姿は変わり、その歌い手と同じ姿で舞台上立つ。

カムイは暗夜王ガロンを見る。

その横に、暗夜王女エリーゼが居た。

彼女の表情は暗い。

あの明るい笑顔を持った彼女は、既に違った。

カムイは視線を落とす。

戦争さえ終われば、彼らを巻き込むことはなくなる。

そう信じて……

だが、アクアが歌い出したのは、彼女の歌ではない。

あの歌だった。

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

アクアの周りに水が漂う。

カムイは彼女を見た。

『アクア姉様!』

だが、思うのである。

これは好機だ。

暗夜王ガロンは苦しみ出す。

カムイは剣を抜き、暗夜王ガロンの前に飛び出す。

彼に剣先を向ける。

「お前の顔を見るのも久しぶりだな——カムイ。」

「……この戦争を終わらせる為に……死んでもらおうぞ、暗夜王ガロン！」

カムイは剣を振るう。

暗夜王ガロンは斧を手に取り、受け止める。

「やめて、カムイお姉ちゃん！」

カムイは叫ぶ暗夜王女エリーゼを横目で見た後、剣を強める。横からカムイに剣を振るう暗夜兵。

カムイはそれを避け、体勢を整える。

暗夜王ガロンは前に立った兵を斬る。

「邪魔だ！」

「キャー！お父様、どうして☒」

暗夜王女エリーゼの悲鳴が上がる。

そして目を疑う。

暗夜王ガロンは、自分の兵を切り捨てたのだ。

カムイは歯を食いしばる。

あの優しきガロン王は、もういないと。

カムイは暗夜王ガロンと剣を交える。

そこに、暗夜王子マークスが現れる。

「カムイ！この、裏切り者め！！父上に剣を向けるとは！」

カムイは眉を寄せて、視線を落とす。

剣をしまい、竜石を掴む。

その身を竜と変え、暗夜王を襲う。

ぶつかり合いは強く、建物にも被害が出る。

天井の岩が、暗夜王女エリーゼに降りかかる。

カムイは彼女を庇う。

岩は割れたが、カムイは人の姿に戻る。

「お、お姉ちゃん！！」

「……………」

カムイは彼女から離れ、血の流れる腕を抑える。

その間に、暗夜王ガロンは姿を消していた。

カムイはアクア達と合流しようと歩き出す。

「待って！お姉ちゃん！」

暗夜王女エリーゼがカムイの傷口に治癒をかける。

カムイは彼女の頭を撫で、

「ありがとう。ごめん。」

走って行く。

彼らは撤退を覚悟する。

だが、暗夜王子マークスが立ちはだかる。

「逃がしはせぬ！……ここで、お前の命を貰う！」

彼は剣を抜く。

カムイも、彼に剣を向ける。

そこに、暗夜王女エリーゼが駆けて来る。

「もうやめて！……お兄ちゃん！」

「退がるんだ、エリーゼ。」

「いや！やるなら、私を斬ってからやって！」

暗夜王女エリーゼは暗夜王子マークスをじっと見つめていた。

アクアがカムイの手を引き、

「逃げるわよ、カムイ。これ以上は彼女にも、シュヴァリエ公国にも、
公国の民たちにも被害が出るわ。」

「はい……」

カムイは剣をしまつて、走る。

撤退に成功し、彼らは休息を取る。

カムイは木の陰に居るアクアを見つける。

「アクアさん？」

「うっ！うう……」

アクアが倒れ込む。

カムイは駆けて行き、

「アクアさん！！アクアさん！」

「はあ……はあ、カムイ？」

「どうしたんですか☒」

「大丈夫よ……何でもないから、放っておいて……」

アクアは力弱い声で言う。

カムイは眉を寄せ、

「そんな訳にはいきません。」

「本当に、もう大丈夫よ。」

彼女は立ち上がる。

そしてカムイを力強い目で見て、
「行きましょう、休憩の終わる時間よ。策が失敗した以上、一刻も早くリヨウマと合流しないと。」

彼女は歩いて行った。

カムイは視線を落とし、

「アクアさん……アクア姉様……」

カムイは視線を上げ、後に行く。

本格的に、シユヴァリエ公国に入ると、暗夜王女カミラが待っていた。

彼女は武器も持たずに歩いて来て、カムイを抱きしめた。

「……」

「ああ、カムイ。会いたかったわ。」

横に居たヒノカが風刀を構え、

「妹から離れろ！」

「ヒノカ姉さん、待つて下さい。」

カムイが止める。

暗夜王女カミラは横目でヒノカを見て、

「……あれが、あなたのお姉さんなのね。」

「はい……」

「そう。良かったわね、カムイ。私ね、願っていたの。あなたの自由を。あの城で一度も、私たちの名を呼んでくれないあなた……本当は記憶を持ったまま、あの城に居たのね……可哀想に。私たちが恨んでいるでしょ？」

「……いいえ。私が恨んでいるのは、暗夜王ガロンだけです。あなた達に恨みを持ったことはありません。むしろ感謝しました。あの城で、私が普通でいられたのは、あなた達のおかげです。」

「そう、良かったわ。あなたの瞳に、私たちが映っていて……」

暗夜王女カミラはカムイを離す。

彼女は瞳を揺らし、

「けれど、本当はあなたとは兄弟姉妹きょうだいでいたかったわ。たとえば、偽りの姉妹きょうだいだったとしても……」

彼女は至近距離で魔術を放つ。

「くっ！」

カムイは腕でそれを守り、彼女を見る。

「ごめんなさい、カムイ。けれど、これは仕方のない事なの……お父様からのご命令だから。だから、あなたは私の手で殺してあげるわ。」

「姉様！」「カムイ姉さん！」「カムイ！」

サクラが駆けて行き、治癒をかける。

タクミとアクアが前に立ち、武器を構える。

ヒノカも、武器を構えながら、

「貴様、なにをする！」

「ああ……妬ましいわ、あなた達が……カムイを姉と呼べる、カムイを妹と呼べるあなた達が！だってそうでしょ、もう私たちは叶わない願いなものだから……ずっと、ずっと、側に居たのに……あなた達よりも、カムイの事を知っているのに！！だから殺してあげるわね。みんな、みんな、私の手で……」

暗夜王女カミラが指笛を鳴らすと、飛竜が飛んできた。

彼女はそれに乗り、斧を構える。

すると、控えていた暗夜軍が押し寄せてくる。

カムイは瞳を揺らして剣を構える。

彼女の斧を裁きながら、暗夜兵を倒していく。

カムイは意を決して、彼女の斧を弾く。

そして飛竜から叩き落とす。

剣先を彼女に向ける。

「私を殺すの、カムイ？」

カムイは首を振って剣をしまう。

襲ってきた暗夜軍はすでにほとんどが倒され、後退している。

「……倒した敵を殺さないなんて、本当に優しいのね。」

「本当に優しいのなら、こんな事はしない。……私は優しくはない。」

「……それが本当のあなた？」

「ああ。けど、あの言葉は本当だ。本当に感謝している。」

「そう……ねえ、カムイ。教えてくれるかしら、あなたは何がしたいの

？どうして、そこまですべて白夜王国の為に闘えるの？」

「……白夜王国には恩義がある。私と母を救ってくれた。あの人も、受け入れてくれた。白夜王スメラギは、全てを受け入れてくれた。その王を殺した暗夜王ガロンは許せない。けど、暗夜王国を恨んだことも、ガロン王自信を恨んだことはない。」

「え？」

「私は、あの優しかった王を変えてしまった闇が憎い。大切なモノを壊していく闇が……」

「カムイ……」

暗夜王女カミラは涙を流す。

それは、カムイの言っている事を信じてくれているからだ。

カムイは殺気を感じて後ろに退がる。

そこに、魔術が放たれる。

放ってきた相手は、暗夜王子レオン。

彼は殺意を自分に向ける。

カムイは、彼の瞳に宿る闇を見た。

それに気付けなかった自分が悔しかった。

カムイは拳を握りしめる。

彼の放つ魔術を、避けようとしないうカムイ。

だが、自分を抱えて退る鎧を着た兵がいた。

彼は持っていた斧を投げ、さらに彼らと距離を取る。

「……リヨウマ兄さん？」

「ああ、遅くなつてすまなかつたな。今だ！」

リヨウマはカムイを降ろし、甲冑を脱ぎ捨てる。

すると、飛竜に乗った暗夜兵達がやって来る。

「任せな！こんな奴ら、私にかかれればちよろいもんよ！」

反乱軍が加わった。

戦況が変わり、暗夜軍は完全に撤退した。

反乱軍が仲間なり、リヨウマとも合流できた。

カムイは反乱軍のリーダー、クリムゾンとほんの少しだが仲良くなった。

その夜、暗夜軍の奇襲を受ける。

カムイ達は地下通路を使って、暗夜王国へ進軍する。

国境門を打ち破り、暗夜国内へと足を踏み入れる。

一時的な休息を取るために、森へと向かう。

無事、森までくると各々休息を取る。

カムイは森の中を少し歩く。

空には、綺麗な星空が輝いている。

『ここまで来た……あの時とは違うやり方で、この暗夜に再びやって来た。なんとしてでも、白夜と暗夜の戦争を終わらせる。』

と、奥の方に湖があった。

その湖には、アクアが居た。

『アクア姉様?』

カムイは近付いて行く。

アクアは湖に座り、あの懐かしい歌を歌う。

彼女はカムイに気付く、

「カムイ。あとを付けて来たのね。」

「すいません、その歌がとてもきれいで……」

「ふう、カムイ。今日はもう、休みなさい。ここはもう敵の懐なのよ。」

「……それはわかっています。でも……この前、アクアさんは体調が悪そうでしたので、心配で。」

カムイは自分に叱る彼女の表情に、母だった頃のアクアを見る。

やっと、また会えたアクア。

今度はこそは、彼女の言いつけくらいは守りたい。

けれど、反抗的な態度を取ってしまうのは、今のアクアが母に思えてしまうからなのか。

「くっ……あ……」

突然、アクアが苦しみ出す。

カムイは同じように湖の中に入り、

「アクアさん!」

「うっ、ぐっ……うう……!!」

彼女は自分の身を包むように抱きかかえる。

そしてカムイは見る。

アクアの体を黒く紫色の何かが締め付ける。

『透魔の呪い!!』

そして、この時に初めて気付いた。

彼女の歌う歌は透魔王国の守護竜の創り出した歌。

透魔王ハイドラの呪いの対象となっていたのだ。

それは、自分が竜となつて体が重くなるのと同じように、アクアにも呪いが降りかかっていたのだ。

彼女の体からそれは消え、息を整える。

「ごめんなさい、変な所を見せて……これはね、呪いなの。私には、特殊な血が流れてるの。普通の歌は問題ないのだけど、このペンダントを媒介にして歌うあの歌は別なの。この呪いからは逃がられない。どこに隠れていても……けど、もう心配はいらないわ。」

「本当に、大丈夫なんですか?」

「ええ、もう大丈夫よ。だから、そんな泣きそうな顔をしないで。あなたの望む平和の為に、私も頑張るから……」

アクアはカムイの頬に触り、優しく微笑んだ。

「その平和がきた時に、アクアさんが居ないとダメですからね……」
「ええ、あなたは本当に優しい子ね。」

涙を流すカムイを抱きしめながら、アクアは呟く。

翌日、カムイたちは暗夜城に向かって突き進む。

獣人族ガル―が治める峰で、不本意な戦いを行い、彼らの犠牲の元そこを越える。

マカラスと言う街を訪れる。

そこでタクミが『風土病』にかかってしまった。

それも、命にかかわると言う。

一向は、タクミの治療にあたる為、薬草が置いてあるかもしれないマカラス宮殿に向かう。

暗夜兵が居る可能性は大きいですが、タクミの命を救うためには行くしかない。

必ず助けるために……

だが、マカラス宮殿に居たのは、あの時別れたフローラだった。彼女によれば、あの戦闘の後、捕まっていたらしい。

だが、暗夜王ガロンが命の代わり、この城に仕えることとなったらしい。

彼女に連れられ、暗夜軍の居ない離れへと移動する。

だが、暗夜軍師マクベスの手が襲い掛かる。

彼を撃退するも、逃げられる。

その後、タクミを休ませ、フローラのおかげで薬草も手に入った。

カムイ達は彼が回復したら、双子の故郷である氷の部族の村へと行く事となった。

カムイはタクミの看病をしていた。

「姉さ……ん……カムイ……姉さん。気を付……けて……見えるものだけ……が全てじゃないんだ。あれを倒さなければ、闘いは……終わらない。本当の平和は……決して……」

「……タクミ……」

彼は少しうなされた後、落ち着いたように眠る。

カムイは額の布を変え、

「……寝言、か。そうだな、見えるものだけが全てではない。あれを倒さない……」

この時、自分は思っていた。

タクミの寝言の『あれ』とは、透魔王ハイドラではないか、と思った。

彼はおそらく、透魔王国に落ちたのだろうから。

けれど、彼の言う『あれ』は違った……

タクミも回復し、氷の部族に向かった。

だが、氷の部族に着くと待っていたのは戦闘だった。

氷の部族は、暗夜王国を裏切ったカムイの抹殺を命じられていた。

それは、カムイの臣下であったフローラ。

氷の部族は元々、暗夜王ガロンに不満を持っていた。

その事に気付いていた暗夜王ガロンは、反乱を起こさなように部族長の娘である双子を人質としてあの城に送り込んだ。

そして、カムイの裏切りを利用して氷の部族を殲滅しようとしたのだ。

だが、カムイを抹殺すれば、部族の殲滅は免れる。そう、マカラス宮殿の時から始まっていたのだ。

暗夜軍師マクベスの襲撃も演技だったのだ。

カムイは拳を握りしめる。

ここで殺られる訳にはいかない。

例え、彼らの故郷でも。

だが、カムイは知っている。

故郷を失う怖さを。

何とかしたいが、今の自分にできる事は限られている。

なら、自分が今できる最善の方法を取るしかない。

彼らの恨みや怒りを受ける覚悟はしている。

自分は今から、それだけの事をするのだから。

カムイは剣を抜く。

フェリシアは故郷ではなく、自分を取ってくれた。

それはとても嬉しかった。

フローラのあの目を知っている。

彼女もまた、本当は闘いたくないということ。

けれど、自分がやらねば部族の未来がない事も理解している。

だからこそ、武器を取るのだ。

当然だ。

一人の命と故郷の命。

自分の想いと現実。

本来なら、秤に賭けるまでもない。

秤に賭ける事もしたくないだろう。

だからこそ、自分は彼女が自分を憎めるように立ち振る舞うだけだ。

カムイは、それでも彼女の命を取る事は出来なかった。

リヨウマ達にも、解っていたのだろう。

部族たちの命は取らなかった。

カムイは武器をしまう。

フローラに手を差し出す。

だが彼女は、その手を取ることはなかった。

カムイから離れ、自らの身に火を放ったのだ。

自分が居なくなれば、暗夜王ガロンは氷の部族を襲うことはない。

カムイは火を消そうとした。

けれど、その火は消えなかった。

フェリシアの吹雪でも火は消えない。

そして、フローラは炎に包まれながら別れを告げて倒れ逝く。

カムイは拳を握りしめ、

「どれだけ奪えば気が済むんだ……どれだけ、失わせるんだ。彼女は、こんな選択を取らなくてもいいはずなのに！」

カムイは歯を食いしばる。

違う。

一番悪いのは自分だ。

自分がなきれなかったからだ。

覚悟を決められなかったからだ。

救う手段があったはずなのに。

この選択を取らせないやり方があったはずなのに……

カムイ達は暗夜王ガロンがいる暗夜城を目指して進み始める。

その為に暗夜の中で最も暗く深い森を進んでいた。

カムイ達は途中で、ノスフェラトウが現れる。

だが、いつものノスフェラトウとは違った。

意志がある。

操っている者が存在する。

そしてカムイは瞳を揺らす。

彼らを操っていたのは暗夜王子レオン。

彼の身に纏う黒く紫のオーラ。

あれは囚われている。

自分を憎み、怒る。

自分を殺すために居る存在として。

あの優しかった彼の瞳は冷たい。
彼は語る。

『カムイ』が憎いと、『裏切り者』と怒りめいた声で言う。
自分のせいで、血の繋がる兄弟姉妹きょうだいは見えてくれないと。
カムイは理解した。

彼は誰かに似ていると。

それはタクミだ。

だから憎めなかったのか。

ほっとけなかったのか、と。

カムイは近くに居るノスフェラトウを倒していく。

彼を殺さない方法を見つける。

彼の中の闇を消す。

その為にはアクアに歌ってもらわないといけない。

けど、それをすれば彼女に呪いが降りかかる。

アクアはそんな自分の想いに気付いていたのだろう。

既に歌い出していた。

カムイは、いや、自分カンナはつくづく思う。

自分に歌の力があれば、と……

カムイは剣をしまう。

「白夜と争う必要はないんだ。どちらかが、居なくなるまで戦い続ける……それは間違いだ。恐怖で人を縛っても、それは新たな憎しみを生む。今の彼のやり方では、世界は滅ぶだけだ。お前は聡く、優しい子だ。本当は、誰も気付つきたくはないのだろう。」

「……ああ、そうか。それが、本当のカムイ姉さんの姿か。姉さんの眼には、ちゃんと僕らも映ってたんだね。」

「私はただ、受け入れられなかったただけだ。白夜に居た頃と同じように。自分の居場所が分からず、決める事もできなかった。そのせいで、多くの犠牲を出してしまった。」

「……はは、僕の知ってる姉さんも嫌いじゃないけど、そっちの姉さんも嫌いじゃないな。ごめん、姉さん。姉さんを憎んでいたのは事実だ。嫌いだった……でも、本当は大好きなんだ。大好きな姉だったん

だ。」

「ああ……」

アクアはジツとカムイを見つめた後、レオンにある水晶を渡す。

「あなたに、これを。きつと、真実を見せてくれるわ。あなたの進むべき道を導いてくれるはずよ。あなた自身の眼で、真実を確かめて。」

「……ふーん、わかった。その真実とやらが分かるまでは、僕は何もしない。けど、もしもその真実とやらが、姉さん達の嘘なら、今度こそ何があっても姉さんを殺すからね。」

「ああ、そう思ったのなら来るといい。私はそれを受け入れる。」

カムイは彼から離れるが、

「待って、姉さん。今行っても、姉さんたちは勝てない。だから、ノートルディア公国に行くといい。」

「ノートルディア公国……知恵の国か。」

リヨウマは眉を寄せる。

暗夜王子レオンは頷く。

「そう。『虹の賢者』に会いに行くんだ。」

『……虹の賢者……では、十二の竜の生き残り。神器を創りし竜か。』

「父上やマークス兄さんは虹の賢者に会い、『何か』を得た。それが、最強と言われるようになったんだ。けど、今から戻ったら時間がかかり過ぎる。だから、これをあげる。」

暗夜王子レオンはカムイに古い書物を渡す。

カムイはそこに魔力を感じる。

一種の魔法術が埋め込まれた物だ。

「水晶のお礼って事で。借りは作りたくないんだ。それを使えば、ノートルディア公国に行つて戻ってくるだけの力がある。ま、一種のワープだね。古いものだから、一回きりの代物だけ。」

「……それでも助かる。ありがとう。では、行つて来る。」

カムイが、それを展開する。

レオンはそれを見守る。

そして、カムイが消える瞬間に小さく、

「それでも、まだ名前は呼んでくれないんだね……」

カムイは、それに応える事はなかった。

レオンの言った通り、ノートルディア公国に来ることが出来た。カムイは急いで、手分けして虹の賢者を捜す。

一人で虹の賢者について、話を聞こうと目についた老人を見る。どこか不思議な気配のする老人だった。

そんな老人に、虹の賢者について聞いた。

その老人によれば、虹の賢者に会うには命の危険があると。

彼に会って戻ってこれたのは四人。

一人目は白夜王スメラギ、二人目は暗夜王ガロン、三人目は名もなき騎士、四人目は暗夜王子マークス。

例え命の危険があっても、進まねばならない。

そして虹の賢者はノートルディア山という険しい山。

その頂上に『七重の塔』があり、試練を乗り越えたその最上階に、虹の賢者が居ると言う情報を得た。

カムイはリヨウマ達と合流し、山を登る。

険しい坂道を歩き続け、七重の塔にたどり着いた。

その門を開け、試練に挑む。

守護者を倒し、最上階へと向かっていく。

そして、最後の番人を倒し、虹の賢者へと続く扉を開けた。

光に包まれ、目を開ける。

すると、カムイが話していた老人の前に移動していた。

しかも、塔の中ではなく、港の街。

カムイは瞬時にこれが、術である事を理解した。

そしておそらく、この目の前に居るのが虹の賢者だと。

カムイの勘は当たり、目の前の老人が虹の賢者だった。

その虹の賢者いわく、暗夜王子マークス達が得た『何か』とは、賢者自身が与える力ではなく、塔に行き試練を乗り越えることこそが、『力』だと。

つまり、あの試練で身についた実力こそが、虹の賢者から与えられたモノ。

さらに虹の賢者は、カムイの夜刀神を見る。

そして、カムイの名も知っていた。

流石は古の竜の生き残り。

そして、父カムイが凄いと云っていた人物だ。

と、思っていた。

虹の賢者は言った。

夜刀神を受け継いだ自分に、伝える事があると。

真の平和の為に『炎の紋章』の謎を解き明かさねばならぬ運命のこ
とを。

そして、虹の賢者はタクミの風神弓を見て繋げてくれた。

互いに思う事こそが、『炎の紋章』を動かすと。

実際に、タクミの持つ風神弓が光り出す。

——我は神刀を鍛えし者、禁忌を犯せし者、伍色を紡ぎし者。我が
名に応えよ、『炎の紋章』よ！

それがカムイの持つ夜刀神に吸い込まれた。

虹の賢者は、これはまだ途中だと言う。

これを真の姿にできた時、炎の紋章が現れると。

カムイ達は、旅路を済ませる。

虹の賢者にお礼と別れを告げ、暗夜王国へと戻った。

暗夜王国に戻り、暗夜城を目指して歩き始める。

途中、黒竜砦と呼ばれる砦を通る。

リヨウマ曰く、この砦を抜けた方が近道だと。

そこはまるで竜のような砦だった。

と言うより、どこか竜の気配がする。

それは正解だったようで、この砦は竜そのものを使ってできている
と。

大昔に死んだ『黒竜』の亡骸を使って作られた砦だと。

中に入ると、暗夜兵の姿はどこにもなかった。

そして、カムイはハツとする。

竜の気配が強くなったのだ。

地震が起こる。

ひとまず砦から脱出しようとしたが、出口がなくなった。

そして、カムイの前に暗夜軍師マクベスが現れる。

「ごきげんよう、カムイ王女。また、お会いしましたね。この前の事で、ガロン王様からお叱りを受けてしまいましたよ。まあ、日頃の行いが良い為にお許しくださった。あなた達はここで、今度こそ死ぬのですよ。この、いにしえの地竜……黒竜王の体内で！」

「……!!まさか、呼び覚ましたのか！」

カムイは周りを見渡す。

それはもう壁ではなく、ドクドクと動く体内だった。

彼は優越に笑いながら、

「これは餞別です。」

この場に、ノスフェラトウを放つ。

「その力、暗夜王ガロンから受けたのね。でなければ人間に、亡き竜を呼び起こす力があるはずがない。第一、あなたの魔力では無理でしょうから。」

「くっ、生意気な娘ですね！」

アクアが冷たく言い放つ。

カムイは暗夜軍師マクベスを睨みつけ、

「……古の竜を呼び覚ますなど、恥を知れ！誇り高き地竜を、汝らの崇める神祖竜を侮辱するとは愚かな！加護を受けている身で、静かに眠っている竜を起こすとは……だから人は竜の怒りを買うのだ！」

「カムイ？」

リヨウマはカムイを見る。

そこには、完全に怒っているカムイの姿があった。
カムイ
カンナは知っている。

古の竜は覇権争いをした。

けれど、人と共に歩むことを決めた竜も居ると。

加護を与え、共に生きる竜を。

そして、神竜ハイドラのように民を想う優しき竜が居る事を。

けれど人は、その恩恵を忘れた。

竜を恐れ、蔑ろにした。

人を信じる竜の心を踏みにじってしまった。
己の中にも竜の血はある。

その血が訴える。

哀しいと……

カムイは上を見上げる。

竜の悲しむ、苦しむ声が聞こえる。

それはいつかの父カムイを、神竜ハイドラを思い出す。

「待っている、何があっても解放してみせる。あの闇には、渡しはしない！」

「カムイ、待って!!」

アクアが叫ぶが、カムイは暗夜軍師マクベスの幻影を斬り裂く。

そして、ノスフェラトウを叩き斬る。

どんどん斬り裂いて行く。

アクアがリヨウマを見て、

「リヨウマ、カムイを止めて。このまま暴れて竜になれば、暴走してしまおうわ。」

「わかった。タクミたちはノスフェラトウを頼む。」

「任せて。」

タクミ達はノスフェラトウを倒しに向かう。

リヨウマはカムイの剣を受け止め、

「落ち着くんだ、カムイ！」

「……………」

リヨウマはカムイの瞳が赤く光っているのを見る。

本気で怒っている。

あのカムイが、我を忘れるくらい本気で。

「カムイ、もう一度言う。落ち着くんだ。今は状況を整理し、ここを脱する必要ある。このままでは、全滅だ。わかるだろう。」

「……………すみません。頭に血が上り過ぎました。」

カムイは剣を退く。

辺りを見渡し、

「黒竜王……暗夜の加護を受け持つ、神祖竜。こんなに嘆き悲しんで、

恨んでいる。」

「カムイ、お前には感じるのだな。竜の気持ちだ。」

「……ああ、だから何とかして止めないと。」

カムイは拳を握りしめる。

アクアがカムイの強く握りしめる手を包み込む。

「それは私がやるわ。私の歌なら、きっと大丈夫。」

「そんな事をすれば、呪いが！あんなに苦しんでいたのに！」

「けど、その方法しかないの。信じて、私なら大丈夫。」

「……わかりました。アクアさんを、アクアさんの歌を信じます。」

「ありがとう。」

アクアは優しくカムイに微笑み、カムイのおでこに自分のおでこを当てて。

ノスフェラトウを全て倒し、アクアは歌を歌い始める。

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

再び揺れ出し、竜の鳴き声が響き渡る。

周りは、壁へと変化していく。

カムイは覚悟を決めて、壁と竜の肉となっている境目に剣を突き立てる。

できた突破口から、脱出する。

カムイ達が外に出ると、砦は竜ではなく、前の砦に戻っていた。

カムイは砦の壁に手を当て、

「ごめんなさい。そして、安らかに眠ってくれ……」

カムイは彼らの元に戻り、移動する。

しばらくして、森で休息を取った。

カムイはアクアの元に行く。

「アクアさん。」

「カムイ……?! うっ、ううー! ああ!」

アクアの体を呪いが襲う。

そしてそれは、アクアの体を蝕む。

彼女の体が透け始めていた。

「呪いが……呪いが強くなっているじゃないですか! 何で言ってくれ

ないんです！」

「カムイ……大丈夫、大丈夫よ。あなたがまだ、ここに居る。あなたの望む平和を見てないもの。だから大丈夫よ……」

アクアは重く苦しい体を動かして、カムイを抱きしめる。

すでに泣いているカムイをギュツと強く、それでいて優しく包みこむ。

「前にも言ったじゃないですか……平和がきた時に、アクアさんが居なくては大変だと……」

「カムイ、大丈夫……私はいなくならないわ、約束する。だって、私には夢があるのよ。この戦いが終わったら、カムイやみんなと平和な世界で暮らすという夢が。だから消えないわ、みんなと一緒によ。」

「……私も、アクアさんを守ります。歌を使わなくても、いいように……」

「本当に優しい子ね。暗夜王を倒して、戦争を止めましょ。」

「はい……」

カムイは彼女を抱きしめて泣き続けた。

失うのが怖くて……

しばらくして、彼らは再び動き出す。

船に乗り、暗夜城を目指す。

リヨウマが教える。

白夜城から伝令が届いたと。

かなり状況はよくないらしい。

なんとしてでも、早くこの戦争を終わらせないといけない。

カムイ達は虹の賢者がくれた地図によると、近道がある事をする。けれど、その道は怪物や危険な場所だと言う。

それでも、早くこの戦争を終わらせるためには行くしかない。

火の滝でもある『デーモンフォール』。

ずっと、炎が消える事のない場所。

そして、そこ居る怪物とは透魔兵や巨人だった。

それらを撃退しながら突き進む。

番人だと思われる巨人を倒すと洞窟が現れた。

ジョーカーとフェリシアによれば、どうやら王都へと繋がっているらしい。

カムイは進む。

この戦争を終わらせる為に。

王都に入ると、人がなかった。

白夜とは大違いだ。

王都を知る者に聞けば、夜の王都に出れば野盗やノスフェラトウに襲われると。

暗夜王国とは、こう言うところだと。

白夜と違い、暗く日の当たらない土地では作物は育ちにくい。

そのせいで、民は貴重な食料を奪い合う。

だから、日が当たり豊かな土地を奪うしかない。

生き延びる為には、他国を襲うしかない。

それを聞いたリヨウマは、国の方針を決めたようだった。

与える事を持って、この暗夜王国を変えると。

持つ者が、持たざる者に与えてこそ、憎み合う気持ちのない世界は作られると。

カムイはリヨウマに父カムイを重ねた。

父もいつだったか言っていた。

人は皆、困った時は助け合わなければ生きていけない。

それは竜も同じだと。

もしも自分ができる事があるのなら、迷わずやるといい。

それが自分にとって良い結果にならずとも、後悔せずに突き進むべきだと。

決して忘れてはいけない。

世界には自分と同じ境遇の者、そうでない者、与えられる者と、持たない者。

沢山の相対があるのだと。

軍の士気は高まった。

賊の襲撃はあったものの、撃退に成功する。

そしてアクアの記憶が正しければ、襲ってきた賊の男性はアクアを

白夜王国へと誘拐した人物だった。

その彼は、暗夜王国の『秘密の通路』を知っているのだと。だが、彼はそう簡単には教えないと言う。

教えるには大金を寄こせと。

リヨウマがそれに応じた。

次期王となる自分が保証すると。

それを聞いた賊は態度を変えた。

話によれば、彼は白夜王国に仕えていた今は亡きコウガ公国の忍だと。

コウガ公国は、フウガ公国の隣国で優秀な忍びを輩出していたと。

両国は仲が悪く、コウガ公国はフウマ公国に滅ぼされた。

そして領土を奪われた。

おそらく、その頃からフウマ公国は暗夜王国と手を組んで、白夜を裏切っていたのだろうと。

コウガ公国の民は土地を奪われ、白夜に住めなくなった。

この暗夜王国に流れ、盗賊として生きるほかなかったと。

リヨウマは王家に力がなかったことを詫げる。

そして、彼の協力の元進む。

向かうは通路のある王都の地下都市。

彼の案内の元、地下都市を進む。

そこは上とは違い、人が溢れていた。

貧しくも活気に満ちた場所だった。

王城や兵も知らない市民の都市。

カムイが辺りを見渡していると、声を掛けられた。

それは花売りの少女。

金髪の綺麗な紫い瞳。

そして、どこか聞き覚えのある声……

カムイは驚いた。

そこに居たのは暗夜王女エリーゼ。

事情を聞こうにも、ここでは話せない。

彼女に連れられ、向かった先は彼女の乳母の家。

その昔、彼女が生まれたばかりの頃は王位争いがあったと。自分は乳母に連れられ、王城から離れていたために無事だったと。そして、今の彼女は王城に居場所がないと言う。

戦争がはじまり、大好きだった姉が居なくなってしまうた。前のように兄弟姉妹揃って話すこともなくなつた。

遊んでくれた城の兵も、家臣も、今では戦争の事しか口にしないと。だから居場所が欲しいと、姉から教えてもらった秘密の通路を使つて、ここに来たと。

カムイは自分と話す彼女が笑顔になるのを見てホツとした。彼女の頭を撫でながら、

「良かった。やっと笑顔に戻った。」

「お姉ちゃん！」

暗夜王女エリーゼはカムイに抱き付く。

カムイはその背を摩る。

そして顔を埋め、

「最近のお父様はおかしいの。気に入らない者は、すぐに殺してしまふ。兵も、民も、簡単に殺してしまうの。最近のお父様は、どこか虚ろな瞳で独り言も言うの。マークスお兄ちゃんは、まるで別人だつて。昔のお父様は、優しくて今ほど怖くなくて、残酷なこととはしないうつて。威厳があつて、尊敬できて、王様としてとても立派だつたつて。今みたいにおかしくなつたのは、シユンメイっていう王妃がいなくなつてからだつて。私はその頃生まれてなかつたから知らないけど、お父様の所にある変な石像は、その人がいなくなつてから置いたものだつて。」

「シユンメイ……王妃。」

カムイはこの名を知っている。

この名は、アクアの母親の名。

そして、自分のかつての祖母だ。

暗夜王女エリーゼは続ける。

「うん。マークスお兄ちゃんのお母様、エカテリーナ王妃の後の後妻の人。」

「あらあら、懐かしい名前なこと。エカテリーナ王妃も、シユンメイ王妃もそれは美しい方だったわ。」

「……知っているのですか?」

カムイは暗夜王女エリーゼの乳母を見る。

彼女は微笑み、

「ええ、噂になりましたからね。エカテリーナ王妃が亡くなった後、王妃は取らないと言っていたガロン王が、急に王妃を取ったんですの。なんでも、出会ったばかりのシユンメイ王妃に一目惚れとか。シユンメイ王妃の美しい歌声を、大層気に入ったとかで。けれど、シユンメイ王妃はすぐに亡くなったと。ガロン王は部屋に閉じこもり、大層荒れたそうですわ。その時に、王位争いも起こってしまって……沢山いた家族を失いました。きつとそれが、ガロン王の悲しみを生んでしまったのでしようね。その事もあって、誰もシユンメイ王妃の事を口に出すことはしなかったわ。私は少しだけだけれど、シユンメイ王妃にお会いした事があるの。丁度、そこにいるお嬢さんのような顔立ちで、綺麗な方だったわ。」

「それは、そうだろう。アクアは、元は暗夜王国の王女だったからな。アクアはおそらく、後妻のシユンメイ王妃の子だろう。」

リヨウマが腕を組む。

と、カムイに抱き付いていた暗夜王女エリーゼは顔を上げる。

「ええ!! あなた、私のお姉ちゃんだったの☒」

「私は……」

けれど、アクアは黙り込む。

カムイは視線を外し、眉を寄せた。

暗夜王女エリーゼはアクアに抱き付き、

「会えてうれしいよ、アクアお姉ちゃん!」

「ええ……私もよ。けど、ごめんなさい。私たちは道を急ぐから。」

「……お父様を殺しに行くの?」

「それは……」

アクアは視線を落とす。

カムイは暗夜王女エリーゼの前に膝を着き、

「ああ、私たちは暗夜王ガロンを討ちに行く。だから、ここに居てくれ。巻き込みたくない。」

「……私ね、お姉ちゃん達のこと大好きだよ。お父様は怖い。……けどね、どこか悲しそうなもの。」

「本当のガロン王は国や民を慈しみ、我が子を愛する立派な方だった。それは白夜のスメラギ王と同じくらい。」

「お姉ちゃん?」

「だからこそ、私は今の暗夜王ガロンを討ちに行く。私の事は恨んでくれていい。けど、父親であるガロン王を嫌いにならないでほしい。今の王が、どんなに怖くとも。本当のガロン王だけは……」

カムイの中で、幼き頃に聞いた母アクアの言葉がよみがえる。

自分だけは父を嫌いにならないでくれと。

暗夜王女エリーゼはカムイを見上げる。

「……ねえ、お姉ちゃん。この戦争が終わったら、またお喋りをして。また遊んでくれる?」

「ああ。」

「……じゃ、約束ね。」

「ああ、約束だ。」

二人は指切りをする。

カムイは立ち上がる。

と、暗夜王女エリーゼはカムイの手を取り、

「私も、一緒に行く。私もね、今のお父様を止めて欲しいの。本当はいけない事なのかもしれない。けど、私はお姉ちゃんを信じる。」

「……だが、城に戻ったら離れるんだ。本当に危険だから。」

「うん、わかった。けど、それまでは、一緒に居させて。」

カムイは彼女の手を握りしめる。

カムイ達は秘密の通路へとやって来た。

水路を使った道だ。

奥へと進み続ける。

迷路のような薄暗く、死体や罫がはびこる。

怖いと言うサクラと暗夜王女エリーゼの手を引き、歩き続ける。

と、後ろの方から足音が響く。

それは暗夜王女カミラが兵を連れてやって来た。

彼女は暗夜王女エリーゼを白夜兵が誘拐したと思っていた。

だが、カムイが暗夜王女エリーゼと共に居ると嬉しそうに言ったのだ。

帰って来てくれた、と。

けれど、自分はそうではない。

暗夜王女カミラは武器を構える。

自分と暗夜王女エリーゼ以外の者を殺すために。

カムイは聞いていた。

暗夜王女カミラは、あれ以来部屋でふさぎ込んでいたと。

ずっと、思い悩んでいたと。

それでも、ここでやられる訳にも、引き返すことも、暗夜王国につくこともできない。

そして、暗夜王女エリーゼの臣下の姿もあった。

カムイは剣を抜く。

暗夜王女エリーゼの臣下に声をかけ、彼らを退かせる。

彼女の臣下と話す姿は、互いに信頼関係があった。

とても楽しそうだった。

カムイはカミラと刃を交える。

彼女の力は少し軽い。

けれど、重い。

カムイは彼女を傷付けることはできない。

いや、それは彼女だけではない。

暗夜の王子と王女を敵にはしたくなかった。

彼らの臣下も、白夜の臣下たちと同じで主想いの、仲間想いの良い人達なのだから。

カムイは剣に力を籠め、暗夜王女カミラの斧を弾く。

他の所でも、暗夜兵達が倒されていた。

カミラは膝を着き、涙を流す。

カムイは剣をしまう。

彼女は顔を覆い、

「ああ、私はただ……昔のように過ぐしたかっただけなのに……」

「この戦争が終われば、またみんなで話すことはできる。その時は、白夜王国の王女として前に現れよう。」

「本当に？」

「ああ。」

「そう……待っているわ、白夜王国のカムイ王女。平和になって、またみんなでお話ししよう。」

そう言つて、彼女は倒れ込む。

カムイは彼女を見る。

どうやら気絶したみたいだった。

ホツとして、彼女を彼女の臣下に預けて奥へと進む。

通路を抜けると、そこは何の因果か鍛錬場だった。

多くの暗夜兵達が訓練をしている。

そして、その指揮を執っている隊長は白夜に進軍をした時に襲つてきた者だった。

カムイの瞳に殺気がこもる。

彼らのせいで、約束をしていたあの老騎士を失った。

彼が何故、自分に味方したのかさえも解らずに……

何より、ここまで来て退くわけにはいかない。

カムイ達は武器を構えて、奇襲をかける。

だが、人数が多い。

カムイは背後から、敵将に狙われる。

防御が間に合わない。

そう思った時、小竜の姿となっていたリリスが自分を庇った。

カムイは目を見開いて、

「リリス!! しっかりしろ!」

カムイはリリスを抱きかかえる。

血が大量に流れ出ている。

「がはは! 獣が主人を守ったか! なんとも健気な!」

「……竜には人間の治療は効かない……ここには竜を癒せる者は存在

しない……くっ！リリス、すまない。少しだけ待っていてくれ。」
カムイは、リリスを優しく抱きしめてから地面に置く。
竜石を持ち、

「覚悟しろ、あの時といい……今回の事、絶対に許しはしない！」
カムイは竜の姿となつて、敵将に向かっていく。

それ以外の敵は、尾で薙ぎ払う。

カムイは敵将の斧を薙ぎ払い、叩き潰す。

頭を失った暗夜兵は武器を捨てて撤退する。

人の姿に戻り、リリスの元に駆けよる。

「リリス、お願いだ。もう一度、もう一度、目を覚ましてくれ。」

「カムイ……様……」

カムイの涙がリリスに当たる。

リリスは光に包まれ、人の姿に戻る。

「リリス……」

「ああ、感謝いたしております……星竜モロー。あなたの情けで、私は伝えられます。カムイ様と過ごしたこの姿で……。カムイ様、泣かないで……ください。」

「リリス、死ななくてくれ……私はもう、失いたくない。大切なモノを……」

「カムイ様……ありがとうございます。そう言つて頂けただけで、私は幸せです。けれど、申し訳ありません。私はあなたの命に背きません。」

「リリス……」

「私は、本当に幸せでした。道具として生まれてきた私が、あなたと言う主人を得て、人として共に過ごした日々は宝物です。あなたに救われた命を、私はあなたの為に使える。」

リリスは涙を流すカムイの頬に触れる。

そして、幸せそうに微笑む。

「泣かないでください、カムイ様。私は、あなたの笑顔が好きでした。心を閉ざし、けれど時折見せてくださった。私は、あなたの優しさを知っています。だから、笑ってください。」

「……ああ、リリース。」

カムイは涙を流し続ける。

だが、その顔は笑顔でを必死で作っていた。

リリースは微笑んだまま、

「ありがとうございます、カムイ様……私は、私はカムイ様の事が大好きでした。本当にありがとうございます、カムイ様……」

そしてリリースの手が地に落ちる。

カムイは彼女を抱きしめて、泣き続けた。

カムイは彼女に懐かしさを覚えていた。

彼女の髪やしぐさ、微笑みは懐かしき優しい神竜ハイドラを思い出す。

どこか父カムイを思い出す。

今となつては真実はわからない。

けれど、これだけは解る。

彼女は、とても大切な『何か』だったと……

「カムイ、顔を上げて進むんだ。どんなに悲しく辛くとも、お前は進まねばならぬ。それが、お前を守り、お前を主と認めたリリースの為だ。お前は立ち向かえる強い心がある。それを見抜いていたからこそ、リリースはお前にずっとついて来たのだ。お前を庇ったのだ。お前が大事だから。」

「リョウマ兄さん……はい、解っています。ここで立ち止まる訳にはいかない。私は、私が犠牲にしてしまった人たちの為にも、進まなければならぬ。それが、私にできる唯一つの道なのだから……」

リョウマの支えを受けて、カムイは涙を拭い、進むことを選ぶ。もう、暗夜王ガロンの居る王城は目の前だ。

「リリース、待っていてくれ。戦いが終わったら、迎えに来る。きつと、平和の道しるべを持って、ここに戻ってくる。」

カムイは王城に向かって歩き出す。

リリースに小さく微笑み、

「助けてくれてありがとう、リリース。私も、リリースの事が好きだった。リリースは、懐かしい想いを起こしてくれた。本当にありがとう。」

カムイ達は王城内へと乗り込んだ。
が、武器を構えて立ち止まる。

目の前には、暗夜軍師マクベスが姿を立っていた。

そして、剣を向かる。

が、タクミがアクアを押しさえつけて、立ちはだかる。

その瞳は闇に飲まれかかっている。

暗夜軍師マクベスは、タクミを裏切り者として白夜同士の殺し合い
を引き起こそうとしていた。

笑う彼を睨みつける。

カムイは剣を床に刺し、タクミにゆっくり近付いて行く。

彼を信じて、彼なら戻ってくるかと心から信じてるから。

「タクミ、大丈夫だ。お前なら戻って来られる。私は、お前を信じる。

お前が、私を信じてくれたように……」

「姉……さん……」

タクミは頭を抑え、アクアから離れる。

アクアは立ち上がり、

「タクミ、今助けるわ。今度こそ、あなたの中の魔を全て取り除いてみ
せる!!」

アクアはペンダントを握りしめる。

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

アクアの歌が響き渡れる。

暗夜軍師マクベスがそれを止めようと、動き出す。

だが、それをいち早く止めてたのはサクラだった。

そして、そのサクラを助けたのはタクミだった。

カムイも剣を抜き、彼に襲い掛かる。

暗夜兵達を、リヨウマ達が蹴散らしていく。

カムイは、暗夜軍師マクベスと戦う。

彼は言った。

私はまるで死神のようだと。

それは確かかもしれない。

けれど、それならそれで構わない。

この戦争を終わらせ、透魔王国を救って、平和を取り戻す。その為に、ここに居るのだから……

カムイは、容赦なく暗夜軍師マクベスを追い詰めていく。

そして、暗夜兵達もリヨウマ達に倒されていった。

カムイは暗夜軍師マクベスの首に刃を向ける。

彼は悲鳴を上げ、命乞いをしてきた。

全て悪いのは『暗夜王ガロン』だと。

自分は操られていた、可哀想な駒だからだと。

カムイは眉を寄せる。

と、暗夜軍師マクベスは悲鳴を上げて逃げ出した。

それを止め、息の根を止めたのは暗夜王子レオンだった。

彼は真実を見極め、戻って来た。

そして彼は言うのだ。

もうカムイの事は、姉さんとは呼ばない。

カムイのしている事には意味があると。

姉とはもう呼ばなくても、カムイは大切な人だと。

だから、一人の者として自分を見ると。

彼に姉と呼ばれなくなるのは、何となく不思議な感覚がある。

けれど、これが本来の姿でもある。

それでも、彼は自分にとっては優しく、おっちょこちよいの……弟なのだろうと。

「お姉ちゃん！ やつぱり、私はお父様とマークスお兄ちゃんを説得してみる。」

暗夜王女エリーゼがカムイと暗夜王子レオンの間に入る。

二人は危険だと言うが、離れようとしなない。

これはまるで、幼い頃の自分だ。

自分ならできる、きつと想いは通じるって……

暗夜王子レオンは彼女の強い意志を感じ、彼女を行かせた。

カムイは拳を握りしめる。

そして決める。

守ろうと……彼女の信じる力を。

暗夜王子レオンに別れを告げ、奥へと進む。

この先に居るのは、暗夜王子マークス。

そしてその奥に、暗夜王ガロンが居る。

カムイは気を引き締めて向かう。

階段を登った先に、マークスが一人立っていた。

彼はカムイを見ると、鞘から剣を抜く。

その鞘を捨て、剣を構える。

彼の眼は本気だ。

それでも、これだけは言わねばならない。

「そこを退いてください。私は、あなたとは戦いたくない。」

「……甘いな、カムイ。私を倒さずに、父上を倒せると思っ
ているのか。戦争を止めたいのなら、剣を取れ。私は暗夜王国第一王子として、王国に仇なす存在を許すことはできません。一体一の決闘だ、カムイ！」

「お兄ちゃんやめて！ どうして、どうして戦わなきゃいけないの！ カムイお姉ちゃんとは血の繋がりはないわ。けど、そんなのなくなっちゃってお姉ちゃんとは兄弟姉妹だよ！ 兄弟姉妹で戦うなんて——」

「エリーゼ、お前はそこから動くな。これは、暗夜王国の王族としての役目なのだ。戦う気がないのなら、お前はそこにいるんだ。」

「お兄ちゃん……うう、うう……お姉ちゃん、ごめんさい。マークスお兄ちゃんを説得できなかつた……私、私……」

暗夜王女エリーゼは泣き出した。

その姿は本当に、昔のカンナ自分を思い出す。

カムイは彼女の頭を撫で、

「……私こそ、すまない。私も止める事はできそうにない。だから私は、戦ってくるよ。」

カムイは彼女の傍を離れる。

そして暗夜王子マークスの前に立つ。

「この先を目指すのなら……私を倒し、道を開け。気を抜けば、死に繋

がるぞ。」

剣を抜き、彼に構える。

「ああ、私も引くことはできない。本気で行かせてもらう。」

「面白い、ゆくぞー！」

暗夜王子マークスとカムイは剣を交える。

それを、リヨウマ達は見守る。

カムイは必死に交戦をする。

彼は強い。

リヨウマも強い。

この二人の強さはきつと父カムイやアベルと同じくらいだろう。

油断はできない。

だが、自分は受け止めるのがやつとだ。

「くっ！やはり強いな……だが、ここで止まる訳にはいかないんだ。」

「ああ、前の時より強くなって……しかし、まだまだ！」

二人は刃を交わし続ける。

カムイはすでに肩で息をしている。

だが、その瞳はまだあきらめていない。

何度も、何度も向かっていく。

何度も、何度も受け止める。

「……何のために、戦う。あなたの信じる正義はどこにある……」

「正義など……ありはしない。戦争や国同士の闘いに、正義など……」

どこにもない！」

カムイは剣を弾かれる。

そして尻餅をつく。

「……そうか。では、何故……今のあなたは、そんなに苦しそうなんだ。それは……あなたの中に、正義があるからではないのか。」

「ほう、そう思うか。……では、お前が抱くその正義を信じて死ぬがいー！」

暗夜王子マークスは剣を振り上げる。

カムイは目を見張った。

それは自分の命が危ないと思ったからではない。

カムイを庇って、暗夜王女エリーゼが乗り出してきたからだ。彼女は彼の剣をまともに受けた。

地面に倒れ込む。

その彼女からは血が流れ出る。

暗夜王子マークスは剣を捨て、彼女に駆け込む。

「エリーゼ!!」

カムイは大きく瞳を揺らして見る。

彼女を抱き上げ、

「エリーゼ！しつかりしろ!!エリーゼ!!!!」

「うう……ああ……マークス……お兄ちゃん。」

暗夜王女エリーゼは目を開け、苦しそうに呼吸が荒い。

汗も大量に額から流れる。

床にはすでに、彼女の血が大量に流れている。

カムイは立ち上がり、フラフラになりながら近付いて行く。

暗夜王女エリーゼは暗夜王子マークスを見上げ、

「それが……正義?」

「……!!」

「愛する……モノを守るために……必要な?本当は……剣じゃなくて……暖かい手と涙なの。」

暗夜王女エリーゼは彼の手を取り、自分の頬に当てて包む。

暗夜王子マークスは右目から涙が流れ出る。

彼女は彼に手を伸ばし、

「お願い……鬨いをやめて……」

自分も涙を流しながら、彼の流す涙を拭った。

そして悲しそうに微笑んだ後、その手は床に落ちた。

「あ……ああー!」

彼は眉を深くして、彼女を床に寝かせる。

そして、涙を必死に堪えて剣の元に歩いて行く。

カムイは彼女の前に膝を着く。

涙を流しながら、彼女の頬を振れる。

「すまない……すまない……!!私はまた……私は!!」

カムイは泣き続けた。

暗夜王子マークスは剣を拾い、カムイに向ける。

「……来い、カムイ。終わりにしよう。この暗黒剣『ジークフリート』の露となるがいい。」

「……ああ。それが……それが、あなたの正義なら……私も答えよう！」

カムイは立ち上がり、涙を拭う。

そして剣を拾い、構える。

二人は再び剣を交える。

悲しみに満ちた剣、その悲しみを堪える剣、悲しみを背負い振るう剣。

色々な悲しみを持って、二人は剣を振るう。

二人は剣を互いに弾き、いったん距離を開ける。

そこに、暗夜王子マークスの臣下が兵を連れてやって来た。

暗夜王子マークスは眉を寄せて、それを止めるがこの戦火は止まらなかった。

リヨウマ達が、暗夜兵達と交戦を始める。

カムイと暗夜王子マークスは、互いに見つめ合う。

この戦いはもう、どちらかが戦いをやめるしかない。

もしくは、どちらかが死ぬしかない。

彼の瞳には、もう戦いをやめるという意志はない。

なら、カムイもまたそれに応えるしかないのだ。

「……さあ、カムイ。かかってこい。お前の目の前に居るのは、暗夜王国第一王子……憎き敵国の戦士、マークスだ！」

「ああ。私もまた、白夜王国の王女として、あなたに立ちはだかる敵だ。私は、あなたにとって憎き敵国の戦士。そして、あなたの妹を奪ってしまった戦士……カムイだ！」

二人は同時に地を蹴る。

ギーンという、今までで一番大きな金属音のぶつかり合う音が響く。

カムイは力を籠める。

竜の血を、力を剣に込める。

それは、本気で戦う証拠。

彼に対し、『カムイ』という一人の人として、竜として彼に剣を振り下ろすのだ。

彼もまた、それに負けなくらいの強い意志と想いで剣を振り下ろす。

カムイの瞳が赤く光り出す。

思いつきりカムイは剣を突き出した。

それは暗夜王子マークスの剣を弾き、彼を貫いた。

彼は地面に仰向けになって倒れ込む。

「……ああ、迷いのない良い目だ。流石だ……カムイ。本当に……強くなった。」

「それも全て、あなたのおかげだ。私の迷いを打ち切ったのは、他でもないあなたなのだ。」

カムイは剣をしまい、彼の横に膝を着いて涙を流す。

暗夜王子マークスは小さく微笑み、

「お前が、そんな風に……感情を出すのは初め……て見たのだ。あの城に……居た頃のお……前は心を閉ざし、私たちとも距離……を取っていた。けれど、決して無……下にはしなかった。いつだ……ったか、お前が私たちに笑ってくれた……事があった。あの頃……が懐かしい。お前に……とっては辛い……日々だったかも……しれぬ。敵国……に攫われ、閉じ込……められた生活。きつと、お前をそ……んな状況においた……我らを恨んでいただろう。私は……お前の負った心の傷を……少しでも癒したいと……ずっと兄としていた。……いや、そうする事で……自分の後……ろめたさ……を誤魔化していた……かったのだろう。けれど、私は楽しかった……幸せだったと思っ……てしまっ……たのだ。お前……と話せるあの時間が……兄弟姉妹、皆で……過ごせたあの日々が……」

「私はあの城に居たのは、暗夜王ガロンを討つ為。そして、白夜王国に戻りたかった。その為なら、どんな辛い事にも耐えようと……。けれど、あなたは何度も私に会いに来てくれた。たくさんの話をしてくれ

た。あなたの妹と弟を紹介してくれた。そして、血の繋がりのない私を兄弟姉妹きょうだいだと言ってくれた。あなたのおかげで、冷たく寂しかったあの城が、暖かく楽しい城に変わった。それは私にとって、とても愛しく離れがたい時間と日々だった。もう一つの居場所のように……

けれど、自分はあなた達の父、ガロン王を討つ存在。そんな自分が、あなた達の兄弟姉妹きょうだいになれるはずがない。恨まれる覚悟はあった。」

「……ああ……そうだったのか……お前は、私たちを嫌って……いた訳ではないのだ……な。本当は、共に笑い合いたかった……のだな……。それを……聞けただ……けで良かった。」

「私は白夜王国に戻って……もう一度、彼らの顔を見たかった。母の顔を……白夜王国に居ると言う彼女に。それが済んだら、私はやらねばならない事をしようとする……。」

「……やらねば……ならない事だ……と?」

「私は……私は罪人なんです。生まれ故郷を破壊した……大切な人たちを踏みにじった……私は、私の選んでしまった選択を、もしもの世界にずっと願っていた。」

「……この世界に、もしも……の世界はな……い。あるのは、自分の選んだ道を信じて突……き進むしかないのだ。今、お前が……居るこの世……界こそが、お前の……選択そのも……の。だから……らお前は、信じて進め……ばよいのだ。だが、もしも……違う選択、違う……未来があったの……なら、お前と共に……兄弟姉妹きょうだいとして過……ごしたかった。この……戦争を終わらせ、兄弟姉妹きょうだい……一緒に……仲良く過……ごしたか……った。」

暗夜王子マークスは涙を流す。

そして、血を吐く。

「げほっ……げほっ……だが、私は暗……夜王国第……一王子だ。エリー……ゼや他の妹弟きょうだいたちのよ……うに、お前と歩み寄……る道を選ぶこ……とは許されな……い。この国の……父上の意に反す……る道を、選ぶことは……きなかつたんだ……だから私は、本……当にお前を殺そ……うとした。お前た……ちを殺して、暗夜王……国を勝利させ……るつもりだった……なのに……最後の一片だ……け

残っていた『兄』とし……ての気持ち……それを許……してはく……れなかった。」

「私も、できる事なら……あなたの『妹』になりたかった……リヨウマ兄さんがそうしてくれたように……あなたは……やはり、私の知る『暗夜王国のマークス』だったと……」

「……カムイ……私は結局……この世界を……暗夜……王国を……平和には導けな……った。だが、お前な……らできるだろ……う。私にでき……なかったことが……きつと……だから頼……む、カムイ。父を……ガロンを……」

「ああ……きつと、ガロン王を『救って』みせる。必ず……」

「ありが……とう……カムイ……」

そう言つて、彼は息を引き取つた。

カムイは手をついて泣き続ける。

巻き込みたくなかつた彼ら。

その彼らを巻き込み、失つた。

こんな事を望んではいなかつた。

恨まれる覚悟はあつた。

殺される覚悟もしていた。

けれど、彼らを失う覚悟はしていなかつた。

どうして、こうなつてしまったのか……

そこにリヨウマ達がやつて来る。

状況を見れば、察しが付く。

アクアがカムイに寄り添い、抱きしめる。

カムイは涙を拭つて、立ち上がる。

ジツと前を見て、

「行こう、皆。私は、今やれる事を全力でやる。私は、私の取る選択が正しいと信じて。」

カムイ達は奥へと向かう。

王の間は、もうすぐだ。

そして、王の間の扉の前に立つ。

カムイはその扉を開く。

その先には、玉座に座る暗夜王国の国王ガロン。
カムイは剣を抜き、前に出る。

「来たぞ、暗夜王ガロン！」

「ふはははーあはははー！」

彼は冷たい笑みを浮かべて、笑い出す。

斧を取りだし、立ち上がる。

彼は一振りすると、床にはヒビが走る。

「歓迎してやろう、我が子よ！」

彼はカムイ達の前に立つと、

「ククク……久しいな、カムイ。やっと城から解放され、白夜に帰れた
というのに……よもや、このような形でここに帰ってこようとはな。」

「……ああ、帰って来た。もう、無駄な血を流さぬように、また彼らが
笑える日が来るように……私はお前の前に来た！暗夜王ガロン、お前
を倒し、ガロン王を救うために！」

カムイは剣先を彼に向ける。

そして剣を振り下ろす。

だが、カムイの方が不利なのは事実。

暗夜王ガロンは強い。

それも、リヨウマや暗夜王子マークスよりも。

暗夜王ガロンは冷たい笑みを浮かべ続ける。

アクアが歌を歌おうとした時、暗夜王ガロンはアクアを捕らえ、首
筋に刃を向ける。

「動けば、この娘が死ぬぞ。」

カムイは動きを止める。

アクアはカムイを見て、

「構わないわ、カムイ！私ごとやって！」

「嫌だ！私はこれ以上、失いたくない！」

「カムイの言う通りだ。ガロン王、貴殿の要求を呑もう。だから、アク
アを解放してくれ。」

リヨウマが剣を捨てる。

暗夜王ガロンはリヨウマを見て、

「ほう、懸命な判断だ。……わしの望みは、白夜王国の投降。暗夜王国による白夜の支配だ。それ以上は、認めぬ。」

そう言つて、暗夜王ガロンの魔術がリヨウマに直撃する。

「リヨウマ兄さん！」

カムイはリヨウマの前に立つ。

リヨウマは身を起こし、

「危ないぞ、カムイ！お前まで殺される！」

「……ここで退けば、リヨウマ兄さんは殺される。アクアさんも殺される。私はもう、失いたくない。もう、あんな想いは嫌だ。もう死なせたくなんだ……もう、大切な人たちが死ぬところを見たくないんだ！」

「ククク、はははは！ならどうすると言うのだ？おとなしく刀を捨て、投降するか？それとも、わしに刃向かつて、仲間を見殺すか？」

「私は……私は力を望む。もう誰も、誰も死なせない力が！私が皆を守る力が！だから、応えてくれ……夜刀神!!」

カムイは暗夜王ガロンに向ける剣に叫ぶ。

後ろでリヨウマは拳を握りしめる。

「ああ、カムイ……俺も同じだ。俺にも力があれば、お前たちを助けてやれるのに！」

すると、リヨウマが捨てた雷神刀が光り出す。

その光は虹の賢者が風神弓にした時と同じ光。

その光が、夜刀神に吸い込まれる。

夜刀神は光を帯びて、カムイに力を与える。

カムイは暗夜王ガロンを見る。

「ふん、いまさら力を得た所で、もう遅い。お前は、わしに勝てぬ。」
「いいや、勝ってみせる。救ってみせる。私の力をすべて使つてでも！」

カムイの瞳が赤く光る。

竜の血が、彼女を覆う。

「はあああ！」

カムイは剣を振るう。

その衝撃波は、彼をアクアから離れさせる。

「なにつ?! 小癩な! いいだろう、お前たち全員、この暗夜の闇に散らせてくれるわ!!」

カムイと暗夜王ガロンは刃を抑え合う。

どちらも一歩も引かぬ、動かぬ力。

「ふははは! 後悔するがいい、この暗夜王ガロンに刃向かったことを! 身の程をしれえ!」

「後悔するのは、お前だ。闇に落ちた哀しき王よ!」

カムイは、さらに力を籠める。

竜石にヒビが入ろうと構わない。

ここで、暗夜王ガロンを打倒すために、力のすべてを注ぐ。

カムイの力が、暗夜王ガロンの力を押し始める。

カムイはさらに力を籠めていき、斧を薙ぎ払う。

そして、剣を彼に突き刺した。

それを引き抜き、彼を見る。

暗夜王ガロンは後ろに倒れ込む。

「これで終わりだ……お前の負けだ、暗夜王ガロン。この闘いは、白夜王国の勝利だ。」

だが、暗夜王ガロンは天井を見つめていた。

カムイも見上げると、そこには透魔王国の守護竜を祀った石板。

カムイは瞳を揺らし、ハツとして暗夜王ガロンを見る。

彼は闇に飲まれ、その姿は黒き竜と化す。

「……まさか、竜の姿になれたのか……」

「ククク、残念だったな、カムイよ。我は竜の血を濃く受け継ぎし者。我が血は、我が姿は竜と化す! さあ、恐怖に巻かれて、死ぬがよい!」

暗夜王ガロンは竜の姿で爪を振り上げる。

カムイは剣で受け止める。

だが、剣にヒビが入り始める。

そしてそれは砕け、カムイは吹き飛ばされた。

「カムイ!!」

「くっ……」

リヨウマが剣を構えて、カムイの前に立つ。
カムイは立ち上がり、

「夜刀神が……砕けた……!?」

「ふははは！何と脆い刀よ！それが、お前の想いの強さか、証か!?これが、夜刀神の使い手とは笑わせる！」

「くっ!!」

カムイは歯を食いしばる。

だが、リヨウマの隣にタクミも立ち、矢を向ける。

「大丈夫だ、カムイ！夜刀神がなくとも、俺の雷神刀がある！」

「僕の風神弓もある！」

「ふん！そんな玩具で、わしを倒せれると思うな!!」

暗夜王ガロンは再び爪を振り上げる。

二人はそれに吹き飛ばされる。

「リヨウマ兄さん！タクミ！」

「終わりだ、カムイ。お前の相手も、もう終わりだ。ここで全員、息の根を止めてやろう！」

彼はリヨウマとタクミだけでなく、この場の全員に攻撃を繰り広げる。

カムイは彼らの前に走り、

「やめろっ！ガロン王!!」

カムイは竜の姿となって、彼らの攻撃から守った。
すぐに人の姿となって、傷を抑える。

右腕や左足から血が流れ出る。

それでも、暗夜王ガロンを見据えて立つ。

「いやあああ！カムイ姉様！」

「カムイ！」

サクラやリヨウマ達の悲鳴が響く。

カムイは手を広げる。

「怪我がなくて良かった……」

「バカが！俺たちを庇って何という無茶を！そんな事したら、お前は!!」

「私は……大丈夫、絶対に護って……見せる。私はまだ……闘える……」

カムイは膝を着く。

「カムイ!!」

リヨウマの声が大きく響いた。

そして倒れ込んだ。

カムイは目を開く。

辺りは真つ暗だった。

『自分は死んだのか……彼らを守れず、約束も守れずに……透魔王国も救えずに……』

涙がこみ上げる。

それと同時に、眠気が自分を襲う。

瞳を閉じようとした時、

「朝ですよ、カムイ様。」

それはもう聞くことのできないフローラの声。

カムイは目を開き、横を見る。

周りは暗闇から、暗夜王国で過ごしたあの城の部屋。

そこにはフローラとリリスが居た。

カムイは瞳を揺らす。

「……フローラ……リリス……私は……」

「ふふ、カムイ様。本日は、朝の訓練の日ですね。乗馬の為の馬の準備もできておりますよ?」

リリスが微笑みながら言う。

カムイは戻ってしまったのか。

そう思っていた。

けど、何かが違う。

違和感を感じる。

眠気が自分を襲う。

フローラが優しくも厳しい表情で言う。

「いいのですか、カムイ様。ここで眠っても……いえ、それがあなたの選択なら、私は止めません。邪魔をするつもりもありません。」

「……フローラ……？」

ああ、そうだ。

いつも朝を起こしに来るのはフローラとフェリシア。
自分は朝が苦手だった。

だから二人は、そんな私に冷気を当てて起こす。

その後、支度をしているとジョーカーがやって来る。

時には、ギョんターもやって来る。

そして、庭に出るとリリスが笑顔で挨拶をしてくれるんだ……

なのに、今は違う。

いつもの朝とは違う。

「……ここは……私は……」

「お姉ちゃん！まだ寝てたの？」

反対側から、聞こえるもう一つの懐かしい声。

反対側を見ると、暗夜王女エリーゼと暗夜王子マークスが立っていた。
た。

「全く、相変わらずだな。あまり、家臣に迷惑をかけすぎるなよ。」

「あなた程じゃない……」

「ふ、確かにそうだな。それで、お前はどするのだ？」

「……私は……戻らなければならぬ。私は約束したのだから……」

「そうか……なら、強く念じるんだ。そうすれば、お前は戻る。

兄弟姉妹きょうていだいの、仲間の居る元へ。」

彼がそう言うと、空から声が響く。

「ぐははは！カムイは死んだ！もう諦めろ、お前たちの負けだ!!」

「諦めはしない！カムイは必ず戻ってくる！」

「そうよ、あの子はあなたなんかには負けはしない。あの子は立ち向かう
う勇気があるもの！」

暗夜王ガロンの笑う声、そして自分を信じて闘うリョウマやアクアの
声。

他の皆もまだ闘っていた。

自分を待つ声、自分を信じて闘う声。

「……まさか……まだ私を信じて闘っているのか……」

「そうだ。みんな、闘っている。お前が帰って来るのを、立ち上がるのを信じて闘っているのだ。」

暗夜王子マークスは力強い瞳でカムイを見つめる。
まだ聞こえる。

自分を信じる声が、信じて闘う声が……

カムイは起き上がる。

涙を拭い、声の聞こえる天井を見上げる。

「声を聴かせて、カムイ。もう一度、あなたの声を。」

「アクア……姉様……」

カムイは母アクアのペンダントを握りしめる。

「行くのですね、カムイ様。」

フローラがカムイの背を見つめる。

カムイは瞳を閉じ、

「ああ、行かなくてはいけない。ここで立ち止まる訳にはいかない。私にはまだ、やらねばならない事がある。あなた達を死なせてしまったのは、私の責任だ。だから、私を恨んでくれて構わない。」

「いいえ、私たちは恨んでいません。私たちは信じているのですよ、カムイ様。あなたには、立ち向かう勇氣がある。起き上がれる強さがある。どんなに冷たく辛い現実でも、突き進む心と意志が。私は信じています。あなたが平和な世界を作ってくださいることを。だからここで、見守っています。」

「カムイ様、私はいつでもカムイ様を想っています。忘れません、あなたと過ごした日々を。温かさを、優しさも。だから寂しい時は、私を思い出してください。私は、いつでもあなたの心の中にいます。」

「いつてらっしやい、カムイお姉ちゃん。本当の兄弟姉妹きょうだいじゃなかったけど、私はお姉ちゃんの事が大好きで、本当のお姉ちゃんだと思ってる。だから、お姉ちゃんの無事を祈ってる。お姉ちゃんが平和な世界を……みんなで生きてくれるのを。レオンお兄ちゃんとカミラお姉ちゃんをよろしくね。喧嘩しちやダメだからね。」

「カムイ、前を信じて進め。未来を信じて進むんだ。お前ならきつとできる。さあ、行ってこい。愛する私の妹、カムイよ……」

カムイは涙が込み上がる。

それを飲み込み、振り返る。

「私も大好きだった。だから、行ってきます！あなた達の想いを忘れません。絶対に、世界を平和にしてみせます！あなた達が、彼らが信じてくれる自分を、あなた達や彼らに貰った自分を、私は皆を信じて進み続ける！」

カムイは叫ぶ。

「だからお願いだ、夜刀神！もう一度、もう一度、私に力を貸してくれ！彼らを救う力を、彼らの信じる気持ちに応えられる力を！」

そして、カムイの手に光がこもる。

それは刀の形となりて、夜刀神の姿へと変わる。

カムイはそれを掲げる。

強く念じる。

自分を信じて闘う彼らの元へ。

暗夜王ガロンは足元にある夜刀神が光るのを見る。

「なんだ、この光は……！」

「それが……信じる力だ、暗夜王ガロン！」

カムイは立ち上がる。

自分の傷は、サクラが癒してくれた。

彼らに微笑み、

「ありがとう、信じてくれて。ありがとう、待っていてくれて。」

「カムイー！」

リヨウマ達から笑顔がこぼれる。

カムイは手を伸ばす。

暗夜王ガロンに砕かれた刀は形を取り戻し、再びカムイの手に戻る。

それを構え、

「私は、信じてくれた者の為に闘う。ここに、もう一度戻してくれた大切なモノたちの為に闘う。暗夜王ガロン、今のお前にはないこの力で、私はお前を討つ！みんなの想いと共に!!」

「ふん！死に損ないが！いまさら結果は結果は変わらぬ。再び粉々に

して、殺してくれるは！」

暗夜王ガロンは爪を突き立てる。

カムイはそれを受け止め、弾く。

「なに!?」

「折れたりほしくないさ。この刀はもう、私一人の想いの力じゃない！みんなの想いが一緒だ！」

「小癪な!!」

「私は選んだ道を信じして進む。それが、彼らの想いに応える私の意志だ！その為なら、何度だって立ち向かう！」

二人は互いに弾き、構えて向き直る。

「おのれええ!!ならば、絶望するまで何度も、何度もやるのみだ!刀が折れるのが先か、お前の心が折れるのが先か、見ものだ!カムイ!!」
「さあ、行くぞ!ガロン王!!私は、何度だってやり遂げる……その為に、私は進むんだ!約束の為に!想いの為に!」

カムイは剣を振るう。

だが、暗夜王ガロンの防御は強い。

そして、攻撃も強い。

リヨウマ達のサポートがあるとはいえ、竜の力は強い。

そこに、歌声が響く。

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

「アクアさん!」

カムイはアクアを見る。

彼女は胸に手を当て、

「大丈夫よ、カムイ。だから歌わせて……いいえ、ダメと言われても私は歌うわ。だって、これは私の役目だもの。それに私も、想いに、約束の為に闘わせて。」

「……わかりました。アクアさん、居なくならないでくださいね……」
「ええ。約束を違える気はないわ。あなたが信じてくれるのなら……私だって何度だって戦う。そして誓うわ。私は絶対に消えないと。」

「はい、アクアさん……だから、お願いします。力を貸してください。」
カムイはジッとアクアを見つめた。

その瞳は力強く、迷いはない。

アクアは小さく微笑み、

「……初めてね。」

「え？」

「あなたが私に、歌ってつて言うの……初めてね。少しだけ嬉しいわ。」

「……本当は歌って欲しくない。呪いで苦しむあなたを見たくないから。けれど、あなたは本気だ。なら、私もそれに応えたい……そう思ったからです。」

「そう……カムイ、共に戦い抜きましょう。」

「はいー！」

カムイは暗夜王ガロンに向き直る。

リヨウマ達が足止めしてくれていた。

自分も再びその中に加わる。

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

アクアの歌声も、再び響き渡る。

暗夜王ガロンは苦しみ出しながら、

「ぐっ……い……あの小娘、歌の力を……!!これでは、思うように動けぬ。だが、このような悪あがきをしたところで、お前たちがわしに敵うはずがない……ハイドラ神よ……もつとわしに力を与えるのだ!!」

それを聞いたカムイは眉を寄せる。

そして歯を食いしばり、剣を振るう。

歌と剣、竜の咆哮……色々な想いと戦闘音が鳴り響く。

それぞれの想いを抱き、振るう闘い。

どれくらい闘っただろうか。

リヨウマ達の切り開いた。

その場を突っ走り、カムイの剣が暗夜王ガロンの固い竜の鱗を打ち砕いた。

そして、夜刀神の光が貫いた。

暗夜王ガロンは倒れ込む。

「バ、バカな……!!わしの、体が!わしの……野望……が!認めん、認

めんど……！う、ぐうっ……ぎやあああ!!」

暗夜王ガロンは紫色の炎を上げ、その身は人へと変わる。

彼は身を起こし、

「……カムイ……やはりもつと早く、殺しておくべきだったな……あの日、お前を暗夜へと連れ去った、あの時に……」

「……なぜ、そうしなかったのだ。暗夜王ガロン。」

「知れたこと……策のためだ。お前を利用し、女王ミコトを殺す策……だが、今は安らいだ心地だ。こんな気持ちになるのはいつ以来か……もしかしたら……わしは望んでいたのかもしれない。この結末を……ずっと。身が減び、意志を無くした……あの時より……」

カムイは暗夜王ガロンの前に膝を着き、

「暗夜王ガロン……いや、ガロン王。あなたは昔と変わらぬ良き王であつた。その意志は、想いはあんたの子に受け続けられていた。」

「わしの……子ら……」

「ああ。マークス王子は迷わず立ち向かう覚悟と優しさ。カミラ王女は慈しむ深い愛情。レオン王子は強い正義感。エリーゼ王女は諦めない気持ちと暗闇を照らす光り。どれも、若い頃のあなたそのものと私は思う。」

そしてカムイは彼に頭を下げ、彼だけに聞こえる声で、

「もう言えぬ我が最初の故郷。そして我が父の過ち、我が父の闇に巻き込んでしまったこと……その娘として深くお詫びいたします、ガロン王。」

「……ふ。そうか……そうだったのだな……いや、礼を言うぞ……竜の子よ。」

そして暗夜王ガロンは泡となって消えた。

カムイは拳を握りしめ、それを解いて立ち上がる。

リヨウマ達はすでに、暗夜王ガロンの死を国に、暗夜王子レオンと共に言う。

暗夜王女カミラは妹と兄の亡骸を見て、悲しみに暮れる。

それは彼らの帰りを待っていた家臣たちも……

カムイが振り返ると、アクアが立っていた。

彼女はカムイから距離を取っていた。

「……終わったのね。これで。これで……私たち……平和な時代を……」

だが、アクアの表情はとても苦しそうだ。

額に大量の汗も出ている。

何より、杖を支えにして立っているのがやつとのようなのだ。

「……アクアさん？」

カムイがそう言うと、アクアは倒れ込んだ。

ハツとして、カムイは駆け寄る。

「アクアさん！アクアさん、しっかり!!」

そして気付く。

彼女の体が透け初めているのを。

カムイは彼女を抱き上げ、

「ア、アクアさん……体が……消えかかって……まさか……」

「ごめんなさい、カムイ……」

アクアは悲しそうな瞳でカムイを見る。

そしてカムイの頬に手を当て、

「消えたりしないって……言ったのに。あの約束……守れそうにないわ……」

「そんな！嫌です!!死なないで、消えないでください！私も、あなたに約束したんです！あなたの夢と一緒に叶えると！あなたを絶対に、消えさせないと！守ると!!なのに……ああ、そうだ！私が！私のせいで!!」

「いいえ、カムイ……あなたは何も悪くないわ。あの時あなたが……私を信じてくれたこと……とつても嬉しかったんだもの。ねえ、カムイ。最後に一つだけ……お願いを聞いてくれる？」

「……え？」

「これからは……どうか幸せでいて。」

彼女はとびっきりの笑顔でそう言った。

カムイは瞳を揺らす。

アクアは続ける。

「戦争は終わったわ。これから、みんなが幸せに暮らせる……平和な世界が訪れる……それこそ、“私たち”が望んでいた世界……この命をかけて……成し遂げた世界よ。だから……だから、ね。カムイ。」

その体はすでに泡となりつつあった。
アカアはジッとカムイを見る。

瞳を揺らし、涙を溜める。

「あなたはどうか……笑顔でいて……私の分まで……幸せになって……私の大切な——」

そして体は泡となつて、空に弾けていった。

カムイは涙を溜め、それに手を伸ばす。

「アカアさん……アカア姉様——!!」

カムイは涙を流す。

そして叫んだ。

「なんでだ！なんで……せつかく会えたのに！なのに!!」

カムイは床で俯き、拳を握りしめる。

「お母さん……」

小さく呟き、ペンダントを握りしめた。

だが、顔を上げる。

「……わかったよ、アカアさん。あなたの願いは……私が……いいえ、みんなで叶えてみせる。あなたが……あなたが見るはずだった世界を……あなたが幸せだと思える世界を……。あなたや私が犠牲にしてしまった彼らに誇れるように……必ずこの世界を……いつかまた、あなたの……歌が聞くために……」

カムイは立ち上がり、涙を拭う。

カムイはリヨウマ達の元に行く。

これからの事を話しあうために。

誰もが願う平和の為に。

——白夜王国。

サクラが舞い散る普及の進んだ城下町。

白夜城からもそれが見える。

カムイは視線を前に戻す。

白夜王国、シラサキ白夜城内。

王の間、王の玉座の前でリヨウマが膝を着いていた。

白夜軍師ユキムラが彼の前で、

「では、これより——前白夜王国女王ミコト様の後を継ぎ、白夜王国第一王子リヨウマ様が、新たなる白夜王としてこの国を治められることとなります。即位の証として……この冠をお受け取りください。」

「……ああ、確かに。新しき王として立派に任を果たし、この国を豊かにすることを……ここに誓おう。」

冠を受け、立ち上がったリヨウマは振り返って言う。

それを見守っていた者達は盛大な拍手を送る。

カムイはそこに、かつてのスメラギ王を、初めて会った白夜王リヨウマを見る。

そして、彼の周りにはタクミ達がいた。

彼らは互いに讃え合っていた。

喜びあっていた。

そこには、暗夜王女カミラと暗夜王子レオンもいた。

そして王となったりヨウマが城下に集まっていた民の元へ行く。

彼は叫ぶ。

「皆、今日は俺のために集まってくれて、ありがとう。先の戦争では前王女ミコトを失い、民たちにも犠牲を出し、本当に辛い思いをさせてしまった……。しかし、あの痛ましい悲劇は去った。ここにいる英雄たちが力を合わせて、平和な世界を取り戻したんだ。暗夜王国とも和解し、手を取り合って生きること約束した。ここにいる者の中にはまだ……そのことが受け入れられない者もいるかもしれない。しかし、光あれば闇があるように、俺たち両国は一つなんだ。俺たちには、お互いに無いものがある。そして、それを分け合うことができる。陽の光を分け合い、実りを分け合い、その喜びも苦しみも……全てを分かち合えるような関係を、暗夜王国との間に築いていきたい。ここにいる皆となら、それができると思っている。……生きていこう。皆で。前を見て。俺たちの選んだ道を信じて……平和な未来へと歩ん

でいこう。新しい時代を、ここにいる皆で創っていこう！」

その言葉を聞き、民たちは拍手を送る。

彼らは掴んだ。

平和な世界を築く第一歩を。

白夜王国と暗夜王国が手を取り合える世界を。

カムイはペンダントを取り出す。

白夜王国は、これで大丈夫だろう。

暗夜王国も見届けた後、自分は透魔王国に向かおう。

そう思っていた。

カムイは涙を溜める。

リヨウマの戴冠式は終わった。

カムイは席を外そうとした時、

「カムイ。」

リヨウマに呼び止められ、立ち止まる。

カムイは振り返る。

「……リヨウマ兄さん。」

「カムイ、見ていてくれたか？」

「はい。とても凛々しかったです。まるで、スメラギ父上様のようでした。」

「……そうか。それは光栄だ。」

リヨウマはカムイの頭を撫で、嬉しそうな安心したような顔で、

「これでやっと……母上の後を継げる。亡き父の想いにも、応えられる。カムイ、まだまだ頼りない王だが、よろしく頼む。」

「ええ、リヨウマ王。ですが、あなたは頼りなくなんかないですよ。とても立派な、王様です。」

「……さて、カムイ。そろそろ教えてくれないか。お前はなにがしたいんだ。なにをしようとしているんだ？」

「……すまない、リヨウマ兄さん。それは王の命でも、兄の命でも
答えられない。
応えられない。」

カムイは苦笑する。

カムイはジツとリヨウマを見て、

「これが終わったら、今度は暗夜王国の戴冠式があります。私は、彼らと話してきますね。」

「……ああ。」

カムイは自分の頭を撫でるリヨウマの手を取り、
「リヨウマ兄さん、ありがとうございました。私や母を受け入れたこと……アクアさんを受け入れてくれたこと……本当にありがとうございました。」

カムイは涙を流し、抱き付いた。

リヨウマはカムイを抱きしめ、

「お前やアクアが、俺の妹になってくれて嬉しかった。ミコト母上が、俺のもう一人の母になってくれたことは感謝している。父の代役を引き受け、女王になってくれた。たくさんの愛情を、俺も、民も受けた。感謝しているのはこっちの方だ。さ、カムイ。レオン王子達のところに行くのだろう。」

「はい。」

カムイは涙を拭って歩いて行った。

カムイは二人と話す。

白夜王国の王女と、暗夜王国の王女王子として。

彼らの兄妹きょうだいを奪ってしまった自分。

けれど、彼らはそれでも変わらず接してくれた。

それでも、彼らの心の中には未だに残っている。

カムイが、白夜王国が悪くないと解つていても、恨んでしまう心。

自分はそれを受け止める。

それは当然の事なのだから。

その数日後、暗夜王国で戴冠式が行われた。

王位をついだのは暗夜王子レオン。

闇の空に輝く美しい月を前に、彼の王としての姿を見る。

これでやっと本当に白夜王国も、暗夜王国も平和になる。

カムイは両国の祭りを見て、そう思う。

そう思ったのだ。

白夜王国も、暗夜王国も安定してきた頃に、事件は起きた。
この日は、両国の会談の日。

そして、カムイが透魔王国に向かおうとしていた日だった。
この日、世界は崩壊を始めた。

白夜王リヨウマと暗夜王レオンの前で、きょうだいを殺されたのだ。

黒い騎士の手によって。

カムイは剣を振るう。

リヨウマも、暗夜王レオンも重傷だ。

カムイは眉を寄せて、怒りを露わにする。

そして、彼は言うのだ。

あの時と同じ、冷たい笑みを浮かべて、

「我が王は望む。世界の破滅を……」

「アベル!!」

「あなたは、何を望みますか……カムイ様。」

カムイは剣を弾かれ、斬られた。

そして、リヨウマと暗夜王レオンの前に蹴られた。

二人は傷を抑えて、カムイを見る。

カムイは黒騎士アベルを睨み、

「私は……私は破滅を防ぐ！何があっても！」

カムイは傷を抑えて立ち上がる。

涙を流し、

「託された願いを……交わした約束を……」

足元に魔法陣が浮かびあがる。

「……果たし、守るために!!私が犠牲した人の想いを贄にして!!」

カムイは激しい光に目を瞑る。

手に入れた平和が崩壊する。

あともう少し、あともう少し自分が早くあの国に行っていれば……

いや、自分が白夜ではなく暗夜を選んでいたら……結果は変わって

いたのだろうか。

それとも、変わらなかったのだろうか……

第十九話 暗夜王国

黒き王は想う。

愛しき妻と子らの幸せ。

無論、国や民への幸せも願っている。

だが、それは王としてだ。

夫として、父親として、日々を過ごしたかった。

それこそ、我が友であり、同じ王としていた白き王のように。

だが、自分は彼の国とは違い、貧国だった。

暗闇に立つ我が国はあまりにも、生き物が育つには厳しい大地。

けれど、国民達は負けずに暮らしていた。

それは自分にとっては励みだった。

少年時代、自分がまだ王子だった頃のことだ。

今はもう、幻の国とされたあの国。

あそこで自分は、同じく王子だった頃の白き王と語り合った。

『ともに良き王国を作ろう。民のために、守りたいモノのために』。

だが、それはもはや無理な話となってしまった。

自分の妻が死に、悲しみに暮れていた頃だ。

子供達が王位争いを始めてしまった。

他の妾達も次の王妃の座を奪い合う争いを始めてしまった。

自分は哀しい。

とても哀しい。

だから自分は、次期王は第一王子であるマークスと決めた。

妻はもう取らないそう決めた。

けれど、自分は出会ってしまった。

湖で悲しみを癒していた時に。

あの美しい声を持つ女性に……

涙を流しながら、子供と抱き合って泣いていた。

その姿に自分は心を打たれた。

聞けば、国を追われたと。

自分は彼女を妻として、彼女の子を自分の子として城に向かい入れ

た。

それは、後ろ盾のない彼女を守るためだった。子供が居れば、彼女は非難されることはない。そう思ったのだ。

けれど、このせいで彼らには辛い思いをさせてしまった。

ある日、何かを決意した彼女は自分と出会った湖へとやって来た。

彼女は子供を抱き寄せ、涙を流す。

そして自分を見ると、自国の事を話し始めた。

それは少年時代に数回言ったことのある幻の国の話。

彼女は全てを話し終わると、姿が透明へと変わっていく。

そして深く頭を下げて、感謝と詫びを自分に言ったのだ。

彼女の子は泣いていた。

深く深く泣いていた。

自分も哀しい。

けれど、彼女の強い意志は尊敬した。

彼女は泡となって消えていった。

この日からだ。

不幸が立て続けに起きたのは。

王位争いが終わった子らが、再び王位を奪い合う。

多くの子らが死んだ。

妾たちも、病気や自殺、暗殺と次々に死んで逝った。

国にも、災厄が降り注ぐ。

民の苦しみが耳に届く。

哀しい、とても悲しい。

救いの手立てが見つからぬ自分がとても悔しい。

残り少ない、この病にかかった体の自分が苛立たしい。

何かできないか、何とかできないか。

ずっと想い病んでいた。

そんな時だった。

白き王からの手紙を見たのは。

彼はある巫女に会ったと言う。

そして語り合った国の話を持ち出してきた。
その国の名だけを伏せて。

きつとこの巫女も、あの国の住人なのだろうと思う。

自分は白き王に会って、話をしようと思った。

会談場所として、シュヴァリエ公国をしていた。

白き王はそれに応じてくれた。

ある日の夜の事だ。

自分は、玉座の天井に飾ってある幻の国の神を祀る石板を見た。

その瞳が光り、自分を見下ろす。

酷く恐ろしかった。

この日からの自分はおかしくなった。

大切な子らの、妾達の死を悲しまなくなってきた。

否、心が冷めていた。

自分は民が、国が、堕ちていくのを冷めた目で見る。

そんな自分が酷く嫌だった。

夜は悪夢にうなされた。

心が疲れ果てていく。

これが死期と言うものだろうか、と自分は想った。

けれど違った。

これは闇だ。

己の心にある闇だと気付いた時には遅かった。

自分は闇に負けていた。

自分の体はもう、己の意志では動きはしない。

この心も時期に闇の中に消えていくだろう。

白き王は王子と王女を連れてシュヴァリエ公国に来た。

そう、我が神が今日白き王と共に来る王女を捕らえるように言っ

た。

白き王を裏切り、彼の命を奪って手に入れた白き王の娘。

自分は闇の中から彼の娘を見た。

強い、とても強い瞳をした子供だった。

自分を悲しそうに、恨むように見ている。

赤い瞳が、ジッと見る。

この闇の中にも届く、希望を灯した瞳。

ああ、もつと早くにこの瞳を見たかった。

そうすれば自分は……

——カムイは目を覚ます。

そこは暗夜王国に居た頃の自分の部屋の天井。

カムイは左に気配を感じた。

そこに視線を向けると、暗夜王子マークスが自分の手を握って眠っていた。

カムイは瞳を揺らす。

その彼の後ろにある鏡には、北の城砦に押し込められた頃の少し幼い自分の顔。

カムイは想う。

何故、ここなのか。

何故、よりにもよってここなのか、と自問自答していた。

と、暗夜王子マークスは目を覚ます。

「ん？起きたか、カムイ。」

「……………」

カムイは彼の握っている手を見つめた。

暗夜王子マークスはその手を強く握りしめ、

「調子はどうだ？さつきまで、熱でうなされていたんだ。」

「……………大丈夫です。」

「そうか。それならいいのだ。つと、すまないな。痛かったか？」

暗夜王子マークスは強く握っていた手を離す。

カムイは首を振る。

そして彼の離れた手を握り、

「ずっと傍に居てくれたんですね……マークス兄さん。」

「カムイ……お前、今………」

カムイはそのまま、眠ってしまった。

意識を失う前、マークスが泣いているのが解った。

それから、カムイは彼らを兄弟姉妹と呼ぶようになった。

それは、自分が逃げていた道を受け入れる為、血の繋がりはなくとも兄弟姉妹だと言ってくれた彼らに応える為のケジメだと。

いや、そう思う事で自分がしてしまった事をやり直せるのではないかと。

白夜の兄弟姉妹と同じことなのだ。

自分の居場所を、彼らと共にあの時とは違う選択で、あの平和な世界を……

それから数年が経ち、カムイは暗夜王ガロンの前に立った。

カムイは彼を見て、驚いた。

酷くなっている。

前の時には、少しだけ感じたガロン王の気配もない。

自分がこうして戻るたびに、なにかはズレていく。

まるで歯車がズレるように、少しずつ、少しずつその溝は大きくなる。

カムイはあの魔剣を手にする。

そして、白夜進軍を言われた。

あの時と同じように、自分はあのメンバーを連れて行く。

カムイは無限溪谷で、

「すみません、みなさん。少しここで待っていてください。」

「カムイ様?」

「すぐに戻ります。」

カムイは彼らの側を離れ、魔剣ガングレリを腰から抜く。

そして、それを谷底へと捨てる。

馬に付けていた予備の剣を腰に付けて、彼らの元に戻る。

白夜王国に向かって、再び進軍する。

だが、今回は少し違った。

途中、白夜兵と鉢合わせになり、戦闘となった。

投降を考えたが、後ろから暗夜兵ガンズ率いる兵が突っ込んできた。

彼らは、自分達を密偵と称し、討ちに来たのだ。

カムイは剣を抜き、双方を相手にする。仲間とはぐれ、カムイはリリスと共に谷を越えようとしていた。だが、暗夜兵ガンズ率いる兵達に囲まれていた。そこにギョウターが馬に乗って駆けて来た。暗夜兵達を薙ぎ払い、カムイを助けた。だが、暗夜兵ガンズの攻撃からカムイを庇って谷底に落ちていった。

またしても、伸ばす手は届かない。

そして、カムイとリリスも谷底に落とされる。

リリスが小竜の姿となって、カムイを引き上げた。

だが、カムイとリリスを雷が襲う。

カムイはリリスを抱えて、宙を飛ぶ。

いや、吹き飛ぶ。

二人は森へと落ちていった。

カムイが目覚めると、傍には白夜の兄弟姉妹きょうだいと母ミコトがいた。起き上がると、抱き付かれた。

そして、あの湖で再びアクアと出会ったのだ。

涙を堪えて、彼女と話をする。

カムイは城の窓から、遠くを見ていた。

そして、この白夜王国が前と違うのは、カムイを庇って白夜王スメラギが死んだ。

それも、リヨウマは目の前で父を失い、カムイ妹を奪われた。

『前の時は、スメラギ王はリヨウマ兄さんを庇って亡くなった。けれど、今回は私を庇って死んだと。暗夜王ガロンがあそこに来る事を知っていて、なぜ過去の私はしなかった？いや、もしかしたらこの世界の過去の私は、知らなかった。つまり、あの時の私の状態だったとしたら……私がこうやって過去に来るたびに、自分すらも殺しているのか。そして、ここにもズレが生じた。それが、スメラギ王の死に方だ。リヨウマ兄さんの話によれば、噴水の水が襲い掛かって来たと言っていた。その時に、リヨウマ兄さんは自分を庇って怪我をした。そこに暗夜王ガロンが兵を連れて襲って来た。『カムイ』の誘拐が目

的だと、リヨウマ兄さんに言っていたそうだが……」

カムイは眉を寄せる。

『……スメラギ父上様、私は護つてみせます。白夜を……あなたの息子が築いてくれたあの平和な世界を。だが、どうやって暗夜王国に行こうか。密偵と評して、討伐に来たんだ。今戻ったところで、警戒されているのは事実。だが、暗夜王を討たねば、平和は来ない。それに……また白夜と暗夜が争いを始めるのは嫌だな……』

と、カムイの元に、母ミコトがやって来た。

彼女は嬉しそうにカムイを見ると、

「カムイ、どうかしたんですか？怖い顔をしてましたが？」

「……そんな風でしたか？すみません。」

「謝る必要はありませんよ。それより、カムイ。外に出ませんか？」

「外……ですか？」

「ええ。」

母ミコトは微笑んで、手を差し伸べる。

カムイはその手を取り、リリスを抱えて外に出た。

桜並木を歩きながら、進んで行く。

だが、人が多い。

そして、その近くにはリヨウマ達も居る。

そして母ミコトを見る。

「ミコトお母様、これは一体……」

「ふふ、あなたを驚かせようと思って。帰って来たあなたの歓迎会です。」

「……!!待って下さい、ミコトお母様!!私は——」

カムイは見た。

広場の群衆の中に、フードを被ったアイツが居た。

その手に持っているのは、魔剣ガングレリ。

そのフードの者は、カムイに向かって剣を振り下ろす。

カムイが反応するよりも早く、ミコトがカムイを覆いかぶさるように守る。

そして魔剣ガングレリは爆発する。

さらにカムイの感情に反応した竜の力の波動が、白夜の民を国を破壊した。

カムイは辺りを見て、顔を覆って涙を流した。

そして、またこの期に乗じて暗夜軍は攻めて来た。

自分の手には、再び『夜刀神』が握られている。

それを握りしめる。

もっと早くに、この剣を手にしていればと……

マークスはカムイを見て言う。

「カムイ、無事のようなだ。良かった。さあ、戻ってこい。」

「……私には密偵の疑いがあつたはずです。だから、暗夜軍は私の部隊を襲った。」

「それは間違いだったのだ。父上も、お前を待っている。」

そう言つて、馬の上から手を伸ばす。

カムイは手を伸ばすマークスを見て、

「その間違いで、私はお母様を失つたのですか！故郷を破壊したのですか!!?マークス兄さん！」

「カムイ……」

マークスは差し出していた手を下ろした。

瞬時に剣を抜き、襲い掛かつてきたリヨウマの剣を防ぐ。

「俺は白夜王国第一王子、リヨウマ!!俺の妹から離れろ!!」

「私は暗夜王国第一王子、マークス!カムイは我々の兄弟姉妹だ!!」

「なにを!我が妹を攫つておいて、兄弟姉妹と名乗るのか!」

二人は刃を交え続ける。

カムイは奥の方で、泣きそうな顔でこちらを見ているエリーゼを見た。

このままでは、また白夜と暗夜は戦争になる。

そしてカムイは思っていた。

白夜王国の玉座は、透魔王国からの贈り物。

あれには、透魔王国の加護がある。

それを使えば、暗夜王ガロンが偽物である事を教えられるかもしれない。

カムイは剣を交えているリヨウマとマークスの間に割って入る。
マークスを背に、カムイは両手を広げる。

「カムイ！そこを退くんだ！」

「いいえ、リヨウマ兄さん。退きません。お願いです、兄さん……兵を互いに退いてください。白夜と暗夜が互いに争う必要はないんです。」

カムイは手を降ろし、

「それに、私には暗夜王国でやり残した事があります。だから私は、このまま暗夜王国へと……帰ります。」

カムイはジツとリヨウマを見つめる。

きつと彼らは自分を恨むかもしれない。

憎まれる覚悟を持って、カムイは彼らに立ちはだかるのだ。

案の定、リヨウマは眉を寄せ、

「カムイ!!まさか……カムイ、お前だつて見たはずだ!暗夜王国のやり方を、卑劣さを!何より、お前の母親を殺した憎き仇だぞ!!」

「……確かに、ミコトお母様の仇です。けれど、それは暗夜王国の……暗夜王ガロンを名乗っている者です。私は、暗夜の兄弟姉妹の為に、暗夜王国に戻るんです。それに、私もまた……彼らにとつても仇のような存在なんですよ、兄さん……もう、みんな覚えていないかもしれないけれど……」

カムイは泣きそうな瞳で言った。

けれど力強い瞳で、

「それでも、彼らは同じなんです。私を受け入れてくれた、血の繋がりなど関係なしに兄弟姉妹と呼んでくれた……だからこそ、私は救いたい……今の暗夜を……」

「なんてことを言うんだ……!!お前は白夜王国の王女なんだぞ!」

「……はい、けれど……違う。それは、リヨウマ兄さんが一番わかっているはずですよ!」

「カムイ!お前は、暗夜王国に騙されているんだ!!」

「私はその嘘を背負って、暗夜王国を変える!!この『夜刀神』にかけて!」

カムイは叫ぶ。

リヨウマは剣を強く握りしめる。

そして、その剣をカムイに振り下ろす。

マークスがカムイをすくい上げ、

「よくぞ、言ってくれた……カムイ。確かに、私たちはお前にとっては恨まれる事をしただろ。だが、お前が暗夜王国に来たその日から、私にとってはもう一人の妹だった。だから、我らの手を取ってくれたこと、嬉しく思う。」

マークスはカムイを馬に乗せて言う。

それを聞いたリヨウマは、

「……カムイ、やはりお前は騙されている。暗夜王ガロンは、お前を殺そうとした。そして、お前を誑かそうとしているのだ。俺の妹を、返せ!!」

「何を言う！カムイは自らの意志を持って、我らの手を取ったのだ！」
「くそっ、お前たちのやり方は知っているんだ！いつもいつも、卑怯な手を使い白夜の民を苦しめる。そんな所に、カムイを渡せるか！カムイは、白夜の人間!!カムイがつくべきはこちらなのだ！それを再び暗夜王国に奪われるなど、あってはならないのだ!!俺は何と言って、母上に詫びればいい!!」

リヨウマの瞳は、もはや容赦のない本気の眼だった。

そして、マークスに剣を振るう。

マークスはカムイを抱きしめ、その剣を防ぐ。

「……下がれ、白夜の王子。これ以上は許さぬぞ。」

「諦めぬものか！俺が、カムイの目を覚まさせる!!」

そう言って、剣を交じり合わせる。

このままでは、全面戦争になりかねない。

自分達が退けば、暗夜軍は逃げたと評される。

例えば、自分が暗夜王ガロンの手違いで、敵に回されたと思われても、ここで自分が暗夜王国側だと思わせるには何かをしなければならぬ。

だが、それでは犠牲が出る。

そんな事はさせないし、させたくない。

両国は手と手を取り合えるのだから。

カムイは辺りを視線で見渡す。

川沿いに、龍脈を見つける。

カムイは、そこに集中する。

川が溢れだし、両国の兵を隔てるように流れ込む。

「くっ!!全軍撤退!!」「何?!全軍撤退せよ!!」

リヨウマとマークスが叫ぶ。

そして、両軍の兵は完全に隔てられた。

マークスはそのままカムイを乗せたまま、暗夜王国へと戻った。

道中、離れ離れになっていたジョーカーとフェリシアと合流した。

カムイはマークスの馬の上で、ずっと塞ぎ込んでいた。

あの時の白夜兄弟きょうだい姉妹達の想い。

自分と違い、何も知らない彼らからすれば、自分は相当な裏切りをしている。

アクアが目で語っていた。

本当に行くのか、と……

けれど、自分はやり遂げねばならない。

それに、アクアはきつとあちら側に居た方がいいのだ。

今度こそ、彼女を消させない為にも。

だからきつと、リヨウマ達は分かってくれる。

自分のしたい気持ちに気付いてくれると信じて……

カムイ達は暗夜城へと帰って来た。

カムイは暗夜王ガロンを見る。

暗夜王国を出た時よりも、酷い状態だ。

彼の瞳にはもう、ガロン王は存在しない。

あれはもう、傀儡だ。

カムイは拳を握りしめる。

「父上、ただいま戻りました。」

マークスが頭を下げる。

カムイ達も一度頭を下げる。

そして顔を上げると、

「……マークスか。白夜王国との事は聞いている。随分と、手をおつたようだな。」

「はい。ですが、兵に負傷者はいませんが、死者は出ておりません。そして、行方不明であつたカムイが戻ってきました。」

「カムイか……」

暗夜王ガロンは冷たい目でカムイを見る。

カムイは無言で暗夜王ガロンを見る。

「よくぞ、戻った。密偵の件、手違いだったのだ。これからは、暗夜の王族として精進せよ。」

「……ええ、暗夜王ガロン。……それより、一つお聞きしたい事があります。」

「なんだ。」

「……あなたに、子を想う気持ちは残っていますか。」

「なんだと？」

その質問に、マークス達は眉を寄せて冷や汗を掻き始める。

カムイはジツと暗夜王ガロンを見る。

暗夜王ガロンは目を細め、

「白夜でなにやら仕込まれたか？異形神ハイドラは言うていた。そのような戯言、次口にすればお前とて殺すことになるぞ。今度こそ、確実に。」

「……そうですか、解りました。今の戯言はお忘れください、暗夜王ガロン。」

カムイはマークス達に向ける笑顔とは別の笑顔を向けた。

それが何を意味するのか、マークスとレオンだけが解った気がしたのだった。

カムイはマークス達と共に、その場を後にしようとした時、

「カムイ。」

「何ですか。」

「お前に一つ命を与える。お前一人で、氷の部族の反乱を平定せよ。」

それが、神の望みだ。」

それを聞いたマークスが眉を寄せ、

「お待ち下さい、父上！いくら何でも、一人など……」

「黙れ、マークス。反論は認めん！これは神のご意向なのだ。」

暗夜王ガロンは冷たく見下ろしていた。

カムイは頭を下げ、

「……わかりました。その任には、一人で行きましょう。」

カムイは平静を寄り添った後、部屋を出るときには拳を握りしめていた。

カムイ達が居なくなつた後、ガロン王は天井に祀られている石版を見る。

そこには、ある国の神を祀つたもの。

「くくく！カムイは行く。神の望み通りに！くははは！お前は生かされる。その心が壊れ、死なせてくれと泣き叫んだとしても、殺しはせぬ。生かし続けてやるわ……。人に絶望しろ！そして苦しむがよい！それを何度も繰り返し、堕ちるが良い！我が神はそれを望むのだ！くはははは!!」

両手を広げて、暗夜王ガロンの笑い声が部屋に響き渡る。

それを、屋への外で聞いていたのはマークスだった。

拳を握りしめ、

「父上……」

そして、歩いて行った。

それをまた見ていたのは、カムイだった。

視線を落として、彼とは別方向の方へと歩いて行く。

カムイは一人、いや、一人と一匹と共に深い森を歩いていた。

『……天蓋の森か。氷の部族……あそこにまた行くとは……』

カムイは腕に抱えているリリスを抱きしめる。

リリスもまた、喋れない自分の想いを伝えるかのように、頬をずる。

カムイはその想いに少し微笑み、暗い森を歩いて行く。

どれくらい歩いたか、カムイは立ち止まる。

リリースを離し、剣を抜く。

森の茂みから、ノスフェラトウが現れる。

ノスフェラトウは唸りを上げて、カムイに突っ込んでくる。

カムイは剣でそれを防ぎ、距離を置く。

「くっ……ここに、ノスフェラトウがいるとは!」

カムイは剣を構えなおし、ノスフェラトウと攻防戦を繰り返す。

だが、力と言えばノスフェラトウの方があつ。

援護がない以上、一撃でもくれば体勢を立て直す間に殺られる。

カムイは竜石を掴む。

「仕方ない、ここは竜になつて——」

「ぐぎゃああ——!!」

後ろにも、ノスフェラトウが湧き出てきた。

カムイは後ろも見て、

「くそっ!後ろからもか!!これでは、変身が間に合わん!」

前のノスフェラトウが襲い掛かる。

カムイは竜石をしまい、カムイが眉を寄せて歯を食いしばる。

と、短剣が飛んできた。

「せやあつ!!」「えーい!!」

「ギャアアアアツ!!」

「……?!」

カムイは対峙していたノスフェラトウと、後ろのノスフェラトウが倒れるのを見る。

そして、短剣が飛んできた方を見ると、

「良かったです、ご無事で。間に合ったようで、一安心ですね。」

「ホントですよ、カムイ様!私、心配で心配で!!」

と、ジョーカーとフェリシアが居た。

そしてフェリシアは泣きながら、抱き付いた。

「ジョーカー、フェリシア……何でここに?」

ジョーカーもカムイの元に来ると、短剣を構える。

それは新たなノスフェラトウが現れたからだ。

「申し訳ございません。心配で追いかけてきてしまいました。この森

は、死霊が棲むと言われているのですよ？そんな所に、カムイ様をお一人で行かせる訳には参りません。」

「そうですよ、カムイ様！ホントにホントに、心配したんですからね！」

と、さらにぎゅーと抱きしめるフェリシア。

ジョーカーはノスフェラトウを裁きながら、

「フェリシアー！いつまでもくっついていないで、お前もやりやがれ！」
「は、はい！」

フェリシアはビクツとして、短剣を構えて闘い始める。

カムイも剣を構えなおし、共に戦う。

「ですが、どうやってここに？城には監視がいた筈です。」

「はい。ガロン王様の目を盗むのが、なかなか大変でした。」

「そうなんですよ、カムイ様！私頑張つちやいました!!」

と、フェリシアは嬉しそうに言う。

ジョーカーは眉を寄せ、

「ですが、お話によればカムイ様お一人でやらねばならないこと……
申し訳ございません。カムイ様にご迷惑を。」

「気にしなくていい。あの命令はどっちにしろ何とかするつもりだった。暗夜王ガロンの信じる神を、私は信じていない。ただそれだけだ。」

二人は少し驚いたようにカムイを見た。

カムイはフェリシアを見て、

「だが、フェリシア。私は、お前の村に乗り込むんだぞ……」

「はい、存じておりますとも。だから来たんです。私が皆を止めます。カムイ様が動かなくても良いように。」

「……感謝するよ、二人とも。私も、ここを一人では裁き切れない。それに……フェリシアとフローラの大切な故郷の者たちとは争いたくないからな……もしかしたら、行方不明のフローラもいるかもしれない。」

「カムイ様……そうですね、私頑張ります！」

「もちろん、カムイ様を死なせるようなことはしません！」

三人は襲い掛かるノスフェラトウを倒していく。

だが、倒しても倒しても、ノスフェラトウはどこからかやって来る。こちらが不利なのは変わらない。

と、奥の方から何かが聞こえてくる。

これは、馬の走る音と人の叫び声だ。

「おーい……おーい!!」

「な、なんでしょうか?何か聞こえてきますね、カムイ様。」

「新手か?」

フェリシアとジョーカーは眉を寄せる。

カムイも警戒する中、

「おーい、カムイーっ!」

と、岩を飛び越えてやって来たのは、一人の騎士だった。着地すると、槍を取り出してノスフェラトウを一体倒す。

「ふうっ!やっど追いついた!久しぶりだな、カムイ!」

その騎士はカムイを見て汗を拭う。

カムイは無言で彼を見る。

ジョーカーは彼を睨み、

「てめえ、何者なんだ!」

「ん?俺はサイラス。カムイの親友だ。こうして、カムイに再び会えてうれしく思うぞ。」

と言う彼に、ジョーカーはさらに眉を寄せ、

「カムイ様の親友だあ?俺は貴様なんぞ、知らんぞ!」

「俺もお前を知らん。誰だ?」

「俺はカムイ様の臣下、ジョーカーだ!」

と、互いに睨み合う。

そこにフェリシアは手を上げて、

「私はフェリシアって言います!同じく、カムイ様の臣下です!」

「キュウ、キュウ!」

「あ、こっちはリリスさんです。」

と言うのだ。

カムイはサイラス^彼を知っている。

彼は自分が北の城砦に居た頃に、遊び相手として連れられてきた少年だった。

自分は彼を利用したのだ。

彼を使って城を抜け出そうとした。

その結果、彼を一族もろとも死刑にさせてしまいそうになった。

それを防ぐために、マークスには力を借りた。

彼は自分を恨んでいるはずだ。

そう思うと、剣を強く握っていた。

「話は後だ。先に、ノスフェラトウを殲滅させる。」

「おおー！」

彼らはノスフェラトウを殲滅にかかる。

一人加わってくれただけでも、かなり闘いは楽になった。

何よりも、腕の実力もあつてこそだ。

ノスフェラトウを倒し切ると、サイラスは馬から降り、

「きっかけ、久しぶりだな、カムイ。俺とお前が幼い頃以来だな。最後に会ったのは、お前を城から連れ出して、危うく死刑にされそうになったあの日以来だな。あれ以来、俺は城には出入りを禁止されてしまったが……お前にもう一度会いたくてな。こうして、騎士にまで上り詰めたんだ。」

「……どうしてそこまで？」

「もちろん、礼を言う為だ。あの時はありがとな。俺を庇ってくれたって聞いたぞ。だから今度は、俺がお前を守るよ。」

「……ありがとう、サイラス。私も、お前にまた会えて嬉しいよ。」

カムイは苦笑する。

と、フェリシアがクスクス笑い出した。

カムイは首を傾げて彼女を見る。

フェリシアは口に手を当てたまま、

「だって、カムイ様の喋り方……それに、雰囲気がいつもと違うんですもの。」

「あ……」

そう言われて、カムイは気がついた。

確かに、素が出ていた。

サイラスは腕を組み、

「確かに、幼いお前は見かけによらず、大人しくて何とというか、誰も寄せ寄せない静かなオーラも纏っていたな。」

「……気が動転していたようだ。まさか、素がもろに出ているとは思わなかった。」

カムイは頬を掻く。

ジョーカーは小さく笑い、

「ですが、そんなカムイ様もいいのではないのでしょうか。白夜ではそのような感じだったのでしょうか？」

「そうですねよ！私は、そんなカムイ様も大好きですよ！いつものカムイ様も大、大、大好きですよ！」

フェリシアはとても幸せそうな顔で言う。

カムイは苦笑いして、

「いや、白夜でもそうは変わらないさ。本当の自分など、とうの昔に忘れてしまったからな。これは、自分が自分である為の心意気のようなものだ。」

「……じゃあ、やっぱりお前は白夜の人間だったんだな。けど、俺はお前の親友には変わりはないぞ！」

「それは俺たちも、だ。俺たちの主はカムイ様だからな！」

腰に手を当てて、自慢げに言うサイラスに、ジョーカーは即答だった。

と、そこにまたしても、馬の駆ける音が響いて来た。

「ちよ、ちよっとー！置いてかないでよー!!」

やって来たのは臣下二人を連れたエリーゼだった。

頬を膨らませて、馬から降りて来ると、サイラスに怒りだした。

「ヒドイ、置いてちやうんだもの！」

「申し訳ございません、エリーゼ様。つい。」

「ついじゃないー！私も、お姉ちゃんの所に早く行きたかったもん！」

と、腕を組んで、そっぽ向いた。

だが、カムイを見て、

「お姉ちゃん、私の臣下のハロルドとエルフィだよ。ハロルドはね、ちよーと運が悪いけど、凄いからね。エルフィはね、とてもすごい怪力の持ち主なの!!」

と、嬉しそうに臣下の話をする。

エリーゼの臣下の男性と女性はカムイに頭を下げ、

「正義の味方、ハロルドと言います。何でも、おしやっってください、カムイ様。例え、ここに来るまでに5回も沼に落ちなければ、もつと早く来られたのだが……」

「私は、エリーゼ様の臣下、エルフィです。私は沼には落ちませんでしたが、鎧が重くて……訓練用の重石、鎧の中にぎっしり入れすぎたでしょうか……」

と、二人は互いに腕を組んで悩んでいた。

カムイはエリーゼを見て、

「エリーゼ、お前も来たのか?」

「うんー! あつたり前だよ、お姉ちゃん! だって、新人騎士が良くて、私がダメなんておかしいじゃない? その為にマークスお兄ちゃんが、お父様の目を盗んで私たちを送り込んでくれたんだよ! 私だって、お姉ちゃんの役に立ってみせるんだから!!」

と、とびつきりの笑顔で言う。

カムイは瞳を揺らし、涙を流し始めた。

「ええ!! お姉ちゃんも、もしかして、私邪魔だった?」

カムイは涙を拭いながら、

「いえ、違うんです。私は本当に、恵まれていると……臣下に、友に、兄弟姉妹きょうだいに。こんな気持ちになるのは本当に久しぶりで、嬉しくなってます。忘れたんです。忘れてください。」

「忘れないよ、お姉ちゃん! だって、それって……私たちの事を大切だと思ってくれているからでしょ。それが嬉しいんだ!」

笑顔の彼女を見て、カムイは自分の頬を叩き、

「さ、気持ちを切り替えて行きますよ。なんとかして、氷の部族を止めるんです。」

「はー!」

フェリシアが先導を始め、進む。

カムイはそう言いながらも、心の中で睨んでいた。

『あのノスフェラトウ……野生にしては多すぎる。だとすれば、誰かが仕掛けたに決まっている。暗夜王ガロン、……いや、透魔王ハイドラ！お前の企みは絶対に止める！』

カムイはそれを表情には出さずに進んで行く。

森を抜け、しばらくすると雪がちらつき始める。

そして、それをさらに進んで行くと雪が積もっていた。

ジョーカーが持つてきていた分厚いマントをカムイに着せ、さらに進んで行く。

無論、エリーゼ達はさらに分厚い格好をして進んでいる。

「こんなに着こんでいるのに、寒いな。」

「カムイ様！私のマントも！」

「いや、いらん。お前に、何かあったらまずいからな。」

「カムイ様!!」

ジョーカーは涙を流して、祈りを捧げるように手を握り合わせてカムイの後ろを歩く。

フェリシアは楽しそうに歩いて、

「ふふ。でも、寒くなればなるほど、近付いている証拠ですよ！」

「ああ、そうだな……」

カムイは喜ぶ彼女とは逆で、気持ちが悪くなる。

フェリシアの故郷であったフローラの死……

自分のせいであんな結果になってしまった。

今度はそれがないようにする為にも、ここは気を引き締めて進む。

だが、途中でフェリシアが立ち止まる。

辺りを警戒し始め、

「……どうしたんだ、フェリシア？」

「これは……マズいです！雪崩が来ます！」

フェリシアがそう叫んだと同時に、地響きが聞こえてくる。

そして雪崩が、すぐ側まで来ていた。

雪崩が収まり、カムイはガバツと起き上がる。

辺りを見渡し、

「みんな、居るか！」

「はい、カムイ様!!」

ジョーカーとフェリシアが雪の中からガバツと這い出てきた。

そしてそれに続き、

「ぶっはー!!死んじやうかと思った！」

「エリーゼ様、大丈夫ですか？」

「うん！エルファイが護ってくれたおかげだよ！」

エリーゼとエルファイがカムイ達の後ろから現れる。

後は二人だ。

カムイとエリーゼは叫ぶ。

「サイラス！どこにいる！」「ハロルドー、どこー？」

と、手と足がそれぞれズバツと出てきた。

エルファイがそれをそれぞれ引き抜くと、サイラスとハロルドが出てきた。

「無事か!」

「ああ、何とか生きてる。」

「私も大丈夫です！」

二人はそれぞれ咳込みながら言う。

そして、再び歩き出しのいいが、今度は吹雪に巻き込まれた。

カムイは立ち止まって、沈黙していた。

頭を抑え、

「……何という事だ……迷子になった！」

猛吹雪の中の叫びはかき消される。

カムイはまるで、カンナに戻った気分だった。

感覚的には普段の自分と変わらない。

だが、どこかで自分はカンナだった頃を思い出していた。

眉を寄せ、

「前も後ろも解らんー！こんな事なら、フェリシアに遭難した時の対策法を聞いとくべきだった!!」

と、早大に後悔していた。

だが、下手に動くのも危険だ。

かと言つて、ここにずっと居るのも危険だ。

さてどうするか……

「寒くなればなるほど、氷の部族の棲む村は近くなる……だが……」

そう思うのも、だいぶ意識が朦朧としてきた。

それに加え、手足の感覚も鈍くなっている。

「進むか！」

カムイは歩き出す。

だが、途中でこける。

肩で息をしながら、

「マズイ、これはマズい……魔術を今使えば……」

魔術のやり方は覚えている。

その気になれば使えるだろうが……

こんな状態でやっても失敗するのがオチだ。

しかも倒れ込んだせいで、一気に眠気が自分を襲う。

「寝たらマズいって聞いたんだが……」

カムイはボーっとしてきた瞳で辺りを見る。

全くもって、何も見えない。

カムイはこん身の想いで叫んだ。

「サムイ——！！」

そう言つて、意識が途絶えた。

しばらくして、パキツという木が燃える音を聞いて目を覚ます。

それに、暖かいと感じる。

辺りを見ると、レンガで来た家の中のような。

そして自分は、毛布を何重にも乗せられ、ベットに寝かされていた。

斜め前には、暖炉が燃えている。

その暖炉の前には、水色の鎧を着た男性が立っていた。

ふと、カムイはこの男性に見覚えがある。

彼はカムイが目を覚ましたのに気付き、

「目が覚めたようだな。安心していい、ここは氷の部族の村だ。私たちの村にようこそ、旅のお方。私は氷の部族長、クーリアと申しま

す。」

それを聞いて、カムイはたくさんの毛布をどかしてベッドから出る。

『……そうか、フローラとフェリシアの父親だ。あの時も、戦ったな……』

だが、向こうは自分を知らない。

カムイは頭を下げる。

「助けていただき、ありがとうございます。私はカムイ。……おそらく、あなたにとっては良くない客人となってしまうかもしれませんがね。」

男性は少し驚いた顔になり、そして笑い出した。

「ふはははー！これは何とも、変わった自己紹介ですな！自分から、よくない客となるかもとは……あなたは面白いですな。確かに、本当なら正体不明のあなたを助ける事はしなかったでしょう。ですが、あなたの持つ、その剣……その黄金の剣は、我が氷の部族の伝承に記述のある……世界を救うといわれる、伝説の勇者の剣とよく似ているのです。」

カムイに温かいお茶を渡しながら、氷の部族長クーリアは言う。

カムイは差し出されたお茶を一口飲み、

「え？世界を救う……伝説の剣。『夜刀神』の事をご存知で？」

「はい。ですから、あなたのことを見捨てる事はできませんでした。もしかしたら、カムイ殿はこの世界を救うお方なのかもしれません。もしそうであれば、いつかきつと私たちを、この暗夜王国の支配から解放して下さいませんか……」

カムイは視線を落とし、

「私は世界を救う力はありません。私の最初の父であった本当の『カムイ』ならともかく。私はあくまで、『カムイ』であったから、この夜刀神を持っているにすぎません。」

「……ああ、すみません。そんなに、思い詰めないでください。事情は分かりませぬが……私には今の貴方が、その剣の使い手だと心から思います。」

「重ね重ねありがとうございます、クーリア殿。良くない敵になるやも知れぬ私に、優しくしてください。」

カムイは顔を上げて、苦笑する。

彼は小さく微笑み、

「なに、私にもあなたに近い年の娘がおるのですよ。じきに挨拶に来るでしょう。」

「……娘さんが？」

カムイはハツとする。

フェリシアか、それとも行方不明になっているフローラか。

もし、フローラならまたああなってしまうのではないかと、カムイは凄く不安になる。

そして、そう思っている最中に、部屋にノックがかかり入って来た。それは水色の髪をしたメイド。

フローラだった。

彼女は驚いたように、

「……カムイ様!？」

「フローラ……無事のように良かった。」

「カムイ様、なぜここにいらっしゃるのですか……」

フローラは悲しそうにカムイを見る。

カムイは心の底から、まずはそれを喜ぶ。

だが、氷の部族長は娘のフローラを見てから、カムイを見る。

「カムイ『様』……?」

カムイはフローラを見て、

「……フローラ。フェリシアも、じきにここに来るはずだ。だから……帰る場所のあるお前たちは、このまま村に残れ。他の者には、行方不明の状態で置いておく。」

「カムイ様、一体何のお話ですか？」

「……私は、暗夜王ガロンから命じられた。氷の部族の反乱を止めろ、と。」

「何ですって!？」

フローラは眉を寄せて、カムイを見る。

それは氷の部族長クーリアも同じだ。

カムイはそのまま続ける。

「だが、私にはお前たち二人の故郷と争う気はない。このまま大人しくしていてくれれば、反乱はなかったこととして何とか処理する。」

「どうして……ですか、カムイ様。」

「……私には、お前たちが大切だと言うことだ。また、失うのは嫌だからな……。」

カムイは視線を外して、眉を寄せる。

フローラは何かを言おうとした時、氷の部族長クーリアは剣を抜く。

その刃先をカムイに向ける。

「なるほど、あなたの敵になるかもしれないとは、そう言うことでしたか……。」

「ああ。」

「何故、ここで言ったのです。黙っていれば、こうはならなかったでしょうに。」

「フローラがここに居るのなら、私が言うつもりであった。もし、ここには居なくてフェリシアが来たのなら、フェリシアのしたいようにしてからにしようと思った。」

「……そうですか。今のあなたの状況を理解していない訳ではなさそうだ。あなたには二つの選択肢があります。ここで死ぬか、人質となるか。」

氷の部族長クーリアは目を細めてる。

フローラは眉を寄せて父親を見る。

「お父さんー！」

「お前は黙っていなさい。」

「うっー！」

フローラは押し黙る。

カムイは一つため息をつき、

「私を殺したのであれば殺してくれて構わないさ。だが、この命をくれてやるのは当分先だ。私にはやらねばならない事があるからな。」

「やらねばならないことですか?」

「ああ、暗夜王ガロンを殺すことだ。」

「な!?!」

氷の部族長クーリアは眉を寄せて、一步下がる。

これにはフローラも驚いた。

カムイは続ける。

「フローラにはまだ伝わっていないだろうが、私は本来なら白夜で育つはずだった。ある日、暗夜王ガロンに父王を殺され、私は暗夜に誘拐された。そして、あの北の城砦に閉じ込められた。いずれ、白夜に戻して母である白夜女王ミコトを殺すために。白夜王国を滅ぼすために。だから、私を人質にとっても何の利にもならない。」

カムイはジツと氷の部族長クーリアを見据え、

「暗夜王ガロンは、私を殺したいのだろうな。だが、私が白夜から戻って死んでいないと言うことは、私にはまだ利用したい事がある。だが、その気になれば生死など関係ない。そういう『ヤツ』だからな。」

「……なるほど、ですが遅かったようだ。」

そう言うと、外の方から騒ぎ声が聞こえてくる。

暗夜兵が攻めてきた。

フェリシアを人質に。

そういう声が聞こえてくる。

おそらく、フェリシア達が村に到着したのだろうか……

「フェリシアは失敗か……」

カムイは窓に向かって走る。

竜石を掴み、その身を竜と化して窓を打ち破る。

人の姿に戻って、フェリシア達の前に剣を抜いて立つ。

ジョーカーは安心したように言う。

「カムイ様!ご無事で!」

「ああ、フェリシア。」

「……申し訳ございません、カムイ様!私止められませんでした……」
フェリシアは座り込んで顔を覆って泣く。

カムイは視線だけを彼女に向け、

「そうか……なら、フェリシア……選んだ。このまま村に戻り、私達から離れるか。それとも、故郷と戦うか。」

「カムイ様……」

フェリシアは涙を拭って立ち上がる。

武器を構え、

「私も、カムイ様と共に戦います。私は、私の意志で村を止めます！」

「そう……それが、あなたの答えなのね、フェリシア。」

そこに、フローラが短剣を持って現れる。

フェリシアはパツと明るくなった顔をすぐにやめた。

それは、父と共に怖い顔をしている姉。

「姉さん……無事でよかった。でも、もしかして姉さんはカムイ様と戦うの？」

「当然よ。私は氷の部族長の娘として、なさねばならない事がある。

私は、あなたとは違うのよ。」

そう言つて、武器を構えた。

フェリシアは瞳を揺らしながらも、再び武器を構えなおす。

カムイはその姿に、剣を強く握る。

こうなるのが嫌だったのに、と……

それでもカムイは剣を取る。

まずは彼らの戦意を失わせるために。

だが、多勢に無勢……このままではマズイ。

そう思った時、崖の上から声が響く。

「闇にが囁いている……守るべき者たちの身が危ないと。仕方ない……逆る闇の奔流を行使し、勝利と言う名の輝きを俺たちが見せてやろう。」

「はあ……勝手にひとくくりにするな。俺は一人でも、奴らを天国にイかせてやれる……」

そこには、魔術師と弓兵が現れた。

カムイは彼らに見覚えがある。

「確か、レオンの臣下……だったか？」

「そうだよ、お姉ちゃん。あの二人はレオンお兄ちゃんの臣下のオーデインとゼロだよ。」

エリーゼが手を振りながら言う。

二人は飛び降りて、着地する。

と、レオンの臣下オーデインは決めポーズを取り、

「俺は漆黒のオーデイン！暗夜王国王子レオンの直属の選ばれし闇の近衛騎士だ！」

「同じく、暗夜王国王子レオンの直属の近衛騎士ゼロ。主君よりの命令で、カムイ様を悦ばせに来たんだぜ。」

同じくレオンの臣下ゼロはカムイに近付いて、目を細めて言う。

カムイは眉を寄せて首を傾げる。

「よろこばせる？」

「あわわ……き、気にしないでください！こいつ、いつもこんな感じじゃない！」

と、ゼロをカムイから離す。

ちなみに、ジョーカーは物凄い目でゼロを睨んでいた。

そして再び決めポーズをして、オーデインは言う。

「と、とにかく安心しろ、カムイよ。ここからは俺の秘められし力で、貴様に仇名すものを排除してやろう。くっ……血が騒ぐ……！早く奴らを倒さないとこの呪いは——」

「ああ、援護に来てくれたことには感謝します。ですが、氷の部族は殺さない方向で頼みますね。」

カムイはサツと武器を構えなおして彼に言った。

オーデインは目をパチクリし、

「え？」

「私に、氷の部族の者たちを殺す意志はない。できれば、彼らの戦闘を治めて戦意を失くしたいだけだ。」

と、横目で彼らを見る。

それを見たゼロはニツと口の端を上げ、

「ほう、それは暗夜王ガロン陛下の命に背くと？」

「いや、暗夜王ガロンは平定こそ言ったが、氷の部族を滅ぼせとは言っ

ていない。そして、やり方は私の自由だ。なら、私は私のやりたいようにやるだけだ。」

「ふ……ふふ、ふははは！良いねえ、良い！とても良いぜ。その命令に従ってやるうではないか！」

「ええ！お、俺もやりますからね！カムイ様！！あなたにもしもの事があつたら、レオン様に殺されちゃいます！」

「なら、レオンには私が勝手にやったことだから、罰は与えるなど遺言に残しておいてくれ。」

「な！縁起でもない事を言わないでくださいよ！それこそ、レオン様に殺されちゃいます！！」

と、彼は悲鳴を上げる。

ちなみに、ジョーカーはさつきよりも物凄い目と顔で睨んでいる。

カムイは氷の部族長クーリアに向かっていく。

そして、互いに剣を交える。

「あなたの心意気は解りました。ですが、私はこの長として退くわけにはいかないのだ！」

「……私も、ここではまだ退けない。あなたに、勝ちます。」

カムイは、彼の剣を受け流しながら闘う。

フェリシアとフローラも互いに思いをぶつけながら戦う。

他の者達も、上手く戦っていく。

そしてカムイは、彼の剣を弾く。

氷の部族長クーリアの剣は回転しながら、雪の山に突き刺さる。

「これで……終わりだ。」

「そうだな……」

彼の敗北で、村人達も戦いをやめる。

カムイは彼らを見て、

「どうやら、怪我人はいるが死人はいないな。エリーゼ、ジョーカー。すまないが、怪我人の治療を頼む。」

「はい、お姉ちゃん！任せておいて！」「カムイ様のご命令とあれば。」

二人は怪我をしている村人の元へ行く。

カムイは氷の部族長クーリアを見て、

「これで、助けて貰った恩は返したからな。で、私はあなた達とは争う気はない。大体、今の暗夜王ガロンの言うことを、はいそうですかと聞くつもりは元からないからな。だが、危なくなったら私の事を言っている。私が謀反を起こそうとしているとでも、暗夜王ガロンを暗殺しようとしているのだの、好きなように言ってくれて構わない。」

「どうしてそこまで？」

「……もとより、今の暗夜王ガロンは討つつもりでいた。そして、暗夜王国の暴走を止める。白夜との戦争も、暗夜王ガロンの暴君を打ち壊し、真の王を立てる。平和な世界をもう一度、実現させるために。それに……私に残された時間は少ない。ただそれだけだ。」

カムイはペンダントを取り出して握りしめる。

実際、戻れば戻るほど体が重くなってる。

透魔王国の呪いとは別の何かが自分に重くのしかかる。

それもまた、『呪い』なのだろう。

思い当たる事は沢山ある。

きつと、自分はここに居るのに多くの人たちの恨みや悲しみ、怒りを買っている事だろう。

今回もそうだ。

自分は沢山の業を受けている。

あつてはならないが、もしかた過去に戻るような事があれば、自分とはあと何回戻れるのだろうか……

カムイのその言葉を聞いたフローラとフェリシアは眉を寄せて、カムイを見る。

「カムイ様!!それはどういう事です!」

「そうですよ、カムイ様……そんな、そんな良い方じゃまるで……」

カムイはペンダントをしまい、

「なに、心意気の問題だ。気にしないでくれ。」

「……ふう、解りました。私たちは、しばらくの間は大人しくしていきましょう。あなたが言う平和な世界とやらを実現させるその時まで。」

「ああ、必ず。」

カムイは彼に背を向け、怪我人の手当てを手伝っているサイラス達の元へ行く。

氷の部族長クーリアは娘達を見て、

「あのカムイ殿は、不思議な方だ。何とも変わった魅力を持っている。」

「はい。お父さん。私とフェリシアが、人質となったあの城で穏やかに過ごせたのは、カムイ様のおかげです。」

「そうなんですよ、お父さん！カムイ様は凄いです。使用人としている私たちにも、対等で見えてくれる。私がドジをしても、カムイ様だけは怒らないんですよ！」

「……そうか。お前たちには苦勞を掛けたな。」

氷の部族長クーリアは二人の頭を撫でる。

そして、眩くのだ。

「世界を救う伝説の勇者……なのかもしれませんな。」

その彼の瞳には、怪我をした村人に包帯を巻く少女の姿があった。

彼は娘達に視線を戻し、

「お前たちは、お前たちの道を進むが良い。」

「お父さん……」

カムイは伸びをする。

と、そこにフローラがやって来た。

フローラは頭を下げ、

「カムイ様、申し訳ございませんでした。私はあなたを裏切り、ずっとここに居ました。本当に申し訳ありませんでした。」

「……顔を上げてくれ、フローラ。私はお前が裏切ったとは思っていない。お前たちが、あの城に居た理由を知っていた。知っていて、何もできなかったんだ。お前を非難することはできないさ。それに同じ立場なら、私も同じことをする。お前は、己にできる事をした。それを、私に今詫びを入れると言うことは、己の選択を間違いだたと認めることになる。お前は部族の為に、父親の為に闘った。フローラ、お前は誇つていいと思うぞ。」

「カムイ様……」

フローラは涙を流す。

カムイは苦笑して、

「これが終わったら、また私に説教してくれ。私が踏み外しそうになつたら、私を止めてくれ。あの時のように、思い出させてくれ。」

「……？よくは分かりませんが、私はこれからもあなたの側にお仕えします。」

そして微笑むのであった。

カムイ達は挨拶を済ませ、氷の部族の村を後にする。

その帰り道、

「お姉ちゃん、これからどうするの？お父様の命令には背いちやった訳だし。」

「そうだな……なんとかしてみせるさ。」

そして、カムイ達は暗夜城に帰って来た。

暗夜王ガロンのに会う為に、謁見の間に行ったカムイと暗夜の兄弟姉妹。

カムイは頭を一度下げた後、顔を上げる。

「ただ今戻りました。」

「よく帰った、カムイ。報告は聞いている。見事、氷の部族を黙らせたようだな。」

「……ええ、運が良かったのでしょようね。」

カムイがそう言うと、暗夜軍師マクベスは一步前に出て、

「ですが、ガロン王様。どうやら、カムイ様はお一人では行かれていないようですよ。」

「なんだと？」

ガロン王は眉を寄せて、カムイを睨む。

マークスは小声で、

「チツ、マクベスめ。余計なことを。」

そして暗夜軍師マクベスを睨んでいた。

暗夜王ガロンはダン！と椅子を柄を叩き、

「一人で部族の村に向かったのではない？それは本当か、カムイ？」

「はい、そうですよ。確かに、命令では私一人でやれとのことでしたが……たまたま偶然、森で会ってしまった。そして、たまたま偶然、氷の部族の村に居た、彼らと共に共闘となった。ただそれだけです。それに、この程度の事、あなたの信じる神はお見通しだったのでは？」

「……我がハイドラ神をお前が問うか。」

「ええ。仮にも、暗夜王ガロンお様の程の方が心髄する神です。暗夜の神祖竜である黒竜王よりも崇めているようです。なら、その神はよほど強く、凄いのでしょうか。」

カムイの表情はほとんど変わらない。けれど、その瞳に移すモノは違った。

暗夜王ガロンは眉を物凄く寄せて、立ち上がる。

「お前!!」

だが、暗夜王ガロンは椅子に座り、

「もうよい。この件はこれで終わりにする。確かにお告げ通りではないが、任を果たしたのも事実。カムイの言う通り、ハイドラ神も許して下さるだろう。」

「ガロン王様?」

暗夜軍師マクベスは困惑していた。

カムイはひとまず一安心し、

「お父様なら、そう言ってくださると思いましたが。ありがとうございます。」

「うむ……さて、カムイ。お前のその運と実力を持って、次の任を命ずる。」

「……次ですか?」

「ああ。次はお前たちを、ノートルディア公国に向かわせる。」

『……ノートルディア公国か。』

カムイは眉を少しだけ寄せる。

暗夜王ガロンは頬杖を着き、

「お前たちにはあの地を制圧し、暗夜王国の支配下に置いてきてもらいたい。」

「どうして、ノートルディア公国を?」

「良いか……戦端が開いた後、あの地には白夜王国の軍隊が蔓延っていると聞く。そこで白夜の者達が、暗夜王国に仇為す策を講じているらしいが、悪い芽を摘むのは早い方が良い。一刻も早く公国に向かい、公国にいる白夜王国軍を根絶やしにするのだ。」

「……白夜王国軍と戦うのですか。」

これには、カムイはもろに表情に出していた。

それを見逃すことはなかった暗夜王ガロンはカムイを見据え、

「ほう……やはり、不本意か？生まれた国に刃を向けるのは。」

「……まさか。私は、暗夜王国の兄弟姉妹きょうだいと共に居る事を望んだのですよ。その任、ちゃんと果たしてみせますよ。」

「そうか。期待しているぞ、我が子よ。その言葉通り、良い成果を挙げてくるが良い。」

「はい……お父様。」

カムイは背を向けて王の間を出て行く。

扉を閉め、

『ああ、嫌さ。白夜と暗夜で戦うのが嫌だから、私はここで動いているんだ。お前の創る暗夜王国の為でも、お前の神の為でもない。私は、私の大切な兄弟姉妹きょうだい達の為に闘っているんだ。』

カムイはノートルディア公国に向かう準備を行い、部屋に行く。

そして準備を終えたカムイは、マークス達に挨拶をして城を出る。

無論、マークス達はカムイを手伝いたいと言う。

だが、暗夜王ガロンから命じられた任務がある為に共にいけないのだ。

と言っても、エリーゼはついて来るのだが。

あの時のやり取りは、エリーゼとレオンが最後に会ったあの時を思い出す。

それをカムイは思い出しながら、エリーゼの頭を撫でて供に行くのであった。

カムイは馬を走らせながら、思い出す。

マークスが、ノートルディア公国には戦士に力を与えろと言われる『虹の賢者』がいる。

うまくいけば、賢者から力を授かる事ができるかもしれないと。彼と暗夜王ガロンは、すでにその力を得ている。

その力を得るには、厳しい試練を越えねばならないと。

また、あの試練を受けると思うと気が重くなる。

が、この世界の夜刀神はまだ力を解放されていない。

もしも、また虹の賢者様にお会いできるのなら、聞きたい事がある。

その為にも、試練を乗り越える。

カムイは馬を止める。

来たのは『黒竜砦』。

カムイは瞳を揺らして、その砦を見る。

そして中をゆっくりと進んで行く。

けれど、警戒して進んで行く。

サイラスの情報によれば、白夜軍がここを占拠していると聞く。

なら、出会ってしまえば戦闘は避けられない。

なんとか、出会わずに行きたいものだと思う。

と、カムイは物陰に気配を感じる。

馬を止め、そこに目を向ける。

と、そこには黒服に身を包んだ少女が居た。

カムイは馬から降り、少女を見る。

「えつと……ここをなにを？」

「何って、迷い込んでしまったのよ。白夜軍には、子供を捕まえるのだの

……年端もいかない若造が、私を子ども扱いするだなんて百年早いのだよ。

これだから、他人と会うのも、関わるのも嫌だったのよ。」

「……なるほど。なら、私達と来るか？」

「は？」

「見たところ、見た目は私の方が上だが……あなたの身に纏うその空

気は、それとは違う。」

「……お嬢ちゃんも、見た目とは違って中々どうして……変わった空

気を纏っているわね。」

「私はカムイ。そこで、あなたに一つ提案です。」

「提案？」

「ええ。白夜軍が居るこの場を乗り切るのに、あなた一人ではきついでしよう。ここは共闘しませんか？」

「……なるほど。考えてみてもいいかもしれないわね。私自身、他人に興味を持ったのは随分と久しぶりよ。だから、あなたに付いて行つてあげる。私はニユクス。この力、好きに使うといいわ。」

「ああ、お願いする。」

カムイは、少女ニユクスを新しく仲間に加えて進む。

すると今度は白夜軍の兵の声が聞こえてくる。

カムイは岩陰に隠れて、耳を傾ける。

「さつきと歩け！」

「きやつ。」

それは白夜兵に連れられているアクアの姿だった。

もう一人の兵が、

「だが、いいのか？リヨウマ様に黙ってこんなこと……」

「なら、お前はいいってのか！カムイ様が白夜を裏切ってからと言うのも……リヨウマ様も、タクミ様も行方不明となっているのだぞ！」

「それはそうだが……」

「何より！こいつも暗夜の人間！信頼したからこうなったのだ！」

「……それはそうだが。だが、アクア様は……」

「こいつは暗夜の人間なんだ!!」

カムイは眉を寄せて、拳を握りしめた。

意志と覚悟を決め、剣を抜く。

そして背後から近付き、兵を気絶させる。

カムイはアクアの縄を解き、

「大丈夫ですか、アクアさん。」

「カムイ……久しぶりね。」

「大体の事情は分かります。兵達の会話も聞いていました。すみません、あなたをこんな目に合わせて。」

「気にしないで。暗夜との戦争が始まれば、こうなる事は覚悟していたわ。もちろん、リヨウマ達は私を庇ってくれた。けど、さっきの兵がいつていたのようにリヨウマとタクミが行方不明になってしまっ

た。それにね、私はこうなつても白夜を嫌いにはなれないわ。……ごめんなさい、カムイ。あなたの兄弟きょうだいを守れなかったわ。」

「いえ、アクアさんは護ってくれていました。本当に感謝しています。ですが、こうなつた以上……アクアさんは白夜に居るべきではないでしょうね。一緒に来て下さい、アクアさん。私が何としてでも守りますから。」

「……ふふ。私はいつだってあなたを信頼しているわ。あなたと私は、どこか似ているんですもの。だからカムイ、この戦争を一緒に終わらせましょう。平和な世界を取り戻すの。」

「……………はい、アクアさん。終わらせましょう、一緒に。」

カムイは涙をこらえて、アクアと共に仲間の元に急ぐ。

カムイが戻ると、エリーゼが抱き付く。

「もう、お姉ちゃん！勝手に居なくなつちやダメだよ。心配したんだからね。」

「すまないな、エリーゼ。」

カムイは彼女の頭を撫でる。

そして、カムイの側に居るアクアに気付いた。

「ん？お姉ちゃん、その綺麗な人は？」

「ああ、この人はアクアさん。共に戦つてくれる強い味方だ。……それと、アクアさんは元は暗夜王国に居たんだ。」

「暗夜王国に？」

「……………暗夜王国の王女として。」

「え？！そ、それじゃあ、この人つてもしかして、あたしのお姉ちゃんなの？」

エリーゼは、アクアを二度見した。

カムイはチラツとアクアを見ると、アクアは黙り込んでいた。

エリーゼはパツと笑顔になり、アクアに抱き付く。

「わあ！あたし全然知らなかった！早く言ってくれば良かったのに！会えてうれしいよ、アクアお姉ちゃん！！」

「ええ……私も会えてうれしいわ。これからよろしくね、エリーゼ。」
「もちろんだよ！えへへ、新しいお姉ちゃんって、なんか照れくさい

ね。そうだ！みんなに紹介しないと！アクアお姉ちゃん、こつちこつち！」

と、アクアの手を引っ張って行くエリーゼ。

カムイは苦笑した後、その後ろに付いて行く。

カムイ達は砦を抜け、港町ディアにやって来た。

ジョーカーとフェリシア、フローラが船の手配へと向かった。

その間、カムイ達は休息を取る事にした。

特に、慣れない土地でのアクアの旅の疲れに加え、エリーゼの相手もしているアクア。

その彼女の疲れを癒すためにも、カムイは休息を取る事にしたのだ。

カムイはサイラスと話していた。

と、ジョーカー達が息を切らして走って来た。

ジョーカーが息を整え、

「カムイ様！大変です!!この港に、白夜王国の軍勢が追っているそうです!!」

「白夜王国が!?それは本当なのか☒」

「はい。常駐している兵から聞いたので、確かな情報です。白夜兵を何とかしないと、海に出る事はできません。如何いたしましょう……カムイ様。」

ジョーカーは重苦しい雰囲気になる。

カムイは視線を落としあと、顔を上げる。

「闘うしかないだろうな。でない、目的を果たすことはできない。だが……」

「だが?」

「ああ……リヨウマ兄さんとタクミが行方不明の今、誰がこの指揮を取っているのか。いや、もしかしたら彼らは見つかって、ここに来たのかもしれない。白夜を裏切った私を討ちに来たのかもしれない……」

「カムイ様……」

「気にしなくていい。覚悟はしていたからな。今度こそ……」
「カムイ様？」

「いや、なんでもない。すぐに戦闘準備を。」

「承知しました。戦闘準備をエリーゼ様たちにも、お伝えしてきます。」

「ああ、頼む。」

ジョーカー達は走って行く。

カムイは右手を握りしめて、その手を見る。

『今度こそ……誰も失わない選択を。あの平和をもう一度……』

カムイは手を開き、白夜兵が居る方へと歩いて行く。

カムイは一人先に白夜兵達の居る前へと行った。

白夜兵達はカムイに気が付き、剣を抜いて構える。

その間から、一人の少年が弓を携えて出て来る。

彼は兵の前に立つと、弓を構えてカムイに矢じりを向ける。

「許さない。白夜を裏切ったあんただけは……僕がこの手で討つ！」

彼は怒りをその瞳に宿してカムイを睨む。

カムイはその目を見つめ、

「タクミ……そうか、ここの指揮はお前か。見つかったようで良かったよ。」

「今更、僕の心配か？違うだろ、敵が増えたのが悔しいんだろ。」

「私の目の前には、敵はいない。」

「何を!!母上の、白夜の仇だ!覚悟しろ、裏切り者め!!」

タクミは矢を放つ。

それをカムイは避けない。

その矢は頬を掠っていく。

カムイは頬の血を擦り取り、

「そんなに私が憎いか……」

カムイは瞳を揺らした後、剣を抜く。

「だが、ここではまだ死ねないんだ。来い、タクミ!」

「上等だ!あの裏切り者の相手は僕がする。お前たちは他の連中を!」

カムイはタクミの第二派の矢を叩き斬る。

二人の攻防戦が始まる。

なにより、カムイがタクミの相手をする事で、二つの意味が発生する。

しばらくして、ジョーカー達も加わり、戦闘は拡大していく。

そこに、竜の羽ばたき音が響き、空から赤い髪の女性が降りてきた。

「いたいた、カムイ様!! 白夜王国軍相手に苦戦してるみたいね? 仕方ないから、助けに来てあげたわよ。」

「……ルーナ、だったか? あの飛竜使いはベルカ。カミラ姉さんの臣下の。」

「ええ、そうよ。よく知ってるじゃない。」

「少しな……」

カムイは視線だけを彼らに向ける。

そして視線をタクミに戻し、

「なら、他の者たちの援護を頼みます。私は、彼の相手をする決めてるので。」

「……あっそ。わかったわ。」

二人は他の援護に向かう。

と、そのすぐ後にまたしても飛竜の羽ばたき音が響く。

空を見上げると、

「カムイ、無事かしら?」

「……カミラ姉さん。」

「嫌な想いはしていない?」

「してません。お気遣い、ありがとうございます。なので、すみませんが……他の方達の援護をお願いします。」

「もう、カムイったら。でもいいわ。お姉ちゃんが、そのお願いを聞いてあげる。」

カミラは素直に飛んで行った。

カムイは思う。

彼らにも、暗夜王ガロンから命令を受けていたはずだ。

なのにここに居るのは何故か。

あるとすれば、命令を終えてここに来たか……
いや、それはないだろう。

だとすると、どういう事なのだろうか。

しばらくして、白夜軍は後退を始めていた。

それは、白夜軍の方が不利に変わったからだ。

「くそっ！こんな被害が出ては、これ以上の進攻は不可能か……」

タクミも、カムイが何故タクミを一人で相手にしていたのかに気付いた。

そう、タクミを一人で相手にする事によって、この闘いの指揮を取るのには彼の臣下。

そして、その臣下もまたカムイの仲間暗夜兵を相手にしているのだ。

簡単ではない。

そして、もう一つの意味はカムイ自身が今のタクミの状態を知りたかったからだ。

前の時は、タクミは透魔王国の王ハイドラによって操られていた。

今も、その状態なのかを知りたかったのだ。

「……タクミ、この闘いはもう終わりだ。兵を退いて、白夜に戻るんだ。私には、お前たちを殺す道理を持ち合わせていない。だから――」

「ふざけるな!! あんたの言葉なんか信じられないね! お前は暗夜の人間になったんだ! 卑怯で、野蛮で、残酷な奴らだ! 平気で民を、国を潰し、殺す……そんな、最低の国だ!!」

「タクミ、全てが全てそうではない。白夜にだって、そう言う者はいら。暗夜の者、全てがそういう人間ではない。」

「けど、あんたは何の罪もない白夜の民を傷つけた! 死に追いやった! それだけじゃない……僕たちの大切な母上の命までも奪った!! それのどこが、卑怯で野蛮人と一体何が違うっていうんだよ!!」

カムイは視線を落とす。

それは彼らから信頼する、愛する母親ミコトを奪ったのは事実。

そして、白夜の民を傷付けたのも事実。

全ては、運命を変える事の出来なかった自分の責。

と、カミラが飛竜から降りてきて、

「あらあら……黙って聞いていたけれど、さつきから失礼な子ね。今の言葉、撤回して頂戴。さもないと——」

「違いますよ、カミラ姉さん。タクミの……彼の言う事は事実です。全ては私が悪いんです。」

カムイは視線を上げて、タクミを見つめて言う。

タクミは顔をムツとして、

「そ、そうだよ！お前さえ、帰って来なければ……白夜王国は平和だったんだ。母上も、民たちも、みんな死なずにすんだ……みんな……」

「タクミ——」

「うっ！くっ！！」

カムイは彼に近づこうとした時だった。

タクミは頭を抑えて、苦しみ出す。

「!!どうした、タクミ!」

「あ……頭が……」

「頭が痛いのか？タクミ、大丈夫——」

「触るな!!」

カムイが駆け寄り、彼に触れようとした。

けれど、その手を叩き、距離を開けるタクミ。

そしてカムイを睨みつけて、

「汚らわしい暗夜王国の者が、この僕に軽々しく触れるな!!」

「……………」

カムイは黙って胸を抑える。

解っていたとは言え、これはきつい。

タクミはその怒りに満ちた瞳でカムイを見続ける。

そして、背を向ける。

「……これで勝ったと思うなよ、カムイ。リヨウマ兄さんは既に、『虹の賢者』によって力を手に入れた。あんたたちが束になってかかっても、絶対に敵いはしない。」

「……リヨウマ兄さんなら、試練を越えられると思った。」

「はっ。」

「何でもない。」

「訳のわからない奴め！それに僕だって、もつともつと強くなる！僕をここで殺さなかったこと、必ず後悔させてやるからな！」

そう言つて、走つて行つた。

カムイはその背に手を伸ばした後、それを握りしめる。

その姿にカミラが頭を撫で、

「可哀想に、カムイ。でも気にしてはダメよ。あれは敗者の負け惜しみよ。それに、マークスお兄様だって、虹の賢者様より力を得ていらつしやるわ。白夜王国軍こそ、私たちには敵いはしない。そうでしょう？」

「……そうかもしれないし、そうではないのかもしれない。」

「カムイ？」

「いえ、忘れてください。ところで、カミラ姉さん。姉さんにも命が下されていたはずですが……何故、ここに？」

カムイはカミラを見上げる。

カミラはカムイの頭から手を放し、

「実はね、マークスお兄様とレオンが私たちを送つてくれたの。私に下された命を肩代わりしてくれて。だからここからは、私も共にゆくわ。あなたを傷つける者はみいんな……私が殺してあげる。」

「……できれば、それがない事を祈りますよ。」

「あら、優しいのねカムイ。」

「優しくなんてありませんよ。私は……最低のカムイだ。」

カムイはそう言つて歩いて行つた。

そして船の用意ができ、カムイ達一行はノートルディア公国に向かう。

道中、カミラにアクアを紹介すると、カミラは泣いて彼女を抱きしめて謝罪と嬉しさを語つた。

そして、大切な妹が帰つて来たのを心から喜んでいた。

その姿に、アクアは戸惑いながらも嬉しそうに語り合う。

カムイはそれを嬉しそうに、けれど複雑な思いで見ている。

素直に、アクアが二人と仲良くしているのは嬉しい。

けれど、自分もアクアと姉妹きょうだいとして仲良くしたい気持ちがあったからだ。

だがそれはもうできない話。

なら、その想いは暗夜の兄弟姉妹きょうだいに任せるべきだ。

カムイはそつと傍を離れて、近くに居たりリスを抱きしめて海を眺めていた。

カムイはノートルディア公国に無事に到着した。

カムイは辺りを見渡し、虹の賢者が居ないかを確かめる。

だが、虹の賢者は見当たらなかった。

そしてもう一つ。

このノートルディア公国には、白夜軍が占拠していると聞いたがその姿はない。

あれば、自分達の進軍を撃墜にくるはずだ。

罨か、入れ違い……どちらにせよ、虹の賢者に会いに行かなければならない。

まずは白夜軍と虹の賢者の情報を集める。

カムイは近くを通りかかった女性に話を聞く。

話によれば、白夜軍は護衛と称して虹の賢者を連れて山に向かったと言う。

その山の名はノートルディア山。

そしてその山の頂上にある七重の塔にいるらしい。

カムイ達は、ノートルディア山にある七重の塔を目指して歩き出す。

ノートルディア山は、相変わらずの高峰だった。

皆、息を切らして山を登っていく。

そうこうしている内に、遠く小さいが、七重の塔の屋根が見えてきた。

カムイ達は士気を上げて、進む。

そして、七重の塔の少し手前で、白夜軍との戦闘を考えて準備を整えてから扉の前に立つ。

中から殺気が伝わってくる。

カムイは扉を開き、中へと進む。

白夜兵達を薙ぎ払い、奥へと突き進む。

と、矢が足元に飛んでくる。

カムイは立ち止まり、そこを見る。

そこには、弓を携えた少女と祓い杖を持った男性。

カムイは、この二人を知っている。

この二人はヒノカの臣下だ。

その二人はカムイを見ると、

「あ……カムイ様だ。初めまして、私はセツナ。ヒノカ様にはお世話になっていきます……。これからどうか、お見知りおきを……」

「……セツナ。相手は敵ですよ。」

「え？カムイ様は敵？だってアサマ、カムイ様はヒノカ様の妹君なのに……？」

「わかっていなかったのですか？」

「……いえ、わかっていましたよ。もちろん、わかっていました……。では、今からすぐに死んでください。」

「そうですね、死んでもらいますよ。野蛮な国の方は……」

二人は残りの白夜兵と共に、武器を構える。

と、サイラスやジョーカー、ゼロ、オーデイン、ニクス、アクア、エリーゼ隊が前に出る。

「ここは、俺たちに任せろ！」

「はい、カムイ様。このジョーカーにお任せください。」

「もちろん、私も戦うわ。だから先に行つて。」

「そうだよ、お姉ちゃん！任せておいて！」

カムイは頷き、

「分かりました。お願いします！」

ヒノカの家臣セツナとアサマは、サイラス達に任せて、カムイは階段を駆け上る。

と、カムイは白夜の忍と火の部族の娘とに出会った。

倒れていた自分を、白夜王国へと連れて行ってくれた人達だ。

「まさかアンタが白夜王国を裏切るとはね。」

「残念です、カムイ様。まさかあなたと闘う事になるとは思いませんでした。いえ……全ては私のせいですね。」

「……何故、お前のせいになる？ スズカゼ。」

カムイが問いかけると、スズカゼは黙り込んでしまった。

隣に居たリンカが、その質問に答えた。

「お前とリヨウマ、そして白夜王スメラギがシユヴァリエ公国に向かったあの日。あの日は、スズカゼを含めた白夜の忍びも何人が共に行っていた。」

「はい……そして私は見ていたのです。暗夜王ガロンが、軍を率いて向かっているのを。けれど幼い私は、その意味を解らなかった。その事を父たちに言っていたら、あんな事にはならなかった。」

スズカゼは拳を握りしめていた。

カムイはため息をついた後、

「それは、お前のせいではない。例え、解つていても変えられない運命はある。アレは必然だったんだ。お前のせいではない。」

「カムイ様……」

「そして、スズカゼ……今の私は、お前にとっては敵だ。」

「はい、そうでしたね。こうなってしまった以上、手加減は致しません。あなたを倒すつもりで……本気で相手をさせていただきます。」

二人は武器を構えなおす。

カムイも剣を抜き、構える。

外に控えていた白夜兵が襲い掛かる。

カムイはリンカとスズカゼの攻撃を受け止め、弾き返す。

そしてカムイは一步踏み出し、リンカの斧を弾く。

そのまま、思いつき蹴り込む。

「何故……殺さない。これが今の暗夜の……いや、カムイのやり方か……」

そして、気絶した。

スズカゼは眉を寄せ、

「リンカさん！ くっ！！」

「さあ、来い。スズカゼ！」

カムイはスズカゼを見て、剣を向ける。

スズカゼも暗器を構えて、向かってくる。

その速さは、自分よりも速い。

けれど、ここで負ける訳にはいかないのだ。

カムイは感覚を研ぎ澄ませる。

昔教わった事を思い出す。

目だけを頼りにしてはダメだ。

カムイは耳と空気を読み取って、剣を振るう。

スズカゼの暗器を受け止め、竜の力を籠めて彼を薙ぎ払う。

スズカゼはそのまま壁に叩き付けられた。

「くっ!!……強い……ですね。信念を持った、迷いのない闘い方です……私はあなたを誤解していたのかもしれないね。いえ、私はもしかしたら……」

そして崩れ落ちる。

カムイは剣をしまつて、この階の兵達をカミラ達に任せて上の階へと進む。

扉を上げると、日の光が入って来る。

頂上は屋上だった。

そして天馬の羽ばたき音と共に、赤い髪の女性が空から降りてきた。

それは天馬に乗ったヒノカの姿。

ヒノカもカムイに気付き、

「カムイ!!」

「……ヒノカ姉さん。ヒノカ姉さんの臣下の方々が居たので、もしかしたらと思っただけでしたが……やはり、ここで賢者様を守っていたのヒノカ姉さんだったのですね。」

「……ああ、そうか……本当にお前は暗夜を選んでしまったのだな。あんなに、お前に会いたくて仕方がなかったのに、また遠くへ行ってしまうのだな。」

「すみません、姉さん。言い訳はしません。姉さんが、私の事を想って

くれていたか、どれだけ帰りを待たせてくれたのかを知っています。知っていて、私は姉さん達を裏切った。私にはやりたい事が、やらねばならない事があるから。」

「……引き下がれぬと言うのだろうか？ 私だって、よく分かっているんだ。過ぎた時間は少なくとも、お前は……私の妹、なのだからな。」
「ヒノカ姉さん……」

「さあ、カムイ。お前も強い意志と想いがあるのなら、来い。お前は以前の信念の元、この私を倒してみせろ！ 私は、お前たちに賢者様の力も、この国も、お前たちには渡さない!!」

ヒノカは凧刀を回転させる。

カムイも剣を構えて、彼女をしっかりと見つめる。

カムイはヒノカの剣を受け止める。

そこに、下の階で敵を倒してきたカミラ達が合流する。

カムイの竜の力に吹き飛ばされたヒノカは馬から落ちる。

ヒノカは馬から弾かれ、起き上げる。

「すみません、賢者様……私の力が及ばないばかりに……」

「うふふ……私たちの勝ちね。さあ、早く兵を退きなさい。じゃないと、せっかく助かった兵士たちもみんな殺しちゃうわよ?」

「くっ……!! やむを得ん……皆、この場は退くぞ！ 申し訳ないが、戦死者はここに残していくことにする……!」

「いや、その必要はない。」

「なに?」

さらに別の隠し階段から、傷を抑えて掛けて来たスズカゼとリンカがやって来た。

リンカは拳を握りしめていたヒノカを見て、

「どうやら皆、傷を負ってはいるが動けるようだ。今、お前の臣下たちが手当と脱出の指揮を取っている。」

「それは……本当か?」

ヒノカはリンカを見る。

そのリンカは力強く頷く。

ヒノカは瞳を揺らして、カムイを見る。

「まさか、カムイ……」

「私は、白夜を裏切ってしまったのだと思う。けれど、白夜王国とは戦争をしようとは思わない。私はただ、私のやるべき事をやらねばならない。その為に、私はこの選択を取る。」

「カムイ……ああ、今のうちに撤退させてもらおう。でないと、後ろで睨んでいる、今のお前の『姉』に殺されてしまう……その前にな。」

ヒノカは小さく苦笑した後、天馬に乗って空を飛んでいく。

リンカとスズカゼも来た道に戻っていく。

その姿をジツと見つめていた。

そんなカムイを抱き付き、

「まったくもう……カムイは優しいんだから。塔に入る直前に、白夜兵は殺すな……なんて指示を出すんだもの。お姉ちゃん、おかげでずいぶん苦労したわ。でも、カムイ……あなた、白夜王国とは戦争をしようとは思わない。そう言ったわね。」

「……暗夜王ガロンに報告しますか？ですが、命令では制圧。それが第一優先です。その過程で、白夜王国の兵を根絶やしにするのであって、ここを制圧できれば彼らの暗夜進軍は遠くなる。」

カミラはジツと見上げるカムイの目を見て、微笑む。

そして、カムイを離して、

「……ふふ。いいえ、しないわ。だって、私たちの手を取ってくれたとしても、白夜王国はあなたの大切な故郷。大切な兄弟姉妹きょうだいが居る国ですもの。」

「……ありがとうございます、カミラ姉さん。姉さんの気持ちは素直に受け取りますよ。」

「ふふ、そうしてちょうだい。」

「はい。私は私のやり方で、この戦争を終わらしてみせる……」

カムイはカミラに振り返って言う。

と、何かの気配を感じた。

「……その言葉、本当ですか。」

振り返ると、リンカと共に撤退したと思ったスズカゼだった。

カムイは少し驚き、

「スズカゼ？すでに撤退したのだと思ったが……忘れ物か？忘れ物か？」

「……違います。あるとすれば、忘れごとの方です。それに、先に質問してるのは私の方です。」

「そうだったな。で、質問とは？」

「カムイ様……あなたはあなたのやり方で、この戦争を終わらせると仰いましたね。その言葉は本当ですか？あなたはその為に、暗夜王国にいるのですか？」

「ああ、そうだ。私は暗夜でやり残した事がある。白夜王国に居ては出来ぬ事が……その中に、暗夜の兄弟姉妹達きょうだいを今度は裏切る事は出来ないと思った。けれど、それだけではない。私は、私の目的の為に、こうしてここに居るんだ。こちら側でしかできない事を含めて、これ以上誰かの命が失われないように。」

その目には嘘はない。

そして拳を握りしめて、小さく呟く。

「あの時のようなことは絶対に……」

スズカゼはそのカムイの姿をジッと見つめていた。

そして、スズカゼはカムイの方へと歩いて行く。

剣を向ける彼らを止め、カムイは彼を見る。

スズカゼは膝を着くと、

「……そうですか。あなたの決意、確かに聞き届けました。カムイ様、あなたのその決意を聞いたからこそ、私は今これよりあなた様の仲間にしてくださいませんか？」

「……え？」

「お許してください、カムイ様。私は、あなたを誤解していました。あなたが白夜王国を去ったあの日……私たちを裏切り、白夜を滅ぼすことがあなたの目的なのだと思っていたのです。でも、それは間違いでした。あなたが暗夜王国側についていたことには確かに意味があつたのです。今後は私も、あなた様のお考えに付き従いたいと思っています。」

「……礼を言うよ、スズカゼ。お前の気持ちはとても嬉しい事だ。ありがとう……だが、今の私に付くと言うことは、この先白夜王国と戦

うこととなる。お前に、白夜の裏切りの名がついてしまうのだぞ。それでも——」

「構いません。自分の選んだ道に、後悔などしませんよ。」

カムイをジツと見上げるその目はまっすぐ揺るがない瞳。

カムイは知っている。

この目の強さを。

それは自分が抱く瞳と同じなのだから。

カムイは小さく微笑み、

「わかった。これからよろしく頼むよ、スズカゼ。」

「はい、カムイ様。」

差し出すカムイの手を掴んで立ち上がるスズカゼ。

そして、カムイを見下ろすと、小さく笑った。

カムイは首を傾げると、

「いえ、申し訳ございません。カムイ様のしゃべり方や雰囲気は砕けていましたので……おそらくは、それが本当のあなたなのかもしれないですね。」

「……ああ、そうか。だろうね……」

カムイは自分の右掌を見て、握りしめた。

そして辺りを見て、

「そういうえば……賢者様はどこに？この塔に居ると聞いたのだが……」

「そうですね……それなら、こちらです。」

と、スズカゼはある扉の前に立つ。

そしてカムイを見て、

「塔の頂上の扉を抜ければ、虹の賢者様の居場所まで辿り着けます。私が案内いたしましょう。」

スズカゼは扉を開けて、奥へと進む。

カムイ達はその後ろに付いて行く。

彼の案内された場所には、虹の賢者が座っていた。

カムイ達を見ると、虹の賢者は立ち上がる。

「……虹の賢者様ですね。」

「いかにも。わしが虹の賢者。よくここまで辿り着いたのう。」

「……賢者様、あなたに会えば力を得られるとお聞きしました。私たちに力を授けていただけませんか。」

そしてカムイはジッと虹の賢者を見る。

一呼吸置き、

「それに、私たちはこのノートルディア公国を制圧する為に来ました。」

「ふおふおふお、面白いことを言うのう。それに、制圧の事をわざわざ言うとは変わっておるのう。」

虹の賢者は髭を摩つて、カムイを見つめる。

そして一呼吸おくと、

「力ならずでに、試練を乗り越えたお前さんたちのものになっておるよ。あの塔を破る前と比べて、体が軽くなっておるはずじゃ。」

「はい……」

「うむ。お前さんは気付いているようじゃな。では、他の者たちの為にも言うておこう。わしに会って得られる力と言うのはな、わしに会うまでの試練の中で自ら身につける力のことなのじゃ。よく頑張った。力を授かりし勇者たちよ。」

「ありがとうございます、賢者様。」

虹の賢者は微笑んだ後、カムイの腰に付いている夜刀神を見る。

「さて、カムイ。お前さんは神刀『夜刀神』を継ぐ者じゃな。」

「……はい、賢者様。ですが——」

「ふおふお、わしには何でも分かるのじゃよ。」

それはあの時と同じ反応だった。

カムイは虹の賢者は優しく笑いながら言う。

「お前さんたちが今まで何をしてきたか、そして、どこに向かうのかもな。」

虹の賢者は真剣な表情になり、

「……わしは伝えねばならぬ。神刀を継ぐ者……カムイは、真の平和のために『炎の紋章』の謎を解き明かす運命にあると。」

「……『炎の紋章』……」

カムイは視線を落とす。

『だが、今回はリョウマ兄さん達はいない。夜刀神があの力を出すことはできないかもしれない。』

カムイが視線を上げると、虹の賢者は小さく微笑んだ後、

「この夜刀神は、『炎の紋章』を『繋ぐ』鍵となる。炎の紋章に至る第一の道標をわしが示そう。残念ながら……この場にはまだ、『夜刀神』を導く暗夜の勇者はおらぬ。」

「え……？」

「じゃが、遠からぬ未来……機は訪れる。その時、今から施す儀が役に立つはずじゃ。カムイよ。『夜刀神』を掲げるが良い。」

虹の賢者はそう言うのと、瞳を閉じる。

カムイは剣を抜き、掲げる。

虹の賢者は開く。

「——我は神刀を鍛えし者、禁忌を犯せし者、伍色を紡ぎし者……我が名に応えよ、『炎の紋章』よ——」

夜刀神は光を帯びる。

カムイはあの時と同じ光景を見た。

虹の賢者はカムイを見ると、

「今はまだ、変わりはなからう。暗夜の勇者と道を同じくする時……その時、『夜刀神』は新たな姿へと生まれ変わる。」

「それが……炎の紋章ですか？」

「いや、じゃがいずれ……そこに至るだろう。いずれ、な。わしが、お前さんの質問に答えられるのは、ここまでじゃ。さあ、先を急いでおるのじゃろう？早く帰って、任を終えた事を報告するとよい。」

カムイは剣をしまつて、頷く。

「はい。ノートルディア公国の制圧も終わった。賢者様からの力を授かった。城に戻って報告を——」

「カムイ様。」

カムイはハツとした。

それは下の階から上がって来た暗夜軍師マクベスだった。

カムイは彼を見据え、

「マクベス……いつの間に、ここに来ていた。」

「おやおや、カムイ様。ずいぶんと苛立っていますね。なにか、知られてはマズい事でもしていたのですか?」

「……そんな事はない。」

「まあ、いいでしょう。これは幻影魔法……私自身は王城におりますよ。」

暗夜軍師マクベスは笑いながら言う。

カムイは眉を寄せる。

『あの黒竜砦の時と同じか……』

彼は続ける。

「私はカムイ様に、ガロン王様より下された追加の命をお伝えに参りました。」

「追加の命だと?」

彼はニヤツと笑みを深くして、

「はい……今後、力を授かる者が出ぬよう、『虹の賢者』を殺せ」と。

「な☒賢者様を?! そんな事を許すと思うのか! それに、白夜王国のリョウマ王子は既に力を得た後だ。今さら賢者様を殺して何になる!!」

「許すもなにも、これは王命ですぞ。それに申したはずですよ。これ以上、力を授かる者が出ないように、と。なにより、逆らえば反逆となり、王は再びあなたの処刑を考えられるでしょう。命が惜しければ聞き入れてくださいませ、カムイ様。」

「貴様!!」

カムイは暗夜軍師マクベスを睨みつける。

だが、そのカムイの前に虹の賢者が歩み出る。

ジツと、暗夜軍師マクベスを見て、

「……悩むには及ばん。そろそろ、潮時だろう。」

「賢者様?」

「安心せい、カムイ。わしには何でもお見通しじゃ。カムイ、ありがとう。わしを想ってくれて。じゃがな、もういいのじゃ……もう、いいのじゃよ。」

「もういいって……どういうことですか、賢者様？」

虹の賢者はカムイに振り返り、優しく微笑む。

「わしは、あまりにも長く行きすぎた……これ以上生きれば、やがて狂い、人々に災いをもたらす存在へと成り果ててしまうであろう。だから、元より死ぬつもりでおったのだ……お前さんたちに与える力を最後に……な。」

「そんな……あなたはそこまで……そこまで来ていたのですか!? けれど、そんなのダメです！ なにか……何か方法があるはずです！ だからこれから——」

「ありがとう。お前さんは本当に心優しい心の持ち主じゃな。その心がいつか、この世界に光をもたらすじやろう。」

そう言って、虹の賢者は倒れ込む。

カムイは彼を支えて、横にさせる。

「例えそれがどんな色をしていても、お前さんに幸せがあるよう祈っておる……未来を生きるのだぞ、カムイ……」

「賢者様……?」

だが、彼はすでに息をしていなかった。

カムイは彼を床に降ろし、拳を握りしめた。

「なんで……賢者様!! こんな嫌だ……こんなこと……目を開けてください、賢者様——!!」

カムイは涙を流す。

それを見た暗夜軍師マクベスはカムイと虹の賢者を見下ろし、

「ふん……確かに死んだようだな。虹の賢者よ。またしても王命を果たしたか……運の良い奴め……」

そう言って、暗夜軍師マクベスは姿を消した。

カムイは暗夜軍師マクベスの居た所を一睨みした後、横たわる虹の賢者に頭を下げる。

「お許ください、賢者様……あなたを救えなかった。ごめんなさい、私はあなたの願いには応えられない……私は自分の幸せを願えない……ごめんなさい、私の選んだ道で世界を平和にしたいと思っていたのに……少しでも大切だと想う人を……不必要な殺戮を防ぐ為に、多

くの人を救う為に、この道を選んだのに……こんな事になってしまった。ごめんなさい、偉大なる竜よ。」

カムイは涙を拭う。

立ち上がると、頬を両頬を叩く。

「私はあなたの犠牲を無駄にはしない。あなたからいただいた力を元に、私は……いえ、私たちは進みます。」

カムイは最後にもう一度、深く頭を下げてそう言った。

カムイ達はノートルディア公国を後にした。

向かうは暗夜城。

結果はどうあれ、報告をする為に戻っていた。

そしてカムイ達は古い城跡に来ていた。

「やっとここまで戻って来たか。王城まではまだ随分あるが、もう少しだけ頑張って進むか……」

「そうだね。さすがに疲れちゃったね。早くお城で休みたいな……」
カムイの隣に居たエリーゼが汗を拭いながら言う。

カムイとしてはここで一休みしたい所だった。

だが、暗夜王ガロンの命令を考えると、この先に待っているのは自分にとって不利な命令ばかりだろう。

自分がいかに彼の命令に従っているとしても、限界はある。

虹の賢者のような犠牲をもう出さない為にも。

そして、これから先に起こるであろう白夜の兄弟姉妹達との戦い。

なら、暗夜王ガロンの命令を早めに聞き、対処を考えたい。

カムイは彼女を見て、

「……そうだな。すまないな、エリーゼ。かなり無理をさせているだろう。だが、あと数日もすれば王城に着くはずだ。それまで辛抱できるか？」

「うん！あたし頑張るね。」

彼女は笑顔でそう答えた。

そしてアクアと共に、今後の作戦を考えながら進む。
馬を走らせて、しばらくが経った。

カムイは後ろを走っていたエリーゼの様子がおかしい事に気付いた。

あの時は疲れているだけだと思ったが、そうではなさそうだ。

彼女は大量の汗を掻き、肩で息をしている。

その姿はあの時のタクミに似ている気がする。

「エリーゼ？」

カムイは皆に小休憩を入れる。

そして馬から降りて、エリーゼの側まで行く。

馬を止め、エリーゼが馬から降りると、

「あ、あれ……？おかしいな……なんだか、目の前が、回って……」

そう言っつて、エリーゼは膝を着いた。

カムイは駆け寄り、彼女を支える。

「エリーゼ！」

彼女に触れて、熱があるのが解る。

自分はあまりこういった事には詳しくはない。

だからカムイは叫ぶ。

「アクアさん！アクアさん、来て下さい！」

「どうしたの、カムイ？」

そして、駆けてきたアクアは状況を見て、エリーゼに駆け寄って彼女を見る。

カムイからも状況を聞いたアクアは眉を寄せて、エリーゼの腕の服を上げる。

そこには赤い発疹が出ていた。

「眩暈と熱、腕には発疹……まさか、この症状は……」

「アクアさん、もしかしてエリーゼさんは……」

「ええ、そのまさかよ。おそらくエリーゼは、島国特有の風土病にかかっているわ。ノートルディア公国で感染したものだと思うけれど……この病気は進行が早くて、放っておくと死に至る危険もある恐ろしいもの。白夜王国の薬草を用いた魔法薬があれば、すぐに治るけれど……でも、暗夜王国にその薬が存在するかどうか……」

「そんな……」

カムイは歯を食いしばる。

もつと早くに自分が気付いていれば何とかなったはずだ。

「自分は事を急ぎ過ぎてしまったのか。」

そう思っていると、

「おい、カムイ！マクベスから伝令があつたぞ！」

「なんだと？こんな時に！」

カムイは立ち上がり、伝令を持ってきたサイラスの元に駆けよる。

「まさか、また暗夜王ガロンからの命令か？」

「ああ、ノートルディア公国で手柄を挙げた褒美に、王の別邸のあるマカラスにて休息を取るようにとお達しだ。」

「……マカラス宮殿で休息だと？」

カムイは眉を寄せる。

そして、腕を組んで顎に指を当てる。

思い出していたのだ。

『……確か、マカラスには薬があつたはずだ。だが、あの時とは状況が違ふ。もしかしたらないかもしれない。』

カムイは横目でエリーゼを一目見た後、

「この状況で、暗夜王ガロンがまた誰かを殺せと言う無茶な任務ならば、放棄しようかと思つたが……休息ならありがたく使わせて貰おう。エリーゼを休ませる。ついでに薬も何とかする。」

「ん？エリーゼ様がどうかなさつたのか？」

「ああ。サイラス、すぐに皆に伝達してくれ。エリーゼが、ノートルディアで風土病にかかった。これより、マカラスに向かって急いで向かう。それと、エリーゼの臣下とフローラを呼んでくれ。」

「それは大変だ！わかつた、すぐに伝えてくる！」

そう言つて、サイラスは走つて行く。

そしてすぐに、エリーゼの臣下二人とフローラがやつて来る。

エルフィとハロルドはエリーゼを抱えて、荷台を作る。

そこにエリーゼを乗せて、馬を走らせる。

フローラの話によれば、幸いな事にマカラスに薬があると言うことだつた。

また、マカラスには王国一の医師が常駐して、この世界の全ての薬剤が貯蔵されていると。

フローラとアクアは、その薬がどれかは解る。なので、急いでマカラス宮殿へと向かう。

マカラス宮殿に着くと、様子がおかしい。

微かに感じる何か。

これは殺気だ。

仲間に待機を命じて、指揮はアクアに頼んだ。

カムイは数名を連れて、門を越えて中に入る。

と、その奥から人影が見えてくる。

「……宮殿の奥から、誰か来るな……」

カムイは夜刀神に手をかける。

奥から来たのは白夜王国の兵。

そしてもう一人、白夜王国の第一王子リヨウマだ。

「……………」

カムイは剣は抜かずに、彼を見る。

リヨウマはカムイを見て、

「……待っていたぞ、カムイ。」

「……リヨウマ……兄さん……」

カムイは眉を寄せて、瞳を揺らす。

タクミの口から、虹の賢者様から力を得たと言うリヨウマ。

そのリヨウマが白夜ではなく、ここに居るのか。

だが、今となつてはなんとなくだが解る気がする。

彼はきつと反乱軍と接触を取る為に姿を消したのかもしれない。

リヨウマはジツとカムイを見つめて、

「会うのはあの国境で別れて以来か？随分、久しいな。今ではすっかり、暗夜王国の戦士が板についているように見受けるぞ。」

「……兄さん、どうしてここに白夜軍がいるのですか？なぜ、私たちがここに居る……いや、来ると解つたのですか？」

カムイの頬に一筋の汗が伝う。

聞かなくても解る。

おそらくは、暗夜王ガロンか暗夜軍師マクベス辺りが何かをしたのだろう。

リヨウマは腕を組み、

「それに答える必要は無いだろう。経緯はどうあれ、こうして出会ってしまった以上は剣を交えるほかない。」

「……それはできないんです、兄さん。今回は見逃してください。妹が……エリーゼが病気にかかって、一刻も早く薬が必要なんです。」

「ほう……？ 暗夜の王女が、病気なのか。」

リヨウマは目を細める。

彼は腕を解き、

「……では、交換条件だ。」

「交換条件？」

「ああ。お前が白夜王国に戻るといふのなら、俺は今ここで、兵を退こう。」

「……私が白夜王国に？」

カムイは驚く。

そして俯いた。

自分が戻れば、エリーゼは助かる。

また、あの時と同じ悲しみを味わう事はない。

カムイは首を一度振り、

「リヨウマ兄さん……それは……できない。」

カムイは顔を上げる。

リヨウマを、いや、リヨウマの目をじつと見て、

「私はまだ、暗夜王国でやり残した事がある。それを終えぬまま、私は暗夜の兄弟姉妹を裏切る事はできない！」

「それは、本当の兄弟姉妹である俺たちを裏切ってまでの決意なのか。」

カムイは泣きそうな顔で頷く。

リヨウマは一呼吸起き、

「……そうか。ならばやはり、闘うしかないようだな。さあ、刀を抜

け、カムイ。その神刀で力を示してみせろ。」

リヨウマは剣を抜く。

カムイは涙目になり始める。

「兄さん、やめてくれ！確かに、私は暗夜王国側についた。でも、私は白夜王国との戦争を望んでいない！誰も気付けたくないんだ！」

「ふん、綺麗事を！お前はそうでも、ガロン王は違うだろう？！暗夜王国のやり方を知らぬお前に何がわかる！！」

「けど、兄さん！白夜王国と暗夜王国は、こうやって争う事はない！手と手を取り合って、共に歩んで行ける！！」

「カムイ、お前は知らぬだけだ！」

だが、リヨウマの目はもう話を聞きそうにない。

カムイは剣を抜き、

「……フローラ！フェリシア！今すぐ門の側に皆に伝えろ！カミラ姉さんたちとエリーゼの臣下はエリーゼを守りながら、後退！お前たちは、アクアさんとレオンの臣下と共に薬を入手しろ！入手次第、カミラ姉さんたちと合流しろ！」

「はい！」

フローラとフェリシアが駆けて行く。

カムイは剣を構え、

「その間、私たちはこの人数で時間を稼ぐぞ！」

「はい！」

その声と共に、他の者達も武器を構える。

リヨウマは気付いていた。

カムイが自分に向ける面差しや話し方は昔の幼い彼女だと。

彼女が自分に向ける瞳には、何か強い意志を感じる。

けれど、リヨウマは一国の王子として引くことはできないのだ。

リヨウマは剣先をカムイに向け、

「全員、戦闘準備！かかれ！」

「はっ！」

そして戦い始める。

横から、カムイを狙う暗器をスズカゼが弾く。

その暗器を投げたのはリヨウマの臣下のサイゾウとカゲロウ。
サイゾウはスズカゼの双子の兄だ。

そのサイゾウとスズカゼは睨み合う。

「スズカゼ……まさか、お前まで裏切るとはな。白夜王族に仕える忍として、双子の兄として、残念に思うぞ。」

「兄さん……私たちは、生まれた時からずっと一緒でしたね。私は兄さんを落胆させるようなことは決してしたくないと思っていました。でも、私は誰に何と言われようと、あなたに罵られようと、カムイ様と共に居ることを選んだのです。例えもう兄弟に戻れなくても、兄さん……私は、あなたと闘います！」

「馬鹿な弟だ……お前は、本当に……」

そう言つて、二人は武器を交える。

カムイはそれを横目で見て、

『すまない、スズカゼ。兄弟で戦わせて……本当の兄弟なのだ。きつと私以上に辛いだろうに……』

その中でも、カムイだけは兵を殺せずにいる。

リヨウマはその姿を見て、

「やはり、お前は暗夜のやり方を知らぬ！ならば、力づくでも、お前を白夜王国に連れ帰る……今日こそは一步も引かぬ!! 白夜王国第一王子の刀、受けてみよ！はあああつ!!!!」

「くっ……!!」

カムイはリヨウマの雷撃を避けられず、身構える。

だが、その攻撃が当たる直前だった。

「……させないよ！」

「殺しちゃうのっ！」

カムイの前を青年と馬に乗った少女が通り過ぎて行く。

二人はリヨウマの攻撃を反らし、交わり、反撃する。

カムイは二人を見て、驚いた。

その二人は、マークスの臣下であるラズワルドとピエリだった。

カムイは瞳を揺らす。

自分が白夜の兵として、暗夜城で戦ったマークスは死んだ。

二人は主君であるマークスを救えなかった事を悔やんでいたと聞く。

だが、ラズワールドの方はピエリを庇って死んだと。

その時にそう言っていたと、ピエリが自分を見て睨んでいたの思ひ出す。

それを言えば、エリーゼの臣下たちもそうだ。

結果的には自分のせいで死なせてしまった。

彼らの瞳の奥にあった後悔と悲しみの目は忘れる事は出来ないだろう。

カムイは頭を振って、三人の方を見る。

と、リヨウマの剣を避けて、カムイの前に立つ二人。

「ぐっ!! な、何だ……!!」

「ふうっ、良かった！間に合ったみたいだね。無事で何よりだよ、カムイ様！」

「危なかったの!!でもちゃんと助けたのよ！」

二人はカムイを見て、ホツとして笑う。

カムイは二人を見て、

「……マークス兄さんの臣下だったな。」

「はい。僕はラズワールド。主君であるマークス様から命を受けて、カムイ様に加勢しに来たんだ。」

「ピエリは、ピエリっていうの！マークス様、カムイ様の事とっても心配してたのよ。でも任務が忙しくて来れないから、臣下のピエリ達が代わりに来たの！」

カムイは立ち上がり、

「そうですか……それはありがとうございます。」

「なるほどな……道理で、俺の刀を止められるわけだ。あの男の臣下なら、相当の手練れの者たちだと見受ける。だが、俺の臣下たちも相当強いぞ。暗夜の者を簡単に勝たはせん。全員、気を引き締めてかれ！」

「はっ!!」

リヨウマの声に白夜兵達の士気が上がる。

カムイは眉を寄せて、

「リヨウマ兄さん！もうやめてくれ！」

「カムイ様、諦めた方がいいの。向こうは結構やる気満々なよ。」

「そんな顔しないで、カムイ様。こういう時は、嘘でも笑った方が元気になるんだよ？ほらほら、こうほつぺたを上げて。」

と、ラズワルドがカムイに自分の方を上げてニツと笑う。

カムイは視線を外して、

「すまないが、今は笑えない。……笑えないんだ……この戦闘を早く終わらせない。エリーゼの薬が早く見つかって欲しい。そしてあの子の笑顔をもう一度……」

「……カムイ様、それってエリーゼ様に、何かあったってこと？」

「ああ、事態は一刻を争う。」

「えへへ……じゃあ早くあいつらを殺して、エリーゼ様を助けるの！敵はみーんな見事な肉塊にしてやるのよ！」

ピエリは笑顔で、白夜兵に槍を構える。

カムイは眉を寄せたまま、

「あ……」

だが、その先は言えなかった。

白夜兵を殺さないでくれと……

今は自分でも言った。

一刻の猶予もないと。

けれど、やっぱりそうだ。

それでも、自分は言わねばならない。

「やる気を出してくれるのは有り難い。だが、無駄な犠牲は出したくないんだ。だから……」

二人はキョトンとした後、ラズワルドは笑顔でカムイに言う。

「はい。ご命令なら、その通りに。犠牲を出さずに済むのなら、それが一番ですよね。」

「むー。殺さないなんてつまんないの！でも、ピエリもなるべく頑張ら張ってあげるのよ。」

ピエリは頬を膨らませて言った。

カムイは武器を構え直し、

「ありがとうございます……よろしくお願ひします。リヨウマ兄さん、あなたとは戦いたくはなかった。そして白夜に戻る事もできない。だから今は暗夜の妹を守る為に、私はあなたに剣を向けます。」
「ほう、妹……か。お前にとつての妹は、暗夜王国にいるというわけだな。」

「……………」

「できれば俺も、お前とそんな風に兄妹として過ごしたかった。」

そう言うリヨウマの姿は、あの時のリヨウマを想い出す。

兄妹として過ごしたいと言ってくれたリヨウマ。

血が繋がらないと解っていて、妹として、家族として向かい入れてくれたもう一人の兄。

けれど、自分はこの道を選んだのだ。

なら、迷いは捨てなければならぬ。

今から自分が相手をするのは白夜の最強の戦士なのだから。

カムイは剣を向けたまま、リヨウマを見据える。

リヨウマも、剣を構えてカムイを見据える。

「……だが、今からでも遅くはない。この勝負に勝ち、お前を白夜に連れ帰る！ いざ、尋常に……勝負！」

カムイは改めて、リヨウマと剣を交じる。

しばらくして、カムイは肩で息をしながらリヨウマの剣を受け止める。

と、カミラ達が駆け込んでくる。

それはつまり、薬を入手したと言うことだ。

なおかつ、カミラがここに来ると言うことはあちらの安全は確保できた。

カムイ達の士気は高まった。

カミラ達が合流してくれば、形成は逆転できる。

それをいち早く理解したリヨウマは、

「包囲を突破したのか……止むを得ぬ。皆、退け！ 暗夜の増援が来るまでに、この地を離れる！」

リヨウマは馬を引き寄せ、乗る。

そしてカムイと無言で見つめ合った後、兵を率いて撤退していった。

リヨウマ達が去った後、エリーゼを休ませる。

それでも、しばらくは警戒を怠る訳にはいかなかった。

「……白夜兵は去ってくれたようだな。」

「はい。これなら、安心してエリーゼ様を休ませることはできるでしょう。」

同じく、自分と見回りに来ていたジョーカー。

二人は少し安心してマカラス宮殿に戻る。

カムイはエリーゼの元へと行く。

「アクアさん、エリーゼさんの様子はどうですか？」

「大丈夫よ。今は眠っているわ。後は、もう少し安静に寝ているれば良くなるわ。」

「ありがとうございます、アクアさん。」

「構わないわ。……それとカムイ、気を付けなさい。あなたをよく思っていない暗夜王国の人間が居る。だから用心はちゃんとしていなさい。」

「はい……アクアさん。」

アクアのその表情は母であり、姉だった頃のようにだった。

カムイは少し嬉しい気持ちになっていた。

懐かしい、あの時間を思い出し。

と、エリーゼが目を開ける。

「う……ん……カムイお姉ちゃん、アクアお姉ちゃん……」

「エリーゼ、良かった。気がついたみたいですね。」

カムイは膝を着いて、エリーゼの顔を見る。

エリーゼは眉を寄せて、悲しそうに言う。

「お姉ちゃん……あたし、夢を見たの……ギウンターが、あたしに話し掛けてくる夢……」

「ギウンターが？」

カムイは首を傾げる。

アクアはそれをじつと聞いていた。
エリーゼは続ける。

「うん……ギウンター、カムイお姉ちゃんのことをずっと気にしてたの。とても、寂しそうだった……ギウンター……大丈夫……きつと、もうすぐ……すう、すう、すう……」

そう言つて、エリーゼは再び眠りについた。

カムイは立ち上がり、

「ギウンターの夢、か……。だが、おそらくあの日にギウンターは無限溪谷に落ちて死んでしまったはずだ。仮に生きていたとしても、こちらには帰つて来れないだろう……会えることはできないだろうな。」

カムイは眉を寄せる。

そう、仮に彼が生きていても、こちらから透魔王国へと行く必要がある。

そして、自分が透魔王国へと向かうのはこれが終わってからだ。

だとすれば、彼に会うのは当分先へとなる。

おそらく、その頃には彼は死んでいるだろう。

生き延びたとしても、透魔王ハイドラが見逃すはずがない。

そんなカムイを、アクアは黙つて見守っていた。

カムイ一行はエリーゼの体調が良くなったのを確認してから、王城へと帰った。

カムイはアクアを連れて王の間へと行く。

それは、今のアクアに暗夜王ガロンの状態を知ってもらうため。

そしてもう一つ。

暗夜王ガロンに、透魔王ハイドラに、アクアが今は味方であることを示唆させる。

その事で、アクアを守れると思つたからだ。

カムイとアクアが廊下を歩いていると、兵達が入れ替わり立ち代わり、世話しなく動き回っていた。

すると、扉の前に暗夜軍師マクベスが笑みを浮かべて、

「おお、カムイ様。よくお戻りになりました。」

「……ああ、途中で休息を取れたからな。離したいことは山々あるが、今は暗夜王に報告が先だろう。」

「ええ、承知しておりますとも。」

「ところで、マクベス。王城が騒がしいが、何かあったのか？」

「シユヴァリエ公国で反乱があったのですよ。まだ活動は小規模ですが、今のうちに制圧しておくために兵を準備しているのです。」

「反乱……」

「ええ、詳しい事はガロン王様からお聞きになることでしょう。では、私はガロン王様にお伝えしてきますので、カムイ様は謁見の間へ。」

「わかった。」

カムイは思い出す。

やはりリヨウマがあの場合に居たのは、反乱軍にいるクリムゾンに会いに来ていたのかもしれないと。

しばらくして、暗夜王ガロンが姿を現して玉座に座る。

カムイを見下ろし、

「よく戻った、我が子よ。此度もまた、見事に任を果たしたそうだな。お前の成長には目を見張るものがある。父として、喜ばしく思うぞ。」

「……ありがとうございます。」

カムイは拳を握りしめて、顔には出さないように気を付ける。

暗夜王ガロンは続けて言う。

「さて、先程マクベスから聞いたかと思うが、数日前よりシユヴァリエ公国にて反乱が起こっており。規模はまだ小さいが、あの国は優秀な騎士を輩出する国。その軍事力は侮れん。そこで、その反乱を平定するための正規兵を……カムイ。お前に率いてもらうこととする。」

「……私が、正規兵を、ですか？」

「ああ、そのお通りだ。」

カムイは眉を寄せる。

『……畏だな。何かを仕掛ける気だろうか……さて、どうするか。』

カムイは表情を戻し、

「何かの間違いでは？ 私には、それほどの力も、経験ありません。ここは他の者に任せた方が宜しいのでは。」

「何だと……？不服と申すのか。これはお前を信じての任務だ。わしを失望してくれるな、我が子よ。」

カムイは視線を外し、

「……わかりました。お父様の期待を裏切る訳にはいきません。その任を、お受けします。」

「期待しているぞ、カムイ。では、話は終わりだ。」

暗夜王ガロンは立ち上がる。

カムイは視線を彼に戻し、

「待つて下さい。私からもう一つ報告が。」

「……何だ。」

「はい。白夜王国に連れ去られた王女……アクアさんが戻ってきました。」

「なに……？」

暗夜王ガロンはカムイの後ろに控えていたアクアを見る。

アクアも一歩前に出て、暗夜王ガロンを見上げる。

二人は黙って見つめ合う。

暗夜王ガロンは眉を寄せて、

「お前が……アクアか。」

「ええ。」

「ほう……久しいな。再びお前に会えるとは、思っていなかったぞ。お前もカムイと共に、反乱軍を平定してくるがよい。故郷を見て回るには、良い機会であろう。」

「……………」

「さて……今度こそ話は終わりだ。朗報を期待しておるぞ。我が子たちよ……」

そう言つて、暗夜王ガロンは颯爽と謁見の間から出て行った。

カムイはアクアを見て、

「すいません、アクアさん。久しぶりの親子の再開を期待していたんですが、お父様は忙しいみたいです。」

「構わないわ、カムイ。私には、あれで十分だわ。私自身、こんな形で再開するとは思っていなかったから。声を掛けてもらえただけ、まし

と言うものよ。」

「……そうですか、では戻りましょうか、アクアさん。」

二人は暗夜城に用意された部屋へと向かう。

カムイはアクアを部屋に残して、部屋を出る。

それは、暗夜王ガロンの用意した正規兵達を見る為だ。

兵達の居る広間へと向かう。

扉を開ける直前、

「おお……！カムイ王女！」

「ガンズ……」

そこにはあの日、自分達を襲った兵士ガンズがいた。

カムイは彼を睨みつける。

「そんなに睨まないでくださいよ。あれは手違いだったですから。しかし、正規兵を率いるというお話は本当だったのですね。さすがはカムイ様。王族らしく、実力がおありだ。」

「……私に、何の用だ。」

「ええ、私は貴女をお待ちしていたのですよ。私も王女と共にシユヴアリエへ向かう、正規兵の一人なのです。これからは私もお力添えますすゆえ、どうか大船に乗った気持ちでいて下さい。」

「……ほう、力添いか……私はまだ、無限溪谷での事を許していないのだが。」

「ですから、あれは手違いだったと申したでしょう。あの時の無礼、どうかお許しください。ですが、その結果的にはあなたのお力が認められ、ここまで上がりつめたのですから。私自身、驚いているのですよ。白夜王国の血族である貴女が、本当の故郷である白夜王国を、兄弟姉妹を裏切って、こうして育ての親たる暗夜王国を、親を兄弟姉妹を選んだ。ガロン王は、それを大変お喜びになっておられます。いやはや、本当に心強い。今後もどうか、よろしくお願い致しますね。」

そう言っつて、彼は歩いて行つた。

カムイは気持ち切り替えて、広間に入る。

正規兵達と挨拶を交わした後、旅の支度を始める。

次の日、カムイ達はシュヴアリエ公国に向かって進軍した。

カムイ達は無事、シュヴアリエ公国へとたどり着いた。

カムイは馬をおり、辺りを歩いて見て回る。

「……無事、シュヴアリエ公国にたどり着いたが……見たところ、今は反乱らしき活動は起きていないようだな。」

「そうねえ……今はアジトにでも戻っているのではないかしら。私たちもそろそろ休んで、明日に備えた方が良くもされないわ。公国内に古城があるようだから、今日はそこで休息を取りましょう。」

後ろから、カミラが歩いて来てカムイに近付く。

その隣にはエリーゼも居た。

カムイは彼女に振り返り、

「わかりました。」

カムイ達が歩き出すと、

「……来たね、カムイ。」

「……え？」

カムイは立ち止まり、振り返る。

その瞬間、カムイの頬を矢がかすめていく。

カムイの見つめるその先には、弓を構えていたタクミの姿。

「カムイ!!」

カミラは口に手を当てて、声を上げた。

タクミは相変わらず怒りに満ちた瞳で、

「ふん……惜しかったな。本当は、頭を狙ったんだけど。」

「タクミ！ やっぱり、お前だったか……」

カムイが進みそうになるのを、カミラが腕を掴んで止める。

「ダメよ、カムイ！ 危険だわ、下がっていなさい。」

そういつて、カミラがカムイの前に立つ。

タクミは眉を寄せて、

「ふーん。そいつを後ろにやっていいの？ そっちにも僕の兵たちがいっぱいいるんだけど。」

「やめるんだ、タクミ！ 私には白夜と戦うつもりはない！ ただ、シュヴアリエ公国の反乱を止めに来ただけだ。これ以上、無駄な争いは――」

「無駄だった？裏切り者のクセに、正義ぶるな!!」

「——!!」

タクミは弓を下ろして、拳を握りしめる。

そこに、飛竜の羽ばたき音がして、一人の騎士が降りてきた。

「ちっ、やっぱり、お前たちは反乱を抑え込むつもりだな。ならば尚更、退くわけにはいかない。」

『……クリムゾン……』

カムイは拳を握りしめる。

彼女はそれほど仲が良かった訳ではなかった。

けれど、彼女は自分を引っ張ってくれたのだ。

それはまるで、自分にとっては初めての経験だった。

彼女は斧を構えて、

「私はクリムゾン・シュヴァリエの反乱兵をやってる。悪いけど、お前たちが暗夜王国を出た時から、ずっと後をつけさせてもらってた。同胞である白夜王国の兵に密告するためにね。」

「……そういうこと。とんだ裏切り者ね。」

カミラが目を細めて、彼女を見据える。

タクミはカムイを見ながら、

「はあ？裏切り……？面白いことを言うね。クリムゾンはカムイと同じ事をしただけだよ。他国の者と手を組み、自国の民を罠に陥れた。」
「ちよつと待ってよ！カムイお姉ちゃんは、そんな事してないわ！」

エリーゼが腕を上げて怒りだした。

タクミは忌々しそうに、

「鬱陶しいなあ……」

タクミは弓を引き、矢を放つ。

それは一直線にエリーゼに向かっていき、肩に突き刺さる。

「きやつ!!」

「エリーゼ!!」

カミラがエリーゼに駆け寄り、矢を抜いて布を当てる。

カムイは剣を抜いて、二人の前に立つ。

タクミは再び弓を引き、

「目障りなだけけど……さっさと死んでくれないかな？ 僕やクリムゾンが望んでいるのは、この国を暗夜王国から解放すること……そして、暗夜兵の排除だ。僕たちと闘いなよ、カムイ。ガロン王もそれ望んでいるんだろう？ 僕たちが死ねばいいって思ってるんだろう？」

「違う！ 違うんだ、タクミ！ こんな殺し合いをしなくても、解り合えるんだ！ 暗夜も白夜も！ だから——」

「うるさい!! あんたのその戯言はもううんざりだ！ 今度こそあんたたちを倒して、白夜王国に平和を取り戻す！ 全軍、戦闘準備!! 暗夜王国の兵を殲滅せよ！」

「タクミ！」

「殺してやる……そうだよ……お前たちさえ殺せば……そうすればきつと……この頭の痛みは、消えるはずなんだ……」

そう言って、矢を放つタクミ。

その矢をカムイは薙ぎ払う。

「カムイ様！」 「カムイ！」

そして、カムイの仲間達がやって来る。

カムイは一呼吸して、

「全員、戦闘準備！ フローラとフェリシアはエリーゼの手当てを！ まず目は目の前の白夜兵ならびに、反乱兵を止める！」

カムイは声を上げた。

「私は暗夜王国の支配には屈しないよ！ この手で自由を勝ち取ってみせる！ いくよ、みんな!!」

クリムゾンもまた、飛竜に乗って号令をかける。

戦闘はすぐに始まった。

それは広く、大きくなっていく。

途中、国境を護っていたシャーロットとブノアという兵二人を仲間に入れた。

カムイは正規兵を使わない。

それは、暗夜王ガロンが集めた兵達だからだ。

彼らは信用できない。

だからこそ、信用できる仲間と戦う。

案の定、この鬪いの最中に武器を持たない市民たちが襲われた。

カムイは仲間に民家の人々に忠告しに行ってもらおう。

そして自分は、タクミとクリムゾンの相手をする。

「僕は今度こそ、お前たちに勝つ……暗夜王国の手の者は皆、消してやるさ。」

タクミは怒りを露わにしてカムイに矢を放ち続ける。

だが、カムイもそれを避けてタクミに近付いて行く。

それでも、すぐに飛竜に乗っているクリムゾンの攻撃によつて後退させられる。

カムイは一呼吸して、

「やってみるか……」

カムイは手を前に出して、魔術を放つ。

「な!!」

「タクミ! あいつは魔術も使えるのかい☒」

「知る訳ないだろ! でも、だからなんだって言うんだ!」

タクミたちの前に、風が吹き荒れる。

飛竜に乗っていたクリムゾンは吹き飛ばされ、民家に叩き付けられる。

そのまま崩れ落ちる。

タクミもまた、顔を腕で守って踏みとどまっていた。

カムイはそこに踏み込み、タクミを蹴り飛ばす。

そして、尻餅ついたタクミの首に剣先を突きつける。

「くっ……また、僕の負けか……」

「ああ、もうお前は闘えない。兵を退いて、白夜王国に帰るんだ。」

「くそっ……なぜだ!! なぜ僕はあんたに勝てない……! 白夜王国を

……母上やみんなを捨てて、暗夜王国についた裏切り者のあんたに!

「タクミ……」

カムイの剣が下がる。

その瞬間、クリムゾンがカムイを押しさえつける。

クリムゾンの後ろからカムイの仲間達が駆け込んでくるのが見える。

「タクミ！あんたは今のうちに兵を連れて一旦下がらな！」

「クリムゾン！」

クリムゾンはタクミを見つめ、

「リヨウマに伝えおくれ！絶対に暗夜王ガロンに負けるなと！」

「くそっ！すまない、クリムゾン！カムイ！！絶対に、お前だけは許さない……殺してやる……ぶっ潰してやる……！必ず……！！例えどんな手を使ってもでも……！！」

タクミは走って行く。

カムイは竜化して、クリムゾンを薙ぎ払う。

人型に戻ると、クリムゾンはカムイを睨みつける。

「私が負けても……シユヴァリエの誇りは負けないよ……」

「……ああ、そうだと思う。」

「は？」

「あなたの強い意志、自由を取ろうとする……あなたのその姿は私は知っているから。」

「……あんた……」

クリムゾンはカムイを疑問に思っていたようだった。

と、そこに、

「うあわああああ！！」

「悲鳴だと!?まさか!」

「街の方からだ!」

カムイ達は、その悲鳴の上がった街の方に駆けて行く。

そこには、待機ならびに後退させていたはずの正規兵達が街の者達を、シユヴァリエの反乱兵^{騎士}達を襲っていた。

そして、その指揮を取っていたのはあのガンズ。

彼らは楽しそうに、もてあそぶように剣を振るう。

「ははははは!!暗夜に逆らう者は皆殺しだああっ!」

「ぐ、は……っ!!」

カムイは拳を握りしめ、

「何をしている！私は待機を命じたはずだ！」

「おお、カムイ様。いやなに、なにやら白夜兵達と戦闘になったと聞いて駆け付けたのですよ。反乱を起こしたシュヴァリエ公国の者たちを処分しているんですよ。」

「……だが、私の命なしに動いたことには変わりない。将の命令なしに事を動かすことが、どういう事か解っているはずだ、ガンズ！」

カムイは剣先を向ける。

彼は一歩下がり、

「ですが、そもそもこの命令を下したのはガロン王様ですぞ。私はガロン王から、反乱者は殺せ、と命じられております。それを行ったに過ぎない。」

「だが、お前は殺した者達の多くは一般市民だ！」

「ですが、いつ武器を取って立ち上がるかわかったものではありません。この者達に何かされてからでは遅いのですよ？」

「それは違う！そんなものは、無抵抗の相手を嬲り殺すためのただの言い訳だ！それを理由に、命を奪っていいはずがないのだ！今すぐ、攻撃をやめろ、ガンズ！これは、命令だ！」

「くくく。」

「何がおかしい！」

「そもそも、あなたの口からそれを言うとは思いませんでした。あなたのその手は、一体何人の犠牲の血が流れているのですか？」

「——！！」

カムイは一歩下がり、剣を下ろす。

ガンズは続ける。

「それに、申したはずです。これはガロン王様の命令なのです。逆らうことはできません。どうか、聞き入れてくださいますよう。では、私は任務に戻りますので。カムイ様は、先程の戦闘の疲れを癒していただきます。」

そう言って、また一人、また一人、一般人が目の前で死んでいく。

クリムゾンは、押さえつけていたサイラスを薙ぎ払って、ガンズに斧を振るう。

「待て、クリムゾン！」

「うるさい！よくも、無抵抗の民を！」

「がはは！お前も反乱兵だな!!」

クリムゾンは簡単に倒された。

彼女の血が自分の足元を伝う。

本来なら、クリムゾンはガンズには負けなかっただろう。

だが、今の彼女は殺された。

当然だ。

先程まで、自分達と戦っていたのだ。

それに、さっきの魔法と竜の攻撃で彼女は立っているのもやつと
だったはずだ。

カムイは膝を着く。

クリムゾンの流す血を見つめて、地面についた手を、彼女の血に染
まった血を、無抵抗の一般人の流す血を、自由の為に闘っていた騎士
達の血を、それらを握りしめてカムイは涙を堪える。

ここで泣く事は許されない。

ここで泣くのは彼らに対しての侮辱だ。

彼らの想いを、悔しさを、自分は受け入れなければならない。

そして、駆け付けたカミラはカムイの姿を見て、

「ああ、カムイ……可哀想に。こんな酷い光景、あなたには見せたくな
かったわ。」

「カミラ姉さん……」

「可哀想に……逃げ遅れた白夜兵も、何人が犠牲になっていたわ。」

それを聞いて、カムイは顔を上げる。

辺りをもう一度よく見渡す。

彼女の言う通りだった。

中には白夜の兵達も交じっている。

「カミラ姉さん……これは誰の望みだと思えますか……暗夜王国の全
てですか？それとも、暗夜王ガロンですか？」

「……カムイ……」

「こんな事を世界は望んでいるのですか？何の意味のないこんな殺戮

を……。私は何をすれば良かったのですか？ここに、何の正義があるんですか？教えて下さい……。姉さん。」

「……伝令を呼びましょう、カムイ。お父様にご報告しないと。そしてごめんなさい、カムイ。私はあなたの欲しい答えを出してあげられないし、教えてあげることができない……。けど、一つ言えることは、実の娘である私であっても、お父様に逆らっては殺されてしまうという事実。命が惜しければ、全てを受け入れることね。例え、目の前の光景にどんな思いを抱いても。」

そう言つて、カミラは歩いて行つた。

カムイは唇を噛みしめる。

『ああ……。私は一体、どれだけの犠牲を払えば世界を平和にできるのだろうか……。あの時間に帰るのだろうか……。どれだけの人を殺せば……。世界は平和をのぞんでくれるのだろうか……。』

カムイは自分の手についた血を見る。

それを握りしめて、

「違う……。これはだれも望んでいない願いだ……。そんな願いの為に、多くの犠牲をだしてしまつたんだ……。私は……。私に力がないから……。」

カムイは立ち上がる。

この殺戮を楽しむ兵達を睨み、そして自分の力のなさを呪つた。

その後、全てが終わつた。

一人、夜空を見上げていたカムイの後ろから、

「……大丈夫、カムイ？」

「なにがですか、アクアさん？」

「タクミやあのクリムゾンたちの事よ。あなたはタクミの事を一番気にしているように思えるから……。だからこそ、彼は変わってしまったのがわかるの。私自身は、彼に姉兄きょうだいとして認められていないけど……。それでもタクミは、私に優しくしてくれたことがあったわ。それに……。あんな風に声を荒げて、殺すなんて言う子じゃなかった。今の彼はまるで……。」

「……ええ、タクミは昔から優しくくて怖がりで……。それでいて、寂しが

り屋なんだ。それに比べて、自分は本当に情けない。私は昔、血の違う兄弟姉妹きょうだいと仲良くする事ができず、距離を置いていました。けれど、その距離を埋めてくれたのはタクミなんです。後ろをつけて来て、恐がりなのに懸命に自分について来て……だからきつと、アクアさんの言う通りでしょうね。その原因を作ってしまったのは自分です。私は、この選択を選んだことを後悔したくない……けれど、心のどこかで後悔しているのかもしれない。私が白夜を裏切ったからタクミは……」

「……そうね。血が違うと言うのは時に辛いわね。私もそうだった。だから、暗夜の兄弟姉妹きょうだいとも、白夜の兄弟姉妹きょうだいとも距離を作ってしまったっていた。今なら、その一歩をもっと早くに出していればと後悔している事もあるわ。けど、カムイが白夜を裏切ったからあの子があんなったと言うのは原因の一つかもしれない。でも、あの狂気じみた感情。あれは……今の彼は、本当のタクミなのかしら？」

「……多分、半分だけは別人……だろうな……」
カムイはアクアを見て、

「それに、クリムゾン達の事に関しては、私に力がなかったから救えなかった。」

「カムイ——」

「私は、私の力のなさを思い知らされた。こちら側でやらねばならない事があった。けど、それはこんな殺戮を防ぎたかった。暗夜王国も、白夜王国も救いたい……救わねばならない。それが私にできる彼らにできる償いだ。」

カムイは立ち上がり、
「夢に見た、あの平和の為に……」

カムイはそう言って、アクアの横を通り過ぎた。

アクアは胸に手を当てて、

「カムイ……」

その後、カムイ達は暗夜王ガロンの伝令の元、ミューズ公国・アミュージアに来ていた。

この国は中立国。

そして、ここには暗夜王ガロンは定期的に来ている。

前の時は、ここでの暗殺は失敗した。

今回はどうやるべきか……

と、考え込んでいた所に、

「カムイ、大丈夫よ。ここは中立国。何か起これば、国の信用問題に関わるわ。」

「……そうですね。」

それでも、カムイは視線を落として気に病んでいた。

そんな前から、

「随分と酷い顔をしているね、カムイ姉さん。」

「ん？」

「それと、気をつけなよ？安全だからと言っても、警戒は怠らない方がいい。中立であるって事は、いつ白夜の者が現れてもおかしくないだから。」

「レオン。」

前から来たのは、レオンだった。

「久しぶり、カムイ姉さん。」

「……レオンも来たのだな。任務はもういいのか？」

「ああ。おおかた、終わったよ。今回の父上の警護が滞りなく終われば、後は好きにしていってさ。だからこれからは、僕も一緒に闘うよ。」

「そうか。ありがとう、レオン。お前がいてくれるのは、心強い。」

「……ところで姉さん——」

「レオン様ー!! やつと来てくださっただけですわね! 俺もうお傍を離れている間、心配で心配で煩慮の念が永き虚無に廃されるのでは……!」

「ご無事で良かったです。ガロン王様からの任務と言えど、一体どんなコトをやらされてるのか気が気じゃなかったんですよ……?」

レオンが何かを言いかけた時、彼の臣下二人がやって来た。

そして二人は彼に詰め寄った。

「う、うわっ?!近い近い顔が近い!!心配してくれたのは解ったから、さっさと僕から離れろ!!」

「はい、すみません。」

「ご命令とあらば従います。」

と、二人は離れた。

レオンはため息をついて、

「それより、そろそろ父上がここに到着される頃だ。僕は先にショー会場に向かうことにするよ。」

「ショー会場……」

カムイは視線を外して目を細める。

レオンは思い出すように、

「ああ、姉さんは知らないよね。初めてここに来るからね。ここミューズ公国のアミュージアは歌と踊りのショーが盛んなんだ。父上が来るといつも、盛大なショーを聞いて歓迎してくれるんだよ。」

「ああ、そうだな……」

「……ふう、姉さんもせつつかくだから楽しむといいよ。戦士にも休息は必要だからね。ただし、あんまり羽目を外しすぎないように。それじゃ、また後で!いくよ、オーデイン、ゼロ。」

レオンは二人を連れて、歩いて行った。

——レオンは臣下と共に歩きながら、ショー会場に向かっていた。

オーデインがレオンの横で、

「レオン様、なにかいい事でもあったんですか?」

「ん?いや、カムイ姉さんが変わったな、って思ってたね。昔はどこか他人染みた雰囲気を作り出すことが多かったからね。でも……今はとても近く感じる。」

「それは、良かったじゃないですか、レオン様。血の繋がりはなくとも、カムイ様はレオン様の姉君。カムイ様自身、歩み寄ろうとしているんじゃないですか。」

「だと、いいけどね。」

レオンは少し嬉しそうに微笑む。

だが、同じくレオンの横にゼロが、

「……ですが、時折カムイ様が見せる雰囲気や目は……アレはやばいですよ。とても、ずっと城の中にいた姫とは思えない瞳です。殺意、怒り、覚悟……何よりも、戦い慣れをしていらっしやる。いくら、マークス様に剣術やレオン様から戦術を習っていたとは言え、すぐにあそこまで指示を出せるのは普通じゃない。」

「……お前の目から見てそうなら、そうなんだろうな。」

「はい。カムイ様は何かを隠している。そして、何かを覚悟している。けれど、カムイ様自身はとても脆い。俺の直感がそう言ってます。」

「……そう。」

レオンは真剣な表情で言うゼロを見て、眉を寄せた。

カムイは他の者達にも、好きに動くように伝えて、カムイは街を歩

く。
気持ちを整理し、暗夜王ガロンの前に立つたために。

「……さて、行くか。」

カムイはショー会場へと向かう。

会場に入ると、

「カムイ姉さん、こっち。」

「レオン……」

「人が多いからね。姉さんが無事に来れるか心配したよ。」

「流石に、迷子にはなりたくないな。」

「でも、いいタイミングだよ、姉さん。ちょうど、父上が到着されたところなんだ。」

そう言つて、カムイを連れて上段へと上がっていく。

レオンがそこに座っている暗夜王ガロンの横へと行く。

「父上、カムイ姉さんが参りました。」

暗夜王ガロンは視線だけをカムイに向ける。

カムイは黙って彼を見る。

「……カムイか。シユヴァリエでの件は耳に入っておる。反乱兵のみならず、武器を持たぬ街の者たちまで根絶やしにしたそうだな。」

「ええ、その件に関してはあなたの用意した正規兵たちが頑張つてく

れましたよ。」

カムイは表情を変えず、けれどその瞳の奥に敵意と殺意を向ける。暗夜王ガロンは冷たい笑みを浮かべ、

「ああ、兵達からも聞いたぞ。その光景を涙を流ずに見続けていたと。その指揮も、止めはしなかったと。よくやった、カムイ。父として、誇らしく思うぞ。反乱の目は早めに摘んでおくに限る。お前も、わしのやり方に賛同できるようになったのだろうな。……だが、お前はよっぽど見込みがあるな。その手には幾度となく、多くの命を奪ってきた。お前のその手は、一体何人の犠牲の血が流れているのだろうか。」

「……私の多くの犠牲の元にここに立っています。私はそれから逃げるつもりもありません。私は私のしてきたこの選択を、行いを決して否定しない。そうでなければ、ならないんですよ。」

そう言つて、カムイは暗夜王ガロンと睨み合う。

その重い雰囲気能耐えられなくなったエリーゼが、

「もう、お姉ちゃんも、お父様も、もうその話はやめようよ。ほら、シヨーも始まるよ！ね、シヨーを見て気持ちを切り替えよう。」

「……そうだな。カムイも、そこに座るとよい。」

「……………」

カムイはレオン達と共に、暗夜王ガロンの下の席へと移動する。

カムイは無言で、レオンの横に座る。

前にはカミラとエリーゼが嬉しそうに、シヨーの幕が上がるのを待っていた。

カムイは隣を見る。

そこは空席。

座るはずのアクアはここに来るまでに見かけていない。

暗夜王ガロンの側に居たくないのか、それとも何かあったのか……

カムイが立ち上がろうとした時、レオンがカムイの手を掴み、

「姉さん。もう幕が上がる。」

「……………ああ。」

カムイは仕方なくそのまま留まる事にした。

カムイは舞台の方を見る。

幕が上がると、黒い服に身を包み顔を隠した女性が立っていた。その女性は瞳を閉じたまま歌い出す。

「闇へと〜進みゆく〜♪」

そして目を開くと、手を左右に顔の横にあげて広げて歌い出す。その彼女の周りには水が覆い始める。

カムイはハツとして、身を固めた。

その瞳を揺らしながら、歌う彼女を見つめた。

あれは……

そして、その動きに気付いていたのがレオンだった。

女性は踊りながら歌い続ける。

カムイは視線だけを暗夜王ガロンに向ける。

彼はあの時以上に苦しみ始めていた。

そう、人としての形を保つのにやっつとであるかのように……

上ではざわつき始めた。

暗夜王ガロンの異変に気付いた暗夜軍師マクベス。

彼は脅えながら兵達に命令する。

「舞台で歌う歌姫を捕らえろ、と聞こえてくる。」

『……呪い。確かに、暗夜王ガロン^前にとっては呪いだろな……』

「姉さん、これはまずいよ！とにかくあの歌姫を捕らえないと！」

レオンが立ち上がり、舞台の方を見る。

「あれ？舞台に、誰もいない……？」

カムイも、舞台の方を見る。

舞台の方には、彼女を含めて誰もいなかった。

カムイは立ち上がり、

「……逃げたのではないか？」

「けれど、まだ遠くには行っていないはずだ。追いかけよう、姉さん！」

そこに、白夜兵達が押し寄せてきた。

狙いは暗夜王ガロンの抹殺。

暗夜兵と白夜兵の衝突は会場を激しく揺らす。

そこにアクアが駆け付ける。

「カムイ……何があったの？」

「……アクアさんは大丈夫ですか？」

「ええ。少し気分がすぐれなくて席を外していたのだけれど……どうしてここに、白夜兵が？」

「……暗夜王ガロンの抹殺をしに来たのですよ。」

「そう……」

と、カムイは戦闘の間に背中に誰かと当たる。

それは狼の耳と尻尾を生やした青年。

「おっと、わりい！」

「……えっと、なぜこんな所に？」

「あー、道に迷っちゃったんだ。そしたら、ヒトが沢山いるし、戦闘してるんですよ。」

「……そうですか。そうですね……この戦闘が終わったら外に出れると思うが、今は大人しく物陰に隠れていた方がいい。」

「なめるな！俺は誇り高き人狼、ガル！名前がフランネル！俺も、この獣石を使えば戦える！だから俺も闘うぜ！」

「……闘う理由もないのにか？」

「あるぜ！こいつらを倒せば、俺は故郷に帰れるんだ！」

「……故郷……か。」

カムイは瞳を輝かして言う彼を、少し羨ましい気持ちで見ると、一呼吸置き、

「わかった。力を貸してくれ、フランネル。」

「おうよ！」

ガル！が仲間に加わり、カムイも戦闘に加わる。

カムイは辺りを見渡し、

『……自分としては、ここで暗夜王を殺せるのなら殺したいが……この状況化ではいささか問題があるか……ことと次第によっては、レオン達とも戦わなくてはならなくなる。』

カムイは気持ちを切り替えて、白夜兵達を撃退する。

なるべく、多くの者を白夜王国故郷に帰せるように……

そして分が悪くなる一方であった白夜兵達は撤退を始めた。

白夜兵達がいなくなると、

「……終わったか。」

「姉さん、調べてきたけど……あの歌姫は逃げたみたいだ。けど、父上をあそこまで苦しめるなんて……一体何者なんだ？」

カムイは無言でそれを聞く。

と、カムイの横に居たアクアに気付いたレオンは、

「……姉さん、その人は？」

「ああ……えっと、この人はアクアさん。お前のもう一人の姉……と
言うことになる。」

「姉？……この人も暗夜王家の人なの？」

「ああ。私と対になって白夜王国に行った人だ。」

「ふーん。ま、そういう事なら……これからよろしく、アクア姉さん。」

レオンはアクアに手を差し出す。

アクアは少しだけ戸惑った後、手を握る。

「ええ。よろしく、レオン。」

しばらくして、暗夜王ガロンが歩いて来た。

「カムイよ。」

「……なんですか？」

「カムイ。これより、お前に命を下す。……このミューズ公国の歌姫
を、全員始末せよ。」

「!?それに、何の意味があるのです。あの歌姫が誰だか解らないと
言つて、全員を殺すなど……得策とは思えません!それに、攻めてき
たのは白夜兵。ここの歌姫たちには関係のない事です!」

「愚かな……先程の女を捕らえることができなかつた以上、仕方ある
まい。疑わしき者は排除しておくのが得策……反乱の芽は、早いうち
に摘んでおくに限る。お前も、そう思っているだろう?」

暗夜王ガロンは冷たい瞳でカムイを見下ろす。

カムイは剣の柄に手を握り、

「そんなこと……そんな無意味なこと……」

「姉さん。」

レオンは柄を握ったカムイの手に手を置く。

暗夜軍師マクベスとガンズが暗夜王ガロンの後ろ横で、

「承知しました、ガロン王様。」

「その命、我々にもお任せを。」

「期待しているぞ。マクベス、ガンズ。」

そう言つて、二人は歩いて行つた。

カムイは怒りをむき出しにしたまま、

「待て、二人とも！」

だが、二人はすでに遠くなつていた。

カムイは暗夜王ガロンを睨み見上げ、

「……よほど、殺戮を好むようだな……透暗夜王魔王。あなたの下す命は、いつも命を奪うことしかない。そんなに世界が、人が憎いか。他者と関わることすら、今のあなたの中にはないのか。戦争が終わつた時、あなたの中には何が残ると言うのだ。」

暗夜王ガロンは眉を寄せ、

「……血迷つたか、カムイ。それはお前も同じ。お前も、今のわしと何も変わらぬ。そのお前が、それを問うつもりか。」

「確かに、私はあなたの下す命に、下された殺戮を止める力はなかった。けれど……今のあなたのやり方は理に反している。あなたが受けた想いも、願いも、何もかもが。確かに、人にも罪はあるだろう。けれど、だからと言つて、殺すことが全てではない。そう言つたのは他でもない……あなただ。」

「……わしの望みは、白夜王国を支配すること。そして我が神の願いを叶える事だ。その為ならば、手段は選ばぬ。些細な問題など、捨てておけばいい。どうせ、取るに足らぬもの。逆らう者は皆、殺せばよいのだからな。」

カムイは暗夜王ガロンに背を向ける。

レオンがカムイを見て、

「姉さん、行こう。」

「ああ。」

そして三人は歩いて行く。

アクアに、他の人たちへの個人的な言付けを頼み、レオンと共に歌姫達の元へ急ぐ。

レオンが隣で、

「姉さん、どういうつもりなの？父上に、あんなこと……死にたいの？」

「私はまだ死ねないさ。やらねばならない事があるからな。」

カムイは立ち止まる。

そしてレオンを見て、

「レオン。お前は、暗夜王ガロンと同じ考えか？目的の為なら、罪もない人々を殺しても構わないと思っっているか？」

「……思っっていないよ、そんなこと。だからあの時だって……僕は父上の目を盗んで捕虜を助けたんだ。けど、表だって父上に逆らうわけにはいかない。そんなことをしたら、僕らもいつ始末されるかわかったもんじゃないよ。命が惜しければ、大人しく従った方がいい。」

「……お前も、カミラ姉さんと同じことを言うな。だが、それが良いのかも知れないな。お前たちにとつては。」

「姉さん？」

「……私は目を背けてはいけない。逃げ出すことも許されない。いや、許してはいけない。背けてしまっても、逃げ出しても、私のした罪は重い。その罪を受けいれ、私の為すべきことをする為なら、私はこの身さえも投げ出そう。」

「姉さんー！」

「だが、それは今為すべきことをなした後だ。今は、この戦争を終わらせて、平和な世界を取り戻す。」

「……姉さん、今の姉さんは少し前の姉さんとはどこが変わった。それが、姉さんが僕に会うまでに受けた経験なら、僕は何も言えない。けど、父上のやり方なら姉さん以上に、僕たちの方が一番知っている。例え、エリーゼやマークス兄さんであっても、同じことを思うはずだ。」

カムイはレオンの服の襟を掴んで引つ張り、頭を撫でる。

そして離すと、

「それは分かっているさ。暗夜王のことも、お前たちのことも。だからこそ、私はあの暗夜王の命令には従えない。」

そう言つて、レオンの横を通り過ぎる。

だが、レオンはそのカムイの腕を掴み、

「待つて、カムイ姉さん。確かに僕らの考えは変わらない。けど、それは表向きの話だよ。」

「……………」

「だつて、表向きは逆らうことはできない。でも、裏で動く事は出来る。姉さんみたいにね。さっきのアクア姉さんへの言付け。あれは、マクベスたちへの時間稼ぎでしょ。時間を稼ぎ、歌姫たちを逃がす。なら、僕も同じことを考えた。けど、姉さんは捕らえられた歌姫たちを救う手段がない。違つかい。」

「ああ、そうだ。」

「なら、そこは僕の出番だ。捕らえられた歌姫たちは僕がなんとかする。処刑される前に、僕が始末した事にする。でも、期待はしないでね。僕にできるのはこれくらいだから。」

カムイは小さく微笑み、レオンを抱きしめた。

「ああ。レオン、ありがとう……………」

「別に姉さんの為じゃないからね。姉さんが悲しむと、カミラ姉さんたちまで悲しむから。だから……………僕は僕のやり方で動く。それだけだよ。」

「ああ、それで構わないさ。」

そう言つて、カムイが離れる。

と、レオンの持っていたブリュンヒルデ魔導書が光り出す。

「え……………？ブリュンヒルデが、光ってる？それに、姉さんの夜刀神も……………一体、どういうことだ？」

そう言つて、レオンはカムイの腰の剣を見る。

カムイはそれを取り、

「……………賢者様の与えてくれた力だ。」

レオンの持っていたブリュンヒルデの光が、夜刀神の中へと移る。すると、夜刀神の力が上がり、剣も変化する。

「……これは……姉さんは、何か知っているの？」

「虹の賢者様より、道を同じくする暗夜の勇者にあった時、『夜刀神』は新たな力を得ると。」

「なるほどね。つまり僕が、その暗夜の勇者だつてこと？」

「だろうな。お前の持つその魔導書も、『神器』だからな……賢者様の言っていた、夜刀神はいつか『炎の紋章』に至ると言った。それがもしかしたら、あれを殺せる力になるかもしれない……」

「あれ？もしかして——」

「暗夜王ガロンではないよ。けど、『炎の紋章』については詳しい事は解らない。」

「ふーん。でも、『炎の紋章』か……興味深い話だけど、今そのことを考えている時間はないね。こうしている間にも、マクベスやガンズが他の歌姫たちも捉え、殺しているかもしれない。僕はもう行くよ。」

そう言つて、レオンは背を向けて歩き出そうとして、

「そうだ、姉さん。くれぐれも、父上には逆らわないようにね。次、逆らつたら……本当に死ぬ事になるよ。」

「……………」

レオンの歩くその姿を少しだけ見て、カムイも歩き出す。

歌姫達を救い出し、逃がすことに成功した。

その夜、カムイ達はそのままミューズ公国で休むこととなった。

カムイは一人、夜道を歩いていた。

そして湖のある場所へと出た。

『……今回の件。あれはアクア姉様の仕組んだことだ。あの歌を歌つたんだ。アクア姉様が苦しんでいないといいのだが……』

カムイはアクアの姿を捜す。

彼女なら、こう言つた人気がない場所を選ぶはずだ。

そのアクアを捜しながら、

『……暗夜王ガロンも、透魔王ハイドラも、もう狂いに狂っている。殺すことでしか、その想いを落ち着かせることができない。この選択を取れば、変われると思つたが……間違いだつたのだろうか。災厄の場合は、マークス兄さんやレオン達を裏切つてでも……いや、その考え

は前と同じ結果を生んでしまうのだろうか。やはり、白夜王座に座らせて……その正体を見せればきつと……』

そして、カムイは探し人を見つけた。

アクアは一人、どこかに向かつて歩いて歩いていた。

そつと、その後ろを付いて行く。

しばらくして、アクアの歌が流れ始める。

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

歌いながら、湖の中へと入っていく。

カムイは疑問に思う。

今までも、湖の淵で水に浸ってはいた。

けれど、少しだけだ。

今の彼女は随分と深く浸っている。

そして、その姿は光と共に湖の中へと消えた。

「アクア姉様!？」

カムイも、湖の中へと進んで行く。

『まさか……透魔王ハイドラに捕まったのか!？』

そして、自分は何かに引つ張られた感覚と共に光と共に湖の中へと落ちた。

その強い光に、カムイは瞳を閉じる。

そして、地面にドサリと落ちた。

仰向けに会って瞳を開ける。

そこには青い空と白い雲が広がっていた。

それに加えて、欠けた大地が浮いていた。

顔を横に向けると、緑の草木の大地とコケに覆われた岩。

木々がほんの少し覆い茂っており、小さな池もある。

カムイはガバって起き上がる。

さらに崩壊した家屋や遺跡、井戸など様々なモノがある。

カムイは瞳を揺らす。

声を発する前に、

「どうして……」

カムイはハツとして振り返る。

そこにはアクアが立っていた。

その表情は不安そうに、眉を寄せていた。

「あなたがここに？」

「……アクアさんはここがどこなのか、わかるんですか。」

カムイは立ち上がる。

アクアは胸に手を当て、

「はあ……来てはいけなかったわ、カムイ。あなたはここに来るべきじゃなかった。すぐに戻らないと。」

「……アクアさん……」

だが、そこに駆け足が聞こえてきた。

二人はハツとして、

「カムイ、危ない!!」

カムイはとつさに竜化した。

それは龍脈がつよいこの地なら、そっちの方がいいと思ったからだ。

カムイは自分に剣を振るってきた相手を見る。

黒い靄のようなオーラが纏っている兵。

その瞳に、光はない。

「……厄介ね。逃げるわよ、カムイ！こいつは人の姿をしているけれど、既に人ではない化け物。何の感情も持たず、何も話さず、生きている者を見境もなく襲う存在よ。近くに居ると危険だわ。」

「ですが、アクアさん。このままでは……逃げれない。すでに、囲まれている。」

「なんですって!!」

カムイの言葉に、アクアは辺りを見渡す。

辺りには同じような者達が複数いた。

アクアは凧刀を構え、

「くっ……仕方ないわね。ここで闘うしかないわ。安心して、カムイ。あなたは私が護るわ。絶対に死なせない。あなたに、あの真実を、伝えるまでは。」

そう言って、竜化したカムイの前に立つ。

カムイは襲い掛かる兵の剣を竜の腕でアクアを守り、
「それは私事です、アクアさん。私も、あなたを守りますよ。あなたを
絶対に死なせない。」

「カムイ……」

そこに馬の駆ける音が鳴り響く。

そして岩を飛び越えて、槍で兵を斬り裂く。

その兵は泡となって消える。

「ご無事ですか。」

「……ギウンター☒」

「むむ？その声はカムイ様!？」

馬に乗った老兵は竜を見つめる。

カムイは人型に戻り、

「ギウンター！本当に、お前なのか!？」

「おお、カムイ様！まさか、カムイ様が竜になられたとは……ですが、
真正正銘、私はギウンターでございます。幽霊ではございませぬぞ？
アクア様が竜と共に戦っている姿が見えましたので、加勢しに参りま
した!」

「……本当に生きていたのか……だが、アクアさんをギウンターが
知っているとは……」

「いえ、カムイ様。お話したいことは山ほどありますでしょうが、まず
はこの者共のを蹴散らさねば!」

「そう、だったな。すまない。」

カムイは再び竜化する。

そしてギウンターを見て、

「また、お前と共に戦得ること、嬉しく思う。ギウンター。」

「はい、カムイ様。」

三人は陣形を組んで敵を蹴散らしていく。

一通り蹴散らして、戦場を離脱する。

しばらく走り続け、岩陰に隠れて落ち着く。

「さて、ギウンター。改めて、お前に会えたことを嬉しく思う。だが、
今まで何をしていたんだ?」

「はい。私はあの日……無限溪谷の谷底に落ちました。ですが、谷底に叩き付けられることなく、気が付いたらこの国にいたのです。そして何が起きたのかわからずに化け物に襲われ、命を落としそうになっていたところを、こちらのアクア様に……」

「アクアさんに……」

「ええ。私は白夜王国で居場所を追われるようになってから……平和への手がかりを求めて、何度かここに訪れていたの。そして、化け物に襲われているギウンターと出会った。」

「アクア様は、この世界で身を隠せる場所を教えてくださいました。アクア様と出会えなかったら、自分は今頃死んでいたでしょう。本当に、感謝しています。」

「いいえ……私に感謝される資格はないわ。私はあの後すぐに白夜兵に捕らわれてしまったから、なかなかこの国に来る事ができなかったもの。一人で残すようなことをしてしまって、ごめんなさい。ギウンター……」

「いえ。あなた様のご無事でなによりです。」

カムイはホツとしていた。

『なるほど……アクア姉様に保護される方が早かったから透魔王の目から逃れたのだろう。本当良かった。』

カムイは深呼吸し、

「ですが、お二人はこの国に付いてどれくらい知っているんです?」

「……そうね。ここは白夜王国でも暗夜王国でもない、すぐ傍にありながらも決して『見えない』国。ここは私たちがいた世界とは時空がずれて存在してる。そして、この国の存在を知っても口に出してはいけない。この国以外で口にしてしまえば、呪いにかかり泡となつて消えてしまう、そんな国よ。」

「……………」

「だからカムイ。決して、元の世界に戻っても口にしてはダメよ。この国の事は絶対に秘密にしておくのよ。」

「分かりました。」

「…………じゃあ、元の世界に戻るわね。二人ともついて来て。」

アクアは歩き出した。

二人もその後ろに付いて行く。

そしてアクアは崩れた大地の一角の端で立ち止まる。

「いい？ここに元いた世界の、無限溪谷に相当する場所よ。ここから飛び降りれば、元の世界に戻れるわ。」

「へえ……アクアさんは、いつもこんなことをして戻っていたんですか……凄いな……」

「凄くないわ。私はいつも、湖の中から行き来しているから。」

「……なら、その方法ではダメなんですか？」

「ええ。湖の中を行き来できるのは、私とカムイだけだもの。ギユンターを連れて行くには、この方法を使うしかない。」

「……どうしてですか？」

「それは……それは今話すことじゃないわ。とにかく今は、一刻も早く元の世界に戻りましょう。またあいつらが襲ってきたら厄介よ。」

そう言つて、アクアは飛び降りた。

カムイはそれに驚きながらも、

『……なるほど。加護の話かもしれないな……』

そして小さく笑い、

「ギユンター、お前は どうする？ 私たちも、アクアさんみたいに何の躊躇いもなく飛び降りてみるか？」

「はい。我々も飛び降りましょうか。なに、私がカムイ様の御身をお守りするため、しんがりを務めます。」

「……ふう、私が先か。よし、では行くか……遅れるなよ、ギユンター。」

「はい。」

カムイはそこに向かって飛び降りた。

暗闇の中、カムイは落ちていく。

そして瞳をあけると、

「おかえりなさい、カムイ。」

アクアがホツとしたように、自分の顔を覗き込んでいた。

カムイは小さく微笑み、

「戻って来たんですね。」

「ええ。」

カムイは起き上がり、周りを見る。

「……アクアさん、ギウンターは？まさか失敗したんじゃ……」

「心配しないで。ちゃんと飛び降りたのなら、必ずここに戻って来られる。ただ、さっきも言ったように……あの世界とこの世界は時空がずれているから、到着する時間が少しだけ違いが生じることがあるの。……でも、丁度良かったわ。彼を待っている間、あなたに話しておきたいことがあるの。」

「話？」

「ねえ、あなたはこの戦争を自分のやり方で止めたいと言っていたわね。それなら、あなたがやるべき事は一つだけ。それは——」

「暗夜王ガロンを殺すこと、ですか。」

「カムイ、あなた……」

「暗夜王ガロンの様子が異常なのは見ていて分かっていましたから。何かに呪われているかのように。そして、実の子ですらも殺すことを躊躇しない心。自国の民ですらも平気で殺すことのできる非情さ……」

「ええ……あのガロン王は、もはや暗夜王ガロンではないわ。悪魔に魅入られた、この世のものではない何かなの。あなたになら、真実を見せる事ができるかもしれない。これを使って。」

カムイは一つの水晶をカムイに手渡す。

カムイはこれを知っている。

前の時に、レオンに渡していた水晶だ。

カムイが受け取ると、

「これは『あの国』で作られた道具……真実を映し出す水晶球よ。」

カムイは心の中で、

『そういえば、シグレお兄ちゃんが言っていたなあ……。透魔王国には、色々と不思議な道具が揃っていると……』

アクアは水晶球の説明を続ける。

「これを使えるのは、レオンのようによほど強い魔導を持つ者か……あなたのように、竜の血を強く受け継ぐ者だけなの。」

「……へえ、そんなものがあるんですか……」

カムイはジッと水晶を見る。

そこに映るのは暗夜王ガロン。

その顔が徐々に崩れ落ち、その顔は泥のような人とは思えない姿へと変わる。

もう、人としての役割を終えた体はその機能を果たしていない証拠であった。

そして、持っていた水晶球は粉々に砕けた。

「さあ、これで真実を見せる事ができたわ、カムイ。ガロン王の真実が。」

「……はい。」

カムイはアクアを見る。

「アクアさん。一つ聞いても良いですか？もはや、人でなくなってしまうた暗夜王ガロンを救う手立てはないのですか。」

「残念だけど……もう手遅れよ。ここまで怪物に取り込まれてしまったら、もはや倒すしか道はないわ。私も、できるだけのことはして見たの。アミュージアの……あのショー会場で。」

アクアは首を振って、瞳に影を落として言う。

カムイも同じように瞳に影を落とし、

「そう、ですか……。でも、あのショーの歌姫は、やっぱりアクアさんだったんですね。」

「ええ。私の歌にも、少しだけ不思議な力があるの。だから、もしかしたらガロン王を元に戻せるかと思ったのだけれど……ダメだったわ。その上、私が歌ってしまったせいで、あの国の歌姫たちは酷い怪我を負わされる羽目になってしまった。私は自分の目的のために、他人を傷つけた……決して許される事ではないわ。」

アクアは持っていた凧刀を握りしめる。

カムイは眉を寄せて、

「そんな……私も同じです。犠牲を出したくなかったのに、私は結局

多くの犠牲を出してしまった。罪もない人々を、己の正義を信じて闘う騎士たちを。」

「カムイ……」

「……もう二度と、あんな悲劇を繰り返さない為にも……私はやっぱり暗夜王ガロンを討つ。例え、その前にマークス兄さんたちがいようと……」

「待って、カムイ。マークスたちの……兄弟姉妹たちの理解を得る方法を使えばいいわ。」

「ですが、その理解を得る手段がありません。説明しても、きっとわかってくれない。説明したくとも、口に出すことができない『あの国』の事も含めて。それに、今のように水晶球で見せようにも、水晶球は砕けてしまった。白夜の玉座に暗夜王ガロンを座らせようにも、もうその手段を得るには白夜を攻めるしかない！」

「カムイも、それに気付いていたのね。」

「アクアは悲しそうな瞳でカムイを見る。」

「アクアは涙を堪え、震えているカムイの方に手を乗せ、

「けど、その方法でしか……彼らに伝える手段はないわ。戦争を早く終わらせて、兄弟姉妹たちに真実を教えるの。その為にも、暗夜王ガロンの命令に従い、白夜を攻め落とさなければならぬ。白夜の兄弟姉妹たちと戦わねばならない。暗夜王ガロンを、玉座に座らせるまで……あなたにとっては、とても辛い闘いになるけれど……」

「……大丈夫です、アクアさん。元より、私は暗夜王ガロンを討つ為に暗夜王国に戻った。たとえそれが、白夜の兄弟姉妹たちと戦おうとも。確かに苦しくて辛い……けれど、私は止まる訳にはいかないんです。だから戦います。だから暗夜王ガロンの命令にも従います。全ては白夜と暗夜の戦争を終わらせて、平和な世界を取り戻すために……それが、誰にも理解されずとも、どれだけ恨まれ、蔑まされようと。」

カムイはジツとアクアをまっすぐ見る。

そして、強く手を握りしめる。

『そして、透魔王国を救うために……、アクア姉様を救うために。』

アクアはカムイの方から手を放し、
「そう……あなたがそう決めたのなら、私も付いて行くわ。暗夜王国が勝利する、その時まで。」

アクアの瞳に、強い決意が生まれたのが解る。

そこに、馬の足音と、人の歩く足音が聞こえてきた。

「おお!!カムイ様、アクア様!お待たせしてしまったようですな。今戻りましたぞ。」

「お帰り、ギウンター。」

「無事に戻ったようで、良かったわ。それじゃ、みんなの居るところへ戻りましょう。あまり遅くなつて、ガロン王に余計な詮索をさせるわけにはいかないもの……」

カムイは領き、皆がいる場所へと戻る。

カムイはギウンターを連れて、暗夜王ガロンの前に立つ。

ギウンターの説明をあらかじめ用意していた理由で、説明する。

暗夜王ガロンはギウンターを見下ろし、

「そうか……よく戻ってくれた、ギウンターよ。歓迎しよう。」

「はい、ありがとうございます、ガロン王様。」

「だが、まさかあの無限溪谷に落ちて生還するとはな。こうして生きて帰ったことを、嬉しく思うぞ。」

「よくぞ(無)事、ギウンター殿。」

暗夜王ガロンの側に控えていたガンズが、ギウンターを見て笑う。

ギウンターは少し眉を寄せて、彼を見る。

だが、何かを言うことはなかった。

暗夜王ガロンは肘を着き、

「さて、ギウンターも戻ったところで今後の戦について話をしたい。我が暗夜王国と白夜王国は、いよいよ本格的に全面戦争に突入するだろう。そこで、この港街アミュージアに陣地を置き、先発部隊を白夜領内に送る。カムイ。お前がその先発部隊の指揮をせよ。」

「……わかりました。ですが、どうやってです?」

「そうなんだ……進軍には陸路ではなく、海路を使い。陸路で待ち受けていると思われる白夜王国軍の裏をかくためだ。……その間に、わ

しは一旦城に戻る。頃合いを見計らい、陸路より兵を送るために。マクベス、ガンズ。お前たちはわしと共に来るがよい。」

暗夜王ガロンは横に控えている暗夜軍師マクベスとガンズを見る。二人は頭を下げ、

「ええ、仰せのままに。」

「承知しました、ガロン王様。」

そして暗夜王ガロンはカムイをもう一度見下ろし、

「期待しているぞ、我が子よ。」

「ええ、あなたにとつて良い報告をできるように、頑張らしましょう。」

カムイは一度頭を下げ、言う。

と、暗夜軍師マクベスはカムイを見て、

「……そういえばカムイ様。ギウンターが戻って来たのは宜しいですが、昨晩はアクア様と、どちらに行つていらしゃったのですかな?」
「……そうれはどういう意味だ。」

暗夜軍師マクベスは目を細めて、

「いいですか? 私は昨日……夜道を歩くあなたを見ました。そして、アクア様を追つてどこかに行かれるのを拝見したのですよ。まさかとは思いますが……白夜の者と内通しているなどということはありませんか?」

「そんなことはない。私はただ、散歩していただけだ。」

「散歩?」

「……当然だろう。アミュージアでの事を想い出し、はやる気持ちを抑える為に散歩をしていたのですよ。ですが、一人では落ち着きそうになかったのでアクアさんに同行をお願いしたんですよ。そうしたら、怪しい兵たちと鉢合わせになり、私たちを襲ってきたので返り討ちにしただけですよ。」

「なっ!?!」

暗夜軍師マクベスは驚いたように、顔を引きつった。

アクアも驚き、

「カムイ……?」

「ほら、その証拠に私やアクアさんの服には返り血があるでしょう?」

どこの兵かは知りませんが、王族である私たちを襲って来たんです。殲滅しても、文句は言えませんよ。それこそ、お父様の言う通り……反乱の芽は、早いうちに摘んでおくに限ります。さて、私は何かおかしなことを言いましたか？」

カムイは笑顔でそう言った。

そして、睨むように暗夜軍師マクベスを見据える。

暗夜軍師マクベスは一步下がり、

「い、いえ……立派なことでございます……」

「そうか、それは安心した。では、行つて参ります、お父様。」

「ああ。」

カムイは暗夜王ガロンを笑顔で見て、背を向けて歩いて行く。

しばらく歩き、カムイは壁を「ドン！」と叩く。

「くそつ。マクベスめ……余計なことを言わせる。」

そして、途中で別れたアクアが歩いて来て、

「ねえ、カムイ。さつきはどうしてあんな嘘を？」

「嘘ではないですよ、アクアさん。どこぞの化け物だったとはいえ、あの国の兵と戦つたのは事実。闘つた場所は言えませんが。」

「それは……ガロン王に自分を信用させるため？」

「そうですね……元々、私は信用されていませんから、本格的にやるに決めた以上はやるべき事、打てる手はすべて打っておきたい。その為にも、ガロン王の信用は得ておいた方がいい。でなければ、戦争が終わってもあいつを玉座に座らせることはできない。」

「……そうね。でも少し驚いたわ。あなたが本当に、暗夜王国に染まってしまったのではないかと。」

「アクアさんに、そう思われるのなら……成功ですね。戦争を終わらせてるまでは、これを演じ続けなければならぬ。例え、その先に何があろうと、どんな辛い事があろうと……」

「ええ……」

そうやって、歩き出したカムイの背を見ながらアクアは頷く。

そして、悲しそうにその背を見つめるのだった。

優しく、泣き虫なあの子^{カムイ}が必死に自分を殺して進むこの選択を。

あの無邪気で輝いた瞳に宿す影と闇。けれど、それと同じだけ希望を抱く瞳。

昔のあの子^{カムイ}は、もうどこにもいないのかもしれないと……翌朝、カムイは船場に向かう。

船の手配を進めていたレオンの元へ歩いて行き、

「レオン。そろそろ手配した船が来る頃か？」

「ああ。しばらくここで待っていていよう。あ、そうだ、さっきマクベスから軍資金を預かって来たんだ。少しだけお役立てください、だつて。」

カムイはレオンの手からどつきりと入った袋を受け取る。

カムイはあきららさまに、嫌な顔をして、

「……こんな……本当に出発できるだろうか。」

「姉さん、それはさすがにマクベスが可哀想だよ。確かに、どういう風の吹き回しだか知らないけど、貰っておけるものは貰っておこうよ。今後何かの役に立つかもしれないし。」

「……そうだな。有効的に使わせて貰おう。」

と、カムイは軍資金を縦に振る。

お金がチャリチャリ言う。

レオンは苦笑して、

「そうだね。」

と、カムイの背後から馬の駆ける音が鳴り響く。

「!?カムイ姉さん!!」

「——!!」

カムイはとつさに剣を抜き、振り返る。

そのカムイの瞳に映ったのは馬に乗ったマークスの姿。

彼の手には剣が握られており、自分に向かって振り下ろす。

カムイはそれを受け流し、横に避ける。

マークスは馬の手綱を引き、

「見事だ、カムイ。良い反応だったぞ。」

「マークス兄さん……」

「久しぶりだな、カムイ。」

「ええ、お久しぶりです。ですが、いきなり斬りかかって来るなんて、ヒドイですね。」

「すまん。『虹の賢者』から無事に力を得たと言う話を聞いて、どうしても試してみたくてな。だが、うむ。どうやら、実力もついているようだな。」

「……では、そういう事にしておきましょう。ですが、マークス兄さん。どうしてここに？」

カムイは剣をしまう。

マークスも剣をしまい、馬から降る。

「ああ……やつと父上からの任が全て片付いたんだ。それで、お前たちを追ってここに来た。……白夜王国に行くのなら、私も共に闘おう。」

「……ありがとうございます。兄さんがいれば、千の兵を得たも同然。これでまた一つ、心強い味方が増えました。」

「そうか。それは光栄だな。」

その後、マークスは臣下達に会いに歩いて行った。

しばらくして、マークスが戻ってくる。

そこには、カミラとエリーゼも一緒だった。

と、レオンが小さく笑い、

「マークス兄さんが来てくれて、これで兄弟姉妹全員が揃ったね。」

「そうね。こうしてみんな揃って闘えるなんて……とても幸せだわ。」

カミラも微笑みながら言う。

カムイは視線を落とし、

『……兄弟姉妹全員、か……』

エリーゼがとびつきりの笑顔で、

「えへへ！それに、新しい兄弟姉妹のアクアお姉ちゃんもいるもんね！」

と、カムイの後ろに居たアクアを引っ張り出して言う。

アクアは小さく微笑み、

「……ええ。」

だが、マークスはアクアと聞いて、眉を寄せる。

アクアをじつと見て、

「アクア……？ではお前が、あの日連れ去られた妹か？」

「覚えているの？この国にいた頃の私を……」

「覚えているに決まっている。何度も顔を合わせた事もあったからな。けれどあの頃、お前の周りの王侯貴族たちから酷く虐げられていて……」

「……アクアさんが……」

カムイは眉を寄せて、アクアを見る。

マークスが言うほどだ。

相当ひどい仕打ちを受けたのだろうと思う。

アクアは視線を外して、俯いていた。

カムイはマークスを見ると、彼は眉を深く寄せて、

「アクアは父上の後妻で、今は亡きシユンメイ王妃との間の子なんだ。再婚当時は、私の母親で前妻のエカテリーナの派閥が力が強くてな。シユンメイ王妃とその娘の存在が貴族たちにとって気に食わなかったらしく、私もカミラも、しばらくして生まれたレオンも、アクアには関わるなど言われ続けてきたんだ。だが、私たちはずっと、アクアと兄妹きょうだいとして過ごしたかった。」

マークスは俯いているアクアの前に立つと、

「……よく戻って来てくれたな、アクア。心から歓迎しよう。」

「マークス……ありがとう。」

アクアは顔を上げて、笑顔になって言う。

カムイは少し視線を外した後、アクアを見て微笑む。

「良かったですね……アクアさん。」

「うーん！よーし！あたしたち6人兄弟きょうだい姉妹で、白夜王国にしゅっぱーつ！だね。」

エリーゼが両手を上げて叫んだ。

カミラは頬をに手を当てて、

「あらあら、遊びに行くんじゃないのよ？ちゃんと気を引き締めな
きや。」

「そうだね。敵の本拠地に乗り込むんだから、相応の覚悟をしない

と。」

レオンも腕を組んで言う。

マークスもフツと笑い、

「大丈夫だ、私たち兄弟姉妹ならやれる。そうだろ？カムイ。」

「……ああ、きつと大丈夫だ。きつと……平和を取り戻すその日まで……私が何としてでも……」

カムイはジツと海の向こうを見て言う。

そして拳を握りしめ、

『護つて見せる。暗夜も、白夜の兄弟姉妹を。大切な仲間を……今度こそ。』

しばらく経ち、手配していた船が到着した。

カムイ達は船に乗り、出発した。

マークスは船の進行を聞き、

「風は順調、白夜の船影もない。これまでのところは、順調な航海だな。」

「ええ。このまま順調に行ってくればいいのですが……」

カムイは後ろに視線を向ける。

そこには、こちらに駆けて来るジョーカーの姿。

「報告です、カムイ様！マークス様！船内が賊の襲撃を受け、我が軍の軍資金が略奪されています！」

「なにっ？！賊など、一体どこから……」

「どうやら賊は、船内に忍び潜んでいたようです！」

「なるほど。我々に気付かれず潜むとは、ただの賊の仕業ではないな。」

「おそらくは……白夜の忍。カムイ、急ぐぞ。」

ジョーカーからの報告を聞いたマークスは、カムイを見る。

カムイは顎に手を当てて、考え込んでいた。

マークスは眉を寄せ、

「カムイ？」

「あつ……いえ、すいません。賊退治ですね。分かりました、行きましょう。」

と、カムイは歩き出す。

そして、襲撃場所に着くと、マークスは辺りを見渡し、

「ほう、随分と手際のいい襲撃だな。動きも連携が取れている。おそろく、賊を率いる将がいるはずだ。その者を倒せば戦は決する。」

「そうだね……でも、敵軍にそれらしい奴は見当たらないけど。」

賊の攻撃を防ぐために指揮をしていたレオンが、マークスを見て言う。

マークスは眉を寄せ、

「なるほど……もしかしたら、敵軍の中にはいないということかもしれないな。」

「ん？……そうか。白夜の忍びなら、変装していてもおかしくない。暗夜兵のフリをしながら、影で指揮してるってことか。……なら、兵士に直接話をすれば確かめられるね。」

「ああ。早くせねば被害が大きくなる……急いで向かうぞ。」

マークスとレオンは互いに頷き合う。

この船には、何人かの暗夜兵士が乗っている。

それはマークス、カミラ、レオン、エリーゼの臣下以外の兵達も来ている。

その者の中に紛れ込んでいると、マークス達は読んだのだ。

カムイはそれに関しては同意していた。

けれど、賊の中に見た事のある者達が要るのに気づく。

カムイは動き出す二人に、

「……あの、マークス兄さん、レオンさん。」

「何だ、カムイ?」「何だい、姉さん。」

「あー……いえ、その、敵の将を見つける役目……私が行っても良いですか?」

「……心辺りがあるのか?」

マークスは眉を深くして、カムイをじっと見る。

カムイは頷き、

「勘ですけど。」

「……わかった。そっちは、カムイ。お前に任せよう。」

「はい。」

カムイはクルツと回って走って行く。

辺りを見渡し、

『……………あ……………』

カムイは周囲とは少し違う雰囲気を感じている人物を見つけた。

闘いながら、周りを見渡ししている。

普通の兵ならそれくらいは当然だろう。

だが、よく見ていないと解らないが、彼は何かの小さな仕草をして
いた。

その兵に近付き、

「あの。」

「何ですか、カムイ様？何でも、賊探しをしているようですが……………もちろん、私は違いますよ。」

「……………それなら、あなたの顔を触らせてください。」

「カムイ様、その……………」

抵抗する兵に、カムイは寄っていく。

顔に触る瞬間、

「止めろって言うてんだろう！ちっ！仕方ない、ここまでか……………！」

彼は後ろにサツと下がり、変装を脱ぎ捨てる。

そして、隠し持っていた弓を取り出し、構える。

「ちっ！こんなに早く見つかるとは、俺の腕も落ちたもんだぜ！」

放たれる矢を、カムイは叩き斬る。

そのカムイの戦闘に気付いたマークスとレオンが駆け寄ってくる。

「カムイ！賊を見つけたか！だがあれは……………暗夜の盗賊！！白夜の忍ではなかったのか……………？ならばどうして、私たちの船を……………！！とにかく、一刻も早く仕留めるぞ！」

「はっ！させるか！こうなったら、船を乗っ取ってやる！」

彼は矢を放つ。

それを、カムイも、マークスも、レオンも撃ち落としていく。

「マークス兄さん、レオン。彼を殺さないでくれ。」

「なぜだ、カムイ。」

「彼は……必要んだからだ。」

「……わかった。良いだろう。」

マークスは彼に向かって走って行く。

そして、一気に距離を詰めたマークスは剣を彼に振るう。

弓を真つ二つに叩き折り、彼の腹を蹴り込んだ。

彼は壁に叩き付けられ、首筋にはマークスが剣先を突きつける。

「……戦は決した。大人しく、我々に降伏しろ。」

彼は両手を上げ、

「やられたぜ……あんたら、ただものじゃないな……俺の負けだ。で？俺の処遇は？できれば、命だけは助けて欲しいんだがな。」

「動くな。処遇については今から決める。……カムイ。」

マークスは剣は彼に向けたまま、カムイを見る。

カムイは頷き、彼に歩み寄る。

「今は殺しません。処遇は……もう少しだけ待って下さい。」

と、カムイはマークスを見上げる。

マークスは賊の将に視線を戻し、

「ならば、しばらくの間は船室内で大人しくしていて貰おう。」

「へいへい。まるで死刑囚みたいな扱いだ。さすが暗夜の王族サマ。

おっかねえなあ……」

「それだけのことをしたのだから、警戒するのは当然でしょう？」

他の族を倒したアクア達が歩いて来る。

そして、カムイの横に立つと、

「……見たところあなたは暗夜王国の盗賊みたいだけれど……白夜王国行きの船に乗って、一体どうするつもりだったの？戦争が始まったのに、わざわざ敵地に行くだなんて……何か特別な事情でもあるのかしら。」

ジツと彼を見つめる。

彼は黙ったまま、アクアを見つめていた。

レオンがため息をつき、

「はあ……まったく、そんな泥棒に事情なんてあるわけないよ。」

「そうとも限らないと思うが、レオン。私は、アクアさんの言葉に同意

するな。」

カムイは苦笑する。

レオンはさらにため息をつき、

「はあ……カムイ姉さんまで……。いい、きつと後先考えずに乗り込んだに決まってるさ。だから理由を聞いたって無駄だよ、アクア姉さん。」

そうレオンが言った瞬間。

カムイは賊の将を見る。

彼はその名に反応し、

「！アクア……！！じゃああんた、もしかして、あの時の……！」

「……あなた、私を知っているの？」

「さあな。」

「……いいから答えて。でない、殺されちゃうかもしれないわよ。もう一度聞いわ。あなた、私の事を知っているのね？」

アクアは真剣な眼差しで彼を見る。

そして、カムイも同じように、彼を見ていた。

賊の将はため息をつき、

「はあ………ああ。よく知っているさ。何せ、あんたは……俺が手引きをしたせいで、暗夜王国から連れ去られちゃったんだからな。」

「そう……やっぱり、そうなのね……」

アクアは目を細める。

カムイもそう思った。

彼は自分が白夜の人間として暗夜王国に進攻した時、自分達に暗夜王都の地下都市へと案内をしてくれた者だ。

彼は確か、白夜王国に仕えていたコウガ公国の忍。

けれど、同じく白夜王国と同じように仕えていた隣国のフウガ王国の裏切りを受けて滅んだ。

土地を奪われ、白夜に住めなくなった彼らは暗夜王国へと流れた。

そこで生き抜くには、盗賊として生きていくしかなかったのだ。

そして彼は視線を落とし、

「俺はあの日、白夜王国のユキムラという軍師の手を貸して、暗夜の王

城に続く、秘密の通路を案内したんだ。俺は元々、白夜王国の王家に仕えた一族の者……今は亡きコウガ公国の忍だったんだ。だから、白夜王国の頼みには手を貸そうと思ったんだよ。ま、向こうは俺がコウガの忍だなんてまったく気付いちやいなかったけどな。」

アクアは彼の前に膝を着き、

「ねえ……確かコウガ公国は、隣国のフウガ公国に滅ぼされたのよね。民たちは皆殺しにされたと聞いていたけれど……生き残りの者がいてくれたのね。でも、どうしてその生き残りがなぜ、泥棒なんてしているの？」

「仕方なかったんだ……そうしないと、生きていけなかった。国を追われた俺は生き残った僅かな仲間たちともはぐれ、暗夜王国に流れて盗賊に身をやつす他なかったんだよ。いつか戦争でも始まって、フウマを討つ機会ができるその時までな。だから……暗夜の王女の誘拐は、戦端を開くいい機会だと思ったんだ。」

「……そう。それでまんまと戦争が始まって、機を窺うため白夜王国に？」

「そうさ。」

彼は顔を上げてそう言った。

カムイは同じようにアクアの隣で膝を着き、

「それはとても済まない事をした。私は白夜王国の王族……と言われているから。彼らに代わって、詫びよう。と言っても、これでお前の気が済むとも思っていない。だから、取引をしよう。」

「……へえ、あんた話分かりそうだな。で、その取引とは？」

「お前の命を奪わない代わりに、アクアさんの従者になってくれ。」

「その見返りは？」

「フウマ公国を討つのに協力する。」

それを聞いたレオンが驚いたように、

「待ってくれ、姉さん。やっぱり、こいつは始末しておくべきだよ！こいつは白夜王国の王族に仕えていた忍だ。だから本当は、白夜王国の斥候として、国に戻ろうとしていたのかもしれないよ。ここで殺しておかないと、後々面倒なことになるに決まってる。」

「そうね……レオンの言う通りだわ。いくら事情があつたとはいえ、私たちに攻撃してきたのだもの。この先、またいつ裏切るかわからないわ。あなたやアクアの事が心配なの。」

カミラも頬を当てて、レオンに同意した。

マークスはカムイを見つめ、

「どうする、カムイ？この軍のリーダーはお前だ。私たちは、お前の判断に従おう。やはりこの賊を殺すか、殺さないか。お前が今ここで、決めてくれ。」

「……あなたはどうします？」

カムイはまっすぐ彼を見る。

彼は変わらず、ジツとカムイを見て、

「確かに。良い取引だ。だが、何故だ？そいつらが言うように、俺が裏切らないとも、守らないとも限らないだろうに。」

「……いや、お前は根は良いヤツ……だからな。」

「は？」

「何となくだけど……それに、アクアさんに対して思い入れがあるんだろう。だったら、尚更丁度いいじゃないか。」

「……ああ。確かに俺は、あの時の事をすまないと思っているし、俺も白夜王国には思うところがあるからな。」

「なら、この取引受けてくれるか？確かに、みんなが言う通り危険かもしれない。けれど、お前は強いからな。だったら、仲間にしといた方が得だ。」

「くはっ！いいぜ、カムイ様。俺はアシユラつてんだ。これからよろしくな。」

「ああ。では、改めて……私の名はカムイ。よろしく頼む、アシユラ。」
カムイはアシユラと握手する。

「ありがとうな、カムイ様。アンタは命の恩人だ……絶対に、アクア様は護ってみせるさ。」

「ああ。頼むよ。」

そして立ち上がると、レオンが頭を抑えて、

「はあ……全く、カムイ姉さんは優しいんだから。」

「それがあなたのいいところだと思っっているけれど……いつかその優しさが、あなたを苦しめることになるわよ?」

カミラは、目を細めて言う。

カムイは空を見上げ、

「私は優しくくない。私は私の利に適う事を行っているだけです。彼が少しでも不審な動きをすれば、私は躊躇わずに殺します。ガロン王に報告したいのなら、どうぞ。これで構いませんね。」

そう言っつて、レオン達を見る。

マークスは苦笑した後、

「そうか……それがお前の判断なら、従おう。だが、この件は父上の耳には入れない事にする。アクアの誘拐を手引きした者を、仲間を迎え入れたなど知れたら、父上からの信頼を失ってしまうことになりかねんからな。」

「……そうですね。それはわかっていますよ、マークス兄さん。」

そして船内を片付け、カムイは部屋で休んでいた。

ベッドで横になり、お腹にリリースを乗せて天井を見ていた。

『どちらにせよ、フウマ公国の連中のやり方は前回の件で知っている。何かあるとは思っているからな……たとえ、暗夜側に付いたとしても……』

カムイはこれからの事を考えると、

「はあ……」

「キュウ?」

「ん? ああ……いや、なんか色々あったなあ……と思っつて。でも、これで従者の居なかつたアクアさんを守る事ができる。」

カムイはお腹に乗っているリリースを掲げ、顔に近付ける。

「アクアさんには、そう言う人がいなかったから少しは気持ちが悪くなるもいいが……私は、お前たちに囲まれて過ごしてきたからな。とても心強い。これからも、頼むよ……リリース。」

そして、ギュツと抱きしめる。

リリースは嬉しそうに「キュウ!」と鳴いた。

カムイはそのまま眠りにつく。

——マークスはレオンと共に甲板で話していた。

そしてマークスはレオンを見て、

「レオン、気付いていたか。」

「何を？」

「カムイの事だ。」

「ああ。姉さんの口調とか？」

「そうだ。元々、カムイは私たちに向き合ってくれたとは言え……故郷であり、本当の兄弟姉妹きょうだいがいる国と戦争しようとしているのだ。それに、カムイは昔からよそよそしい所があった。けれど、あの子は歩み寄ってくれた。」

「最近の姉さんはそうだね。何と言うか、前より近くに感じる。けれど……」

「父上に対しては違う。」

「うん。兄さんは気付いているんですよ。カムイ姉さんが、父上の事を『お父様』じゃなく、『暗夜王ガロン』とか『ガロン王』とか言ってる。嫌ってる。」

「ああ……私は単に、自分を誘拐し、本当の父である白夜王スメラギと白夜女王ミコトを死に追いやった原因だからだと思っていた。けれど、そうではないのではないかと思っっている。あの子が父上に向ける目には殺意がある。」

「うん……姉さんはもしかしたら、父上を討つつもりかもしれない。けれど、ならどうして姉さんは父上の側に居て、命令を聞いているのか……だって、機会を伺って討つつもりにはおかしんだ。わざわざ故郷を攻めてまで行うその理由がわからない。」

「ああ……だが、きっと何かがあるはずだ。カムイが過ちを起こす前に、私たちが止めるのだ。」

「……わかったよ、兄さん。」

二人は互いに海を眺めて、そう言った。

翌朝、カムイ達は無事港に付いた。

船から降りると、鮮やかなピンクの花びらが舞い踊っている。

そう、サクラが辺り一面に咲き乱れ、カムイ達を向かい入れる。

「なんとか、無事に海を渡れたようですね。」

と、カムイは伸びをする。

すると馬が駆け寄って来た。

そしてカムイの前に降り、

「お待ちしておりました！カムイ様！」

「ん？……もしかして、フウマ公国の方ですか。」

「はい。私はフウマ公国の公王、コタロウと申します。あなた方を歓迎するため、お迎えに上がりました。」

カムイは目を細めて、

「……フウマの公国……意外と早かったな。」

カムイがボソツと言う。

それを聞きとれなかったフウマ公王は、

「ん？我が国が何か？」

眉を寄せる彼に、カムイは笑顔になり、

「いえ、少しだけ聞いたことがあったものですから。」

「そうでしたか。」

「はい。ですが、フウマ公国は白夜王国の領内にあるのでしよう。私たち暗夜王国軍に味方して、大丈夫なのですか？」

「ご心配には及びません。我が国は昔から暗夜王国と友好関係にございます。もともと、有事の際にはあなた方暗夜王国にお味方するつもりでございました。」

「そうですか……ありがとうございます。」

「では早速、白夜王国都に攻め入る為の道を案内しましょう。さ、こちらです。」

フウマ公王コタロウは案内を始める。

カムイは視線を後ろに向けて、

『さて……どうやって、ヤツを討とうか……』

カムイは視線を前に戻し、彼に付いて行く。

だが、アクアとマークス、カミラの部隊を別動隊として別れる。

そしてある一角に来ると、

「さあ、こちらです、カムイ様。この街道が、白夜王国を攻め入る為に

最も適した道でございませぬ。」

「……ありがとうございます、フウマの公王。」

「いえ、本来ならば城にお招きしてゆっくり休んでいただきたくないのですが、先を急ぐ旅とのことですので道案内のみとなり、恐縮です。」

「……いや、こちらもお陰で助かったよ。」

カムイがそう言うと、一人の忍が木から駆け下りてきた。

「ほ、報告です!!コタロウ様!!」

「何だ、取り乱して!カムイ様の御前だぞ。」

「す、すみません。ですが、至急の伝令がございまして。先程、白夜王国の忍がフウマ公国内に侵入し、森の洞窟内で戦闘が起こっているとのことです!」

「なに?!白夜王国の忍だと……?」

「奴ら、なかなか手強く、今いる兵だけでは戦闘が長引くかと。至急、増援の手配を願います!」

「くっ……わかった。もう下がっていい。」

カムイはそれを聞き、少し考えた後、

「フウマの公王、今のは?」

「はい……戦争が始まってからというもの、こうして頻繁に白夜王国の者が我が国に攻め入って来ているのです。我々は、白夜王国に攻撃をしたことなど無いと言っている……」

「それは、ここが暗夜王国と友好関係を結んでいるからか?」

「おそらく、そうでしょうね。ですが連日の襲撃により、今の我々には手配できる兵が少ないのです。……カムイ様。とても心苦しいのですが……あなた様方がお力を貸してくだされば、心強いのですが。」

「……いいだろう。手を貸そう。私も、考えるところがあるからな。」

「ありがとうございます。」

彼は頭を下げて、兵に命じていた。

カムイは後ろに控えていたジョーカーに、

「ジョーカー。」

「はい、カムイ様。」

「……マークス兄さん達にこのことを伝えてくれ。だが、白夜の忍や

兵たちは殺さずに戦闘不能にして欲しいと言ってくれ。そして、気付かれぬようにどこかに放置しておいてくれ。そうすれば、他の者たちに救出されるだろうさ。けれど、フウマの者たちには死んだように見せるように言ってくれ。」

「解りました、カムイ様。」

ジョーカーはマークス達がいる方へと駆け出していく。

カムイは白夜王国の忍達がいる洞窟へとやって来た。

そこに、馬出かけてきたマークス部隊がやって来る。

「来たか、カムイ。こちらの白夜兵は全て戦闘不能にしたぞ。」

「私の方も、何とか片付いたわ。」

アクアの部隊もがやって来て、頷く。

さらに、エリーゼとレオン、カミラ達がやって来る。

「お姉ちゃん、こつちも終わったよーっ。カミラお姉ちゃんとレオンお兄ちゃんが活躍だったんだからー！」

エリーゼは馬から降り、カムイに抱き付く。

カムイはエリーゼの頭を撫で、

「ありがとう、エリーゼ。それにみんなも。」

そして、真剣な顔つきになり、

「だが、フウマ公国の者たちはほとんど何もしてこなかったな……白夜王国の忍がここに攻める。いくら、暗夜王国と友好関係であるとはいえ、やり方が大掛かりだ。何か裏があるはずだが……」

エリーゼはカムイから離れ、「うーん」と考え込んでいる。

カムイはその姿に苦笑しながら、

「だが、わからない事を引きづっていても意味はない。今は頭の片隅に出も置いておこう。こちらとしては、アシユラとの取引であるフウマ公国を討つのに力を入れる。それに、あのフウマ公王はどこか怪しい感じがするからな。さて、ここから本番だ……フウマ公国を討つぞ。」

他の者達は頷き合う。

しばらくして、カムイ達は休息を取っていた。

敵を誘うには絶好のチャンスだ。

だが、来たのは違う人物だった。

「!カムイ様、危ない!!」

「」

スズカゼがカムイに投げられた暗器を弾き落とす。

そしてカムイの前に立ち、暗器を構える。

「カムイ様を狙うとは卑怯な……兄さん?」

が、スズカゼはその投げた人物を見て眉を寄せた。

そしてその人物もまたスズカゼを見て眉を寄せた。

「スズカゼ……なるほど、これも宿命か。双子同士というのは、厄介なものだな……」

「はい……本当に。」

そう、目の前に現れた忍はスズカゼの双子の兄であり、リョウマの臣下サイゾウだった。

彼は暗器を構えなおし、

「退け、スズカゼ。俺はフウマ公王に用がある。」

「いいえ、そういう訳にはいきません。今の私は、暗夜王国の兵として、何よりカムイ様の臣下としてなすべき事、カムイ様の命に従う義務があります。」

「本気なのだな……。ならば、お前が敵側につこうと、俺のことを殺しにかかろうと構わん。だが、あいつに……。コタロウに手を貸すことだけは、このサイゾウが絶対に許さんぞ!!」

彼はスズカゼを睨みつけた。

スズカゼは眉を深くし、

「どうしたんですか、兄さん。」

「お前は何もわかっていない!あの男……。コタロウが父上にした仕打ちを!あいつの卑怯なやり方を!今だって、あいつはカゲロウを人質に白夜兵に降伏を求めているんだ!お前はそんな奴に味方をするのか!!」

「なんですって……。!?」

そう言っつて、スズカゼはカムイを見る。

カムイは複数の足音を聞き、スズカゼに待つように目で促す。

案の定、奥から出てきたのは兵を連れたフウマ公王コタロウ。

「おやおや、ついに敵の親玉を誘き出されたのですか。さすがカムイ様の部隊。素晴らしい実力をお持ちのようだ。私の事は気にせず、続けてください。そ奴を殺せば、この戦は決します。」

「いや、その前に……フウマ公王、少し聞きたい事がある。」

「はい、何でしょう。」

「お前は、カゲロウという白夜の忍を人質にとっているそうだな。なら、攻め込んできた白夜兵達に対し、お前は優位に動けるはずだ。なのに、お前は兵が足りていないと私に言った。そしてもう一つ、お前は私に言ったな。自分たちは白夜王国に攻撃はしていないと。本当は、逆だったのではないか。」

「……それは嘘にございますよ。その忍がでたらめを申ししているだけでございます。」

彼はカムイの睨みに、冷や汗を掻きながら言う。

サイゾウは彼を睨み上げ、

「くそっ！とぼけるな、卑怯者！お前だけは、この俺が殺してやる!!」
「兄さん、落ち着いてください!」

今にも飛び掛かろうとするサイゾウを、スズカゼが止める。

無論、アシユラも飛び掛かろうとするが、それをアクアが腕を掴んで止めている。

カムイは目を細めて、

「では、お前の言うことが真実で、あの忍が言うことが嘘だと、お前は言うのだな。」

「ええ。」

「なら、牢屋を見せて貰おう。無論、全ての牢屋を、だ。お前の方が真実なら、平気だろう。」

「で、ですが——」

「白夜王国の兵は今片付けなくとも、一掃できる。時間の余裕くらいあるさ。さ、案内して貰おうか、フウマ公王。」

カムイが一步前に入る。

と、フウマ公王は肩を震わせ、怒りを露わにする。

「拾われた子供の……王女無勢が、偉そうに……私に命令し追って！」
「……………」

「ああ、そうだ！私は人質を使って白夜兵を脅した。だが、それが何だと言うのだ？アンタも、本当に暗夜王国側の人間なら、むしろ俺を褒め讃えるべきだ。自分の野望の為に嘘をつき、人を貶めて何が悪い！！」

「別に悪くはないさ。誰もが、自分の為に嘘をつく。だが、私はお前のような奴が気に食わない。ただ、それだけだ。」

「小娘が！！私は約束したのだ、ガロン王と。暗夜王国がこの戦に勝利すれば、私は広大な領地を賜り、大国の王として君臨すると！それを邪魔するのであれば、たとえ暗夜王国の王族とて容赦はしない！」

カムイは剣を抜く。

そして構えるフウマ公王に剣先を向ける。

マークスも横に立ち、剣を抜く。

「……なるほど。カムイの勘は当たっていたと言うことか……。だが、フウマ公王。お前の野望はここで終わりだ。私も、お前のようなやり方は認めん……。今ここで、力づくでもお前の態度を改めさせてやる。」

「なんだと？…そうはさせませんぞ！」

フウマ公王は兵達に合図を送る。

カムイ達はフウマ公国の兵達に囲まれる。

「……やっぱり、兵を隠し持っていたようだな。」

「ええ。ですが、意外と多いですね。」

「そうだな。」

二人は兵達を見渡す。

フウマ公王コタロウは、ニヤニヤと笑い出し、

「ふ、お前たちは口封じのために、ここで全員死んでもらう！ガロン王には、王女たちは白夜軍との戦闘で死んだと伝えておこう。余計な詮索をしなければ、長生きをできたものを。お前たちも、このコタロウの野望の為に散れ！」

「全員、戦闘態勢！敵を殲滅させる！」

カムイが大声で叫ぶ。

カムイ達は乱闘へと持ち込む。

多勢に無勢の中、カムイ達は優勢だった。

そしてスズカゼは双子の兄サイゾウと背中を合わせて闘っていた。

カムイはアクアの側に居るアシユラに近付き、

「アシユラ、取引通りにフウマ公王コタロウを討つて来るといい。雑魚はこちらで引き受ける。」

「おうよ。サンキュウな、カムイ様。」

アシユラは駆けて行った。

そしてカムイは剣を振るい、

「さて、私達も暴れまくるぞー！」

「おおー！」

と、カムイはドンドン進んで行く。

アクアはため息をつき、

「カムイ……何かが違う気がするわ。」

「アクア姉さんの言う通りだ。カムイ姉さん、絶対にアレは悪乗りしてる。」

「まあ、今に始まったことじゃないのだけれど……」

「え？」

「何でもないわ。」

アクアは首を傾げるレオンにそう言うと、凧刀を振るう。

そうこうやっている間に、敵の半数近くまで減っていた。

スズカゼは肩で息をしながら、暗器や手裏剣を投げる。

そんなスズカゼの元に、フウマ公王コタロウの短剣が襲い掛かる。

「スズカゼー！」

「死ねえッ——!!」

サイゾウがその短剣を防ぎ、フウマ公王コタロウの首を斬り裂いた。

「爆ぜ散れ、コタロウ!!」

「ぐっうう!!」

フウマ公王コタロウは倒れ込み、サイゾウは背を向ける。

「兄さん、まだです!!」

「何だと!?!」

サイゾウが振り返ると、フウマ公王コタロウは再び立っていた。

「まだまだ……俺はフウマ王国の国王となる男だ……俺の野望はまだ終わってはいない!」

そしてサイゾウに短剣を振り下ろそうとした時、彼の心臓に矢が突き刺さる。

「ぐはっ!」

彼は仰向けに倒れ込み、今度こそ息を引き取った。

サイゾウが矢が放たれた方を見ると、

「ふう、危うく全部アンタに取られるところだった。これで俺の復讐も終わった。」

「アシユラさん。」

「スズカゼ、アンタの兄さんは強いな。流石は、白夜王国の忍だ。」

アシユラは口の端を上げて、サイゾウを見た。

サイゾウは眉を深くして、

「……お前も、なかなかの腕だった。」

「そうかい。んじゃ、俺は主の護衛に戻るわ。」

そう言つて、アシユラはアクアの元へと駆けて聞く。

フウマ兵達を一掃し終え、

「終わったか……これで、父上たちの仇を取る事ができた。」

スズカゼはサイゾウに先程の礼を言う。

「兄さん、先程はありがとうございました。」

「ふん。お前もまだまだだと言うことだ。」

「はい。ところで兄さん、私は何も知りませんでした。父上は、ただフウマ公国で戦死されたのだと、ずっとそう思っていました。でも、違つたんですね……」

「ああ。父上はあいつに殺され、その死の真相を隠された。俺は長い時間をかけて、そのことを突き止めたんだ。この戦に負ければ、俺たちも同じように真実を隠されただろう。」

「はい……もしかしたら今までにも、そのような方が沢山いたのかも

しれませんね……」

「そうだな。」

サイゾウは視線を上げ、スズカゼは視線を落としていた。

そこに、カムイがカゲロウを連れてやって来る。

「スズカゼ、サイゾウ。地下牢に、カゲロウが居たぞ。」

「本当か!？」

サイゾウがカムイの方を見ると、カゲロウが居た。

カゲロウは小さく笑い、

「サイゾウ。」

「無事だったか、カゲロウ。さあ、急いでリョウマ様の元に戻るぞ。」

「かたじけない……カムイ様たちと手を組んで、助けに来てくれたのだな。」

「いや……あいつらとは、ここで会っただけだ。奴らはコタロウに加担し、白夜兵たちと戦闘をした。それによって、仲間も大勢奴らに殺された。いや、殺されたように仕組んでいた。何故、白夜兵たちの命を奪わなかった。まさか暗夜軍が、兵の助命をするとはな……」

サイゾウはカムイを見据える。

何かを言おうとするスズカゼに、カムイ首を振る。

そしてサイゾウを見て、

「……それは勘違いだ。」

「何?？」

「私たちはただ、取引をした。」

「取引だと?？」

「ああ。アシユラと言うコウガ公国の忍と。フウマ公国を討つ協力をする代わりに、アクアさんを守れとな。私はそれをしたに過ぎない。白夜兵たちを救った覚えもない。きつと、運が良かったのだろうさ。」

「……そうか。だが、お前たちのお陰でカゲロウや白夜兵は助かり、父上の仇も討てた。その事に関しては、礼を言おう。だが、次会う時は……正真正銘、敵同士だ。その時は、遠慮なくその首を取らせてもらう。」

「ああ、解っているさ。私も、次会った時はどうなるかはわからんから

な。」

「ふん……」

そう言っつて、二人はジツと見合った。

そして、サイゾウはカゲロウと共に走って行った。

スズカゼはカムイを見て、

「あの、カムイ様……」

「すまないな、スズカゼ。」

「え？」

「私の所に来たせいで、兄弟で戦わせることになる。さっきのお前とサイゾウの戦いを見ていた。とても息があっつていて、流石だと思つたよ。だが、今度は本当の敵同士となる……本当にすまない。」

「い、いえ、そんなことは……！自分は、この選択を後悔はしていません。……カムイ様、何故兄さんに言わなかつたのですか。」

「何を、だ？」

「白夜王国とは争う気はないと言っつことを、です。」

「それは言っつても仕方ないからだ。例え、こちらになくても、あちらにはある。それに、私のすることは白夜王国側からすれば、国に攻め入る裏切り者の王女……だからな。それに、ミコトお母様を殺したんだ。許されようとは思わないさ。むしろ、ずつと恨んでもらつた方が気が楽なのかもしれない……」

「カムイ様……ですが、必ずしもその思いが正しいとは限りません。白夜王国としても、暗夜王国としても、それぞれの正義の為に闘つています。それはカムイ様も同じ。少なくとも、私はあなたの思いを知つています。私は白夜王国の人間として、カムイ様を恨むことはありません。そして、カムイ様の見方として、カムイ様を信じるのです。あなたの正義を。」

「……ありがとう、スズカゼ。」

カムイは小さく微笑んだ。

翌日、白夜王国へと向かうために旅発つ。

その道中、カムイ達はイズモ公国に来ていた。

カムイはイズモ公国を見渡す。

相変わらず、ここの空気は懐かしさを覚える。

カムイは今回は神の信託は受けれないと思っていた。

前回のあれは、白夜王国だったからこそその意味だと思っただけだ。

カムイのその様子を見ていたアクアが、

「カムイ、ここはイズモ公国。古くから神々のいる国として知られているわ。それに、他の国々が対立をしている時も常に中立を守り続けているの。」

「……そうですか。中立国なら、少しは安心して休むことは出来そう。そろそろ皆、疲れが出るころだからな。」

「そうね……それに、情報を得るのも必要だわ。白夜王都周辺はきつと警備が厳しいけれど……今の私たちに、それを窺い知る術はないもの。その点、中立国の人々なら、何か有益なことを知っているかもしれないわ。」

「そうだな。ジョーカー。」

カムイは少し離れていたジョーカーを呼ぶ。

彼はすぐに走って来て、

「はい、カムイ様！何でしょう！」

「……イズモ公国で休息を取る。皆に、そう伝えてくれ。私とアクアさんはイズモ公国の公王に謁見して来る。」

「わかりました。ですが、お二人だけで大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ、ジョーカー！私とマークスお兄ちゃんとカミラお姉ちゃんとレオンお兄ちゃんが、一緒に行くから！」

と、それを聞いていたエリーゼが手を上げて言う。

ジョーカーは少し考えて、

「そうですね。マークス様やカミラ様、それにレオン様がいらっしやれば大丈夫でしょう。」

「なんかヒドイ！」

「いえいえ、そんな事は。では、私は知らせに行つて参ります。」

ジョーカーは、頬を膨らませて怒っているエリーゼを笑顔で返して歩いて行つた。

しばらくして、イザナ公王への謁見が叶った。

彼の前に立つと、彼は前の時と同じように軽い口調だった。

「はじめまして〜！ボクは公王イザナ！よお〜く来てくれちゃったねえ〜！暗夜王国の使者さんたち、歓迎するよ〜！」

「……あ、ありがとうございます。」

「さあさあ、狭苦しいお城だけどゆ〜っくりしていっちゃってよ〜！」
「……………」

カムイは無言で彼を見ていた。

後ろからレオンがため息をついて、

「はあ……軽い。とんでもなく軽い……」

「よく国民の支持が得られたわね……」

カミラも息をのんだ。

そしてそれは、マークスもだった。

「うむ、恐ろしい国だ……」

エリーゼは笑顔で手を合わせ、

「すつご〜い！なんだか仲良くなれそう！イザナさん、よろしくお願いしま〜す！」

「あはは、こちらこそよろしく、エリーゼ様〜！」

「ん？あだし、名前言ったっけ？」

「あつ……」

イザナ公王は「ヤバ」と言う顔付なる。

だが、それは一瞬だ。

カムイはそれを見逃さなかった。

顎に手を当てて、考え込む。

イザナ公王は笑顔で、

「いやいや、だって君たちが王族じゃない？だったら、名前くらい分かるよ〜！」

「へー、そうなんだ！」

と、二人手を合わせて笑い合う。

そして、アクアも何かを感じ取ったのか黙って彼を見ていた。

無論、それはマークス達もだった。

イザナ公王に、疑念の目を向けて見ていた。

しばらくエリーゼと話していたイザナ公王は表情を少しだけ変え、「いやー、それより君たち、タイミングがいいよ。今日は大きな宴を開くつもりだったんだ〜！実は今、キミたちの他にも凄い大物ゲストが来ちゃっているからさあ〜！」

イザナ公王の言葉に、カムイは眉を寄せる。

「大物ゲスト、だと……？」

「うん！」

イザナ公王は笑顔になる。

そして、手を叩く。

「……はいはーいっ！なんと白夜王国王族の皆さんでーすっ！！」

「!? 白夜王国の王族☒」

カムイはこちらにやって来た者たちを見る。

彼らは一歩手前で立ち止まり、

「カムイ姉様!?」

「なに!? カムイ……何故、ここに!?」

「……………」

「カムイ……………」

確かに、白夜王国の王族だった。

サクラとヒノカは戸惑い、タクミに関しては無言で睨んでいた。

そしてリヨウマはカムイを見た後、暗夜王国の王族を見ていた。

カムイは息を飲み、

「リヨウマ兄さん……みんな……」

「下がれ、カムイ。こいつらは危険だ！」

マークスがカムイの前に立ち、剣の柄に手をかける。

リヨウマは眉を寄せ、同じように剣の柄に手をかける。

「何だと……？ 卑怯な暗夜王国の手の者が戯言を。」

「ほう……聞き捨てならんな、その言葉。国の侮辱は、私が許さんぞ。」

「侮辱などしていない。真実を述べただけだ。」

「……貴様、相当私に斬られたいと見えるな。」

「いいだろう、かかってこい！」

二人は剣を抜き放とうとする。

彼らが剣を抜く前に、イザナ公王は二人の間に立ち、

「わわっ！ダメダメダメダメ！！ストゥゥゥゥッ！！君たち、こんなところで剣なんか抜いたら契約違反になっちゃうよ！」

「契約違反？」

「そう！我がイズモ公国内では、条約により戦闘行為が禁止されています！これ、破っちゃうと王族サマでも厳罰に処されちゃうから気を付けてよね！」

それを聞いたカムイは眉を寄せた。

アクアも黙って、それをじつと聞いていた。

そして、イザナ公王はクルリと回ると、

「……というわけで、キミたちは全員、武器を下ろしてください！」これは公王イザナの命令だよ！」

「……仕方ないな。」

「しかし、気を許したわけではない……例え得物はなくても……隙あれば、討つ。」

「……！」

二人は武器を外し、イズモ公国兵達に預ける。

そして睨み合う。

無論、カムイ達も武器をイズモ公国兵に渡す。

イザナ公王は笑いながら、

「まあまあ、喧嘩しないの！いくら戦争中でも、この国にいる限りは戦っちゃダメ。この武器はキミたちが国を出るまで、大切に預かっておくからね。じゃ、宴の準備ができるまで城内でごゆるりとお寛きあれ！」

「……………」

「……………ふん。」

マークスは無言で、なおもリョウマと睨み合う。

そして互いに、背を向けて彼らと別れた。

マークスはカムイを呼び、

「まさか白夜の者達と、ここで出会ってしまうとはな。」

「……すみません、兄さん。私が休息を取る事を選んだばかりに……」
「いや、謝る必要はない。……仲間想いのお前だ。我々を気遣ってくれたのは知っている。長旅で疲れていたのも事実。そのお前の想いを、誰も責めることなどできん。」

「……マークス兄さん。」

カムイはそう言つて頭を撫でるマークスを見上げる。

そこに、

「カムイ。」

「リヨウマ兄さん!!」

「なに?……一体、何用だ。」

マークスはリヨウマに向き直り、睨む。

リヨウマは二人に近付き、腕を組む。

「そう構えるな。別に、何かをするつもりで来たんじゃない。少し、妹の顔を見たくてな。」

そう言つて、カムイを見て小さく笑う。

カムイは瞳を揺らして、リヨウマを見る。

マークスはさらに眉を寄せ、

「なるほど……そう言つて、隙あれば白夜王城に連れ帰るつもりか?」
「そう噛みつくな。先程はつい頭に血が上がってしまったが、この国の条約を侵すつもりはない。白夜王国を継ぐ者として、そのような失態をするほど馬鹿ではないさ。」

リヨウマはマークスに向き直つて冷静に言う。

マークスは一息つくくと、

「ああ……私とて同じだ。暗夜王国第一王子として、国の信用に関わる真似はできんからな。そちらが仕掛けて来ないのであれば、私も無礼な真似は慎もう。」

その二人の姿をカムイはジツと見つめる。

それはかつて、透魔王国で見た二人の姿。

王となった二人、王子としてやって来た二人。

その二人の姿がちらついた。

自然に涙が流れた。

その視線に気付き、涙を流したカムイを見たマークスとリヨウマは、

「カムイ!? どうしたのだ」 「急にどうしたのだ、カムイ!?」

カムイは涙を拭い、

「いえ、なんだか嬉しくて哀しくて……それ以上に、やっぱり二人は似た者同士だと思って。」

「な!? 戯言を言うな、カムイ。このような者に、私が似ている訳がない。」

「ああ、そうだぞ。顔だって、俺の方がいくらか整っている。」

「貴様!」

と、二人は睨み合って、今にも殴り合いそうになる。

カムイは二人の間に入り、

「喧嘩はやめてください! 私が言っているのは見た目ではなく、中身の話! 第一王子としての立場を重んじる所や国を想う責務、国を継ぐ者としての意識や覚悟、礼節。そう言った事です。そういう中身の部分で、二人の持っているものが似ていると言っているんです!」

「中身だと……? そんなはずは……」

「……………」

マークスは渋るが、リヨウマは何か思うところがあつたのか、黙っていた。

そこに、複数の駆け足が聞こえてくる。

武器を持った暗夜兵達が乗り込んできた。

「いたぞ、白夜王国第一王子だ! 捕まえろ!!」

「暗夜兵!」 「なぜここに、暗夜兵が……?」

カムイとマークスは眉を寄せる。

そして、カムイ達の後ろにイズモ公国兵を連れたイザナ公王が現れる。

「さあさあ兵士たち、リヨウマ王子を捕らえちゃってくださいーいっ!!」 「なにっ!? 貴様ら、何をする!? やめろ、離せ!!」

リヨウマを暗夜兵とイズモ公国兵が囲い、押さえつける。

リヨウマを縛り付け、イズモ公国兵が彼を連れて行った。

マークスが残った暗夜兵を睨み、

「お前たち、何をしているだ!?!この国での戦闘は、禁じられているのではなかったのか!?!」

そして、マークスはイザナ公王を見る。

「これは、どう言うつもりだ、イザナ公王!」

「私はイザナ公王ではありませんよ、マークス様。」

「なに?」

彼の姿にノイズがかかり、その姿はある魔道士の姿へと変わる。

「ひょーっほほほほ!お久しぶりでございますね!」

「お前はゾーラー!」

マークスは眉を寄せる。

彼は笑いながら、

「ふう……やつと正体を現せましたよ……。白夜の王族たちの手前、イザナのフリを続けるしかなくて苦労しました。」

「おい。本当のイザナ公王はどうした。」

マークスが眉をさらに深く寄せて、聞いた。

彼はなおも笑いながら、

「ふふ……イザナ公王は、とつくの昔に、牢獄の中にぶち込んでます。今頃、さつき捕まえたりヨウマ王子や他の白夜王族の皆さんと、仲良くやっているんじゃないですか?ま、処刑までの短い間ですけどねえ?」

「処刑だと?」

「ガロン王様にも内緒で、我が軍内で策を立てていたので。白夜の王族が国賓としてイズモ公国に招かれたという情報が入ったので、幻影魔法で公王になりすまし、騙し討ちをして一網打尽にしよう。」

「まさか、そんな計画を……」

「いやー、良かった良かった。これで戦争は一気にカタがつきますね!そして私はマクベスやガンズを出し抜き、一気に出世の道を歩むのです!では私は、処刑を執り行ってきますゆえ、これにて失礼。」

「待て、ゾーラー!」

そう言つて、姿を消した。

マークスの制止も届かなかった。
カムイは拳を握りしめる。

『油断した！イザナ公王自身、ああいう性格だったから忘れていた。まさか、前と似た感じで来るとは……！何とかして、リヨウマ兄さん達を救う手段を考えなくては!!』

カムイはマークスを横目で見て、

「マークス兄さん。」

「はあ……白夜王国の者は敵だ。」

彼は瞳を閉じて、そう言う。

カムイはさらに拳を握りしめ、歩き出そうとした。

だが、マークスが瞼を開け、

「だが、このようなやり方は気に食わん。正々堂々と戦って勝ってこそ、暗夜王国の真の勝利となるのだ。こんな形で戦を決しても、私にとっては意味がない。」

そして、マークスはカムイを見て、

「カムイ、王族たちを開放しに行くぞ。」

「……ふふ。」

「どうした、カムイ。」

「いや……やっぱり、マークス兄さんはリヨウマ兄さんに似ていますよ。だからこそ、私は今のこの状況が辛い。本当だったら、あなた達は……」

カムイは視線を落とす。

『……手と手を取り合っていたのに。それこそ、お父さんと共に居たあの頃のように……』

カムイは眉を寄せて、疑念に思っているマークスに視線を戻し、

「いえ。今は、急ぎませしよう。行きますよ、兄さん！」

「待て、カムイ！せめて、武器を持ってから行け……行つてしまった。」

マークスは一目散に走って行くカムイの姿に、頭を抱えた。

カムイは兵達が集まっている壁の隅に隠れていた。

そして、後悔していた。

『……武器も持たずに来てしまった……』

カムイは物陰に隠れて様子を伺う。

そこに、聞きなれた声が聞こえて来る。

「きやつ！」

「貴様!! 私の妹に手を出すな！」

それは、サクラとヒノカの声だった。

カムイは覚悟を決めて、兵達の前に出る。

「そこで何をしているー！」

「ああ!？」

サクラを掴み上げている兵はカムイを見ると、

「カ、カムイ様!？」

「私は何をしている、と聞いている。」

「こ、これは……その、白夜王国の姫たちは後で処刑すると言うことになったので、連行している所です。」

「……離せ。」

「は?」

「離せ、と言っている。」

「で、ですが、カムイ様。これは——」

「今すぐ、私の妹を離せと言っているー！」

カムイはサクラを掴み上げている兵の腕を掴み、睨む。

そして近くに居た兵達は笑い出した。

「カムイ様、ご冗談を。」

「そうですよ、今のカムイ様は暗夜王国の姫君でしょう。」

「白夜王国とは敵なのですよ。」

カムイはギリツと歯を食いしばると、

「言って分からないのなら、仕方ない……」

カムイは竜石を手にする。

その身を竜と変え、サクラを掴み上げていた兵を薙ぎ払い、ヒノカを捕らえていた兵を尾で払う。

人型に戻ると、

「わかったか。白夜王国の連中など、竜の姿になれる私には何の障害にもならない。それに、王子ならともかく……姫ならば、処刑する必

要はないだろう。捕虜にでもして白夜王国に持って行った方が有効だ。まあ、元白夜王国の姫としての情けのできるのはこの程度だろうか。」

カムイは兵達を物凄い殺気で睨みつける。

だが、兵達は武器を構え、

「カムイ様、これは裏切り行為ですよ。こんな事をしたと、ガロン王様に知られれば、あなたとて処刑される。」

「報告したいのなら、すればいい。だが……中立国でこんな事を引き起こし、イザナ公王を投獄したお前たちにも、何かしらの罰は与えられるだろうな。それこそ、捕らえた筈の白夜王国の王族を取り逃がしたとあれば。」

「な、なんですと?」

「お前たちは、白夜王国の姫たちを取り逃がした。それも、見知らぬ竜の手によって。」

「カムイ様、なにを言っているのです!?!」

「さて、処罰されるのは誰だろうか。」

「ぐっ……ならば、もう一度捕らえるまでです!」

武器を構えて動き出そうとする兵を塞ぐように、カムイはサクラとヒノカの前に立つ。

「今私の後ろに居るのは、イズモ公国のイザナ公王に呼ばれた白夜王国の国賓。さて、私はこのイズモ公国のイザナ公王に恩を売っておきたい。……さあ、私の言っている事がわからない者はいるか?」

カムイは手を前に出す。

そこに魔法陣が浮かび、

「それでもわからない奴は、前に出ろ。暗夜王国の姫である私自ら処罰を下そう。安心しろ、証言人は……私の臣下のリリスだけだ。」

と、カムイは視線を奥にする。

そこには宙に浮かぶりリスが心配そうにこちらを見ていた。

兵達は一步、また一步と下がり、逃げ出した。

「あ、あのカムイ姉様……」

「……なんだ、サクラ。」

カムイは後ろに振り返る。

サクラはヒノカに寄り添い、カムイを見る。

カムイは視線を一度外し、再び見つめる。

「あ、あの姉様……なんで私たちを助けてくれたのですか？」

「……カムイ、それは私も知りたい。あの時の七重の塔でも、お前は『白夜王国とは戦争をしようとは思わない。私はただ、私のやるべき事をやらねばならない。その為に、私はこの選択を取る』。そう言っていたな。お前の選択とは何なのだ？ アクアも、お前に付いて行つたと兄様から聞いた。カムイ、お前は何をしようとしているんだ？」

ヒノカもサクラを抱きしめて言う。

カムイはリリスを見上げ、

「リリス、二人の事を頼んだよ。私はリヨウマ兄さん達の方に行く。」
「キユウ。」

リリスが二人の元へと飛んでいく。

カムイは黙って二人の横を通り過ぎ、立ち止まる。

彼らを見ないように、

「私は、白夜王国とは戦争をする気はありません。ですが、私の目的を、選択をしたモノを達成するには、白夜王国に行く必要がある。ただそれだけです。」

「カムイ……」

「それに、私はこんなところであなた達を殺したくはないし、殺されたくもない。スメラギ父上様……いえ、白夜王スメラギ、イザナ王妃、ミコトお母様の忘れ形見であり、愛した子供たちですから。何より、兄弟姉妹きょうだいを救うのに、理由はいりません。でも、私の本当の目的は決して言えない。それだけは、素直に謝ります。けど、約束します。リヨウマ兄さんとタクミは必ず助け出します。」

カムイは駆けだした。

カムイは兵達の声を聞いた。

リヨウマとタクミは地下牢に連れて行かれる途中だと。

カムイは前着た時に、この城の中は知っている。

ここからだ、リヨウマとタクミが連れて行かれる予定の地下牢に

は廊下を通って行くと遠回りとなる。

だが、ある方法を使えばその時間は短縮される。

カムイは思いつきりジャンプして、天井にぶら下がる。

そして、上に乗ると、天井裏を駆け出した。

「貴様ら！なんと卑怯な!!」

カムイはリヨウマの叫ぶ声が聞こえてきた。

その上に聞き耳を立てる。

どうやら、イザナ公王はいないようだ。

カムイは思いつきり天井の屋根を真下に叩き落とした。

「な、なんだ!?!」

「何事だ!?!」

そして、そこにはゾーラも居た。

「な、な、何事です!?!」

カムイは天井から飛び降りる。

リヨウマとタクミの前に立ち、ゾーラを睨みつける。

「カ、カムイ様!?!な、何をなさるのです!?!」

「……私は、このやり方は好かん。ただ、それだけだ。それに……殺さ

せないさ。」

カムイは最期は小さく呟いた。

そこに、マークスが剣を持ってやって来た。

「カムイ!」

カムイは投げられた夜刀神^カを受け取り、ゾーラに向ける。

すると、近くに居た兵達はカムイに刃を振るう。

「リヨウマ兄さんとタクミは少し下がっててください!」

「カムイ?」

「ヒノカ姉さんとサクラに約束したんですよ。二人を助ける、とね。

だから安心してください。二人は無事に保護しました。」

カムイはリヨウマに小さく笑いかける。

視線を敵に戻して、カムイは戦闘を開始する。

マークスも剣を抜いて、応戦を始める。

形成は一気に優位になっていく。

そして、最後に残ったゾーラの首元に刃を向けて、

「これで、終わりだ。お前の負けだ、ゾーラ。さあ、白夜王国の王族とイザナ公王を解放しろ。」

「な、何故ですか!? 私は、あなた方の敵を捕らえたと言うのに! 感謝されてもいいほどのなのに、どうしてこのようなことを……」

「卑怯な愚かな者め。そのやり方が気に入らないと言っているんだよ。」

「レオン様?」

そこに、レオンが歩いて来た。

ゾーラは身をすくめて、怯える。

レオンは彼を見据え、

「恥さらしだ、お前は。お前のような奴が、我が暗夜王国軍だと思おうと吐き気がする。マークス兄さん達から聞いたよ。イザナ公王になりすまして、敵国に騙し討ちを仕掛けたんだって? よくもそんな卑怯な策を練ったものだな? このまま生き恥をさらすより……死んだ方がましなんじゃない?」

「ひっ!」

そう言いながら、カムイの横に、ゾーラの前に立つ。

ゾーラは脅えながら、レオンを見上げる。

「レ、レオン様……ま、まさか……おやめください、レオン様! わ、わわ私が間違っております! ですから、命だけは、どうか……どうか!!」

「諦めなよ。僕はお前のような奴に、慈悲なんてかけない。塵になるがいい!!」

「ぎゃああああああ!!」

レオンは魔導書を開き、魔術を放つ。

ゾーラは木の根に押し潰され、消滅した。

レオンは魔導書を閉じ、

「ふう……」

「……レオン、なにも殺さなくても良かったのだが?」

「そう言う割には、姉さんの目は本気に見えたけど?」

「さてな。」

「はあ……それに、あいつを生かして置いたら、僕たちが……いや、姉さんが白夜王国の王族を助けた事を父上にばれるかもしれないんだよ。」

「まあ……そうだな。」

「全く……前々から思っていたけど、カムイ姉さんは時々暴走しすぎ。敵は敵、その場で倒しておくに限る。なのに、姉さんはまだ白夜王国に未練があるの?」

「……未練、か。」

「そうだよ。それに、仲間だって裏切る可能性はあるんだ。疑わしきは罰しろ……父上じゃないけど、討てる手は早めに打っていた方がいい。それこそ、死人に口なし、だよ。」

「……そうだな。だが、私は私の認めた仲間になら、裏切られても良いと思っっている。それが例え、兄弟姉妹きょうだいだったとしても。それは、自分が選んだ選択ゆえに起きた運命ならば……私は進むしかないんだ。」

「姉さん?」

「いや、何でもない。」

カムイは刀をしまい、リヨウマ達に近付く。

タクミは相変わらず、カムイを睨んでいた。

「礼は言わないからな。」

「ああ。構わないさ。」

タクミの縄を外しながら、カムイは苦笑する。

カムイはイザナ公王を捜しながら、

『……レオンはああいっていたが、私は何人か逃したが……まあ、小心者のあいつらなら暗夜王に告げ口などしないだろう。』

しばらく経ち、他の地下牢に閉じ込められていたイザナ公王を開放する。

白夜の兄弟姉妹きょうだいは再開し、互いに安堵した。

イザナ公王はすぐに宴会の準備を始めた。

すぐに、暗夜も白夜も関係なしに宴の席が作られた。

カムイ達の臣下たちも呼び、宴会の席へと着く。

イザナ公王は中央の台の上で、

「いやいや〜！助けてくれちゃってありがとねーっ！ほんつつつと、命拾いしたよ！さ、お礼にどんどんどんご馳走食べちゃいなよ！」

その姿を始めて見たレオン達は、

「えつと……軽いね。偽物と同じくらい。」

「今度こそはと思つた私が間違つていたわ……」

「なるほど……やはり恐ろしい国だ。」

「わーい！こつちのイザナさんとも仲良くなれそうー！」

と、一人を除いて頭を抱えていた。

ちなみに、カムイとアクアはそれを軽く流して、紅茶を飲んでいた。その向かいにはリヨウマ達、白夜王国の王族が座っている。

カムイはリヨウマと視線が合い、

「……本当に無事でよかったですよ、リヨウマ兄さん。」

「……………」

「？リヨウマ兄さん？」

カムイは首を傾げる。

そんな中、タクミが立ち上がり、

「おい！裏切り者が気安くリヨウマ兄さんに話し掛けるなよ。」

「ふうん、話し掛けるのに許可が必要なんだ？せっかく助けてやったのに、随分な態度だね。」

「はあ？何か勘違いしてるみたいだけど、僕らはお前たちに感謝の気持ちなんて持ってないよ。あんなの、助けてもらって当然だ。」

それに対して、レオンが立ち上がってタクミと睨み合う。

カミラはクスツと少し笑い、

「あら、白夜王国の方はなかなか恩知らずなのね。」

「なに？」

それに、ヒノカが反応した。

ヒノカも立ち上がり、

「大体、元はといえば、そちらの兵士の不手際なのだろう？むしろ謝罪の言葉が欲しいぐらいだ。」

「まあ、怖い顔。」

「貴様……」

微笑むカミラに、ヒノカは眉を寄せて拳を握りしめる。

その手をリヨウマが握り、

「言わせておけ、ヒノカ。命が助かったことは確かに有難い。だが、俺たちがもし逆の立場でも、きつと同じことをしただろう。だから、礼は言わん。」

「ああ。こちらでも感謝されたくてしたわけではない。ただ、暗夜王国の王族として、当然のことをしたまで。お前たちの事は、ここを出たらまたお互いに闘って倒す相手だとしか思っていない。」

リヨウマとマークスは互いに見合う。

そして宴は続いた。

カムイはマークスに近寄り、

「マークス兄さん。」

「なんだ、カムイ。」

「その……ほんの少し、ほんの少しだけ白夜の皆の所に行っても良いですか？」

「……ああ。だが、すぐに戻るんだぞ。長くいれば、辛くなるのはお前なのだから。」

「それは分かっています……」

カムイは立ち上がり、リリスを連れて白夜王国の方へと駆けて行った。

マークスはアクアを見て、

「アクアは、いいのか？」

「私はいいわ。だって……本来なら、あの子が過ごさはずだった。あの子が得るはずだった愛情や絆を、私が長いこと奪ってしまった。でも、私は白夜王国に行けたから生きながらえたのは事実だわ。」

「……お前は我々を恨んでいるか？」

「いいえ、恨んではないわ。あなた達には、非はないですもの。それに、私があのまま暗夜王国に居たとしても、私は死んでいた。それに、カムイが暗夜王国に来たのなら、私が白夜王国に行く運命なの。それは変わらない。そして私は、あの子の選択を見守り、共に戦うと決め

ているの。それが、私があの子にできることなの。」

「アクア……」

アクアは、白夜王国の兄弟姉妹達きょうだいと仲良く、楽しそうに会話しているカムイの姿を嬉しそうに、それでいて悲しそうに見つめていた。

マークスも、またそのアクアの気持ち分かる気はしていた。

だが、敵であることは変わらない。

だからこそ、自分はカムイに恨まれても白夜王国に勝たなくてはいけないのだ。

その時、どんな戦いが、どんな運命が待ち受けていても……

カムイが白夜王国の方に行くと、タクミはカムイを睨んで自身の部下の方へと歩いて行った。

けれど、視線だけはこちらに向けていた。

カムイはリヨウマの隣に座り、

「リヨウマ兄さん。今だけは、ただのカムイとして、ここに居させてください。」

「ああ……」

「そうだ、兄さん。私は、例え敵同士であっても、こうして皆で食事ができるのを嬉しく思います。兄さん達からしてみれば、最初で最後までもしれません。そうじゃないと私は思います。いえ、本来ならこうして敵である事がおかしいんですよ。白夜王国も、暗夜王国も、手を取り合って共に過ごしていける。」

「カムイ……」

「私は知っているから……でも、ここを出てしまえばまたわついたちは敵同士になってしまう。けれど、私はやらねければならない。」

「今のお前は誰の為に闘う。」

「私はいつだって、約束の為に闘っているんですよ。」

「約束？」

「ええ、約束です。」

カムイは立ち上がる。

サクラの頭を撫で、

「タクミには逃げられてしまったが、こうして白夜の兄弟姉妹きょうだいでまた

食事や話ができて楽しかった。」

「はい！私も、楽しかったです。姉様の元気そうな姿も見れましたし……」

「私も、妹の元気な姿を見れて嬉しかったよ。」

「カムイ姉様！」

サクラはギユツとカムイに抱き付いた。

カムイも、ギユツと抱きしめる。

それを遠目から見ていたエリーゼはムツと頬を膨らませていた。

そして駆けてきて、

「ちよつと、あなた！私のお姉ちゃんを、お姉ちゃん呼ばわりしないで！」

「ひやつーご、ごめんなさい！」

サクラはバツとカムイから離れた。

カムイは苦笑して、

「エリーゼ……」

「だつてえく。」

と、まだムくと膨らんでいた。

それを見たアクアは微笑みながらやって来た。

「ふふっ……」

「アクアさん？」

「ごめんなさい。なんだか微笑ましくて。こうしていると、大家族が揃ったみたいで。」

「少し、仲が悪い気もするがな。」

「そうね。でも、私はとても嬉しいわ。やっぱり、こうして両国の『きょうだい』たちと、こうやって食事ができて。」

「そうですよね。アクアさんも……」

「ええ。けど、私はあなた程じゃないわ。私も、両国の兄弟姉妹きょうだいは大切よ。けど、あなたはきつとそれ以上の者を抱いている。だからこそ、私はあなた程じゃないの。」

カムイはアクアを見つめる。

リヨウマはアクアを見て、

「アクア。」

「リヨウマ、私はカムイと共に居るわ。カムイと共に、カムイの目的を果たすわ。」

「そうか……」

アクアはリヨウマと力強い瞳を向け合う。

カムイは瞳を揺らし、

「例え、ほんのひと時であっても、こうしていられたことは私にとって大切なこと。だからこそ、こうしてみんなが揃った事を感謝しよう。できることなら、この時間が続いて欲しいが、それは叶わないだろう。でも、私は本当に嬉しいんだ。」

その後、白夜王国と暗夜王国が混じった宴は続いた。

だが、今朝早くに白夜王国の者たちは国へと帰って行った。

それは当然と言えば当然。

カムイ達も、旅路を済ませて白夜王都へと出発した。

カムイ達は先を進んでいた。

だが、白夜王国の兵が居ると、レオンから知らせを受けた。

マークスもそれを確認した。

数は数千も居ると。

このまま衝突すれば、被害は大きい。

災厄、こちらは全滅すると。

カムイ達はアクアの先導をとして、道を変える事にした。

妖狐が住まいし山に足を踏み入れる。

だが、ここからは注意が必要だった。

妖狐達と出会えば、こちらもただでは済まない。

それでも、彼らは進み続ける。

山をかなり登ったカムイ達は妖狐の長であるニシキと出会った。

彼は外で出会う人間は優しくて好きだと言うが、山に入ってくる外から来る人間は危険だと。

カムイ達は囲まれ、話し合いどころではなくなった。

仕方なく、彼らとの戦闘を始める。

戦闘は悪化していく。

手加減は出来ない相手だった。

結局、襲い掛かる妖狐達を殲滅するしか、方法がなかったのだ。

カムイは眉を寄せて、彼らに心の中で詫びていた。

落ち込んでいたカムイに、アクアは言った。

——この世界に皆が助かるような、都合のいい道なんて存在しない。

どれを選んでも、何を守ろうとしても、どこかで犠牲は出てしまう。

もし、間違いがあるとしたら、その犠牲が私たちの目の前の人か、そうじゃないかと言う違いだけ。

だから割り切るしかない。

だからこそ、犠牲にしてしまった者たちの気持ちを酌むことこそが、彼らにできる償いだ。

アクアのその言葉は、良い方こそ違えど、何度も聞いていた。

アクアじゃない、リョウマやマークスだってそうだ。

そして、自信でもそう思っていた。

けれど、自分は関係のない者を巻き込まず、犠牲にしない道を。

大切な者たちが傷つかず、犠牲にならない道を選びたかった。

カムイは顔を上げ、先に進む事を選ぶ。

山を下りれば、今度は風の部族がある。

あそこを通らなければ、白夜王都までは行けない。

できれば、そこでは争いたくはないものだった。

だが、中立である風の部族に掛け合ったところ、村を通過することは無理そうだった。

原因はおそらく、昔暗夜王国が差し向けたノスフェラトウによって村に大きな被害を与えた事だと言う。

カムイはそれを聞き、自分が風の部族の者たちと話を付けに行く事にした。

しかし、その前に風の部族長フウガがこちらにやって来たのだ。

カムイは少し驚いたが、彼によれば自分の持つ『夜刀神』の事を気にしていたようだった。

そして、刀の持ち主として相応しいかどうかを、見定める為に勝負をする事となった。

勝てば村を通る資格在り。

負ければ夜刀神を奪われ、村を通る事もできない。

カムイはその勝負を受け、風の部族長率いる兵達と戦う。

カムイは仲間の指揮を取りながら、部族長フウガと戦っていた。

風の部族の恩恵土地ならではの風に苦戦しながら戦い続ける。

だが、カムイに力を貸してくれる仲間たちの支えは強い。

なにより、神器を持っているマークスとレオンの力も試されていた。

カムイは竜の姿にはならなかった。

あくまでこれは、『夜刀神』の使い手としての戦いだっただからだ。

カムイは苦戦しながらも、部族長フウガの武器を弾くことに成功した。

剣先を彼に向けて、この場の勝利は決まった。

カムイは剣をしまい、彼から資格を得た。

『夜刀神』の使い手としての資格も、神器の使い手としての二人もだ。

風の部族長フウガが、村の出口まで案内してくれると言う。

カムイはひとまず安心した。

だが、ここから先は白夜王都が近くなる。

そうなれば、白夜王国の元達との激しい戦闘は避けられない。

そして、白夜王族との闘いも……

カムイは気を引き締めて、先を急いだ。

カムイ達は『黄泉の階段』までやって来た。

ここは一本道。

ここでの戦闘は避けては通れない。

警戒心は強い。

偵察に行っていたフェリシア、フローラ、ジョーカーが戻ってくる。

ジョーカーからの報告によれば、白夜軍が待ち構えていた。

けれど、それは屍の山となっていたらしい。

カムイは驚き、暗夜王国の別動隊の仕業かと思った。

しかし、先遣隊である自分達より先に、ここに来るには自分達に会って追い抜かなければならない。

だが、それはなかったと言うことは別の理由だ。

その理由だろう敵が唸り声を上げてやって来た。

それは大群の野生と化したノスフェラトウだ。

相手にしても相手にしても、どんどん沸いて来る。

カムイ達は一度、撤退を考えた。

が、カムイ達の後ろにも大群のノスフェラトウが現れる。

そう、誰かに仕組まれたノスフェラトウが。

カムイ達は無理矢理、押し進むことを決める。

そんな中、カムイは横から来たノスフェラトウの攻撃を受けた。

とつさに避けたが、右腕に怪我を負う。

そして、次々とカムイに向かってノスフェラトウの攻撃は続く。

カムイはそれを交わし、時に受け流す。

そしてアクアが気付いた。

攻撃が、カムイに集中している事を。

マークスは眉を寄せて、何か心当たりがあるかのようにカムイに言ったのだ。

——先に行け。

カムイはこの軍の大将。

失う訳にはいかない、と。

カムイは闘う事を主張するが、マークスは自分達を信じて先に行つて待つていてくれと言う。

カムイは歯を食いしばって、先に行くことを決めた。

マークス達が切り開いた道を駆けて行く。

この時、カムイは気付いていなかった別のノスフェラトウの存在に気付いたリリスが、急いでカムイの後を追ったのだった。

カムイは階段を抜け、息を整える。

そして、拳を握りしめる。

『クソっ！みんなは大丈夫なのか!』

カムイは遠目から、白夜王都を目視した。
そこに、唸り声が響く。

「グルルルツツ!!」

「——!!」

カムイはとつさに剣を抜いて防ごうとするが、間に合わない。
竜化しようにも、それも間に合わない。

カムイは目を見開く。

その攻撃が当たる瞬間、

「キュウ——!!」

リリスが突っ込んできて、カムイに当たるはずだった攻撃をその身で受けた。

リリスは吹っ飛び、地面に叩き付けられる。

「リリス!!」

カムイは剣を振るい、ノスフェラトウを叩き斬る。

そして剣をしまい、リリスに駆け寄る。

「リリス!!」

リリスを抱きかかえ、

「何で、私を庇ったんだ!! しっかりしてくれ、リリス!!」

カムイの涙がリリスに当たり、彼女は光り出す。

その身をあの時のように人型へと変わり、肩で息をしながら涙を流すカムイの頬に手を当てる。

「……………泣かないでください、カムイ様。」

「リリス…………」

リリスは目を細めて、

「ああ…………星竜モローの…………情けかしら。けれど、最後にこの姿になった。カムイ様と過ごしたこの姿に…………」

「止めてくれ、リリス。最後だなんて…………言わないでくれ。死なないでくれ、リリス!」

「ごめんなさい…………私は初めて、あなたの命に背きます…………けれど、カムイ様。どうか、悲しまないでください。私は、あなたを守れて幸せです。あなたが私を助けてくれたこと…………お傍に置いてくださった

こと、楽しかった日々の思い出は……ずっと、ずっと覚えていきます。」
「い、逝くな、リリース！また私を置いて、逝くな！これではあの時と同じではないか！あともう少して戦争が終わるのに！なのに、また私はお前を失うのか……そんなの許さん！私よりも先に逝くな！」

リリースはさらに泣き出すカムイに微笑みかける。

「カムイ様、そんなに悲しまないでください……カムイ様の言うそれを、私は存じません。けれど……私はあなたを守れたことは誇りです。だから、最期くらい、あなたの笑顔を見せて……」

リリースはあの時と同じ事を言う。

カムイは涙を拭い、必死に笑顔を作る。

リリースは微笑み、

「私はあなたを……ずっとお慕いしておりました……あなたの胸の中で、こうして眠りにつけるなら……私はなんの悲しみもございません……カムイ様……」

リリースの手が落ちる。

一筋の涙を流して……

あの時と同じ感情が甦る。

彼女の懐かしさ。

懐かしき、優しい神竜ハイドラの姿と被る。

父、カムイと被る。

また、自分は何もわからずに失った。

大切な、大切な……彼女を。

カムイは彼女を抱きしめる。

「リリース……リリース……リリース!!うわあああああ!!なぜ、私はまたお前を失わなければならない!どうして、お前が死ななければならぬんだ!!」

そんなカムイの後ろから、またしてもノスフェラトゥが唸りを上げてやって来た。

「グルルルっ!!」

「………まだ、残っていたのか。」

カムイはリリースを地面に置き、ノスフェラトウを睨みながら立ち上がる。

手には竜石を握り、竜の姿へと変わる。

ノスフェラトウを爪で裂く。

そしてまた、奥からノスフェラトウが続々と現れる。

「グルルルっ！」

カムイは竜の姿で戦い続けた。

だが、カムイの背後から狙われた。

しかし、そのノスフェラトウは剣に斬り裂かれて倒れ伏す。

「間に合ったか、カムイ！」

「カムイ！」

マークスとアクアが駆け付けた。

そしてアクアは眉を寄せた。

カムイのその姿に。

怒りに任せて竜の姿で、ノスフェラトウ^敵を倒していたその姿に。

そして、我を失っていたカムイはマークスにその爪を振り下ろす。

マークスはそれを剣で受け止め、弾く。

「カムイ！！」

「いけないわ……カムイ！我に戻って！このままでは、完全に暴走してしまっわ！」

カムイは再び爪を振り下ろす。

だが、そのカムイの前にアクアが手を広げて立つ。

カムイの動きが止まり、人の姿へと戻る。

「……………」

「カムイ……………」

アクアが地面に座り込んでいたカムイを抱きしめる。

アクアは地面に横になっっているリリースを見る。

そして解る。

彼女が死んでいる事を。

「…………アクアさん、兄さん、すみません。でも、無事でよかったです……………」

「カムイ、大丈夫?」

「私を……私を守ってくれたんです。失いたくはなかったのに……なのに……私のせいで死なせてしまった……」

カムイはアクアの方に顔を埋めて泣く。

アクアはギュツとカムイを抱きしめる。

マークスも、カムイの気持ちは分かるだろう。

だからこそ、言うのだ。

「泣いている場合か?カムイ。泣いていれば、リリースは生き返るのか? 私は厳しい事を言う。そうやって泣いても、自分の事を責めても、事態は好転しない。ここが戦場でも、そうやって泣いているのか? 人が死ぬ度に、いちいち動けなくなっているは、まだ生きている者たちまで、危険にさらす事になるぞ! 私たちは今から白夜王国領内に入る。ここから先は、誰が死んでもおかしくはないんだ。例えば、エリーゼを、レオンを、カミラを、そして私を目の前で失っても、お前は立ち上がって最後まで闘い続けなければならないんだ。お前が迷ったら、皆が迷ってしまう。だから、立ち止まるな。何があっても。それがお前の……夜刀神に選ばれた者の責任ではないのか?」

「……………ええ、そうですね。それが、カムイとして、夜刀神に選ばれた責任ですよ。」

カムイはアクアから離れ、立ち上がる。

そしてリリースを抱きしめる。

「大丈夫だ。お前はこの軍のリーダーなのだからな。だから、できるはずだ。迷いのない瞳で、皆を導き、闘う事が。」

「……………迷いのない瞳。」

「ああ。私はずっと、それをお前に教えたかった。皆をここまで導いたお前が、こんなところで折れてはいかん。最後まで迷わずに闘い抜け。何があっても。リリースだって、そう望んでいるはずだ。そうだろう?」

カムイは彼女を岩陰に隠し、

「すまない、リリース。また、こういう所に置いて行って……。でも、必ず迎えに行くよ。」

カムイはマークス達に振り返り、

「行きましょう、兄さん、アクアさん。私は立ち止まってはいけない。

私が、成すべき事を成す為に。やってやるさ、必ず……」

「そうか……それでこそ、私の妹だ。」

カムイ達は他の仲間と合流する。

抜けると、白夜王国のテンジン砦が目の前に見えた。

アクアはそこをじっと見つめ、

「着いたわ……ここが、テンジン砦。白夜王国の前線基地にして、難攻不落よ言われている砦よ。ここを落とせば、白夜王国は陥落したも同然だわ。」

「……難攻不落か。」

「気を付けて、カムイ。きつと中には、見知った相手も多いわ。あなたも、私も、覚悟して臨んだ方がいい。」

「分かっています、アクアさん。私は成すべき事の為に進む。その為に、この先に誰がいようと……誰を失っても立ち止まりません。それが、私にできることだから……」

「そうね……なら、私もともに、歩むわ。兄弟姉妹きょうだいのように育った彼らと戦う事になっても、私も進み、後悔はしない。あなたにとって、大切な者たちを守るためにも、私はあなたと共に成すわ。」

「はい……ありがとうございます、アクアさん。」

カムイは差し出されたアクアの手を握る。

強く、強くその手を互いに握り合わせる。

お互いの想いを込めて。

カムイは味方に振り返ると、

「砦の中から気配を感じる。向こうには、既にこちらの動きはばれてるだろう。気を引き締めて行くぞ！敵が動く前に、攻め込む！難攻不落のテンジン砦を、我々が落とすぞ！」

「おお〜!!」

カムイは味方を四部隊に分けて、テンジン砦に向かって進攻する。

カムイは部隊を自分、マークス、カミラ、レオンの部隊に分ける。

自分とマークスが正面から乗り込み、カミラとレオンの部隊が左右

から攻め込む。

カムイは剣を抜いて、闘う。

アクアと背中合わせにして。

城内の前に武器を構えていた者たちに、カムイは眉を寄せる。

そこに居たのは、白夜兵たち。

その彼らが護るのは、サクラと白夜軍師ユキムラ。

「カムイ姉様！」

「サクラ……まさか、最初に剣を向けなくてはいけないのが、お前になるとはな……。」

カムイは剣を降ろし、

「サクラ、今退くと言うのであれば、私は何もしない。」

「いいえ、姉様。確かに私は、姉様には勝てないでしょう。けれど私も、白夜王国の姫として、ここで退く訳にはいかないのです！白夜王国を守るために！」

「……そうか。なら、私も遠慮はしない。お前が敵として立ちほだかるのなら、私はお前にとつての敵なのだから！」

カムイは剣を構えなおす。

白夜軍師ユキムラはサクラを背に守り、

「……まで、来たのですね。カムイ様。ですが、護ってみせます。この砦も、白夜王国も。例え、ミコト様の忘れ形見である、カムイ様が相手でも！」

「ああ……かかってこい、ユキムラ。私も、例えミコトお母様の臣下相手でも、引けぬ理由がある。私を殺す気で来い！」

カムイは彼らの攻撃を受け流し、一撃を与えていく。

あくまで、カムイの部隊は時間稼ぎ。

城内を攻め込んでいるレオンとカミラの部隊が制圧するまで、ここで少しでも時間を稼ぐこと。

マークスの部隊も、他の所で時間を稼いでいる。

そして、目の前の敵もサクラと白夜軍師ユキムラとサクラの臣下二名。

そこに、馬が駆けて来る。

マークスが、カムイの横で止まると、

「聞くがいい、白夜王国軍よ！砦の中は我々が制圧した！このまま闘っても勝ち目がない。武器を捨てて投降せよ！そうすれば、生き残っている兵の命までは取らん！」

彼の叫び声に、

「くっ！やむを得ませんね。私も、サクラ様も、兵たちも、もはや闘えません。ここは投降して、命を守るのが得策でしょう……」

白夜軍師ユキムラは眉を寄せる。

サクラは泣き出し、

「ごめんなさい……私、わたし……」

「いいえ、サクラ様は立派でしたよ。それから、ツバキさんも、カザハナさんも、よく戦ってくれましたね。」

「ユキムラさん……」

「うっ、うっ、あたしたち、負けちゃったんですね……」

「そうです。でも、生きています。生きていれば、これからいくらでもやり直せます。武器を捨てて、投降しましょう。ここで、無駄に命を散らす必要はありません。」

「はい……」

サクラは涙を拭って、臣下二人を見る。

彼らも、決意したみたいだ。

「白夜王国軍よ、もう一度言う。この砦は暗夜王国軍が制圧した。もし投降するなら——」

「聞こえておりますよ。暗夜王国第一王子、マークス殿。」

白夜軍師ユキムラは武器を下ろして、近くまで歩いて来る。

マークスはため息をつき、

「はあ、なら早く答えろ。まだ戦うつもりか？」

白夜軍師ユキムラは彼の前に武器を捨てて、

「いいえ。そのつもりはありません。白夜王国軍は、あなた方に投降します。砦の中の兵達にはすでに全員、武装解除を通告しました。ですから、サクラ様の命だけはどうかお助けいただけますよう。」

そして、サクラ、サクラの臣下も武器を捨てる。

マークスは馬から降り、

「ほう。賢明な判断だな。さすがは泣き女王の軍師だ。その判断に免じ、生き残った兵と王女の命は助けると約束しよう。暗夜兵よ、この者たちを捕虜として捕らえよ！ただし、殺しはするな！手荒な真似はせずに拘束するんだ！」

「はっ！」

兵達が彼らを拘束し、連れて行く。

カムイの横を通り過ぎようとする。

それを見送り、

「すまないな、サクラ、ユキムラ。だが、これも早く戦争を終わらせるため……少しだけ待っていてくれ。」

カムイがこの場を離れようとした。

だが、奥の方から悲鳴が聞こえてきた。

「ぎゃああああー！」

「なに!?」

カムイはすぐにそこに向かう。

そこに行くと、カムイは目を見張った。

ガロン王が選抜した兵達が、武器を持たぬ兵達を斬り倒していた。

「ふん。白夜王国軍の実力も、この程度か。」

「何をしている、ガンズ！なぜ、貴様がここに居る！」

「これはこれは、カムイ様。我々は、カムイ様たちの援軍としてきたのですよ。」

「では、何故武器を持たない兵を殺した！」

「それは、彼らが敵国だからですよ。」

「貴様！」

カムイは剣を握りしめる。

そして、剣を彼に向けようとする。

が、その前に白夜軍師ユキムラがカムイを見る。

「どういう事ですか!? 投降すれば、兵の命は取らないはずですよ！」

「そんな……そんな！早く、早くあの兵たちの回復を！お願いです、この縄をほどいてください！私は逃げたりしません！だから、お願いし

ます!!」

サクラが涙を流しながら懇願する。

そこに、また一人やって来る。

「なりません。」

「マクベス!」

「ごきげんよう、カムイ様。ですが、剣を向ける相手をお間違えですよ。」

カムイは暗夜軍師マクベスに剣を向けていた。

カムイは舌打ちをして、ひとまずは剣を下ろす。

「いやはや、さすがですな。ここの難攻不落と呼ばれた砦を、簡単に制圧してしまうとは。ガロン王様も、この功績は高く評価されることでしょう。」

「それは、どうでもいい!私は何故、こんな事をしたかを聞いているんだ!」

「ガンズ将軍から聞いたのではないのですか?援軍ですよ、援軍。そろそろ厳しい頃だろうと、ガロン王様が配慮してくださったのです。さ、お疲れでしょう。後は我々にお任せを。すぐに、ガンズ将軍が、白夜兵など皆殺しにしてくれます。」

「ふざけるな!彼らはすでに武器を捨て、投降した者達だ!闘う意志のない者たちだぞ!命を奪う事など、私が許さん!すぐに、やめさせろ!」

「ううむ……そう言われましても。」

と、視線を横に向ける。

そこには、未だ武器を持たない兵達を殺している。

「おらおらおら、死ねえええっ!!」

「うわああああっ!!……がはっ!!」

「いやああああっ!!やめて、もう殺さないで!お願いです!」

サクラの泣き叫ぶ声も響き渡る。

カムイは暗夜軍師マクベスに再び剣を向け、

「すぐにやめさせろ、マクベス!!」

そこに、マークスも駆けてきた。

「マクベス…これはなんだ！すぐに、こんな卑怯なことはやめろ！これ以上やるのなら、私がお前を斬るぞ！」

マークスは剣を抜く。

彼の本気に、暗夜軍師マクベスは一步下がる。

「なっ?! 正気ですか、マークス様?!」

「無論だ。貴様のような者、誇り高き暗夜の軍師とは認めん！暗夜王国第一王子として、力づくでもお前たちを止めてみせる！」

そして剣を振り下ろそうとした時、

「ならん。下がれ、マークス。」

「?!この声は……」

マークスの剣が止まり、声のした方を見る。

そこには、暗夜王ガロンが歩いて来た。

「父上……?!」

「よいか、これはわしが命じた事だ。逆らうことは、我が子とて許さ
ん。」

「しかし、マークス兄さんの方が正しい。彼らの命は、我々が保証して
いるんですよ！」

カムイは暗夜王ガロンを睨む。

だが、暗夜王ガロンは冷たくカムイを見下ろし、

「聞こえなかったのか？逆らえば、許さぬ。」

「わかり……ました。」

マークスが剣をしまう。

カムイは剣を握りしめる。

「それでよい。」

白夜軍師ユキムラは死にゆく兵達を見て、

「くっ！卑怯者！私たちを騙したのですね！許しません、絶対に!! 貴
方たちは悪魔です!! 人の形をした、化け物です!!」

「うっ！うっ!! こんな、こんなことって……みんな、助かるはずだった
のに……こんなの酷すぎます!!」

サクラも泣き続ける。

カムイは剣をしまい、拳を握りしめる。

「よくやった、我が子たちよ。これで、白夜王国は落ちたも同然。わしはお前たちを、誇りに思うぞ。」

暗夜王ガロンは笑いながら、歩いて行く。

カムイは唇を噛みしめる。

『くそっーくそっ』

しばらくして、カムイは何かサクラと白夜軍師ユキムラ、サクラの臣下二人の命だけは守った。

彼らの恨みは多いだろう。

だからこそ、アクアとエリーゼにサクラの事を頼んだ。

カムイはアクア達が戻ってくるのを待っていた。

そして、アクアだけが帰って来た。

「アクアさん……サクラの様子は……」

「そうね。ずっと塞ぎ込んでいるわ。食事も喉を通らないみたい。」

カムイは岩に座り、頭に祈るように手を握り合わせて抱える。

「無理もないな……あんなに大切にしていた仲間が、目の前で殺されてしまったのですから。あの後、何とかしてサクラとユキムラ、ツバキにカザハナの命だけは捕虜として助けられたが……サクラには合わせて貰えていない。サクラの心では、これはあまりにも辛すぎる。」

「そうね。独りぼっちで閉じ込められて、余計に辛いでしょうね。けどね、エリーゼがよく声をかけているわよ。寒くないとか、お腹空いてないとか。」

「そう、ですか。やっぱり、エリーゼを行かせてよかったです。似た者同士ですからね、あの二人は……国のため、兄弟姉きょうだいのため、仲間のため……そのために、立ち向かう光をもつ。それぞれの国にとってのかけがえない光なのだから。」

「そうね。あの二人は何か通じ合っているのかもしれないわね。お互い末っ子して、妹姫同士として。けれど、ガロン王直属の兵たちはサクラたち捕虜のことを良くは思っていないから、目を離さないようにした方がいいわ。知らない間に殺されないとも限らないもの。」

「では、そちらの方はアクアさんとエリーゼに任せたいと思います。」

私は少し手が離せなくなる。そちらに手がかかってしまうからな。」

「……わかったわ。けど、カムイ。無茶はダメよ。」

「はい、解ってますよ。」

カムイは顔を上げて立ち上がる。

アクアは視線を流し、

「けど、暗夜王国は今、真つ二つの状態ね。」

「……暗夜王ガロンを信じられるか、信じられないかとか?」

「それもあるけど、あなたが率いているマークスやレオンたちの軍勢と、ガロン王が率いるマクベスやガンズたちの軍勢のことよ。目的は白夜王国の制圧だけれど、やり方が違いすぎる。このままじゃ、内部争いが起きてもおかしくはないわ。ガロン王が早くこちら側に来たのは好都合だけれど、仲間割れでもして信用が失えば、私たちの身も危ないわ。あの玉座に辿り着くまで……決して気は抜けないわね。」

「ああ。できれば、兄さん達を仲間にしたい。けれど、彼はきつとガロン王を取る。今はまだ、そう言うモノだろうな……あいつを玉座に座らせて、真実を教えられても、受け入れられなかった時は……私は彼らの敵になる。」

カムイは視線を横に向ける。

そこには、こちらにやって来る暗夜軍師マクベスがやって来た。

「カムイ様、アクア様。」

「なんだ、マクベス。」

「おや?何かお話だったのですかな?」

「私たちは話し合いもしてはいけないと?」

「いえいえ、そんな事は。」

「で、要件は?」

「はい。ガロン王様より、戦闘準備を整えよとのお達しです。我々はもうすぐ、スサノオ長城へと差し掛かりますので。」

「スサノオ長城……」

「ええ。スサノオ長城は、白夜王城への最後の関門でございます。ここを落とせばいよいよ王都へと、足を踏み入れることができるのですよ。我々が先発部隊として道を開きますので、カムイ様たちにはその

間に敵の本丸へと攻め込み、将であるタクミ王子を討つていただいた
い。」

「……なるほど。将はタクミか……」

「ええ。斥候からの情報では、そのように聞いております。捕虜はも
うサクラ王女がおります故、殺してしまっても良いと思いますがね。
いや、もちろん命を奪わないという選択も懸命だとは思いますが、王
が何と思われるか……」

「王が何と言おうと、それは私の意志で決める。戦って、功績を出せば
いいだけの話。なら、タクミの処遇をどうするかは、暗夜王にはない
はずだ。」

「まるで、この戦にも早かったかのような言いようですな。」

「マクベス、お前はまるで私に負けて欲しいかのような言いようだ
な。」

カムイは彼をキツと睨みつける。

暗夜軍師マクベスは一步下がった。

「……さて、私は進軍の準備を進めてくるかな。お前も暗夜王の所に
戻ったらどうだ。」

「承知しました。」

彼はサツと歩いて行った。

カムイはムツとしながら、アクアと共に仲間の居るところへと戻
る。

そしてカムイは目の前のスサノオ長城を見上げる。

ここに居るであろうタクミを想って。

カムイは数名の兵を連れて、城の中を駆け上がる。

無論、アクアも共に居る。

下の方はマークス達に任せてあるから大丈夫だと信じて。

カムイが扉を開けると同時に、矢が放たれた。

一つは頬をかすめたが、残りは叩き斬る。

「来たね、カムイ。ぶっ潰してやる！」

「タクミ。」

「やっとお前を殺せる。僕はずっと待っていたんだ。お前を殺せるこ

の時を。シユヴァリエでの言葉……覚えていたのだろうか？」

「ああ。『どんな手を使つてでも、私を殺す』だったな。」

「そうだよ。僕にはもう、後がないんだ。きつとここが、僕とお前の最後になる。だから絶対に倒す！お前だけは僕が倒すつて、ずっと、ずっとそう決めていたんだ！民や、母や、皆の仇……討たせてもらおう！」

「タクミ……ああ、来い。相手になる！」

カムイは剣を構えて、彼と戦う。

彼の臣下や兵をアクア達に任せて闘う。

カムイは見る。

彼の瞳にある悲しみや怒りを。

それを受け止め、闘うのが自分。

彼にとって自分は復讐相手なのだ。

それこそ、自分が彼らに対してできる事なのかもしれない。

自分の目的の為に、何も言わず事を成している自分にとっては……

カムイはタクミとの攻防戦を続けていた。

互いに肩で息をしている。

油断すれば、攻め入られる。

それはよく解っていた。

そこに、駆け足が聞こえてくる。

「カムイ、他の連中は倒した！」

「後は、そこに居る王子を抑えればここの占拠は終わりだ。」

マークスとレオンがやって来た。

それを聞いたタクミの瞳に、さらに怒りが燃え上がる。

カムイはタクミに矢を斬りながら詰め寄り、魔術を放つ。

それに目を取られたタクミに、カムイは剣を振るう。

風神弓を弾き、彼を蹴りを入れる。

タクミは倒れ込みそうになりながら立ち上がり、腰に会った剣を抜く。

「負けない……絶対に前を殺すんだ！」

「くっ！」

カムイは彼の剣を受け止める。
かなり重い。

それを必死に耐え、竜の力を籠める。
思いつきり力を振るい、吹き飛ばす。

タクミの剣は折れ、再び彼の横にあつた風神弓を握る。
だが、その前にカムイは剣先を彼の首に当てて風神弓を持っている
手を抑え込む。

タクミはうつ伏せになった。

「勝負あつたな、タクミ。これで、スサノオ長城は暗夜王国軍が制圧した。生きている兵たちは全て、捕虜として捕らえさせてもらう。勿論、お前を含めてだ。」

「くっ！卑怯者！呪われるがいい！」

タクミは押さえつけられていない手をダンと地面を叩く。
そこにレオンが歩いて来る。

「まったく、失礼なことを言うヤツだな。命があるだけでも有難いと思つてほしいね。捕虜つていつても、別に酷い事をしようつてわけじゃない。大人しくしていれば、サクラ王女にも会わせてやるさ。」
「なに？サクラまで捕らわれているのか……お前たちのような者に！」

タクミはギリツと歯を食いしばる。

カムイはタクミを見て、

「ああ。気持ちは察するが、今は堪えてくれ。私はお前を暗夜王が来る前に、拘束しないとイケない。お前を救うために。」

「救う……だと？」

タクミがぐつと力を籠める。

カムイは後ろに投げ飛ばされる。

タクミは起き上がり、

「ふざけるな！何が救うだ！この裏切り者！」

そして矢を放つ。

カムイはそれを避け、止める。

「待ってくれ、兄さん！」

タクミに剣を振るうマークスの姿を見たからだ。
だが、カムイの制止がかかる前にマークスの方が早い。

マークスの剣からタクミを守ったのは、彼の臣下二人だった。

「タクミ様……お怪我がなくて良かった。」

「全くだぜ。ホント、よかった……」

「オボロ！ヒナタ！」

タクミは肩を震わせる。

風神弓を強く握りしめ、

「許さない……絶対に許さない！」

「タクミ！」

「来るな！」

タクミの放つ矢がカムイの横を掠っていく。

それでもカムイはタクミの元へと駆けて行く。

「来るな！来るな！来るなあー！お前んかが近寄るな！お前さえ、
お前さえいなければ、白夜王国はこんなことにはならなかった！誰も
死なずにすんだ！」

「——！！」

カムイの足が止まる。

タクミは風神弓を下げる。

「どうして……どうしてお前は暗夜王国についた?! どうして……僕た
ちの味方をしてくれなかったんだよ!!」

「タクミ……」

「うっ……うっ……」

タクミは強く、強く風神弓を握りしめる。

そしてカムイをジッと見ると、

「——もう、いい。」

「タクミ!!」

タクミから紫のオーラのような者が浮かび上がる。

カムイは必死に手を伸ばしながら駆け出す。

タクミは後ろへ一歩一歩下がりがりながら、

「僕がやる……救いの刀など無くても……僕がこの白夜王国を救って

みせる。お前達に、僕を捕らえることなんてできないさ……ほら、逃げる道なら、ここに……」

そう言つて、城の柱の上に立つ。

そしてタクミは真後ろへと落下した。

「タクミ!!」

カムイはバツと下を見る。

だが、彼の姿は目視できない。

ここは城の最上階。

落ちれば、待っているのは死だ。

カムイは拳を握りしめる。

「タクミ……」

アクアもカムイの後ろまで駆けてきて、胸に手を当てて口を押える。

カムイはガンと柱を叩き、

「タクミ!」

カムイはクルリと回る。

走り出そうとするカムイの腕を、アクアが引っ張り、

「カムイ!!どこに行く気!!」

「長城の下に!まだ息をしている可能性だつてある!」

「ちよつと!まだこの場は収まっていけないのよ!!」

「この場の指揮はマークス兄さんに任せます!」

「カムイ!」

カムイはアクアの手を払って走り出す。

アクアはそれを追いかける。

真下まで来たカムイは辺りを見渡し、

「タクミ!どこだ、タクミ!!」

だが、あつちこつち捜したが、彼の姿はない。

カムイは肩で息をしながら、

「姿がない……だど?ここに落ちた筈なのに……」

「待つて、カムイ!単独行動をしないで!まだ辺りに白夜兵がいるかもしれないのよ!!」

「そんな事はどうでもいい！問題はタクミだ！タクミの姿がないんだ！」

追って来たアクアに、カムイは怒鳴る。

アクアは困惑しながら、

「え？姿がない…………？」

それを見たカムイはハツとして、深呼吸をして落ち着きを取り戻す。

そしてアクアを見て、

「はい。確かにタクミがあそこから飛び降りたのを見た。」

カムイは上を見上げる。

そして、再びアクアを見て、

「なのに、ここにはその姿がない。どこにも…………です。」

「そんな…………そんなはずは、ないわ。だって、仮に生きていたとしても、あの高さから落ちて、動けるはずがないもの。いいえ、そもそも生きていると言うこと自体無理なのよ。」

「じゃあ、どうして…………」

カムイは眉を寄せる。

思い出す。

あの時のタクミの様子を。

『まさか…………透魔王に…………？あいつなら死体でもいい。いや、死体の方が扱いやすい。けど、どうやって？すぐには動けないはずだ。誰かが手引きした？…………アベル、か？でも、その気配もしない。いや、それ以前にどうやって、アベルがここに来る？彼には移動手段は限られる。自由に行き来はできないはずだ。』

アクアが首を振り、自分とある意味同じ事を考える。

「わからないわ…………誰かが体を持ち去ったのか、何か別の理由があるのか…………けれど、そのことを考えている時間はないわ。今は早く長城に戻る事が先決よ。いくらマークスでも、ガロン王率いる部隊が来てしまえば、救える命さえも救えなくなる。また、多くの犠牲が出てしまうわ。」

「そうですね…………わかりました。すぐに戻りましょう。」

カムイとアクアは走る。

生き残った白夜兵を守るために。

カムイ達の部隊は白夜王都にやって来た。

カムイはジツと王都を見つめて、

「ついに、戻って来たな……白夜王都に。」

「ええ。あと少しで全てが終わる。白夜王城を落とし、玉座を制圧すれば……いよいよ、私たち暗夜王国の勝利となるわ。」

カムイと二人きりになっていたアクアは冷静に、同じように王都を見つめて言う。

カムイはアクアに視線を向けて、

「アクアさんは……平気ですか？」

「え？」

「……今から攻め込むのは、あなたの育った場所だ。もし辛いなら、戦闘は私達に任せてくれてもいい。終わるまで、どこか安全な場所で待っていてくれても——」

「いいえ。それはできないわ。怖気づいて逃げる為に、私は暗夜王国についたわけじゃない。それに、それを言うなら、今から攻め込む場所はあるあなたにとっても大切なところ。そのあなたも闘うんだもの。私もともに最後まで、一緒に闘うわ。それに、この戦争を終わらせることこそが、私を育ててくれた白夜王国のために、共に育った兄弟姉妹達の為にやるべき使命だって……私はそう、信じているから。」

「……アクアさん。」

「ねえ、そういえば……結局見つからなかったわね。」

「……ええ。本当に、どこに行ったんでしょうね、タクミは……」

「本当に、そうね。あの後、マクベスやガンズの部隊がしらみつぶし探したそうだけれど……タクミ本人はおろか、身に着けていた物の一つも見付けることはできなかった。にわかには信じがたい話だけれど……タクミは消えてしまった。そう思うのが一番しっくりくるわ。」

「……消える、か。」

「このことは、サクラには黙っておいた方がいいでしょうね。」

「ええ、その方がいい……ですね。」

二人は視線を落とす。

そこに、

「カムイ。アクア。」

「マークス兄さん。」

「父上よりのお達しだ。これより、白夜王都に進攻する。皆に準備するよう、伝えてほしい。」

「……わかりました。」

カムイは準備を整え、暗夜王ガロンを先頭に進軍を始めた。門を破壊し、暗夜王ガロンは馬に乗って、兵と共に進む。

白夜王国の民達は身を寄せ合い、恐怖の声を叫ぶ。

「あいつらだ……！暗夜軍が……暗夜軍が来たぞーっ！」

「ああ、恐ろしい……まるで死神の行進だわ……」

カムイはその行進の白夜の民達に見える場所だった。

カムイは無言で歩いて行く。

民の一人が、カムイの存在に気付いた。

「おい、裏切り者のカムイ王女もいるぞ！」

「ミコト様や王都をあんな風にして、よくその顔を魅せられたのう！」

「主人を返しておくれ！この、人でなし!!」

「お父さんとお母さんを返せー!!」

大人から老人、主婦に子供。

多くの民達がカムイに向けて、敵意や殺意、悲しみ、怒り、多くの感情が渦巻く。

カムイはそれを黙って聞き続けていた。

そうしていたら、暗夜軍師マクベスは忌々しそうに、

「はあ……民草どもが五月蠅いですね。道を開けなさい!!」

「きやああああ!!」

暗夜軍師マクベスは近くに居た民を斬り付ける。

カムイは彼の前に出て、

「マクベス！」

「ふん。他愛もないですね。ご安心ください、カムイ様。あなた様に

心無い言葉を吐く者は、全て私たちが始末いたしますので。」

「ふはははは！俺たちに逆らったらどうなるか思い知らせてやる！」

さらに、ガンズが民たちを斬り付けて行く。

「うわああああ!!」

民たちは逃げまどう。

悲鳴を上げて、恐怖に身を固める民たち。

カムイは拳を握りしめる。

剣を抜こうとするカムイの手をアクアが握る。

「こらえて、カムイ。ガロン王が見ているわ。今彼らを止めたりすれば、何をされるかわからないのよ。」

「くっー！」

カムイは感情を抑え込んで進む。

白夜王城の前に来ると、暗夜軍師マクベスはマークスを見る。

「さて、白夜王城に着いたようですね。ふむ……外に兵は見当たりません。おおかた、全戦力を城内に集中させ防御戦でもするつもりなのでしょう。」

「そうだな……だが、我々暗夜王国軍は、既に白夜王城を取り囲めるほどの数だ。投降するよう呼びかければ、闘わずとも勝負がつく。」

「なりません、マークス様。」

「なに？」

「良いですか？これは白夜王国の邪魔者たちを、一斉に始末するチャンスですぞ。投降の呼びかけなど生ぬるい。この戦乱に乗じ、白夜の要人を全て殺害してしまえば、晴れて戦争が終わった後……我が暗夜王国がこの国を乗っ取ることも容易くなるでしょう。」

と、暗夜軍師マクベスはニヤリと笑っていた。

マークスは眉を深く寄せて、

「貴様、そんな卑劣な手を——」

「ガロン王様、如何でしょう。このマクベスの策、実行に移しても宜しいでしょうか。」

暗夜軍師マクベスはマークスが言う前に、暗夜王ガロンを見る。

暗夜王ガロンは視線だけ向けて、

「好きにしろ。」

「ありがとうございます。」

「父上……」

マークスは拳を握りしめて、俯いた。

カムイも少しムツとしながらそれを見ていた。

と、暗夜軍師マクベスはカムイを見て、

「ふむ……では、お許しも出た事ですので、我々は城内に攻め入りましょう。私たちは裏から、カムイ様たちは表から、それぞれ進行するということで如何でしょう。」

マークスは視線を上げ、カムイを見る。

「どうする、カムイ。それで異論はないか。」

「ああ。それが、命令なら。」

カムイはマークスから視線を外す。

暗夜軍師マクベスは手を叩き、

「おお、そうですね。それは何よりでございます。では、私たちは裏手に回りますゆえ。後ほど、城内の『王の間』でお会いしましょう。くれぐれも、うっかり戦死なさらぬようお気をつけください。」

そう言って、彼らは裏手に向かって進軍していく。

カムイは歯をギリツと歯を食いしばった後、

「死なないさ……私はまだやる事がある。」

「カムイ……」

「マークス兄さん、私は——」

「ああ。このやり方がお前の本意でないことは、解っている。カムイ。お前は以前、カミラに正義はどこにあるのかと聞いたそうだな。」

「ええ……」

「……正義など、ありはしない。」

そう言うマークスの姿はあの時の最期のマークスを思い出す。

カムイはマークスをジツと見つめる。

マークスはカムイから目を離さず、瞳をじつと見て、

「それが戦争だ。この世界に、正しい道も間違った道も存在しない。あるのはただ……それぞれの野望と、欲望。そして、それに付き従う

者たちの思惑だ。よく、覚えておけ。」

「……………」

カムイは瞳を揺らし、サツとマークスから離れて、指揮を取り始める。

「まずは城門を突破する。」

城門を破壊し、奥へと進んで行く。

そこに、馬の泣き声と羽ばたき音が響く。

カムイは空を見上げる。

そこには天馬に乗ったヒノカの姿。

「白夜王国第一王女、ヒノカ！参る！！」

カムイの前に降り立ち、凧刀を上で回転して構える。

そして、ヒノカの部隊が陣形を作って立ちはだかる。

カムイは剣を抜き、

「白夜王国の敵、カムイ。受けて立つ。」

カムイはヒノカと刃を交える。

彼女の凧刀を受け止め、

「とうとう来てしまったのだな、カムイ。お前の本当の家である……

この王城に。」

「はい……本当にすまないと思っている。ここは私にとっても本当に大切な、大切な場所。けれど、私は玉座に用がある。その為に、ここを通らせて貰う！」

「カムイ……そこまで思っていて、何故だ！私は、この城に帰ってきたお前を、おかえりと言って迎えたかった。ここで眠り、ここで起き、ここで生きるお前が見たかった。ここがお前の……帰る場所になつて欲しかった。それが私の、夢だった。でも、その夢も……もう叶わない。」

「ヒノカ姉さん……」

「いや、すまない。私としたことが、らしくないな。潰えた夢に思いを馳せるなど。今日の前に居るのは、敵国の将。ならば私は、ただ闘うのみだ。お前がもう二度と、この城に来ることのないように。」

ヒノカはカムイの剣を弾く。

カムイは後ろに下がりながら、手を構える。
そこに魔法陣が浮かび、光を弾けさせる。

ヒノカは腕で顔を守り、一瞬動けなくなる。

その隙に、カムイは宙に飛ばされた夜刀神^カを取り、ヒノカに突っ込んで行く。

ヒノカは反応し、凧刀を振るう。

カムイは一端距離を取り、

「……流石、ヒノカ姉さんです。」

「ああ。そうだろう……お前を取り戻すために磨いた力だ。」

「知っています。だって、私がリョウマ兄さんと一緒にスメラギ父上様に剣の稽古をしていた時だって、怪我をする度に心配そうに駆けて来た。傷の手当てをして、泣きながらももうやめてくれと言う姉さん。」
「え……？」

「それに、あんなに優しくして、お淑やかで、誰かが傷つくのを恐れていた姉さんが、自ら武器を取り闘う。その努力を、私は否定しない。私が壊してしまった本来のあなた。なら、私が向き合わなくて、どうしますか。私は、私のすべてを持って、姉さんの前に立ちます。」

「……カムイ、お前は一体誰だ？」

ヒノカは眉を寄せて、凧刀を構える。

突き出される凧刀を避けながら、カムイは剣を構えなおし、突っ込む。

そして剣を振るうと見せかけて、竜石を手取る。

竜の姿となって、馬の足を払い、体勢の崩れたヒノカを竜の手で抑え込む。

カムイは人型に戻って、ヒノカに剣を向ける。

「……くっ、負けたのだな、私は……この城を守ることは、叶わなかったか……」

ヒノカは深呼吸をすると、馬乗りしているカムイを見つめる。

「さあ、殺すなら殺せ。第一王女として、命乞いはしない。その代わりに、残った兵たちはどうか助命を——」

「何を言っているのですか、ヒノカ様!? あなたは、ここで死んではいけ

ません！」

「だめ……そんなの絶対だめです……ヒノカ様が死ぬのなら、私も一緒に死にます……」

ヒノカの臣下アサマとセツナがボロボロになって、ヒノカの方に駆け寄ってくる。

ヒノカは二人を見て、

「アサマ、セツナ……」

「いえ、ダメです。ガロン王は敵将の命を救うことなど、決して許さない。ですから、ヒノカ姉さんには死んでもらいます。」

「……そうか。ならば、一思いに殺せ。」

「はい……」

カムイは剣を振り上げ、下敷きになっているヒノカに振り下ろす。

臣下二人が手を伸ばしながら、

「ヒノカ様!!」「やめて……!!」

ザクツと言う音となる。

ヒノカが目を開けると、自分の頬を掠めた剣が地面に突き刺さっていた。

臣下の二人はその場に座り込み、

「外れた? いえ、外したのですか?」

「どうして……」

カムイは剣を抜き取り、ヒノカから降りる。

ヒノカに手を差し出し、立たせる。

そしてカムイはヒノカの腰に付いていた手ぬぐいを取り、ヒノカの頬を拭う。

血の付いた手ぬぐいで、さらに剣に付いていたヒノカの血を拭く。

「カムイ……」

「……いいですか、ヒノカ姉さん。良く聞いてくれ。今からヒノカ姉さんは死んだ。そう城中に言いふらします。なので姉さんは、この戦が終わるまでどこか安全な場所に臣下の方たちと共に身を隠してください。姉さんの死んだ証は作りました。これを、ガロン王にヒノカ姉さんを討った証として、献上する。」

と、カムイはヒノカの血の付いた手ぬぐいを見せる。
ヒノカは困惑しながら、

「どういうことだ、カムイ。私を、殺さないのか？」

「ええ。私は、無駄な殺戮はしない。暗夜王ガロンの思惑には……乗りたくないんです。ヒノカ姉さんも、ここに生き残っている姉さんの兵達も殺しません。」

カムイはヒノカの耳元で小さく言う。

「私が、ガロン王を殺すまで……待っていてください。」

「そんな！ならば、私もお前と共に行こう。私がリヨウマ兄様を説得すれば、この戦も早く決するかもしれぬ！」

その言葉に、カムイは前の時のエリーゼを思い出す。

あの時のエリーゼはマークスを止めると言っただけで来た。

けれど、止める事は叶わず……死んでしまった。

あの時の二の舞いにはしたくない。

カムイは首を振り、

「それはダメだ。姉さんが生きている事を知れば、ガロン王が何をするか解らない。辛いかもしれないが、待っていてください、ヒノカ姉さん。戦争が終わるまで、どうか生き残っていてください。私は、大切な姉妹きょうだいを失いたくないんです。」

「しかし、カムイ！私は——」

「もう、聞き分けのない子ね。」

カミラが痺れを切らして、斧を持って歩いて来た。

そしてヒノカの首の近くに刃を向ける。

「なっ!？」

「あらあら……うっかり喉元に刃が。ちよつとでも動くと、喉を裂いちやうかもしれないわ。」

と、微笑みかえるカミラ。

ヒノカは冷や汗が頬を伝い、

「貴様、何を……」

「そうねえ……『私の』妹が決めた事だもの、あなたの助命に異論はないわ。でも、あんまりカムイのことを困らせないで頂戴ね。これ以上

逆らうようなら私……手が滑るかもしれないわよ?」

と、目を細めてヒノカを見据える。

ヒノカはそんなカミラを睨みつける。

「うふふ。相変わらず、怖い顔。そんなことじゃ、サクラ王女と再会した時……きつと怯えられちゃうわ。」

「なに?! サクラは……生きているのか?!」

「さあ、どうでしょうね。全てが終われば、わかるかもしれないけど。その為には、カムイの言う通り、隠れてもらう必要があるの。あなたが死んだらサクラ王女、どう思うかしら?」

カミラは斧をヒノカから話して、再び笑顔に戻る。

ヒノカは瞳を閉じ、開くと、

「わかった。お前たちの言う通りにしよう。」

「そう。分かってくれて、嬉しいわ。従順にしていたら、優しくしてあげる。」

カミラはグイッとヒノカに顔を近付けて、

「よく見たらあなた……私の好みの顔立ちだわ。可愛くて、とっても綺麗。」

「っ?!」

ヒノカはバツとカミラから離れる。

カミラは頬に手を当てて、嬉しそうに言う。

「素敵だわ。照れている顔も、なかなかね。」

その言葉に、ヒノカは顔を真っ赤にして睨みつけていた。

カムイは咳払いをして、

「ゴホン。カミラ姉さん。」

「ごめんなさい。それじゃあ、私たちはもう行くわね。さよなら、白夜の王女様。」

カミラは歩いて行く。

カムイも続こうとした時、

「カムイ。上階にはリヨウマ兄様がいる。もしお前たちが本当に、無駄な殺戮を避けたいのなら……どうか、殺しはしないでほしい。母様につき、リヨウマ兄様までいなくなったら、この国はお終いだ。」

「……ああ、死なせない。約束します。リヨウマ兄さんは殺さない。殺させない。この救いの刀に誓って、必ず護つてみせる。白夜王国も……暗夜王国も……あの国も……」

「ありがとう……カムイ。」

「……最後に一つ。私たちのしたことは、白夜王国の者たちにとって、ヒノカ姉さんたちにとってはやっぱり……決して許せないこと、ですよ。でも、この戦争が終わって、平和な日々が来たら……また、ここで本当の兄弟姉妹^{きょうだい}としてみんなで笑い合いたい。本当の昔、白夜王国で過ごしていた頃にイコナ母上様も、スメラギ父上様も、ミコトお母様、白夜王国の兄弟姉妹^{きょうだい}で共にやった花見を、また私はやりたい。あの光景をもう一度……」

「カムイ……?」

「すみません、ヒノカ姉さん。解らないですよ。そんな事できるか、って怒ってくれてもいいです。けれど、私は少なくともそう思っている。その事だけは忘れないください。でもこれは、本当なんですよ。後、あの時の問いは、私はカムイ。今のカムイであって、本当の父^{カムイ}じゃないんです。けれど、カムイ^私なんです。」

そう言つて、カムイは歩いて行く。

カムイ達は王城内へと進行した。

カムイはアクアと共に、リヨウマを捜していた。

暗夜王ガロンが居ない今がチャンスなのだ。

真実は伝えられなくとも、玉座の意味をいるリヨウマなら理解していくれるかもしれない。

今はそれに駆けるしかないのだ。

こうなつてしまった以上は、何としてでもリヨウマをここから離れさせるか、先に保護しなければならぬ。

「はあ、はあ……リヨウマ兄さんは一体にどこに居るんだ? 早く見付けなければならぬに!」

「……まさか、リヨウマはあそこに?」

「心当たりがあるんですか、アクアさん。」

「ええ。この城には王の間の前に、大広間があるの。その大広間を抜

けないと、玉座のある王の間には辿り着けない。おそらくリヨウマは、そこを護っているはずよ。それ以外に、考えられる場所がないもの。」

「それはまずいな……そこはガロン王たちとの合流場所だ。アツチより先に、そこに向かいましょう。リヨウマ兄さんをなんとかしなくては！」

「無理ね……今からでは確率が低いわ。それに、今からではあっちとの合流の方が早いわ。」

「くそっ！」

カムイは拳を握りしめる。

そこに歩く音が聞こえてくる。

二人は警戒する。

「おお、カムイ様、アクア様。よくぞ、ご無事で。」

「マクベス。」

「こちらの兵は全て片付けましたぞ。暗夜兵の犠牲も少なく済みました。これも全て、ガロン王様のお力のおかげでございますな。」

「王の？」

「ええ。ガロン王様のお力の前には白夜兵など赤子同然。あの方の通った後には、生存者は残らぬという素晴らしい戦績でした。して、そちらの方はいかがでしたかな？」

「……ああ。こちらも似たようなものだ。白夜兵たちが私達に敵うはずがない。途中で、白夜王国の第一王女、ヒノカとも会いましたが、彼女は私が討ちました。これがその証拠です。」

カムイは血の付いた手ぬぐいを見せる。

暗夜軍師マクベスはそれを手に取り、調べる。

彼は目を細め、

「うーん、ヒノカ王女の血ですか？」

「ああ。」

「そうですか。ですが、これでは王女が死んだと言う証にはなりません。なぜ、首を取って来なかったのですか？ もしや、逃がしたのではありませんすまいな？」

「持つてきても良かったのだが……流石に、死体なんかは持ち運ぶのが大変だからな。首だけと言っても、重いし、邪魔だし、面倒だ。」
「ですが——」
「マクベス。」

さらに追及しようとした暗夜軍師マクベスの後ろに暗夜王ガロンが現れる。

「ガロン王様？」

「もうよい。お前はいつまでその話をする心算だ。それは白夜の制圧よりも、重きを置くべき話なのか？」

「ですが、白夜を制圧するにあたり、王女を生かしておくわけには——」

「ふん。あんな小娘一人に、何ができる。例え生きていたとしても、白夜を制圧した後すぐに潰せばよいだけの話。それだけのことで、いつまでわしを待たせる気だ。」

「も、申し訳ありませんでした。では、先を急ぎましょう。」

「ふむ。遅れるな、カムイ。」

暗夜王ガロンはカムイを見下ろす。

そして歩いて行く。

「はい……」

カムイも、アクアと共にそれに続く。

カムイは大広間へとやって来た。

「ここが、大広間か……」

「ええ。この先が王座のある……王の間よ。」

「……！リヨウマ兄さん!!」

カムイは大広間の奥に正座しているリヨウマを見つけた。

リヨウマは瞳を開け、カムイ達を見る。

「よく、ここまでたどり着いたな。」

そして少しだけ立ち、腰にある雷神刀カミヤを抜く。

それが雷と共に剣圧となって近くに灯されていた炎を揺らす。

完全に立ち上がると、刀を構える。

「だが……ここは、通さん！」

カムイを見据える。

そこにマークス達も駆け込んできた。

それを見たリヨウマは眉を寄せ、

「なるほどな……暗夜軍がここにいるということは、我が白夜軍は敗れたということか。」

「ほほう、さすがはリヨウマ王子。察しがいいですね。」

暗夜軍師マクベスも、こちらに近付いてきた。

彼は笑みを浮かべて、

「あなたの仰る通り、白夜兵はほぼ壊滅状態。サクラ王女は既に捕虜として、暗夜王国の手中にあります。タクミ王子は、スサノオ長城から自らの身を投げて行方不明……生きているかさえ、わかりませんな。」

リヨウマは覚悟していたのだろう。

黙ってそれを聞く。

暗夜軍師マクベスは一步前に出て、

「さて……それから、もうひとつ。」

暗夜軍師マクベスは先程カムイから取ったヒノカの血の付いた手拭いをリヨウマの前の床に落とす。

それを見たリヨウマは眉をピクツと動かし、拾い上げる。

「これはヒノカの手拭い……う……まさか、貴様!!」

「いえ。私ではありませんよ。殺したのは、カムイ様です。さっきご自分で、そう仰いましたよね?カムイ様。」

暗夜軍師マクベスはスツと横目でカムイを見る。

リヨウマは眉を寄せて、カムイを見る。

「何!!カムイが、ヒノカを?お前が、ヒノカを殺したのか!!」

カムイは眉を少しだけ動かし、暗夜軍師マクベスを睨む。

「……………」

「なんてことを!!ヒノカは、死んでしまったのだな!!この手拭いに付いている血は、アイツのものなんだな!!答えろ……答えろ、カムイ!!」

ヒノカの血の付いた手拭いを握りしめるリヨウマ。

カムイは視線を外し、

「……ああ。ヒノカ姉さんは、私が殺した。」

「——!!!!」

カムイがそう言うと、リヨウマは刀を握りしめ、

「——貴様あああああつ!!」

刀をカムイに向けて振り下ろす。

カムイはとっさに剣を抜いてそれを防ぐ。

「ぐっ!」

「カムイ!」

マークスが剣を構えてやってこようとしたが、

「手を出すな!!」

「!?」

マークスをリヨウマが睨みつける。

リヨウマのその本気の間を見たマークスは止まる。

カムイはジツとリヨウマを見て、

「リヨウマ兄さん、何を……」

「おのれ、妹の仇!」

「——!!」

カムイは目を見開く。

リヨウマはカムイを睨みつけて、

「貴様に、一騎打ちを申し込む! 貴様は俺が、この手で倒す!!!! 俺か、

貴様か……どちらかがその命を落とすまで、他の何人たりとも、手出

しをすることは許さん!!!!」

「リヨウマ……兄さん……」

カムイはギョツと剣を握りしめる。

マークスは眉を深くし、

「そうは……させん! 妹が殺されるのをみすみす見逃せるか! 暗夜兵

達よ! すぐにカムイの加勢に——」

「いえ、その必要はありませんよ。」

「マクベス!」

「いいですか? カムイ様ほどの実力であれば、手出しは無用でありま

しよう。それとも、マークス様はカムイ様が負けてしまうのではと……そう思いなのですか？」

「いや、そんなことは思っていない。実力なら、負けはしないだろう。」
「ならば良いではありませんか。」

「だが、あいつが戦っているのは、あいつの、本当の兄なのだぞ!! その刃に迷いがでないという保証はない! 父上!! こんなこと、今すぐやめさせて下さい!」

マークスは暗夜王ガロンを見る。

暗夜王ガロンは黙っていた。

「父上!」

「無駄ですよ、マークス様。ガロン王には先程進言をし、許可をいただきました。私としても、成長されたカムイ様のお力をぜひこの目で拝見したい。間違っても、両者共倒れを狙おうなどは、露ほども思っておりませぬゆえ。」

「貴様!」

マークスは暗夜軍師マクベスを睨みつける。

だが、マークス達の前に白夜の兵達がやって来る。

その先頭に居るのはリヨウマの臣下であるサイゾウとカゲロウ。

「お前たちの好きにはさせませんが、暗夜軍。こうして会うのは……フウマ公国以来か、スズカゼ。」

「兄さん……」

「できればその姿、この王城で見ることだけは避けたいと思っていたのだが。」

サイゾウとスズカゼは互いに見合う。

カゲロウは武器を構え、

「お前たちの相手は、リヨウマ様の臣下であるこのカゲロウとサイゾウが努めよう。リヨウマ様の邪魔をすることは、この私たちが許さぬ。ヒノカ様の……そして今まで倒された白夜の兵達の仇、ここで討つ!!」

「面白い……私たちも戦闘準備だ。こいつらを片付けて、カムイを助けるぞー!」

マークスは兵達に命じた。

「ああ、望むところだよ。」

「邪魔者は殺しちゃいませよ。」

「頑張るね。カムイお姉ちゃんの為に！」

「カムイ……リヨウマ……」

それぞれが想いに駆ける。

リヨウマはカムイと向かい合う。

「さあ、来い。身も心も暗夜に染まった貴様がどんな刀を振るうのか……この俺に見せてみる！」

リヨウマは本気だった。

カムイは戦闘音を聞いて、後ろを見る。

自分の後ろではマークス達が白夜兵、リヨウマの臣下と戦っている。

カムイは覚悟を決める。

首を振って、

「リヨウマ兄さん！戦うのをやめてください。私はこんな事を望まない！こんな事をして意味がない！ヒノカ姉さんの事には事情があります！だから話を聞いてください！」

「ほう、そうやって俺を油断させる気か？妹の顔をして、ヒノカを殺したのか？」

「——！！」

「暗夜王国らしい、卑劣なやり方だ。だが、残念だったな。貴様に何を言われても、俺の心は揺るぎはせんぞ！俺はもう、貴様を妹とは思わん！わが刀の露となって消えろ！！カムイっつ！！！！」

カムイは泣きそうになる。

かつて、どんなに突き放しても妹だと言ってくれた兄が自分を否定する。

自分との血の繋がりが無い事を知っていたリヨウマ^兄は、自分を本当の意味で妹として接してくれた。

兄として、自分を支えてくれた。

カムイは恨まれる事は覚悟していた。

けれど、信頼していたリヨウマにここまで殺意を向けられるのはやっぱ辛い。

マークスの時もそうだった。

けれど、あの時は違う苦しさがここにある。

これが、自分の選んだ選択の末の結末運命ならば、今の自分はリヨウマの剣を受け止めるしかないのだ。

カムイはリヨウマの剣を必死に耐えていた。

肩で息をしながら、カムイはリヨウマに語りかける。

「リヨウマ兄さん、話を……話を聞いてください！」

「黙れ！」

「兄さんは言ってくれました！血の繋がらない私を、『俺の妹』だと！」

「——!?!」

「スメラギ父上様も、イコナ母上様も！私にとって、この白夜王国は大切な故郷。」

「……………」

「本来生まれ育つはずだった故郷にはもう、誰もいない。あそこにはもう……世界の破壊しかない。それを壊したのも、平和なこの白夜王国を壊したのも自分です。だからこそ、自分はやらなければならぬんです！」

「……とんだ戯言だ。」

「お願いです、兄さん。お願いだから、玉座を空け渡してください！」

「カムイ!!やはり、お前は戯言を言っている。そこまでして、白夜王国の滅びを望むか！」

「望んでません！私は、玉座にガロン王を座らせないといけないんです！この戦争を終わらせて、平和を取り戻す為に！兄さんなら、この意味が解るはずですよ！」

「何だど？」

リヨウマは眉を寄せる。

カムイの言葉を信じた訳じゃない。

だが、彼女の瞳には力強い嘘のない瞳。

何よりも、カムイは知るはずのない真実を知っていた。

そして、ミコト母上がカムイを連れて来たのは赤子の時。そのカムイが何故、生まれた故郷の事も知っているのか。だとすれば、これは嘘だと言うこと。

けれど、それが嘘だと思えないのは、まだ自分に未練があるからだろうか。

そんな中、足止めをしていたリヨウマの臣下を含めた白夜兵が全滅した。

カムイは瞳を揺らす。

そしてリヨウマは齒を食いしぼり、

「……もはや後戻りはできぬ。お前の言うことが例え真実だとしても、今の俺には関係のない事だ。俺は白夜王国の第一王子としての役割を果たす！」

リヨウマは渾身の一撃を放つ。

カムイは竜の力を力いっぱい込めて、それを受け止める。

ふらつきそうになる足を必死に踏みとどまる。

「……リヨウマ兄さんも、あの時のマークス兄さんと同じ事を言うんですね。やっぱり、兄さん達は似た者同士ですよ。それこそ、あの時の王であったリヨウマ王やマークス王の頃と同じ……あの時のリヨウマ王子とマークス王子の頃と同じ。兄さん、白夜と暗夜は手と手を取り合って、共に歩める。互いを、本当の意味で解り合えば、それは可能なんです。」

「……この期に及んで、まだ戯言をほざくか！」

「いいえ、兄さん。私にとっては、真実です。兄さん達は知らない。知るはずのない、真実。そして、未来なんです。本当は来るはずだった、本当の……」

カムイは今にも泣きそうな瞳で、リヨウマの瞳を見る。

「けど、今の兄さんは知っているはずですよ。白夜の玉座には意味がある事を。」

「……まさか、カムイ……お前は……」

リヨウマはカムイの意図が解った。

だが、確信が持てなかった。

それが、自分達の手ではなく、暗夜王国の手を取った理由か。自分達兄弟姉妹きょうだいに刃を向け、故郷である白夜王国の敵に回った理由なのか。

カムイはこちらに来るマークス達を横目で見た。

白夜兵やリヨウマの臣下であるあの二人を倒したのだ。

こちらに来るのは当然。

となれば、自分とリヨウマとの会話を聞かれてもおかしくはない。

これ以上話せば、暗夜王ガロンを玉座に座らせることはできない。

何より、マークスとは違う。

マークスは最期は『兄』としての心が、カムイに負けた敗因。

だが、リヨウマにはそれはないだろう。

例え、その中に『兄』としての心があったとしても、彼はそれを切り捨てる。

だからこそ、カムイはリヨウマを尊敬していたのだ。

勿論、マークスも尊敬していた。

どちらも、尊敬できる素晴らしく、強い兄。

カムイはリヨウマを見上げる。

「兄さん……すみません！」

カムイは竜の力を上げる。

暴走するかもしれないくらい程の力を。

リヨウマは小さく笑みを浮かべた。

自分の妹は、ここまで強くなっていたのだと……

そして、リヨウマを吹き飛ばす。

「ぐっ！」

リヨウマは膝を着く。

刀を支えに倒れずに立つ。

カムイも何とか踏みとどまり、

「私の……勝ちです……リヨウマ兄さん……」

「ああ……俺の……白夜王国の負けだ……カムイ。俺を殺せば、この戦は決する。さあ、俺をヒノカの元に送れ。」

カムイはフラフラになりながら、リヨウマの前に行く。

まだ、彼らが遠い事を確認して、

「それは、できません。」

「なに？」

「リヨウマ兄さんを、ヒノカ姉さんの元には送れません。姉さんは生きています。」

「どういうことだ、カムイ。」

「確かに私は、ヒノカ姉さんと刃を交えました。けれど、殺してません。この戦が終わるまで、安全な場所に隠れて貰っています。」

「なぜだ。」

「……決まっているでしょ。大切な、姉妹きょうだいだからですよ。けれど、姉さんが生きている事をすれば、ガロン王やマクベスはきつと姉さんを殺すでしょう。だから、こうするしか方法がなかった。信じられないかもしれない。けど、本当です。」

「……………」

「それと、サクラとユキムラ、サクラの臣下二人も捕虜となっているが、ちゃんと生きてる。タクミは身を投げて行方不明だが……きつと生きていると、私は心から願う。だから、兄さんも死なせない。これ以上、誰かが死ぬのなんてダメなんです。」

リヨウマは確信を得る。

カムイは本気なのだ。

何故なら、これだけ闘っても……カムイからは殺気がないのでだから。

きつと、ヒノカも同じ想いを抱いただろう。

だからこそ、妹の為に力を取ったあいつは、カムイの言う言葉を信じ、身を隠した。

もしかしたら、それすらも嘘かもしれない。

けれど、もうそれでも構わないのかもしれないと思う。

生前、父上は言った。

『カムイ』を頼む、と。

自分だけが知る、彼女との血の繋がらないと言う真実。

まさか、本当にカムイがそれに気付いていたとは思わなかった。

いや、すでにあの時に言っていたけれど、自分は否定したのだ。

あれは、そういう意味じゃないと。

そしてカムイは、あの時に決めていたのだろう。

暗夜王ガロンを白夜の玉座に座らせることを。

思い返せば、カムイは何度も語っていた。

自分は認められなかったのだ。

カムイはずっと、自分を……いや、自分達兄弟姉妹きょうだいを信じていたのだ。

結局、自分達はそれに気付くことはできなかった。

こういう結果を生んでしまった。

「……カムイ。」

「話はここまでだ。暗夜王が来る。兄さん、大人しくしててくださいね。私は、ヒノカ姉さんと約束したんだ。兄さんを助けると。そして私は大切なこの白夜王国を救います。兄さんが、もう私の事を妹だと思っていなくても、私はあの日からリヨウマ兄さんの事をもう一人の兄だと思っています。それだけは、信じてください。」

カムイはしっかりと立ち、剣をしまつて暗夜王ガロンの元へと歩いて行く。

リヨウマは見た。

カムイの持つ『夜刀神』が少し輝きを放ったことを。

カムイは暗夜王ガロンの前に立ち、

「白夜の第一王子に勝ちました。王子はもう、虫の生きです。」

「よくやった。」

「……ありがとうございます。では、早速玉座に向かいます。お父様が玉座に座り、制圧すればこの国は暗夜王国のものです。」

「そうだな。だが、その前に——」

暗夜王ガロンは目を細めて、奥に居るリヨウマを見る。

そしてカムイを見据えて、

「——リヨウマ王子を殺せ。」

「——!!」

「聞こえなかったのか。リヨウマ王子を殺せ。他の者の手を借りることとは許さぬ。今ここで、お前が止めを刺せ。」

「……ですが、今でなくてもいいのでは？お父様がこの白夜王国を制してからでもいいではありませんか。」

「何だど？そ奴を生かしておいて、なんの得がある？反乱の芽は、早いうちに摘んでおくに限る。そうだろうか？」

「っ!!」

カムイはなるべく表情を変えずに、耐える。

だが、空気を察した暗夜軍師マクベスは小さく笑みを浮かべ、

「おや？どうされたのですか。まさか……ガロン王様の命が聞けないと？ヒノカ王女にでも誑かされて、暗夜王国を裏切ったのですかな？」

「違う。私は、そんなこと——」

「では、今ここでそれを証明してくださいませ。あなた様ほどの実力であれば、一瞬で仕留められるでしょう？」

暗夜軍師マクベスは笑みを深くした。

カムイは拳を握りしめる。

暗夜王ガロンはカムイをさらに見据え、

「やれ。さもなくば裏切り者として、お前の部隊も処刑する。」

カムイは眉を寄せ、

『……ここでやるか。今なら、私一人の裏切りとして判断される。他の者たちだけは助ける事ができる。』

カムイは剣の柄に手をかけ、握りしめる。

それを後ろで見えていたリヨウマは何かを察した。

暗夜軍師マクベスは腕を組み、

「ああ、じれったいですなあ！やはりカムイ様は裏切り——」

カムイは鞘から刀を抜こうとした時、

「——待て。」

カムイは止まり、声のしたリヨウマの方を見る。

リヨウマはまっすぐこちらを見て、

「いいか、貴様らの手など不要だ。己の事は……己で決着をつける。」

「はあ？決着？何を言っているのです？」

暗夜軍師マクベスは眉を寄せる。

カムイは不安に駆られる。

そう、このリヨウマの目は、この先の言葉は駄目だと、止めろ、と本能が言っている。

「リヨウマ……兄さん……？」

リヨウマはカムイを見て微笑む。

それは忘れもしない、兄の顔。

「ありがとう、カムイ。今のお前を見て、全てがわかった。だが、もういい。もういいんだ。カムイ……俺の大切な妹よ。俺は……」

「兄さん！」

「お前を——信じよう。」

リヨウマは真剣な表情になり、支えにしていた雷神刀カを抜く。

そして一振りし、大声で叫ぶ。

「敵の手にかかれば、侍の名折れ!!」

それを己の腹に突き刺した。

「ぐっ！うう!!」

「——!!」

カムイは手にしていた柄から離す。

リヨウマの元に駆けて行き、その手をリヨウマに伸ばそうとして、握りしめる。

リヨウマはそのカムイの戸惑いを感じ取る。

雷神刀から流れる雷を身に纏いまながら、

「我が最後の剣……見届けろお!!ぐう、おお!!」

自分に突き刺す雷神刀の刃を握り、捻る。

彼は身を前に丸め、

「……後は……頼む……」

一度、カムイを見てそう言って倒れ込んだ。

そう、カムイにしか聞こえない声で……

カムイの足元に、彼の名がした血が流れる。

「リヨウマ……兄さん……」

カムイの横にアクアが駆けよる。
アクアはジツと彼を見て、

「リヨウマ……」

握っていた凧刀を握りしめる。

泣き出しそうになる自分を必死に抑え込む。

カムイもまた、涙を堪える。

今ここで泣けば、兄が己の命を使つてまで自分達を助けた意味がなくなる。

暗夜軍師マクベスは暗夜王ガロンを見て、

「ガロン王様、良いのですか？またしてもカムイ様は、自ら手を下されませんでしたか……」

「ああ。第一王子リヨウマを失い、白夜王国はもはや終わり。この戦は、我が暗夜王国の勝利。我こそ世界の王となるのだ！ク、ククククク……ふあっはっはっはっはっはっはっ！！！！」

暗夜王ガロンは両手を広げて笑う。

その笑いは部屋全体に響き渡る。

カムイはそれを背に聞き、怒りを抑え込む。

そのまま歩き出す。

アクアはカムイに付いて行く。

「カムイ……どこに行くの？」

「……………」

カムイは無言で歩いて行く。

そして誰もいない暗い廊下へと出る。

「泣くな……泣いてはダメだ。兄さんが……リヨウマ兄さんが命をかけて護ってくれたんだ……だから泣くな。今、台無しにするわけにはいかないんだ。兄さんに託された約束を……守らないと……最期まで演じる……今のカムイを……裏切り者を貫き通せ……」

そう言うカムイの目からは涙が流れ出る。

カムイはそれを強く、強く擦る。

「ごめんなさい、ヒノカ姉さん……」

カムイは膝を着く。

涙が溢れて止まらない。

自分を受け入れてくれたリヨウマはもういない。

マークスの時もそうだった。

けれど、マークスよりも長い間共に過ごした家族。

長い、とても長い間、兄としていてくれたあのリヨウマはいない。

血の繋がらない自分を妹として守り、導いたリヨウマはいない。

それこそ、本当の兄シクレよりも長くいただろう。

苦しい。

哀しい。

けれど、自分は止まらない。

今更、自分が泣いて、苦しいだけで止まらない。

透魔王国も、白夜王国も、暗夜王国も救うと決めた。

いつか見た、あの頃の三国の関係を。

形は違っても、平和になれることを知っている。

その平和を取り戻す為にも……

「泣いては……ダメなんだ……うう……うう、リヨウマ兄さん……」

「カムイ……」

「アクアさん……私は……私は守れなかった……リヨウマ兄さんを死なせてしまった……ヒノカ姉さんとも約束をしたのに……大切な兄を死なせてしまった……」

カムイは顔を覆って泣いていた。

アクアは膝を着き、カムイを抱きしめる。

「そうね……確かに、約束は果たせなかった。でも、あなたはリヨウマと、また新しい約束をしたでしょ。」

「はい……『後は頼む』と。」

「そう。リヨウマの最後の言葉……あの時、あなただけに聞こえ、した約束。なら、あなたはその約束を今度は果たしましょう。白夜王国を、この国の未来を託されたって事でしょ。敵国の王女に言う言葉ではないわ。リヨウマはあなたを妹として認め、信頼したからこそその言葉。それにリヨウマは、あなたを見て笑っていた。カムイ、あなたはあの笑顔に誇れる自分になりなさい。リヨウマの死を無駄にしない

ように。だから、その約束は必ず果たしましょう。私も、あなたと共にそれを手伝う。あなたが約束を果たせるように。」

「はい……はい、アクアさん……きつと……いえ、絶対に……」

カムイはアクアを抱きしめる。

アクアもカムイを抱きしめ、

「もう少し……あと少しだから……すぐに王の間の扉は開かれる。玉座にガロン王が座れば、みんなに真実を告げられる。だからそれまで、もう少しだけ……私もここで……泣いても、いいかしら。」

そう言つて、二人は静かに少しの間泣いていた。

カムイとアクアは気持ちを落ち着かせ、部隊へと戻る。

そしてすぐに、白夜王国の玉座の間の扉の前へとやって来る。

暗夜王ガロンは扉を見て、

「この先が、王の間か。」

「はい、ガロン王様。もう道を阻む者はおりません。白夜王国はもはや、我が暗夜王国のものでございます。」

暗夜軍師マクベスは頭を下げて言う。

暗夜王ガロンは両手を広げ、

「ククク。ついに、この時が来た。わしはこの時を待っていたのだ。何十年もの間、ずっとな。」

「……でしたら、早く玉座に行かれてはどうですか。あなたの悲願の為に。」

カムイはジッと暗夜王ガロンの背を見つめた。

暗夜王ガロンはカムイを横目で見ると、

カムイは笑顔を向け、

「早く、白夜王国に君臨する姿を拝見したいのです。」

「……いや、待て。お前たちはまだは入るな。」

「……何故ですか。」

「良いか、わしはこれより、ハイドラ神に報告をする。わしがいいと言うまで誰一人、王の間には足を踏み入れるでない。」

「………わかりました。」

「ふははははは!!これで我こそが、白夜、暗夜の二大王国……いや、

世界に君臨する王となるのだ！」

暗夜王ガロンは、笑いながら扉を開けて入って行く。

その扉が閉められると、カムイは瞼を閉じる。

アクアがカムイに寄り添い、

「カムイ……」

「待とう。ガロン王の言うハイドラ神への報告が終われば、いずれ王の間に入ることになります。そうすれば、玉座に座るガロン王の姿を見ることが出来るはずだ。今まで耐えてきた時間に比べれば、少しの間待つぐらい、なんてことない。」

「そうね。」

カムイは瞼を開ける。

ジツと扉を見つめ、

「なら、ガロン王の許しが出るまで、しばらくここで待とう。もう戦いは終わった。皆に、武装解除を——」

「カムイ、後ろ！」

カムイが別行動中の部隊の仲間へ伝達をしようと思った時だった。アクアが何を感じ、武器を握りしめて振り返る。

カムイもすぐに反応し、振り返る。

だが、その前に相手の放つ魔術敵の方が早い。

カムイは腕でそれを庇って、後退する。

そして、その相手を睨みつける。

「ああ、外れてしまいましたか。」

「何のつもりなの、マクベス?! カムイに、攻撃するなんて！」

アクアも睨むように暗夜軍師マクベスを見る。

彼らの前には、暗夜軍師マクベスとガンズが部隊を引き連れてやって来ていた。

暗夜軍師マクベスは目を細めて、

「その言葉、そっくりお返ししましょう。どういうつもりなのか。カムイ様。」

「……どう言う意味だ。」

「あなたはやはり、ヒノカ王女を生かしていたんですね。」

「……………」

「いいですか？あなたがリヨウマ王子と戦っておられる間……兵に王城内を捜索させたのですよ。そうしたら……微かな兵を引き連れて、城の裏からこっそり逃げて行くヒノカ王女の姿を確認したそうです。」

「……………それで。」

「脅かられないのですね。それとも、づ太いのか。ですが、これでやはり、わざと逃がしたということですか。これは許し難い裏切り行為ですよ。王命に背くなど、死罪に値します。あなたには、ここで死んでもらいますよ。」

そう言つて、暗夜軍師マクベスは魔術を展開した。

魔法陣が展開されていく。

「そうはしません。」

マークスが、カムイの前に出る。

「マークス兄さん？」

「おお、そこをどいてください、マークス王子。でない、あなたも裏切り者として死罪となつてしまいますよ？」

「ああ、構わん。カムイを殺したいなら、私は倒してからにしろ。ただ大人しく倒されてやるつもりは毛頭ないがな。」

「ど、どういうことですか……………」

暗夜軍師マクベスは眉を寄せる。

マークスは剣を抜いて、暗夜軍師マクベスに剣先を向ける。

「闘うと言っているのだ。お前と。私は、お前たち直属軍のやり方には、もう我慢ならん。例え国の方針に背こうとも、私はお前に賛同する気はない。もしその考えを改めむと言うのなら、今度こそ、私の剣でお前を討つ！誇り高き、暗夜の王子としてな！」

「僕も闘うよ。マクベスの卑劣なやり方は、前から気に食わなかったんだ。そいつらを倒すつて言うんなら……僕も喜んで加勢するよ。」

レオンも、魔導書を取り出してマークスの横に立つ。

暗夜軍師マクベスは一歩さがり、

「なっ!? ななな、殺すと言うのですか？何の罪もない自国の軍を？王

の軍師である私を？王族がやっていいことだとは思えませんね!?」
「ふん。何とでも言え。幸いここには、父上の目は届かない。お前たちは白夜の残党に殺されたことにもさせてもらおう。」

「な、なんですって!? 何て卑怯な!」

と、暗夜軍師マクベスは指を指す。

エリーゼとカミラが同じようにマークスとレオンの横に立ち、

「もおーっ！卑怯なのはどっちよ！マクベスとガンズはいつもみんなに酷いことするし、カムイお姉ちゃんの嫌なこと言うから嫌い！いつかボツコボコにしてやるーっつて、ずーっと思つてたんだから!!」

「そうねえ……私は別にあなた達が何をしようと、まったく興味ないのだけれど……カムイを苦しめる者は、殺す。それだけよ。だから……うふふ。覚悟してちょうだいね?」

「うっ！エリーゼ様、カミラ様まで……」

「なんだなんだ？俺たちに刃向かおうってか？面白い……王子王女だか知らねえが、俺たちもお前たちの甘っちょろいやり方は気に食わなかったんだよ!!!」

ガンズが武器を構える。

そこに、待機していた仲間達も駆けつけた。

互いの雰囲気を感じた仲間たちは武器に手をかける。

アクアも彼らの横に立ち、

「そう……なら、戦つて決着をつけるしかないわね。やると言うのなら、私も容赦はしない。暗夜王国側についたこと、後悔はしていないけれど……育つた国を必要以上に蹂躪されて、黙つていられるほど寛容じゃないわ!」

「そうですね。私も、もう一つの故郷をこんななされて、いい気分ではありません。ですので、皆さん。私に力を貸してください。私は殺戮を好まない。けれど、彼らは殺したいと思うほど、恨みはある!」

「ああ、カムイ。皆、お前と同じ気持ちだ。さあ、この軍のリーダーとして、私達に指示を出せ！お前にはもう、迷いなど無いはずだ!」

「ああ！全員、戦闘態勢！無抵抗な民を蹂躪し、卑劣な手ばかり使う者たちを討つ!!今ここで、暗夜王直軍を殲滅する!!!」

カムイは仲間たちと戦闘を始める。

ガンズと暗夜軍師マクベスの前へと出る。

暗夜軍師マクベスは笑みを浮かべ、

「そうそう、カムイ様。驚きましたよ。」

「何がだ。」

「まさか、あの獣がリリースだったとは。いやはや、面白いものを飼っておりましたな。」

「……なるほど、リリースの死はまたお前たち関連だったのか。」

「は？」

「いや、あの異常なノスフェラトウ。何か裏があると思っていたが、お前の仕業だったのだな。だよすれば、あのマラカスの件も……お前の仕業か。」

「ええ、そうですとも。あなたがマラカスに居る事を、白夜王国にリークしたのは私ですとも。そうそう、それだけではありませんよ。リヨウマ王子を殺すよう進言したのは、私ですよ。いかがでしたか？私が与える、嘆きの味は。」

「……ああ、怒りが頂点に来ている。お前たちは、私が殺す。」

カムイは目を細める。

剣を強く握りしめる。

ガンズは笑い出す。

「がははは！いいねえ、これが幽閉されていた姫とはな！殺したくなっただけで来たぜ！」

「そうですねえ、ガロン王様には殺さず、苦しめろと言われておりましたが……ここで死んでもらいますよう。この私の策に、潔く死になさい！！」

カムイは暗夜軍師マクベスの魔術を交わし、続けてくるガンズの斧を受け止める。

カムイはそれを受け流しながら、ガンズの背後に回る。

だが、そこに暗夜軍師マクベスの魔術が繰り出される。

カムイはそれを避け、距離を置く。

「どうです、私の魔術は！」

「……確かに、お前の魔術は凄いのだろうな。だが……」

カムイの足元に魔法陣が浮かび上がる。

剣を構える。

「私に魔導を教えてくれた者の方が凄い！」

その夜刀神^カに雷が纏い出す。

「リヨウマ兄さん……リヨウマ王子は雷神刀の持ち主。だったら、同じような立ち振る舞いでお前たちを打倒してやろう！」

「な?!なに?!」「なんですって?!」

カムイは雷撃を纏った剣で二人を相手にする。

彼らの懐に踏み込み、雷撃を討つ放つ。

がら空きになったガンズの背中を斬り付ける。

そのまま、息の根を止める。

「ぐおお!!この俺が……負けるなんてな……」

その後ろで怯んだ暗夜軍師マクベスの腹を斬り付ける。

「ぐはっ!!ば、バカな……うそだ!私が負けるなど!ガロン王様、お助けを……」

「無駄だ、助けは来ない。丁度、お前以外の部隊は殲滅できたようだ。」

暗夜軍師マクベスは辺りを見渡す。

他の兵達は既に皆倒れ伏している。

そしてカムイの仲間達が自分の周りに集まってくる。

暗夜軍師マクベスは斬られた腹を抑え、

「ひい!し、し、死にたくない!」

「終わりだ、マクベス。今、死なせてやろう。」

「助けて、ください……カムイ様!!私たち直属軍は、ガロン王の指示通りに動いていただけなのですよ?私たちのやり方が気に入らないのなら、ガロン王様を倒せばいいじゃないですか!カムイ様、あなたはガロン王様を暗殺しようとしているのです!!!!そうです、私は悪くない……何も悪くないのです!なのに私が殺されなくて、おかしいではありませんか!!」

と、命乞いをしてくる。

レオンは呆れて、

「お前は、どこまで……」

「レオン様！聡明なあなた様なら、解つてくださいますよね？どうかお助けを……どうかご慈悲を……」

暗夜軍師マクベスはレオンの方に縋るように動く。

だが、レオンは彼を冷たく見下ろし、

「……目障りだね。お前のような者に、かけてやる慈悲などない。卑怯者は、我が暗夜王国の恥さらしだ。せめて最期くらい、潔く死ね。」

「レオン様？まさか……」

「卑劣な愚か者め……塵になるがいい!!」

「ぎゃああああ!!!!」

レオンは魔術書を開き、レオンを魔術を放つ。

暗夜軍師マクベスは木の根に覆い尽くされていった。

レオンは魔術書を閉じ、

「ふう。」

「すまない、レオン。手を煩わせた。」

カムイは剣をしまう。

レオンは手を横に振るい、

「どうってことないね、これぐらい。厄介払いができて清々するよ。」

「さつすがー！レオンお兄ちゃん、ナイス！」

「うふふ。これでカムイを苦しめる者は、居なくなったわね。」

エリーゼとカミラは嬉しそうに喜び合う。

マークスも剣をしまい、

「ああ。……だが、カムイ。」

「何です？」

「さっきのマクベスが言っていたことは本当か。お前は父上を暗殺するつもりなのか。」

マークスは眉を寄せてカムイを見る。

カミラが頬をに手を当てて、

「もしかして、お兄様はカムイを疑っているのかしら？マクベスのでまかせかもしれないよ。」

「そうかもしれない。だが……」

ジッとマークスは見続ける。

アクアがカムイに近付き、

「ねえ……カムイ。」

「ああ……」

カムイは瞳を閉じ、開く。

マークス達をじつと見て、

「マークス兄さん、確かに私は暗夜王ガロンを殺そうと思っている。」

「カムイ!!」

「だが、それは偽物の暗夜王ガロンだ。」

「何だと……?」

「本物の暗夜王ガロンはとうの昔に死んでいる。今、暗夜王国に君臨しているあの王は、暗夜王ガロンの姿をした偽物だ。あの偽物を倒さない限り、白夜王国と暗夜王国の戦争は終わらない。マークス兄さん、……あなたなら、薄々気付いているはずだ。あれが、あなたの知るかつての暗夜王ガロンではないことを。」

マークスは目を見張る。

カミラは口元に手を当てて、

「そんな、カムイ……あのお父様が偽物? そんなことが……そうじゃなくとも、私たちにお父様を殺せ、と言うの。」

「そんな嘘を信じろって言うのかい、カムイ姉さん。」

レオンも困惑する。

エリーゼは杖を握りしめ、

「酷いよ、お姉ちゃん。いくら、お父様がひどい事をたくさんしちゃったとしても、偽物だなんて。」

「カムイ、お前はまさか……今更になって白夜王国に寝返ったなどと言うのではないだろうな!」

マークスは剣の柄に手をかける。

アクアがカムイを守るように前に出るが、カムイは首を振る。

カムイはアクアの横に立ち、

「私のしたことは白夜王国にとっては裏切り行為だと思う。けれど、私は白夜王国を裏切ってはいない。そして、暗夜王国側に付いた理由

は、二つ。一つは暗夜王ガロンを討つため。」

「……もう一つは、何だ。我々を討つのか？」

「いや、もう一つは……暗夜王国の兄弟姉妹を救いたい。そういう想いだ。」

「なんだと？」

「私は、白夜王国の兄弟姉妹のように、私の事を兄弟姉妹だと言ってくれたあなた達の想いに報いる為。私が果たせなかった約束を……今度こそ、果たすために暗夜王国についた。そしてそれは今も、そうだ。白夜王国側につく事はしない。それをすれば、犠牲にしまった多くの人たちを裏切る事になる。けれど、私はリヨウマ兄さんとの約束も果たしたい。私を庇ったりリスの想いに応えなくてはいけない。全ては、私が成すべき事の為に進み続けた結果だ。だから、ここまで闘ってきた。今更、私は誰が相手でも逃げる訳にはいかない。」

カムイは彼らに背を向け、王の間の扉に手をかける。

「全てを信じる、とは言わない。元より、信じて貰えるとは思ってはいない。闘う覚悟だつてある。ここに居る全ての者たちを敵に回す覚悟だつてある。けれど……私は兄さん達を信じている。」

そしてカムイは思いつき扉を開け開く。

「さあ、見るー！これが、今の暗夜王ガロンの真の姿だ!!」

マークス達は見た。

開かれた扉の先に居るのは玉座に座った暗夜王ガロン。

だが、その彼の姿はもはや人ではなかった。

人の形が崩れ、ドロドロに変わっていく。

マークスは眉を寄せ、

「父上……!!」

「これは……」

レオンも息をのむ。

暗夜王ガロンは眩く。

「よくも……私を憚ったな。」

暗夜王ガロンの溶けるからだから、一つの瞳が光る。

カムイとアクアは身を固くする。

あれは、直感で解る。

見えざる国の、暴竜にして透魔王国の国王、暗夜王ガロンが崇めていた神『ハイドラ』だと。

そしてその瞳と暗夜王ガロンのギラリと光る瞳が、カムイを、アクアを、マークス達を捕らえる。

「見たな……私の姿を……!!」

エリーゼがカミラに抱き付き、

「いやあああああつ!!お父様が!!」

「そんなーこれが……本当に!!」

カミラはエリーゼを抱きしめる。

アクアは恐怖で震える身を引き締め、

「ええー!あの玉座に座る者は、真実を明かさずにはいられない。あの姿こそ、ガロン王の本当の姿なのよ!」

「おのれえええつ、お前たち!このわしを、罠にはめおったな!!かくなる上はこの姿を見たお前たち全員を葬り去る以外にない!!」

暗夜王ガロンは持っていた斧を振る回す。

その手が伸び、カミラ、エリーゼ、レオンを襲う。

受け身を取る彼らだが、

「ぐっ!そんな、父上……どうして……」

カムイとアクアが彼らの前に立ち、武器をかめる。

「真実を知れたのなら、もういい!下がっている、レオン!でないと、死ぬぞ!」

カムイは暗夜王ガロンに斬り付ける。

だが、それは彼の体には傷一つつかない。

カムイは空中で立て直し、着地する。

「ふん。」

「……夜刀神が効かないだど?」

「そのような玩具……このわしには、通用せんわ!!」

暗夜王ガロンの斧がカムイに向かって振り下ろされる。

カムイは刀でそれを受け止める。

「ぐっ!!」

「カムイ!!」

アクアが凧刀を振るって、カムイを助けようとするが効かない。

エリーゼが座り込んで泣き出した。

「やだよお……ひつく、ぐすーこんなこと、もうやめて、お父様!」

「エリーゼ、泣いていてはダメよ。闘う意志のないのなら、ここから逃げなさい。」

アクアが、凧刀を振るいながら言う。

カミラは口元に手を当て、

「闘う意志……できないわ。例え、偽物のお父様だったとしても……こんなの、簡単に割り切れるはずがないもの。」

「そうだ……あんな姿になっても、父上は父上だ。倒すことなんて、ましてやここで逃げる事も!」

レオンは拳を握りしめる。

カムイは必死に耐え、受け止め続けた。

「これは、もうお前たちの本当の父ではない!あの優しかったガロン王はもう居ない!目の前に居るこいつは、敵なんだ!心を奪われ、身を滅ぼされ、死ぬ事さえできずに囚われ続ける化け物となってしまった傀儡だ!!」

そんなカムイの姿を見た暗夜王ガロンは笑い出す。

「ふははは!!所詮は拾い子の貴様の声など、わしの子には届かぬ!貴様の想いと共に死ぬが良い、カムイ!!」

暗夜王ガロンは押さえつけていた斧を振り上げる。

カムイは再び受け止めようとした時、マークスが剣を抜いてその斧を弾く。

「マークス兄さん!」

「なんだと?マークス。わしに刃向かう気か。」

「黙れ。気安く私の名を呼ぶな……異形の者よ。」

マークスは剣を構える。

暗夜王ガロンはマークスを見下ろし、

「なに?」

「今のお前の振る舞いを見て、決心がついた。お前は、私の尊敬した父

上ではないと。昔の父上の事は、私が一番よく知っている。かつての父上は、強かった。だが、実の子に手を上げるような真似は決してなかった。敵国を支配し、略奪の限りを尽くすような真似はしなかった！」

「お前に、わしの何が解ると言うのだ。」

「貴様こそ、父上のなにかわかる！私はずっと、見ないフリをしていた。どのような命にも、背きはしなかった。いつかは元に戻ってくれるはずだと……そう信じて闘ってきた。だが、あの頃の父上は、もう……」

マークスは剣を強く握る。

カムイは剣を構えなおし、

「ああ。そうだ。もう居ないんだ。もう一度言う。あのガロン王は……優しかった暗夜王ガロンはもうここには存在しない！闘う意志のない者は去れ！でなければ、死ぬぞ!!本物のガロン王はお前たちの死を望んではないはずだ！」

「カムイ……私はお前と共に戦う。誇り高く、強き王であったあの頃の父上と、同じように。私は——貴様を倒し、真の平和を取り戻す!!」
そう、マークスが叫ぶと、ジークフリート^剣が光り出す。

「!?ジークフリートが……光って?」

「この光は!」

カムイは夜刀神を見る。

夜刀神も、それに反応する。

レオンはマークスの剣を見て、

「同じだ。僕のブリュンヒルデの力が、カムイ姉さんの夜刀神に繋がった時の光と!」

そして、マークスの持つジークフリートの光はカムイの持つ夜刀神の方へと飛んでいく。

それが剣と交じる。

「ああ、兄さんのジークフリートの力を感じる。そうか……ここでも、こういった事が起きたか。」

「カムイ?」

「何でもない。覚悟しろ!!」

カムイは剣を構える。

暗夜王ガロンは目を細めて、

「愚かな……少しばかり力を得た玩具などで、このわしに敵いはせん！お前たちは皆、ここで死ぬ運命だ!!」

「いや、ここで死ぬのはお前だ！」

カムイは剣を振るう。

カムイの剣が、暗夜王ガロンの体に傷を作る。

「……なに?! こんな、馬鹿ナ！グ、グ……コノヨウナ、玩具ニ、王デア
ル、ワシガ!!」

『もはや、人の言葉すらもまともになんて言えなくなってきたか。』

カムイは剣を振るい続ける。

アクアがそれに続き、他の心を共にする仲間が闘う。

マークスは後ろで未だに悩んでいた弟妹きょうだいを見る。

「さあ、行くぞ。カミラ、レオン、エリーゼ。私たちが父上を救うのだ。カムイが必死になつて闘っているのだ。私たちも、こんなところで立ち止まる訳にはゆかぬ。暗夜の王族なら、国のために、世界の為に、そして父上の為に、立ち上がってみせろ!!」

そう言つて、マークスも戦闘に加わる。

レオンはブリュンヒルデを取り出し、

「マークス兄さん……そうだね。僕も闘うよ。暗夜の王族として、最後まで、強い心で。」

「そうね。辛い事だけれど……この闘いに勝つことで、お父様は救われる……そう思つて、闘うしかないわ。」

「ごめんなさい、お父様。でも、あたし……あたし……あたしにも、守りたいものがあるの！みんなを死なせたくない！だから……さようなら！」

カミラとエリーゼも武器を持って構える。

カムイは闘い続ける。

「諦めない。諦められないさ。例え、あの時とは違う運命だったとしても、私は闘い続ける！決して屈しはしない!! 白夜と暗夜の平和の為

に、その元凶を打ち壊すために、この世界を、あなたを救うために！」「ヤハリ、才前ハ……殺シテおくベキダツタ……アノ時、ハイドラ神ノ御告ゲニ、背イテデモ……」

「……そうできなかつたのは、きつとあなたの中にまだ本物のガロン王の欠片が残っているからなのではないか。どんなに自我を失つても、どんなにその身を穢されても、あなたの中に残る本当のあなたが。けれど、それでもあなたは自分の選択をする行為すらやめてしまった。あつたとしても、無くなつたとしても……もう、あなたには自らの意志で動く事はできない。その心も、身も、全てを食い潰された傀儡となつてしまつたのだから。だからこそ、私はあなたとは違う運命を選び取る。自分の選択を、仲間との絆を信じる。あの時と同じ思いで。きつと、再び平和を取り戻してみせる！お前を倒して!!」

カムイは仲間と共に戦う。

暗夜王ガロンの身は既にボロボロになりつつあつた。

「ワシ、ハ……暗夜ト白夜ニ君臨、スル……唯一、ニシテ、偉大ナル、王……ガロン……ダ……」

レオンとカミラ、アクアが援護して、エリーゼのサポートの元、カムイとマークスは暗夜王ガロンの懐へと踏み込む。

振り下ろされる斧をマークスが受け止め、カムイが竜の力を込めて暗夜王ガロンを斬り付ける。

暗夜王ガロンは膝を着き、崩れ落ちる。

「コンナ……馬鹿ナ……馬鹿ナアアアア!!!!」

暗夜王ガロンは青い炎に包まれて消えた。

消えゆく暗夜王ガロンを見ながら、マークスは右手を胸に手を当てる。

「父上……」

カムイはそれを横目で見た後、消えゆく暗夜王ガロンを見る。

『……約束は果たした。これで平和がやって来る。戦争は終わる。』

カムイは天井を見上げる。

瞳を揺らし、

「……もう、本当のガロン王の言葉は聞けないのか。もう一度だけ、彼

の言葉を聞いたかった。」

「カムイ?」

アクアが首を傾げながらカムイを見る。

カムイはマークス達に振り返り、

「この戦争はこれで終わりだ。残った白夜兵たちを助命し、捕虜たちを開放する——」

カムイは瞳を大きく揺らす。

マークス達の間を抜けて、自分に放たれる黒いオーラを纏った矢。

その矢はカムイの肩に深く突き刺さる。

カムイは膝を着き、矢を放った相手をカムイは泣きそうな顔で見
る。

そこには、完全に暴竜ハイドラに操られたタクミの姿。

その瞳は赤く光り、黒いオーラに包まれている。

彼の持つ神器は黒みがかっていた。

「はあ……はあ……僕は……殺る!!僕が、みんなを——」

タクミは再び矢をつがえて、放つ。

その瞳にはもう、怒りと絶望と悲しみ、恨みしかない。

マークスがカムイに向けられた矢を叩き折り、エリーゼがすぐに治
療をした。

「タクミ……そんな……お前は……!!」

「殺してやる……殺してやる!!カムイっつ!!!!」

再び矢をつがえるタクミ。

今度放たれた矢は複数だった。

カムイ達はそれを避ける。

「お前なんか、殺してやる……殺してやる、殺してやる、殺してやる!!」

「タクミ、もうやめるんだ!戦争はもう終わった!もう、無益な戦いは
必要ない!だからこれ以上、心をあいつに乗っ取られるな!!タクミ!!
!!」

カムイは叫ぶ。

アクアが眉を寄せて、

「カムイ、あなた……」

「殺す……お前だけは僕が殺す……そう決めていたんだ。」

だが、タクミは聞く耳を持たない。

いや、タクミ自身がもう居ない。

あれはもう、暗夜王ガロンと同じ……加護死を受けた者人だ。

カムイは拳を強く握りしめる。

「タクミ……なんでだ、タクミ……」

「カムイ、気を付けて。今のタクミは、もう私たちの敵よ。ガロン王と同じになってしまった。あなたも気付いているでしょう。あの姿になつてしまつてはもう手遅れよ。きつと、スサノオ長城で身を投げた時から、もうタクミは……だから彼を救いましょう。」

「……今のタクミを殺すしか、方法はない。」

「ええ。あの子の恨みは、もう戻れない所まで来ているわ。これ以上、犠牲が増える前に止めるしかない。」

カムイはジツとタクミを見つめる。

タクミはカムイを睨みつけ、

「お前のせいだ……お前のせいで、白夜王国は……僕たちの国は……滅茶苦茶になつてしまった！お前さえ居なくなれば、楽になれる……こんな思いもしなくて済むもの!!お前さえ……居なくなれば!!」

「ああ……そうだ……そうだな……」

カムイは前へと進み出て行く。

レオンとマークスが眉を寄せ、

「カムイ姉さん!!」「カムイ!!」

だが、カムイは目で彼らを止める。

カムイは一番前に立つと、止まる。

タクミを見つめ、
「すまない、タクミ。優しいお前が、そんなに悲しむまで辛い思いをさせた。そうだ、お前の大切なモノを……私が打ち壊した。大切な母も、兄も、臣下も、国も、民も……」

カムイは両手を広げる。

「タクミ……私が再びお前の前に戻った時、姉らしい事を何もできなかった。お前が、こうなるかもしれないと解っていたのかもしれない

い。けれど……何もしてやれなかった。あのスサノオ長城で、お前をちゃんと救えていれば……いや、お前ともつと話をしておけば、こうならなかったかもしれない。私は甘えすぎた。白夜の兄弟姉妹きょうだいに……信じてくれると。お前もきつと、信じてくれていたからこそ……こんなになつてしまつても辛いんだろ？お前を……救つてやれなくてすまなかつたな、タクミ。けど、今はまだ死ねないんだ。私にはやる事がある。けれど、お前のその怒りを、悲しみを、恨みを、受け止めてやることはできる。私が全て引き受けよう。」

「殺してやる……殺してやる!!!!カムイっ!!!!!!」

タクミはカムイに矢を定める。

カムイは剣先をタクミに向け、

「そうだ、タクミ。狙うなら、私だけを狙え。お前の恨みの相手は私だ。来い、タクミ!!」

「消えてしまええええええ!!!!!!」

その矢は放たれた。

カムイは瞳を揺らす。

剣でそれを受け止める。

だが、ヒビが入る。

夜刀神は砕け、カムイに矢が直撃する。

『……ああ、そうか……私は、相変わらずダメだな……』

カムイはそのまま仰向けになって倒れ込む。

アキラが目を見開き、

「カムイ!!」

「いやあああ!お姉ちゃん!!」

エリーゼが駆け寄り、さつきよりも強く治癒術をかける。

勿論、他に治癒術を使える者達も必死にかける。

マークスは眉を寄せ、

「馬鹿な……なんだ、あの力は!!」

「……私は……死なないさ……大丈夫……まだ、やれる……タクミを

……救わないと……リョウマ兄さんとの約束を……大切な弟を……見捨てられない……」

だが、カムイの呼吸が荒くなっていく。

次第に体温は下がり、タクミに伸ばしていた手が落ちる。

「カムイー・カムイー!!」

マークスの叫び声が響き渡った。

カムイは思う。

まるで、あの時のようだ。

あの時はリョウマ兄さんの声が聞こえたと……

カムイは暗闇の中で目を覚ます。

辺りは上も下も、横もわかならない暗闇。

自分が立っているのか、浮いているのかすらわからない。

そして、あの時同じく凄惨な眠気が自分を襲う。

深く眠りそうになった自分の元に、懐かしい声が聞こえてきた。

「朝ですよ、カムイ。」

「……ミコト……お母様……?」

カムイはうつすらとした意識の中、横を見る。

そこには母ミコトが笑顔で座っていた。

瞬きを一度すると、辺りは暗闇から白夜王城の自分の自室へと変わる。

カムイは起き上がり、

「ここは……私の部屋……」

「はい。よく眠っていましたね。あなたはいつもお寝坊さんなんです。から。幼い頃から、ずっとそう。私が起こすと決まって、機嫌が悪そうに顔をしかめるんですよ。」

「……そうでしたね。私は父親にだと、お母さんが言っていました。父も、昔からそうだった、と……お母さんは面白そうに、お祖母様も嬉しそうに私を起こす時は言っていたものです。私はどちらの母に起こされても、そうだったんですよ。」

「カムイ?」

「きつと、今のミコトお母様には解らない話かもしれませんが……」

カムイは視線を落とす。

ミコトは首を少しだけ傾ける。

カムイは確信していた。

これはあの時と同じ。

生と死の狭間。

強く願えば戻れる。

けれど……

カムイはギョツと拳を握りしめる。

ミコトはジツとそれを見ると、

「さあ、カムイ。今日はリヨウマと訓練する予定があるのでしよう？

このままでは、遅れてしまいますよ。」

「リヨウマ兄さんと訓練……とても、懐かしくて……今はもう叶わない事ですね。」

「カムイ……本当なら、私はあなたをこのまま自由にしてあげたい。けれど……きつとそれは、あなたの望まぬこと。」

「……ミコトお母様。」

カムイは視線を上げる。

カムイは瞳を揺らす。

そこに一人、懐かしい人物が現れる。

「まったく、まだ寝ていたのか？カムイ。」

「リヨウマ兄さん……」

カムイは今にも泣き出しそうな顔で彼を見上げる。

リヨウマは腕を組み、カムイを見つめていた。

ミコトは優しく微笑み、

「まあ、リヨウマったらあなたを待ちくたびれて来てしまったよね。」

「早く、起きるのだ。カムイ。お前はこんなところで、止まる奴ではなからう。こんなところでぐずぐずしていたら、俺は怒るぞ。怒った俺は怖いからな。」

「ええ、知っています。リヨウマ兄さんは、優しくて厳しくて、それでいて頼りになるお兄さんですから。」

カムイは立ち上がる。

ミコトも立ち上がる。

辺りは自室から草原へと変わる。

流れる星々が綺麗だ。

カムイはリヨウマを見つめ、

「私はまだ、兄さんとの約束を果たしていない。タクミも救っていない。それだけじゃない……やらなくてはならない事もある。」

「ああ。そうだ。」

リヨウマは兄の顔でカムイに微笑みかける。

リヨウマは真剣な顔に戻り、

「カムイ。お前が望めば、今なら戻れる。まだ闘い続けている大切な仲間の元へ。」

リヨウマは空を見上げる。

カムイも見上げる。

「カムイ、起きて！起きて、カムイ!!あなたはこんなところで、倒れてはいけないのよ!」

アクアの必死な声が聞こえてくる。

そこにタクミの声も聞こえてくる。

「カムイは……死んだ。もう……目を覚ますことはない……」

辛く、悲しそうな声。

だが、マークスの力強い声が響く。

「なんてことを言うんだ!カムイは、死んでなどいない!お前の攻撃で死ぬはずがないだろう!」

「殺してやる……次はお前たちの番だ!!」

苦しそうなタクミの声。

闘う、仲間の声。

傷つく仲間の声。

「……私が死んでもやっぱりタクミの恨みは晴れないみたいだ……」

「ええ。タクミが囚われた恨みは、そんな生易しいものではありません。全ての暗夜兵を殺さぬ限り、あの者は止まらないでしょう。ですが、あなたの仲間は、諦めていません。あなたが戻ってくる事を、再び立ち上がる事を信じて闘っています。」

それからまた聞こえてくる。

これはカミラの声だ。

「ああ、カムイ……嫌よ。戻って来て！私の命と、引き換えにしてもいいから！」

「戻ってこい、カムイ！私はお前を信じ、闘い続けよう。例え最後の一人となろうとも！」

マークスは未だ闘い続ける。

きつと彼と共に戦っているのだろう、レオンの声も聞こえてくる。

「あんな攻撃で、死ぬわけないだろう？だって……僕の知っているあなたは、もつと……」

次々と仲間たちの声が聞こえてくる。

カムイは拳を握りしめる。

「そうか……ここでも、私を信じて闘ってくれている仲間がいる。待っていてくれる者たちが居る。」

カムイはリヨウマとミコトをじつと見る。

「行くのか、カムイ。」

「ああ。私は戻る。やり残したことを成し遂げるために。今も自分を信じてくれる仲間の為に。」

カムイは瞳を揺らし、

「リヨウマ兄さんとミコトお母様にまた会えてよかった。私は……ずっと側に居たかった。また一緒に笑い合いたかった。この気持ちは本当です。それでも、私はあなた達の犠牲を、貰った想いを糧に進みます。」

「そうか。それでこそ、俺の妹だ。だが、その前に……お前に会いたいと言う者がいる。」

「私に、会いたい人？」

カムイは振り返り、リヨウマの見つめる先を見る。

そこに立っていたのは、風神弓を持ったタクミ。

そう、本物のタクミだ。

カムイはタクミを抱きしめる。

「タクミ!!すまない、すまない、タクミ!!お前を、あんなにしてしまった！お前を苦しめた。」

「カムイ……姉さん……」

タクミもギョツと、カムイを抱きしめる。

「カムイ姉さん、お願いだ。戻るのなら、僕の体を殺してくれ。あなたの刀、夜刀神なら……きつとそれができる。」

「……だが、夜刀神は壊れてしまった。あの時は、元に戻すことはできなかったが、今回もできるかは解らない。」

カムイはタクミの肩に顔を埋める。

タクミは強くカムイを抱きしめ、

「大丈夫。僕の風神弓をあげる。この力があれば、夜刀神はきつと元に戻る。僕の想いも一緒に持って行って。」

「ああ……それが、お前の願いなら。約束しよう。お前の大切な風神弓と共に、お前を救ってみせる。」

「お願いだよ、カムイ姉さん。ここに居る僕らでは、もう何もできないから……」

カムイはタクミを離し、風神弓を受け取る。

タクミは微笑み、

「ありがとう。姉さん、もし……もし姉さんが、僕らと共に戦ってくれていたら、どんなに心強かったか。僕は、本当はずつと……あなたと姉弟きょうだいとして仲良くしたかった。ここではなく、向こうであなたを姉と呼びたかった。ちゃんと、僕のまままでそれを言えたら、良かったんだけど……僕は意地っ張りだから、どうしても、素直になれなくて……ごめんね。」

「知っているさ。お前は私の大切な弟だ。だからこそ、お前をあんな風にはさせたくなかった。辛い思いをたくさんさせてしまった。私は、お前にまた姉と呼んで貰えただけで、とても嬉しいんだ。戦争を早く終わらせて、またみんなで楽しく過ごしたかった。兄弟きょうだい姉妹まいとして、みんなで手を取り合っけていきたかった。すまない、タクミ。私のわがままのせいで、こんな結果になってしまった……本当にすまない。」

「いや、もういいんだ。カムイ姉さんは、あの僕の恨みを受け止めて、ここまで来てくれた。それに、姉さんはきつと、今とは違う僕を知っ

ている気がする。だから、それで十分だ。ありがとう、カムイ姉さん……」

「タクミ……」

カムイは涙を拭う。

リヨウマがカムイの肩に手を置く。

「大丈夫だ、カムイ。俺がどうして、お前に後を託したと思う。お前なら、幾多の悲しみや苦しみに耐えられる、強い心を持っていると思っただからだ。だから、もう振り返るのは最後にしろ。目を覚ましたら、前を向け。前を向いたら、歩き出せ。そして……闘う事で、闘いを終わらせてこい。夜刀神に選ばれたお前なら、きっとできる。俺はそう……信じている。」

「ああ、闘う。リヨウマ兄さんの分まで。約束を果たす、その時まで……だから、白夜王国を見守っててください。必ず私が、平和を取り戻します。」

カムイはリヨウマに抱き付いた。

リヨウマはギュツと抱きしめる。

カムイは彼を離し、ミコトを見る。

「カムイ。さっきの寝顔……幼い頃のあなたと本当に、同じでした。私ともう一度過ごしたくて、どうしても届かなかった時間を……最後に贈ってくれて、ありがとう。私は、あなたがどこにいても、誰と居ても……ずっと、ずっと愛しています。今度戻ってくるときは……もっと強くなったあなたの姿を、私に見せて下さいね。」

カムイはミコトを抱きしめる。

ミコトも抱きしめる。

「ミコトお母様、ありがとう。あなたの本当の息子カムイにはなれなかったかもしれない。けれど——」

カムイは顔を上げて、微笑みかける。

「——次にただいまを言う時は必ず、貴女に誇れる自分になっていると……そう、約束します。貴女の本当の父カムイと同じような立派な人に。」

「……ありがとう。その時を、楽しみにしていますね。」

カムイはミコトを離す。

ミコト達はカムイを見つめ、

「行ってらっしゃい、カムイ。」

「行ってこい、カムイ。」

「行ってらっしゃい、カムイ姉さん！」

カムイは風神弓を握りしめ、

「行ってきます!!」

消えかかっていくリヨウマ達をカムイは涙を堪えてみる。

空に光が差し、人の姿のリリスが現れる。

「カムイ様。」

「リリス……」

「さあ、行くのなら私がお連れします。私の手を取ってください。」

差し出されるリリスの手を、カムイは強く握りしめる。

「ありがとう、リリス。私はお前に、助けられてばかりだな。」

「ふふ、いいえ。私をずっと助けてくださっていたのはカムイ様です。

あの時と同じ、暖かい手。私はこの温もりがとても、大好きでした。

私を撫でてくれた優しい手、万の敵を屠る勇ましさが……あなたの全

てが、大好きでした。」

「ああ、私も大好きだった。リリスはとても懐かしい思い出を思い出

させてくれた。もう一人の大切な父を……ありがとう、リリス。私の

大好きで、大切なリリス。これから、ずっと……」

「ありがとうございます、カムイ様。これがあなたとの、本当の最期で

すね。少しだけ寂しいですが……行ってらっしゃいませ、カムイ様

！」

リリスはとびつきりの笑顔を向ける。

カムイも、笑顔を向けて、

「ああ、行ってくるよ、リリス。」

カムイは瞳を閉じる。

「……私は、戻るんだ。私を信じて闘っているみんなの元へ!!」

カムイは左手に握る風神弓を握りしめる。

「私はまだ止まらない！前を見て、進み続けなくてはいけないんだ!!

だから頼む、風神弓！私に、夜刀神に、お前の力を貸してくれ!!!お

前の主を……タクミを救うために、タクミの想いを届けるために!!」

カムイは目を開く。

辺りは光り輝き、カムイを包み込む。

闇に囚われたタクミは見た。

砕けたはずの夜刀神が光り輝いているのを。

「なんだ……この光は……」

「応えてくれたんだな……風神弓……」

カムイは瞳を開ける。

右手には砕けた筈の夜刀神が元に戻ってカムイの手の中になる。

泣き出しそうなエリーゼの頭を撫で、起き上がる。

マークスが起き上がったカムイを見て、

「カムイ?! みんな、カムイが!!」

「すまなかった、みんな! だが、私は大丈夫だ!! リョウマ兄さんが、タクミが、ミコトお母様が、リリースが、私をここに送ってくれた。私はまだ、みんなと共に闘う!!」

「ああ……よかったわ、カムイ!」

「戻ってくるって、信じてたよ。それでこそ、姉さんだ。」

「ほんと、目を覚まさなかったらどうしよかと、思ったんだから!」

それぞれが、嬉しそうにカムイを見る。

タクミはカムイを睨み、

「許さない……カムイ!! 何度生き返っても、この僕が殺してやる!!!!」

タクミは矢をカムイに向けて討ち放つ。

カムイはそれを夜刀神で弾く。

今度は剣はヒビ一つはいらない。

「なに……?」

「今度は折れたりしないさ。この刀は想いを継いでいる。」

「それがなんだ?」

「……この夜刀神には、風神弓と共に闘い歩んだタクミの想いが込められている。大切な仲間の想いを繋いだ刀だ。その想いが、私を、この夜刀神を、再び奮い立たせてくれた。だからこそ、もう二度と折れ

たりはしない！」

「風神弓が……僕を……裏切った？」

「違う。今、お前が手にしている風神弓は、お前のモノではない。風神弓の本当の持ち主は、私のせいで死んだ。私はやり遂げなくてはいけない。ここに来るまでに犠牲にした者たちの為にも、両国の未来を、平和を切り開く。お前を倒し、大切な者たちとの約束を果たすために。」

「殺してやる……卑劣な暗夜の者……僕が、本物の、白夜王子タクミだ……僕がこの国を守る……白夜王国の為に闘う……暗夜の者は皆殺しだ……死ね……みんな死ねええええっ!!!!」

「行くぞ、タクミ。お前を、救うために!!平和を再び取り戻す為に!!これが、最後の戦いだ!!」

カムイは夜刀神を構える。

『そう、これで終わらせるんだ!みんなに平和を……取り戻させる!!』

アクアがカムイの隣に立ち、再び風刀を構える。

「ごめんなさい、タクミ。もし私が近くに居られたら、もつと早くにあなたを救えたのに。何かを選べば、別の何かが犠牲になる。解つていたことだけれど、でも……せめて私もカムイのように、この道を選んだ償いをしなければならぬわ。」

アクアは風刀を強く握る。

そして小さな声で呟いた。

「本当はもう二度と、使うつもりはなかったのだけれど……私の、禁断の歌の力であなたの呪いを弱めてあげる。でも、この力を使えば、私は……タクミ、リヨウマ……もし私がそっちに行ったら、あなた達は怒るかしら。それとも……」

アクアは瞳を閉じる。

小さく微笑み、

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

カムイは驚いて、アクアを見る。

タクミは頭を抑え、

「ぐっ!!……この歌は、いったい……!!力が奪われる……どうして

……!! どうしてみんな、僕の邪魔をするんだああああ!!」

タクミは頭を一度振って、矢をつがえる。

「殺す! 殺してやる、カムイ!! 今度こそ!!」

「私はお前との約束を果たす……お前を必ず救ってやる。それが、お前の姉として今のお前にしてやれるきつと唯一の……償いだ。」

カムイはアクアを見る。

彼女は歌い続ける。

カムイは覚悟を決めた。

何故なら、彼女の歌には意志がある。

その意志を受け、カムイは剣を振るう。

仲間達も武器をかまる。

タクミの放つ矢を、仲間達が叩き落とす。

カムイは彼らにそれを任せて、走る。

タクミの元へ、一直線に走る。

タクミの懐まで回り込み、カムイは姿勢を低くする。

タクミが反応するよりも早く、カムイは剣を振り上げる。

彼は腹から胸にかけて斬られ、後ろに下がりながら、

「僕は……僕は……は……」

そして、後ろに倒れ込んだ。

カムイは息をしなくなつたタクミを抱きしめる。

「約束は果たしぞ、タクミ……リョウマ兄さん……」

カムイは涙を流す。

タクミの体は青い炎に焼かれ始める。

カムイには、その熱さは伝わらない。

その炎の中、タクミの握る風神弓が光る。

そこから本当のタクミの声が薄っすらと聞こえてきた。

「あり……がと……姉……さ……」

カムイは最後の塵となつて燃えていったタクミの風神弓を握りしめる。

「タクミ……ああ、ゆっくり休んでくれ……ありがとう、タクミ……私の弟になつてくれて……」

カムイは涙を流す。

しばらくそうした後、涙を拭いアクアを見る。

まだ、彼女はいる。

あの時のようにはさせたくない。

「カムイ。」

「兄さん……」

カムイは近付いて来たマークスを見る。

他の兄弟姉妹も、カムイに寄ってくる。

「ガロン王やタクミの体を動かしていたのは……もう、理性を失った哀しき神。誰も信じる事ができなくなった憐れな神。愛する者も、大切なモノも、破壊しなければ止まらない壊れた神。」

「カムイ、それは……」

「さあ、兄さん。みんな……戦争は終わりました。今の私達にできるのは、この戦争が終わったことを皆に報せ、救える命を一つでも多く増やす事です。これで、白夜も暗夜にも、平和がやって来る。その平和を紡ぎ、繋げる事ができるのは、白夜王国の王と暗夜王国の王です。兄さん、お願いしますね。今までの犠牲を、無駄にしない為に……」

「ああ。私たちのしたことが、正しかったのかは私にはわからない。けれど、散っていった者たちの分まで、これからの平和を、未来を創っていくのは私たちの役目だ。」

マークスは胸の所まで上げた右手を強く握りしめる。

カムイは微笑む。

と、エリーゼが辺りを見渡し、

「……あれ？アクアお姉ちゃんは？」

「え？」

カムイも辺りを見渡す。

アクアの姿はどこにもない。

カムイは瞳を揺らす。

「だれか……アクアさんがどこに行ったか知りませんか？」

「うーん、アクアお姉ちゃん、どこー？」

エリーゼも、カムイと共に辺りを捜すが見当たらない。

カミラが頬をに手を当て、

「おかしいわね。急に居なくなるなんて。」

「白夜王城のどこかにいるんじゃない？ここはアクアの家だったんだし、何かしておきたい事があるのかもね。」

レオンがため息交じりに言う。

カムイは拳を強く握りしめ、

「そう……だな。」

「大丈夫だ。何にせよ今から、城内の残兵を残らず探さねばならん。その時に、アクアも見つかるだろう。」

マークスは伏せていたカムイの肩に手を置く。

カムイは顔を上げる。

「ええ、そうですね。きつと……」

カムイを残し、マークス達は先に部屋を出て行く。

カムイは瞳を揺らしてある一角を見る。

それは、最後の最後にアクアが居た場所。

「……アクア姉様……」

カムイは瞳を大きく揺らす。

そして背を向けて、歩いて行く。

あれから、暗夜王国では大きく動いた。

暗夜王ガロンの死、白夜王国との戦争の勝利。

色々なごたごたを片付け、少し落ち着いた。

そして今日、暗夜王国は王位継承が行われた。

「では、これより——前暗夜王ガロンの後を継ぎ、暗夜王国第一王子マークス様が新たな暗夜王として、この国を治められることとなります。即位の証として……この冠をお受け取りください。」

「ああ。確かに受け取った。新しき王として、この国を正しく導いていくことを誓おう。」

冠を受け取り、頭に乗せて弟妹、仲間、臣下、部下、来賓たちを見る。

カムイは涙を堪える。

それは以前の時は見ることでできなかった王となった兄の姿。
白夜王国では逆となった。

リヨウマの王となった姿を見ることはできないが、生きたマークスの姿を見れた。

「マークス兄さん……良かった。」

「ああ。これから、暗夜王国の新たな歴史が始まるんだ。この国はきっと、素晴らしい国になる。そんな予感がするよ。」

「そうね。マークスお兄様ならきっと、成し遂げて下さるわ。」

レオンとカミラは嬉しそうに誇らしそうに言う。

だが、エリーゼは暗い表情だった。

「……アクアお姉ちゃんにも、見せたかったね。マークスお兄ちゃんの戴冠式。」

「そう、だな……ああ……あの時も見せたかった……」

カムイは小さく呟いた。

カミラも表情を暗くし、

「そうね……せっかく戦争が終わったのに……あの子はなぜ、いなくなってしまったのかしら。どこかで、元気でいてくれるといいのだけれど。」

「全く。姿を消すなら、兄弟姉妹きょうだいの僕たちに一言くらいあってもいいだろうに。一人で勝手に、風みたいに消えてしまうなんてさ。」

レオンはムスツとしながら言う。

カムイは小さく笑う。

『風、か……。本当に、あの人はいつも私より先に消えてしまう。誰よりも、平和な世界を視たがっていたあの人が……』

カムイがそう思っていると、エリーゼがマークスの方を見上げる。

「あ、マークスお兄ちゃんがお話するみたいだよ。」

「ええ。即位のお言葉よ。静かにしましょうね、エリーゼ。」

「はあい。」

エリーゼ達は気持ちを切り替えてマークスを見る。

カムイもまた、マークスの方を見る。

マークスは剣を地面の前に鞘ごと立てて、皆を見渡して言う。

「皆、今日は私の戴冠式に足を運んでくれて、感謝する。戦争は終わり、敵国であった白夜王国とは和解した。今後は両国と手を取り合い、真の平和に向けて歩んでいくこととなる。先の戦争では……いや、戦争が始まる以前からずっと、暗夜、白夜の民たちには辛い思いをさせてきた。王の支配に、圧制、略奪。各地での反乱も、後を絶たなかった。だが私は……両国の民たちを二度と同じ目には遭わせない。暗夜領の公国や部族たちには自治を認め、白夜領とは支配ではなく信頼で繋がり、両国が互いに尊敬しあえる関係を結べるよう、尽力する。時間はかかるかもしれないが、必ず成し遂げる。私はここにいる皆に、そう約束する。闇に閉ざされた夜の空にも、星の光は輝いている。私は王として、その光となろう。最も大きな星となり、皆を導こう。皆が笑顔で……幸せに過ごせる未来を創っていくために。」

マークスは剣を抜き、掲げる。

その言葉と姿に、皆は拍手を送る。

カムイは瞳を揺らす。

ああ、ここにリヨウマ兄さんがいれば、この二人は父あの頃の時と共にいたような関係だっただろう。

何故、こんな風になってしまったのか。

分かっている。

全て自分が悪い。

あの日、あの選択を選んでしまったあの時から、運命は乱れているけれど、今度こそ……今度こそ、成し遂げる。

いや、成し遂げてみせる。

カムイは強く、強く拳を握りしめる。

すぐ近くでは、暗夜の姉弟きょうだい妹達が嬉しそうに、誇らしそうに笑い合っている。

拍手を送る。

式は無事に終了し、マークスがカムイ達の側にやって来た。

「お疲れ様です、マークス兄さん。」

「どうだった、私の姿は。王として、上手く振舞えていただろうか？」

「ええ。それはもう。まるで、あの頃のあなたのようにでした。」

「ん？」

「いえ……とても立派だった、と言う話です。」

カムイは眉を寄せて悩むマークス苦笑する。

そこに、式典の途中で大騒ぎをした為に、ギウンターによって説教されていたエリーゼが戻って来た。

友に来たのは、ヒノカとサクラだった。

「ヒノカ姉さん、サクラ。今日は来てくれてありがとう。」

「いや、礼を言う必要はない。両国には恒久的な平和条約が締結されたんだ。何かあれば、こうやって駆けつけるのは当然のことだろう？」

「……それでも、礼を言わせてくれ。ありがとう……」

ヒノカはカムイの頭を撫でる。

カムイはヒノカをまつすぐ見つめ、

「こうして、姉さんたちの顔を見られたことは嬉しく思う……けれども、約束を守れなかった。その事は、本当にすまないと思っている。」

「カムイ……もしかして、私の戴冠式の事を言っているのか？確かに、本来はリヨウマ兄様が継ぐはずだった。例え、兄様でなくとも、王位を継ぐとしたらタクミだ。けれど、兄様は自らの意志で、お前を、国を守った。タクミも、きつとそういう思いだったのだろう。そして、人として戻れなくなったタクミを、お前が救ってくれた。なら、後を継いで未来を創るのは私たちの役目だ。まあ、作法やら、言葉遣いやら問題は山積みだが……そこはなんとかしてみせるさ。」

「ヒノカ姉さん……姉さんたちの気持ちを考えれば、私は恨まれても仕方ないと思っています。けれど、暗夜王国の事は——」

「カムイ。確かに、暗夜王国が憎いさ。卑劣な手で兵や民を蹂躪したことは、一生許せないだろう。だが、お前たちは、そんなやり方に必死に抗おうとしてくれた。救える命を、一つでも多く残してくれた。その事には感謝している。きつと、時間はかかるだろうが、民たちも理解をしてくれるはずだ。いや、私が少しずつでも対話していくさ。」

ヒノカは笑みを見せる。

だが、表情を真剣に戻し、

「だから、と言うワケではないが……白夜王国の民たちは今は何をするか解らない。私も注意はするが、こっちに来たときは注意をしてくれ。」

マークスがヒノカを見て、

「ああ。それだけの事を、私たちがしてしまったと言うことは理解している。私たちのせいで散った命のことは、生涯背負っていこう。流れた血や涙の重さも、全て。先の戦争で働いた行為、本当に……すまなかった。」

マークスは頭を下げる。

ヒノカは首を振り、

「そんな……頭を上げてくれ、マークス王子……いや、マークス王。私も王となる身だ。先も言ったように、民たちとの対話を続けるさ。今の暗夜王国の、あなた達の誤解は解く。それこそ、互いに時間を掛けて少しずつ前に、な。」

「ああ。そうだな。」

ヒノカとマークスは握手をする。

その手は強く、決意に満ちたかのように強い。

ヒノカとサクラは暗夜城を出る。

ヒノカは天馬に乗り、サクラが後ろに乗る。

そしてカムイを見て、

「カムイ。誤解が解けたら、いつでも……またあの城に帰ってこい。リョウマ兄様とタクミはもう居ないが、それでもお前に、お帰りを言って迎える事はできる。あの時言った、本当の姉妹きょうだいとして笑い合うことは、今からでもできるさ。」

「……はい、ありがとうございます。」

カムイは微笑む二人に、笑顔を向ける。

そして二人は天馬で駆けて行った。

その姿を、カムイは見続けた。

見えなくなるその時まで。

カムイはその夜、晩餐会に参加した。

国の要人だけでなく、マークスの計らいにより、暗夜王国の全ての民が出席した晩餐会。

だが、その人の多さに馴染めず、息苦しくなつて外の空気を吸いに出た。

月夜の光を頼りに、夜道を散歩する。

そしてとある小さな湖に出た。

湖に移る輝く月を見つめ、

『……今度こそ、平和が来る。多くの犠牲を出して掴み取った。あの時にはない、暗夜王国の別の平和……笑顔、希望がある。それはきつと、白夜王国も同じ。後は、私が透魔王国に戻つて、ハイドラを討てば……世界の崩壊は免れるはずだ。この世界を、約束を、私は必ず――』

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

カムイは思っていたことを隅に投げる。

だってそこに聞こえてきたのは、アクアの歌声。

辺りを見渡し、アクアを捜す。

そしてカムイは湖の中の片隅にいたアクアを見つけた。

そこに駆けより、

「アクアさん!!よかった……戻ってきてくれたんですね!」

だが、アクアの側に寄ろうとしたが動けない。

カムイは瞳を揺らす。

そのアクアもまた、カムイには話し掛けない。

ただジツとカムイを見つめた。

しばらくして、アクアは口を開いた。

「ねえ、カムイ。私のこの歌……どう思う?」

「……大好きですよ。とても綺麗で、とても懐かしい……そんな歌です。」

「そう、なのね……。なら、あなたは気付いているはずよ。この歌の意味と力を。」

「……アクアさん……私は、私はあなたを救えなかつた。」

「それは違うわ。私は、私の意志で闘い、この選択を取った。その事

に、後悔はないわ。」

「でも——」

「カムイ。目を閉じて、私の声に耳を傾けて。」

アクアのその哀しくも強い瞳に、カムイは目を閉じる。

「ありがとう、カムイ。いつかまた、どこかで……」

カムイはハツとなって目を開ける。

だが、そこにはもう、アクアの姿はどこにもなかった。

あつたのは微かに光る水の反射。

カムイは瞳を大きく揺らす。

「アクアさん……アクア姉様……」

カムイはペンダントを取り出して、強く握りしめて泣く。

だが、涙を拭い立ち上がる。

後日、白夜王国でヒノカの王位継承式が行われた。

カムイは彼女を見つめる。

白い着物に身を包み、王としての威厳をもって民たちに語りかける

ヒノカの姿は美しかった。

時間はかかるだろうが、白夜王国と暗夜王国の平和、手と手を取り

合って行ける世界を創っていつてくれるだろう。

前の時は違う方法で、今度こそ……

それは唐突に起きた。

いや、あの時と同じ。

両国の内情が安定し、会談の日だった。

この日、世界は崩壊した。

カムイを護って、ヒノカが重傷を負う。

突如現れた黒い騎士によって、マークスは殺された。

両国の民は崩壊に巻き込まれ、死んでゆく。

妹のサクラは涙を流し、ヒノカにしがみ付く。

エリーゼとカミラは涙を流し、マークスにしがみ付く。

そんな彼らをレオンとカムイが護る。

仲間達が護る。

だが、次々に皆倒れ逝く。

カムイは叫ぶ。

「アベル!!なんで……なんでなんだ!!」

彼は笑みを浮かべる。

あの時と同じ冷たい笑みを。

同じ言葉を。

「我が王は望む。世界の崩壊を……」

彼はレオンを斬り、カムイを見る。

「これは運命。絶対に免れない絶対的な運命なのですよ。」

「なに?」

「白き王、黒き王、白き巫女、歌姫……誰もが皆、死んで逝く。あなたが大切だと思う兄弟姉妹きょうだいでさえも。全ては覆す事の出来ない運命なのです。」

カムイはあの時と同じように斬られた。

奥の方でサクラ、エリーゼ、カミラの悲鳴が聞こえる。

カムイは拳を握りしめ、夜刀神で己を支える。

「それでも、私はその運命を打ち壊す!何度繰り返そうとも!何度失っても!必ず!!」

カムイの足元に魔法陣が浮かび上がる。

彼を涙の流す瞳で睨みつける。

「私は約束を果たす!必ず……この呪いを打ち壊す!!託された想いを、交わした約束を、犠牲にした人たちの想いの全てを背負い、私はこの運命を打ち壊してみせる!」

強い光がカムイを襲う。

瞳を強く瞑り、目を開く。

そこは母が死ぬその瞬間。

そして自分はまた選ぶのだ。

白夜王国か、暗夜王国か……

何度、繰り返し返しただろう。

何度、失っただろう。

何度、同じ光景を、同じ約束をしただろう。

何度、あの人の歌を聞いただろう。

何度、同じ言葉を聞いただろう。

何度、自分は同じことを言っただろう。

何度、自分は殺しただろう。

何度、自分は約束を果たせなかっただろう。

何度、自分は彼と戦っただろう。

何度、自分を恨んだだろう。

何度、自分を憎んでくれと望んだだろう。

何度、自分を――

数えきれないくらいの何度を繰り返した。

それこそ、誰も信じられないくらい。

けれど、いつだって兄弟姉妹きょうだいが、あの人が、仲間が自分を支えてくれただろう。

信じてくれただろう。

なのに自分は守る事ができなかった。

彼らの想いに沿う事ができなかった。

いつだって、犠牲を元に平和を勝ち取り、世界が崩壊していく。

ああ、それでも自分は止まる訳にはいかない。

自分は逃げ出すわけにはいかない。

例え、支払う対価が記憶、感情、命だったとしても。

いつしか、本当の自分すらも解らなくなって来た。

けれど、自分の中にはいつだって約束だけが残った。

大切な約束だけが……

第二十話 V S 黒の傀儡

自分達は多くの人に手をかけた。

それに対しては後悔はない。

自分は名門貴族と呼ばれるお嬢様。

母から手料理を教わり、家族仲も良かった。

自分の周りは平和だった。

きっと自分が殺すことに対して、こんなに思い入れができたのはあの時からだ。

従者の手によって、母を殺されたあの時から。

母を殺した従者は処罰された。

けれど、屋敷に母を殺した従者が居るように思えた。

だから他の従者に殺意を抱いた。

やがて自分は平然と人に危害を加えるようになった。

屋敷に従者が居なくなると、自分は外に出た。

戦場で敵を殺した時に褒められたことが嬉しくて、自分は人殺しを好むようになった。

自分は殺し屋だった。

だから感情は持ち合わせていない。

何故、自分が殺し屋になかったか。

それは自分が貧民街で育ち、幼い頃に親に捨てられたからだ。

孤児となってからは、パンを盗んで生きながらえていた。

その後、自分は当時の殺し屋の世界を牛耳っていた殺し屋に拾われた。

その者から、殺し屋の技術だけを教わって生きてきた。

だから依頼で、殺し屋として育てた師を殺してもなんとも思わなかった。

なにより、殺し屋業界ではよくあることだった。

自分は元盗賊だった。

何故なら、自分は最下層の貧民街の出身だったからだ。

親に捨てられた子供が、生き抜くためには窃盗、殺人何でもやった。

その為なら、自分の身すらも売ろう。

体の一部が壊されても、己の心が踏みにじられても、自分は耐える。全ては、自分が生き抜くために。

自分は暗夜の第一王子マークス様の臣下になった。

マークス様は言った。

自分のままでいいと。

言葉遣いも、自分の過去の事も気にしない。

自分の相方は経歴は不明。

けれど、彼からは血の匂いがした。

だから落ち着く、嫌いではない。

好きだと。

誰だったか忘れたが、誰かが言った。

自分はまるで子供のようだ。

それは自分でも自覚がある。

自分はその日から止まっている。

あの時の子供のまま。

でも、二人はありのままの自分を受け入れてくれた。

だから自分は闘う。

大切な者が殺されないように、敵を殺す。

殺して、殺して、殺しまくる。

でないと、失ってしまうから……

自分は殺し屋家業を続けていた。

そんな時、暗夜王国の第一王女の暗殺を依頼された。

けれど、自分は失敗してしまった。

このままでは、自分は帰れない。

そうずっと呟いていた。

それを聞いた彼女は微笑んで私に言った。

「ーなら、あなたが私を暗殺依頼を受けた報酬の倍の金額を支払う

わ。だから、私の臣下になりなさいな。

あの言葉から自分は変わった。

カミラ様の臣下として過ごす日々。

仲間と共に共闘して闘う日々。

どれも、殺し屋の時には味わった事のない経験だった。

それでも自分は殺し屋だ。

カミラ様が支払っている金額より上回る依頼が来たら、私はあの人を殺すだろう。

けれど、それはない。

あの人以上の信頼できる依頼主はいない。

自分は変わってきている。

殺し屋としての自分ではなく、カミラ様の臣下としての自分として。

自分は仲間達と共に城に忍び込んだ。

だが、自分は裏切られ、囮にされた。

死にたくなかった。

だから自暴自棄になった。

けれど、兵に捕まり、そろそろ年貢の納め時かと思った。

その時、自分はレオン様に会った。

王室育ちの坊ちゃんだと思った。

けど、違った。

あの方は自分を、己の臣下にした。

盗賊であった自分に手を差し伸べた。

あの時の事は忘れない。

あの方の瞳を忘れない。

自分はあるの人に忠誠を誓った。

あの方を守るために、あの方の邪魔となる者は消す。

同僚である相方は、素性が解らない。

これはありえない話だった。

だから自分は警戒した。

けれど、あの方があいつを認めたのなら、自分はある方を信じるま
でだった。

ある時、マークス様の妹君に会った。

マークス様と違って血の匂いがしない人。

けれど、透魔王国でマークス様の隣に来たカムイ様は血の匂いがした。

それも、かなりの血の匂い。

どこかで嗅いだことのある血の匂い。

……そう、会った時から思った。

あのフードの彼女と同じくらいの血の匂い。

あの人が、カムイ様と同一人物。

けれど、違う。

とても真逆な二人なのに、どこか似ていると思ったのを覚えてい

る。
自分はカムイ様の妹君を時折見守っていた。

カムイ様から深い愛情を受ける彼女。

自分にはない純粋な笑顔。

汚れていない彼女。

けれど、彼女はカムイ様に似ていた。

一度は命を奪おうとした自分を仲間として受け入れた。

カムイ様とは違う意味で、信頼できると思った。

だが、フードの彼女は同じ匂いがした。

人を殺すのを躊躇わない、そんな匂い。

けれど、彼女の瞳を見て違うと思った。

彼女の瞳には悲しみがあつた。

自分にはない、相手への心があつた。

それは、彼女がカムイだったからだろうか。

それとも、彼女は感情があつたからだろうか。

それでも時折、彼女のみせる殺気は自分の知るカムイ様とは違う。

あれは自分でも恐ろしいと思う。

それだけの何かが、彼女にはあるのだろうと感じた。

自分はレオン様の姉君に会った。

いかにも温室育ちの世間知らずのお嬢様だった。

誰でも簡単に信じて、綺麗すぎるほど純粋な瞳を持っていた。

それは、この闇夜の住人ではないからだろうか。

日の当たる白き国の人間だからだろうか。

それでも自分は、この甘ちゃん姫が気に入らなかった。
苦しめてみたいと思った。

だが、あの方があの甘ちゃん姫と話している時の笑顔は壊したくないと思っていた。

そんな時、あのカムイ様がフードの彼女と共に現れた。
戦場で会った時から解る彼女の身に纏う何かが、自分を警戒させる。

それと同時に、重い何かを感じた。

仮面が壊れ、彼女の瞳を見た時にそれは確信へと変わる。

あれはあまりにも辛い経験をした者の瞳だ。

けれど、あの甘ちゃん姫と同じその瞳には光があった。

強い固い意志の瞳。

同じカムイなのに、違うカムイ。

けれど同じな二人。

自分はこの二人が面白いと思えた。

――仮面の少女は目を覚ます。

「良かったわ、目を覚ましたのね。気分はどう？」

「……………だいぶ楽になっている。」

「そう、なら良かったわ。」

隣には椅子に座ってホツとした姿のアクアがいた。

彼女は目元を腕で覆い、

「兄の歌が聞こえた気がした……………」

「……………ええ、シグレがあなたの事を止めて、護ってくれたわ。」

「そう……………か……………」

彼女は身を起こし、あの時タクミに刺された所を見る。

傷は塞がっていた。

「夜刀神の力を媒体に、傷を直したのか。」

「ええ、それなら可能ではないかと思ったの。前の時に、あなたはカムイの夜刀神を意識してたみたいだから。」

「なるほど。」

「ねえ、イズモ公国でサクラがあなたの傷を直したでしょ。あの時は……」

「幻術を使った。傷が癒えぬ限り、引き下がらないだろう。あんな所で時間を無駄にする訳にはいかないからな。」

「……もっと、私たちを頼っていいのよ。全てを信じて、とはもう今の私には言う資格はないわ。けれど……私やリヨウマ、マークスはある程度の事は解っているつもりよ。だからー」

「何か、勘違いしているようだが……私はあなた達の仲間、ではなく協力者に過ぎない。馴れ合うつもりも、信じることもない。いつでも私を裏切ってくれて構わない。」

「カムイ……」

「違う!!?」

彼女はアクアに睨み付ける。

アクアはビクツと身を固め、悲しそうに瞳を揺らす。

「私はもう、カムイでも、カンナでもない。そこを、間違えないでもらおう、歌姫。」

彼女はベッドから降り、歩いて行く。

アクアは彼女に手を伸ばすが、その手は途中で止まってしまった。

武器を身に纏い、屋敷から出た。

そして彼女は気づく。

大切なお守りが無いことに。

『……あの時か。仕方ない、後で取りに行くか。いや、今の状態で単独行動はやめておいた方がいいだろう。私はともかく、他の者たちがどう動くかわからん。』

彼女は視線を斜め上に上げる。

そこには、少し盛り上がった声が響いて来る。

と、斜め後ろで気配を感じる。

「カムイ。」

「……悪いが、貴殿の妹の方ではない。」

「いや、お前もカムイで間違いはないだろう。」

「違う。私は、もうカムイではない。」

「……なら、これだけは渡しておこう。お前の物だろう。」

リヨウマから、彼女はお守りのペンダントを受け取った。

彼女を見て、

「礼は言っておく。」

「……アクアのモノと同じものだろう。」

「ああ。母だった頃のあの人が、兄に渡し、私が受け取った。」

「そうか。確か、シグレ……と、アクアが言っていたな。」

「……何をどこまで聞いたかは知らないが、私にとってはもう昔の事。そしてもう、私とは関わりのないモノだ。」

リヨウマにそれだけ言うと、彼女は歩いて行った。

カムイ達は、彼女の言う通りに動いていた。

再び四編制で動いていた。

それは彼女曰く、自分が正気に戻っている事。

そして、まだこの透魔王国に滞在している事を示す為。

彼女はいつものように、ハイドラを守りながら前線に出ていた。

ある意味彼女が違ったのは、フードはかぶっているものの、仮面を付けていない事だ。

フードを被っているのは、単にカムイと間違えられたくないからだった。

今回も、透魔兵とある程度の戦闘を行う。

彼女は真っ先に剣を抜いて、戦闘を開始した。

彼女は倒れ逝き、炎に包まれていく透魔兵達を見る。

だが、すぐに次へと向かっていく。

その姿を見た彼らは、

「本当に、あれがカムイだとは思えないな。」

「ああ。だが……彼女がああいう選択を取らせてしまったのは自分達だ。」

リヨウマとマークスも、互いに背中合わせにしながら闘う。

レオンとタクミもその姿を見て、

「……あれが、もうひとつの姉さんの姿とはね。」

「そうだね。けど、僕はなんでだろう……あの姉さんを知っている気がするんだ。」

「それは……兄さん達みたいに、あの姉さんがカムイだった頃の記憶らしいものがあるからかい？」

「いや。それとは違うかな。僕は……なんというか、夢？だったのかな。」

「ふーん。けどさ、あっちの姉さんの言っていた『約束』って、結局何だと思う。」

「それは……多分、レオン王子も気付いているじゃないの？」

「……だからこそ、聞いたんだよ。」

二人は互いに見合って、苦笑し合う。

カムイとアクアも同じように、彼女を見ていた。

「……………」

「カムイ？」

「あ……すいません。今は戦闘中でしたね。」

「大丈夫？」

「大丈夫ですよ、アクアさん。彼女に比べれば、自分の思っている事は本当に小さい事です。でも、なんででしょうか……この心のどこかで、今の彼女の姿がとても辛そうに見えるんです。そう意味が少しだけ分かった気がするのに、モヤモヤ勘が消えないんです。」

「カムイにとっては、複雑よね。けどね……私は思うの。彼女は間違はなく、あなたに希望^光を見ているわ。おそらくだけど、彼女は自分では……いいえ、自分だけでは果たせない目的があるのよ。今の私には、あの子が本当にしたい事などわからないけれど……どちらのカムイも、あのカムイも大切なの。」

「アクアさん……」

「だからカムイ。私たちは、私たちにできる事をしましょう。」

「はい、そうですね！ 私たちには、私たちができることを！」

カムイは武器を構えなおして、突っ込んで行く。

だが、今回はそれだけではなく、いつもと状況が違った。

「お前たちを殺せば!!」

「俺たちはやるぞーやってやるんだ!!」

どこかに幽閉されていたのか、どこかに隠れていたのか、透魔王国の民達が武器を持って現れた。

だが、数はそんなに多くはなかった。

フードの彼女は長剣を構え、無表情で、さらに問答無用で斬りかかる。

「俺は……俺は妻と子を救うんだ!!」

「僕は母さんと父さんを助けないと……」

「俺は死にたくない!死にたくないんだ!!」

彼らは炎に包まれながら、フードの彼女に恨みの言葉を放って死んで逝った。

一人残った最後の男性を斬る。

倒れた彼は、他の彼らとは違いフードの彼女に手を伸ばす。

「頼む……いや、お願いします。私の子供を……救ってください。」

フードの彼女は剣をしまい、フードを取る。

そして彼の前に膝を着いて、その手を取る。

彼は続ける。

「妻を早くに亡くした……私のたった一つの宝なんです。だからお願いです……私の大切な息子を……」

「ああ、救ってやる。だからお前はもう逝くんだ。解っていたんだろう。自分がどういう状況なのか。」

「……はい。だから、ありがとうございました。私を救ってくれて……」

「恨む相手が欲しいのなら、私を恨んで死んで逝ってくれて構わない。」

「いいえ、あなたは私を救ってくれた方。感謝こそすれど、恨みはしません。ありがとうございます……本当にありがとうございました。」

彼は炎に包まれて、笑顔で消えていった。

彼女が立ち上がると、カムイが彼女の前に立つ。

「なんで、こんな事を!」

「待って、カムイ。」

アクアが、カムイの横に立つ。

カムイはアクアを見て、

「けど、今彼女が相手にしていたのは……この国の人たちなんですよ。アクアさんにとっても、ハイドラ様にとっても、想い入れがあったはずです！」

「それは……そうだけど、そうじゃないの。彼らは……」

アクアは表情を暗くする。

フードをの彼女はフードを再び被り、

「あれが、彼らを救うたった一つの手段だからだ。」

「え？」

「この、透魔王国の民は自分が死んだことにさえ気付いていない。それは、兵たちもそうだが、彼らはもう彼ら自身の意志はない。透魔王ハイドラの為に動く駒であり、命令を聞くだけのただの死人だ。」

「でも、だからって！それなら、どうして彼らに教えなかったんですか。」

「お前は、自分がすでに死んでいると解っていたらどう思う。彼らは生きたい、誰かを救いたいと、武器を取り戦った。なのに、自分は既に死んでいて、救いたい者もすでに死んでいた。なら、自分たちは何のために武器を取ったのか、想いを壊され、ある者は狂う。そうなれば、透魔王ハイドラの思うツボだ。だったら、何も知らずに死んで逝った方が気持ち的には楽だろう。」

「だから、あなたは自分が恨まれても、憎まれてもいいと？」

「……それで、彼らの気持ち収まるならな。今更、一つや二つ怨み辛みなど増えた所で何も変わらんし、何も感じないからな。」

そう言っ、彼女は歩いて行った。

カムイ達はそれを慌てて追って行く。

アクアと、リヨウマと、マークスは後ろの方で、

「はあ……嘘が下手なんだから。」

「お前も、そう思うか。」

「私は、時々彼女の嘘と真が解らない時がある。」

アクアは、先頭をカムイ達と何やら話ながら歩く彼女を見る。

「……あの子は元々、ウソをつくのは苦手……いえ、下手なのよ。いつだって自分の感情や想いに素直で、はつきり言う子なの。けれど、相手を想う気持ちも人一倍強くて……何より、あの子はとっても泣き虫なの。」

「泣き虫、か……」

「確かに、そうだったな。」

リヨウマとマークスは思い出したように、苦笑いする。

アクアは自分の掌を見て、

「泣き虫で、人一倍……想いに溢れた子なのよ。本当は、あんな風に演じること自体嫌だったはずよ。」

「アクア……」

「あまり、一人で抱え込むな。今回は、お前たちだけではない。私たちもいる。」

「ありがとう、リヨウマ、マークス。」

彼らはアジトへと戻る。

その日の夜、アクアはある事を決意した。

翌朝、彼女はフードを深くかぶって現れた。

カムイは昨日の事を想い出す。

だが、彼女は自分達を避けている。

でも、それではいけないと想っているカムイ。

そして一番の悩みは……

カムイはフードの彼女を見て、

「えつと……その、カムイさん。」

ギロリと彼女は睨みつける。

カムイは視線を外し、戸惑う。

「す、すみません……」

アクアがカムイの隣に立ち、

「ねえ……あなたは自分の事は好きなように呼べ、と言っていたわよね。」

「ああ。」

「なら、あなたの名前を今決めましょう。私が決めたわ。」

アクアがぐつと拳を胸の辺りでやりきった顔になっていた。
リヨウマとマークスは頷き、

「確かに、名前は必要だな。」

「ああ。呼ぶのに困るからな。」

カムイはパツと明るくなって、

「そうですよね!!それでアクアさん、どんな名前を？」

「イムカよ!」

「え？」

「だからイムカよ。反対から読んでカムイ。元はカムイでもあるし、でも彼女は嫌うし。けれど、彼女はある意味あなたとは真逆のようだし。」

「……なんか雑じゃありません？」

「そんなことはないわ。案外、こういうのは雑の方がいいのよ。」

アクアは視線を反らしてカムイに言う。

フードの彼女は長い沈黙の後、

「好きにしろ。」

そう言つて、今日も前線へと向かっていく。

今日も無事に敵とある程度戦闘し、アジトに帰って来た。

フードの彼女……いや、イムカがカムイ達を見て、

「さて、白夜と暗夜の第一王子。」

「なんだ？」

「お前たち二人を明日向こうへ行つたん戻す。そして残った者たちは待機だ。」

リヨウマとマークスはイムカを見て、

「何故、私とリヨウマ王子なのだ。」

「もしや……」

「その、もしやだ。そろそろあちら側で動きがあつてもいいはずだ。この透魔王国の方でも、敵の数が増えてきた。と言うことは、向こうは白夜王国へ進軍を始める準備が整いつつある。なら、こちらも動かなければならぬ。その為に、貴殿たちには向こう側に行ってもらおう。」

「なぜ二人だけなのだ。」

リヨウマの臣下であるサイゾウが、イムカを睨む。

その隣では、同じようにマークスの臣下であるラズワルドが、

「そうです。向こうで、何があるか解らない以上、護衛も必要はなはずだ。」

「……生憎、私の加護で行き来可能なのは二名だけだ。」

イムカはそっけなく言う。

だが、ジョーカーは思い出すように、

「ですが、初めてこの透魔王国に来たときは、私を含めたカムイ様にア
クア様、それにリリスも居た。そして、向こう側に戻る時も、そこに
ジジイ……ギンターも加わったしな。」

「カムイ達は別だ。お前達で、二人だ。」

「？カムイ様たちは別……それはどういう——」

「こいつらは、元々この加護を受けし者だ。だが、お前たちはあくま
で向こうの闇竜の加護の持ち主。そして、他の者たちもそうであり、
白夜王国の者は光竜の加護の持ち主。」

イムカはサツと説明をする。

カムイは首を傾げ、

「そう言えば、イムカさんは禁忌の国の者って言ってましたよね。で
も、あなたもカムイだったのなら、白夜王国の光竜、もしくは暗夜王
国の闇竜の加護を受けているのではありませんか？あ、でも……お
母様はこの国の出身、そして『最初のカムイ』も、この王であった。
それに、もう一人のあなたもここで暮らしていた。」

「……そうだ。だから私は、この国の加護を受けている。そして、もは
やこの身は人の身ではない。竜となった以上、自身にも加護はある
……といった感じか。」

カムイは、それでも少し考え込んでいた。

イムカはサツとカムイの横を通り過ぎ、

「明日の事は向こうに戻ってから教える。ではな。」

イムカは屋敷を出て行った。

そのまま森に入って行き、心臓を抑える。

肩が大きく上下し始め、

「ゴホッ！」

盛大に血を吐き出した。

木に寄りかかり、血を拭う。

「あと少し……あと少しだけ……あと少しだけでいいんだ。もつてくれよ……」

イムカは息を整え、ペンダントを握りしめる。

それを木の上でサイゾウが、木々の奥でラズワルドが見ていた。

そしてそつと離れるのだった。

カムイはアクアとお茶をしていた。

「随分と元気がないわね、カムイ。」

「アクアさん……」

「イムカのことなら、あまり気にはダメよ。」

「ですが……私はその、あの人にとってはきつと許せないのではないかと。」

「どうして？」

「本来なら、あの人がいるべき居場所に自分がいる。そして、私には残っていませんが……彼女のその……子供の魂だったのでしよう。」

「それでも、あなたはあなた。例え、今のカムイとあの子がカムイだった頃とは違っても、それはそれ。あなたは、あなただけのカムイなのだからあなたは、あなた自身で居て。それが、他でもない今ここにいる私たちが望んでいるの。だって、あなたも大切なカムイなのだから。」

「アクアさん……」

カムイは瞳を大きく揺らす。

自分は何ができるのか、自分は何をしたいのか。

それを考えて自分の考えをまとめたいが、思うように考えがまとまらないのだった。

次の日、イムカはリョウマとマークスを見る。

「いいか、向こうに戻ってもこの国の事は口にするなよ。言えば死ぬからな。」

「ああ、解っている。」

「無論、俺もだ。」

マークスとリヨウマが頷く。

イムカは二人の間に立つ。

と、カムイはイムカの腕を掴んだ。

「あ、あの！私は、あなたの望むカムイになれないかもしれませんが。ですが、私はきつと強くなってみせます。あなたを守れるくらい強くなってみせます。だからー」

カムイはぎゅつと彼女の腕を強く握り、

「絶対に帰って来てください。居なくならないでください。あなたは、私たちのことを仲間だと想ってなくても、私たちは仲間です。イムカさんと言う、私の大切な仲間なんです!!？」

力強い瞳で、見つめていた。

ー僕は、いつか絶対にお母さんみたいに強くなる。強くなって、お母さんを守って、お母さんの仲間になるんだ！だから、お母さん……僕の側にずっと居てね。

幼い子供の笑顔と力強い瞳を想い出す。

イムカは伸ばしそうなになった手を握り締め、

「仲間だと思うかどうかは勝手にしろ。だが、私は仲間になるつもりはない。お前の強さには……期待せずに待ってはやろう。」

カムイの手をほどき、

「私が戻るまで、ハイドラ様のごことは頼む。」

「はいー任せてくださいー」

カムイは笑顔で言う。

イムカの足元に魔法陣が浮かび、三人は水に包まれて消えた。
着いた場所は白夜王国の湖だった。

イムカはリヨウマを見て、

「玉座の事と、兵たちの事は、貴殿に任せる。私は暗夜の第一王子を送り、指示が終わったら、共にこちらに戻る。」

「分かった。だが、なぜこちらに来てから指示を？」

「向こうには敵の目と耳がある。貴殿らが、あの国の事をどれくらい覚えているかは知らん。だが、打てる手は全て使う。」

「……とりあえずはそういう事にしておこう。」

リヨウマはあまり意味は分かっていないが、苦笑しながら了承した。

「ああ、そうだ。白夜の第一王子、貴殿にも頼みたい事があった。」

「なんだ？」

「ああ、実は——」

イムカは二人にそっと伝える。

「ああ。任せておけ。」

「こちらも任せて貰おう。」

二人は頷く。

イムカはマークスの手を取って、

「では、また後でな。」

「リヨウマ王子、また後で。」

「ああ。」

二人は湖に入っていく。

湖から出ると、今度は暗夜側の方へと出た。

マークスは出てすぐに、部下たちに様子を聞き、今後の指示をする。

そして、この事を他の見方の兵達にも伝令を言付けした。

湖に入る前に、二人は迷いの森と言われる『死霊の沼』に来ていた。

この辺りに居るノスフェラトウをある程度削る為だ。

おそらく、白夜王国進軍の為にはノスフェラトウも使うだろうというイムカの意見を聞いたからだだった。

あらかたこの辺に居るノスフェラトウを殲滅させると、イムカが頭を抑える。

「どうした、イムカ。」

「……………」

「イムカ？」

「……ああ、すまない。何でもない。」

「本当か？」

「ああ。」

イムカは森を出ようとした時だった。

瞳を揺らし、呼吸が荒くなる。

膝を着き、口元を抑える。

マークスが駆け寄り、彼女の方に置いた時、

「……なんだ、これは……」

マークスの目には、凄まじいほどの量の霊達が群がっていた。

その霊達の瞳には怒り、悲しみ、憎悪が見てわかる。

霊達が口々にイムカを見て、

「裏切り者……」

「俺たちを殺した。」

「返して、私の大切な人を……」

「国を滅ぼした……」

「返して、愛しき人を……」

「裏切り者……国を裏切った裏切り者……」

彼らはイムカの方に手を伸ばす。

だが、それは何かに阻まれて触れる事ができない。

そしてマークスは気付いた。

彼らは透魔王国の人々。

それだけではなく、白夜王国の民、暗夜王国の民、シユヴァリエ公国の民、イズモ公国の民、獣人族と、様々な国、部族、公国の人間、獣人族たちの姿。

彼らはイムカが殺してきた、そのきっかけを作ってしまった者達。

その中には、自分も関わったことのある者たちも居た。

イムカはマークスの手を払い、

「変なものを見せたな。流石は死霊の沼だ。まさか、貴殿にも見えてしまうとはな。」

「イムカ……お前は……」

「貴殿が気にすることはない。彼らは私が連れて行く。」

イムカはドンドン歩いて行く。

マークスは眉を寄せて、彼女の歩く背を見る。

そして自分の掌を見ると、それを強く握りしめる。

何と、自分は弱いのか。

何もできない自分が齒がゆい。

彼女に彼らを背負わせたのは他でもない自分。

彼女を支えたい。

けれど、彼女はそれを望まない。

どうすることが正しいのか、自分にはわからない。

けれど、マークスだけが見た。

彼女を守るように立っていたアクアと同じ髪の少年を。

そう、前に一度イムカの暴走を止めたシグレと言うアクアの息子にしてイムカの兄の姿を。

ずっと、そうして守って来たのだろう。

おそらく彼女は彼を知らない。

気付いていないだろう。

そう思いながら、二人はリヨウマと合流し、透魔王国へと戻った。

イムカは戻ってそうそう席を外した。

マークスは沼で起きたとこをリヨウマとアクアに話していた。

二人も、同じ想いのようだった。

同じ想いを抱き、何もできない自分を悔しがっていた。

けれど、自分達は共有できる。

一人では見つからない事でも、三人いれば見つかるかもしれないとアクアが言う。

彼らは領き合い、明日に備えた。

——とある城の中、銀髪の少女が魔導書を持って長い廊下を歩いていた。

『さて、もうじき黒き王が白夜を攻める。あちらも何かしら手は出てくるとは思いますが……さてさて、あちら側は同のような結果に落ちるか。ですが、私の目的の為に何とかして、この戦争を早く終わらせなくては……』

彼女は歩く。

その先にある扉を目指して。

『そう、すべては私の目的の為……その為に、私は……ここに居るのだから。』

イムカはあのブランコの所に居た。

瞳を揺らし、星空に手を伸ばす。

『私は交わした約束を果たす。その為に、私はここに居る。……やり遂げてみせる……今度こそ……必ず。』

拳を空で握りしめる。

それはカムイもまた、同じ。

見上げる夜空を窓から見ていた。

『いよいよ戦争が本格的に始まる。頑張らないと！私は私としての選択と答えを。皆と共に!!』

カムイは強い瞳で夜空を見て瞳を揺らす。

それぞれの想いが駆け巡る。

そして今日、カムイ達はあの魔法陣の所に来ていた。

イムカはカムイ達を見て、

「では行くぞ。もう一度言う、向こうではこちらの話は絶対に言うなよ。ハイドラ様の事も呼ぶときは、名を出すなよ。そして、ハイドラ様は絶対に私達から離れないで。」

「ああ。解っているよ。」

小さく笑うハイドラの横で、リリスもグツと拳を握り、

「大丈夫です。お父様は、私が守ります。勿論、カムイ様もちゃんと守ります。」

「ありがとうございます、リリスさん。それに、私も守ります。」

カムイが力強く頷く。

アクアがカムイの側により、

「カムイ、そこは……私たち、でしょ。」

「はい。そうでした……みんなで、頑張りましょう。真の平和を取り戻すために!!」

カムイは腕を振り上げる。

そして皆も振り上げ、

「おおお——!!」

イムカはその姿をじつと見て、魔法陣の上に乗る。瞳を一度閉じ、開くと、

「では、行くぞ。ハイドラ様。」

「うん。」

魔法陣が光り出し、カムイ達は光に包まれる。

瞑っていた目を開くと、そこは無限溪谷だった。

「あ……戻ってきましたね。」

「ああ。では、策戦通りに頼むぞ。」

「任せてください！」

カムイ達は三手に分かれる。

リヨウマ率いる白夜王族は一足先に白夜王国に。

マークス率いる暗夜王族はこちらにやって来ている味方の兵達との合流に。

そしてカムイ率いる方はハイドラを守りながら、白夜王国に向かっていた。

「ですが、ここに来说言うのは何ですが……ガロン王は素直に玉座に座ると思いますか？」

「それも、そうですね。いくら、白夜王国に進軍するのはわかっているとはいえ、攻め入れたその日に玉座が広間にあるのは疑われますね。」

ジョーカーが顎に手を当てて、考え込む。

ギンターも横で、

「そうですね……ですが、あなた様の事です。何か既に手を打っているのでは？」

と、イムカを見る。

イムカはハイドラの横で、

「ああ。白夜と暗夜の第一王子達に頼んで、ある噂を広めて貰っている。」

「噂ですか？どんな噂を？」

「白夜王国は第一王子リヨウマを、暗夜王国進軍前に王位に付かせる。そして暗夜王国の第一王子マークス達王子と姫、反乱軍と共に暗夜王ガロンを討つつもりだと。つまりは、王位略奪。その白夜王国第一王

子の王位継承は明日。そしてそれに合わせて、近くの公国、部族の長たちが来賓としてやって来る。」

「それで……」

「その情報は、嫌応でもヤツの耳に入る。それに、やつからしてみれば白夜王国を手に入れ、他の公国、部族の長たちにその力を示せる。晴れて奴は世界の王となれると言うワケだ。」

イムカは淡々と説明する。

アクアが心配そうに、

「けれど、そんな噂に流されるような軍師だとは思えないわ。」

「その辺は大丈夫だ。あちらの軍師の耳には届かない。前に、王子達を連れて戻った時、敵の動きはあまり動きはなかったからな。だとすれば、随分前に指示してある策戦に基づいて動いていると考えた方がいい。そして我々あは、軍師の耳に入る前に事を済ませる。そして、奴の指示のないあの傀儡は絶対にこの機に乗じて攻めてくる。そういうヤツだ。」

「そう……なら、あなたを信じるわ。」

「別に、信じろとは言っていない。私自身も、全ての策戦が成功するとは思っていない。『アベル』という厄介な奴も居るからな。奴はおそらく、白夜の玉座の力を知っている。だが、必然を知るあいつはそれを止める事はないだろうが、必ず乱入してくる。本来いるべきはずのない、私と言う存在を消す為に。そして必然を作る為に。」

「そう、ね……」

そして、先を進む彼らの前に、白夜王国の王城が見えてきた。

カムイは王城を見上げ、

「戻ってきました。」

「そうね。」

アクアがその横に寄り添う。

城の中から、リヨウマがやって来る。

そして後ろからは、兵を連れたマークス達が合流する。

カムイは辺りを見て、

「揃いましたね。」

「ああ。今日は、明日の戦闘に備えて休んでくれ。城の中は自由にしてくれて構わない。」

「感謝する、リヨウマ王子。」

マークスは馬から降り、リヨウマを見る。

マークスは、レオンに部下たちの指揮を任せる。

白夜の兵達に馬小屋などの手配を頼み、指揮を取る。

マークスとリヨウマが揃うと、今後の話を進めていく。

それらが終わり、メインメンバーが宴会場に揃う。

その間、イムカはハイドラに尽きそい、控えていた。

「イムカ、頼まれていたものだ。」

「礼を言う、白夜の第一王子。」

リヨウマが、仮面を持ってイムカに近付く。

それを受け取ったイムカは着ける。

そしてマークスを見て、

「暗夜の第一王子、貴殿に言っておく。暗夜王ガロンが、この城に攻めて着た時のことだ。貴殿らはあくまで父王だと思つて接しろ。」

「なぜだ？」

「暗夜王ガロンを、父王だと思つて奴を王だと認識させる。玉座に座るその時まで。座った後は、奴の本性がその身を通して現れる。そこからは何のためらいもなく、あの傀儡を討てる。それに、その方がまだ敵になっている兵達にも解りがいいからな。」

「それもそうだな。」

「貴殿には辛いだろがな。」

「いや、これからの事を言えば……私も打てる手は打っておきたい。」

と、そこにカムイがイムカを見て、

「そう言えば、何故今更イムカさんは仮面を？」

「……お前たちはともかく、こちら側の者たちは私の存在を知らないからな。それに、こちらの方が色々と楽なんだよ。何より……カムイと同じ顔の奴がいたら、混乱するだろう。」

「それは……確かにそうですね。」

カムイは「ムムム」と、考え込んでいた。

イムカはそのままカムイを見たまま、

「そうだ、お前にも言っておくことがある。」

「なんですか？」

「お前と私は暗夜王ガロンが攻めて時、私と入れ替わってもらおう。」

「え？」

「その方が指示を出しやすいからだ。それに、こちら側に戻って来たのだ。お前の体は貧弱に戻る。それとリリス。」

イムカはリリスの方に視線を向ける。

リリスはビシツと姿勢を直し、

「はい。」

「お前も、竜の姿に戻ってカムイとなっている私の側に居ろ。その方が、カムイだと思われやすい。向こうに戻ったら、また人型に戻ってくれても構わない。」

「わ、解りました。」

リリスは竜石を取り出し、竜の姿へと変わる。

彼女は再び小竜の姿となって宙に浮く。

その後、イムカはその後の指示をある程度話して、解散した。

イムカはそつとリリスに指で合図を送って呼び止める。

「何ですか、イムカ様。」

「いいか、今からいう事をカムイに伝えろ。」

イムカは小声で伝える。

リリスはイムカを見上げ、

「イムカ様……それって……」

「頼んだぞ。」

「わかりました。任せてください。」

リリスはカムイの元へと飛んでいく。

そのイムカはハイドラの部屋の前で待機をしていた。

そこにリヨウマがやって来る。

「寒くはないか？」

「問題はない。」

「……………」

「言っておくが、あの方は中に入るといい、と言ったが……私が断つた。」

「なぜだ？」

「私はあくまで、あの方の護衛としてこの城に居る。出なければ、この城には足を踏み入れることは許されない。」

リヨウマは腰を下ろし、

「なぜだ。ここはお前のもうひとつの故郷なのだろう。」

「……それは遠い昔の話だ。私にはもう、故郷すらもない。あるのはただ、禁忌の国の者だと言うことだけ。」

「あまり、無理はするなよ。」

「……それは、貴殿たちの働きによるな。」

「かもしれんな。」

リヨウマは立ち上がる。

そして歩いて行った。

と、襖が開かれる。

「何です。」

それはハイドラだった。

ハイドラは先程リヨウマが座っていた場所に座る。

彼女を見て、

「いや、リヨウマ王子は優しいな、と思ってね。」

「それはそうですね……血の繋がりのない他人を受け、兄妹きょうだいとして接してくれた。居場所をくれた方ですから。それこそ、暗夜の第一

王子とは違った意味で。」

「そうだったね。君にも、随分と辛い思いをさせてしまった。」

「……そうでもないですよ。私はそれでも……楽しかった事もありましたから。」

仮面に触れながら言うイムカ。

ハイドラは彼女の肩を掴み、抱きしめた。

「……どうしたんです？」

「いや……そうだな……今の君を娘だと思わせてくれ。でないと君は、嫌がってしまうだろう？」

「……全く。今日だけですよ。」

イムカも、彼を抱きしめた。

それをリリスと共に物陰で見っていたカムイ。

リリスは嬉しそうにそれを見ていた。

だが、カムイは眉を寄せて、

『……なんでしょうか……この複雑勘は……』

そこに、マークスが歩いて来た。

「ん？カムイか。どうかしたのか？」

「マークス兄さん☒い、いえ、何でもないです。」

カムイは宙に浮いていたリリスを抱え、

「お、お休みなさい!!」

と、駆け出していった。

マークスは？マークが浮かぶ。

そこに、物陰からイムカが現れる。

「そこで何をしている、暗夜の第一王子。」

「ん、イムカ？」

「……カムイが何かをしていたのか？」

「い、いや……駆けて行っただけだ。」

「そうか……なら、貴殿ももう休め。明日は忙しくなる。」

「あ、ああ……」

よくわからないまま、マークスは部屋に戻る。

『さて、あれはいつ気づくか……』

イムカは舞い散る桜を眺め、

「……全く、緊張感がないな。いや……それは私も、か。」

イムカはハイドラの部屋の前に座って、舞い散る桜を眺める。

その場所はかつて白夜の兄弟姉妹きょうだいと共に遊んだ庭だった。

翌朝、カムイの部屋の前。

イムカとカムイが互いの服を変えて出て来た。

夜刀神に関しては、イムカの幻影魔法で誤魔化している。

「さて、イムカ。こちらの準備も整った。それでは行くかうか。」

「……ああ、白夜の第一王子。」

「……………大丈夫か？」

「問題ない。」

リヨウマはカムイをじっと見て、少し考えた後歩き出した。

カムイの姿をしたカムイは彼女を見て、

「ちゃんと、私の口調で居て下さいね。」

「……………分かっている。行くぞ、リリス。」

「はい、カムイ様。では、カムイ様、お父様、お気を付けて。」

カムイの姿をしたカムイは無表情でリリスを連れてリヨウマと共に歩いて行く。

カムイの姿をしたカムイはハイドラを見上げ、

「では、私たちも行きましょうか。」

「ああ……………」

「あ！彼女に比べれば、頼りないかもしれませんが……………ちゃんとお守りしますから。」

「大丈夫、どちらも信用しているからね。」

そして二人も移動を始めた。

——広場には、多くの民達が居た。

カムイもすぐ近くの民家の物陰に隠れていた。

リヨウマが設置した玉座の方へと上がっていく。

白夜軍師ユキムラが民衆を見て、

「では、これより……………前白夜王国女王ミコト様の後を継ぎ、白夜王国第一王子リヨウマ様が、新たなる白夜王としてこの国を治められることとなります。即位の証として、冠を——」

と、行った時だった。

街の入り口の方から爆発音が聞こえてきた。

そしてすぐに暗夜軍が攻めてきた。

リヨウマは刀を抜き、

「ユキムラ！」

「はい！式は一時中断とします！」

白夜軍師ユキムラは、兵達に手で合図を送る。

リヨウマは飛び降りる。

そして、マークスの隣に立つ。

「マークス王子。」

「リヨウマ王子、すまない……どうやら、父上にこの式典の事が漏れていたようだ。」

マークスも剣を抜いて、構える。

そこには、暗夜王ガロンが馬に乗って現れる。

「マークスカ……」

「父上！どうしてこのようなことを！いえ……あなたは間違っておられます!!」

「ぬかせ……この裏切り者が。暗夜王国を裏切った罪、その命を持って償うがよい。」

「父上！何故わからないのです!!」

「全軍、白夜の民と裏切り者を皆殺しにし、リヨウマ王子の首と裏切り者マークスの首を取れ。」

暗夜王ガロンがそう命じると、兵達は動き出す。

そこにカムイイムカも合流する。

「兄さん！」

「ほう、カムイまでも居たか……」

「お父様……もう、話し合うことはできないのですね。」

「裏切り者の言葉などに意味はない。マークス達は騙せても、わたしは騙されんぞ。」

カムイは夜刀神を構える。

暗夜軍は闘う術のない民達を最初に狙った。

だが、彼らにノイズがかかり、白夜兵と暗夜兵へと変わる。

もちろん、風の部族や炎の部族、氷の部族達の姿もある。

暗夜王ガロンは眉を寄せ、

「なに？」

「わからないか……いや、忘れていないか、私の存在を。」
カムイカイムカが現れ、暗夜王ガロンを背後から斬ろうとする。

だが、素早く馬を引き、それを交わされる。

「なるほど……お前も来ていたか。」

「来ていないとでも思ったか？お前を殺せるチャンスは逃さないさ。」
「ぬかせ……」

暗夜王ガロンは馬に乗ったまま、カムイ斧イムカを振るう。
それを避け、受け流しながら暗夜王ガロンと対戦する。

「父上、こうなつてしまつた以上、私はあなたに剣を向けます。」

「我が、白夜王国はお前には渡さぬ!!」

「お父様……今のあなたは王ではありません!」

カムイ達もそれに加わつた。

そして戦闘は、本格的に開始された。

基本的には、暗夜王ガロンの相手はリヨウマ、マークス、カムイ、
カムイが相手をしていた。

残りの部隊は見えない敵透魔兵を相手に闘つていた。

カムイは、後ろの方でラズワールド、ルーナ、オーデインに護られてい
るハイドラを見る。

そこに、黒騎士が剣を向けて振り下ろすのが見えた。

カムイは駆けて行き、

「くっ!」

黒騎士の剣を受け止める。

が、弾き飛ばされた。

すぐに、ラズワールド達がハイドラを囲つて守る。

「おやおや、随分と弱くなつていますね。この間の件で、力が衰えまし
たか？それとも……」

黒騎士アベルは目を細めて、

「私の知る、彼女ではないか……ですね。」

「それはどういう意味だ。」

「そのままの意味です。おや、あちらの方も押されていますね。」

黒騎士アベルは暗夜王ガロンと戦う彼らを見る。

カムイも、そこを見る。

暗夜王ガロンがマークス、リヨウマ、カムイを蹴散らした姿。

そして馬から降り、カムイを掴み上げ、玉座のある段を上がつてい
く。

「くっ！」

「ふはははは！丁度いい、お前を見世物に殺してやろう、カムイ!!」
カムイの首元に斧の刃が付き付けられる。

リヨウマとマークスが眉を寄せ、

「カムイ!!」

カムイも、そこを見て叫ぶ。

「イムカさん!!」

黒騎士アベルは少しだけ笑みを浮かべた。

それはイムカが、今暗夜王ガロンが掴み上げているのが、カムイではないと言ったからだ。

暗夜王ガロンも動きが止まり、

「イムカ、だど？」

「しまった!!」

カムイは口元を抑える。

暗夜王ガロンは目を細めて、

「そうか……お前たち……わしを謀ったな。」

「馬鹿者が！」

カムイは眉を寄せる。

暗夜王ガロンは目を細めて、

「まあ、よい。このまま貴様の命を貰う。よいな、アベル。」

「ええ、構いませんよ。だって、それはカムイですから。」

黒騎士アベルは深い笑みを浮かべる。

カムイはハツとして、

「リリス!!」

「はいー！」

リリスは暗夜王ガロンに思いつきり体当たりした。

彼からカムイがこぼれ落ち、落下した彼女をリヨウマが受け止める。
る。

そして、暗夜王ガロンはよろけたまま玉座に近付くが、座るまでにはいかなかった。

だがそこに、魔術が放たれる。

彼はそれによつて、玉座に座る事となる。

「申し訳ありません、父上……いや、父上の皮を被った偽物め。」

それはレオンだった。

マークスはそれを見て、

「よし……これで、何とかなるはずだ!!」

暗夜王ガロンは苦しみ出す。

その姿は人の形から異形の者へと変わっていく。

その姿を見た兵達は、武器を落とす。

それは真実を知らない暗夜の兵も、白夜の兵もすべてだ。

「おのれえ……おのれえええ!!!!」

暗夜王ガロンはマークス達の前に飛び降り、暴れ出す。

カムイも立ち上がり、武器を取る。

カムイは黒騎士アベルと戦闘を行っていた。

こちらが不利なのは、最初から解っていた。

なぜなら彼は……イムカの剣の師でもあるのだから。

カムイは思いつきり、暗夜王ガロンと戦う彼らの前に吹き飛ばされた。

そして膝を着き、

「ぐっ!!」

カムイに暗夜王ガロンの振り下ろされる腕を、マークスが弾く。

「大丈夫か、イムカ!」

「……ああ。」

立ち上がり、剣を構える。

だが、ふら付いていた。

それを見たハイドラが駆けだした。

「あーちよつと!!」「え!?」「待って下さい!!」

それを追いかけてしようとしたラズワルド達だったが、透魔兵によつて阻まれる。

カムイは心臓を抑えて、血を吐き出した。

「ゴホッ!!」

「イムカ!?」「イムカさん!?!」

マークスとカムイイムカが叫ぶ。

『……くそ、こんな時にーいや、それよりも……』

そう、カムイの姿をしたイムカであるはずの彼女が、イムカの姿をしたはずのカムイの事を『イムカ』と呼んだのだ。

マークスはカムイを見る。

「まさか……」

「あ……」

カムイはハツとして、口元を抑える。

リヨウマは眉を寄せ、

「やはりそうだったか!」

そしてハイドラは、イムカに駆け寄った。

それで解る。

かれもまた、入れ替わっていないなかったことに気付いていたと。

イムカは膝を着き、さらに血を吐き出した。

「ゴホっ!!」

「イムカ!」

ハイドラは彼女を包み、黒騎士アベルから守ろうとする。

リヨウマ達は思い出す。

あの日、サイゾウとラズワールドから聞いた話を。

——イムカの血の吐いた光景を見た二人はその後、リヨウマとマークス、アクア、ハイドラにこのことを伝えていた。

二人が退席した後、ハイドラが教えてくれた。

「彼女はおそらく、禁忌の術を使い過ぎたんだろう。本来、過去や未来を行き来することは禁忌とされている。特に、過去に関しては歴史そのものに関わりを持つことが多い。その為、通行料となる対価も大きい。」

「では、俺たちもそれに近いと言うことですか?」

リヨウマがハイドラを見る。

だが、リヨウマの問いに答えたのはアクアだった。

「いいえ、あなた達のとイムカのは少し違うわ。私もそうなのだけれど、リヨウマやマークスのは夢だったでしょう。私もそうなの。最

初のアクアの想いが強すぎて、夢となって彼女の記憶を視た。だから、ここでのアクアとしての想いもあるの。多分、リヨウマとマークスもそうでしょ。」

「ああ。」

「でも、イムカは違うわ。おそらく、己自身が今のカムイの存在を消すことで過去を渡っていた。」

「今のカムイを消す？」

「そう……最初のアクアは、ハイドラ様の力を借りて、私の父達を対価にして己自身を過去に飛ばした。いわゆる魂そのモノを。けど、それを行うと、それまで生きていたそのアクアの存在を消して、自分が入る事になるの。だから、ズレが生じる。でも、今の私と違って、想いや記憶そのものは自分だから目的意識を高く持てるのは確かね。私からしてみれば、あくまでそれは私じゃないと思えるの。けれど、自分自信がそのままいけばそうではないわ。だからあの子はいつだって本気だった。勿論、私も手を抜いたつもりはないわ。けれど、自分の命が惜しいと思ってしまうことは多々ある。」

「それは当然だろう。誰もが思うはずだ。」

リヨウマは視線を落とすアクアの肩に手を乗せる。

マークスは眉を寄せ、

「もしや、私の中にあるあのカムイを知るマークスの記憶が正しければ、対価とは……」

「ああ、その通りだ。対価はその者自身の記憶、感情、時に寿命を吸い取る。己自身でなくとも、他者の命でもそれは行われる。だから、禁術なんだ。」

ハイドラの口調は重い。

アクアもまた重い口調で、

「今の彼女の状況を見れば、おそらくかなり寿命を削っているはずよ。それに、今回は体ごとの転移だから……人としての存在を捨てた。それだけではなく、竜としての寿命もかなり使っているはずよ。そう考えれば、イムカのあれほどの暴走も考えられる。いいえ、違うわね。たとえそれがあつたとしても、あの子には多くの呪いが積み重なって

いる。もう、暴走ギリギリ状態を何とか踏みとどまっている。」

「つまり、イムカの命はまるでロウソクのようにだ、と言うことだな。」
「ええ。そして、その影響が今のカムイにもリンクしている。だからカムイは病弱なのよ。でも、龍脈の強いこの地なら、消えかかっているイムカよりも、あの子の方が強い。だからこちらではその影響が出ないのだと思うわ。」

リヨウマはアクアの肩から手を放し、己の掌を見る。

「アイツを何度か抱えたが、とても軽かったんだ……まるで、人とは思えない。それに、アイツは俺が子供だった頃と容姿が変わっていない。」

「……私を知る限り、イムカがここに転移したのが、透魔王国のあの日ならば……あの子自身はあの姿のはずがないの。けれど、あの子はあの姿でここに居る。考えられるとすれば、生きた時間すらも対価にした事。そして、夜刀神の力かもしれないわ。」

「夜刀神の？」

「ええ。ずっと疑問だったの。わざわざ己自身を転移してきたあの子が、賢者様の言っていた『炎の紋章』を完成させ、心を繋げた『フアイアーエンブレム』を創り上げた夜刀神を持たずにここに来ている事が……それにね、いくら己の存在すらも対価にしたとは言え、同じ存在が二つある。これは大きなずれを起こすわ。世界の崩壊すらも起こりうる。けれど、それは起きていない。だとすれば、夜刀神があの子の存在を保っているとしたか思えないの。あの刀は『想いを継ぐ神刀』……もしも、あの子の想いを受けた夜刀神がイムカのもつあの長剣なら……いいえ、あの子の中にあるのなら、カムイの持つ夜刀神に共鳴してもおかしくないと思うの。」

「……つまり、イムカは夜刀神を持ってここに来ていると。なら、何故使わないと思う。」

「イムカの目的はおそらく、透魔王国、白夜王国、暗夜王国に平和をもたらし、世界崩壊を防ぐこと。その為には、透魔王ハイドラを倒さねばならない。けど、それだけは世界崩壊は防げないわ。その奥の闇に居る『カムイ』を討たない限り。もしも、イムカ自信に残された力が

少ないのなら、透魔王ハイドラはカムイ達に討って貰った方がいいと考えるはず。でも……」

「アクアは、それだけではないと考えるのだな。」

「ええ。」

「なら、今は彼女を信じて待とう。きっと、真実を教えてくれるはずだ。」

「そうね……」

——そうして、リヨウマ達はイムカの体の心配を優先したのだ。

黒騎士アベルの剣をリヨウマが受け止め、

「ぐっ！重い!!」

「あの方はともかく、まさか白夜王……いえ、リヨウマ王子も彼らが入れ替わっていない事に気付いていたとは。」

そこにイムカの剣が振るわれる。

黒騎士アベルは後ろに後退し、剣を構える。

「いつから気付いていた、アベル。」

「最初から。」

笑顔で言う彼を、イムカは殺気めいたオーラで睨んでいた。

黒騎士アベルはやれやれと言う顔で、

「仕草ですよ。いくらあなた達が互いのマネは出来ても、仕草まではマネできなかつたようだ。」

「……お前が言うのと、洒落にならんな。」

「ふふふ、そうですね。できれば、あなたのカムイ希望を壊したかったですね。」

二人は同時に地を蹴った。

金属音が鳴り響く。

「貴殿たちは暗夜王ガロンを討て！こっちは私が時間を稼ぐ！」
「わかった。」

リヨウマは暗夜王ガロンと対峙しているカムイとマークスの方へと駆けて行く。

——マークスとカムイは肩で息をしていた。

そこにリヨウマも加わり、だいぶ楽になった。

「おのれえ……おのれえええ！お前達を殺し、わしは世界の王となる……なるのだああ!!」

「させぬ……この白夜王国は俺が護る！」

「ああ、そうだな。私も同じだ。お前のような者に、暗夜王国の王にはさせん！ましてや、世界の王などと……ふざけるのも大概にするがい!!」

「私たちが、あなたを止めます!!」

カムイとリヨウマが、マークスが攻め込む道を作る。

暗夜王ガロンの伸ばす手を弾き、抑え込む。

がら空きになった懐に、マークスが一気に攻め込んで行く。

「覚悟しろ……これが、私たちの覚悟だ!!」

マークスが剣を振り上げた。

暗夜王ガロンの肩から斬り上げる。

「ぐおおお……!!お……のれえ……ええ！」

ふらつきながら、暗夜王ガロンは後退する。

青い炎に包まれる。

それを見た黒騎士アベルは、

「……残念だ。黒き王はここまでか……でも、黒き王は死ぬ運命。ま、これも必然と言うことで。」

彼はイムカから距離を開けると、剣をしまう。

「さて、これ以上兵を減らすと我らが軍師、ルフレ卿に怒られてしまいます。我らは、ここで撤退とさせて貰いましょう。では、皆さん……再びあちらでお会いできるのを、楽しみにお待ちしております。」

黒騎士アベルは頭を一度下げて、黒い炎に包まれて消える。

それと同時に、透魔兵達も黒い炎に包まれて消えた。

マークスとリヨウマが戦いの終了を告げる。

兵達は武器を降ろして、歓喜の音が響き渡る。

イムカも剣をしまい、青い炎に包まれている暗夜王ガロンの元へと歩いて行く。

暗夜王ガロンは人の姿へと戻り、燃えていた。

「……ああ、長い悪夢が終わった……我が子たちの成長も見れた。これほど喜ばしいことはない。」

「……！まだ、意識が残っていたのか。」

イムカが膝を着いて、彼を見る。

マークス達も、それには驚いていた。

辺りに、彼ら以外の兵がいない事を確認し、イムカはフードと仮面を取る。

「竜の子よ、そなたは変わらぬな……そなたのあの瞳を見た時から、わしはお前の中の瞳に宿る希望を、わしは暗闇の中より見ていた。もつと早く……そなたのその瞳を見ることが出来れば、わしも変われただろうか。いや、変わらぬな、幾度となく闇に堕ち、子供らを、兵たちを、民たちを、国を貶めたわしにはもう……王たる資格はない。」

「父上……」

マークスが膝を着いて燃える彼の手を取る。

暗夜王ガロンはマークスに視線を向け、

「マークスよ、お前が暗夜王国を導け。兄弟姉妹きょうだいと共に、わしの成し遂げられなかった平和を掴むのだぞ。お前なら、白夜王国と手を取り合えるはずだ。若き頃のわしとスメラギのようにな……」

「はい、父上……!!」

マークスは涙を流して、強くその手を握りしめる。

エリーゼが泣きながら父に縋る。

そのエリーゼの頭を暗夜王ガロンは優しくなでる。

カミラもエリーゼの横に立ち、その手を優しく包む。

マークスの隣にレオンが膝を着き、ジツと見つめていた。

「……確かに、闇に堕ちたあなたには、王としての資格はなかっただろう。だが、あなたの王としての姿を覚えている者がいる。あなたに憧れ、剣を磨き、王族としての責務を全うする者がいた。あなたは残しているのですよ。迷わず立ち向かう覚悟と優しさを、慈しむ深い愛情を、強い正義の心を、諦めない強い想いと暗闇を照らす光を……あなたは、あなたの大切な子らに受け継がれている。」

「前にも、同じようなことを言っておったな。」

「ええ、あの時と変わらぬと……私は思っているからです。何より、あの玉座の事を知っていて策に乗ってくれただけです。感謝します、優しき王よ。」

イムカは立ち上がり、仮面とフードを付けて歩いて行く。

カムイとアクアが暗夜王ガロンを見ているのに気付いた暗夜王ガロンは、

「カムイに……アクアか。」

「はい。」「ええ。」

「カムイには辛い思いをさせたな。わしを恨んでおろう、すまぬ。」

「い、いえ……私はそれでも、楽しい事もたくさんありました。だから、私はあなたを恨んではいません。」

「そうか……」

暗夜王ガロンは優しい笑顔を作る。

アクアはそれを見て、

「母が、あなたを巻き込んでしまった。けれど、あの時あなたの差し伸べてくれた手がなければ、私たちはあの時死んでいた。その事に関しては感謝しているわ。でも……母の託した思いをあなたは受け止められなかった。その事だけは哀しい。でも、その思いは今……あなたの子供達が受け継いでいる。だから……ありがとう。」

「……ああ、すまぬな。わしは弱い。とても弱かった。けれど、大丈夫だ。あの人の思いをきくと、我が子達がそなたらと叶えてくれる。わしも感謝する。闇に飲まれたこの体と心だが……我が子らに見送られて逝く事ができる……」

暗夜王ガロンは完全に燃えて消えた。

マークスは握っていた父の手の温もりを思い出す。

「父上、私も感謝します。再び、あの頃の父上に会えたことを。どうか見守っていてください。必ず、私たちは成し遂げます。」

彼らは強く誓い合う。

マークス達は兵達を暗夜王国へと返した。

悪行三昧をしていた暗夜軍師マクベスやガンズ率いる暗夜王ガロン直属の兵は皆死んだ。

これで、国はある程度安泰するはずだ。

国の事を彼らに任せ、すぐになすべき事をしたら戻ると。

兵達は笑顔で「任せてください」と言っつて、国に帰っていった。
その日の夜。

イムカは桜の木の下でもたれていた。

舞い散る桜を見上げ、ペンダントを握りしめる。

『これで、こちらの事は済んだ……後は、向こうだけだ……』

そのまま、肩で息をして倒れ込む。

それをハイドラとリリスが見つけて、白夜王城へと急いで戻った。

——透魔王国のある部屋にて

『……黒き王が死んだ。いえ、元々死人でしたね。ですが、これでハイドラ様の残る駒は一つ減った。あのような見え透いた嘘も見抜けな
いと、黒き王も落ちる所まで墮ちたものだ。けれど、彼らはそのお
かげであの黒き王に勝てた、とも言えますね。』

銀髪の少女は魔導書を閉じ、立ち上がる。

後ろを振り向き、

「何の用ですか、白き巫女殿。」

「ルフレ卿、もうお休みになられてはとうですか。随分と長い事、ここ
におられるようですし。」

「ご心配には及びません。やりたいことは済ませました。」

透魔軍師ルフレは白き巫女の横を通り過ぎる。

扉に手を掛けると、

「前々から思っていました……白き巫女殿。あなたは、私に誰かを
重ねていませんか。ハッキリ言っつて迷惑ですので、私情を挟まないで
頂きたい。」

「ごめんなさい。あなたを不快にさせたのなら、謝るわ。でも、根を詰
めすぎるのは良くないと思っつて……」

「……子ども扱いも止めて頂きたい。」

「ごめんなさい……」

「まあ、いいでしょう。」

透魔軍師ルフレは扉を開け、

「……いえ、あなたに一つやつてもらいまししょうか。あなたの愛しき人に会わせて差し上げます、白き巫女殿。」

扉を閉めて、彼女は白き巫女に近付く。

そして小言である事を伝えると、扉を開けて出て行った。

白き巫女は口元を抑え、

「ああ……ごめんなさい、ごめんなさい……」

涙を流すのだった。

部屋から出た透魔軍師ルフレは部屋に戻った。

そして立ち眩みを起こす。

『……そろそろ限界が近いか……ことを早く進めなくては……』

ベッドの上に横になり、彼女はうつ伏せになって眠りについた。

リヨウマとマークスはハイドラの部屋に飛び込んだ。

「イムカが倒れたと聞いたが、大丈夫なのか!？」

アクアがクルツと回って、二人を見る。

二人とも息を切らしていた。

「……ええ、大分落ち着いたわ。だから安心して。それと、カムイの方も大丈夫よ。今はサクラとエリーゼと一緒にぐっすり眠っているわ。」

そう言うと、イムカが眠っている姿を見ると、二人は座る。

マークスが眉を寄せ、

「アクア、前々から考えていたのだが……イムカを前線から抜いてはどうだ?」

「……無理よ。きつと、この子は何があっても前線に出るわ。」

「そうなのだが……いや、すまない。アクアはきつと、ずっとそう思っていただろう。」

「分かっていても、どうしようもできない事の方が多いわ。」

彼らの気持ちは暗かった。

そこにフローラが入って来た。

「失礼します、氷水を用意しました。」

「ありがとう、フローラ。」

「いえ……」

そう言つて、アクアの横にそれを置く。

そして、眠っているイムカの顔をじつと見ていた。

アクアはフローラを見て、

「どうかしたの？」

「いえ……本当に、カムイ様なのだと思っただけです。こうして改め
て見ていると、寝ているカムイ様そっくりなので……」

「そうね……昔と変わらない寝顔。とても懐かしいわ。」

「アクア様は、こちらのカムイ様……いえ、イムカ様のことをご存知な
のですよね。」

「ええ。」

「なら、ご存知ありませんか……その、以前私に、イムカ様が仰つたん
です。踏み外しそうになった時は、カムイを叱ってくれ、そうすれば
思い出せる、と……」

「……ごめんなさい。私にはよくわからないわ。」

「そう、ですか……」

「でも、以前彼女が言っていたわ。自分は兄弟姉妹、きょうだい臣下、仲間
に恵まれていた、と。自分のせいで死なせてしまった大切な者たちも居た。
けれど、迷つて踏み外しそうになった自分を引き戻してくれた者たち
がいる。自分の背中を押してくれた者たちが居る、と。」

「……きつと、イムカ様は数えきれないほどの経験をしていたので
しようね。そして、きつと……ご自分も、カムイ様の仲間として闘
たかったのでしょうか。」

フローラがそう言つと、アクアは少し驚いた顔になり、

「どうして、そう思うの？」

「これは私の勘ですが、イムカ様はたちの事は仲間とは思っていない、
と言つております。けれど、いつだつてこの方は私たちを助けて下さ
る。私がカムイ様を裏切った時も、そうでしたから。」

「……そう。なら、きつとそうだと思うわ。私も、そう思っているか
ら。」

二人は微笑み合う。

フローラは立ち上がり、

「では、私はこれで失礼します。何かありましたら、お呼び下さい。」
「ありがとう、フローラ。」

フローラは部屋を出て行った。

リヨウマとマークスは互いに見合い、

「そう言えば、リヨウマ王子はカムイ達が入れ替わっていない事に気付いていたのだったな。」

「ああ。こっちのイムカを貴殿よりかは知っているつもりだ。あの騎士の言う仕草はよく解らなかったが、俺の知っているイムカのカムイとは少し違ったからな。」

「そうか……」

「だが、そのイムカがカムイだった頃の記憶がなければ気づかなかつただろう。最初の頃のアイツは他人行儀だった。俺の事も、『リヨウマ王子』と呼んでいたからな。だから、アイツが俺たちの事を兄弟姉妹だと言ってくれた時は嬉しかったものだ。いつも子供とは思えない静けさを纏い、どこか遠くを見るアイツの姿は今でも思い出せる。いや、残っている。俺たちの輪の中に加わり、本当に子供のようにはしやぐアイツの姿を、今でも忘れられない。きっと、この記憶の所有者だったリヨウマ^俺が抱いた最初で最後の大切な記憶だ。」

「ああ、きつとそうだろう。私の中にも近いモノがある。城に幽閉されていたあのカムイ^{イムカ}の瞳は、今の私の中にある。私は幾度となく、あの子を兄妹と呼び、接しても、どこか遠いあの子は我々の名すら呼んではくれなかった。けれど、あの子は私たちの名を呼び、本当の兄弟姉妹^{きょうだい}のように接してくれるようになった時は本当に嬉しかった。」

二人は小さく微笑み合う。

アクアが二人を見て、

「そう、あなた達の時もそうだったのね。」

「と言うと、アクアもか。」

「ええ。私の時は、あの子は声を失ったわ。きつと、ショックだったのでしょうね。自分が、『カムイ』になっていたことが……けれど、あの

子はそれを受け入れ、力を求めていたわ。私の母からは魔導を教わり、ミコト様からは弓を教わり……アベルからは剣を教わっていた。あの子は日々、自分を殺すように必死になって腕を磨いていたわ。私はそんな彼女の姿が辛かった。姉と呼んでくれる、それは嬉しかった。でも、あの子の瞳に私はもう母としては映らないと解ると、母として何もしてあげられない自分が悔しかった。共に横で戦う為に、私も武器の腕を、歌を磨いた。けれど、いつだってあの子は……一番選択を強いられた。何度あの子の涙を、あの子の苦しみを見たか……なのに、私はやめる選択肢をあげる事ができなかった。あの子の想いに寄り添うと言いながら、結局私は私の為の目的に、あの子を利用してしまった。」

アクアは顔を覆って泣く。

ハイドラがアクアの肩に手をやり、

「すまない、アクア。全て、私の至らないせいだ。本当にすまない。」
「いいえ、いいえ、違うの……私が最初のカムイを救ってあげられなかったから……だから……」

首を振ってアクアは泣き続けた。

「それを言うのなら、私もそうです……」

アクアの横から少し弱い声がする。

アクアがそこを見ると、イムカが目を覚ましていた。

いや、まるで独り言を話すように呟いている。

「……私は父を救いたかった。けれど、結果は兄を死なせ、母だったあなたがカムイを討った。白夜と暗夜に手を借りたから、両国にも被害が及んだ。私が巻き込んだ、災厄を持ちこんでしまった……多くの人を犠牲にした。変わる事のない未来……けれど、私は約束の為に絶対にその未来を変える。」

イムカは手を伸ばす。

その瞳が少し揺れ、

「私はただ——」

伸ばした手が落ちる。

アクアは慌てて、イムカを見る。

「イムカ!？」

彼女は小さく寝息を立てて寝ていた。

アクアはホツとして、胸を下ろす。

「リヨウマ、マークス。あなた達が今回、記憶を持っているのはきつと理由があるはずなの。私も時もそう。アクア^私は、この子を見守ると約束した。共に戦うと決めた。そのアクア^私の想いを無駄にはしない。この子の苦しみを、悲しみを共に共有する事ができる。支えになってあげられる。そう思って、これから二人の側に居たい。」

「アクア……ああ、俺もそう思う。俺とマークス王子が共に持つ記憶の中で、共感する事がある。そして、知っているのだ。共に未来を歩んでいけると。それを教えてくれたあの子の為にも、俺たちは共に闘うのだ。」

「その私達に欠けている記憶がある。それがあちらでの記憶だ。きつと私たちの記憶があるのは、あそこでの記憶が何か理由となっているはずだ。だが、それが今はわからない。それさえわかれば、きつと真実が見えてくる。そう私たちは思っている。だからこそ、共に戦うのだ。」

「共に頑張りましょう、みんなで。」

「ああ。」

リヨウマとマークスは頷き合う。

ハイドラは彼らを見て微笑んだ。

『彼らの子供たちは立派に育っている。ああ、君がこの子たちを護った想いが解る。君が愛した子供たちはとても輝いている。きつと、この子たちは成し遂げてくれるだろう……きつと……』

リヨウマとマークスは部屋に戻っていった。

ハイドラはアクアを見て、

「アクア、キミも休むといい。ここは私がみているから。」

「いいえ、手伝わせてください。」

二人はイムカの看病を続けた。

翌朝、イムカは体が何やら重い事に気付いていた。

顔を少し上げてみると、アクアとハイドラが自分の布団に顔を乗せ

て寝ていた。

額に乗っていた手拭いが落ちてきたのを見て、なんとなく状況を掴んだ。

姿勢を戻して、

「はあ……」

と、しばらくこのままでいた。

イムカたちはカムイ達と合流した。

「さて、向こうに戻るぞ。」

「それは構わんが……もう大丈夫なのか？」

「こちら側に居るよりかは平気になる。」

「本当か？」

「……時間が惜しい、行くぞ。」

イムカはドンドン歩いて行った。

リョウマは城の事を軍師ユキムラ達に任せて、カムイ達も無限溪谷に向かつて歩き出す。

魔法陣の所まで来ると、

「いいか、あつちに戻ったら事をなすまでこちらには帰れない。」

「もちろん、そのつもりです！」

カムイがぐつと腕を上げる。

イムカは魔法陣の上に乗る、

「では、戻るぞ。」

「はい!!」

カムイ達は光に包まれた。

この先に起きるさらなる戦いを知らずに。

いや、知らなくても彼らは乗り越える。

彼らを迎える真実と想い。

そう、彼らは一人ではない。

大切な仲間達がいる。

支え合える仲間がいる。

それさえ忘れなければ、進んで行ける。

そう信じて……

第二十一話 動き出す運命

白き巫女は覚悟していた。

愛しき人、愛しき子ら……

彼らと合間見える事を。

武器を構え、彼らを攻撃する事を。

何故なら自分はもう、眷属となっただから。

かつての自分は眷属なっただけ、彼らと共にいるためなら彼らも眷属になれば良いと考えていた。

けれど、その度にあの子の姿を見る。

闘う姿、覚悟を決める姿、失っても立ち上がる姿を。

ある時、自分を討ったあの子達は平和を手にした。

けれど、世界の崩壊は起きてしまった。

その理由を自分は知っている。

だからこそ、あの子の苦しみが伝わって来る。

初めてあの子が、自分たちの元に来た時のことは今でも忘れられない。

顔を隠し、名を捨て、己自身さえも捨てたあの子。

けれど、少しだけ見えた赤い瞳からは強い意志が込められていた。

禁忌を犯してまでやり遂げようとするあの子の姿を見た時、自分も決意した。

決意したあの日に、自分は全てを知ったのだ。

自分の故郷より持って来た神器が教えてくれた。

今までの事を。

哀しかった。

辛かった。

けれど、嬉しかった。

だから自分は為さねばならない。

自分の死を迎え、召喚されて驚いた。

あの軍師の正体に。

おそらく、誰も気付いていない。

あの騎士でさえも。
自分は言えない。
けれど、支えたい。
どんなに忌むがられても。
どんなに冷たい瞳で見られても。
どんなに彼女の言葉に想いがなくとも……
彼らの進むべき道を導くために。
彼らの描く未来のために。
彼らの生きる世界のために。
だから自分は事を成そう。
自分の愛しき彼らのために……

——カムイ達は透魔王国に戻って来た。
魔法陣が壊れる。

イムカは何かの気配を感じ、ハイドラの前に立って長剣を抜く。
そこには透魔兵達が待ち伏せしていた。

「アベルの仕業か……」

イムカが動く前に、透魔兵達の背後より矢が放たれた。
それは彼らを的確に討ち、彼らは炎に包まれて消えた。

カムイはその矢を放った相手を見て、

「え？……どうして……どうしてここに……お母様が……!?」

そう、透魔兵達に矢を放ったのはカムイの母ミコトだった。

ミコトは優しく微笑み、

「お帰りなさい、カムイ。それに、リョウマ達も無事に戻って来たので
すね。良かったですわ。」

「母上……やはり、そうなのですわね。」

「ええ、あの時のあなたにはこの意味は解らなかつたでしょうが、これ
が私の選択です。」

ミコトは矢をカムイ達に向ける。

カムイは困惑し、

「リョウマ兄さん、どういふことなんですか？」

「そうです、兄様！何故、ミコト母上が!？」

ヒノカも困惑していた。

無論、タクミもサクラも困惑している。

ハイドラが、カムイを守るように前に立つ。

「ミコト……」

「……ハイドラ様。もう一度だけ、あなたに会えたことを心から嬉しく思いますわ。そして、私の愛しき子たちを護ってくださいったこと、ありがとうございます。ですが……」

ミコトはさらに弦を引き、

「今の私は、透魔王ハイドラ様の眷属。暗夜王ガロンと同じく、我が神にして王の為に動く者。だからどうか……愛しきあなた達の手で、私を送って。」

ミコトは矢を放つ。

イムカがそれを落とし、

「……白き巫女、ここは引いてもらおう。あなたは、ここではカムイを殺せないはずだ。透魔王や、あなたのところの軍師がそれを許さないだろう。」

「そうね……けれど、私はその軍師殿から言われてここに来た。向こうに行ったあなた達が、ちゃんと戻って来たかを確かめる為に。そして、私は会ってしまった。会ってしまえば、私は闘わなくてはいけないわ。」

「白き巫女、あなたはその瞳に何を視る。未来を見通すその瞳は、今どこに居る。」

「今も昔も、私はここに居るわ。あの時と同じ……ねえ、カムイ。今のあなたは誇れる自分になれたかしら?」

そう言って、イムカを優しく、それでいて悲しそうに微笑んだ。

それを聞いたイムカは瞳を揺らし、

「……なぜ……それを……」

イムカは構えていた剣が下に下がる。

カムイはさらに困惑する。

アクアがイムカの横に立つ。

「ミコト様……どうかここは引いてください。そして……あの人とカインに伝えてください。必ず救い出すと。それに、あの軍師さんは『戦いをしろ』とは言わなかったのでは？」

「そうね……確かに、確認をするだけで、戦えとは言われてないわ。ええ、分かったわ。ここは退きましよう。待っているわ、ちゃんとあの城に来るのですよ。そして止めてください……あの子を。そして救ってあげてください……あの子達を。お願いね。」

ミコトは弓を下ろす。

背を向けて歩き出すミコトに、ハイドラは叫ぶ。

「……ミコト、君の残したモノはとても大きい。とても輝いている。私は今度こそ守ろう。愛しき人間を。君の残した宝を。君たちが紡いでくれた想いを。」

ミコトは一度立ち止まり、笑顔を向けた。

そして歩いて行った。

カムイ達はアジトに戻って来た。

戻るなり、カムイはハイドラに詰め寄った。

「あの、ハイドラ様！ミ、ミコトお母様とはどう言ったご関係で？」

「え……あ、えつと……」

ハイドラは隣に座る人型に戻ったりリスを見る。

リスは困惑した、けれど笑顔で『え？私が、言うんですか？』と言う顔をしていた。

続いてアクアを見ると、真顔で『自分で言ってください。』と言う顔をしている。

その横に居るイムカに関しては、冷めた目で『自分から絶対に言わない。』と言う視線を向けていた。

自分の後ろに居るリヨウマ王子とマークス王子は熱い視線で、『頑張ってください！』と言う熱意が伝わってくる。

自分が召喚した三人もまた、真顔でこちらを見ていた。

ハイドラは覚悟を決めて、カムイの肩に手を置いた。

「カムイ……実は……私にはリスの他に子供がいる。」

「え？そうなんですか？」

「ああ……私は本体から斬り離れた後、さ迷い続けた。さ迷い続け、自分がわからない状態である女性に会った。それが、ミコトだ。彼女はおそらく、自分の正体に気付いていただろう。それでも、彼女は私を受け入れてくれた。側に居てくれた。彼女のおかげで、己の過ちに気付けた。アクアの父を殺してしまった自分。この罪は重い。人を信じられなくなった狂った神竜。けれど、彼女はこれから償っていけばいいと、それを共に支え、歩むと言ってくれた。」

「……え？も、もしかして……」

「ああ。その後、私はミコトととの間に子供を授かった。その子の名はカムイ。」

「え……ええ!?」

カムイはリヨウマを見る。

リヨウマは真剣な表情で頷いていた。

「今更、こんな事を言える立場ではないことはわかっている。私は……お前の父親だ。」

「えつと……でも……え……!?」

「本当なら、ずっとミコトとカムイと共に居たかった。だが、私と言う存在を透魔王ハイドラに気付かれてしまった。あいつは私を取り込むことで、力の増幅を狙ったのだ。ミコトが会ったことのある白夜王スメラギに助けを求めると言った。だから私は、ミコトとお前を白夜王国に送った。その後、ミコトからアクアとアクアの母が生きている事を聞いていた。だから、彼らも狙われると思った。案の定、歌姫を狙っていた。私は二人を暗夜王国へと送った。本当なら、ミコトと同じ場所に送りたいのだが、同じ場所では気付かれるとシユンメイ……アクアの母が気を使ったのだ。いくら風神弓の使い手であるミコトでも、赤子を守りながらでは厳しいだろうと。」

「……………」

カムイは黙って聞き続けた。

ハイドラは続ける。

「その後、私は何とか透魔王ハイドラの目を盗んで透魔王国を逃げ回っていた。そうする事で、向こう側に行った彼らから目を反らすた

めに。頃合いを見て、三人をこの世界に呼び、現状を伝え、カムイが居ると言われた暗夜王国へと送ったのだ。」

「リリースさんは？」

「リリースとは、その時に出会ったのだ。まさか、本体が子供をなしていたとは思わなかった。けれど、リリースは大切な私の娘に変わりはない。」

ハイドラはカムイの肩から手を放す。

カムイはイムカを見て、

「あなたはこの事を知っていたのですか？」

「……ハイドラ様が父だと言うことは元から知っていた。私の最初の父の親だからな。それに、昔は祖父として側にいたんだ。知らないわけないだろう。だが、リリースが妹だったとは知らなかった。私も、今回やっとわかった……と言うところだ。それでも、お前は薄々何かに気付いていたのではないか。ハイドラ様の事も、リリースの事も。」

「……はい。お二人とも、とても懐かしくて、他人とは思えなかったんです。でも……何というか、解らない事だらけです。」

「……お前はそうだろうな。」

「でも……嬉しいですよ！リリースさんが妹なのも。ハイドラ様がお父様だった事も。だって、新しい家族が増えたみたいで、とっても嬉しいです。」

カムイは笑顔だった。

リリースは涙を流していた。

ハイドラもどこか嬉しそうに微笑んでいた。

イムカはそれを見ると、部屋を出て行く。

近くの木の下に座っていると、アクアが隣に座った。

「……良かったわね。」

「何がです。」

「心配だったのですよ。ハイドラ様を、何も知らないカムイが受け入れてくれるかどうか。」

「……さてな。」

イムカはそっぽ向いていた。

アクアは苦笑して、

「そう言えば、こちらに戻って来たのに、仮面を外さないのね。」

「この方が、困惑しないだろう。それに、この顔を見てカムイだと思われる事の方が嫌なのだ。」

「自分はもうカムイではないから？」

「それもあるが、私は仲間ではないからな。変に期待されても、想いを寄せられても、寄り添われても、何も貸すことはないし、返せないからな。」

「そんなのいらないわ。だって、仲間とは互いに利益があるからなるだけではないのよ。認めたから、認められたからできる絆もある。私はそう思うわ。」

「あなたはそうでも、他の者達は違うだろうさ。さて、明日はやつと透魔王城へと乗り込む。早く休むことだ。」

「あなたもね。」

立ち上がり、歩いて行く彼女にアクアは小さく微笑んで言った。

——透魔王国、透魔軍師ルフレの部屋

透魔軍師ルフレはベッドの上で天井を見ていた。

『……アベル殿にも困ったものだ。いくらこちらに、カムイ達の情報 が来ていなかったとはいえ……相変わらずの単独行動。全く、少しく らい私の策戦通り動いてほしいものだ。』

彼女は目を閉じ、

『巫女殿の報告によれば、カムイ達は間違いなくここにやってくる。彼女の限界も近い。透魔王ハイドラ様の勝利は目に見えている、が……さて、どのように仕掛けて来るか……彼女はきつと、真の敵を 狙って無茶をする。』

彼女は小さく笑みを浮かべ、

「……ま、何が来ても、私はそれを超えればいいだけ……そう、それだ けのこと。」

彼女は身を起こし、ベッドから起き上がって行った。

カムイ達は、イムカとアクアの先頭の元、透魔王国の城に向かって

歩いていた。

朝、王城攻略について策戦を聞いていた。

その時、透魔王ハイドラについてもより詳しく聞いていた。

『透魔の眷属』……

ミコトがそのようなことを言っていた。

『ハイドラ様の眷属』だと。

その眷属は死人。

透魔王ハイドラの操り人形として、世界が滅びるまで戦争を続けるための駒。

暗夜王ガロン、アクアの知る白い騎士カイン。

そして兵達や民達もまたその眷属だと言った。

そして、カムイ達が初めてこの透魔王国に来たときに居た女魔導士もそうだと、アクアは言った。

その眷属たちを救う方法は、暗夜王ガロンの時と同じ。彼らを殺すこと。

そう、この透魔王国の者達を救うには、彼らを殺さなくてはいけない。

死を理解していないこの国の人達も殺さねばならない。

透魔王ハイドラの力によって復活した傀儡の兵。

彼の目的の為の駒として、彼らは闘い続ける。

己の存在も理解できぬまま。

覚める事のない悪夢を見続け、いつか解放される事だけを願って

……

イムカは言っていた。

そして知るだろう、と。

この国の秘密を。

哀しき連鎖を。

この先に待つ運命を。

彼らはそんな緊張感を持ちながら、先へと進んで行く。

当然、堂々と正面を歩くわけにもいかない。

来い、とは言われているものの、罨がないとも限らない。

だから、物陰に隠れながら先を進んでいたのだが……

「お久しぶりです。そして、初めまして皆さん。私は透魔王国の軍師、ルフレと申します。皆さんの事は、色々聞いていますよ。それに、欠片のハイドラ様とも会えましたし。」

銀髪を左右に結び上げた少女が、多くの兵を率いて立ちほだかる。

カムイ達は武器を構えて戦闘態勢に入る。

イムカはカムイの横に立ち、

「あいつの相手は私がしよう。お前たちは、他の敵を蹴散らせ。」

「で、ですが……」

「相手は軍師だ。押さえておけば、兵の乱れが生まれる。そこを突けと言っているんだ。」

「わ、解りました！」

イムカは魔術を放ち、透魔軍師ルフレを兵達から遠ざける。

彼女はそれを交わし、腰に付いていた剣を抜く。

そして、イムカが振り上げた剣を受け流し、さらに距離を取る。

彼女は剣先をイムカに向け、

「こうして、あなたと武器を交えるのは初めてですね。」

「そうだな……」

互いに地面を蹴って、剣を交え始める。

だが、互いにその視線は時折、闘うカムイ達を見ていた。

カムイ達は兵の統括が乱れた所を狙っていた。

傷を負っても、顔色一つ変わらない兵。

瞳に光のない兵。

ただ、ただ、闘うために存在する彼ら。

そんな彼らを救う方法は、死しかない。

カムイは思う。

彼らにもきつと守りたいモノがあつただろう。

帰りたい場所があつただろう。

それが突然奪われ、今の自分すらも解らない……

彼らの苦しみが、痛みがわからない。

自分はきつと、彼らを本当の意味では救えないだろう。

けれど、この悪夢を終わらせる事はできる。

カムイは剣の柄を強く握る。

一人でも多く、解放する為に。

イムカと透魔軍師ルフレは剣を、魔術をぶつけ合う。

透魔兵の数が減っていくと、

「おや、流石ですね。いくら、指揮官を失った兵とはいえ……あれだけの数をここまで減らすとは。それに、いがみ合っていた両国の人間同士、あんなに連携を取れるとは……」

「ああ。本質では両国似た者同士が多いからな。」

「ところで、あなたはいつまで、その仮面をつけているおつもりですか。我々は、あなたの正体を知っていると言うのに。」

「……随分と、達者な口を叩くものだ……そちらの軍師殿は!!」

二人は剣をギリギリと音を立てて、互いに剣を抑え込む。

カムイは透魔兵達を討ち、

「こ、これで大分終わった——」

「カムイ!!」

リヨウマが、カムイに振り下ろされる剣を受け止める。

剣を振るつたのは、白い鎧を着た騎士。

アクアがカムイの横に立ち、

「カイン!!」

「アクア様……申し訳ありません。ですが、私は軍師殿からの命を全うせねばならないのです。」

「カイン……私も、ここで退くわけにはいかないの。」

「ご安心を……あなたはここでは死にません。私がそうはさせません。勿論、あなたのお仲間も。」

白騎士カインは本気だった。

これには困惑した。

だからアクアは眉を寄せて、

「あなたが命じられた命とは何なの!?!」

「……足止めですよ。」

「え?」

アクアはイムカの方を見る。

イムカは透魔軍師ルフレと、剣を交えていた。

二人は肩で息をし始めていた。

「透魔兵たちはどうやら、ある程度殺られたみたいだな。」

「そうですね。ですが……ここからが本番です。」

透魔軍師ルフレは手を前に出す。

彼女の放つ魔術を避けながら、自分も放つ。

互いに距離が近付き、離れを繰り返す。

だが、イムカは背後から気配を感じた。

短剣を抜き、その剣を受けとめた。

「……アベル！」

透魔軍師ルフレは剣をしまい、

「さて、おぜん立てはここまで。後は、アベル殿のお好きなように。けれど、当初の目的をお忘れなく。」

「解っていますよ。」

黒騎士アベルは笑みを浮かべる。

イムカは押されていく。

「イムカ!!」

アクアが叫ぶ。

だが、アクアは白騎士カインに阻まれる。

それは他の者たちもだ。

黒騎士アベルは剣で彼女を抑え込みながら、

「そう言えば……名を与えられたのかい。イムカ……逆から読むとカムイになるね。」

「……アクア姉様いわく、簡単な方がいいそうだ。それに、私とあいつは色々と逆だからな。」

「なるほどね。確かにそうだね。では、私もそう呼ばせてもらうよ、イムカ様。」

黒騎士アベルは剣を上げて、イムカの腹を蹴り上げた。

「がはっ!!」

イムカは透魔軍師ルフレの横に転がり、膝を着いて咳こむ。

透魔軍師ルフレはため息をつき、

「やれやれ、アベル殿。今殺しては意味がないですよ。」

「ええ、少し強すぎました。」

イムカは肩で大きく息をしていた。

瞳を閉じ、開く。

黒騎士アベルを睨むと、竜化する。

黒い翼を広げ、腕を振り下ろす。

彼はそれを避け、

「おっと。危ない、危ない。」

イムカの手や尾を避け続けた。

だが、イムカの方が限界だった。

動きが鈍くなり、頭を左右に揺らして唸っていた。

透魔軍師ルフレはそれをじつと見て、

「……限界のようですね。気持ちとはやっぱり厄介なモノですね。」

そして黒騎士アベルを横目で見ると、

彼は笑みを浮かべたまま、

「うーん、どうやって連れて行くのか。」

「……仕方ありませんね。私がやりましょう。」

「ん？ルフレ卿に、そんな力がおありで？」

「……私は、そういう存在なんですよ。」

透魔軍師ルフレは唸りを上げているイムカに近付く。

そして彼女の頭に右手を当てると、

「ぎ、人型に戻ってください。」

彼女の右手から光が溢れて、イムカを包み込む。

そして人型に戻った。

彼女は倒れ込み、気絶していた。

「あなたは、軍師に向いていない。こういう無茶をするから、こうなってしまうのだから。ね、イムカさん。」

透魔軍師ルフレは冷たい視線で彼女を見下ろした。

黒騎士アベルは倒れ込んだイムカを抱え、

「……ルフレ卿、随分と不思議な力をお持ちのようだ。」

「ええ、言ったでしょう。これが、私の存在意義なんですよ。」

透魔軍師ルフレは笑顔だった。

そして、手を叩く。

「カイン殿。御役目ご苦勞様です。こちらの目的は済んだので、戻りますよ。」

「……解りました。」

白騎士カインは剣をしまい、黒い炎と共に消えた。

透魔軍師ルフレはカムイ達を見て、

「では、彼女は貰っていきます。彼女を返してほしければ、希望^{カムイ}を連れて王の間まで来てください。運が良ければ、それまでは生かしておきます。なので、早く城まで来てくださいね。」

横に居た黒騎士アベルは黒い炎に包まれて、イムカごと消える。

「「イムカ!!」」

アクア、リヨウマ、ハイドラが叫ぶ。

マークスは走り出しそうになったカムイの腕を引く。

透魔軍師ルフレはハイドラを見て、

「では、お待ちしておりますよ。」

消えそうになる彼女に、

「待てー!ルフレ!!」

「?」

透魔軍師ルフレは彼らを見る。

そう、彼女を呼び止めたのはラズワールド、ルーナ、オーデインだった。

透魔軍師ルフレは小首を傾げ、

「なんです?」

「……君は、本当にルフレさんなのか。それとも、彼の娘のマークなのか。」

ラズワールドは眉を寄せる。

そして続ける。

「もし、君が僕らの知るマークなら、解るはずだ。僕はアズール。それに、こっちはセレナ。そして彼はウッド。仮に君が、本当に別の世界

のルフレさんなら、こつちの方が解るはずだ。ウードは、君の友であつたクロムさんの妹、リズさんの息子だ。」

「……残念ですが、私はあなた方の知るルフレでも、異世界のルフレでも、マークでもありません。私は、ただ『透魔軍師ルフレ』としているだけです。」

「……それは、どういう意味だ。」

「私は私、と言うことですよ。異世界より、召喚された客人……いえ、勇者ですか？」

「僕らは——」

「ふふ。それとも、己の欲した対価の為に闘う傭兵の方がいいですか？ 故郷を救いたいのでしょう。」

「——!? なぜそれを☒」

「では、今度こそ退かせて貰います。でも、本当に早く来ないと……アベル殿がイムカさんを殺してしまうかもしれないよ。」

透魔軍師ルフレが消えると、辺りがシンとする。

カムイは両頬を叩き、

「行きましょう！ イムカさんを助けるために！」

「ああー！」

カムイ達は走り出す。

第二十二話 いざ、透魔城へ

自分は想う。

かつて自分がしたことを。

いつから自分は人間^{ヒト}を憎むように、信じられなくなったのだろうか。かつては彼らを愛し、共に共存した。

獣の衝動にかられ始め、自分は関わりを断った。

それがいけなかったのだろうか。

いや、そんなことはない。

あれは正しかったと思っっている。

けれど、ついに自分は理性を一度失い。

近くの森を破壊してしまった。

理性を取り戻した時、自分は囲まれていた。

自分を恐れ、憎む人々。

自分は襲い掛かる彼らに手を掛ける事はしなかった。

自分は瀕死の状態で、深く森にたどり着く。

痛みより、想いの方が強かった。

哀しかった。

辛かった。

信じていた彼らに対し、裏切る行為をした自分に。

裏切られた行為をしたヒト^{彼ら}を。

次第にそれは憎しみへと変わる。

どれくらいこの憎しみと共に、この森に身を置いていただろうか。

自分の中の獣の衝動は加速を続ける。

時折、王族が許しと説得をしに来る。

けれど、自分は耳を傾けなかった。

どれくらいと気が流れただろう。

時代が変わり、自分はある王たちにあつた。

透魔王だけでなく、白き国の王、黒き国の王。

彼らは耳を傾けない自分に、何度も語りかけた。

次第に、彼らの未来についての話も。

自分はそれに耳を傾けている事に気付いた。
それから、巫女と歌姫も来るようになった。
自分の周りが次第に暖かく、楽しくなる。
自分は透魔王リユウレイと話すようになった。
彼と離す時間はとても尊かった。
かつて自分が抱いていた信じた心。
彼らヒトを愛した想い。
いつしか彼は自分の友と言う存在になっていた。
なのに自分は獣の衝動にかられ、彼を……
彼を手につけ、殺してしまった。
苦しい想いにかられる。
想いに潰されそうだった。
せつかく取り戻した想いを、できた友を失った。
いや、まだだ。
まだ自分にはできる事がある。
彼が、彼らが残してくれたこの想いを自分は……
自分が誰かもわからず、それからさ迷った。
さ迷って、さ迷って、彼女に出会った。
彼女はそんな自分を受け入れてくれた。
いつしか自分は、彼女と愛し合うようになった。
――自分は、この恨みを晴らそう。
ヒトを、世界を壊す。
自分を裏切ったヒトを、世界を。
自分は彼女との間に子を成した。
そして自分は思い出したのだ。
自分が何者で、何をしたのか。
自分はその事を彼女に告げた。
彼女は最初から自分の正体に気付いていたと言う。
知っていて、彼女は受け入れてくれたのだ。
そして、気付いた今も。
彼女はこれから、自分のしたことを償っていけばいいと。

彼女はそれを共に支え、歩むと言ってくれた。

――自分は破壊する。

全てを。

その為には、まずはこの透魔王国が必要だ。

全てを排除する必要がある。

自分は生まれた我が子を抱きしめる。

暖かい。

とても儂い。

けれど、とても強い何かを持っている。

自分が何者か思い出した自分は、予知能力が戻った。

そこで見た。

この透魔王国が崩壊する。

そこに君臨するのは、暴竜とかした自分の片割れ。

いや、自分はあれよりも劣る。

そう、自分は本体の欠片だ。

けれど、やる事は決まっている。

彼女と子供を助ける。

――欠片を見つけた。

今となってはどうでもいい欠片。

けれど、何かをされる前に手を打っておく必要がある。

だが、まずはこの国を手に入れる。

彼女と子を白夜王国へ。

そして、彼女から聞いた。

彼の妻と子が生きている事を。

彼らを救う。

彼の残した大切なヒト達を。

会った彼らは泣いていた。

自分は恨まれる覚悟はしていた。

けれど、二人は自分がこうして心を取り戻した事を。

こうして助けに来たことを喜んでくれた。

自分は彼らに説明し、彼女と同じ白夜王国へと送ろうとした。

けれど、彼はそれを断った。

彼女の實力は知っている。

だが、赤子を守りながらなら、違う方がいい。

その方が追手を撒けるはずだと。

彼らを暗夜王国へと送る。

その後、自分は崩壊した透魔王国を逃げ隠れしていた。

――透魔王国は手に入れた。

黒き王も闇に堕ちた。

後は、自分が動くために必要な一時的な器を手に入れるだけ。

黒き王を通して見つけた。

黒き老騎士。

彼の持つ、憎悪は最適だった。

自分はこのままでいけないと思っていた。

自分のできる限りの事をする。

そして自分は、あの自分を止めてくれる「希望」を、我が子を助けとなる者を捜した。

そして見つけたのが、遙か未来の世界で邪竜を討ち倒したとある自警団。

その三人をこの世界に呼んだ。

彼らに頼んだのだ。

この世界を……透魔王国、白夜王国、暗夜王国を救ってもらうために。

だがこれは、災厄の場合死に至る。

それでも彼らは怪しい自分を信じてくれた。

彼らに報酬を先払いすると言った。

彼らの答えには驚いた。

自分が見られるかどうかもわからない大地の再生、死んで逝った者たちの墓。

自分は彼らで良かったと思った。

だからこそ、彼らの願う報酬に、再生と祝福を授けた。

そして、彼らに水晶を渡す。

彼らが「本当の故郷」に帰る事を望んだ時、それが叶うように。彼らを連れ、透魔王国に戻った。

彼らがこの世界で力を使えるように、新たな姿と名を授けた。

この透魔王国の事を、この先あの暴竜が何をなそうとしているのか伝える。

最初は我が子を護ってもらうつもりだった。

本体がもしも力を欲しているのなら、あの子の持つ力、器としての能力も強い。

だからこそ、この三人に護って貰おうと思ったのだ。

だが、まさか暗夜王国に連れ去られたいたとは……

そして自分を追って来たのは本体が生み出した子。

追手を振り払い、彼らを暗夜王国へと送る。

――自分の欠片が異世界の住人の力を借りる事を知った。

おそらく、自分を討たせるため。

我が子を守るために。

だが、その願いは叶わない。

自分もまた、自分の目的を果たすために子を創った。

我が道具を、欠片に向かわせる。

自分はここで終わるのだろうか。

いや、まだ終わらない。

逃げて逃げていた。

自分を追って来た本体の子。

彼女は泣いていた。

彼女は自分にとって、子と同じ。

いや、あの子と同じ我が子だ。

なら、この子も守らねばならない。

彼女を襲う敵の攻撃を、自分は庇う。

我が子を護って死ぬるのなら、それは本望だろう。

「希望」となる彼らを送り出した。

きっと平和な世界を取り戻せるだろう。

だが、心の残りはもう一人の我が子。

あの子にももう一度、もう一度だけ会いたかった……
——欠片が死んだ。

確かに、あの時死んだはずだった。

なのに、気配が消えない。

欠片の力が手に入らない。

何かが起きている。

自分は死んだと思った。

だが、自分は生きていた。

自分を助けたのは少女だった。

フードを深くかぶり、仮面をつけた少女。

だが、彼女の仮面から覗く赤い瞳には見覚えがある。

そして、彼女が自分を救うことができた。

だから自分は気付いてたのだ。

この少女の正体に。

——ある日、我が元に一人の少女がやって来た。

銀の髪に、金の瞳を持った少女。

少女は自分に言う。

『自分の目的の為に、あなたを利用させてほしい』と。

少女の力、戦略としての才能は申し分ない。

それは、自分の目的にも適している。

ならば、断る理由もない。

利用し、利用し合うだけだ。

何よりも、彼女の姿は……

自分は待つ。

「希望」が実るその時まで……

自分の願いが叶うその時まで……

——イムカは目を覚ます。

今の自分に解る事を詮索する。

辺りは薄暗い。

なおかつ、自分は両手両足を縛られている。

武器も取られている。

おそらく仮面は着けられたままだろうが、至る所に隠している武器は取られていた。

イムカは瞳を閉じる。

そして、自分の身に起きた事を思い起こして、整理する。

『……なら、このまま事を成そう。問題は、あいつがどう動くか。そして、軍師としてどこまでやれるか、だな。』

瞳を開くと、ジツと辺りを見る。

イムカはこの暗闇に目を慣らすために大人しくしていたのだった。

カムイ達は透魔王城を目指して進んでいた。

だが、行く先々に敵が待ち構えている。

全てを相手にするのは得策ではないと解っている。

しかし、最短距離を行くのであれば、今進んでいる道は外せないと言う。

だからこそ、カムイ達はこの道を突き進んでいた。

アクアが敵が引いたのを見て、

「カムイ、少し休憩しましょう。」

「でも、アクアさん！」

「いい、カムイ。気だけが焦ってもダメ。きつと、イムカもそう言うはずよ。それに、疲れ切った状態で敵の本陣に入るのは自殺行為よ。」

そこに、武器をしまったリヨウマとマークスが歩いて来る。

「そうだ、カムイ。気ばかり焦っているは勝てる戦も勝てなくなる。」

「大丈夫だ、カムイ。我々が付いている。それにイムカも、戦えの心得がある。」

「リヨウマ兄さん、マークス兄さん……分かりました。休憩にしましょう。」

カムイは武器をしまつて、頷く。

しばらく休息を取る事となったが、カムイは以前と落ち着きがなかった。

無論、それぞれ思うところはあるだろう。

だが、カムイには胸のどこかに違和感を……いや、不安を抱えてい

た。

何か嫌なことが起きる。

そういう感じのモノだ。

だからかもしれない。

冷静にならなければならぬのに、焦ってしまうのは……

と、子供の声が響いてきた。

「助けて下さいー！誰か……誰か!!」

カムイ達は武器を取って、その声の方へと走って行く。

すると、一人の少年が透魔兵達に追われていた。

「子供が追われていますー！みんな、助けに行きますよー！」

「いいのね、カムイ。透魔王国の民は……」

「それでも、私は……いえ、私達はそれでも、助けないといけないと思うんです。例え、死んでいようが関係ありません。私は、助けを求めその声を聞いたから助けるんですー！」

「カムイ……」

アクアは瞳を揺らす。

と、少年がこちらに気づき、

「あ、あのー！そこの方たちー！お願いです、助けてください!!」

「分かっていきますー！」

カムイが駆けて行き、少年の前に出る。

アクア達も武器を構えて横に立つ。

戦闘自体は大して時間はかからなかった。

カムイ達は数分で敵を殲滅させた。

カムイは武器をしまい、

「もう大丈夫ですよ。」

「ありがとうございますー！おかげで助かりました。僕はロンタオ。透魔王のお世話をしていた小姓です。」

「何ですって?!透魔王の☒」

「あなた……透魔王ハイドラの……小姓だったの?」

カムイとアクアが互いに少年を見る。

少年は服の裾を握りしめ、

「はい。今、この国にわずかに残った人々は……外に出る事さえ許されず、奴隷のような暮らしをしています。僕は透魔王の傍に仕えていたのですが、あの王は普通ではありません。恐ろしい悪魔のような存在です。その理不尽で横暴なやり方に嫌気がさして……やつとの思いで、脱走してきたのです。」

「そう……それで追われていたのね。じゃあ、あなたは透魔王や軍師ルフレ、他の将たちがどこにいるか知っているのかしら？」

アクアは少年と同じ視線となつて聞く。

「勿論です！透魔王の部屋は知っています。ずっとそこに居たんですから。でも、他の将たちがどこにいるかは知りません。」

「やったあー！じゃあ、先に透魔王をとつちめちやえば、イムカお姉ちゃんも助けやすいかも！」

エリーゼが手を合わせる。

だが、リヨウマとマークスは互いに視線だけを合わせ、目で語り合っていた。

少年は顔を上げ、

「え？も、もしかして、あなた達は……透魔王のところに？」

「はい。私たちは、透魔王を倒すためにやって来たのです。お願いです、ロンタオさん。私たちを、透魔王の居る所に案内してくれませんか。」

「た、倒すだなんて……そんなことができるとは思えません。それに、せっかく逃げてきたのに……」

「すみません。ですが、私たちは本気なんです。彼を倒し、連れ去られた仲間を、世界を救わなくてははいけません。だからお願いです。私達に力を貸してくれませんか。」

カムイは真剣な眼差しで彼を見つめる。

彼は視線を外し、

「……………はい、分かりました。協力します。」

だが、彼はバツと顔を上げると、

「いえ、協力させて下さい。僕はもう、逃げ続けるのは嫌です。透魔王がいるのはロウラン……難攻不落の奇岩城、ロウランの最上階です。」

「ありがとうございます、ロンタオさん。皆さん、準備が整い次第、出発します。」

各自、準備にかかった。

ハイドラはリヨウマとマークスを呼ぶ。

そこにはリリスも側に居た。

「どうしました、ハイドラ殿。」

「……彼には注意した方がいい。本体の私が、恨みを、そして滅ぼそうとしているヒトを近付けるはずがない。」

「私も、そう思います。実際、私も本体であるお父様に会ったのは数回。それ以外の時は、決まって私以外の者を呼んでいましたから。」

と、ハイドラとリリスは眉を寄せている。

マークスはリヨウマと目を合わせ、

「やはりそうですか。実は、私は……いや、おそらくリヨウマ王子もあの少年の事を知っている気がするのです。この透魔王国での我らの記憶がはつきり覚えていれば、この理由も解るのだが……」

「我らの記憶は未だに、霧がかかっている。何故、そうなのかはまだ分からない。だが、きつと理由があるはずなのだ。」

「……そうか。なら、警戒は怠らないようにしましょう。例え罠だとしても、敵城に攻め入れるチャンスだからね。」

「ええ。」

彼らは互いに頷き合い、準備を始める。

——同時刻。

^{ロウラン}透魔城のとある廊下にて。

「………ついに来るか、カムイ。そしてあ奴らが。」

「………。」

「大丈夫だ。我々は、この時の為にいるのだ。」

「ええ……」

その声の主達はその長い廊下を歩き続ける。

また別の部屋。

ある部屋にて、

「ふふ、やつとですね。さて、皆さん。カムイ達を招き入れる準備を。透魔軍師ルフレはそれだけ言うと、部屋から出て行った。

部屋に残っていた女魔導士は、白い騎士を見る。

「アクアと言う娘……あなたとお知り合いで？」

「……はい。かつての我が主の大切な宝です。」

「それで闘えるのかしら？」

「闘えます。私は、信じていますので。」

「何を信じているのかしら？」

「それは教えられません。少なくとも、今の貴女様には……」

そう言つて、彼女にお辞儀をして部屋を出て行った。

女魔導士は窓に映る自分を見て、

「……あの娘を消さなければ……でない……」

その顔は次第に同じ髪少女に変わる。

それを払うように、窓から離れて部屋を出て行った。

また別の部屋。

それはかつて懐かしい時間を過ごした思い出の場。

そこに黒い騎士が立っていた。

「もうじき、もうじきだ……」

己の剣を触り、彼はその部屋を出て行った。

事前にアクアやイムカから聞いていた道と少年ロンタオの案内された道は一緒だった。

そこは断崖が続いている。

少年ロンタオはそこをジッと見て、

「ロウランに行くためには、この断崖を進まないとなりません。」

「えええー!? だって、ここいつも以上に岩が浮いているよ!?」

「あら、本当ね。ここからは、岩にかかった橋を渡って行くのかしら。」

と、エリーゼとカミラが辺りを見渡す。

サクラが不安そうにタクミの服の裾を掴み、

「えつと……どの橋もかなり古そうに見えますけど……その、いきなり崩れたりする……なんてことは……」

「いえ、そんなことはないと思います……多分。」

少年ロンタオは眉を寄せて、肩を屈める。

ヒノカが苦い顔をして、

「今、多分と言ったな。しかも橋の向こう岸には、魔物どもが徘徊しているようだが……」

「でも、仕方ないよ。ここしか道がないなら進むだけだ。」

タクミが脅えるサクラの手を取って言う。

少年ロンタオは橋に向かっていき、

「あの……それでしたら僕が先導します！皆さんを危険な目には遭わせられません！」

「えっ!!お、おい!!そんなに走ったら危ないぞ！」

タクミが叫ぶが、少年ロンタオは橋を駆けて行く。

そして渡り切った彼は手を振って、

「みなさん、大丈夫です！渡って来ててください！」

「へえ、確かに見た目より大丈夫みたいだね。僕たちも行こう。」

レオンがそう言うと、皆橋を渡り始めた。

リヨウマとマークスはヒノカとカミラに耳打ちする。

「ヒノカ。」「カミラ。」

二人は耳だけを傾ける。

そして小さく頷くと、天馬と飛竜に乗って飛ぶ。

そして最後のタクミとレオンが橋を渡る。

だが、その橋が突如崩れ始めた。

「うわっ!!」「なっ!!」

「タクミさん！レオンさん！」

カムイが目を見張る。

咄嗟に近くに居たクリムゾンがレオンの乗る馬の手綱を引く。

しかし、レオンは馬から放り出される。

二人の体が宙に浮く。

だが、その二人の体を抱きしめた者がいる。

「ヒノカ姉さん！」「カミラ姉さん！」

二人はヒノカとカミラの手によって助けられた。

地面に着地すると、二人は地面に座り込んだ。

少年ロンタオはオドオドして、

「よ、よかった。危ないところでしたね。」

「ロンタオ。お前に聞きたい事がある。」

マークスがジツと少年ロンタオを見据える。

だが、アクアが辺りを見て、

「待って、敵よ。魔物が攻めてきたわ。」

そう言って、一度マークスを見る。

その目には、何か考えがあるようだった。

アクアはカムイを見て、

「カムイ、戦闘準備を。」

「はい！皆さん、行きますよ！」

カムイは武器を取る。

魔物を掃討しながら、リョウマが叫ぶ。

「アクア！このまま、駆け抜けるのはどうだ！」

「ええ！その方が良さそうね。」

アクアは歌を歌い出す。

敵の動きが鈍った所を一気に駆け抜ける。

断崖を終え、森を抜ける。

そして森を抜けると、空に浮かぶ大地の上に城がそびえ立つ。

少年ロンタオはホツとしたように、

「一時はどうなることかと思いましたが、なんとか到着しましたね。」

これが透魔王国の王城にして、難攻不落の奇岩城、ロウランです。」

「あの、ロンタオさん。どうすれば城に侵入できるのですか？」

カムイが城を見上げながら言う。

少年ロンタオはカムイ達を見て、

「はい。勿論、城門には鍵がかかっています。ですから、正門からは入

れません。」

「そんな！」

「でも、大丈夫！城には僕が逃げてきた裏口があります。そこに皆さんを案内します。」

「本当ですか!」

「はい!」

と、カムイは少年ロンタオと頷き合う。
アキラがそつとマークスに耳打ちする。

マークスは頷き、少年ロンタオに歩み寄る。

そして剣を抜き、

「そうはさせん。二度と同じような罠にはかからんぞ。」

「マークス兄さん! 一体、何を?!」

カムイがとつさに、少年ロンタオの前に出る。

マークスはカムイの後ろの少年ロンタオを見据え、

「おい、ロンタオ。橋を落としたのは貴様だな。」

「え! 待って下さい! どうして僕がそんなことを?!」

「大方、透魔王の内通者だろう。お前はここで……斬る!」

「ひっ! ひいひい!」

と、カムイにしがみ付く。

カムイは彼をギュツと抱きしめ、

「止めてください、マークス兄さん!」

「カムイ、止めるな。」

「考えてください、兄さん。あの橋の事だけで、ロンタオさんを内通者と決めつけるのはあまりにも……それに、あの軍師のルフレさんがこんなわかりやすい罠を出してきますでしょうか。」

「でもね、カムイ。それを抜きにしても、その子は怪しいわ。」

カミラも、頬に手を当ててマークスの横に立つ。

けれどその瞳は、戦いを知る者の目だ。

「カムイ。誰でも信じようとするあなたの心は、とても良い事だわ。けどね、ここは敵地。そしてタイミングが良すぎるのよ。彼が私達の前に現れるのも、そして橋が崩れ、魔物が現れるのもね。」

「ですが、カミラ姉さん……」

「カムイ姉さん、悪いけど……カミラ姉さんの言う通りだよ。多分、この中で彼を信じているのはカムイ姉さんだけ。皆、彼を疑っている。」
「そんな……」

レオンも、カムイをじつと見る。

その目は本気だ。

だからこそ、カムイは肩を落とす。

マークスはため息をつき、剣をしまう。

そしてカムイの頭を撫で、

「相変わらず甘い。その甘さはいつか、お前の命取りになりかねん。だが、その人を信じる甘さが、お前をリーダーとし、こうやって仲間を集めたのも事実。」

「……え？リーダー？私が？」

「そうだ。この軍のリーダーは、私でも、リヨウマ王子でもない。お前だ、カムイ。暗夜王国と白夜王国がこうして手を取り合って、共闘という奇跡を創り出したのはお前なのだから。」

「……私はてつきり、兄さん達やイムカさんだと思っていました。」

「イムカはおそらく、『自分はおくまで協力者だ』と言うだろうな。だが、イムカの立てる策戦が優れている事は認めよう。だが、イムカはいつだってお前に指示は任せていた。それは、お前がリーダーだからだ。」

「……………」

「カムイ。この際だから言っておく。もっと周りを見るんだ。それが、リーダーとしての務めだ。己の弱点を、敵に突かれられないようにする為にも。そして仲間を束ねる為にも。だから、用心は怠るな。」

「はい……分かりました、マークス兄さん。」

その場の空気が張り詰める。

カムイ達は一時、休息を取ることとした。

各々、警戒はしつつも、今後のことについて話し合う。

カムイは少し席を外す。

近くの石壁に腰を下ろし、

「……私がリーダーだったなんて。でも、それとこれとは別です。けど、イムカさんが囚われている今、私も皆も焦っているのじゃない。」

と、カムイは考え込む。

そこに、少年ロンタオが歩いて来る。

「あ、あの、カムイ様……少しいいですか？」

「ロンタオさん。どうしたんですか？」

カムイは立ち上がり、膝を着いて彼に視線を合わせる。

少年ロンタオは胸に手を当て、

「カムイ様。僕は橋の件で疑われています。城の裏口に案内すると
言っても、誰も信じません。それに、誰もついて来てはくれないで
しょう。だから、僕は一人で裏口から戻って、城門を開けに行つて来
ます。そうすれば、皆さんは正門から攻める事ができる。」

「そんな!!城には、透魔兵たちも待ち構えているはずです!そんな所
に、一人で行ったら……」

「危険なのは承知の上です。僕はみなさんの仲間になりたいんです。
その為には信頼を自分の手で勝ち取らないと……でも、もし僕が透魔
兵に殺られて戻らなかつたら、その時は……」

「大丈夫ですよ、ロンタオさん。あなたを一人では行かせません!私
も一緒に行きます。」

「え？」

「だから一緒に、城門を開けに行きましょう。」

「カムイ様……いいんですか？」

「もちろんです。武器の準備をします。少し待っていてくださ
い。」

カムイは駆けて行き、準備を整える。

そして、少年ロンタオをと共に出発する。

ここそと透魔城ロウランに近付く。

長い堀外を駆け抜ける。

だが、一向に裏口が見えてこない。

なおかつ、透魔兵の姿も見えない。

カムイは立ち止まり、辺りを警戒しながら、

「ロンタオさん。もしかして、道を間違えていませんか？」

「大丈夫です。透魔兵に見つからずに裏口に行くには、ここを通るし
かないんです。」

「そうですか。分かりました。では、急ぎましょう。」

「ありがとうございます、カムイ様……僕の事を信じてくれて。僕、とても嬉しいです。」

「ふふ。私は兄さん達と違って、人を信じる事くらいが、取り得ですから。」

「いえ、そんなことはありません。カムイ様は立派なリーダーです。だから、本当に……」

少年ロンタオは俯く。

カムイは彼を見て、

「ロンタオさん？」

「だから本当に残念です。」

少年ロンタオは顔を上げる。

カムイから離れ、

「こんなところで、死んでしまうなんて……」

「え？ロンタオさん？」

少年ロンタオは指笛を吹く。

すると、透魔兵たちが続々と姿を現す。

カムイは眉を寄せて、剣の柄を握る。

「っ!!」

「くくっ……はははっ！はははははははっ！」

少年ロンタオは腹を抱えて笑い出す。

そしてカムイを見ると、

「信じてくれてありがとうございます！おかげで、お前だけをここに連れて来られた。」

「……ロンタオさん。私を騙したんですか？」

「ああ、そうだ！僕の使命はお前を誘き出すことだからね！君がお人よしのリーダーで良かった！これで、僕は自由になれる！本当に、ア
ンタのおかげだ！」

「……………ロンタオさん。それが、あなたの目的だったのですね。ですが、私には私のやるべきことがあります。そして、私も謝ります。私はあなたを信じていた。けれど、仲間の言うことも信じているんで

す。だから、置手紙を置いてきました。」

「何!手紙、だと☒」

「ええ。私が戻らなかつたら、私抜きでここに囚われている仲間を救うこと。そして、この難攻不落の奇岩城を攻略して欲しいと。彼女なら、私と合流する策戦も考えてくれるでしょう。これは、ある意味賭けです。ですが、彼女には、彼女の目的がある。それには、『カムイ』が必要だと言っていた。私はそれに賭けます。」

そう言つて、武器を彼らに向ける。

「少しでも多く、敵を減らさせてもらいます。」

「……どんなに足掻いたつて無駄だ!」

「いいえ!諦めなければなんとかなります!」

そう言つて、敵に斬り込む。

どれくらいかの敵を斬つただろうか。

肩で息をしながら、それでもなお諦めずに闘っていた。

「なんで……なんで、そんなに頑張れるんだ!」

「信じているからです、仲間を!」

少年ロンタオは眉を寄せる。

そこに、カムイの背後から斧が振り下ろされる。

反応に遅れたカムイ。

だが、そこに矢と魔術が飛んできた。

「!!」

「カムイ姉さん、無事!」

レオンが馬で駆けて来る。

その馬にもう一人乗っていた。

タクミだった。

「レオンさん!タクミさん!」

タクミが降りると、カムイの横に立ち、

「全く。置手紙を置くくらいなら、最初から言っておいてよ。兄さんたちが警戒していてくれなかつたら、本当に手遅れになるところだった!」

「本当だよ。カムイ姉さんはいつも心配ばかりさせるんだから。だか

ら言つたら。アイツは怪しいって。」

レオンもカムイの横に並ぶ。

カムイは二人を交互に見て、

「どうしてこちらに？ イムカさんを助けられたんですか？」

「いや、二手に分かれたんだ。姉さんを救う組と、イムカ姉さん、いや、やっぱイムカ。イムカを救う組と。」

タクミは矢を放つ。

そして彼らの後ろから続々と仲間がやって来る。

「レオン、焦りは禁物だと言つたはずだ。」

「マークス兄さん、ごめん。でも……」

「分かっている。」

マークスが馬を落ち着かせて言う。

そして剣を構えると、横に並ぶギユンターを見る。

「ギユンター、行けるな。」

「はっ！マークス様！」

二人は突っ込んで行く。

ヒノカ为天馬から降りたサクラが駆け寄り、

「カムイ姉様、手当を。」

「はい。ありがとうございます、サクラさん。」

「僭越ながら、私もお手伝いいたします。」

ジョーカーも駆け寄り、サクラと共に治療術をかける。

仲間達が、敵をどんどん倒していく。

治療が終わったカムイは、少年ロンタオを見る。

「ロンタオさん。これが、信じる……そして、信じあつた仲間との絆です。私が思っていた以上に、私の仲間は凄いです。」

「……なんで……なんでだよ！ わからない！ 何で、何で——」

だが、少年ロンタオは心臓を抑え、

「えっ！ ハイドラ様……どうして?! ……まだ僕は……僕は失敗したわけじゃ……いやだ！ いやだ、いやだ、嫌だあ——!!」

彼は苦しむと、その姿が変貌する。

その姿は、『ノスフェラトウ』へと変わる。

「ガアアアアア!!」

「なっ?! ロンタオさん?!」

振り下ろされる攻撃を、同じく後衛部隊として駆け付けたハイドラがカムイの手を引く。

そして、カミラが魔術で攻撃した。

「お父様! あれは一体?!」

「……透魔王の力だろう。」

「まさかノスフェラトウの正体が……透魔王の民だったなんて……」

カムイは強く剣の柄を握る。

アクアがカムイの横に立ち、

「カムイ、気持ちは分かるわ。けど、感傷は後。今は闘いに集中して。あなたも知っているはずよ。ノスフェラトウの暴走さを。」

「はい……」

カムイは剣を構える。

ヒノカが空に飛び、

「気を付けるんだ! 敵の増援がきた!」

カムイ達も遠目だが、微かにノスフェラトウがたくさん来るのが見える。

なおかつ、近くには新たに透魔兵たちが現れる。

カムイ達は戦闘を続行した。

カムイは少年ロンタオだったノスフェラトウと戦っていた。

「ロンタオさん、すみません。せめて、あなたが安らかに……そして自由になれるように私はあなたを討ちます。だから、ロンタオさんも本気で来てください。」

カムイは彼の拳を受け流し、剣を振るい続ける。

どれくらい、攻防を繰り返したか。

それでもカムイはその手を休めなかった。

そして、カムイは最大の一撃を彼に振り下ろす。

避けようと思えば、彼には避けられただろう。

だが、彼はまるで意思があるかのように、黙ってそれを受けたのだ。

彼は仰向けに倒れ込み、青い炎に包まれて消えた。

仲間達も、敵を倒し終わった。

カムイは剣をしまいながら、

「でも、本当に驚きました。まさか二手に別れてやってくるなんて。」
「当然だ。カムイ、お前はこの軍のリーダーだ。そんなお前を失うわけにはいかない。そして、イムカも大佐な仲間。だからハイドラ殿の意見に皆が賛同した。」

マークスも剣をしまい、カムイを見る。

カムイはハイドラを見る。

「お父様の？」

「ああ。カムイ、君の仲間はとても強い。実力も、絆も。だから城の中がわかるリリスを先導に、イムカとも付き合いが長いリヨウマ王子をリーダーとしてイムカの救出を頼んだ。そしてこちらは、マークス王子をリーダーに足の速い部隊にカムイを助けに行ってもらったんだ。そしてマークス王子の意向で、私を守るためにカミラ王女をリーダーとしてきたと言う訳だ。」

「ありがとうございます、皆さん。そしてすみません。私の独断先行で……でも、本当に嬉しいです。」

カムイは頭を二度下げる。

マークスはフツと笑うと、

「さて、カムイ。これからどう動く？リヨウマ王子達と合流するか？」
「……いいえ、こちらはこちらで動きましょう。イムカさんや、リヨウマ兄さん達と合流するのは最上階近くです。多分、リヨウマ兄さんと合流したイムカさんも同じことを考える気がします。」

「そうだな。ではそうしよう。」

カムイはグツと手を握ぎりしめる。

そして城壁を見て、

「さあ、行きますよ！透魔城へ！」
ロウラン

「案内するわ。付いてきて。」

アクアを先導に、彼らは城内へと急ぐ。

第二十三話 VS 女魔導士

自分達がこの世界に来てから随分と経つ。

自分の元いた故郷の亡き母。

母は踊り子だった。

母の踊りは今でも覚えている。

もう会えることのできない母。

けれど、こうして残っているモノはある。

なにより、母は自分の目標だ。

だから今はそれでいい。

自分の元いた故郷の亡き母。

私は、母が苦手だ。

母親^{あの人}は天才だった。

自分は、いつも母親と自分を見比べていた。

母親に感じる劣等感。

今となつては、もう記憶に残る母親と競うことしかできない。

いや、死しても自分は、母親と自分を見比べているのだ。

でも、母親^{あの人}の事は嫌いではないのだろう。

自分の元いた故郷の亡き母。

自分は、英雄クロムの妹リズの息子。

母の事は大切に思っていた。

尊敬していた。

だからこそ、自分は選んだ道を後悔はしていない。

だって自分は、リズ^母の息子なのだから。

そして自分達は、この透魔王国の加護竜だったハイドラ様に呼ばれ

てやって来た。

と言つても、彼は欠片だと言つた。

最初会った時は、とても怪しい人だった。

けれど、彼の纏っている雰囲気は誰かに似ていた。

でも、あの人とは違う気がした。

だからと言う訳ではない。

でも、今は彼を信じてこの世界に来てよかった。

見れるかどうかは解らない。

けれど、土地の再生。

そして、大切なあの人たちの墓。

この選択に悔いはない。

自分達はハイドラ様の力によって、新たな姿、名を手にした。

自分達は、彼の娘がいる暗夜王国へ送り込まれる。

彼の娘と世界を守るために。

そこで、自分達は出会ったのだ。

大切な主に。

だから自分達は、あの人^主の臣下となった。

同僚と共にあの人^主を守る。

とても大切な主と仲間。

失いたくないもう一つの居場所。

そう、失いたくないもう一つの居場所。

けれど、自分達は選ばなければならぬ。

運命が決まるその時まで……

そして自分達は、また透魔王国へとやって来た。

自分達は進む。

依頼を成すために。

けれど、今はあの時の想いとは違う。

この大切な仲間達を守るため。

皆で笑い合うために。

この先にあるであろう未来の為に。

自分達があつた場所に戻るかは今はわからない。

けれど、今はこの仲間達と共に進む。

ただそれだけだ。

そう、それだけでいいのだ……

——リヨウマ達は、イムカを捜しながら戦闘を行っていた。

城の中を知っているリリスが付いて来ているとはいえ、続々と現れ

る透魔兵達に手こずる。

なおかつ、未だにイムカがどこに囚われているのかも解らない。

と、指揮を取っていたリヨウマ。

そして、その傍にはリリスが居る。

そのリリスに、敵の魔術が襲い掛かる。

咄嗟にリヨウマがリリスを抱えて避けるが、第二派は間に合わない。

「リヨウマ様！」

サイゾウが駆けだすが、その前に魔術が当たるのが早い。

だが、サイゾウの横をそれとは違う魔術が飛ぶ。

それは敵の魔術とぶつかり合い、相殺された。

そして聞きなれた声が響く。

「伏せろ！」

リヨウマがリリスを庇い、伏せる。

そこに暗器がいくつも降り注がれる。

敵が消滅するのを確認し、リヨウマは投げた本人を見る。

「イムカ、無事だったか！」

「ああ。まさか、救出作戦を行っているとは思わなかった。」

「するのは当然だ。だが、助けに来たのだが逆に助けられたな。」

「……気にするな。元より、私と貴殿たちは利用し、利用し合う仲だ。」

「……そうか。では、今はそうしておこう。」

イムカはリヨウマ達に近付くと、辺りを見る。

「……メンバーがこれだけと言うことは、二手に分かれたのか？」

「ああ。実はカムイもある意味、お前と似たような状況になってな。」

「それに関しては、私も覚えがある。大体察している。」

そう言いながら、剣を抜いて敵を斬る。

リヨウマもまた、同じように敵を斬り、

「そうか。イムカ、そっちに二人行ったぞ。」

「分かっている。だが……もしかしなくても、正門から来たのか？」

「当然だ！ 正々堂々と、突破してきた!!」

「……………」

イムカは無言で、剣を振り続けた。

臣下に護られているエリーゼが手を上げて、

「そうだよ！みんなすっこかったんだから！」

「ええ、そうですね。私も、ドキドキしてしまいました。」

隣に移動したリリスも微笑みながら、二人は笑い合っていた。

イムカの隣に来て魔術を放つニユクスは呆れたように、

「私は止めたのよ。でも……嫌いじゃないわね。久々に、私も胸が高鳴ったわ。あなたも、嫌いではないでしょう。」

「肯定も、否定もしないぞ。」

「つまりは、まんざらでもないと言うことね。」

「……………」

イムカはそれを無視して、敵を次々と倒していく。

現れた敵を全て倒し、

「で、これからどうするんだ？」

リヨウマはイムカを見る。

イムカもまた、リヨウマを見る。

「何故、私なんだ？」

「……お前が適任だと思ったからだ。お前の戦略を信じているからな。」

「……はあ。」

イムカは腕を組み、顎に指を当てる。

瞬きを一つすると、

「なら、カムイ達と一刻も早く合流する。城の中でできれば、最高にいいが……おそらく、こちらから合流を急いだ方がいいだろう。本当なら、最上階近くで会いたいものだが……無理だろうな。」

「なぜだ？」

「おそらく、カムイもこちらとの合流は最上階近く、だと考えるだろう。だが、ここは既に敵の懐。そして、敵がどう出るかは解らない以上は、早めにカムイ達と合流する。」

「それまで、どこかに隠れているのか？」

「いや……簡単な話だ。私も『カムイ』として動いて、敵を錯乱させる。」

なおかつ、敵を倒していく。」

そう言つて、イムカにノイズがかかる。

そして、その姿はカムイと同じ姿、服装へと変わる。

エリーゼが嬉しそうに駆けてきて、

「つまり、イムカお姉ちゃんのことを、カムイお姉ちゃんって呼んでいいんだよね！だって、元は同じカムイお姉ちゃんなんだし！」

「……今だけはな。」

「なら、カムイお姉ちゃん！怪我をした腕を見せて。」

エリーゼはイムカの右手に巻かれている布を見る。

そこには少しだが、血が付いていた。

イムカはため息を一つ着き、

「……私に人の治療術は効きはしない。忘れたわけではないだろう。」

「そう、だけど……」

「気持ちだけでいい。」

イムカは肩を落とすエリーゼの頭を無意識に撫でていた。

気付いた時には、背を向けて歩いていた。

フローラとフェリシアが笑いながら、

「照れていらしゃるようですわね。」

「はい。イムカ様は照れ屋さんです。」

と、その後ろに付いて行く。

城内を進みながら、

「ところでイムカ。お前はどうかやって脱出したんだ？」

「ああ、それは……ある人達に助けられた、と言うことにしておいてくれ。」

「ん？」

「今こうしているのだから、気にするなと言う話だ。」

「そうか。」

リヨウマはすんなり受け入れ、彼らは進み続ける。

——イムカは彼らと合流する前の事を想い出す。

イムカはこの暗闇にだいぶ慣れてきた。

辺りに何があるのか、見える。
自分の斜め上に花瓶が見える。

『……あれをうまく使えば、この縄を解けるが……』

イムカは薄っすら見える扉を見る。

外の様子は未だに解らないが、見張りが居るだろうと推測する。

『敵が入ってくるのであれば、それはそれで利用はできる。だが、入ってこない場合は……』

イムカは覚悟を決めると、ドンツと花瓶が乗る台に当たる。

花瓶はグラグラ揺れ出し、イムカの横に落ちて割れる。

その破片がイムカの腕に突き刺さる。

すると、外の方から声が聞こえる。

「何の音だ？」

「どうせ、中で暴れてるんだろう。」

「じゃあ、放っておいていいな。」

「ああ。」

そしてまた静かになる。

『……やはり見張り入るか。だが、入って来ないとなると……好都合だ。』

イムカは刺さっている花瓶の破片は気にせず、床に落ちている破片を取る。

それを使い、縄を地道に切っていく。

本来なら、魔術など駆使するかもしれないが、現状が解らない以上は目立たない事をするのが得策だ。

縄を斬り終わり、腕に付いていた破片を抜く。

それと同時に。

扉が開く。

イムカは入ってきた光に目を細めて、そこを見る。

入って来たのはミコトだった。

イムカは握っていた破片を隠し、動きを窺う。

ミコトは小さく微笑み、近付いて来る。

そしてイムカの前に座ると、

「助けに来たのですが……まさか自分で縄を解いていたとは。でも、無茶な方法を。腕を穢しているではありませんか。見せてください。」

そう言つて、手をさせ述べて来る。

イムカは握つていた破片をミコトの首に着き付ける。

「何のつもりか知らないが、私はここで——」

「ふふ。いいですよ。でも、手当が先です。」

ミコトはイムカの怪我をした腕を触る。

イムカは手を払い、

「私に人の治癒は効かない。いくら巫女と言え度、人。その治癒は効かない！」

「……そう。やはりあなたは竜となつていたのですね。なら——」

ミコトは再び怪我をした腕を掴むと、そこに布を巻く。

そして微笑み、

「ごめんなさいね。これくらいしかできなくて。」

イムカは立ち上がり、扉に駆ける。

そして驚いた。

見張りの兵は倒されていた。

身構える。

それはその相手が目の前に居るからだ。

「……そう身構えるな。」

「武器はなくとも、魔術は使える。いかな貴殿といえど、ひけは取らないと思うが？」

「全く。そう言うわけではない。」

イムカは背を向けて走り出そうとする。

だが、その相手が止める。

「待て。」

イムカが振り返ると、何かを投げられた。

それをキャッチすると、それは自分のマントに包まれた武器。

イムカは走り出す。

その背に声が聞こえてくる。

「待つておるぞ。お前たちがワシらの前の来るのを。」

「それまでどうか……どうか無事で……」

イムカは走り続ける。

と、言うわけだ。

だが、イムカには違和感がある。

いくら彼らが何かしらの記憶を持つていようと、既に眷属。

そして彼らは、彼らの意志で眷属になる事を選んだ。

その理由はまだよく解らない。

それでも、私はやらなくてはいけない。

そう決めたのだから。

イムカはカムイのフリをして、進み続ける。

敵を倒し、彼らが入ってくるであろう裏口通路を目指して。

「通路は私が知っている。ここを抜ければ、裏口へと行けるはずだ。」

と、気配を感じ取ったイムカはすぐに表情を変える。

「皆さん、敵です！気をつけてください！」

イムカは、敵と鉢合わせると、カムイの振りを続けていた。

その姿はまるで、カムイそのものだった。

それこそ、今ここにるのがイムカが、本当は今のカムイなのではないかと思うぐらいに。

そして、裏口まで来ると……

「……どうやら、まだここまで来れていないようだな。」

「どうする？」

「あちらには、ハイドラ様もいる。ここは、こちらから出向くぞ。」

イムカ達は森に向かって歩き出す。

カムイ達は城内園庭に出ていた。

その中の深い森の中を進み、城内への道を探していた。

カムイは辺りを見渡しながら、

「……この森はどこまで続いているのでしょうか。」

「大丈夫よ、カムイ。確かに、この森は深いわ。でも、迷わずに行けば近道なの。」

「あ、いえ。アクアさんを疑っているわけではないんです。」
「ふふ。解っているわ。」

「……この森は、アクアさんにとって、何か思い入れが？」
「ええ。この森は、幼い頃にお母様と手をつないで——」

「ようこそ、透魔王国へ。」

アクアが懐かしむように、語るように言っていた時だ。
彼女の言葉を遮り、どこかから声が響き渡る。

カムイ達は立ち止まり、武器に手を当てて辺りを警戒する。
と、カムイ達の前に炎が燃え盛り、そこから一人の女性が姿を現す。
その女性の影がはつきりしてくると、それは魔道の服を纏った透き
通る青い髪の女性。

その顔はどこかアクアに似ていた。

アクアは悲しそうに瞳を揺らし、

「……やっぱり、現れるのね……お母様。」

「お母様って……アクアさん☒」

カムイは目を見開いて、アクアを見る。
無論、それはマークス達もだ。

何故なら、マークスは知っているのだ。

この目の前の女性を。

女魔導士は目を細めて、

「……何を言っているのか、解りませんね。我らが軍師の名を受け、あ
なた方の命を貰い受けます。まずは、自己紹介を致しましょう。私は
シユンメイ。透魔王ハイドラ様の忠実な僕。透魔の眷属の一人で
す。」

「……知っていたわ。ここで、こうしてお母様と会う事も。これもま
た、必然と言うのでしょうか……」

「……浮遊島では敗れてしまいましたが、今度はそうはいきません。」
「ええ……あなたを解放するためにも、私は逃げないわ。」

アクアは薙刀を構える。

カムイはそのアクアの手を握り、

「待って下さい、アクアさん！だって、あの方は！」

「なんと、なんと惨いことを！まさか、シユンメイ王妃を眷属にしていたとは！」

マークスは眉を寄せる。

ハイドラが前に出て、

「シユンメイ。」

「久方ぶりですね。あの時は取り逃しましたが、今度こそ欠片をハイドラ様の元へ突き出します。」

「……すまない、シユンメイ。君を、そんな風にしてしまって……本当に……」

ハイドラは俯く。

アクアはカムイを見て、

「……カムイ。あそこにいる人は確かに私のお母様よ。けど、お母様ではないの。私のお母様は記憶の中。そして、あの人もまた同じ。今的那个人に、お母様の記憶があるかはもう賭けよ。目の前のあの人は死してもなお、囚われてしまった哀れな人。だからこそ、娘である私が解放する必要があるの。」

アクアはカムイの手を振り払い、一人向かっていく。

女魔導士シユンメイは両手を広げ、

「さあ、死になさい！やっとお前を殺せる。そう、全てはハイドラ様のご意志のままに!!」

そう言うと、炎と共に透魔兵も姿を現す。

カムイ達は囲まれる。

カムイ達は武器を手に取り、

「……皆さん、戦闘準備を！」

それぞれ、戦い始める。

カムイはアクアが、女魔導士シユンメイと闘う姿を見る。

アクアはその視線に気付いた。

「カムイ。お母様はね、私に歌を教えてくれたの。それだけじゃないわ。暗夜王国で、己が消える事を知っていながら、透魔王国の歴史を伝えてくれた。そう、命尽きるその瞬間まで……お母様は、いつだって私に生きる道標を与えてくれた大切な人。だからこそ、私が解放し

てあげたいの。」

彼女の想いは本気だ。

ここで、手を抜けばこちらが全滅する。

そして何より、自分もまた、アクアと同じように決めなくてはならない。

母ミコトと闘うことを。

カムイはギョツと目を瞑り、カツと目を開く。

アクアにあたりそうになる魔術の攻撃を斬り裂き、

「アクアさん。あなたの決意は解りました。私も、アクアさんと共に戦います。アクアさんだけに、背負わせません。」

「カムイ……ありがとう。」

アクアは構える武器を強く握りしめる。

激しい攻防戦が続く。

アクアの振り下ろす薙刀を、魔結界で防ぐ女魔導士シユンメイ。

「くっ！前よりも腕は上げているようですね。」

と、二人の元に魔術が飛ぶ。

それは、アクアに直撃する。

「きゃっ！」

「アクアさん！」

カムイが、アクアを支える。

カムイが撃ち放たれた場所を見る。

そこには、透魔軍師ルフレの姿があった。

「どうやら、そのようです。あなたの役目は、ここで終わりです。魔導士殿。なので、ここは撤退してください。この後の予定もありますし。」

「……解りましたわ。ここは、退かせて貰います。」

「待って、お母様！」

女魔導士シユンメイは炎に包まれ、透魔兵と共に消える。

アクアは拳を握りしめる。

マークスがカムイとアクアの前に立ち、

「油断するな。まだ、軍師がいる。」

「ふふ。今はまだ何もしまんよ。ですが……」

透魔軍師ルフレは目を細めて、

「どうやら、あなたの方が本物のようですね。」

「何のことですか？」

「いえ。では、待っていますよ。あなたの方が、城内に来るのを。」

透魔軍師ルフレはサツと身をひるがえして消える。

彼女が消えた後、マークスは剣をしまいながら、

「どうやら、あちらは上手くいつているようだな。」

「？」

「解らないか、カムイ。あの軍師は、お前を見て本物と言った。つまり、リヨウマ王子達がイムカを救い出したということだ。そして、イムカがカムイの振りをして時間を稼いでくれているのだろう。」

「なるほど。では、私達も急がないとダメですね。」

「ああ。」

カムイ達は急いで城内に入るための裏口へと急ぐ。

——カムイ達から離れた透魔軍師ルフレは女魔導士シユンメイを見る。

「おや？魔導士殿、顔色が悪いようですが大丈夫ですか？」

「問題ありませんわ。」

「そうですか。それはよかったです。あなたには、これから歌姫を殺して貰わねばなりませんからね。」

「……解っているわよ。全てはハイドラ様のため……」

「ええ。そうですとも。では、あなたには配置に着いて頂きましょう。」

「……ええ。」

そうやって、女魔導士シユンメイは歩き出す。

長い廊下を歩きながら、

「そうよ……あの娘を殺さなければ。そうしないと私は……私の中に
あるこの霧は晴れることはないわ。」

その女魔導士シユンメイが歩く姿を片隅で見っていた騎士がいた。その騎士は悲しそうに瞳を揺らし、

「シユンメイ様……アクア様、どうか……どうか、シユンメイ様をお助け下さい。」

騎士は祈るように自身の剣を触る。

それは、自分にはそれを成すことができないからだ。だからこそ、祈ることしかできない。

透魔軍師ルフレは隣にいた白騎士カインを見る。

「……さて、カイン殿。あなたも、配置に着いてください。仮に、魔導士殿が敗れた場合、次はあなたが彼らを殺さなければならぬのですから。」

「解っております。では。」

白騎士カインは頭を一度下げて、歩いていく。

透魔軍師ルフレは彼らがいなくなると、小さく笑みを浮かべる。

「そう。全ては必然。だからこそ、これは成さなければならない。彼女も身をひるがえし、彼らとは別の長い廊下を歩いていく。」

カムイ達は急いでいた。

アクアは森の出口を見て、

「あの先を超えた所に、裏口への道があるわ!」

「皆さん、もう少しです!頑張りましょう!」

カムイも、後ろを見てから駆け出す。

だが、あと一步の所で炎が燃え盛る。

カムイ達は急ブレーキをかける。

武器を構えて目の前を見る。

目の前には、透魔兵と女魔導士シユンメイが姿を現す。

「……去りなさい。これ以上、王城に近づかせるわけにはいかない。」

「っ!!シユンメイさん!」

「……………そう。ここで、なのね。私たちは進むわ、お母様。」

「そう。戦ってくれるのね。これでやっと、やっと私の靄は晴れるわ!」

そう言つて、女魔導士シユンメイは手を振り上げる。

「さあ、やつてしまいなさい！」

「行きますよ、皆さん!!」

カムイ達も戦闘を開始する。

「アクア！カムイ！お前たちはシユンメイ王妃と決着をつけるんだ！」

「はい！アクアさん！」

「ええ。行きましよう、カムイ。」

カムイとアクアは女魔導士シユンメイの前に迎え出る。

「あなたを見ていると、イラつくのよ。私の中の何か、私をイラ出せる。あなたを消さなければ、私の中のこの霧は消えない！だから、死んで頂戴！」

「……お母様。そう……欠片でも、残ってくれているのなら私は嬉しいわ。他でもない。私に進む道を、道標を与えてくれたのはお母様だから……愛する家族の為に……」

アクアは、女魔導士シユンメイの繰り出す魔術を避けながら進む。

カムイはそのサポートに回る。

だが、透魔兵の援軍が到着した。

「くっ！敵の援軍か！」

「マークスお兄様。」

「カミラ、お前はハイドラ様をしっかりお守りするのだ！」

「ええ。お兄様も、お気をつけて。」

「ああ！」

マークスは援軍の相手を始める。

だが、多勢に無勢だ。

「ぐっ！もう一手、もう一手あれば！」

そこに、雷撃が透魔兵を襲う。

「マークス王子！」

「っ！リヨウマ王子か！」

「マークスお兄ちゃん！間に合つて、よかつた！」

そこには、エリーゼの乗る馬に立ち、雷撃を放つたりヨウマの姿。

エリーゼの乗る馬から降りると、リヨウマはマークスと背中合わせになる。

「助太刀するぞ、マークス王子!」

「ああ、すまない。リヨウマ王子。だが、貴殿がここにいるという事は、やはり成功したのだな。」

「無論だ。」

リヨウマの言う通り……いや、あれ?とマークスはなる。

「カムイ?」

「……悪いが、貴殿の妹の方ではない。」

と、カムイにノイズが走る。

その姿はイムカへと変わる。

「世話をかけたな。ここからは、こちらも加勢しよう。」

「意外と早い合流となったな。」

「私としては、最上階近くで合流したかったがな。」

「では、カムイの感もあながち間違いではないな。」

「……さてな。だが、あの方がやはり動いて来たか。」

「知っているのだな。シユンメイ王妃を。」

「ああ……」

イムカは武器を構え、

「だが、あの方の相手はあの二人に任せる。あれは、『カムイとアクア』が乗り越えるもの……いや、『アクア』が乗り越えなければならぬことだ。」

「そうだな。」

カムイ達の戦う姿をイムカは一目見た後、透魔兵を相手に戦う。

カムイとアクアは肩で息をしていた。

「はあ、はあ。流石、アクアさんのお母様ですね。とてもお強い。」

「ええ。それはそうよ。イムカに魔術を教えたのは、私のお母様だもの。」

「……そういえば、そう言っていましたね。それに、イムカさん達も合流してみたんです。私の予想よりも早い合流ですね。」

「彼女の事だから、私達の事を心配して合流を速めたのでしょね。」

ここは、すでに敵陣。そして、私も彼女も知る必然は違うものがあるから……」

「……必然、ですか。」

カムイが視線を落とした時だ。

女魔導士シユンメイの魔術が二人を襲う。

「きゃっ!」「うっ!」

「さあ、これで終わらせてあげるわ。」

「アクアさん!」

再び襲い掛かる魔術を、カムイがアクアに覆いかぶさって守ろうとする。

だが、二人を魔方阵が守る。

「イムカさん!」

「……お前たちを守るのは今なので最後だ。」

イムカは女魔導士シユンメイを見る。

女魔導士シユンメイは苛立っていた。

「あと、もう少しだったのに!」

「……私は、あなたを誇りに思っていました。シユンメイお^先あ^生様。」

身を翻すと、イムカは敵に向かって走っていく。

アクアは起きあげると、

「……誇り。そう、そうね。私も、そう思っているわ。カンナ……」

アクアはペンダントを握りしめる。

そして胸に手を当てて、歌いだす。

「ユラリ〜♪ユルレリ〜♪」

「うっ!うっ!」

女魔導士シユンメイは頭を抱えて苦しみだす。

「私は、お母様から教わったこの歌を誇りに思っているわ。お母様との絆、思いで。そして、それを息子に伝えることができた喜び。私は『歌姫』!その役目を果たす!!」

アクアは歌いながら凧刀を振るう。

カムイは瞳を揺らし、

「……私には、あの方の記憶はありません。でも、仲間であるアクアさんとイムカさんの大切な人なのは解ります。だからこそ、私もまた決めるために……戦うのです！」

カムイもそこに加わる。

透魔兵を倒しきり、カムイとアクアを見るイムカ。

彼らも女魔導士シユンメイを、アクアの薙刀が斬り裂いた所だった。

女魔導士シユンメイは倒れこむ。

その彼女を青い炎が包む。

女魔導士シユンメイは仰向けになり、

「……ああ……そう、そうなのね……私は……」

そして、涙を流す。

傍にいるアクアを見て、

「アクア……私の愛しい子。」

「お母様……」

アクアは女魔導士シユンメイの前で座り、抱える。

女魔導士シユンメイはアクアの頬を触り、

「アクア……ごめんなさいね。また、あなたにこのような役目を……」

「いいえ、お母様。私はそれでも、このような形でもお母様に会えたことがとても嬉しいの。」

「……アクア……。そうね。私も、あなたの成長した姿を見れてとても嬉しいわ。アクア、私の身も、魂も、もうじき消滅します。だから……」

「お母様？」

アクアは眉を寄せる。

女魔導士シユンメイは優しく微笑む。

そしてハイドラを見て、

「ハイドラ様。この子たちを、お願いします。」

「ああ。君たちの大切な形見。必ず。」

ハイドラは頷き、彼女を見る。

「ありがとう、アクア。本当にありがとう。私を解放してくれて。私

の……私達の子供になつてくれて。愛しているわ、アクア。だから、待つているわ。あの場所で、あなた達を……」

そう言つて、炎が包みその身は消えていった。

アクアはその炎の欠片を握りしめ、

「お母様……うう……」

アクアはそれを胸に握りしめて泣く。

その姿を仲間達は見守る。

女魔導士シユンメイへ黙とうを捧げる。

それはイムカもだった。

リヨウマはイムカを見る。

表情は仮面で解らないが、悲しんでいるのは解る。

カムイは拳を握りしめ、

「……許しません。私はあなたを許しません、透魔王！」

「すまない、カムイ。」

それは後ろにいたハイドラだった。

カムイは慌てて振り返り、

「ち、違います！これはお父様に言ったのではなく、透魔王で……でも、あれもお父様なのですが……えっと、その……」

「解っているよ。大丈夫だ。」

ハイドラは神居の頭を撫でる。

そしてアクアの前に膝をつき、

「すまない、アクア。」

「ハイドラ様……」

「だが、この世界に平和をもたらすためにも、ともに進んでほしい。」

「ええ。ともに……」

アクアはハイドラの手を取つて立ち上がる。

アクアはカムイを見て、

「カムイ。」

「はい。行きましょう。」

彼らは裏口へと向かう。

透魔王ハイドラとの因縁を断つために。

世界に平和をもたらすために。
仲間のために。
彼らは進む。

第二十四話 城内

自分には罪がある。

この罪は決して消えることなく、自分の胸の中に残るだろう。たとえ、あの方の笑顔があつたとしても……

自分はある方にとって、取り返しのつかない事をした。

自分はある方の大切な父君を奪った。

それだけではない。

自分はある方の人生を狂わせた。

あれは幼い自分は知らなかったのだ。

気付けなかったのだ。

あの日、シユヴァリエ公国で自分は密かに進軍してくる暗夜軍を見た。

けれど、自分はそれを父に報告しなかった。

暗夜軍から突然受けた攻撃。

味方の白夜軍は、多大な犠牲を受けた。

白夜王スメラギを失い、白夜の姫君カムイを攫われた。

全て自分が起こしてしまった。

あの日、見たことを父に話していれば……

自分はある方にとって、取り返しのつかない事をした。

自分はある方の大切だったか解らないが、強引に誘拐した。

自分は、自分の仕えるコウガ公国を滅ぼしたフウマ公国に復讐する。

その為に、自分は今ここで来ているのだ。

あの日、白夜王国の姫が誘拐されたと聞かされた。

その対となるように、今度は暗夜王国の王族を誘拐する。

そう、交換対象とするために。

そして、侵入した先で見つけた姫。

彼女の瞳は暗かった。

けれど、強い芯のある瞳だった。

時折見える体の傷。

それが何を意味しているのか、自分には真意は解らない。だが、誘拐するのならこの姫だと決めた。

あの日の選択が、自分にとって正しかったのかは解らない。だから自分は救いを求めているのだろうか。

いや、違う。

自分はこの罪を背負っていかなくてはならないのだ。

あの方の為に。

なにより、許せない自分の為に。

忘れてはいけない。

そして、自分はある方の為に罪と共に背負う。

あの方の笑顔の為に

あの方の居場所を守るために……

自分は、ずっとずっと許せない。

だが、俺の復讐相手はあの方達がとってくれた。

自分はある方の為に、力を尽くす。

あの日、あの方を連れだしたことを忘れることはない。

あの方のあの瞳を忘れることはない。

奪う自分が、守る自分へとなる。

あの方達の笑顔を。

あの方達の居場所を。

——カムイ達は悲しみを乗り越え、城内へと入った。

カムイは辺りを見渡し、

「……暗夜のお城と少し似ていますね。」

「そうね。透魔王国は暗夜の文化と少し似ているから。でも、白夜の文化に近いものもあるわ。」

「そうなんですか。」

「ええ。だって、白夜も暗夜の始祖竜もまた、最初の生まれはここだったもの。」

「そう言えば、そうでしたね……」

カムイ達は辺りを警戒しながら進んでいく。

しばらくして、ある一室で休息を取る。

アクアは部屋の背景を見て、

「ここは透魔王がいる玉座から一番離れた場所よ。ここから、玉座に向かうには3ルートあるわ。けど、どのルートを使っても、どうしても通らなくてはならない場所があるの。」

「その場所とは?」

カムイは眉を寄せる。

それに答えたのはアクアではなく、

「……大広間だ。」

「そうでした! イムカさんは、すでにこの城を知っているのでしたね。」

「ああ。だが、私の知る城内とは異なることはある。」

「では……」

「だが、この城内はすでに把握している。」

「え? いつの間に……すごいですね。」

「……当然だ。今回しか、もうチャンスはないからな。やれる事はすべてやる。それだけの話だ。」

イムカは素っ気なくカムイに答える。

カムイは顎に手を当てて、

「では、どうしましょうか。どのルートを使っても、その大広間についてしまうのなら……敵はそこに待ち伏せをしているのでしょうかね。なら、全員で一つの道を通りますか?」

と、イムカを見る。

イムカは首を振り、

「いや。あえて、その3ルート全部を使う。」

「え?」

「どのルートを使っても、大広間に行く。そして敵も、そこに待ち伏せしているのは必須。だが、どのルートを使っても、敵は待ち伏せしているだろう。なら、その敵を倒して戦力を減らす。さて、三チームを編成する。白夜と暗夜。これで各一チームずつ作る。」

「最後の二チームは?」

「お前だ。」

「……私ですか。」

「ああ。私はハイドラ様を守りながら、お前についていく。道案内は私がする。白夜は歌姫に頼む。そちらは、あなたでも知る道だ。暗夜はリリスだ。あつちは、あなたでも知らない所がいくつか存在した。」

「解ったわ。」

「お任せください、イムカ様。」

二人は頷く。

カムイはリヨウマとマークスの元へ行き、

「兄さん。どうか、気をつけて。」

「ああ。カムイを気を付けるのだぞ。」

「それと、イムカの事を頼んだ。」

「はい。」

カムイ達は各メンバーで別れた。

先を進んでいく。

カムイは進みながら、

「イムカさん。この長い廊下……所々部屋がありますが、部屋の中に透魔兵が待ち伏せしていることはありませんか？」

「それはない。」

「どうしてですか？」

「もし仮に、待ち伏せしているのなら心配がするはずだ。いくら操ら

れているとしても、殺気は隠せない。だが、その殺気は感じ取れない。

それに、待ち伏せするのならこの先の部屋と、大広間に通ずる道の

一つ前の道だ。」

「へえ。流石ですね。」

「……いや。私は、以前こう言った作戦の作り方を教えてくれた者

がいてな。私はその時の経験をもとに、幾つもの作戦を作っているだ

けだ。」

「その人は？」

「……今は内緒だ。」

「そうですか……」

と、歩いていく。

戦闘を歩いていたジョーカーとスズカゼが立ち止まえり、武器に手をかける。

「カムイ様、ご注意を。」

「敵の気配を感じます。」

「っ！イムカさんの言った通りでしたね。では、皆さん。部屋に突入と共に攻め入ります。武器の準備を。」

「はい！」

扉をフローラとフェリシアが勢いよく開ける。

ジョーカーとスズカゼが先陣をきつて突入する。

それに、カムイ達も続く。

——白夜組

リヨウマ達はある部屋に入っていた。

その場に待ち伏せしていた透魔兵を倒し、

「皆、無事のようなな。」

「ええ。」

「……………どうした、アクア。何か、気になることでもあるのか？」

「いいえ。ただ……………」

「ただ？」

リヨウマは武器をしまいながら、アクアを見る。

アクアは部屋を見渡し、

「ここは、私が最初のカムイ……………私の夫だったカムイが、私にプロポーズしてくれた場所なの。と言っても、私達の結婚は最初から両親同士が決めていた事だったけれど、とても嬉しかった。弟のようにも見ていた彼が、とても凛々しく見えて。けど、やっぱり子供みたいな顔をして……………」

「アクア……………」

「それは、私ではないけれど、それでも私の中に残る『あのアクア』の気持ちが流れ込んでくる。ふふ、とても不思議ね。」

と、アクアは嬉しそうに、そして悲しそうに微笑む。

だが、アクアに詰め寄るサクラ。

「あ、あのー！」

「何、サクラ？」

「さ、差支えがなければ、その……」

サクラはアクアの前で顔を赤くしてもじもじする。

と、カザハナとオボロがサクラの方を掴み、

「その話、じっくりと聞きたいですわ！」

「恋バナです、恋バナ！」

「え？えつと、そうね……ええ。この戦いが終わって、平和になったらたくさん話したいわ。私の知る彼の事を。もちろん、イムカがカムイの時だった時の事とか。」

「は、はい！お願いします！アクア姉様！」

三人は盛り上がっていた。

リヨウマは苦笑した後、真剣な顔になる。

「さて、話はここまでだ。気持ちを切り替えて行くぞ。」
「ええ。」

リヨウマ達も進みだす。

——暗夜組

マークス達はある部屋に入った。

そこは会談を行うであろう場所。

リリスは奥の扉を見て、

「あの扉の先に、大広間に向かう通路があります。」
「解った。」

マークス達は奥の扉を開けて通路を進む。

と、少し空いている扉があった。

マークスは警戒しながらも、その部屋に踏み込んだ。
そこには敵はいない。

だが、そこは誰かの部屋だったのは解る。

カミラが、部屋に飾られていた一枚の写真立てを見つけた。
「お兄様。」

「どうした、カミラ。」

「どうやらここは、アクアの部屋だったみたいですよ。」

「なに？」

マークスは眉を寄せる。

カミラはマークスに写真立てを持っていく。

その写真を見て、

「確かにこれは、幼いアクアのようだ。」

その写真には、幼いアクアと彼女の母シユンメイ。

そして、父親だろう男性が映っている。

マークスはもう一度部屋を見渡す。

「そうか……ここは、アクアが透魔の姫だった頃の部屋か。」

「お兄様。この写真、アクアに持っていくのはどうかしら。」

「そうだな。形はどうあれ、家族と共に過ごした思い出の品だからな。

大切に持っていていこう。」

「ええ。そうね。」

マークス達は静かに戸を閉めて、長い廊下を進む。

透魔軍師ルフレは、地下牢にきていた。

牢の中には透魔国民たちがいる。

「……………きげんよう、皆さん。さて、あなた方に二つの選択肢をあげます。一つは、ここで一生を過ごすか。そして最後は、ハイドラ様の敵を倒すか。さあ、どちらになさいますか？」

そう言つて、透魔軍師ルフレは牢の鍵を開ける。

そして、去っていく。

が、途中で立ち止まり、笑顔で振り返る。

「そうそう。どちらも選ばず、逃げ出した時は……………私が、直接手をくださいます。どうせ死ぬなら、後悔のない選択を選んだらどうですか？」

そう言つて、再び歩いていく。

透魔国民は選んだ。

逃げ出す者、戦う者と。

この牢に残るといふ選択を選んだ者はいなかった。

とある一室。

一人の女性が膝をついていた。

ある巫女は手を握り合わせて祈っていた。

「……………そう。あなたは逝けたのですね。待っていてください。私たちも、すぐに……………」

巫女は立ち上がり、

「私は、私のケジメを。そして、愛しの子供たちの為に。私は、彼らの為の道標を示しましょう。」

巫女は歩き出す。

その後ろを見つめていた男性。

男性は腰になる刀を触り、

「待っているぞ。お前たちが現れるのを。示してくれ。お前たちの選んだ未来を。」

男性も歩き出す。

その決意に満ちた瞳が、燃え上がる。

それは信じているからだ。

己が信じる者達を。

己が信じる者達の選び取る未来を。

彼らは各々進む。

己の信じる未来と仲間の為に。

この先に待ち構えている何か、己の大切な人でも
そう。

この戦いには、皆想い入れがある。

敵だろうと。

それはその者にしか解らない。

だが、その想いはいつだって誰かの為
生きる為のものだった。

第二十五話 大広間への道

自分は主君の為に尽くす。

たとえ誰が敵であろうと。

それが、実の弟であろうと。

そう。

これは、自分が五代目サイゾウの名を受け継いだから。

自分は我が父を誇りに思う。

だからこそ、父のように立派な忍びになる。

自分は病弱な兄に代わって、くノ一として主君に仕えていた。

一族の代表として就く。

責任がある。

だが、私が使えた主は、どちらもとてもいい人で、凛々しかった。

最初はミコト様に仕えていた。

だが、そのミコト様が息子について欲しいといった。

そこには、同僚がいた。

そう。

元、恋人と共に仕える事となった。

彼と共に任務にあたる。

別にだからと言って支障はない。

お互い、主君の為に動く。

それだけだ。

そう、それだけ。

何故なら今の主君も、前の主君も大切な方だ。

だから、自分は進むのだ。

自分は暗夜王国が憎い。

家族を殺した暗夜王国が。

自分は呉服屋の娘だった。

暗夜王国にも、商売をしに行っていた。

けれど、家族は暗夜王国の者に殺された。

自分は家族が襲われたとき、荷物の中の影に隠れていた。

だから無事だった。

大切な家族を奪った暗夜王国が憎い。

だが、すべての暗夜の者が憎いわけではない。

自分を育ててくれた養父母の恩を返すために、王城兵になった。
そこで自分は出会った。

大切な主君に。

そして、彼に恋心を抱いた。

あの方の傍に入れるだけで幸せだった。

だから守るのだ。

失わないために。

自分は主君の笑顔が好きだ。

自分は主君を大切に思っている。

時に友のようにも、接している。

だって、主君は大切な友でもあるのだから。

同僚が主君に恋心を抱いているのも知っている。

自分はこのメンバーで笑いあえる今が大切なのだ。

——カムイは手を握りしめる

大広間に行く通路の最後の部屋。

底に入ったカムイ達。

彼らはみな、眉を寄せていた。

それは、目の前には透魔国民がいたからだ。

彼らは武器を構えて、自分達の前に現れてた。

「まさか、ここで待ち受けていた敵が透魔の国民だったなんて……」

「気を付くな。彼らを見て解るはずだ。彼らは……生きるために戦い
を選んでいると」

「はい……ですが、彼らは……いえ、だからですね。皆さん！行きます
よ！」

「はい、カムイ様！」

その言葉に、スズカゼとジョーカーが駆け出す。
イムカもまた、剣を交え始めていた。

カムイも戦いながらイムカを見る。

彼女は仮面を付けているために表情は解らない。

だが、自分はなんだかわかる気がするのだ。

彼女の悲しみと後悔、苦しみを。

だが、何故だろう。

彼女は彼らが青い炎に包まれて逝くのを安心しているようにも思える。

いや、実際は思っているのかもしれない。

だって、彼らはこれで自由になるのだから。

でも、疑問がある。

透魔国民^{彼ら}はタイミングが良すぎるのではないか。

ここに踏み入れるにあたって、透魔国民を救うのも目的でもあった。

確かに、こちらとしては助かる。

だが、やっぱりタイミングが良すぎる。

もしかしたら、彼女は誰かと手を組んでいるのか？

いや、今はよそう。

カムイは頭を振って、再び戦いに集中する。

透魔国民^{彼ら}を倒しきつたのを確認したイムカは剣をしまう。

カムイを見ながら、

「少し、ここで休息を取るぞ」

「え？先を急がないんですか？」

「……ああ。武器の手入れもしたいからな。だから今のうちに休んでおけ」

そう言っつて、イムカは部屋の隅の方へと歩いていった。

カムイはその場に座り、剣を手入れし始める。

その近くで、ジョーカーたちも手入れを始めた。

ハイドラに関しては胸に手を当てて、ここで戦った透魔国民たちへと祈りを捧げていた。

それを見たカムイは少し、イムカがここに留まる事にしたのか分かった気がした。

いや、彼女の事だからもしかしたら違うかもしれない。
でも、それでも構わないと今は思ったのだった。

――白夜組

彼らの前には大きな扉がある。

アクアが扉に触れ、

「まさか、ここまでこうもあつさり来れるなんて……。さほど敵がいなかった事には驚いたけれど、何かの罠かしら？いえ、もしかしたら、他の組の方に多く言っている可能性もあるわね」

「では、アクア」

「ええ。この先が大広間よ。カムイ達と合流する場所。そして、おそらく多くの罠、もしくは敵が待ち伏せているでしょうね。だから気を付けて」

「ああ。勿論だ」

そう言つて、刀をいつでも抜かれる準備をするリョウマ達。
アクアがそれを見て頷き、大きな扉を思いつきり開ける。

――暗夜組

マークス達は大広間につながる廊下の前まで来ていた。

リリースが警戒しながら扉を開ける。

「どうやら敵はいないようだ。」

リリースはホツとしながら扉を開けて、皆中に入る。

「皆さま、この先が大広間へとつながります」

「ではそろそろか」

「でもさ、ここまで敵がいなくてもなんか気になるんだよね」

「そうね……。何か罠が待ち受けている可能性が高いわね」

「うーん、なんかもやもやする！」

「もしかしたら、それこそが敵の狙いだった可能性もあるな」

と、マークスは剣に手をかける。

レオン達も、その行動に咄嗟に武器に手をかける。

マークス達が睨むその先には、少女がいた。

部屋の影から出てきたのは銀髪のツインテールの少女。

そう、透魔王国の軍師ルフレ。

「そう、警戒しないでください。今の私に敵意はありません。あれば、油断していた時に魔術を放っています」

「確かにそうだろうな。だが、それをやすやす信じる気はない」

「ふふ。流石、暗夜王国の第一王子マークス様ですね。その点は、やはり白夜の第一王子リョウマ様と同じですね」

「……何が言いたい」

「い え、 た だ …… こ う も 似 て いる の に、お二人とも警戒が薄いのではないかと思ひまして」

「なに？」

「だってそうでしょう。なぜ、あのイム力をそうもやすやす信じているのですか？いくら彼女の正体が別のカムイだったと解ったとしても……たとえ、あなた方に彼女と関わった記憶があるとしても、何故こうも信じられるのか。もしかしたら、あなた方は彼女に騙されている可能性だってあるんですよ」

「黙れ。だつたとしてなんだ。仮にお前の言う通りだつたとしても、彼女は最初から言っている。自分は仲間ではない、協力者だと。それに、たとえ利用されようが構わない。自身の中に宿るあのマークスの想いに応えるまでだ。私は……いや、私達はあのイム力^{カムイ}を今度こそ信じて共に、今のカムイと共に未来へと進むと決めている」

マークスは自身に言い聞かせるように、いや決意を示すように言い放つ。

それを聞いた透魔軍師ルフレは眉を寄せ、目を鋭くする。

「なるほど……では、後悔することですね。私は警告しました。この先、あなた方がどちらのカムイを優先するのか。そして、あのイム力^{カムイ}を最後まで信じられるのか。見ものですね」

透魔軍師ルフレはクスッと笑うと、再び陰に隠れて姿を消した。

完全に気配が消えると、マークスは剣から手を離す。

「兄さん、ここは急いで先を進むべきだと思っけど」

「そうだな。敵の狙いがなんにせよ、進まねばならない。いや、もしか

したら我らに不信感を与え、仲間割れをさせようとしていたのかもしれないがな。だが、今の私たちは仲間を信じる。仲間を信じ続けるカムイ

を信じるまでだ。あの子が我々を信じてくれる限り、我々もあの子を信じるまでの話」

「……そうだね」

「よし、行くぞー！」

マークス達は先へと進む。

一直線に大広間の扉の先まで。

そして、敵の罠があらうと、待ち伏せがあらうと関係ない。

逆にそれを逆手に取ってしまえばいい。

そう思いながら、思いつきり扉を解き放つ。

ー再びカムイ達

イムカは剣を撫でる。

そして剣を強く握り、

「ここまで来れた。もうすぐだ。あともうすぐで全てが終わる……あの日の約束を。あの日の誓いを今度こそ」

瞳を閉じ、ゆっくり開ける彼女の瞳は強い意志の炎が宿っていた。

カムイは立ち上がり、こちらにやって来るイムカを見る。

扉に手をかけ、

「では、皆さん！ここから先は急ぎます！罠があらうと、待ち伏せがあらうと、大広間まで一直線です！むしろ、突撃してしましましょう！」

「……ふふ、それも凄そうだね」

「はい、ハイドラお父様！こういう時こそ、敵の度肝を抜いていきましよう！」

「では、気を抜かずに行こうか」

「ええ！行きますよ、皆さん！」

そう言うと、カムイ達は駆け出す。

大広間の扉の前まで。

そして、勢いよくその扉が開けられる。

――三つの扉が解き放ち、カムイ達は合流を果たす。

それぞれ皆、お互いの無事を目で確かめ、ホツとする。

だが、すぐに警戒し、武器をとり陣形を組む。

「どうやら、罨や待ち伏せはないみたいですね」

「そうですね。でも、何もないとはいえないわ」

と、中央階段の上に強い気配を感じる。

そこを見ると、白い鎧に身を包む騎士が剣を床に突き刺して立っていた。

「カイン……」

「……お待ちしおりました、アクア様。シユンメイ様は逝かれたのですね」

「ええ。私のお母様として逝かれたわ」

「そうですか。それは良かった。本当に良かった」

アクアは一步前に出て、

「カイン。本当にあなたは抗えないの？」

「はい。アクア様。私はもうあの方の眷属。抗う事の出来ぬ私をどうか許さないでください。あなた様に刃を向けねばならぬ愚かな私を、どうか許さないでください。どうか、私を恨んでください。そうすれば、私はお二方に……顔向けができません。忠義を果たすべき本当の主君の姫を殺さねばならない。あなたの騎士として役目を果たすはずだった己がこのような行為……私は己を許せないでしょう。できる事ならば、あなた様の成長をこの城で見守りたかった。家族と過ごすあなたの嬉しそうなあの笑顔をずっと見守っていたかった。守っていきかけた。あの日、何も守れなかった己を私は許さない。なによりも、己の弟を見余ってしまった己を許せない。あの日、信じていなければ……いや、最初から弟の抱えているものに気付いてさえいれ

ば」

「……カイン。あれは仕方のないこと。そして、あの日の事で私はあなたを恨んではいけないわ。むしろ私が謝りたかった。本当なら、あなた達兄弟が対立することはなかった。あなたも、ここまで苦しむこと

もなかった。私に力がなかったばっかりに。全てが始まったあの日に私がカムイを救ってあげていれば……」

「カムイ……ああ、ミコト様のお子様がその名でしたね。ではやはり、そちらのあなたがカムイ様なのですね」

白騎士カインはカムイを見る。

その姿がなぜか自身の所の透魔軍師ルフレと被る。

「……どうやら精神的にもう壊れかけているのでしょうか？まさか、私があなた様を……」

「？」

「いえ、何でもありません。では、皆さま。武器を」

「……ええ。カイン、あなただを救って見せるわ」

アクアは武器を構えなおす。

白騎士カインもまた武器を床から抜き、

「では、参ります。どうか、どうか……私を殺してください」

剣を一振りすると、剣風だけでもその強さが解る。

そして、それを合図に透魔兵が召喚された。

「さあ、戦いの始まりです」

「行きますよ、皆さん！」

カムイ達は剣を交え始める。

リヨウマとマークスがカムイとアクアの前に出て、

「カムイ、アクア。お前たちはあの白騎士と決着をつけてこい」

「アクア、お前にとって辛い事だという事は解る。だが、お前ひとりではない。彼らを倒したら、そちらに向かう」

「それまで、何とか持ちこたえてくれ」

「ええ。ありがとう、リヨウマ、マークス」

「行ってきます！」

二人は駆け出した。

二人の道を仲間が作りだす。

イムカはその姿をハイドラを護りながら見ていた。

『……カイン』

イムカは、アクアとカムイの子供だった頃のカンナとしての記憶が

よみがえる。

だが、それを振り切り、透魔兵たちを倒していく。

それはおそらく、後ろにいるハイドラも思っている事だった。

だからこそ、カムイとアクアを見守る事しかできない自分が不甲斐なかった。

本来の力があれば。

いや、きっとあったとしても自分は何もできなかったかもしれない。

そもそもあればきっと、我が子だった「カムイ」を救えただろう。

なんと、自分は情けないのだろう。

だが、だからこそ自分は目をそらしてはいけない。

見守ろう、そして護り信じるのだ。

彼らの未来を。

第二十六話

V S 白騎士

白き騎士は知らなかった。

自分の弟が、自分や主を裏切るなど。

いつから弟は、自分達を恨んでいたのだろうか。

あんなに冷たい笑みや瞳をする子ではなかった。

神竜ハイドラ様に、人は彼に酷い仕打ちをしてしまった。

だが、主は竜を説得していた。

竜もまた、人を遠ざけていた。

けれど、人が嫌いになった訳ではない。

そう自分は信じる。

暴走した神竜ハイドラ様。

自分と弟は、王と王妃、幼き姫をお守りした。

けれど、王は無念にも友と慕っていた竜に殺された。

ある日、行方知れずとなっていた巫女が赤子を連れて来た。

記憶を失い、さ迷っていたとある方との子だと。

その彼は巫女と心を通わせ、これから自分のできることを成すつもりだと。

そして、巫女は言う。

この子は、いずれ透魔王国の光となる、と。

自分は彼女の抱く赤子を見る。

可愛い女の子だった。

その子は竜の血が濃いようだった。

白銀の髪、赤い瞳、尖った耳。

だが、巫女には竜の血は流れていない。

そして、彼は気づいたので。

巫女が想いを寄せ合ったのが、竜である事を。

今ではもう暴竜となってしまうた主人の友竜を。

巫女は言う。

彼は、その竜の欠片だと。

自分は、巫女の話聞いた。

人が竜にしてしまった仕打ちに悲しみ。

そして、自分が人にしてしまった仕打ちを、人を信じる事ができなくなつた事を悔やんでいる。

その事を。

そんな竜のカケラは望んでいると。

暴れている暴竜ハイドラを殺すことを。

やれるのなら、自分がやりたい。

けれど、力は限られている。

欠片の存在である今、暴竜ハイドラの方が強いと。

その事が、彼にとつては悔しいと。

それだけ言うと、巫女は帰って行つた。

自分達は竜のカケラに会うことにした。

けれど、それは弟の裏切りによって叶わなかつた。

された同時だつたのだ。

暴竜ハイドラによつて、この透魔王国が崩壊したのは。

巫女の元へと急ぐ。

大切な彼らを守るために。

そう、自分は守らねばならない。

王の残した大切な彼らを。

だが、自分は弟の手によつて死んだ。

自分が気付かなかつたせいでもある。

彼は何かを知っている。

けれど、それ以上に何かに囚われている。

そう思った。

心残りなのは、二人は無事なのかどうか。

そして、叶うのであれば……

幸せに笑う幼き姫の笑顔をもう一度だけ見たかつた……

そうだつた。

自分は弟に殺された。

目が覚めた時には、自分は呪い加護を受けて復活した。

自らの意志ではもう動けない。

欠片の彼も、もうすでに居ない。

そう聞かされていた。

けれど、ある軍師が言う。

欠片は生きています。

軍師は続ける。

この国の元姫と、竜の子は生きています。

私は安堵した。

歌姫は生きています、その事実を。

再び見た弟は昔と変わらない。

あれから随分と経っているはずだ。

けれど、昔と違って隠そうとしない本心。

自分の知らない事を知る弟。

そして、自分の知らない子を弟子と言う弟。

そんな弟を憎む少女。

遠目だけだが、彼女を見た。

彼女は、弟にどんな恨みを持つかは知らない。

けれど、あの憎しみの姿は……

まるで悲しみに満ちていた。

そして彼女は、自分を知っているかのようにだった。

その少女の漂う空気。

あれは、我らの軍師は似ている気がする。

けれど、別人だ。

同じなのにどこか違う。

だが、やはり同じのように自分は感じる。

いつか解るだろうか。

弟が変わった理由を、あの少女が弟を恨む理由を。

哀しく、それでいて憎むような、それでも信じたいと思うような瞳

の理由を。

そして我らの軍師が時折見る弟への瞳を。

彼女の本当の目的を。

だが、自分は知る事はないかもしれない。

だから自分は待とう、あの幼き姫が自分を殺しに来るのを。
我が主の忘れ形見を。

できる事なら、彼女の成長を見守りたかった。

あの城で、もしかしたら姉妹きょうだいのように育つはずだったかもしれない二人。

いや、そもそも出会わなかったかもしれない。

けれど、自分は思ってしまうのだ。

『アクア』と『カムイ』は出会う運命なのだ……

——カムイとアクアは白騎士カインの前に出た。

お互いに武器を構え、睨みあう。

ふと、白騎士カインは視線を横に向ける。

その先には、暴竜ハイドラの欠片であるもう一人のハイドラ。

そして、その彼を護る仮面の少女。

我が弟の弟子だというあの少女。

自分の知らないあの少女を見ていて思う。

我らが軍師ルフレと類似しているのに。

だが、やはり違う。

けれど、どうしても違うとは思えない何かを。

視線をカムイとアクアに戻し、

「アクア様。あの仮面の少女にはお気をつけください」

「……イムカ？」

「ええ。あの少女はどこか我らが軍師と類似している。違う人物だという事は承知しています。ですが、私の中の何か、それを否定している。けれど、肯定もしている」

「カイン、あなた何を言ってる……」

「アクア様。申し訳ございません。ですが、私は——いえ、敵の言葉など聞く耳持たないでください。ですが、最後に一つ。あなた様の騎士としてなるはずだった者として……アクア様とカムイ様が並び立つことを嬉しく思います。ですが、このような形ではなければなお良かった……本来ならば、姉妹きょうだいのようにして育つはずだったのですか

ら

「そうね。実際、そういう時期もあつたわ。けれど、そのカムイとこのカムイは違う。私はこの子の友であり、仲間である。そして、姉としていたいわ。そして大切なこの子と共に、今度こそあの未来を。あの未来の先を共に皆で過ごす為に」

「……では、その為にまず私を倒して下さい」

「ええ。行くわよ、カイン」

アクアとカムイは互いに息を合わせて闘う。

その姿を見て、心の底から安堵している白騎士カイン。

だが、それを表情として、そして闘う姿に露わにならないのは流石といえるだろう。

リヨウマとマークス達も透魔兵を倒し、急いでカムイとアクアの元へと向かう。

その直後だった。

白騎士カインに変化が起きる。

彼の握る剣を強く、強く力を込め、

「……ああ。なんと言うことだ。あの方は私の意思を奪う事にしたみたいですよ。手加減しているつもりはありませんでしたが……もうあなたの、あなた達の勇姿を見る事は許されません。ああ、悲しい事だ。私の意思が残っている今くるとは……」

「カイン……」

そこからの戦いは変わった。

白騎士カインの中にあつた騎士の心とも言える敵への配慮が消えた。

ただ、ただ、敵を力の限り壊し、倒すような戦いへと……

それは意思がある彼にとってはとても苦痛とも言えるだろう。

白騎士カインは血の涙を流す。

剣を構えているその姿はあまりにも辛い。

カムイは剣を強く握り、

「カインさん……なんて苦しそうに剣を……」

「ええ。こうなつてしまった以上、私の責任よ。私が早く……そして力があれば……。そうよ、だから私は彼を解放するの。そして、彼を解放させるにはしなきゃいけないのよ。自我があるのがどんなに辛いか……」

アクアは凧刀を構える手に力が入る。

本当は彼がこうなる前に解放したかった。

こんな辛い思いをさせたくはなかった。

そして、リヨウマとマークスが1番に到着した。

アクアの隣に行き、剣を構える。

「アクア。思い詰めるな。今のお前は一人ではない」

「そうだ、アクア。確かに、仕えていた君主の形見であるアクアに……なりより家族だった者に剣を向ける辛さ……私には分かる。何よりも、辛いものだ。」

「リヨウマ、マークス……」

アクアの瞳は潤みだす。

それを聞いたカムイは、左手を強く握り締める。

リヨウマは、なおも語る。

それはここに至るまでのアクアの思いを知っている。

どれだけ繰り返し返していたかを知っている。

だから声にも力が満ちる。

「いいか、二人とも。俺たちは逃げるためにここにきている訳ではない。そして、死にに來てる訳でもない。俺たちは平和を掴み取るために、戦いに來ているのだ。俺たちは、お前達と共に行く未来を信じてここに來たのだ。例え絶望的な闘いでも、己の信念の為に最後まで闘い抜く為に。」

「そうだ！我々は共に歩み行くための未来を。そして、透魔王国の者達を救う為にもいるのだ。今度はお前達だけには背負わせはしない。今度是我々も一緒だ」

マークスは叫ぶ。

カムイは深呼吸して、共に並ぶ。

「はい！そうですアクアさん。私たちはその為にここにいます。だから行きましょう、アクアさん！」

「ええ、カムイ。」

そこに皆が集まり、武器を構える。

強い強い絆と想いを胸に立ち向かう。

白騎士カインの一撃、一振りが重い。

それだけでも、彼が強いことが本当に良くわかる。

だが、それはカムイ達も同じ。

抱く想いがのっている。

そして、ここに来るまでにそれなりの場数も踏んだ。

その結果だろう。

カムイとアクアを導くための道ができた。

カムイが竜の力を使い、白騎士カインの剣を薙ぎ払う。

そして、懐に近づいたアクアが白騎士カインへと薙刀が振り落とされる。

白騎士カインは自分に最高の一撃を与えたカムイとアクアを見る。

そしてその瞬間、走馬灯だろうか……

懐かしいあの花畑を思い出す。

だが、すこし違った。

自分の知るあの花畑だが、そこにいる彼を自分は知らない。

……いや、違う。

自分は知っている。

そうだ、彼は……

「ああ……そうか、そうだったのですね……」

白騎士カインは仰向けに倒れ込んだ。

そして、天井を見上げて小さく微笑んでいた。

アクアが駆け込み、抱え込む。

「カイン！」

「アクア様……私はやっとわかりました。そうだったのですね……ならば、私は待っております。あの場所で……だからどうかあの方を……」

そして白騎士カインは奥にいたイムカを見る。
その姿がやはりあの軍師と被る。
今はその意味も解る。

「ああ、本当に……」

白騎士カインは一筋の涙を流す。

彼は青い炎に包まれながら呟いて消えた。

アクアは白騎士カインの温もりが残る手を握りしめる。

「カイン……ありがとう。ありがとう、カイン」

「アクアさん」

「大丈夫よ、カムイ。感傷に浸るのは後にするわ。今はまだやるべきことが山ほどあるわ。それに、ミコト様やアベル達のこともある……でも、すこしくらいは泣いてもいいかしら……」

「もちろんです、アクアさん。だって、私だって悲しいんですから。関わりのあるアクアさんの方がもっと悲しいはずです。それに……泣ける時には泣いた方がいいと、私は思います」

「ありがとう、カムイ」

そう言つて、アクアはカムイを抱きしめて小さく泣いた。

少しして、彼らは次の道へと続く扉を開けて進み出した。

イムカは白騎士カインのいた場所を見て、

「カイン……」

小さく呟き、胸に手を当て目を閉じた。

だが、すぐに目を開けて彼らの後を追う。

これから先に来るであろう敵。

彼らが直面する敵を想つて……